

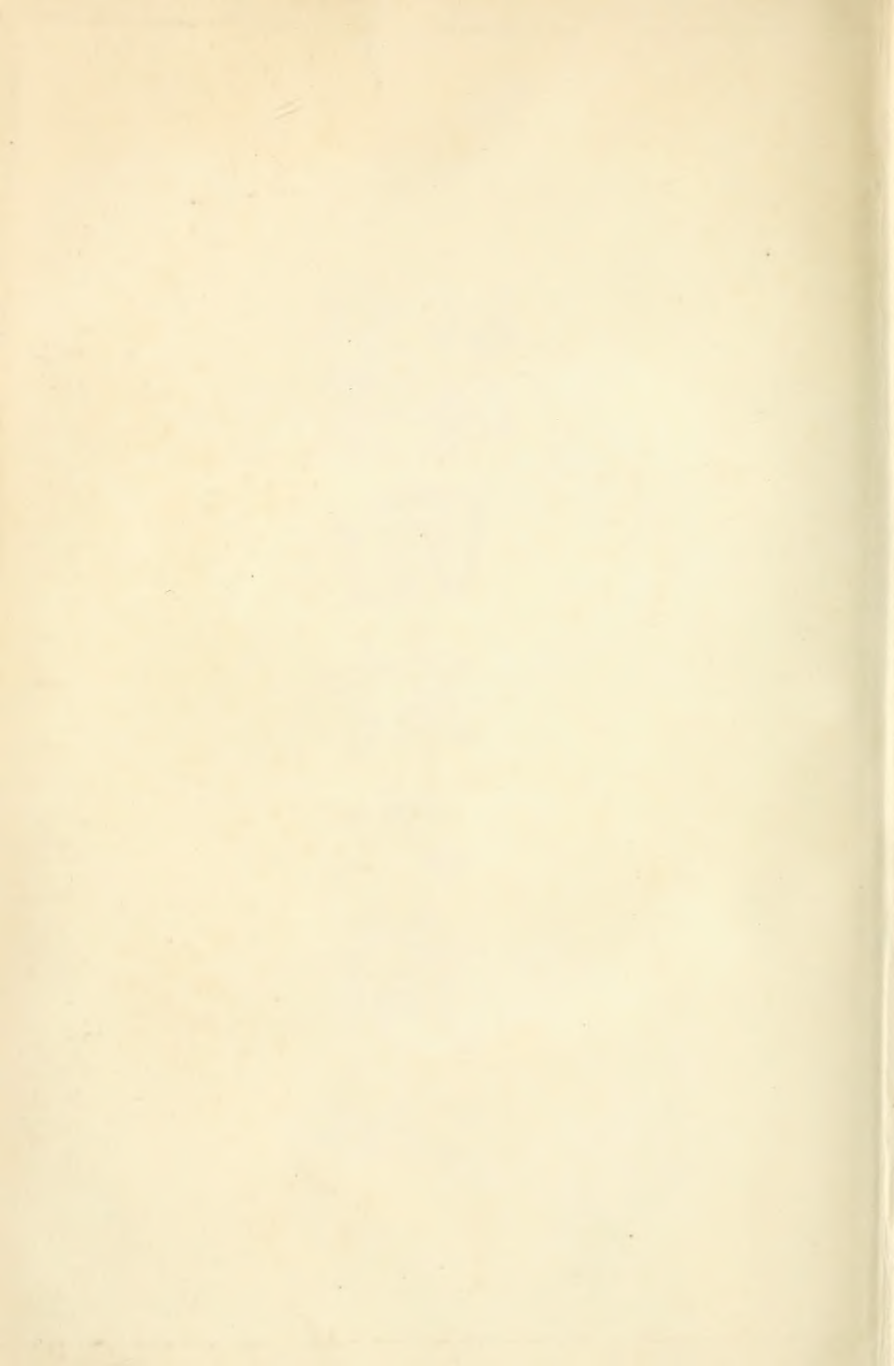
部典經
卷九第

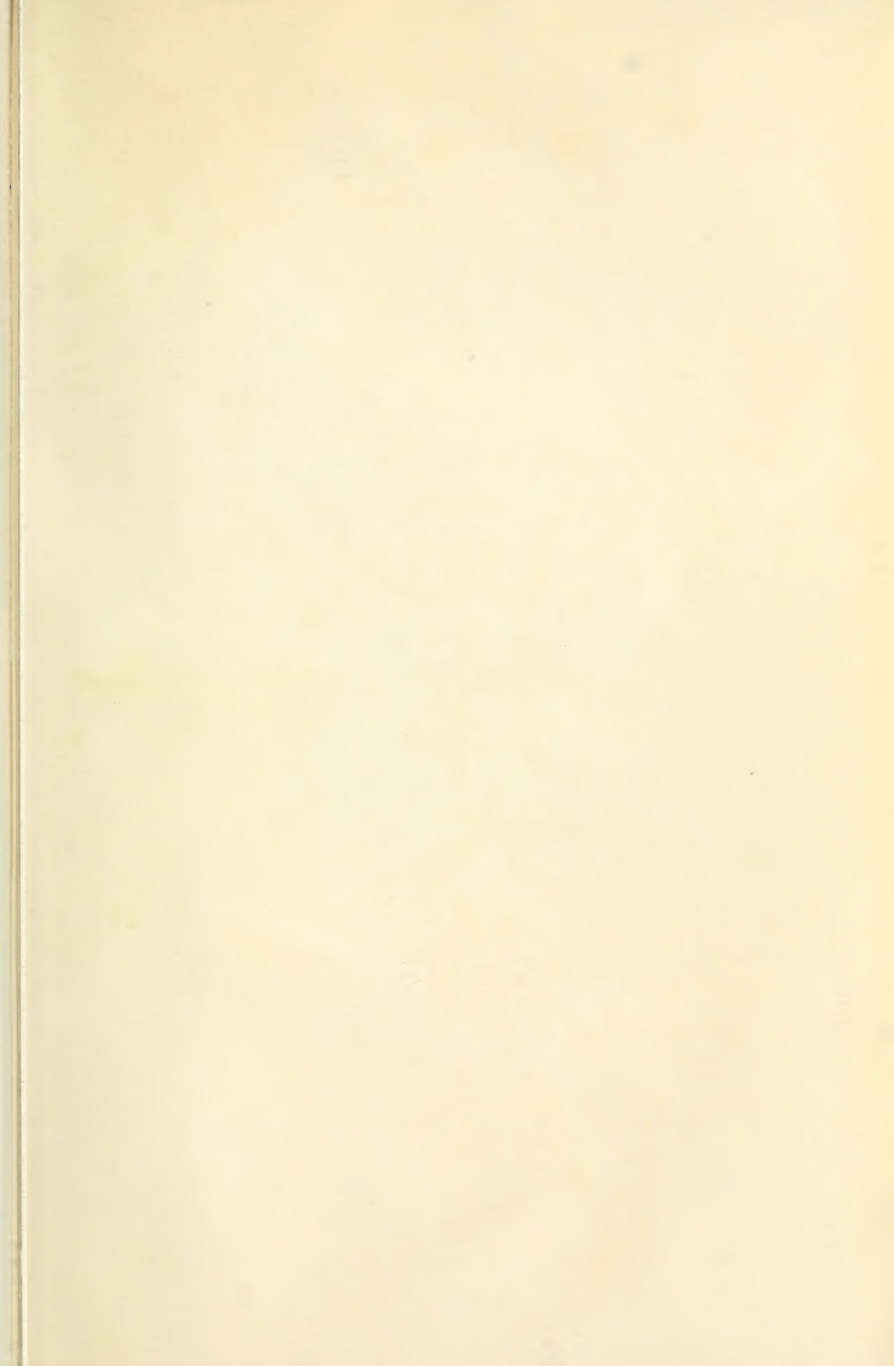
BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.9

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

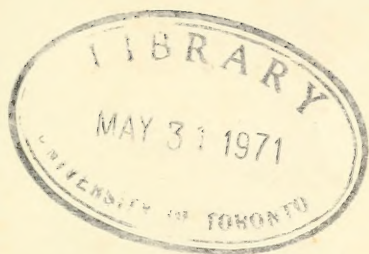
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY





昭和
新纂

國
譯大藏經



BL
1411
T853
1929
V. 9

昭和
新纂

國譯大藏經

經典部 第九卷

華嚴經第一 目次

卷 第 一	世間淨眼品第一之一……………	一
卷 第 二	世間淨眼品第一之二……………	七
卷 第 三	盧舍那佛品第二之一……………	四
卷 第 四	盧舍那佛品第二之二……………	五
卷 第 四	盧舍那佛品第二之三……………	九
卷 第 四	如來名號品第三……………	一〇九

四諦品第四之一……………二八

卷第五

四諦品第四之二……………二三

如來光明覺品第五……………二六

菩薩明難品第六……………一八

卷第六

淨行品第七……………一六

賢首菩薩品第八之一……………一八

卷第七

賢首菩薩品第八之二……………二〇

佛昇須彌頂品第九……………三六

菩薩雲集妙勝殿上說偈品第十之一……………三九

卷第八

菩薩雲集妙勝殿上說偈品第十之二……………三七

菩薩十住品第十一……………三四

梵行品第十二……………二六四

卷第九

初發心菩薩功德品第十三……………二六八

卷第十

明法品第十四……………三〇〇

佛昇夜摩天宮自在品第十五……………三〇七

夜摩天宮菩薩說偈品第十六……………三〇〇

卷第十一

功德華聚菩薩十行品第十七之一……………三〇四

卷第十二

功德華聚菩薩十行品第十七之二……………三〇八

菩薩十無盡藏品第十八……………三〇八

卷第十三

如來昇兜率天宮一切寶殿品第十九……………三〇七

卷第十四

兜率天宮菩薩雲集讚佛品第二十.....四三

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之一.....四三

卷 第 十 五

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之二.....四五六

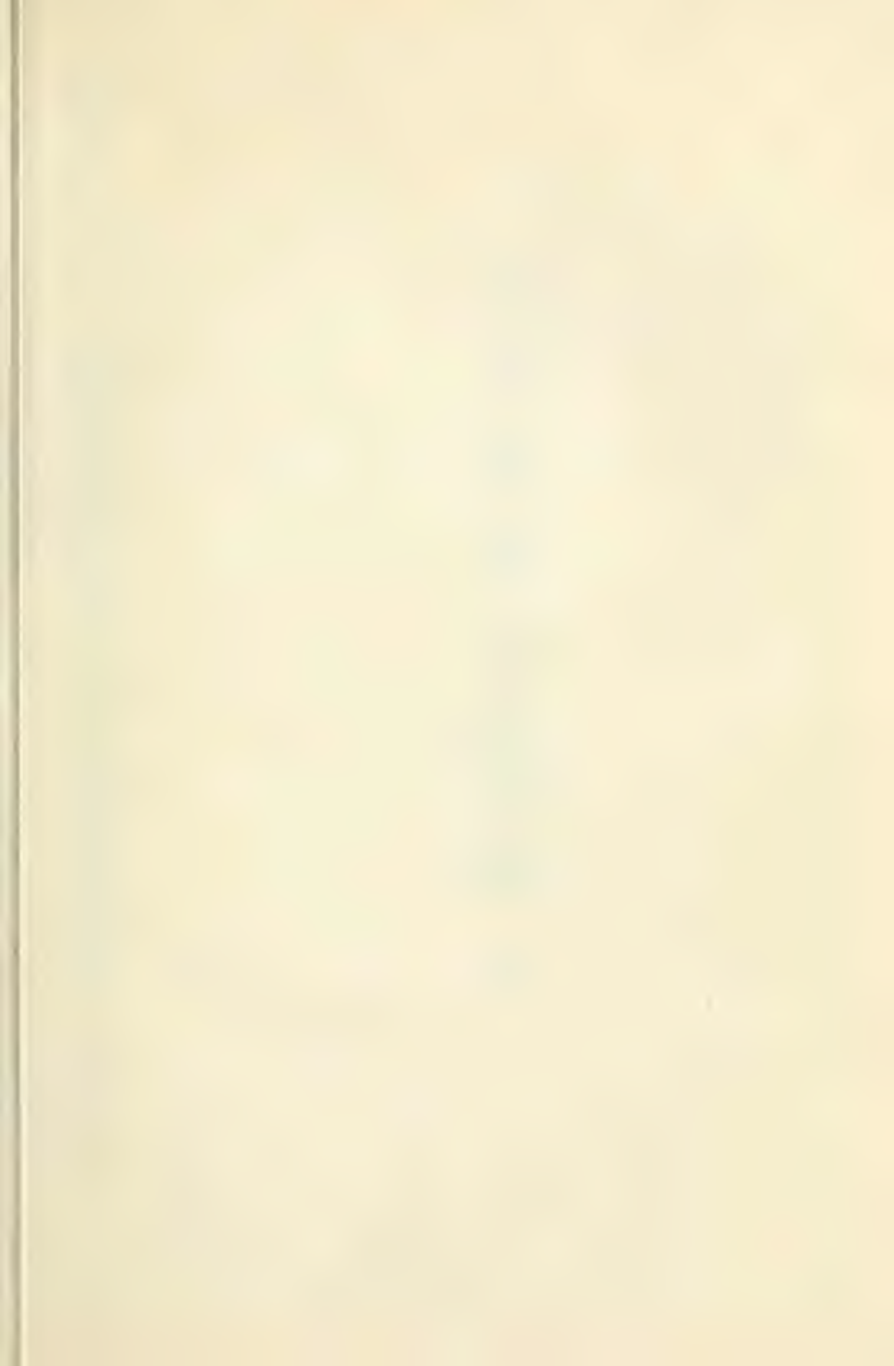
卷 第 十 六

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之三.....四六三

大方廣佛華嚴經

第一

第九卷	經典部
-----	-----



【世間淨眼品】 本

經の總序にして亦
本經體相の因由を
叙説す。中に三世
間圓滿を明す中、
世間圓滿の圓滿
は華嚴世界、智正
覺世間圓滿は世
含法身、空生世間
圓滿は會座の五十
五衆圓滿無碍。惣
じて教主、法華會
衆の三別業を叙し
て主伴具足、圓融
無碍の法門たるを
説く。

【摩竭國】 (Moksha)

摩竭國名、音譯
なり。不害國、又
其國と譯す。
經中在國に於ける
中印變の一大強國
にして佛最初の法
雷を轉ずし深緣あ
る國なり。

【七處】

八會、十四品の結
體よりなる本經講
説の第一會初二品
の成れる道場なり

大方廣佛華嚴經

卷第一

東晋天竺三藏佛跋跋陀羅譯

世間淨眼品第一之一

是の如く我開けり。一時、佛、摩竭提國寂滅道場に在し、始めて正覺を成じたまふ。其地は金剛にして、嚴淨を具足せり。衆寶雜華を以て莊飾と爲し、土妙の寶輪は圓滿清淨にして、無量の妙色もて種種に莊嚴せること猶し大海の如し。寶輪轉蓋は光明照耀し、妙香華鬘は周匝圍遶せり。七寶の羅網は其上に彌覆し、無盡の寶を雨らし、顯現自在にして、諸の雜寶樹の華葉光茂し、佛の神力の故に、此場地をして廣博嚴淨ならしめ、光明普く照し、一切の奇特なる妙寶積聚し、無量の善根もて道場を莊嚴せり。其菩提樹は高顯殊特にして、清淨の瑠璃を以て其幹と爲し、妙寶の枝條は莊嚴清淨にして、寶葉の垂布せること、猶し重雲の如く、雜色の寶華は其間に間錯し、如意摩尼を以て其果と爲し、樹光は普く十方の世界を照し、種種に現化して佛事を應作し、盡攝すべからず。普く大乘菩薩道の教を現じ、佛の神力の故に、常に一切衆妙の音を出して、如來の無量の功德を顯揚したてまつる。不可思議なる師子の座は、猶し大海の如し。衆の妙寶華もて嚴

釋尊初めて正覺を成じて七日の法樂を経て菩提樹下の會座の最初の說法會中にて覺と云ふ【華嚴】 清淨なる莊嚴具足して一切の垢穢を離れ、妙徳備はらざることを云ふ
【華嚴】 莊嚴具の一人の眼に映ける華美なる瑠璃瑠璃、珊瑚、瑪瑙、瑪瑙、珊瑚の七種の珍寶を言ふ、然し此處に四種の七寶を言ふことあり
【神力】 神通力の略にして、超人的神力なり、宗教的超人的の神通に非ざるなりを言ふ
【普賢偈】 普賢、普賢初めて正覺を成じ給へり、時、華嚴經の序の品に、普賢以下に衆し給ひしを以て、此經を華嚴會衆するに及んで

節と爲し、流光は雲の如く周遍して、普く無數菩薩大海の藏を照し大普遠く震ひ、不可思議なる如來の光明は摩尼尊を踰えて其上に彌覆し、種種に變化して佛事を施作し、一切悉く觀て畢慶する所無く、一念の頃に於て一切現化して法界に充滿し、如來の妙藏は遍く至らざる無く、無量の衆寶を莊嚴せり。如來は此寶師子の座に處して、一切の法に於て最正覺を成じたまひ、三世の法の平等なることを了り、智身普く一切世間の身に入り、妙智遍く一切の世界に至り、窮盡すべからざること猶し虚空の如く、平等の法相、智慧の行處も、猶し虚空の如く、等心に一切の衆生に隨順したまふ。其身は遍く一切の道場に坐したまひて、悉く一切衆生の所行を知り、智慧日の光は衆冥を照除し、悉く能く諸佛の國土を顯現し、普く三世智海の光明を放ちて淨境界を照し、無量の光明は十方に充滿し、不壞の法雲は遍く一切を覆ひ、力無畏を以て無量の自在力の光を顯現し、方便門を開きて衆生を教化したまふ。悉く能く普く一切の衆會に現じたまふも、猶し虚空の如くにして來去無し。一切は自性有ること無しと了達して、諸法の平等の相に隨順し、一切の光明は普く三世の諸佛の所行を現じ、諸佛の世界は猶し大海の如く、不可思議なる普賢語言は悉く能く隨順せり。

十佛世界微塵等大菩薩と俱なり。其名を普賢菩薩、普德智光菩薩、普明師子菩薩、普勝寶光菩薩、普徳海幢菩薩、普慧光照菩薩、普寶華幢菩薩、普勝寶音菩薩、普淨徳熾菩薩、普相光明菩薩、大光普月菩薩、雲普海藏菩薩、徳寶勝月菩薩、淨慧光焰自在王菩薩、普相光明菩薩、大光普月菩薩、雲普海藏菩薩、徳寶勝月菩薩、淨慧光焰自在王

摩訶とて、此稱を明ふ。【如來】佛の別稱なり。【タターカ】佛の別稱にして、廣知より來生せるものと云ふ。【三世】過去、現在、未來の三世なれども、本經にて

菩薩、慈惠華光菩薩、無量寶雲日菩薩、大力精進金剛菩薩、香燄光幢菩薩、月輪妙音菩薩、光明尊徳菩薩と曰ふ。是の如き等の諸の菩薩と俱なり。皆是れ盧舍那佛の宿世の善友なり。一切は功徳の大海を成就せり。諸の波羅蜜は周滿して普く照し、慧眼清淨にして三世を導觀し、諸の三昧に於て明淨を具足し、辯才の大海は深廣にして廣くこと無く、普く諸佛の功徳光耀を現じ、善く一切衆生の心行を知り、應の如く調伏し、金剛の智を以て普く境界を照すに同一法性なり、覺慧廣大にして其深の智境明達せざることを廣く、一地に住して普く一切諸地の功徳を攝す。無上の智願は皆已に成滿し、如來の深奥の密教を具足し、悉く一切の佛の所共の法を得、皆如來の行功徳力に同じ、一切の三昧海門に入りて皆自在を得、衆生海に於て應の如く示現し、其所行に隨つて善能く建立し、善く一切諸法の海に入りて回轉總持し、如來の一切の功徳法海は其身に充滿す。遍く一切の佛の世界海に遊び、一切の淨土の願海を出生し、悉く諸佛の未來際に達する方便智慧を得、一切の如來の道場に坐したまふ者は、普く諸く往證して、禮事し供養し、悉く一切普賢の願海を得、諸の衆生に於て智身滿足せり。

復徧世界に微塵數の金剛力士有り。其名を堅固光耀力士、日光耀力士、寶彌華力士、淨雲音力士、阿修羅王力士、勝光明力士、樹音聲力士、師子王力士、淳厚光藏力士、珠鬘華光力士と曰ふ。是の如き等の諸の力士と俱なり。已に阿耨祇劫に於て大誓願を發して諸佛を侍衛したてまつる。佛の願行處は皆已に具足し、無量の功徳は皆已に清淨に

はこの時間の間融
解を説くを以て
現世必ずしも單
に現在にあらす
一世即三世なる義と
知るべし。

【唐密】 明通、平
合受の五義を具す
此特性を佛の圓滿
なる説法に含むに
なるべし。

【行處】 影響する
範圍の意

【等心】 平等慈悲
の心

【三世智海】 遍現
三世を滿徹した
佛の智を海に喩ふ

【力無畏】 佛の無
畏力なり。不可思
議なる佛の神力は
自在なるを以て畏
るべき何物もなき
が故なり

【方便】 便宜の方
法の意。宗教的機
根の未熟なる者に
對して善巧の手段
を用ふるを如し。

【來去無礙】 佛身
は多處に出現する
も普遍圓滿の法界

して、悉く深廣の三昧の境界を行じ、無量の神力もて、佛の所遊の處には遍く至らざる
無く、皆悉く能く不可思議なる解脫の境界を行じ、一切の衆に處し、其身殊特にして、
能く映蔽すること無く、諸の衆生の度すべき所の者に隨つて、能く其身を現じ、應の如
く之を化す。

復佛世界に微塵數の諸の道場神有り。其名を淨莊嚴神、寶積光明神、吼音聲神、
雨衆華神、莊嚴寶光神、善超香神、金色雲神、樂華樹神、莊嚴光神と曰ふ。是の如き
等の道場神と俱なり。皆先佛に於て願行を造立せり。

復佛世界の微塵數の諸の龍神と俱なり。其名を摩尼光龍、雜莊嚴龍、喜寶光龍、淨身
光龍、香莊嚴龍、寶日光龍と曰ふ。是の如きの一切は、皆過去の不可思議阿僧祇劫に於て、
常に如來の爲に法堂を莊嚴せり。

復佛世界の微塵數の諸の地神と俱なり。其名を淨華光神、善思光明神、雜華莊嚴神、
散寶焰神、隨時樂觀神、金眼勝神、毛孔散香神、應時和音神と曰ふ。是の如きの一切は、
皆徳本を同うし、過去佛の所に於て、普く願行を修せり。

復不可思議の諸の樹神と俱なり。其名を雜華雲神、雜種光神、淨勝光神、垂莊嚴
神、莊嚴光神、樂和音神、普勝等神、華果味神と曰ふ。是の如きの一切は、皆悉く大
喜普照を成就せり。

復無邊の藥草神と俱なり。其名を光焰神、栴檀香神、淨光神、普稱神、普力神、普淨

身なれば不動の體なり故に去もなく來もなきなり。

【十方世界】東、西、南、北、上、下、東南、東北、西南、西北の十方にある世界即ち全法界の意なり。

【菩薩】菩提薩埵 (Bodhisattva) の略。覺有情、大心の衆生等と譯す。自利利他或滿の大乘根柢の精進者を云ふ。

【盧舍那佛】毘盧舍那 (Vairocana) の音譯にして光明遍照等と譯す。三世間十身の諸佛にして無礙圓滿なる本體の教主なり。

【宿世の善友】過去世に於ける善友の意。本誓に於ける因果無二の義を證す。

【波羅蜜】波羅蜜多 (Parinirvāṇa) の略。度、到彼岸、事究竟等と譯す。生

神、普光神、愛香神、勝現神と曰ふ。是の如きは一切は、皆悉く大悲普照を成就せり。

復無量の諸の殺神と俱なり。其名を勝味神、華淨神、善力神、粵味神、根果神、淨華神、樂淨神、淨光神と曰ふ。是の如きは一切は大善を成就せり。

復無量の諸の河神と俱なり。其名を普流神、勝河神、洪流神、善水神、淨海光神、普愛神、妙幢神、勝水神、海具光神と曰ふ。是の如きは一切は、常に能く精勤して衆生を利益せり。

復不可思議の諸の海神と俱なり。其名を寶勝光明神、金明神、普涌浪神、華樂勝神、寶華光明神、須彌莊嚴神、海音聲神と曰ふ。是の如きは一切は、佛の無量の功德の海を以て自ら充滿せり。

復無量阿僧祇の諸の火神と俱なり。其名を熾然光威神、熾然光輪神、廣明耀神、無盡神、寶寶勝神、照除諸冥神、焰雲光明神と曰ふ。是の如きは一切は、悉く衆生の爲に闇冥を照除せり。

復無量の諸の風神と俱なり。其名を無礙照明虛空神、遍超勝神、散頂彌神、焰淨味神、淨除味神、發行大音神、樹峯華林神、持世界神と曰ふ。是の如きは一切は、皆能く衆生を和合して、分散せざらしむ。

復無量の虚空神と俱なり。其名を普光淨勝神、無邊深廣神、起風神、離一切障神、廣超神、無對光焰神、無礙力勝神、最上妙音神、示現十方神と曰ふ。是の如きは一切は、心

超神、無對光焰神、無礙力勝神、最上妙音神、示現十方神と曰ふ。是の如きは一切は、心

死の此岸より涅槃の彼岸に到るの義にして菩薩道の行なり。布施等の六波羅蜜、十波羅蜜と同義。

【三昧】三摩地 (Samadhi) の訛略にして等持と譯す定の一稱なり。

【心行】心器即ち精神力。此處にては衆生機根の差別相を思議するの義。

【調伏】調和制伏の略。

【智】佛の大智と大慧のこと。

【密教】佛、菩薩の密傳の眞理は難解難妙にして下劣なる修行者の推知し難きものなれば密と云ふ。

【所共】佛の十八不共法の第一。

【行地勝力】佛の大德行、十地、福智、十力等を言ふ。

【總持】海印三昧の定に入り、法界無盡の緣起の法門を了證するを以て

皆無垢堅固淨妙なり。

復無量の主方神と俱なり。其名を善住神、充滿神、無量現光神、光莊嚴神、普轉漸行

神、不惑轉神、淨遊虛空神、普行世間神、行甚深神と曰ふ。是の如きの一切は、皆能く一

切の衆生を照す。

復無量の主夜神と俱なり。其名を妙光神、淨光神、善觀衆生神、靜時堅固神、方便

勝具神、生一切樹果神、無盡眷屬神、主知樂淨遊戯神、和諍神、淨福具神と曰ふ。是の如

きの一切は、明道の法に於て深重に愛樂す。

復無量の主晝神と俱なり。其名を現宮殿神、善解安立戰戰神、樂莊嚴普勝神、善華香神、

普集勝樂神、樂見王神、淨日高顯普勝神、大悲顯光神、光明善照神、普勝垂華神と曰ふ。

是の如きの一切は、皆悉く正法の莊嚴を信樂す。

復無量の阿修羅神と俱なり。其名を羅睺羅王、毘摩質多羅王、睽婆利王、明月王、金

剛堅錫王、大智慧力王、勝集天女王と曰ふ。是の如きの一切は、悉く能く憍慢放逸を降

伏す。

復無量の迦留羅王と俱なり。其名を大勇猛力王、無畏寶鬚王、勇猛淨眼王、不退莊嚴

王、持大海光王、持法堅固王、勝俱光明王、充滿普現王、普遊諸方王、普眼等觀王と曰

ふ。是の如きの一切は、方便を成就し廣く衆生を潤ほす。

復無量の堅那羅王と俱なり。其名を善慧王、善幢王、雜華行王、離憂慢音王、寶樹光

復無量の堅那羅王と俱なり。其名を善慧王、善幢王、雜華行王、離憂慢音王、寶樹光

復無量の堅那羅王と俱なり。其名を善慧王、善幢王、雜華行王、離憂慢音王、寶樹光

復無量の堅那羅王と俱なり。其名を善慧王、善幢王、雜華行王、離憂慢音王、寶樹光

一切を攝し一
切に回轉總持と
云ふ。

【金剛力士】(Vajrapāṇi) 跋闍羅波
釁の譯。金剛手
持金剛神、仁王と
も云ふ。佛の外護
神にして佛一切の
秘密事を知り、
五百の夜叉を使役
して賢劫の千佛を
護ると言ふ。

【阿僧祇劫】(Asankhyakalpa) の
音譯。阿僧祇は無
數、無央數と譯し
劫は劫波の略にし
て時間の意なり。
即ち無量の長時の
義。

【願】 或る目的
を立て、決定的に
その成就を誓約す
ること。菩薩が成
佛の爲めに長時に
在つて誓約して修
業するが如し。彌
陀の四十八願は其
代表的誓願たるの
【道場神】 道場の
守護神の意。已下

明王、善愛現王、莊嚴光王、善華幢王、勝地王、勝慧王と曰ふ。是の如きの一切は、普
く衆生に於て精勤勤發して能く法を樂はしむ。

復無量の摩羅羅伽王と俱なり。其名を善慧王、淨端嚴音王、衆妙慧王、掩幢王、猛
光王、鬪子香重王、雜瓔珞音王、堅固樂明王と曰ふ。是の如きの一切は、普く衆生の爲に
諸の疑網を除く。

復無量の鳩擊荼王と俱なり。其名を毘樓勒王、善修幢王、足平鮮白王、能除恐怖王、
淨須彌林王、無量淨眼王、無量日門王と曰ふ。是の如きの一切は、皆悉く無礙の法門を
修習す。

復無量の鬼神王と俱なり。其名を毘沙門王、大雷聲王、淨地王、大主王、焰眼王、摩訶
王、莊嚴勝軍王、大富淨身王、須彌力王と曰ふ。是の如きの一切は、普く能く勤めて一
切の衆生を護る。

復無量の月身天子と俱なり。其名を月天子、曜華天子、勝流莊嚴天子、樂諸世樂天子、
眼光天子、淨光天子、普遊靜光天子、星宿王天子、淨覺天子、普觀善光天子と曰ふ。是
の如きの一切は、勤めて智慧を以て普く衆生の無上寶心を發す。

復無量の日天子と俱なり。其名を日天子、眼翳光天子、須彌光勝天子、淨寶眼天子、
勇猛不退天子、妙華鬘光天子、寶覺天子、明眼天子、勝地童子天子、普勝光天子と曰ふ。是
の如きの一切は、皆悉く清淨善根を成就して、常に一切の衆生を饒益せんと欲す。

龍神、鬼神、樹神等を擧げて、香羅萬象悉く法界身佛たるざるなき本體の大精神を表示せり

【聖師】 佛教の守護神の中、上に居て護を護る神とせらる

【地神】 下に居て運載する守護神にして、亦菩薩の深重の誓願を立て行徳を荷負することを表示す

【德本】 善根功徳の原因の義

【華草因】 法華を以て諸惑を治する佛の大恵を表象するものなり

【嚴持】 嚴は資持の義故に法味自徳を吝益するを表す

【河神】 河は流通の義、大法の衛生を潤益すること河流の如し

【海神】 佛法は萬徳を包攝して深廣なること海の如し

【火神】 智慧の如きは煩悩を燒盡し、

復無量の三十三天王と俱なり。其名を釋提桓因天王、普稱滿天王、髻日天王、寶光稱天王、樂喜天王、樂念天王、勝普天王、淨華天王と曰ふ。是の如きの一切は、悉く皆清淨の善業を具足し、能く衆生をして淨妙の處に生ぜしむ。

復無量の夜摩天王と俱なり。其名を善時天王、無盡智天王、妙善化天王、樂樂焰天王、須彌光天王、不思議慧天王、彌輪天王、不思議天王、月姿顏天王、普莊嚴天王と曰ふ。是

の如きの一切は、皆悉く勤修して歡喜を出せし知足を信樂す。

復無量の兜率天王と俱なり。其名を善喜天王、海樂天王、勝德天王、百光明天王、善眼天王、寶山月天王、超勇月天王、金剛善曜天王、樂超天王と曰ふ。是の如きの一切は、皆悉く念佛三昧を成就す。

復不可思議の化樂天王と俱なり。其名を善化天王、淨光天王、最上喜音天王、妙色莊嚴天王、樂智慧天王、華光月天王、照方天王と曰ふ。是の如きの一切は、皆悉く寂靜の法門を成就し衆生を調伏す。

復無量の他化自在天王と俱なり。其名を自在轉天王、善眼天王、雜寶幢天王、轉進慧天王、樂華音天王、樂光明天王、寂情處天王、華色輪天王、智慧妙光天王、大力光天王と曰ふ。是の如きの一切は、普く皆自在の正法を成就す。

復不可思議大梵と俱なり。其名を尸棄大梵、智光大梵、善光大梵、普音大梵、隨世音大梵、寂靜方便妙光大梵、淨眼光大梵、柔軟音大梵と曰ふ。是の如きの一切は、悉く

善法を成熟し、無明の闇を除くを以て火の性に由り佛法を表示す
 【風神】意を散じ功徳を蒙る佛法を表示せり
 【量鬼神】無邊、無示等の義を有する虚空を以て法性の空なるを表示す
 【主方神】方向を司る神、主方は顯示なり、迷者に正方を顯示するなり
 【主夜神】無明長夜の生死の海に於て、智慧の光を放つて正路を知覺せしむるを表示す
 【助流】佛道隆盛して、法益衆生に及ぶを守護し援助する意
 【十善神】行徳恒に明正ならしむ、即ち正法を信樂し修行するを表す
 主夜神と共に時間的に無盡の法益を示す
 【百修羅】(Asura)

大慈を具し衆生を度脱し、熱惱を照除し清涼柔軟ならしむ。
 復無量の光音天子と俱なり。其名を業光天子、淨光天子、大音天子、樂淨音天子、善思音天子、解脫音天子、深妙音天子、無垢光天子、最高淨光天子と曰ふ。是の如きの一切は、喜光寂靜の法門に安住す。

復阿僧祇の遍淨天と俱なり。其名を淨智王天、現勝天、寂勝天、寶彌時天、金淨眼天、無上愛光天、世慧音天、智慧熾然天、樂法化心天、化高天と曰ふ。是の如きの一切は、常に衆生をして廣樂に安住せしむ。

復無量の果實天子と俱なり。其名を法華光天、淨堅固天、慧光天、智慧王天、普門慧眼天、不轉愛天、無垢淨光天、淨曜天と曰ふ。是の如きの一切は、皆悉く善く寂靜の意門に住す。

復摩醯首羅天等の無量の淨居天と俱なり。其名を善光天、大主天、大稱光天、功德淨眼天、大智慧光天、不動光音天、善施眼天、樂大乘天、普音聲天、樂稱光天と曰ふ。是の如きの一切は、已に無相平等の法界を修して、悉く如來の大衆海數に在り、一切の衆生に於て悉く平等を行じ、無量の妙色皆已に成就し、十力の中に於て能善く安住し、一切の衆に於て傾動せず、至る所の方に隨ひて能く壞する者無く、如來の所乘は常に現じて前に在り。煩惱障を離れて其心清淨に諸の結使の山は皆已に摧滅せり。佛の姿顏を觀たてまつるに無量の妙色の光明普く照せり。所以は何ん。如來は往昔無量劫に於て善

阿素洛、阿素洛と
も書き、非天、非類
等と譯す。十界六
道の一にして大海
の底に住して常に
三十三天と號ぶ惡
鬼神なり。又惡な
れど天の實行伴
はざるを以て非天
と云はれ、相違惡
なるを以て不端正
とも譯さる。

【摩訶羅】 二二二
手を以て日月光明
を覆障し諸天を翳
すといふ惡鬼なり
已下天界下の有情
を以て來法益の
無盡なるを表す

【毘摩質多羅】 二二三
Avalokita) 精
簡、種種縁等と譯
す。

【毘婆利】 二二四
Lambā 聯繫、木綿
と譯す。

【迦留羅】 二二五
(a) 獨路業と書
き、金剛の、す
鳥の一稱。

【緊那羅】 二二六
nara) 人非人又は

薩の道を行じたまひし時、四攝法を以て善く衆生を攝し、諸の如來に於て諸の善根を
集め、種種の因縁もて方便教化して如來の道を立て、深く無量の如來の善根を積ゑて、皆
一切智の道に安立せしめ、無量の功德勢力を逮得して、皆悉く如來の願海を成辦し、菩
薩の所行具足し清淨なればなり。各本行に隨つて皆出要を得て、悉く如來の光明
の照すに由るが故に、解脱の力に乗じて、如來海に入り、佛の法門に於て悉く自在を得
たり。

善海摩羅首羅天は法界虚空寂靜方便光明の法門に於て自在を得。大自在稱光明天
は、一切法に普く遊ぶの法門に於て自在を得。功德淨眼天は、一切法不生不滅方便の法門
に於て自在を得。大慧光天は、一切法方便智遊光の法門に於て自在を得。靜光普天は、
一切の無量喜樂を普く起すの法門に於て自在を得。施善眼天は、寢畏を轉じ靜に遊ぶの
法門に於て自在を得。不思議天は、無量の境界に入りて不起なるの法門に於て自在を得。
樂大乘天は、一切法の不來不去の依住する所無きの法門に於て自在を得。普羅普天は、佛
地界寂靜の法門に於て自在を得。樂稱光天は、無量の境界法門に於て自在を得たり。
爾時、善海大自在天は、如來の神力を以ての故に、一切の自在天衆を觀察し、偈を以
て頌して曰はく、

無盡平等の妙法界は、悉く皆如來身に充滿し
取無く起無く永く寂滅なるも、一切の歸とならんが故に世に出でたまへり

疑人と譯す。歌唱を善くし樂神として帝釋天に住ふと云ふ。

【摩睺羅伽】(Ma hora) 腹行と譯す。腹行は蛇は大小にして能く佛法を護持すと云ふ。

【摩訶業】(Mahā karma) 陰霧、魔形と譯す。人の精氣を吸ふ鬼の一種なり。

【再樓劫】(Vimānaka) 增長と譯す。南方を司る天にして自他の善根を増長すと云ふ。

【真沙門王】(Sāmaṇāyaka) 毘舍離國王の略。舍離又は普門と譯す。西天王の一にして北方を司る天、亦其德の名聲四方に普き故に此名あり。

【三十三天】(Trayastrimsa) 天の譯語。六欲天の第一、須彌山の頂、閻浮提の

諸佛法王世間に出で、能く無上の正教の法を立てたまふ如來の境界は邊際無く、世間にて自在なれば無上と稱す佛は思議し難く倫匹無し、相好の光明は十方を照す大聖世尊の正教道は、猶し淨眼の明珠を觀るが如し一切世間の衆生類は、佛の功德を思議する能はず一切の愚癡の闇を消滅して、無上の智慧の臺に超昇す如來の功德は思議し難く、衆生の見る者は煩惱滅し不動の自在尊を見たてまつることを得て、能く無量の悅樂心を生ず衆生の大海は癩もて心を蔽ふ、寂靜微妙の法を現ぜんが爲に能く無上の智慧の燈を然す、是れ則ち方便眞淨の眼なり如來の清淨の妙色身は、悉く能く顯現して十方に遍く此身は有に非ず所依も無し、是の如く佛を見るは眞實の觀なり如來の音聲に障礙無ければ、應に化を受くべき者は聞かざる無く湛然として動せず往返無し、是を善慧樂の法門と名く一切十方の無邊の佛と、寂靜の法門と天人の主とは如來の光明照さざる靡し、是れ莊嚴幢の妙法門なり佛は無邊の諸の劫海に於て、常に正覺を求めて衆生を悟らしめ

上、八萬由旬の處
方に在り、須彌の四
方に峰ありて各八
天あり、中央の善
見城天を加へて三
十三天となる【

【提桓因天王】

提桓因天王 提桓因天王 In
提桓因天王は、
釋迦提婆因陀
羅と云ひ譯して能
天と云ふ。所謂
帝釋天是なり。
三十三天の中央善
見城に居ると云ふ

【夜摩天】

夜摩天 夜摩天 夜摩天は、
夜摩亦是夜摩、
須摩とも言ひ、善
時又は時分と譯す
欲界六天中の第三
天にして、上十六萬
由旬の空中に在り
常に冥闇の時なき
故に冥時と言ふ

【兜率天】

兜率天 兜率天 兜率天は、
兜率多の略に
して、喜足、知足
等と譯す。欲界六
天中の第四天なり
須彌山の頂上十二
萬由旬の處に在り
五欲の樂に喜足の
念を生ずるが故に

無量の方便もて一切を化したまふ、清淨の廣稱は是の如く見る

復樂業光明天王有り、一切衆生の諸根を觀するの法雲の法門に於て自在を得。淨堅固

天は、一切の佛の妙色方便もて念觀するの法門に於て自在を得。樂樂天王は、一毛孔に不思

議の諸佛の國土境界を見るの法門に於て自在を得。普門慧眼天は、普門に入りて法界を觀

察するの法門に於て自在を得。不轉變天は一切衆生の處處の受生を轉するの法門に於て自

在を得。善慧光天は一切世間の境界に入る不可思議の法門に於て自在を得。無垢淨光天は、

一切衆生一切法の中より出要するの法門に於て自在を得、無垢光天は、化を受くる者を能

く佛の境界に入らしむるの法門に於て自在を得たり。

爾時、樂業光明天王は佛の神力を承け、一切の果實天衆を觀察し、偈を以て頌して曰

はく、

一切の佛の境界は、甚深にして思議し難く

諸の餘の衆生類は、能く測量する者莫し

如來は善く、無量の諸の群生を開導し

能く悉く隨樂して、無上の道を志求せしめたまふ

佛は神通力を以て、世に住して普く

一切衆生の類を開化したまひ、各其所聞に隨ふ

癡惑の障永く除かれ、慧命は淨くして穢無ければ

この名ありて、彌勒等の諸處の菩薩の止住する處なりと云ふ。

【念佛三昧】佛の相好莊嚴を觀念し其觀の成熟して周遍法界の理法身を觀るに至る事理の定觀を言ふ。亦心を佛に懸け、念を佛に散らさず、一心に稱名念佛するを云ふ。然れども後者は多く他力偏陀教に於て、主張せらるるものなり。

【化樂天】樂變化天の訛略。欲界六天の第五天。此天の有情は自ら五塵の欲を變化して娛樂するが故に名く、空中に住する天なり。

【寂靜の法門】涅槃寂靜の法門なり。即ち三法印の一にして、佛大悲心をして衆生を慈愛流轉の生死海より寂滅に至らしめ給ふ。

能く諸の如來の、樂妙の淨法界を觀る諸法の眞實の相は、寂滅にして所依無し如來は方便の力もて、能く衆生の爲に現じたまふ如來は諸法に於て、性無く所依も無きに而も能く業條を現じ、相を顯はすこと猶し明燈のごとし

諸の緣と譬喩とを以て、方便して樂ふ所に隨ひ爲に諸の如來の、智慧神通力を現す悟に因りて各門を異にし、無量にして思議し難く爲に正法の幢を建て、功德の海に入らしむ

如來は神通力もて、能く一毛孔に於て各衆の爲に、無上寂滅の法を演説したまふ一一の諸の如來は、各具眷屬の爲に法の無量の門と、功德の大海とを顯したまひ

皆悉く師子吼して、諸佛の法を演説したまふ是れ則ち大智尊の、無上方便の力なり

十方の諸の佛士の、一切衆生の類には悉く能く彼の爲に、如來の正法を現じたまふ

法門なり。
【他化自在天】六欲天の一にして欲界最高なれば第六天と云ふ。天主大魔王の居所にして他人の變化する樂事をかりて己が樂とするが故にこの名あり。

【大梵天】(Mahābrahman) 色界初禪の第三天にして色界初禪の主なる大梵天王此處に住して娑婆世界を領す。梵(Brahman)は清淨の義にして初禪天已上にては欲樂無きを以て梵と言ふ。

【光音天】色界二禪の第三天。即ち十八天中の第六なり。此天は光明を以て語言となすが故に此名あり。印度創世紀には人類の原始は此天より降下せしものなりと云ふ。
【偏淨天】色界十八天の第九、三禪

如來は未だ嘗て、去來の異相有らずして皆彼をして歡喜せしむる不退慧の境界なり。如來は衆生の爲に、普く業報の相を現したまふ猶し日光照せば、衆像現せざる塵きが若し又彼衆生の爲に、寂滅の法を演說して彼をして眞實の、甚深智慧處を見しめたまふ如來は自ら、甚深微妙の義を觀察して彼衆生の根に隨ひて、普く甘露の法を雨らしたまひ爲に諸の法門を開き、無量にして思議し難く悉く寂滅平等眞實の觀に歸入しめたまふ無数の無量劫に、廣く大悲を修習して等正覺を逮成し、群生の類を度脱したまふ普く甘露の法を雨らし、器に隨ひて皆充滿せしむること龍の慶雲を興して、等しく一切に雨らすが如し復淨智天王有り、衆生の善根を觀するの法門に於て自在を得。顯妙天王は、一切有覺照の法門に於て自在を得。勝妙天王は、總持辯才の法門に於て自在を得。普燈天王は、佛の出世を樂み解脱するの法門に於て自在を得。智焰天王は、一切衆生甚深の法の中に能く歡

天の第三、樂受最勝にして清淨なること周遍するが故に此名あり

【果實天子】色界十八天の第十二、四禪天の第三にして、世間の善果中最勝たり、亦其果報廣くして能く勝るものなきが故に實果天と稱す

【摩羅音羅天】(Maha-vara) 大白在天と譯す、三目入臂の大威力を有する天にして三界の諸天中最も自在なるが故に此名あり、自在天外道は此天を以て世界の本體となし亦創造の神となす

【淨居天】色界第四禪の九天の中、後の四天は不覺果即佛道修行者中の欲界の執著を斷じて再び欲界に遷生せざるに至れる聖者の居住所なるを以て此名あり

【無相】初地以上

喜を生ずるの法門に於て自在を得、樂化天王は、菩薩を化するの功德周く備りて無盡に入るの法門に於て自在を得、彌陀天王は、普く無量苦惱の衆生を觀する慈悲と智との滿するの法門に於て自在を得たり

爾時、淨智天王、佛の神力を承け、普く遍淨天の家を觀じ、偈を以て頌して曰はく、諸佛の正法は障礙無く、十方の無量界に周滿し

佛の境界を現すること思議し難く、離垢の法門は無量の海なり
如來は世に處すること所依無く、法身は清淨にして起滅無し
而も能く無量の土に照現したまひ、一切悉く天中天を見たてまつる

無量劫海に方便を修して、光明普く十方界を照し
清淨の法界は如如にして住し、寂滅微妙にして最も無上なり
衆生は愚癡もて心目を瞽し、限り無く生死の中に輪廻す

如來は尊くに清淨の道を以てし、無上最勝の門を開示したまふ
如來の乗じたまふ所の無上の道は、一切衆生能く思ふ莫し

佛の一切妙色の門を現じたまふを、善念し樂觀し淨眼もて見たてまつる
佛は微妙の總持の門を説きたまふ、一切の利微塵等の如き

一切の衆生を調伏せんが故に、清淨の慧眼もて能く照見したまふ
如來の出世には甚だ値ひ難く、無量億劫の時に一たび遇ひたてまつり

の菩薩が無滯心を以て修する空觀。亦法著を離れ萬有皆如幻たるを了知せる無我無執の境界のことなり。

【十力】 如来の十力（一）喜力、（二）樂力、（三）行力、（四）捨力、（五）心堅固力等の十力、（六）力、（七）深信心、（八）大悲力、（九）辯才力、（十）波羅蜜力、（十一）神通力、（十二）加持力を稱す。

【煩惱】 涅槃の理想を離れ生死の迷界に流轉せしむる障礙を煩惱と云ひ、其種類無量なり。障も亦煩惱の一名なり。【結使】 煩惱の異名なり。結は心身を結する意は、使は心身を驅使して疲勞困憊せしむる義なり。

【四攝法】

菩薩が諸の難處を離れて衆會に濟き、唯情愍のみ能く時に應じたまふ一切の衆生は思議し難きも、佛は能く悉く淨妙の法を現じたまふ如来の無量の徳を觀見したてまつること、猶し明かに照して衆像を見るが如し三世諸佛の所得の法は、衆生を教化し思議し難し。悉く此功徳を觀念し已りて、法を樂み踊躍して大いに觀喜す衆生は煩惱の海に没在し、愚癡狂濁にして大に恐怖す佛は慈悲を以て究竟じて度したまひ、淨境界を見るに天幢の如し佛は無量の大光明を放ちたまひ、一一の光明には無量の佛あり無數の方便もて皆悉く現じ、一切の衆生類を化度したまふ復愛樂天子有り。寂靜を愛樂し衆生の苦を滅するの法門に於て自在を得。妙羅光天は諸の衆生の心淨くして垢を離れ、廣く徳海を修するの法門に於て自在を得。自在晋天は一切衆生一劫に修する所の功徳の一念の中に於て出生するの法門に於て自在を得。勝念智天は、世間の生住滅の種種の清淨なる功徳の法門に於て自在を得。淨樂音天は、一切の菩薩の兜率宮に在りて廣く供養を説くの法門に於て自在を得。善思晋天は、一劫の中に諸地の義を説きて以て一念の頃に悉く能く説を受くるの法門に於て自在を得。解脱光音天は、道場を莊嚴するの法門に於て自在を得。甚深音天は、無盡の神足諸の功徳海の法門に於て自在を得。離垢稱天は、一切の佛の諸の功徳海の境界となるの法門に於て自在

衆生を度脱せしむる目的を以て衆生を攝招する四種の法なり。布施、愛語、利行（善行を以て衆生を利益す）、同事（形を變じて衆生と近づき衆生と事業を同じうす）を言ふ。

【一切智】三智の相及び言教に了達したる智慧なり。

【本行】佛果を得んとする修業。即ち菩薩の位に於て行ずる修行なり。

【出要】出離解脱の意。

【如來海】 悟界の義。

【漸】 漸那の略。 (Dhyanam) 定、靜慮、奢摩、思惟作等と譯す。六度の一にして、俗縁を離れ、聲縛を擲ち慮を靜めて眞正の理法を了達すること。

【不思なるの法門】 本來一切法は空な

を得。出淨光天は、過去の諸佛の願力に持せられて歡喜する功德力藏の法門に於て自在を得たり。

爾時、光普天子は、佛の神力を受け、遍く光普天の衆を觀じ、偈を以て壽して曰はく、

我如來の過去の行を憶ひ、我供養を行せしことをも亦憶念するに

本修せし所の清淨の意の如く、佛の光明の故に今悉く見たてまつる

如來の無垢莊嚴の身は、衆生の清淨心を増長し

慈悲喜地の中に安住せしむ。是を莊嚴淨の法門と名く

如來の廣大なる方便の法は、無量劫海に修習せし所

彼の生滅の法は如如の相にして、法主音聲の方便門なり

如來の神力は十方に遍く、普く無量の諸佛の刹を照し

十方の諸佛皆悉く現じ、勝念の方使もて愚癡を滅したまふ

無量の初海の摩訶の佛を、供養し恭敬して歡喜を生ず

故に能く群生の闇を斷除す、是を妙首勝の境界と名く

無量劫海は甚だ廣大なり、方便地を説きて倫匹無く

演ぶる所の妙法は窮盡すること無く、心方便の門に自在を得たり

如來の無量なる自在の力は、念念の中に於て普く示現して

神を降し道を成じて權量り無し。是れ則ち名けて妙法門と爲す

ることを教ふる法門なり次の不來不去無所依住の法門も同じ意なり。

【無盡平等】本經所説の思旨たり。萬有互に相即相入して一切即一たり。而て無碍即人にして盡る所なきを無盡無碍と云ふ。從つて一塵一草亦法界たらざるなきを以て無盡平等の妙法界と云ふなり。

【相觀】鏡鏡なり。果報等き色身に開滿せる麗しき相を言ひ其完全なるを十二相、八十隨形好と云ふ。相は互に好して好は小なる部分の相狀を稱す。

【妙色身】微妙なる色身即ち攝護なる肉體の意。

【諸根】無量の衆生の宗教的機能即機根なり。其差別を識別するなり。

【念觀】觀主の妙

佛持は深廣にして與等無く、神足の示現も量るべからず能く諸根をして悉く清淨ならしめ、甚深微妙の地に住することを得せしむ如來の智慧は邊際無く、行淨きこと比無く罣礙無し普く一切の兩足尊を見たてまつるは、無上の離垢稱の方便なり過去世に菩薩たりし時に於て、無量の諸佛海を供養したてまつり大誓願を立つること思議し難し、是故に無上の智を逮得す復尸棄大覺天有り、諸法を照現して不思議に入るの法門に於て自在を得。智光明梵は、一切禪もて等觀し寂靜に善住するの法門に於て自在を得。智光心梵は、諸法の不可思議を照して方便に入るの法門に於て自在を得。普普雲梵は、一切の佛の妙普賢海に平等に度入するの法門に於て自在を得。應時普梵は、衆生を攝伏する最勝の法門に於て自在を得。寂靜光梵は、一切の利に能く起り安住して諸法を分別するの法門に於て自在を得。喜光梵は、無量の方便もて衆生を化するの法門に於て自在を得。堅固梵は、諸法の淨相。寂行に住するの法門に於て自在を得。樂日光梵は、一切の有は來る無く去る無く依止する所無き勇猛の法門に於て自在を得。柔軟音梵は、無盡の法を行に隨ひて普く照すの法門に於て自在を得たり。

爾時、尸棄大梵は、佛の神力を承け、遍く一切諸の大梵衆を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

色身を離脱し、其所説の法門を念持す。

【普門】一門に法界を攝して圓融無碍なるを普門と云ふ。

【不離愛天】轉は轉流なり、愛は煩惱なり、菩薩自ら煩惱を留めて取て大慈恵の心を以て他の衆生を度脱せしむるを言ふ。

【偈】(一三三三) 伽陀に言ひ、散文に對して韻對變なり即ち韻的なる表語を以て去理を宣揚するなり、或は徳を禮讃するなり、印度に於ては之に四種法ありて本經中にありは(一三三) 祇夜と言ひ重頌亦は應頌と言さるる種類なり。

【大智度論】佛經の別稱なり。

【華嚴】如來四位に於ける修行に由り、其圓因の果と

佛身は清淨にして常に空然たり、普く十方の諸の世界を照すも寂滅無相にして照現無く、佛身の相を見たてまつるに浮べる雲の如し

一切の衆生は能く、如來の法身中の境界を測ること莫く無量の方便は思議し難し、是れ智慧光照の法門なり

一佛刹の摩のごとき諸法の海を、一音もて演説して悉く除すこと無し此經は摩訶に演ぶるとも盡きず、是を光照心の法門と名く

如來の妙音は深くして満足し、衆生は類に隨ひて悉く解することを得一切皆其語を同じうすと謂へり、梵音普く至り最も無上なり

十方三世の佛の得たまひし所の、一切の菩薩の方便行は悉く如來の身中に於て現じ、而も佛身に於て分別無し

佛身は空の如く盡すべからず、無相無礙にして普く示現し應現すべき所幻化の如く、神通の淨音周ねからざる靡し

佛身の無邊なること虚空の如く、智光の淨音も亦是の如し佛は諸法に於て障礙無く、猶し月光の一切を照すが如し

法王は妙法の堂に安住しにまひ、法身の光明は照さざる無く法性は如實にして異相無し、是を樂普海の法門と名く

復自在天王有り、無量の衆生蔵を教化するの法門に於て自在を得、善眼光天は、諸の

して得たる相好を衆生に示し給ふなり。

【平等眞實】如來の法門は一味平等にして絶無眞實不變なる眞理なり。

【等正覺】(五) Ten Thousand Buddhas 十佛陀の譯、佛十號の一なり。正覺如とも譯す、如來平等の正理を覺知し給ふ故なり。亦菩薩修行階位に於て五位の最上位(第五十一位)の菩薩を佛果正覺に等しと言ふ意を以て等覺と稱す。今此處の意は是なるべし。

【一切有覺照】一切の世界即ち法界の中に佛出現し給ひて衆生を覺照せしめ、又諸法を照照し給ふが故に覺照と云ふなり。

【攝持具】心に文善を具へ以て、説くに四辯一小辯

衆生をして最上の樂を得しむるの法門に於て自在を得。雜寶冠天は、衆生の無量の性欲を解るの方便の法門に於て自在を得。精進善慧天は、衆生に義を分別するの法門に於て自在を得。勇妙雜音天は、諸の衆生を慈念し觀察するの法門に於て自在を得。光明樂幢天は、諸の衆生をして魔事を超出せしむるの法門に於て自在を得。淨境界天は、諸の衆生を念化するの法門に於て自在を得。淨色輪天は、十方の諸佛を念じ充滿するの法門に於て自在を得。智華妙光天は、佛の功德自在にして、覺悟、念に充滿し隨順するの法門に於て自在を得。大力光天は世間の境界を離るるの法門に於て自在を得たり。爾時、自在天王、佛の神力を承け、遍く一切の自在天の衆を觀じ、偈を以て頌して曰は

如來の法身は法界に等しく、普く衆生に應じて悉く對現したまひ
如來法王は衆生を化するに、諸法に隨順して悉く調伏したまふ
世間一切の上妙の樂は、聖の寂滅の樂を最勝と爲す
無垢の妙法は如來の室なり、清淨の勝眼は實の如く見たてまつる
如來は普く諸の世間を照したまひて、疑地の枯林に法雨を降らし
衆生潤ひを蒙りて疑網を除く、是れ寶冠幢の妙法門なり
如來の演べたまふ所の一妙音は、廣大の法海を説きて餘すこと無く
佛は一音を以て十方に遍す、是を勝勇善の法門と名く、

大辯、雙辯、無量辯の才能あるを言ふ。

【天中大】佛の尊稱にして、佛は諸天の中に於て最勝の天なりとの意。

【如如】五法の一如は寂靜不變の理體即ち眞如なり故に如の如は眞の眞にして絶體無二の眞理。

【難處】佛の出現に無縁の所。亦佛に遇ひ難く法を聞き難き處を言ふ。

【衆會】佛說法の會座を指す。

【生住滅】四相の法門なり。事物の變化する無常相を四種に分ち、細の四相として、生相住相、異相、滅相を稱し、纏の四相として生、老、病、死を數ふ今其何れとするも要は世間の無常相を説きて衆生の迷染を滅し清淨の功徳を成ぜしむるなり。

一切十方の諸の佛土は、佛の一毛に入りて圓滿たす。佛は大慈の虚空の如きを以てしたまふ。是を清淨慧の法門と名く。一切衆生の慢は高山のごときも、佛は十力を以て研きて餘すこと無く。佛の慈光は明かに十方を照す、是を光轉の妙法門と名く。如來を觀たてまつることを得て藥惑を滅し、淨見智慧悉く充滿し、永く惡趣の諸の恐怖を離る、是を寂境の妙法門と名く。如來は毛孔より悉く光を放ちたまひ、其所應に隨ひて法を聞くことを得。普く衆生を導きて善趣に至らしむ、是を善轉の妙法門と名く。一切十方の諸の佛の事を、此衆は一切悉く見たてまつることを得。如來の法界は虚空に滿つ、是を淨華勝の法門と名く。無量劫海の諸の佛國は、皆是れ最勝の慧の境界なり。如來此に於て高心無し、是れ大力轉の妙法門なり。

復善化天王有り、一切の法を化なりと分別するの法門に於て自在を得。靜光時天は、一切有及び我の眞實を觀するの法門に於て自在を得。化力光天は、諸の衆生氣を離れて智慧滿足するの法門に於て自在を得。報勝天は、諸佛の音聲、一切の歡喜を發起して勇猛せしむるの法門に於て自在を得。念光天は、一切の佛の相好功徳の具足すること無盡なるの法門に於て自在を得。踊雲音天は、淨智慧もて次第に過大の無量劫を憶念するの法門に

【道場を莊嚴】 道場を莊嚴して佛の入場を尊る意

【境界】 深廣なる功徳海は諸種の爲に種種なる果成満の境(目的)となつて應現す

【過去之行】 四位

【慈悲喜地】 地は心所なり、即ち慈悲の心を寄受する心所の意

【刹】 (Ksetra) 田土國等一譯す、一般國土の意に用ふ

【佛】 權方便、權現の義にして、眞實に尊く爲り一時的假りの手段を言ふ

【佛持】 佛の神祕力の攝持との意

【與等無】 比較すべき者なき意、最大なること

【雨星】 佛の十號の一、二星尊を有する生類(即ち人天)の中に於て、最勝最尊なるもの

於て自在を得。淨光勝天は、一切の衆生に種種の功徳智慧を長養せしむるの法門に於て自在を得。樂光鬘天は、一切の空界に結跏趺坐して無礙なるの法門に於て自在を得。樂智慧天は、一切の方便の境界無盡力の法門に於て自在を得。華光鬘天は、諸の衆生の業行苦樂を等觀するの法門に於て自在を得たり。

爾時、善化天王は、佛の神力を承け、遍く化樂天の衆を觀じて、偈を以て頌して曰はく、
法身は世に於て思議し難く、如來は普く現じて衆生に應じたまひ
緣性は造無く眞實に非ず、行業に莊嚴せられて世間に現じたまふ
方便して佛を求むるに所無く、之を十方に攬るに得べからず
法身示現するも眞實無し、出生自在は是の如く見る

無量劫海に諸行を修して、衆生の愚癡の冥を斷除し
如來の智慧は甚だ清淨なり、是を佛慧の除癡力と名く
一切世界の妙音聲も、悉く能く如來の音に及ぶこと無く
一音遠く震ひて十方に遍し、是を勝音の妙法門と名く
一切衆生の諸の功徳は、如來の一相の福にも及ばず

佛の徳は空の如くにして遮障無し、是を生光の妙法門と名く
三世無量劫の中の事と、世界の成敗する種種の相とは
一毛孔に於て悉く能く現す、是を清淨の無上智と名く

との意。
 【難垢稱】垢は煩
 惱なり、即ち煩惱
 の繫縛を離れ眞如
 の理に稱ふ義なり
 【不思議に入るの
 法門】眞身應現し
 寂照不二なる法門
 【攝伏】攝取降伏
 の略、頓者は攝取
 敷濟し、強者は破
 摧降伏せしむ。
 【淨相】妄情の計
 度を離れたる相。
 この妙智を以て證
 契するを寂行に任
 すといふ。
 【一切の有】有と
 は生死輪廻して生
 を受くる生死相續
 のこと。二十五有、
 三有等と言ふ、然
 れども此有は假有
 にして實有に非ず
 即ち生に從來なき
 が故に無來、滅に
 所去なきが故に無
 去なり。住もなく
 所止もなし。本來
 是空なればなり。
 此の理に於て心に
 證得するを勇猛と
 名く。

空の邊際を求むるに猶得べきも、佛の一毛孔は涯限無し
 佛の徳は是の如く不思議なり。是を如來の淨知見と名く
 佛は先世の無量劫に於て、一切の波羅蜜を具滿し
 精進を勤修して罪念無し。是を樂見の淨法門と名く
 行業の因縁は思議し難きも、佛は衆生の爲に説きて餘すこと無く
 普く諸法を現じ、淨くして穢無し、是を無上の深法門と名く
 如來の一毛孔を觀見するに、一切の衆生は悉く中に入り
 衆生も亦往來の想無し、是を諸方照の法門と名く
 復兜率天王有り、諸佛の轉法輪を成就するの法門に於て自在を得。樂寶曇天は、虛空界
 淨光の法門に於て自在を得。勝幢天は、廣き願海に諸の衆生を入れて寂靜なる法門
 に於て自在を得。百光明天は、一切法の無量の無相なるを觀行するの法門に於て自在
 を得。超躡月天は、佛の境界の超躡覺力の法門に於て自在を得。勝眼光天は、喜びて修
 集し沮壞すべからざる菩提心の法門に於て自在を得。宿莊嚴天は、諸の十方の佛の衆
 生を調伏する方便の法門に於て自在を得。樂靜妙天は、無邊の心海に念念に向向し、器に
 隨ひて普く現するの法門に於て自在を得たり。
 爾時、兜率天王、佛の神力を承け、遍く兜率天の衆を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
 如來は普周にして法界に等しく、垢の衆生の爲に世に出現し

【法身】三身の一、無色無形の理佛たり。法は眞如法界の理、身とは積聚の義（眞如の法界に萬法を積聚す）に依止の義（眞如の法に依止す）即ち眞如法性の理體を稱するなり、亦本經所談にては解境十佛の一、智慧により證せらるる法性の理を佛身と云ふ【梵音】如來の妙言と同意なり。梵は最上善の義なれば佛の音聲を尊稱して顯く云ふなり亦如來の音聲最勝なるを以て云ふ【法性】諸法の體性、眞理其自體なり眞如とも同意なり【摩訶】衆生の憍慢を指す【念化】心念に隨應して攝取化益すること【念に充滿】念佛三昧の純熟したる念力により一佛を

諸の欲する所に隨ひて爲に法を説きたまふ、是を無上の勝法王と名く如來は宿世の無量の行に、清淨の願海具足して滿ち一切の諸法悉く周備せり、是を方便の勝功德と名く如來の法身は不思議なり、法界法性の辯も亦然り光明普く一切の法を照し、寂靜なる諸法皆悉く現ず衆生は癡闇にして業障を結び、高心放逸にして境界に馳す如來爲に寂滅の法を説きたまふを、歡喜し善樂して悉く能く見る一切世間の最上の歸は、群生を救護して衆苦を除きたまふ衆生の無上尊を觀たてまつるを樂ふこと、猶し滿月の高山に顯はるるが如し諸佛の境界は不思議なり、一切の法界も亦是の如し諸の法力に於て悉く究竟し、定慧の方便皆成就せり清淨の境界は功德の海なり、一切衆生の緣行る者は佛の功德を聞きて菩提を發し、塵垢を消除して最勝を成ず世界海の微塵數の如き、諸の佛子等は悉く來り集り如來を供養したてまつりて法を聽受し、悉く法幢方便王を觀たてまつる復夜摩天王有り、諸の衆生をして覺を離れて、善根を廻向するの法門に於て自在を得。悅樂光天は、諸の境界の法門に於て自在を得。無盡慧天は、諸の患を離れしむる大慈

念ずれば十方の諸佛皆其念中に集り来るが故に言ふ。【覺悟念に充滿】衆生の心念に覺悟して成正覺を現する義。【隨順】佛の教と衆生の念力と相隨順して意入せしむるの意。【法王】如來は法の主なるを以て法の王と言ふ。佛の意。【疑難】衆生の疑惑の意。【惡趣】善趣に對して言ふ。惡業の因に報いられて趣く處にして地獄、餓鬼、畜生を三惡趣と云ふ。【善趣】惡趣の對善業の果報として趣き住する處なり。善趣は天趣、畜道、人趣、畜道を言ひ、亦作權道を加へて三善趣とも言ふ。【高心】高慢心を言ふ。【一切有】有は色身の意なり、佛は

悲を具するの法門に於て自在を得。淨觀天は、諸根を分別するの法門に於て自在を得。持須彌天は、無量の總持照明的法門に於て自在を得。不思議慧天は、諸の境界の業行眞實にして不思議なるの法門に於て自在を得。寶輪天は、法輪を轉じて衆生を調伏するの法門に於て自在を得。不思議光天は、衆生界を勝眼して普く照るの法門に於て自在を得。月掌須彌天は、諸法、實に普く現するの法門に於て自在を得。普普迦觀天は、諸の天衆の應する所に覺作して心を淨めしむるの法門に於て自在を得たり。

爾時、夜摩天王は、佛の神力を承け、遍く夜摩天の衆を觀じ、偈を以て頌して曰はく、佛は無量の大劫海に於て、生死の煩惱永く已に盡さ

能く衆生に清淨の道を教へたまひ、佛は一切智慧の燈と爲りたまふ

如來の法身は甚だ曠曠なり、十方に周遍して沮隱無し

智慧の光明は方便の力、寂滅の福樂も亦無量なり

生老病死憂悲の苦、毒害通切して衆生を惱ます

斯等の頂の爲に慈悲を起し、無盡の智を以て菩提を示したまふ

如來の智慧は隨順して覺り、三世を了達して障礙無く

一切の善行を悉く了知したまふ、是を樂化明の法門と名く

無量の總持は深廣無く、如來の辯海も窮盡無く

能く清淨の妙法輪を轉じたまふ、是を須彌總持門と名く

色身を現ずるも有に於て佛を求むべからず、故に有即ち眞實なり。是を一切有の眞實を觀ずと言ふなり。【我】佛は我を現ずるも而も其我に於て佛を求むべきなし。我は即ち眞實にして而も無我なればなり、是を我の眞實を觀ずと言ふ。

【全跏趺坐】全跏趺坐、本跏趺坐とも言ふ。左の趾を右の趾の上におき、右の趾を左の趾の上にをく坐相なり。【等觀】衆生の善惡業の因果は同じく法界に在りて去來なきが故に等觀すると言ふなり。【緣性】緣起性の略。

【相稱】相好の福徳なり。

【世界の成敗】生住異滅の四相を經て世界は生起轉廻すと云ふ。

無上の大聖の一の妙身は、應化して一切の世に周滿し、悉く一切衆生の前に現じたまふ、是を普光勝の境界と名く。衆生一たび如來の身を見たてまつれば、悉く能く衆の煩惱を斷除し、一切諸の塵事を遠離す、是を清淨の妙境界と名く。佛は一切の大衆海に於て、此衆會に處して、悉く遍く照し、普く衆生の爲に法雨を雨らしたまふ、是を普音備の法門と名く。

【轉法輪】 教法を説きて邪を破り、正道を開顯することとを喻を以て言ふ。即ち轉法輪の輪實は一切の障碍物を破壞して開顯せしむるが故に教法の功德に喻ふるなり。

【觀行】 諸法の無相無我を觀察し修行せしめ、慧業の障碍を滅却せしむるを云ふ。

【超諸覺力】 佛の境界は凡小を超越して想像をも許さざるを超斷と云ひ、佛の眞如を體得し、對機を照覺せしむるを覺力と云ふ。

【菩提心】 菩薩行（大心ありて佛道に入り佛教の修行を精進する義）を行する心なり。即ち上は菩提を求め下は衆生を化せん」と發心するを言ふ。凡て四弘誓願に説ける。

【心海】 所化即ち

大方廣佛華嚴經 卷第二

世間淨眼品第一之二

東晉天竺三藏佛跋陀羅譯

復釋提桓因行り、三世の佛の出興し、住し、滅したまふを、決定の大智もて念喜するの法門に於て自在を得。普稱滿天は、衆生の色と如來の色身との諸の功德力清淨なるの法門に於て自在を得。慈眼天は、平等の慈愛もて蔭覆するの法門に於て自在を得。寶光稱天は、衆の光色の具足せる念佛普勢の法門に於て自在を得。樂言慧天は、衆生の業報を觀するの法門に於て自在を得。樂念淨天は、諸佛の國土淨法を具するの門に於て自在を得。須彌勝普天は、世間の生滅を觀するの法門に於て自在を得。念智慧天は、當來の菩薩の諸行を起して衆生を化する因の起念の法門に於て自在を得。淨華光天は、一切の天の娛樂の法門に於て自在を得。慧日眼天は、諸の天處の教化に善根を流通するの法門に於て自在を得たり。

爾時、釋提桓因は、佛の神力を承け、遍く三十三天の衆を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
若し一切三世の佛を念じ、廣く能く佛の境界を觀察せば

教化の對象たる衆生界を言ふ。

【廻向】廻轉廻向の義にして、自己の積める善根功德を他に廻轉して其證果を援助する意なり。

【高心放逸】高心とは憍慢心なり、他者を蔑視して自己を高貴するを言ふ。放逸とは惡を廢し善を修する能ざる意志力の弱き放蕩縱逸なる無節制を言ふ。

【最上の歸】最上とは總體なり、唯一なり。歸は歸依處なり。歸は總體唯一の依托處の意にして佛陀のことなり。

【菩提】(Bodhi) 智、道、覺等と譯す。正覺の智慧を言ふ。

【大悲悲】衆生に樂を與ふるを慈と言ひ、衆生の苦惱を拔濟するを悲と言ふ。要するに佛

諸佛の國土の成敗の事は、佛の神力を以て皆悉く見ん

佛身は清淨にして十方に滿ち、妙色無比にして一切に應じ

光明照耀すること最も殊特なり、具足廣稱のもの是の如く見たてまつる

本修せし方便の大慈海は、一切諸の衆生に充滿して

悉く能く一切の衆を調伏したまふ、清淨眼を開きたるものは見るに極まり無し

佛の功德の無量なることを念ずるが故に、廣大の歡喜心を生ずることを得

世間に如來と等しきもの無し、離垢稱王の住するの法門なり

清淨の業海に滿てる衆生を、一切悉く見て餘り有ること無し

種種の因は深廣の福を起す、是の如き善見は猶し滿月のごとし

諸佛充滿して十方に遍く、一切の衆生を見たてまつらざる無し

既に見ることを得已りて悉く調伏し、皆無上の方便念を得たり

如來の智身の明淨眼は、一切の十方刹に周遍し

悉く衆生をして皆觀見せしめ、妙音宣化して解せざる無し

佛は一毛孔に衆行を現じたまひ、佛子見りて具さに修習し

無量の徳を具足成就す、是の如き善慧は猶し滿月のごとし

一切の衆生悦樂を得るは、皆如來の神力に因りて生ず

如來の無量の功德の故なり、是を無垢の雜華門と名く

陀の衆生に對する
絶對的聖愛なり。

【總持】(Dharani)
能持、能達とも言

ふ。種種の善法、無

量の義理を合持し

て敬りせしめざる

義なり。亦智慧を

總持し、惡法を分

別し捨離して善法

を總持するが故に

總持の光明は一切

の法を照明せしむ

と言ふ。

【念善】念は大地

法、五別境の一に

入る精神作用なり

即ち總持したるこ

とに對し、記憶し

て忘れざる作用な

れば、理に順じ善

く總持する義の意

なり。

【衆生の色】色は

色身の略なり。衆

若し能く須臾も如來を念せんには、乃至一念の功德力も

永く業の惡趣を遠離することを得、智慧の日光は義の闇を滅せん

復日光天子有り、十方の諸の衆生身を照し未來際を盡して正しく莊嚴に住せしむるの

法門に於て自在を得。眼炳光天は、諸の色を照す無上智海の法門に於て自在を得。瞿彌光

天は、衆生の轉た勝れたる清淨の功德を起すの法門に於て自在を得。淨寶月天は、樂

つて一切の苦行を度するの法門に於て自在を得。勇猛不退天は、障礙無き普照の法門に於

て自在を得。妙華光天は、淨日の光衆生身を照すの法門に於て自在を得。勝光天は、

光世間を照し功德を積集するの法門に於て自在を得。寶髻天は、衆の寶海に種種の色境

界を現するの法門に於て自在を得。明眼天は、一切趣をして清淨眼を開き法界藏を觀ぜ

しむるの法門に於て自在を得。勝地天は、諸の衆生の淨乘の法門に於て自在を得たり。

爾時、日光天子は佛の神力を承け、遍く日光天子の業を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

佛慧の光明は邊際無く、普く十方無量上を照し

一切の業をして、面り佛を觀たてまつらしめ、種種の方便もて衆生を化したまふ

衆生の大海は廣くして量り無きも、悉く能く具足して其心を知り

衆生の智慧海を開發す、善勝の光明は是の如く見る

如來の普く爲に世に出興したまひ、遍く十方を照して悉く餘すこと無し

如來の法身は無等等にして、無上の智を以て法を演說したまふ

緣起の思想より言ふものなり。

【功徳力清淨】體

より用を起すを功徳力と言ひ、用は體に異らざるを清淨と言ふ。

【起念】因位の行者の修行成就して眞理を證す就して云ふ。

【善思】諸人を教化するに當りて、一念たりも佛を念ずれば、近くは惡趣を脱し、遠くは鐵籠を滅するを得るが故に萬機を流通すと云ふ。

【一切衆生の義なり】衆生が煩惱を起し、業を作りにて其惡業に引かれて趣き住む所を越と云ひ、之を六種、天、人、龍、鬼、畜生、地獄に分つ。

【淨業】煩惱の不同に由りて五乘（五姓各別を説くが故に其教も亦五乘不同なりと云ふ）

無數劫の諸有の中に、難行苦行するは衆生の爲なり

是故に淨光は虚空の如く、妙身顯現すること猶し滿月のごとし

佛妙音を演べたまふに障礙無く、十方に周遍して悉く餘すこと無し

分別して廣く一切の法を演べ、因縁と方便とを具足して説きたまふ

大光明を放ちて不思議に、十方の世界悉く明淨となり

人をして歡喜し道意を發さしむ、是を莊嚴の勝法門と名く

一切世間の諸の光明は、佛身の一毛の光にも及ばず

佛の光は微妙にして思議し難し、最勝は能く此轉變を現じたまふ

一切諸佛の法は是の如く、各十方の道樹の下に坐し

衆の爲に道と非道とを分別したまふ、清淨の妙眼は是の如く見たてまつる

冥冥の衆生は盲にして目無し、斯苦の類の爲に淨眼を開き

彼が爲に智慧の燈を示現して、如來の清淨身を見ることを得しめたまふ

方便自在にして倒惑無ければ、悉く應に一切の供を受くるに堪ふべし

漸に教へて解脱の道を開示す、是を淨眼の方便地と名く

一の法門に於て無邊を説き、無數劫の中に廣く敷演し

深遠清淨の義を分別す、是を周遍の妙法門と名く

復月天子有り、衆生を調伏し普く法界を照すの法門に於て自在を得。耀華天は、普く觀

の別あれども、終には一擧に歸するが故に、諸華皆淨業の法門なりと言ふ。

【無常等】法身は最勝にして比すべき者なし、故に無等の所處の法は諸佛各の等同一にして異なることなし、故に相等し、淨り氣等に於て等なり。

【淨意】道は正道なり、佛法修行の道なり、即ちその意志を言ふ。

【最勝】佛の尊稱なり、佛は人中に於て最優最勝なるが故に名づく。

【道樹】菩提樹のことなり、釋迦佛初めて正覺を成じたまふ時、此樹に下のみし給ひしを以て、後、遺物崇拜の對象となりて尊崇するに至り而して諸佛の成正覺

じて一切諸法の境界を攝するの法門に於て自在を得。淨光天は、諸の衆生の心海と境界とを皆悉く轉せしむるの法門に於て自在を得。淨光天は、能く一切の不可思議なる愛樂を生ずるの法門に於て自在を得。眼光天は、衆生をして實を見しむるの法門に於て自在を得。現淨光天は、大慈悲もて一切の苦惱の衆生を救護するの法門に於て自在を得。普遊淨光天は、無礙淨月の法門に於て自在を得。妙莊嚴天は、淨法の如く化の如く空無なるを觀するの法門に於て自在を得。淨菩提天は、善く一切の業行の起す所を解るの法門に於て自在を得。大光焰天は、諸天の疑を滅して照度するの法門に於て自在を得たり。

爾時、月天子は佛の神力を承け、遍く月天子の衆を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
普く衆生に於て大光を放ち、十方の國土に如來を見たてまつり

一切の愚癡の闇を照除して、明に不可思議の法を了る
佛界は無邊にして盡すべからず、無量劫の中に功徳を集め
種種方便の妙法門もて、一切の衆生類を調伏す

如來の智慧は甚だ深遠にして、他の無量の諸の心海を
隨順して爲に淨法輪を轉じ、無量の歡喜心を生ぜしめたまふ
衆生は賢聖の樂を遠離し、世間の無量の苦に没在す
佛は斯等に清淨の法を與へ、心に悅樂を得て安隱に住せしめたまふ

に際しては必然的の條件となれり【供を受く】佛敎にては他人の供養を受くる資格として、一切の煩惱を斷ずべきからず、此徳を具する者之二乗の無學果の聖者とす。亦佛陀は最終なるが故に、十號の一に應供を蒙りて佛陀の別稱となす。

【圓通の妙法門】この一語は未を會して本に歸するなり。是は別敎の意を表す。

【愛樂】正しく眞理に趣く意、即ち眞如體達に愛樂するなり。

【實を見しむるの法門】眞理を親見せしむる法門。

【無礙】業は三毒のなるものにして無明とも云ひ愚癡闇鈍にして事物の道理を知る能はざる精神作用を云

如來は普く大光明を放ちて、世間の諸の法相を分別したまふに罪福の報應は敗亡せず、清淨光天は是の如く見る。佛は是れ一切衆生の地にして、能く無量なる善の果報を持し

悉く衆生をして邪道を離れしめ、善能く方便地を安立したまふ。大慈悲の雲覆はざる際く、佛身は難思にして衆生に等しく

普く法雨を雨らして一切を潤したまふ、是れ佛の第一の上方便なり。一切の有は無性にして空の如く、佛は是れ衆生の大光明なり

常に勤め方便して一切を利したまふ、最勝清淨なるもの是の如く見る。復持國乾闥婆王あり、一切衆生の娛樂を攝するの方便の法門に於て自在を得。樂樹光乾

闥婆は佛の功德莊嚴の法門に於て自在を得。起淨眼乾闥婆は、衆生の憂喜を離れたるの法門に於て自在を得。華樹乾闥婆は、結使を滅するの法門に於て自在を得。樂遊行乾闥婆は

希望を調伏するの法門に於て自在を得。妙眼乾闥婆は、一切の樂喜光藏に正住するの法門に於て自在を得。師子幢乾闥婆は、一切の方に寶を雨らすの法門に於て自在を得。寶光解

脫乾闥婆は、一切の妙身を現する廣智の法門に於て自在を得。金剛樹乾闥婆は、諸樹を長養する喜光の法門に於て自在を得。現所莊嚴乾闥婆は、一切の佛の諸の境界行を悉く衆生をして愛樂せしむるの法門に於て自在を得たり。

爾時、持國乾闥婆王は、佛の神力を承け、遍く乾闥婆の衆を觀じ、偈を以て頌して曰は

ふ。此煩惱を離れたる明智を無礙と云ふなり。

【賢聖の樂】三賢十聖等の聖者は正道に精進し、下化衆生に勤心して以て其を樂むなり。然るに凡夫は世間苦に愛執して却て樂なりと誤信するなり。

【佛身は難思にして衆生に等し】佛身は菩薩たりとも計量を許さざるものにして何れもその教化のため應現すること其數無量無邊なり。衆生の存する處佛身の應現を見るが故に其數衆生に等しと云ふ【持論】四天王の一にして、東方天の主なり。

【乾闥婆】(Gandharva) 時香、食香、嗅香等と譯す。帝釋の俗樂神にして須彌山の南、十寶山に住して摩香のみを食するが故に

く、

如來の境界に無量の門あり、一切の衆生能く思ふこと莫し。世尊は清淨なること虚空の如く、衆生に開示して正道を見しめたまふ。如來の無量の功德海は、一一の毛孔に悉く見ることを得。能く一切をして意樂に隨はしむ、清淨悅樂のものは是の如く見る。衆生の無量の憂苦の海を、佛は能く除滅して悉く離すこと無し。

佛は大慈と多くの方便とを以て、能く衆生の清淨眼を聞きたまふ。諸佛の利海は十方に滿ち、如來の光明は悉く遍照して能く衆生の煩惱垢を除き、甚深の清淨の法を演説したまふ。佛は無量の諸劫海に於て、方便もて廣く國土を淨むることを修し一切智と、無上の音とを以て、無邊の衆生類を安慰したまふ。

樂つて如來の普く清淨なるを見たてまつれば、衆生は悉く無盡の樂を得。隨順して能く解脱の因を起し、解脱の冠を得て心歡喜す。愚癡の障蓋甚だ堅固にして、衆生は生死の海に輪轉す。如來は廣大の法を示現し、演說清淨にして法幢を建てたまふ。

一切衆生に無量の門あり、如來は爲に種種の形を現じ。多くの方便もて衆生を照したまふ、愛音の如來は是の如く現す。

【希使】 煩惱の異名なり。

【善光藏】 解脱の妙果を言ふ。

【諸樹】 菩提樹を指す。衆生の菩提心を譬喩を以て表す。

【青光】 正覺を成ずる義即ち菩提心を開發する意なり。

【意義】 意の所樂各自の希冀する所なり。

【一切智】 三智の法の理に遍達する智慧にして、佛の證智なり。

【無上の音】 佛陀の音聲は圓滿無碍にかざるものなきが故に無上なり亦無量の法益功德を藏して最勝なるが故に無上音と言ふ。

【法輪を建て】 法の道場を轉せんとがために轉法輪の一種を門頭

如來の方便は遂際無く、善逝は具足して廣く

最勝道に入る方便の行を開現して、金剛樹下に正覺を成じたまふ

無量劫を以て一念と爲し、佛力能く現するも亦動せず

能く衆生に一切の樂を與ふ、是を樂見の方便門と名く

復毘樓勒迦繫茶王有り、能く一切の闘諍を滅するの法門に於て自在を得。長燈照光鳩

繫茶は、一切行の現前するの法門に於て自在を得。淨修幢鳩繫茶は、専ら諸趣を正すの法

門に於て自在を得。持益諸行鳩繫茶は、善惡平等清淨の法門に於て自在を得。除恐怖鳩

繫茶は、一切衆生の無畏安隱莊嚴の法門に於て自在を得。淨婆羅林鳩繫茶は、無量の衆生

の憂海の熾然なるを除滅するの法門に於て自在を得。起須彌鳩繫茶は、一切趣の照明雲の

法門に於て自在を得。常勤廻繫茶は、普照の法門に於て自在を得。無量淨眼鳩繫茶は、不

退轉の大慈願を起すの法門に於て自在を得。無量門鳩繫茶は、一切の趣に起る所作の法門

に於て自在を得たり。

爾時、毘樓勒迦繫茶王は、佛の神力を承け、遍く廻繫茶の衆を觀じ、偈を以て頌して曰

はく、

如來は忍力を成じ満足して、無量劫の行は衆生の爲に

放逸慢諸の煩惱を斷れしめたまふ、故に自身は淨くして十方を照す

昔菩薩の諸行海を行じて、十方無量の衆を調伏し

に建つ。故に法蓮を聞くことを法輪を建つと言ふ。

【衆生に無量の門あり】衆生の機根は種々に差別され五性各別等と言ひ其數無量なり。

【善道】佛陀十號の一、(Siddha)修伽陀の謂也。佛陀は諸の障惑を盡して、善く世間を用いて、正覺の妙果に住して不退なり。

故に善道と言ふ。【諸趣を正す】衆生を調伏して其意趣を正しうす。

【善惡平等】善惡の二法等しく教化の法となりて衆生を利益するが故に平等清淨と云ふ。

【無畏】世間の癡愚を滅し建して正具に入るを以て畏るべきものなし故に安隱なり。

【安樂林】(Sudhanu)摩訶及は遠と譯す。印度東の落葉喬木なり。釋迦佛

種種の方便もて慈門を起し、衆生をして一切智を得しめたまふ如來は智慧もて群生を濟ひ、悉く分別して衆生の心を知り

無量自在に衆生を調へたまふ、一切見たてまつる者は皆歡喜す佛の神力の境は思議し難し、當來世の一切劫に於て

實の法輪を轉ずること猶し虚空のごとく、無量の衆生は淨眼を得衆生は癡垢にして心目を翳ふ、如來は照除して正道を見しめ

救濟して永く無量の苦を離れ、恐怖無くして淨智を得しめたまふ衆生は愛苦の海に没在す、如來の智は照し滅して餘すこと無し

離欲無垢にして佛身を見たてまつるに、猶し寶樹の悉く清淨なるが如し佛身は普く應じて見れざること無く、種種の方便もて衆生を化し

普は雷の震ふが如くにして法雨を雨らしたまふ、是を山王慧の法門と名く佛の光は無垢にして最も清淨なり、衆生の癡冥の山を照除し

如來の無量の徳を顯現し、無礙の方便もて佛身を見はしたまふ無量劫に悲門を修し、悉く衆生に自在の樂を興へ種種の方便もて衆苦を滅し、離垢清淨なること華の敷くが如し最勝の身を現じて、悉く周遍したまふも、十方界に於て去來無し自覺の大聖一切に現じたまふ、は無量の門に佛を能く見たてまつるなり

はこれの中に於て人滅し給ひしに由り、菩提樹と等しく世遺物崇拝の對象となり尊崇せらる。今は生死輪廻の因たる愛欲を除く義を説いて無常を教示す

【愛欲】愛は十二因縁の一にして唯識宗にては、生を受くる緣たる貪瞋癡を言ひ、汚れたる愛欲なり此處にては此愛が因をなして輪廻受生する義を表す

【一切趣の照明】佛身は一切趣（前註）に應現して、世を照し法雨を注ぐの意なり

【普照】佛身より放つ光明なり。光體周遍して、その用十方を照し、癡闇を滅するが故に普照と言ふ

復毘樓波又龍王有り、一切龍趣の中の熾然たる恐怖を除滅し救濟するの法門に於て自在を得。海龍王は、一念の中に能く一切の不可思議なる龍身を轉ずるの法門に於て自在を得。雲樂妙幢龍は、一切の有趣に清淨輪を轉じて聲を聞かしむるの法門に於て自在を得。須彌普薩龍は、一切衆生に大功德海を示すの法門に於て自在を得。徳又迦龍は、恐怖を離るる清淨の法門に於て自在を得。無量步龍は、一切の衆生に無量の雲を示現し無量劫を超度して住壽するの法門に於て自在を得。焰眼善住龍は、一切の世界を安立して無量の佛法を分別し、方便を示現するの法門に於て自在を得。離垢勢色龍は、一切の衆生の垢を離れ、歡喜し、知足し、方便に入るの法門に於て自在を得。普行廣聖龍は、一切の善惡の音聲具滿して平等に觀するの法門に於て自在を得。阿那婆達多龍王は、大悲の雲もて一切の衆生を蔭覆し、苦を離れしむるの法門に於て自在を得たり。

爾時、毘樓波又龍王は、佛の神力を承け、遍く龍衆を觀し、偈を以て頌して曰はく、
一切の最勝法を觀見して、上方の群生の類を救濟し

惡趣の衆生常に輪轉するを、大悲の力を以て能く濟拔す

諸の衆生の樂ふ所の色に隨ひて、佛は一毛孔に皆悉く現じたまひ

神足の境界、量有ること無く、佛の功德海は清淨に現す

最勝の妙法は限量無し、譬へば大海の深くして底無きが如し

其樂ふ所に隨ひて聞くことを得しめ、妙聲柔軟にして雷音を發す

【忍力】長時の修行に堪へ忍ぶ忍辱の力なり。六波羅蜜の一たる忍辱波羅蜜を指す。

【惡門】苦を致し樂を興ふる慈悲救濟の徳無なり。

【當來世】當は現在、來は未來、故に現來二世を當來世と言ふ。

【愛苦】衆生の愛欲は輪廻受生の因をなして離苦得脱の時をなす。而て衆生は此愛欲に轉せられて自由ならず、常に苦惱墮悶をなす。

【自覺の大覺】佛陀は自覺覺他覺行圓滿して成佛せるを以て、佛陀を稱して自覺の大覺と言ふ。

【毘婆沙】(一)ヒンズーの四天王の一にして、普薩に異日と稱し、又薩婆、非好報、惡眼等と稱す。須彌山の中間、西方阿耨城に

一切衆生の瞋恚の心は、蔭蓋、障覆、熾氣の海なり

如來の無上の大慈悲は、神足の力を以て之を度脱したまふ

如來身の一毛孔に於て、衆生の功德は皆悉く現じ

深くして無量の功德の海に入り、須彌山轉の功德現はる

衆生の種種の恐怖の苦は、法王の智光もて悉く救濟したまひ

最勝の毛孔より妙音を演べ、無量の衆生は淨眼を開く

十方三世の諸の如來は、佛身の中に於て色像を現じ

無量劫の中に佛土を淨めたまふ、是を無上の大龍地と名く

佛は一毛の中に皆悉く、無量の神變莊嚴の土を現じ

佛は眷屬の與に圍遶せられて坐し、衆生の爲に微妙の法を説きたまふ

佛は菩薩と爲りて道を求めし時、諸の佛海を恭敬し供養したてまつり

種種無量の方が便門もて、一切の衆生海を度脱せり

如來は正法を演説したまふ時、一切衆生に樂を充滿せしめ

佛音能く歡悅の心を起し、普く衆生をして法喜を得しめたまふ

復毘沙門夜叉王有り、平等觀と方便もて一切の惡を離れ衆生を饒益するの法門に於て自在を得。音主夜叉は、一切の普勝の法門に於て自在を得。持地夜叉は、能く衆生の精氣を除奪し、一切の生氣を長養するの法門に於て自在を得。一切主夜叉は、一切の聖功德を

住し西刹を守護するが如く四方天とも呼ぶ。悪人を罰し善に導きしめて佛道心を發さしむる佛教外護神なり

【佛身を護す】海龍王は神力を以て一念の間に自己の龍形を轉じて無量の衆生身を現すと云ふ。是れ本經の無盡の法門たるを證するなり

【佛又過】一三三三と云ふ。現古又は多舌のなり

【佛の神力】佛の神力を以て法雨を令て衆生を潤益するを以て無量と云ふ

【一切世界を安立して】本經教主の無量の功德を表するなり即ち一毛孔の中に即ち一法界の如く説法す意なり
【知足】少欲知足の教なり

觀するの法門に於て自在を得。勝眼神是夜又は、一切衆生の智慧を觀するの法門に於て自在を得。堅固金剛眼夜又は、一切の衆生に安樂を與ふるの法門に於て自在を得。護命夜又は、持力救済の法門に於て自在を得。能破須彌山夜又は、隨順せる佛力を起すの法門に於て自在を得たり

爾時、毘沙門夜叉王は、佛の神力を承け、遍く夜叉の衆を觀じ、佛を以て頌して曰はく、

衆生に罪垢甚だ深重にして、百千劫に於ても佛を見たてまつらず
生死に輪轉して衆苦を受く、是等を度せんが爲に佛は世に興りたまふ
佛は一切を救済せんが爲の故に、悉く十方の衆生の前に現じ

諸國の衆の苦輪を投済したまふ、因縁は言主の最方便なり
衆生の重罪惡業の障を、佛は方便を以て悉く除滅し
衆生を正法の中に安立したまふ、是を離憂の方便且と名く

佛は昔無量劫に行ぜし時、十方一切の佛を讚歎したまひき
故に高遠たる大名稱有りて、皆悉く普く十方の國に聞ゆ

佛慧は無邊にして虚空に等しく、如來の法身は不思議なり
故に能く顯現して十方を照す、明淨眼王の妙法門なり

一切の衆生は邪徑に入る、佛は正道を示したまふこと思議難し
諸の衆生の化を受くるに堪ふるを見たまひ、種種の方便もて調伏したまふ

くして是を知る
即ち少を得て悔恨
せざる義。

【阿那婆達多】(A
nāpātana) 無熱
惱、清涼等と譯す。

八大龍王の一にし
てその徳最も勝れ
諸龍の三患を離れ
たりと言ふ。佛法

外護の龍神たり。
【薩婆、摩訶】共
に煩悩の異名にし
て眞如、正眞を蔽
蓋し、精進勤修を
障得するが故に言
ふ。

【毘沙門】(Vaiśiṣṭ
a) 多聞、普
門等と譯す。四天
王の一にして、身
に多くて武藝を著
け、無量の夜叉を
率ゐて是國を守護
す。故に北方人と
も言ひ夜叉、羅刹
の二部を領す。後
世我が日本に於て
七福神の一に數へ
らる。

【夜叉】(Yakṣa) 勇
健、暴惡、頓食等と

譯す。

一切衆生の、諸の功德は、如來の一毛の福にも及ばず
佛の智慧海は議るべからず、是を寶王の如是見と名く
無量劫數は思議し難し、佛は是中に於て十力を修したまふ
是故に世尊の力具足して、一切の世間能く壞る無し

復金剛眼照力士有り、如來の無量の色像を示現するの法門に於て自在を得。總持自在にして種種に現す
士は、諸佛の無量色の法門に於て自在を得。須彌華光力士は、總持自在にして種種に現す
るの法門に於て自在を得。淨雲普力士は、如來の無邊なる淨音の量るべからざるの法門に
於て自在を得。阿修羅主力士は、一切に示現するの種種の法門に於て自在を得。金剛光業
力士は、一切の佛法に入りて餘すこと無きの法門に於て自在を得。雷音力士は、能く一切
の諸天を擧ぐるの法門に於て自在を得。師子鬘鬘王力士は、如來の功德廣く照すの法門に
於て自在を得。勝光明力士は、衆生の惡心を除滅して佛の境に安立せしむるの法門に於
て自在を得。珠寶華光力士は、菩薩一切の世間に示現して寶を雨らすの法門に於て自在を
得たり。

爾時、金剛眼照力士は、佛の神力を承け、遍く力士業を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
普く三界の一切衆の爲に、諸法の中に於て法王と爲り

無量の衆の妙色を具足し、悉く十方を照して明かならざる無し
佛身は一切諸の毛孔より、普く光明を放ちて議るべからず

佛身は一切諸の毛孔より、普く光明を放ちて議るべからず

佛身は一切諸の毛孔より、普く光明を放ちて議るべからず

佛身は一切諸の毛孔より、普く光明を放ちて議るべからず

佛身は一切諸の毛孔より、普く光明を放ちて議るべからず

佛身は一切諸の毛孔より、普く光明を放ちて議るべからず

佛身は一切諸の毛孔より、普く光明を放ちて議るべからず

佛身は一切諸の毛孔より、普く光明を放ちて議るべからず

佛身は一切諸の毛孔より、普く光明を放ちて議るべからず

譯す。八部衆の一にして鬼神なり、三類ありと言ふ。【平等觀】如理智を以て一切諸法を平等なりと觀する義。

【普勝】普く機に應じて勝身を現じ衆生を救濟して勝れたる法益を與ふ【精氣】生氣に對して言ふ。惡氣なり、又衆生の愛欲煩惱の業苦を意味す。

【生氣】精氣の惡に對して、善氣を言ふ。即ち衆生の菩提分の善根を生ずるものなり。

【一切土】濕婆即ち自在天 (Ishana) の信仰は世界の有情を悉く自在天 (濕婆神) より生ぜりとなす。故に濕婆神を此宗派に於て一切主と呼ぶ。今此に喩へて佛陀の智慧を指す。

【普輪】生死の苦

一切の日の光明を映蔽し、遍く十方を照して周からざる磨し如來大聖の自在力は、一切諸の法界に充滿し法身示現して涅槃無く、悉く一切衆生の前に現じたまふ

佛音は清淨にして甚だ深妙なり、普く十方の諸の世界に震ひ柔軟にして微妙なる和雅の音は、衆生の垢を滅して髓を満足せしめたまふ

十方三界の諸の宮殿に、最勝は悉く彼に坐を現じて一の佛の所の無量の衆に、導師は中に處して爲に法を説きたまふ

法海は無量にして邊有ること無く、衆の方便門は悉く中に入る一切諸の法界を分別するに、最勝の示現は窮盡あること無し

衆生の大海は邊際無きも、最勝の淨眼は能く度脱したまふ如來の光明は衆生を照し、一切普く大導師を見たてまつる

悉く皆恭敬して供養を興し、無量の聖海國土の佛の功德の無量なること虚空の如くにして、一切悉く大導師を見たてまつる

如來の神力は壞すべからず、一切の佛土に皆悉く現じ如來は淨き道場に安坐したまひ、一切の衆生は現前に見たてまつる

光明普く照すこと雲の興るが如く、衆の妙莊嚴の光は圓滿し普く一切の諸の法界を照して、諸佛の深妙の法を示現す

海に輪廻すとの意【力士】佛法外護の勇猛なる神。佛法興隆に障礙をなす者に鐵錘を加へ亦佛道精進なる者を凌駕する善神。【三界】法界を分ちて悟界、迷界とす。迷界を亦欲、色、無色の三界に分類す。今三界と指すものは、此の法界を指すものにして、惡業苦の三毒に由つて輪廻轉生する衆生の住する世界【大導師】衆生を導きて佛の正法に入らしむる指導者にして其最勝たるもの佛なり故に佛の別稱となる。【普賢菩薩】(Sama-sam-bodhi) (Sama-sam-bodhi) 梵語の三曼多跋陀羅菩薩なり。普は普遍、賢は善善にして、徳法界に普なる善を調ふる賢なるを普賢と云ふて、釋迦佛の右脇

是時、普賢菩薩は、不可思議なる方便の法門海を成就して、能く如來の無量の功德海に入る。謂ゆる、出生し究竟じて、諸佛の土を淨め、衆生を調伏するの法門なり。諸佛の所に詣り、能く一切具足せる功德を起すの法門なり。菩薩の諸地の願行の法門なり。普門もて法界の摩訶の身雲を示現するの法門なり。諸佛の土を淨する不可思議なる方便輪の法門なり。一切衆の中に自在の無量無邊の菩薩の境界を顯現するの法門なり。一念の中に於て三世劫の生滅を知るの法門なり。一切の菩薩の諸根の境界海を分別し顯現するの法門なり。其身自在にして無量無邊の法界に充滿するの法門なり。一切の菩薩種種の方便もて廣く法を分別し一切智に入るの方便の法門なり。

爾時、普賢菩薩、遍く一切の大衆を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
 最勝の嚴淨したまへる、無数の佛土は
 無量の淨色にして、甚深の功德あり
 眞に淨くして垢を離れ、佛子充滿して
 常に妙法の、不思議の音を聞く
 佛は此師子座の上に處したまふを見たてまつる
 一切塵の中にも、亦復是の如し
 而も如來の身は、亦彼に住せずして
 普く佛土の功德の、境界に現じたまふ

上して慈悲を司る菩薩たり

【菩薩の諸境】菩薩修行の地位を分類して或は五十一

或は五十二に分ち

即ち十信、十住、

十行、十回向、十地

等(妙覺等なり)

環路經には等覺の上

十二位となす

【三世】過去、未來、現在なり、亦

前世、現世、來世とも云ふ

【化佛】衆生の器に應じ、化益の爲

に種種の相を化現

し給ふ佛身を言ふ

行境十佛の一

【梵音】清淨なる音聲にして其を聞く者皆道果を得。是佛陀如來の音聲なり。

悉く無量の、諸地の方便に入り

佛は一切の、諸の菩薩行を示したまひ

諸の方便を説くこと、思議すべからずして

諸の佛子をして、淨法界に入らしめたまふ

離垢の淨眼は、深く法性に住し

十方無量にして、邊際有ること無く

微塵數に等しき、諸の化佛の身は

無量の衆生等の、類を教導したまふ

一切十方の、如來の刹土は

世尊皆悉く、平等に護りたまふ

佛は方便に於て、悉く已に清淨なれば

衆生を調伏して、垢穢を除かしめたまふ

一切摩數の、諸佛の國土に

如來は、無量の自在を示現したまひ

梵音和雅にして、諸の道場に遍く

最勝の菩薩の、本行を演暢したまふ

一切三世の、所有る劫數は

念念の中に於て、悉く見て餘すこと無し
彼生滅の、如實の法相を觀するに

思議すべからず、世を護るもののみ能く見る

無量の大衆の、數は盡すべからず

如來の眞子は、佛地を觀んと欲す

一切の法門は、無量無邊にして

諸の佛子の、所有の境界に非ず

離垢の如來は、猶し虚空の如く

清淨にして著すること無く、眞の法性に等し

現化無量にして、窮盡すべからず

悉く道樹に坐して、等正覺を成じたまふ

佛は一音を以て、一切地を説き

一切の法相は、皆悉く窮盡す

無量の方便は、一一の門の中に

諸法を演暢して、亦悉く餘すこと無し

爾時、佛の師子の座の、一切の妙華、摩尼、寶輪、高臺、樓觀、莊嚴具の中に於て、

一に各一佛世界微塵數に等しき大菩薩衆を出せり。其名を海慧超越菩薩、無量師子吼菩

【大菩薩衆云云】
以下海慧等の内衆
の諸菩薩を擧げて
道場を莊嚴し、教
主の功德を説表
す。

【結跏趺坐】坐禪の一種、詳しくは前註に記す。

【普門】圓通融通の佛、菩薩の證の境界を言ふ。

【法愛】深甚微妙の智力を以て眞理に證契するを言ふ。此愛は染汚の愛欲にあらざり、聖愛なり。

菩薩、衆寶光幢菩薩、智日慧菩薩、不思議功德寶稱菩薩、方便寂靜妙華鬘菩薩、金光熾菩薩、淨雲月幢菩薩、普照淨光菩薩と曰ふ。是の如き等の一一の佛世界微塵數に等しき大菩薩衆は、諸の供養を設け、衆の妙華を散じて、虚空に充滿し、諸の香鬘を燒き、氣、鵝雲に過ぎたり。普く一切衆寶の圓かたる光を現じ、又無量の淨日の光明を放ち、諸の妙雲、諸の微妙の音を作し、雜種の寶樹、枝葉、華實、一切の光明は猶し雲の普く起り、無量の寶を雨らせり。是の如き一一の菩薩の供養する所の具は、各一佛世界の微塵數に等しく、一一の供具は復一佛世界の微塵數と等し。皆大いに歡喜して世尊を供養し、遶ること百千匝し已りて、其所隨に隨ひて大衆を供養すること、猶し雲雨の如く斷絶すること無し。出所の方に隨ひて、寶蓋華鬘の師子の座を化作し、恭敬して佛に向ひ、結跏趺坐せり。彼菩薩等は悉く、無量清淨の法海、普明の法門を得て、佛の境界に於て障礙する事無く、悉く一切の辯才の法海に入れり。又不可思議の照明の法門を得て、正しく如來の普門の境界に住し、三世の冒地に皆已に入ることを得。大力の法愛を具足し成就し、無量の功德は清淨圓滿にして、常に法界の畢竟空性たるを行す。悉く已に具足して諸佛を供養したてまつれり。

爾時、一切海慧自在智明王菩薩は、偈を以て頌して曰はく、

佛は諸法の、平等眞實を覺りて

障礙有ること無く、淨きこと虚空の如し

普く悉く、十方の世界を照明して
一切の衆に處して、最勝殊特なり
自然に正覺して、無量無邊に
十方の衆生の、境界に充滿し
一切悉く、菩提樹王に坐したまひ
諸の衆生は、皆悉く圍繞せり
佛に是の如きの、自在の神力有りて
一念の頃に於て、無量の身を現じたまひ
普く衆生をして、垢穢を滅除せしめ
如來の境界は、邊際有ること無し
無量劫の海に、修行を具足したまへる
如來は、一切有の海に處在し
種種の方便もて、衆生を調伏し
皆悉く、最勝の正法を受行せしむ
衆會は垢を離れて、普く清淨なることを得
一切の佛を觀たてまつり、深く樂ひて厭くこと無し
最勝の妙相は、莊嚴具足して

蓮華藏に、寶師子の座に處す

一切の衆寶、諸の莊嚴具は

皆無量にして、微妙なる香熏を出し

雜色の華鬘、虛空に懸布す

佛は是の如き、寶師子の座に處したまふ

無量の衆寶は、妙光を流出し

暉焰清淨にして、十方に明耀せり

如來は、莊嚴の樓觀に安住し

清淨にして、微密なる梵音を演出したまふ

最勝の、無上の正法を宣暢したまひ

聞く者歡喜して、淨妙の道を得

金剛の承座は、安時堅固にして

如意的藏寶を、以て莊嚴と爲し

寶髻菩薩は、常に之を守護し

世尊は此に於て、普く現じて照明したまへり

天尊は、寶師子の座に處在して

遍く三世の、一切の導師を照し

【蓮華藏莊嚴世界】本經の教主、盧舍那佛の嚴淨し給ひし佛國上にして、一切の國、一切の物悉く大蓮華に含藏せらるるが故に此名あり。又華嚴の十佛攝化の境界の義なり。此世界の構造は頗る莊嚴雄大なり。

【八種震動】動、起、覺、震、吼、涌の六種にして、動起涌の三は形に就きての動搖、餘の三は聲に就いての振動なり。動は動搖、起は低きより高きに昇る状態、涌は涌出にして地面の凸凹するを云ふ。覺は驚覺する大聲、震は雷聲の地鳴するを云ひ、吼は哮吼にして震鳴するなり。

無量の化佛は、十方に遍滿して

如來の無盡の、法藏を開揚したてまつる

爾時、佛の神力の故に、蓮華藏莊嚴世界海は、六種十八相に震動せり。謂ゆる、動、遍動、等遍動、起、遍起、等遍起、覺、遍覺、等遍覺、震、遍震、等遍震、吼、遍吼、等遍吼、涌、遍涌、等遍涌なり。又一切の世界の諸王をして、各不可思議の諸の供養具を雨らし、如來の大衆海會を供養せしめたり。謂ゆる、一切の香華雲、衆の妙寶雲、雜寶の蓮華雲、無量の色寶曼陀羅雲、解脫寶雲、碎末栴檀香雲、清淨柔軟聲雲、寶網日雲を雨らし、各其力に隨ひて衆の供養を雨らせり。是の如き等の一一の世界の諸王は、不可思議の諸の供養雲を設けて、普く一切如來の大衆に供へたり。此世界に衆の供養を設けたるが如く、一切十方の諸佛の國土にも亦復是の如し。此世界の中にて、佛、道場に坐したまひ、世界の諸王は、各所樂の境界に隨ひて、三昧、諸の方便門、歡喜離、諸方に通達するの勇猛の法、如來の境界、神力の所入、諸佛の無量法海の門に、皆已に度ることを得たり。此世界の如く、十方一切の世界も亦復是の如し。

盧舍那佛品第二之一

爾時、諸の菩薩衆、及び一切世界の諸王、咸是念を作さく、何等か是一切諸佛の地、

【十八相】前の六種の震動に各三あり、動に就いて一方に動くと云ふ。偏動と云ふは八方動と云ふを等偏と云ふ。斯くして六に三を有するが故に十八相となるなり。而てこの震動は佛の説法等其他の大法樂の瑞相にして、是がため、惡魔を恐怖せしめ、亦大衆に安處を與ふるなり。

【爾時云云】已下正宗分なり。初めに對告の大衆は疑問を擧げて説法を懇請するなり。

【一切諸佛の地】已下佛自内證の佛果を問ふ。即ち佛の内徳として、地、境界、持、行、力等を擧ぐ。示現菩提已下は外相妙用の顯著なるを出し、世界海已下は化用普周の徳を問ふ。

【示現菩提】機に

佛の境界、佛の持、佛の行、佛の力、佛の無畏、佛の三昧、佛の自在、佛の勝法なる。示現菩提、佛の眼耳鼻舌身意の諸根、佛の光明、音聲、佛の智海なる。世界海、衆生海、法界の方便海、佛海、波羅蜜海、法門海、化身海、佛の名號海、佛の壽量海なる。一切の菩薩の修せし所の行海、大乘の心を發し、諸の波羅蜜を出し、願、智慧藏なるや。唯願くば如來、慈悲方便もて我が心を發起せしめ、聞解を得しめたまへ。時に諸の菩薩は佛の神力の故に、一切供養の其中より、自然の音を出し、偈を説きて言はく、

如來は無量曠劫に行じ、自然に正覺して世間に出でたまひ
 當來世の無量劫に於て、身一切に應じたまふこと大雲の如くならん
 衆生の疑を斷ちて永く餘すこと無く、勝力を出し、生じて解脫を得しめ
 世間の無量の苦を滅除して、一切をして正覺の樂を得しめたまふ
 無量剎那の諸の菩薩は、一心に合掌して最勝を親たたまつる
 彼願ふ所の諸の境界に隨ひて、疑惑を斷除して法門を開きたまふ
 何等か一切諸佛の地なる、大聖の境界、佛の護持なる
 佛の無上の智、力、無畏なるや、願くば佛子の爲に平等に現じたまへ
 無量の如實の諸三昧と、諸の清淨行と深妙の法と
 大聖の神力とは邊有ること無し、大雷雲を興して衆生に雨らしたまへ

對して種種に化作して正覺を成ずることを示現する義【菩薩の修せし所】云云【已下は佛の因位に於ける修行を問ふなり。】
【佛養の具云云】正覺、依報の無碍闡顯なる教旨を詮表す。是れ即ち國王刹の說法なり。

【爾時云云】已下如來の答説なり。其中に正しく法を説くに先ちて教光入定等を叙す。初めに光明を放ち、謂告の大衆を集む。【而門】口の意なり。

悉く法王の如實の趣に入り、前賢の境に於て具轉せざるを
及び無量の佛の諸の功徳こそ、聞くば熱心を超して悉く見しめたまへ
如來の眼根は限量無く、身界五身も亦是の如し
佛意は如實にして思議し難し、聞くば衆生をして悉く知見せしめたまへ
佛の国土海と、衆生海と、諸の法界海と、圓伏海と
佛海とは無量にして邊際無し、聞くば佛子をして平等に見しめたまへ
波羅蜜海の不思議なると、無上の方便の法門海と
無量無邊の法門海とを、聞くば道場に在して具足して説きたまへ
爾時、世尊、諸の菩薩の心の念ふ所を知して、即ち而門、及び一の齒間に於て、
各佛世界塵數の光明を放ちたまふ。謂はゆる、實體照の光明、法界の妙音莊嚴の光
明、生樂垂雲の光明、佛の十種力にて道場を嚴淨するの光明、一切の寶焰雲の光明、
清淨無礙にして法界に充滿するの光明、能く一切の世界を成ずるの光明、淨寶の金
剛日輪の光明、菩薩の大衆に徃詣するの光明、諸佛の語輪を演説するの光明なり。
是の如き等の一の光明に、各佛世界塵數の光明有りて、以て眷屬と爲り、一一の光
明は、一佛土の微塵に等しき刹を照す。
彼諸の菩薩は、此光を見じりて、蓮華妙音莊嚴世界海を觀ることを得、佛の神力の故に、
光明の中に於て偈を説きて言はく、

【無量劫海云云】此頌は全體として

九偈半にして、佛徳の讚歎と所説法の勝優とを説きて

往詣を勧説す【世雄】世尊十號の

一。世の雄者の義にして佛は雄猛の威力を以て能く

衆魔外道を調伏するが故に名く【深心】三心の

一深高なる佛の果報を自己の心中に求

むる心なり【實智】實智慧の略。眞實の理法を

轉得したる智慧を【師子吼】佛の説

法の義。師子の一吼は百獸を恐れし

むるが如く佛陀の説法は法界に響き

惡魔外道を制服し正道に精進せしむ

るが故に言ふ【契經】佛の經典

は眞如の理法を説くを以て善く眞理に契合するが故に

斯く言ふ【甘露】(Amrita)

無量劫海に功德を修し、十方の一切の佛を供養したてまつり

無邊の衆生海を教化して、盧舍那佛正覺を成じたまへり

大光明を放ちて十方を照し、諸の毛孔より化身の雲を出し

衆生の器に隨ひて開化し、方便清淨の道を得しめたまふ

佛は往古生死の中に於て、一切諸の群生を調伏し

一念の中に於て悉く解脱せしめたまひ、世雄無量に自在を得たり

深心と淨信とを普く莊嚴し、往修して波羅蜜を満足し

諸の利海の塵數と等しく、堅固に一切力に安住せり

微妙の音を出して十方に遍く、實智を具足して衆心を満たし

無量の方使もて衆生を化したまふ、是師子吼の寂靜の法なり

人尊は是の如く徳無量なれば、應に詣でて供養し法を聽受すべし

佛刹に等しき微塵數の如き、最勝の諸子は如來に詣てよ

各一切の供養の具を雨らし、一心に恭敬して導師を觀たてまつれ

如來の説きたまふ所は一語の中に、無邊の契經海を演出し

一切の衆に於て甘露を雨らす、恭敬して兩足尊に徃詣せよ

三世の諸佛の無上の願を、大聖は道場にて分別して説きたまふ

亦一念の中に集在せるに非ず、宜しく速時に詣て最勝を觀たてまつるべし

阿耨多羅三藐三菩提の譯語にして不死、天酒とも譯す波羅門の説れ初はソーマの汁を調ひしもの如し諸神の飲料とせら味はば死することなしと言ふ天より降る甘露と名けたるものなるべし佛の教法の不滅にして美味なるを甘露に喩へて甘露法と言ふ。

【眞諦】諦は諦理にして動かすべからざる眞理の義に對する眞實の深き道理にして此諦は佛教哲理に於ける眞俗兩面の觀察認識の範疇たり【傳時已下】東西南北四維上下の十方より穩固の大衆の集り來るを述べて盧舍那佛の功徳して表示するなり

盧舍那佛の大智海は、光明普く照して量有ること無く如實に眞諦の法を觀察して、普く一切諸の法門を照す

爾時、蓮華藏莊嚴世界海の東に、次で世界海有り、淨蓮華野、光莊嚴と名け、中に佛刹有り、摩訶寶金剛藏と名け、佛を法水覺虛空法王と號く。彼如來の大衆海の中に於て、菩薩有り、觀勝法妙清淨王と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海無數の菩薩の眷屬の與に圍遶せられ、佛の所に來向し、十方一切の虛空に充滿して、十種の寶色光明華雲を興し、悉く皆虛空に彌覆し充滿せり。十種の妙寶須彌山雲、十種の日輪雲、十種の寶華雲、十種の妙寶樓閣雲、十種の華樹雲、十種の妙香現衆色雲、十種の一切妙音聲雲、是の如きの一切、悉く皆虛空に彌覆し充滿せり。佛の所に來詣して供養し、恭敬し、禮拜し已りて、東方の雜華光藏の師子座の上に在りて結跏趺坐せり。此世界海の南に、次で世界海有り、衆寶月光莊嚴藏と名け、中に佛刹有り、無量光耀と名け、佛を普智光勝須彌山王と號く。彼如來の大衆海の中に於て、菩薩有り、清淨海慧と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海無數の菩薩の眷屬の與に圍遶せられ、佛の所に來向して、十種の一切妙莊嚴衆寶王雲を興し、悉く皆虛空に彌覆し充滿せり、十種の普莊嚴寶王雲、十種の妙寶藏熾然照明歡佛功德寶王雲、十種の妙音充滿讚歎寶王雲、十種の菩提樹莊嚴道場寶王雲、十種の普門光明佛變化寶王雲、十種の不壞樂光明、示現寶王雲、十種の香燈照一切刹充滿寶王雲、十種の不可思議佛刹如來宮殿普現寶

【十種】十は滿數なるを以て無量の義を表す。

王雲、十種の雜法三世諸佛法身光明寶王雲は、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。佛の所に來詣して恭敬し、供養し、禮拜し已りて、南方の青色蓮華の師子座の上に在りて結跏趺坐せり。

此世界海の西に、次で世界海有り、寶光樂と名け、中に佛刹有り、一切勝觀と名け、佛を香光王功德法莊嚴と號く。彼如來の大衆海の中に於て、菩薩有り、香華平等菩薩月光と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海塵數の菩薩の眷屬の與に圍遶せられ、佛の所に來向して、十種の一切雜寶香華樓閣雲を興し、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。十種の一切色寶王莊嚴樓閣雲、十種の一切寶幢香始樓閣雲、十種の一切寶嚴莊嚴樓閣雲、十種の一切寶嚴莊嚴樓閣雲、十種の一切寶嚴莊嚴樓閣雲、十種の十方普光明嚴照一切莊嚴樓閣雲、十種の一切寶莊嚴無量莊嚴悉現樓閣雲、十種の普滿莊嚴樓閣雲、十種の無量華樂雲は、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。佛の所に來詣して供養し、恭敬し、禮拜し已りて、西方の金色雜寶莊嚴莊嚴藏の師子座の上に在りて結跏趺坐せり。

此世界海の北に、次で世界海有り、琉璃寶光充滿藏と名け、中に佛刹有り、化青蓮華莊嚴と名け、佛を無量智慧首王と號く。彼如來の大衆海の中に於て、菩薩有り、師子光莊嚴と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海の塵數の菩薩の眷屬の與に圍遶せられ、佛の所に來向して、十種の一切香雲を興し、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。十種の一切青色華雲、十種の一切妙寶樹雲、十種の一切諸雜華雲、十種の一切寶莊嚴雲、十種の

の一切寶雲、十種の一切妙音聲雲、是の如きの一切は悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。
佛の所に來詣して供養し、恭敬し、禮稱し已りて、北方の八倍變化の獅子座の上に在りて、
結跏趺坐せり。

此世界海の東南方に、次で世界海有り、閻浮檀玻璃色と名け、中に淨利有り、寶莊嚴
藏と名け、佛を一切法燈無所怖畏と號く。彼如來の大寶海の中に於て、菩薩有り、無量勝
妙功德法藏と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海の廣敷の菩薩の音聲の與
に圍遶せられ、佛の所に來向して、十種の無量色蓮華藏の獅子座雲を興し、悉く皆虚空に
彌覆し充滿せり。十種の獅子座雲、十種の一切莊嚴具莊嚴の獅子座雲、十種の妙明の獅子座雲、
十種の能出十方一切衆寶獅子座雲、十種の一切青藍獅子座雲、十種の一切諸佛莊嚴の現師
子座雲、十種の一切寶華鬘羅莊嚴師子座雲、十種の一切寶鬘莊嚴師子座雲、十種の目莊
嚴師子座雲は皆悉く虚空に彌覆し充滿せり。佛の所に來詣して供養し、恭敬し、禮稱し
已りて、東南方の夜叉寶藏の獅子座の上に在りて、結跏趺坐せり。

此世界海の西南方に、次で世界海有り、普照莊嚴と名け、中に佛刹有り、普照、華鬘、光
明と名け、佛を一切衆生普觀喜王と號く。彼如來の大寶海の中に於て、菩薩有り、普智光
明慧燈と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海の廣敷の菩薩の音聲の因に圍
遶せられ、佛の所に來向して、十種の如意寶王雲を興し、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。
十種の青色寶雲、十種の一切香雲、十種の一切幡雲、十種の一切妙色莊嚴雲は、悉く皆

虚空に彌覆し充滿せり。佛の所に來詣して供養し、恭敬し、禮拜し已りて、西南方の衆寶の師子座の上に在りて、結跏趺坐せり。

此世界海の西北方に、次で世界海有り、善光照と名け、中に佛刹有り、意入と名け、佛を普門智慧意入明淨音と號す。彼如來の大衆海の中に於て、菩薩有り、無量華照垂髻と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海の摩數の菩薩の眷屬の與に圍遶せられ、佛の所に來向して、十種のの一切雜寶輪蓋雲を興し、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。佛の所に來向して、十種のの一切雜寶輪蓋雲を興し、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。十種の華蓋雲、十種の解脫蓋雲、十種の寶王蓋雲、十種の雜寶蓋雲、十種の普寶蓋雲、十種の瑠璃寶王蓋雲、十種の一切香蓋雲は悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。佛の所に來詣して供養し、恭敬し、禮拜し已りて、西北方の衆善光明幢の師子座の上に在りて、結跏趺坐せり。此世界海の東北方に、次で世界海有り、寶照光明藏と名け、中に佛刹有り、香莊嚴樂勝藏と名け、佛を無量功德海と號く。彼如來の大衆海の中に於て、菩薩有り、無盡清淨光明王と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海の摩數の菩薩の眷屬の與に圍遶せられ、佛の所に來向し、十種のの一切寶光輪雲を興し、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。十種の光輪雲、十種の華雲、十種の如來變化輪雲、十種の一切佛境界輪雲、十種の一切功德寶雲、十種の一切衆生樂不可盡示現雲、十種の一切諸佛所願示現雲は、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。佛の所に來詣して供養し、恭敬し、禮拜し已りて、東北方の清淨光明不可盡の師子座の上に在りて、結跏趺坐せり。

大方廣佛華嚴經

卷第三

東晋天竺三藏佛跋陀羅譯

盧舍那佛品第二之二

此世界海の下方に、次で世界海有り、蓮華妙香勝藏と名け、中に佛刹有り、寶師子光と名け、佛を明照法界と號く。彼如來の大衆海の中に於て、菩薩有り、光照分別法界と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海の塵數の菩薩の眷屬の與に圍遶せられ、佛の所に來向して、十種の一切寶光明雲を興し、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり。十種の一切香光明雲、十種の諸佛師子吼雲、十種の一切佛刹莊嚴雲、十種の一切華樓閣雲、十種の一切座莊嚴雲は、悉く皆虚空に彌覆し充滿せり、佛の所に來詣して、下方の寶藏の師子座の上に在りて、結跏趺坐せり。

此世界海の上方に、次で世界海有り、雜寶光海莊嚴と名け、中に佛刹有り、樂行清淨と名け、佛を無礙功德稱離闇光王と號く。彼如來の大衆海の中に於て、菩薩有り、無障礙力精進慧と名け、佛の光明の爲に開發せられ已りて、世界海の塵數の菩薩の眷屬の與に圍遶せられ、佛の所に來向し、十種の一切無量妙色寶照雲を興し、悉く皆虚空に彌覆

【十億】無量の數を表す。佛教に於て數の計算は十千萬を億と數ふ。

【行處】教化の範圍の意なり。

し充滿せり。十種の無量光普照雲、十種の一切莊嚴照明雲、十種の香燄雲、十種の一切莊嚴雲、十種の佛光焰雲、十種の寶樹華焰雲、十種の一切寶樹堅固光明雲、十種の一切勝光明雲、十種の一切菩薩所行示現雲、十種の一切寶幢光明雲は、悉く皆虚空に覆し充滿せり。佛の所に來詣し、供養し、恭敬し、禮拜し已りて、上方の妙普勝蓮華座の師子座の上に在りて、結跏趺坐せり。

是の如き等の十億の佛刹塵數の世界海の中に、十億の佛刹微塵數に等しき大菩薩有りて來れり。一一の菩薩は、各一佛世界塵數の菩薩を將ひて、以て眷屬と爲せり。一一の菩薩は、各一佛世界微塵數に等しき妙莊嚴雲を興して、悉く皆虚空に彌覆し充滿し、來れる所の方に隨ひて、結跏趺坐せり。

彼諸の菩薩次第に坐し已りて、一切の毛吼より、各十佛世界微塵數に等しき、一切の妙寶淨光明雲を出し、一一の光の中より、各十佛世界微塵數の菩薩を出し、一一の菩薩は、一切法界の方便海に一切微塵數の道を充滿せり。一一の塵の中に、十佛世界塵數の佛刹有り、一一の佛刹の中に、三世の諸佛皆悉く顯現せり。念念の中に、一一の世界に於て、各一佛刹塵數の衆生を化し、夢のごとく自在に示現するの法門を以て教化し、一切の諸天化生の法門もて教化し、一切の菩薩の行處音聲の法門もて教化し、一切の佛刹を震動して諸佛を建立するの法門もて教化し、一切の願海の法門もて教化し、一切の衆生の音辭、佛音聲に入るの法門もて教化し、一切佛法の雲雨の法門もて教化し、法界自在の

【邪定】邪定衆の略。佛道を修行せず惡魔并道の法を修する者を稱す。
【正定衆】邪定衆に對す。佛道を修行して行位を退かず必然的に佛果位に進入する者を言ふ。

【一切光明云云】此頌は千偈あり、前半は菩薩の徳を稱歎し後半は前の法門を頌讚す。
【佛子】佛弟子なり、佛の教を信行する者を總稱する言なれども今は菩薩を指して言ふ。

光明の法門も其化し、一切大衆に普く宣説して建立するの法門も亦教化す。其の如き等の一切の法門を以て、其華本所に隨ひて之を教化し、一念の頃に於て能く一切の世界の中の、各須彌山無數の如き衆生の諸の惡道の苦を滅し、各須彌山無數の如き衆生をして、賢之を離れ正定衆に立たしめ、各須彌山無數の如き衆生をして、無上道に立たしめ、各須彌山無數の如き衆生をして、一切盡すべからざる功徳の寶慧地に立たしめ、各須彌山無數の如き衆生をして、寶舍那佛の同性質の中に立たしめたり。

爾時、諸の菩薩、光明の中に、偈を以て頌して曰はく、

一切の光明は妙音を出して、諸の菩薩の具足せる行を説き

佛子の功徳悉く成滿して、一切の十方界に普遍せり

無量劫海に道を修行するは、衆生をして苦を離れしめんと欲するが故なり

自ら己の生死の苦を計らずして、佛子は普く大方便に入る

無量無邊にして餘り有ること無く、一切の大海劫を窮盡して

遍く一切の諸の法門を行じ、善く微妙の寂靜の法を説く

一切の三世佛の顯ふ所を、皆清淨に具足して滿すことを得

佛子は、諸の衆生を饒益せんとて、能く自ら其さに清淨の道を行す

皆能く諸佛の所に往詣し、清淨の法身に十方を照し

【白毫相】三十二相の一、佛の兩眉の間に、白玉の毫

(ほそげ)あり是を白毫と言ふ。清淨柔軟にして麝香の如く右に旋轉して常に光明を放つて是を白毫相と言ひ完全なる大丈夫の特相たり。

【足下の相輪】三十二相の一、佛の

御足の跡の下に網紋あり是を輪輪の文と言ひ諸法の圓滿を表すと言はる千輪輪相即ち是なり。

【彼に於て復云云】此文は事物に托して法を説く、即ち一乗教に於ける事即法の理を以てなり。

佛子の智海は邊底無く、普く諸法寂滅の相を觀す

一光明の中に無量有り、無上の大慈は思議し難く

清淨の慧眼は諸法を照す、此は是れ佛子の妙境界なり

一毛悉く諸の佛刹を受け、又能く諸の國土を震動し

能く衆生をして怖の想無からしむ、是を清淨の方便地と名く

一一の塵中の無量の身は、復無量の莊嚴刹を現じ

一念の中に於て皆悉く見る、是れ無障礙の淨法門なり

三世の有ゆる一切劫は、一念の中に於て能く悉く現じ

猶し幻化の所有無きが如し、是を諸佛の無礙法と名く

普賢の諸行は皆具足して、能く衆生をして悉く清淨ならしむ

諸の佛子は自在の法を具へ、一一の毛孔より師子吼す

爾時、世尊、一切の菩薩大衆をして、佛の無量無邊の境界自在の法門を知らしめんと欲するが故に、眉間の白毫相より一切寶色燈明雲光を放つ、一切菩薩慧光觀察照十方藏と名く。此光は遍く一切の佛刹を照し、一念の中に於て、皆悉く普く一切の法界を照し、

一切の世界に於て、一切の佛の諸の大願雲を雨らし、普賢菩薩を顯現して、大衆に示し

已りて還りて是下の相輪中に入れり。彼に於て復大蓮華有りて生じ、衆寶を以て莖と爲し、

一切の寶王を莊嚴藏と爲し、其葉は遍く一切の法界を覆ひ、一切の寶香は其莖を莊嚴し、

一切の寶王を莊嚴藏と爲し、其葉は遍く一切の法界を覆ひ、一切の寶香は其莖を莊嚴し、

一切の寶王を莊嚴藏と爲し、其葉は遍く一切の法界を覆ひ、一切の寶香は其莖を莊嚴し、

【閻浮檀金】(Jambumudra-svarna) 閻浮は樹名。檀は江又は海の義なり。即ち閻浮樹の下を流るる河より生ずる沙金を閻浮檀金と言ふ。

【法輪】法は教法の意。論は論にして四義あり。一に圓滿二に具徳(輻板等を具するが故)三に有用(摧破の用あり)四に轉轉なり。佛の教法は圓滿にして諸法を具し衆生の注安を成就し佛果に到らしむること車輪の用の如きを以て法輪と言ふ。

【如来雲】佛徳を雲に譬ふ。即ち佛は慈悲の雨を降らして衆生の火宅の苦を救ふは恰も雲の雨を降らして地上の生物を潤すが如きを以て言ふ。

閻浮檀金を以て其臺と爲せり。此衆生已りて、前來の罪愆より一大菩薩有りて出づ。行けて一切諸法勝音と曰ひ、世界無數の菩薩衆と俱に、右に眞理を遍ること無量にして、退きて蓮華臺の上に坐し、普賢の菩薩は蓮華の臺に坐せり。一切諸法勝音菩薩は、無量の法界を成就し歡喜して諸佛の境界に臨攝し、深智もて不可思議の佛海の光明に度り、悉く能く一切の佛の所に往詣せり。

爾時、一切諸法勝音菩薩、偈を以て頌して曰はく、

佛身は 諸の法界に充滿し、普く一切衆生の前に現じ
變化の器に應じて 悉く充滿するも、佛は故らに此菩提樹に處したまふ
一切の佛刹は微塵に等しく、爾所の佛は一毛孔に坐し
皆無量の菩薩衆有りて、各爲に具さに普賢の行を説きたまふ
無量の利海を一毛に處し、悉く菩提の蓮華座に坐し
一切諸の法界に圓滿して、一切の毛孔より自在に現す
爾時、師子鬘光喬迅音菩薩、偈を以て頌して曰はく、
盧舍那如来は、清淨の法輪を轉じたまひ
一切法の方便もて、如来雲普く覆ふ
十方國土の中、一切の世界海に
佛の願力は自在にして、普く現じて法輪を轉じたまふ

一切国土の中の、無量の大衆海は

言號各同じからずして、而も淨法輪を轉じたまふ

盧舍那佛の神力の故に、一切の刹の中に法輪を轉じたまひ

普賢菩薩の願の音聲は、一切の世界海に遍講す

法身は一切の刹に充滿し、普く一切諸法の雨を雨らし

法相は不生にして亦不滅なり、悉く一切諸の世間を照す

無量無數の億劫の中の、一切の佛刹の微塵道に

盧舍那佛の妙なる音聲は、具足して本行ぜし所を演説したまふ

一切の佛刹微塵數の、大光明網は十方を照し

一切の光中に普佛有りて、無上の道を以て衆生を化したまふ

法身堅固にして壞すべからず、一切諸の法界に充滿し

普く能く諸の色身を示現し、應に隨ひて諸の群生を化導したまふ

三世の無量の諸の佛刹、其中の一切諸の導師も

一切の音聲及び名字もて、普く諸の佛の力の自在なることを見しめたまふ

過去未來及び現在の、是の如き一切諸の導師も
彼聖能く一切をして、不可思議の正法輪を聞かしたまふ
此四天下の道場の上に、佛の神力を見たてまつりて、一切の菩薩の大衆雲集したるが如

【出生】 一切衆生

【爾時云云】法主
普賢菩薩の入定を
明す。

【三昧正受】三昧
は三摩地 (samadhi)
又は定と譯す。等持
は定と譯す。心
浮沈して不定なる
を靜め、定慧均等
なるを等と言ひ、
心散亂せずして能
く一境に住せしむ
るを正受と云ふ。正
受は心に受け納む
るなり。而て等持
と同意なり。今は
梵漢並に擧げて同
義を力説す。

く、一切世界海の中にも亦復是の如し。

爾時、普賢菩薩は如來の前に於て、蓮華寶の獅子の座に坐し、即ち一切如來淨藏三昧に
入りて正受し、普く一切法界の諸の如來身を照して、障礙する所無く、圓滿満足なるこ
と猶し虚空の如し。普賢菩薩、其世界に於て、三昧正受したるがごとく、盡法界虚空界に
等しき一切の佛刹にも亦復是の如し。

普賢菩薩は是三昧に入り已り、十方世界海の諸佛悉く現じたまふ。彼諸の如來各
爾めて言はく、善い哉善い哉、善男子。汝乃ち能く此三昧に入りて正受せり。是れ皆盧
舍那佛の本願力の故なり。又汝が諸佛の所に於ける清淨なる行願力の故なり。謂ゆる
一切諸佛の法輪を轉ぜしめんが故に、一切如來の智慧海を聞かしめんが故に、盡く一切
諸法の方便及び十方海を度して、悉く餘すこと無からしめんが故に、一切衆生の煩惱を除
きて清淨を得しめんが故に、能く一切諸佛の國土に到りて障礙無からしめんが故に、一
切諸佛の境界に入りて無礙ならしめんが故に、一切諸佛の普門の功徳満足せしめんが故に、
一切法の方便に入りて深く一切智を樂はしめんが故に、方便もて一切世間の法を觀察せし
めんが故に、一切衆生の諸根海を知らしめんが故に。」

爾時、一切諸佛、普賢菩薩に一切智に入る力を與へ、無量無邊の法界に入る智を與へ、
能く三世諸佛の所に詣る智を與へ、一切世界海の境界の智を與へ、無量の衆生界に入る智
を與へ、佛の甚深の法門の智を與へ、一切の不壞三昧に住する智を與へ、一切の菩薩の諸

【一身一切の世界云云】本經の思想は重重無盡にして法界圓融を説く。

即ち今の文は一身即一切の法界身たる本經根本の思想を體得せる智慧を以て定中より普賢菩薩が説法せるを叙す。

【爾時已下の頌】大衆一同普賢菩薩に説法を乞ひ、菩薩の功徳を讃歎するなり。

根海に入る智を與へ、一切衆生の語言海もて法輪を轉ずる辯辯の智を與へ、一身一切の世界に遍滿する智を與へ、一切諸佛の音聲智を與へたまへり。何を以ての故に、此三昧の法を得たるを以ての故に。爾時、十方の諸佛、各右の手を伸べて、普賢菩薩の頂を摩でたまへり。

爾時、一切の菩薩は、十方の佛、各右の手を伸べて普賢菩薩の頂を摩でたまふことを見已りて、彼諸の菩薩は一心に恭敬して普賢菩薩を觀察し、即時に同聲に偈を以て頌して曰はく、

諸佛の所に於て善法を備し、一切の大願力を満足して

清淨の妙法身を出生し、如實にして平等なること虚空に同じ

一切諸佛の國土の中に、普賢菩薩常に依住して

十方の世界を見ざることを無く、無量の功徳智慧の海なり

悉く十方一切の佛の、清淨身の行功徳海を見たてまつり

能く一一の微塵道に於て、普く皆一切の刹を出現す

一切十方の佛の世界に、無量微塵の刹の功徳に

常に普賢を見る、眞の佛子の、無量の三昧方便行なり

法身は諸の法界の、一切十方の佛國土に充滿し
遍く一切の衆生海に遊び、深妙なる清淨法に安住す

【一切の佛土云云】
此頌は所説の法を
擧げて請す。
【無量無邊云云】
此頌は大衆の聲聞
を明かして請す。

【三徳六六の智】
如来の身神通輪
口喜意輪(意(記
心輪)の三業を以
て法を説くこと即
ち三輪説法の智な

永く無量の諸の法界に廣り、
其身は周遍して虚空に満ち、廣く無量の諸佛の法を説く
一切の功德海の中より生じ、普く光明を放つこと大雲の如く
衆生の清淨行を堅固にし、微細の音もて佛の境界を説く
無量無数の大場の中に、普賢の甚深の行を修習し
無量無邊の諸の法雲は、雷震のごとく勝法界を演説す
一切の佛土の如實の性、十力を修習して淨く莊嚴し
普く一切の衆生海に入りて、應の如く巧に清淨の法を説きたまへ
無量無邊の大衆海は、一心に恭敬して普賢を觀す
無量にして深廣なる智慧の海、廣くば清淨の妙法輪を轉じたまへ
爾時、普賢菩薩、佛の神力を承け、一切の諸の世界海、一切の衆生海、法界の諸海、一
切衆生の諸樂諸根海、一切三世の諸佛海を觀察し已りて、普く普賢の大衆海に告げ言は
く、佛子、諸佛の一切世界海の成敗の清淨智は思議すべからず。一切衆生世界の現る智、
法界を觀察する智、一切如来の自在智、清淨願、轉法輪の智、力無所畏、不共法の智、
光明、普賢の智、三種もて衆生を教化する智、無量の三昧法門不壞の智、如来の
種種の自在の智、是の如き等の一切は皆思議すべからず。我當に佛の神力を承けて具足し
演説すべし。一切の衆生をして佛智海に入らしめんと欲すればなり。」

爾時、普賢菩薩、彼三昧より起ち、世界の微塵に等しき三昧より起ち、念念の中に方便智を壞せず。一切三世の三昧より起つ時、彼一切諸の菩薩衆は、一一皆世界塵數の諸の三昧、世界塵數の方便法海、方便辯海、諸行願海を得たり。此會の菩薩の得し所の功德の如く、一切の世界海、一切の如來衆海の、諸の菩薩衆の得る所の功德も亦復是の如し。

是時、一切の世界は六種に震動し、一切の衆生は安隱悦樂にして、一切の衆寶もて種種に莊嚴し、一切如來の大海の中に十種の寶王雲を雨らせり。謂ゆる、勝金色幢寶王雲、佛光明照寶王雲、金蓮華寶王雲、菩薩辯才光明寶王雲、一切妙音衆寶王雲、莊嚴佛土道場寶王雲、一切菩薩無量功德光明輪妙音寶王雲なり。

一切の如來の毛孔、及び中の光明は、偈を以て頌して曰はく、
普賢は悉く、一切の佛刹に在りて

寶蓮華の、童子座の上に坐す

是の如く示現して、一切界に遍く

普く無量、無邊の諸行に入る

悉く能く無量體の身を示現し

變化して、十方の世界に充滿し

妙音和雅にして、法を説くこと無礙

一切の三昧、方便自在なり
一切の佛土の諸の如來の所にて
一切の三昧に、皆自在を得
悉く能く、最勝の境界を了知して
普賢の、無量自在を示現せり
一切の土の、諸の如來の前の如く
一切の刹塵の、諸の世界の中にも
普賢の自在なること、亦復其の如し
盧舍那の、本願の底を盡せるが故に
普賢の身相は、猶し虚空の如く
如如に依りて、佛國に依らず
身を現すること無量にして、普く衆生に應ず
群衆の類に隨ひて、變化せんが爲の故に
一切の世界、無量の佛土は
悉く能く示現して、諸の法門に入る
普賢菩薩は、淨願を具足し
是の如きの等比、無量にして自在なり

一切の家海は、無量無邊にして、
 各佛土に於て示現して清淨なり
 是の如きの一切は、身中に悉く現じ
 共起滅に従ひて、一念を悉く知る
 爾時、普賢菩薩、大衆をして重ねて、歡喜せしめんと欲するが故に、偈を以て頌して曰く、

【衆生は惡を云云】
 已下は大衆を教誡して清淨ならしめ法を聞くに堪へしむる訓練的說法なり。
 【無上道】佛の正道のこと。菩薩修行成滿して成佛する時即ち無上道を得と謂ひ、而る時は其力に依りて世界を成ずるなり。

諸佛の深智の功德海は、無量無邊の刹に充滿し
 方便もて衆の應に見るべき所に從ひて、盧舍那佛は法輪を輪じたまふ
 不可思議の佛刹海を、無量劫に於て清淨ならしめ
 最勝の導師一切を照して、悉く能く衆生海を調伏したまふ
 衆生の大海は測るべきこと難く、諸佛の境界は不思議なり
 衆生は惡を樂み諸見に著して、無上道を了知すること能はず
 功德の法海は心を長養し、常に能く善知識に親近すれば
 恆に諸佛の爲に護念せらる、是等は能く度して上智を得
 諸の詔曲を離れて心清淨なり、廣大の慈悲は邊際無く
 深心に淨信して厭き足ること無ければ、彼是法を聞きて喜ぶこと量無し
 普賢菩薩の諸地の願に、安諦し善住して能く順行し

【去來今佛】去は過去世、來は未來世又は當來世、今は現世なり。即ち三世の佛を言ふ。【諸の佛子已下】世界成の種種を擧ぐ。一に因縁所起の世界、二に縁の世、三に衆生の共業に由る世界に菩薩修行して成佛同時に完成する佛世界等を指す【依果】依報の結果としての世界の

靈舍那佛品第二之二

心を法界に達はしむること虚空の如く、是人は乃ち佛の境界を知る一切の菩薩は善利を得て、能く自在の最勝尊を以てまゐる餘の境界の知る所に非ず、普賢の方便に皆入ることを得たるなり無量無邊の諸の衆生は、一切の如來に護念せられ一切の處に於て法輪を轉ずるは、盧舍那佛の境界の方なり一切の刹土及び諸佛とは、我が身内に在りて觀ふる所無く我が一切の毛孔の中に於て、佛の境界を現す、諸ちに觀察せよ普賢菩薩の所顯の行は、無量無邊にして悉く具足す爾時、普賢菩薩、諸の菩薩に告げて言はく、種種の事有り、去來今佛の演說したまふ所なり。謂ゆる、說世界海、起具因縁世界海、住世界海、形世界海、體世界海、莊嚴世界海、清淨世界海、如來出世世界海、劫世界海、摩方便世界海なり。諸の佛子、世界海に是の如き等の十種の事有るを首と爲し、乃至世界海には摩數の事有るなり。諸の佛子、當に知るべし、一切の世界海は世界海摩數の因縁有りて具はるが故に成る。已に成じ、今成じ、當に成すべし。謂ゆる、如來の神力の故に、法應に是の如くなるべきが故に、衆生の行業の故に、一切の菩薩、應に無上道を得べきが故に、普賢菩薩の善根の故に、菩薩の佛土を嚴淨するに願行解脱自在なるが故に、如來の無上の善根の依果

六七

【佛智云云】此頌は二十頌を以て叙す。初四頌は佛の神力に依る菩薩道の力を以て成ずる世界の善願功徳力、普賢淨の願功徳力、普賢願力等を叙す。

の故に、普賢菩薩の自在の願力の故に。是の如き等の世界海摩數の内縁具はるが故に、一切の世界海は成ずるなり。」

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

佛智の境界は、思議すべからず

自在に善住すること、悉く皆是の如し

無量無邊の、諸の世界海は

盧舍那佛、悉く能く觀淨したまふ

應の如く、一切の菩薩を化度するに

無量の願海は、皆悉く清淨なり

十方の佛土は、一切の衆生をば

不思議を以て、之を覺悟せしむ

一切の菩薩は、無量なる自在は

一切智に成る、方便の法門なり

一切の無量の、願海を出して

諸の世界を起すこと、猶し虚空の如し

普く一切の、菩薩の善行を行じて

佛の境界の、無量無邊なるに入り

悉く能く、十方の佛刹を遍淨し

一一の佛土に、無量劫に行ず

衆生の心境は、思議すべからず

業は盡く悉く、一切の雜染を起し

衆生垢穢なれば、國は清淨ならず

行業無量なれば、世界も同じからず

諸佛の刹海の、淨き莊嚴は

離垢の雜寶を、以て校飾を爲し

無垢なる、弘誓の願海を長養して

佛子能く、無數の國土を淨む

若し菩薩有りて、普賢の行を修せば

常に盡く清淨の法界に履行せん、

當に知るべし、是等の功德は佛の如く

能く無量なる、如來の刹海を出ず

一念の中に於て、悉く十方に遍じて

能く一切の、菩薩の所行を現す
甚深にして清淨なること、猶し虚空の如く

空界に等しき者は、自在なること是の如し

一切の道場の、諸の如來の前に

寶蓮華に坐して、衆の妙色を現じ

其身内に於て、一切の刹を容れ

又一念の中に、三世を示現す

巧方便に入りて、諸の刹を起し

三世の國に於て、盧舍那佛を示現す

盧舍那佛の、此土は清淨にして

衆寶の、成就し、遊戯有ること無し

爾時、普賢菩薩、諸の菩薩に告げて曰はく、佛子、一一の世界海の依住する所は、世

界深奥の眞の如し、諸の一切の莊嚴に依りて住し、或は虚空に依りて住し、或は一切寶

に依りて住し、或は佛の光に依りて住し、或は幻業に依りて住し、或は摩訶那伽金剛

与士の掌中に依りて住し、或は普賢菩薩の願力に依りて住す

是時、普賢菩薩、偈を以て唱じて曰はく、

無量無邊の佛刹海は、離垢の妙寶を以て莊嚴す

摩尼の寶玉清淨に照し、最勝の風神にて見ざる塵し

清淨の刹海は虚空に住し、寶玉の妙藏光普く照し

【摩訶那伽】(Ma
hānaga)大龍と譯
す。龍は水中に住
して其力最大なり
とせらるるが故に
今大力を表示する
爲に引く。
【無量無邊云云】
この類は世界依住
の種別を叙するな
り。即ち第一に莊
嚴の依住、次に虚
空依住、空依住、
威力依住、金剛
力士依住、其他種
種の依住を説く。

【或時】 神力と同
感不可思議
なる自在神通の力
なり。

無量の微妙の音を暢達して、他道を宣明して感ばざる時し
種種の華光は善く普照せしむ、無量種種の華光を普照し
無量の光明上に彌覆し、種種の音を普照して満満す
無量無邊の妙蓮華は、青瑠璃の寶珠以て華と爲し
清淨の國土は其の善妙なり、一切の諸佛莊嚴したまふが故に
或は諸佛の清淨土有り、佛の廣博を以て依住することを得
無垢淨の衆の妙寶を見るに、無量の菩薩悉く充滿せり
或は諸佛の清淨土有り、金剛力士の掌中に住す
十力の世雄の盧舍那は、常に一切の爲に法輪を轉じたまふ
或は寶樹平正に依りて住し、香鬘雲に依るも亦甚の如し
水輪に依りて住して堅固なる有り、或は金剛海座に依りて住し
金剛勝妙幢に住する有り、種種の寶華上に燦爛す
無量自在にして一切の處に、盧舍那佛は衆をして見しめたまふ
衆の殊異の色は長き光明は、普く一切の佛の世界に流れ
悉く種種の莊嚴華を見るに、無垢微妙にして甚だ清淨なり
彼一切の圓海力を以て、無量種種に依住する所
諸の如來雲悉く充滿して、常に清淨なる虚空に依りて住す

【天冠】一種佛に飾られたる天冠にして、天人の較く冠なり。

【一一の微塵六六】この類は重重無盡の本經の根本教誨を領して重重無盡の依住を説く。【佛子已下】世界の形狀の種別を明す。

【方圓に非ず】四角にあらず、圓にあらずる世界、餘へば三角形、八角形の如きを言ふ。【洞瀧】洞は水の窟轉する處、瀧は深くして洞る義、即ち水深くして卷き流るる貌。【衆生の形】衆生の形とは二義あり一は世界、衆生の形に仰るの義、二に衆生は即ち世界なりとなす義。

或は佛刹有り上方に處し、淨き菩薩の天冠に依りて住す。彼は無量の佛の自在を現じ、佛子の妙音は淨業の化なり。諸の法界に等しき佛の國土は、譬へば電光の如く亦幻の如し。紺琉璃の寶大廣くして清淨に、悉く離垢の淨業より起り。

普く種種の莊嚴藏を現じ、虚空に依止して靜かに安住せり。行業の境界は讓るべからず、佛は衆生をして普く見ることを得しめたまふ。

一切の處に等しき諸佛の刹は、普賢菩薩の一念に起り。無量劫に行じて衆生を化し、法界に充滿して自在を現す。

一一の微塵の中に、佛國海安住し。佛刹過く護念し、彌滿して一切を覆ふ。一微塵の中に於て、佛は自在力を現じ。

一切微塵の中に、神變することも亦是の如し。諸佛及び神力は、虛舍那の示現なり。

爾時、普賢菩薩、諸の菩薩に告げて言はく、「佛子、諸の世界海に種種の形あり。或は方、或は圓、或は方圓に非ず、或は水の洞瀧するが如く、或は復華の形の如く、或は種の衆生の形のごとき者あり。」

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

【利海云云】此類は前半前文を端頭し、後半は利土の徳目、並に明自在なることを叙す。

利海は量有ること無く、形を殊にして諸相を離れし

十方の世界海に、諸の雜種の相を見

或は圓、或は四方、或は復方圓に貫す

三維にして八隅あり、狀は摩尼寶の若し

一切諸の業海は、種種に別異なるが故に

金剛の掌が如く、莊嚴せられ坦として平正なる有り

録りたる眞金の色の、清淨なる妙形は

無量の、正法の門に入る

諸海の利海の、種種の藏は

猶し大雲の如く、虚空に懸處す

徳寶輪の地は、妙淨にして分明なり

盧舍那佛の、光明悉く照せばたり

諸佛の國土の、起るは心業に由り

無量種の形ありて、以て莊嚴せり

彼國の一切は、各各自在にして

如來の利海は、無量の相を現す
或は淨穢有りて、苦樂も同じからず

【一切處】教主盧舍那佛は法界なるを滿せる法身なるを以て處として在らざるなく、而も其功德高たなれば一切毛孔の中にも顯現し給ふ。故に一切處の盧舍那佛と言ふなり。

法常に流轉すれば、變現することも是の如く

一切の業海は、不可思議なり

一毛孔の中の、無量の佛刹は

莊嚴清淨にして、燦然として安住す

彼一切處の、盧舍那佛は

衆海の中に於て、正法を演說したまふ

一塵の内に於て、微細の國土は

一切の塵に等しく、悉く中に於て住す

一切の世界に、種種の形有り

悉く其中に於て、尊き法輪を轉す

是れ弘誓の願、自在の力にして

一一の塵の中に、一切の刹を現す

譬へば幻化の如く、亦虚空の如く

諸の心業の力の、莊嚴する所なり

一一の塵の中の、衆生數に等しき

諸の化佛雲の、神力も自在なり

微塵の中に於て、善く佛刹に住し

【或は世界海云云】
此頌は十體ありて、寶華、炎空、體、光明、電光及び顯體、日珠體、寶炎及び化、佛化體、心葉體、佛身光體、菩薩の化顯體の十を次第して頌す。

盧舍那佛の、法を現すること其の如し

爾時、普賢菩薩、諸の菩薩に告げて言はく、「佛子、諸の菩薩は法界に種種の體有り、悉く應當に知るべし。謂ゆる、一切寶莊嚴の體、或は一寶の體、或は金剛堅固の體、或は衆香の體、或は日珠輪の體なり。」

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

或は世界海有り、衆寶の合成する所

堅固にして壞すべからず、寶蓮華に安住せり

或は勝れたる光明起り、清淨の暉焰もて照せる

衆の妙莊嚴の刹は、虚空に依止して住せり

或は光明の刹有り、光明に依止して住し

光明雲もて、諸の菩薩の宮殿を莊嚴せり

或は佛刹海有り、猶し電光の如くにして住し

言もて取るも得べからず、斯れ願力に由りて起ればなり

或は摩尼寶有り、日の光明藏に照され

眞珠の輪地を貫き、菩薩悉く充滿せり

或は寶刹の刹有り、光明雲もて蔭覆し

一切の寶もて莊嚴し、悉く皆變化有り

或は衆相の體有り、微妙の相もて莊嚴し

間錯して寶冠を雜ふ、一切の佛の化したまふ所なり

心海の業の起す所の、國土は樂に隨ひて住す

喻へば幻の無方なるが如く、皆妄想より生ず

如來身の光明は、摩尼の刹に安住して

正覺の雲彌覆し、一切の佛自在なり

或は普賢菩薩、佛の刹海を化現し

一切の寶もて校飾す、願力の莊嚴する所なり

爾時、普賢菩薩、諸の菩薩に告げて言はく、佛子、諸の世界海に、世界海微塵に等

しき莊嚴有り、悉く應當に知るべし、謂ゆる、一切の境界の種種雲の莊嚴、一切世界の

衆生の行業の莊嚴、三世諸佛、及び普賢菩薩の願力の莊嚴なり、是の如き等の世界海微塵

數の莊嚴有り。

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

世界海の微塵に等しき如き、不可思議の業の果報なる

一切十方の世界海は、種種に嚴淨せられ、廣きこと無邊なり

無量の淨色もて普く莊嚴し、上妙の功德常に充滿し

雜光明の雲より梵音を出し、一切諸佛の刹に間妙

菩薩の無量の功德海の、妙第一の刹に遍満し

諸の誓願の雲は莊嚴を具して、聲は十方の世界海に震ふ

衆生の業海は廣くして際無く、淨き莊嚴の雲は妙音を出す

業報は實の如く應に隨ひて變ずるも、諸佛の力の故に悉く周滿せり

一切三世の諸の如來は、自在に普く無量の刹に現じ

一一の境界の一切の佛は、刹海を莊嚴して皆悉く見はる

過去未來現在劫の、一切十方の諸の世界は

無量劫に於て淨く莊嚴せられ、一一の佛刹は皆悉く見はる

一切境界の諸佛の雲は、數衆生に等しくして十方に滿ち

佛の自在なる行は衆をして知らしむ、是を如來の莊嚴刹と謂ふ

業香、焰流、及び華流、一切の衆寶、摩尼の流

種種衆の妙莊嚴の雲は、皆悉く諸佛の刹を裝飾せり

十方世界の諸の道場は、一切の衆具もて妙に莊嚴し

此刹海を觀見せざる際し、猶し空中に電光の現はるるが如し

普賢菩薩は、佛子等よ、悉く能く諸佛の刹を莊嚴し

衆生に等しき劫に行海を淨め、此世界に於て悉く顯現せり
爾時、普賢菩薩、諸の菩薩に告げて言はく、佛子、當に知るべし、諸の世界海に世界

數の清淨有り。謂ゆる菩薩は善知識に親近し、諸の善根を成就し等しく一切の衆生を利し一切の波羅蜜を淨滿し一切の行地に安住す。是の如き等の世界摩訶數の清淨有り。

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

一切の佛刹の諸の莊嚴は、無數の願海の方便より生じ

一切の佛刹の清淨の色は、無量の行海に修習する所なり

久遠より善知識に親近し、一切の淨妙なる諸の業行より

慈悲普く流れて衆生を潤ほす、是故に佛刹海を清淨にす

一切の法門、三昧の地は、一切の佛の所にて徳海を淨めたる

禪門方便の清淨の地なり、是故に佛刹海を嚴淨す

能く無量の清淨心を起し、佛を信すること堅固にして壞るべからず

忍の方便は淨く無垢なるを以て、刹海を莊嚴して微妙の色あり

功徳雲を興して虚空に滿ち、一切を利益せんとて淨行を修し

衆生普く無量の徳を獲、是故に佛刹海を嚴淨す

刹海は方便と等しく無量なるも、悉く諸度を淨めて餘り有ること無く

無盡の願波羅蜜を修す、是故に佛刹海を嚴淨す

幻化の行の起ること量有る無く、一切諸法は廣くして清淨に

種種の方便もて衆生を淨め、是樂しむべき佛刹海を起す

【善知識】佛の正法を信行し、説法して人を正道に導き解脱を得しむる聖者上人を云ふ。【親近】親み近くなり。即ち善知識たる上人の許に聽門に參ずるを言ふ。

【願波羅蜜】十波羅蜜の一にして、上は佛果菩提を願求し、下は一切衆生を教化救済せんと願する自利利他の大願なり。

【福田】 佛を供養すれば無量の福德を生ずること、田地の穀物を生ずるが如くなるが故に福田と言ふ、如来又は比丘を指して言ふ、八福田、三福田等あり。

方便して一切地を蠶淨し、諸佛の功德海を具足して

諸の衆生をして苦の源を竭きしむ、是故に佛刹土を蠶淨す

淨力海を修して與等無く、能く一切衆生の根を淨くし

無量の佛を恭敬し供養したてまつる。是故に佛刹土を蠶淨す

爾時、普賢菩薩、諸の菩薩に告げて言はく、佛子、當に知るべし、一一の世界海に、

世界海無數の諸佛有りて、世に出興したまふ。謂ゆる、佛有りて世に興りたまひ、色身を

示現して法界に遍滿するに、或は短壽有り、或は無量劫なるあり。是の如く一一の世界海

に、世界海無數の佛有りて世に出興したまふ。

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

佛は無量の方便門を以て、能く一切の佛刹土を起し

衆生の欲樂する所に隨順して、諸佛法王世に出興したまふ

如来の法身は不思議なり、無色無相にして倫匹無く

色身を示現して衆生の爲にし、十方化を受けて見たてまつらざる際し

或は衆生の爲に短命なるを現じ、或は長壽にして無量劫なるを現じ

法身多門にして十方に現じ、常に世間の良福田と爲りたまふ

或は能く不思議なる、十方刹土をして、悉く清淨ならしめたまふあり

或は能く一刹土を淨めたまふあり、是れ彼の方便願より生ずる所なり

【乘】乘は運載の義。佛の教法は衆生の機根に應じて各彼岸に達せしむるが故に乘と名くる衆生の機根萬差なるを以て佛の教法も其數無量なり。故に不可思議乗と言ふなり。

【一乘】具さには一佛乘と言ひ、眞實の教法にして一切衆生を悉く同一佛果に赴かしむる教を言ふ。

【爾時普賢菩薩】已下は廣く蓮華藏世界に就いて細釋し、殊に方便世界に及ぶ。

或は不可思議なる乘を説きたまひて、佛普く示現して樂ふ所に隨ひ

或は如來の一乘を説きたまふあり、是れ佛の方便に量有ること無ければなり

自然に師無くして正覺を得、或は少しの衆生を濟度したまふあり

或は能く一念の中に於て、無量の衆生海を化度したまふあり

或は一毛吼の中に於て、化佛の雲出でて不思議に

一切の十方界に充滿し、無量の方便もて衆生を化したまふあり

或は佛の音聲十方に震ひ、諸の衆生の欲樂する所に隨ひ

無量億劫にも斷絶せず、衆生海を度したまひて遷あること無し

或は無量の莊嚴有りて、清淨の大衆に圍遶せられて坐し

一切の世界海に充滿したまひ、佛遍く衆に處したまふこと空の雲の如し

是佛の方便は不思議にして、慈海充滿して一切に遍く

諸の莊嚴方便門に入りて、悉く一切衆生の前に現じたまふ

爾時、普賢菩薩、諸の菩薩に告げて言はく、佛子、當に知るべし、世界海に世界微塵

に等しき劫有りて住す。謂ゆる佛利海は、或は數ふべからざる劫に住し、或は數ふべき劫

に住す、是の如き等の世界海に微塵數の劫有りて住す。

爾時、普賢菩薩、分別し開示せんと欲するが故に、一切の衆に告げて言はく、諸の佛

子、當に知るべし、此蓮華藏世界海は、是れ盧舍那佛、本菩薩の行を修せし時、阿僧祇の

【願行】願は成佛に得ふ大願。行はその願成就の條件としての修行。

【佛子】汝よと云ふが如く、呼びかけの言葉。この一段は本世界の莊嚴相中、初の風水華地の根本所依を明す。

【風輪】五輪の佛教の世界構造に於ては地水火風空の五輪、層をなすと云ふ。今この風輪の世界構成の功徳力に寄せて即ち無碍の義、有力の義あるを以て縁起を成ずることを明す。

【一切の有】一般的には欲、色、無色の三界を云ふ。今は寶地上の諸種の莊嚴を總括的に一切有と言ふ。

【香水海】香は普重、芬馥の義として五部の徳を具し水は清淨、洗濯の義、海は深廣、具

世界に於て微塵數劫に嚴淨したまひし所なり。一一の劫に於て、世界の微塵に等しき如來を恭敬し、供養したてまつり、一一の佛の所に於て、世界海微塵數の願行を淨修したまひしなり。佛子、當に知るべし、須彌山の微塵に等しき風輪有りて、此蓮華藏莊嚴世界を持せり。最下の風輪を名けて平等と曰ふ。彼は一切の寶光明地を持す。次上の風輪を種種の寶莊嚴と名け、清淨光寶地を持す。次上の風輪を功徳勢と名け、密寶地を持す。次上の寶莊嚴を名けて寶焰と曰ひ、日不壞寶地を持す。次上の風輪を普莊嚴と名け、具足寶光明地を持す。次上の風輪を離垢清淨平等と名け、寶華焰地を持す。次上の風輪を名けて方行と曰ひ、一切の眞珠地を持す。次上の風輪を一切年と名け、一切の時、一日、半月、一月、一年を持す。次上の風輪を普持勢と名け、一切の須彌山地を持す。次上の風輪を莊嚴光明と名け、能く一切の有を持す。是の如くして次上に須彌山微塵に等しき風輪有り、最上の風輪を勝藏と名け、一切の香水海を持す。彼香水海の中に、大蓮華有り、香輪光明莊嚴と名け、此蓮華藏莊嚴世界海を持す。此世界海の邊に金剛山有りて、周匝し圍繞せり。爾時、普賢菩薩偈を以て宣して曰はく、

此蓮華藏莊嚴世界海に於て
一切の妙寶藏、種種の淨き光明あり

一切の微塵に等しき、過去佛の住したまひし所にして
昔諸の有海に於て、垢を離れ悉く清淨なりき

徳の義ありとせらる。而て須彌山説に依れば四洲を圍む大洋を香水海と稱せり。

【蓮華】この華に四義を合著せしむ。一に泥中に汚されざるを法界眞如に譬へ、二に自然に開發するを眞如の自性開發と衆生の自性開發に譬へ、三に菩薩探蜜を眞如衆聖の爲に用ひらるるに譬へ、四に香、味、柔軟、可愛を眞如の常樂我常の四徳に譬ふ。

【香幢】香は眞如の普熏の義、幢は獨出、降伏の義にして蓮華の泥中より獨出して汚れず普重覆覆たるに譬ふ。

【蓮華藏莊嚴世界海】如來願力の感ずる所の大蓮華は淨土の依止と爲るが故に蓮華藏世界と言ふ。其構造は前註に略述せり。

【蓮華藏莊嚴世界海】如來願力の感ずる所の大蓮華は淨土の依止と爲るが故に蓮華藏世界と言ふ。其構造は前註に略述せり。

無量の大悲の雲は、諸の衆生に充滿して

自己の身を捨離すること、佛刹の摩訶の如し

無量の行海に於て、常に修して清淨ならしめたり

是故に蓮華藏世界海は莊嚴なり

一切の虚空界に、光明遍く充滿し

安住して動かすべからず、勝れたる風輪常に持せり

一切の寶もて莊嚴し、妙風常に流行し

盧舍那の曠き願は、國土をして嚴淨ならしめたり

如意的寶遍く布き、種種の妙華敷き

本願力を以ての故に、虚空に處在せり

堅固に善く安住し、一切の寶もて莊嚴し

十方の一切界は、清淨の光雲を放てり

諸の摩尼寶の中の、無量の菩薩雲は

遍く十方の國に遊び、光明極めて熾盛なり

寶華の盛妙なる色もて、莊嚴せる光明輪は

諸の法界に充滿し、十方遍からざる摩し

一切衆の淨寶は、悉く光明雲を放ちて

具徳の三義あり。
【本願力】佛道精進の行者即ち菩薩が成佛の前(因位)に於て、起したる誓願力を言ふ。果(成佛)上の莊嚴功德は皆、因位の本願力によりて成就する所なり。
【堅固云云】この頌は總じて十三個よりなり、世界の勝用と利益とを頌す。就中、初六偈は依報、後七偈は正報を明す。

【顛倒】無明煩惱の一種なり。眞理に違背せる迷惑なり。佛教にては常樂我淨の凡夫見を四顛倒と言ふ。

十方の諸の世界に、一切皆充滿せり
一切の苦を滅除して、無上道を安立し
妙色悉く普く、一切の世界海を照せり
此蓮華藏世界海の内に於て
一切の微塵の中に、一切の法界を見る
一切の諸佛雲、寶の光明を放ちて照し
是盧舍那の説には、無量の自在有り
一切の衆生に等しき、蓮華の中の諸佛は
種種無量なる、自在變化の雲を興したまへり
釋梵諸天の衆、及び天輪聖王と
一切衆生の類とは、皆悉く安住するを得たり
變化して光明を放ち、悉く法界と等しき
一切の光明の中より、諸佛の妙音を出す
諸の衆生の心の、念ふ所を知りて餘り行ること無く
無數の方便門もて、群生の類を調伏す
一切の顛倒を離れて、常に寂靜に住し
無量の光明雲は、悉く法界と等し

【金剛圍山】 鐵圍山の事、或は七金山の異稱とし、亦須彌山の事も斯く云ふことあり

【一切の世界海】 この頃は十須より成り、初六は勝に衆徳を具することを明し、後四傷は妙用自在なることを明す、法界説法の相なり

【蓮華】 蓮華、輪圍等と譯す、前法金剛圍山なり、摩訶にして破るべからざる鐵圍にして、世界を圍めり

【梅檀】 (Santal) 熱帯地特産の香木なり、白、黄、紫の三種ありて木質堅牢にして清香を有す、葉中白檀最も貴せられ紫之に次ぐ、此れ香木多く印度に産す

普賢の行する所の智と、無上なる勝妙の地とは光の莊嚴の中に於て、皆悉く具足して聞けり
 佛子、當に知るべし、此蓮華藏世界海の、金剛圍山は蓮華日寶王地に依りて住せり、彼一切の香水海有り、一切の衆寶遍く其地に布き、金剛の厚地にして破壊すべからず、一切の衆寶を出し、又能く明かに一切の世界を照せり。

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

一切の世界海に、無量の莊嚴有り
 寶輪に無邊の色有り、如來の神力より起る
 研迦羅を莊嚴し、法輪及び香輪あり

眞珠輪に依住し、及び種種の法に依る
 堅固の法もて莊嚴したる、閻浮檀の淨藏は
 香光十方に満ちて、研迦羅を照現せり

持するに堅固なる金剛寶を以てす、金剛の莊嚴は壞すべからず
 種種の衆寶相莊嚴し、一身の清淨法を莊嚴す
 香水普く無量の色を流し、散華、摩尼、梅檀香あり

天衣遍く覆ひ、華もて莊嚴し、衆寶、香華、熏ずること無量なり
 清淨の法樹の雲もて莊嚴し、普く能く一切身を照明し

るを以て梵名を用ひ、檀香、黃檀とも稱せらる。而して神聖なる樹木とせらるるを以て佛像彫材にせらる。【幡蓋】幡は旗の一種なり。蓋は天蓋にして、方圓、圓形をなし、周圍に輪環を垂れたる莊嚴具なり。

光明の妙雲、悉く具足し、樹下に安坐して照さざる磨し

種種の華香及び幡蓋もて、一切の善法は法界に充ち

能く一切の語言海を説く、是れ盧舍那の轉法輪なり

彼處に、悉く珍寶の幢有り、一切の寶樹光明を出す

盧舍那佛の身清淨にして、彼莊嚴の内の一切に見る

諸の莊嚴の中に無數の身あり、如來の變化したまふ色は無量にして

一切の十方界に充滿し、衆生を調伏して限量無し

一切の莊嚴より妙聲を出す、盧舍那佛の所願の輪にして

其清淨なる佛刹海に隨つて、佛の自在力にて皆悉く聞く

彼大陀迦羅山の内の世界海の中に、破壞すべからざる摩尼寶王有り、一切衆生の身を映

現し、衆寶の蓮華を以て莊嚴と爲し、大地の一切の莊嚴せる妙雲は皆悉く充滿し、一切

の妙香を以て之に重じ、三世の佛刹の莊嚴を以て之を莊嚴せり

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

其地は平正にして淨く圓滿に、新迦羅の内は壞すべからず

平等に安住して甚だ清淨に、種種の雜寶もて莊嚴し

金剛の寶地悅樂すべく、寶輪の羅網上に彌覆せり

種種の寶華を莊嚴と爲し、種種の寶衣、珍妙の輪は

【瓔珞】莊嚴具の一、頭、頸等に掛けたる寶珠の飾なり。

隨次に遍く一切地に布き、菩薩の天冠、寶の瓔珞は
 離垢莊嚴の光明に照され、妙香、碎寶、悉く充滿す
 光明は、衆の寶華もて莊嚴し、普く一切に放ちて十方に滿ち
 寶華は普く一切地を覆ひ、悉く能く佛の功德を長養せり
 一切雲を興して虛空に滿ち、光明普く照して盡すべからず
 光明は悉く一切の刹に滿ち、具さに佛法の甘露味を説く
 悉く一切の佛の所願に入り、常に能く廣く三世の法を見
 隨順せる菩薩大士の行を、此大地に於て皆悉く見る
 此清淨地は寶もて莊嚴し、一切の佛刹悉く來りて入り
 其地の一一の微塵の中に、一切の佛刹亦悉く入る
 衆寶妙華の莊嚴藏に、十方の菩薩常に往來し
 常に菩薩の一切願と、及び諸の菩薩の自在の徳とを聞く
 寶の光明、相莊嚴する有り、離垢嚴淨にして光明を出し
 一切諸佛の法を示現して、法界に充滿すること虚空の如し
 普賢の所願を得る者有らば、諸佛の境界、無量の智ありて
 彼無量の勝れたる自在を得、能く無邊の佛刹海に入らん
 彼大地の處に、不可説の佛刹微塵に等しき香水海有り。衆寶もて莊嚴し、一切の香、摩

【階道】階道ある通路なり。佛の正法に入る階梯を表す。

【欄楯】楯は亦是縁側等のてすりを言ふ。外道の衆來を防ぎ、内道の散失をすることを表示す。

【恆沙】恆河（ガングス河）の沙の度の大河たる恆河は無量にして不可計なるを佛教にては無量の譬喩に用ふるなり。

【大千世界】四大洲と日月と須彌と欲天と梵世との各一千なるを小千世界、其千倍を中千世界、中千倍を大千世界と云ふ。即ち百億の日月百億の須彌山、百億の四大下、百億の六欲天、百億の初禪天、百億の二禪天、一千の三禪天を含む。

尼寶王を以て其岸と爲し、寶王の寶冠を其上に稱護し、衆の寶色の水其中に留滯し、一切の衆華皆悉く開敷し、細末旃檀を以て其水に熏じ、常に船來の妙香を出して絶たず。衆香次第に普く十方に熏じ、雜寶の階道、眞珠の欄楯あり。衆寶の湖浪は妙なる音響を出し、恆沙の佛刹の微塵數に等しき寶華の樓閣は、周匝し圍遶して、無量の佛刹の微塵に等しき衆の寶華の城は以て其外に周らし、十大千世界微塵數の華あり、一一の蓮華は各十由旬に、開敷し鮮茂して遍く水上に布けり。其香は普く一切の世界に熏じ、十佛國土の微塵數の香樹を以て莊嚴と爲せり。

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

彼嚴淨せる大地の處に於て、香水の寶海もて莊嚴し
 清淨の寶地常に安住し、金剛のごとく堅固にして壞すべからず
 衆香の寶王を以て岸と爲し、寶雲の光明は日の照すが如く
 眞珠の寶華と妙なる瓔珞とは、離垢清淨にして普く莊嚴す
 清淨の香水は湛然として満ち、衆の寶華の光は旋流を爲し
 妙聲悅樂にして常に斷えず、自在の普く佛の世界に聞ひ
 衆珍校飾して階道を淨め、寶もて莊嚴せる地は安くして勤せず
 眞珠の妙寶を欄楯と爲して、光明の寶華は悅樂すべし
 寶樹紺び生じて道の側に縁どり、摩尼寶の樂は煥として明耀に

【旋流】旋は旋轉するなり、うづまきて流るるかたちを云ふ。

【衆珍】諸種の珍寶。

【樂】樂器の略。

【三寶】佛、法、僧の三なり。結局は佛の一に歸す。

佛敎の三位一體にして佛敎徒の歸命崇拝の的なり。細說すれば大乘の三寶、小乘の三寶、同體の三寶、別體の三寶、住持の三寶を説く。

【分陀利華】(Pine) 白蓮華と譯す。又人中好華希有華、人中上華、祭華とも云ふ。

白色の花を咲く蓮華にして佛徒の最も尊重する花なり。

【離垢清淨已下】

この頌は總じて十湯より成り、香水河の徳相及び其妙用とを明す。

無量の和雅の聲を演出し、莊嚴せる淨音は三寶を歡ず香水柔軟にして湛然として満ち、分陀利華は遍く陶適し一切の香華は光明を出し、清淨に具足して莊嚴す寶幢の中に於て光明有り、寶の旗幡を垂れて莊嚴し摩尼の寶網は妙聲を出し、聞く者は能く一切智に入る衆寶の華城は甚だ微妙にして、無量の寶色の淨き光明は十方の世海を照さざる靡く、一切具足して光もて嚴飾す垣牆は周匝し圍遶して、種種の雜寶を莊嚴と爲し清淨の寶焰相任持し、具足して寶香の海を莊嚴す盧舍那佛の過去の行は、佛の刹海をして甚だ清淨ならしめ無數無量にして過際無く、彼處には一切自在に轉ず

一一の香水海に、四天下の微塵數の香水河有りて陶適し、種種の寶華其上に彌復せり。諸の香水の河は、佛の周間の白毫相より出で、摩尼寶王は、上に汎ぎて流に隨へり。爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

離垢清淨の香水の流は、金剛の寶華悉く彌復し

衆の寶輪の地には金沙を布き、無量の珍琦もて普く莊嚴せり淨妙の階道は七寶より成り、諸の欄楯の上に蓮華を植ゑ

【華蓋】種種の花を以て造れる天蓋にして莊嚴具なり

【扣摩】網にちりばめし寶珠が互に相觸れて打合ひ、妙音を發するなり

眞珠の寶華は常に敷き榮え、蓮華の臺を離けて莊嚴と爲す一切の寶光には微妙の色あり、清淨の香水には雜寶流れ種種の寶華を波瀾と爲し、衆音流注にして佛の響を演ぶ梅檀の寶末は清流に和し、無量の寶寶は澗澗を爲し普く種種の香と、光焰とを出し、常に一切の十方界に流る一切の香河は無量なる、雜種妙勝の諸の珍寶を出し衆寶積集して華蓋を爲し、光明普く香水の河を照す十方無量の世界の中の、佛の光明は寶王を照見し如來の道場の寶輪地には、衆寶の香河の盈流滿つ諸寶の羅網は相扣摩し、佛の音聲を演べて常に絶たず一切の菩薩諸佛の法は、普賢大士の修行する所なり諸佛世尊の願の音聲は、彼寶岸に於て常に聞くことを得一切如來の過去の行は、皆悉く遍く十方の國に聞ゆ一切香河の諸の旋流は、一切の菩薩の功德雲にして漸漸に諸の法界に盈滿し、一切の刹を見るに至らざる無し彼諸の一切の香水河には、淨き寶王雲、上に彌覆し佛の白毫相より寶王を出し、其光の明耀なること如來に等し

大方廣佛華嚴經 卷第四

東晋天竺三藏佛跋陀羅譯

盧舍那佛品第二之二

【妙寶樹】樹は衆徳を建立する義あるを以て莊嚴具となる

【盧舍那已下】この頌は二佛より成り、初佛は果行の自在なること、後佛は因行の所起を頌す

【化莊嚴身】種種に莊嚴せられたる化佛身の意

【記】記別の略。佛が佛道修行者の未來の證果を一區別して豫言し給ふこと

彼香河の中間は一切平正にして、諸の妙寶樹を以て莊嚴と爲し、種種の寶幢其上に彌覆せり。一切の菩薩の願力の起す所にして、佛に護念せられ、三世の莊嚴も之を莊嚴せり。

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

盧舍那佛は十方に遍くして、一切の化莊嚴身を出すも

彼亦來らず亦去らず、佛の願力の故に皆悉く見たてまつる

一切の佛刹微塵の中の、無量の佛子は諸の行を修し

悉く清淨の國土の記を受け、嚴淨の刹を見るに本行に稱へり

「佛子、當に知るべし、此蓮華藏世界海の中の、一一の境界に、世界海微塵數の清淨なる莊嚴有り。

諸の佛子、此香水海の上に、不可説の佛刹微塵數の世界性有りて住す。或は世界性有

【本行】 本願を立てて、其面成就の爲になす修行。
【世界性】 性は積衆の義にして、無量の世界を積集して一世界性を成ずるなり。

【摩訶已下】 十頌よりなり、初二偈は依止の形狀を明し、次の三偈は色聲莊嚴、總徳圓滿を説き、次の三偈は諸刹土の諸人無碍の妙用を、最後の一偈は三世間自在を説きて攝化の妙用を頌す。
【摩訶解脫】 煩惱の根を断れ、繫縛を解き、生死の苦を脱する義。

りて蓮華の上に住し、或は無量の色の蓮華の上に在りて住し、或は眞珠の寶に依りて住し、或は諸の寶に依りて住し、或は種種の衆生身に依りて住し、或は佛の摩尼寶王に依りて住し、或は須彌山の形、或は河の形、或は轉ずる形、或は旋流の形、或は輪の形、或は樹の形、或は樓觀の形、或は雲の形、或は洞の形あり。」
爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、

堅固清淨の諸佛の刹は、離垢解脫の光明藏にして
摩尼の寶海に依止して住し、或は香海に依止して住する有り
或は種種の方便に依りて住し、或は莊嚴の衆色に依りて住し
或は復須彌、樹、間の形あり、種種の寶門の佛刹に住す
或は光明の身、諸の華藏あり、寶雲普く淨き光明を放ち
光明は勝れたる世界に充滿し、寶地の海藏壞すべからず
或は淨き佛刹、無量の色、光明焰雲、衆の色等あり
或は妙音の諸の世界有り、自然の常音は不思議なり
無數の願樂、種種の身、自在の行雲、音聲の身
衆生の無量の德音の身、最勝の一切德音の身あり
種種の門より諸の佛刹に入り、漸に無盡の不思議に至る
無数の一切は十方に滿ち、無盡の無量は普く自在なり

【弘誓の願海】佛は大慈悲を以て心と、以て弘く一切衆生を濟度し、共に佛果菩提に到らんとの誓願を建て給ふ。是を四弘誓願と言ふ。この深遠にして無邊なる大慈悲の誓願を海に譬へて弘誓の願海と言ふ。

一切諸方は如來の刹なり、廣大の方便もて佛界に入り

十方の刹漸次に至るを見るも、國土は増せず亦減せず

一の國土を以て十方に滿ち、十方一に入りて亦餘すこと無し

世界の本相も亦壞せず、比無き功德の故に能く剛なり

一切の佛刹の微塵の中に、盧舍那の自在力を見たてまつり

弘誓の願海に音聲を震ひ、一切衆生の怨を調伏す

佛身は一切の刹に充滿し、無數の菩薩も亦是の如く衆生を教化して量有ること無く、佛自在を現じて倫匹無し

爾時、普賢菩薩、諸の菩薩に告げて言はく、佛子、彼衆の香水海の中に、一の香水海有り、衆光明と名け、一切の香、摩尼寶王もて莊嚴せる蓮華有り。上に世界有り、清淨寶網光明と名け、佛を離垢淨眼、廣人と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹塵數の世界を過ぎて、佛國有り、離香蓮華勝妙莊嚴と名け、寶網に依りて住し、形は師子の座の如く、佛を師子座光明勝照と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹塵數の世界を過ぎて、佛國有り、寶莊嚴普光明と名け、諸華に依りて住し、形は日輪雲の如く、佛を廣大光明智勝と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹塵數の世界を過ぎて、佛國有り、雜光蓮華と名け、佛を金剛光明普精進普起と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹塵數の世界を過ぎて、佛國有り、無畏嚴淨と名け、佛を、平等莊嚴妙音轉王と號けたてまつ

【那羅延】(ニギハヤク)人本生、堅固力士等と譯す。天の力士にして其力量は大象の七十倍なりと言ける。

る。彼世界の上に、佛刹摩訶の世界を過ぎて、佛國有り、華閻淨瑠と名け、佛を、愛海功德稱王と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹摩訶の世界を過ぎて、佛國有り、總持と名け、佛を、淨智慧海と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹摩訶の世界を過ぎて、佛國有り、解脫聲と名け、佛を善相幢と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹摩訶の世界を過ぎて、佛國有り、勝起と名け、佛を、蓮華藏光と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹摩訶の世界を過ぎて、佛國有り、善住金剛不可破壞と名け、佛を、鞞羅延不可破壞と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹摩訶の世界を過ぎて、佛國有り、華林赤蓮華と名け、佛を寶華嚴智王と號けたてまつる。彼世界の上に、佛刹摩訶の世界を過ぎて、佛國有り、淨光勝電如來藏と名け、佛を、能起一切所願功德と號けたてまつる。彼世界の上に、香水海あり、淨光焰起と名け、中に世界性有り、善住と名く。次上に、復香水海有り、金剛眼光明と名け、中に世界性有り、法界等起と名く。次上に、復香水海有り、蓮華平等と名け、中に世界性有り、出十方化身と名く。次上に、復香水海有り、寶地莊嚴光明と名け、中に世界性有り、寶枝莊嚴と名く。次上に、復香水海有り、化香焰と名け、中に世界性有り、清淨化と名く。次上に、復香水海有り、寶幢と名け、中に世界性有り、佛護念と名く。次上に、復世界性有り、衆色普光と名く。是の如くして、次上に世界摩訶の香水海、及び世界性有り。一方の如く十方も亦是の如し。盧舍那佛の常に法輪を轉じたまふ處なり。

【法界不可壞已下】この頌は總じて七十偈ありて、十二佛國七世界性に通じて十世界海の義あることを明す。

【戸羅】(Sita)戒又は清涼と譯すも今は首羅又は試羅(シロ)と同義に用ひしものにて、小寶璧玉等と譯し、玉を以て幢となせるを云ふ。【不思議已下】此偈已下は十海を頌す。就中初十一偈

爾時、普賢菩薩、偈を以て頌して曰はく、
 法界不可壞の、蓮華世界海は
 垢を離れ廣く莊嚴せられて、虚空に安住せり
 此世界海の中の、刹性は思議し難く
 善く住して雜亂せず、各各悉く自在なり
 平正に住して莊嚴し、種種の色に依りて住し
 如來の世界海は、佛刹の相と隨順せり
 種種の身、音聲と、一切の佛の自在とは
 普く諸の世界を見るに、種種の業もて莊嚴せり
 須彌山城の網、水旋、輪、圓の形
 清淨色の蓮華、彼彼悉く圍遶せり
 戸羅幢、盆の形、隨順轉色の形
 是の如く思議し難きは、諸佛の國土の形なり
 不思議の世界は、蓮華に依止して住し
 大光明網に於て、普く一切を照す
 一一の如來の刹は、諸の光明網を放ちて
 一切の佛國を照し、十方海に充滿す

は因縁を以て生起する世界海を頌す。特に神力因、業種因、幻業因、心畫因、妄想因、心行因の七因縁を明して世界海の起る理山を説けり。

【大仙】佛の別稱なり。佛は凡俗を離るること仙人の如く、而もその最勝なるを以ての故に大仙と稱呼す。

一切諸佛の刹は、一切の塔刹門にて

一切の方便もて入り、皆悉く無量なるを見る

不思議の佛刹は、壞せず、盡すべからず

無量にして淨く莊嚴せるは、大仙の威神力なり

彼如来刹の頂の、不思議の世界は

滅はば或は敗るる有るも、不生にして亦不滅なり

譬へば諸の樹林の、華葉或は生落するが如く

是の如く諸の佛刹の、成敗も亦復然なり

種種の樹に依りて、種種の果の生ずること有るが如く

是の如く種種の刹にも、種種の衆生有り

種子差別するが故に、果實の生ずることも同じからず

行業皆下なるが故に、佛刹も種種に異なる

譬へば如意寶珠の、意に隨つて衆色を現するがごとし

諸の妄想を除くが故に、悉く清淨の刹を見る

譬へば空中の雲は、龍王の力にて能く現するが如く

是の如く佛の願力にて、一切の佛刹は起るなり

譬し工なる幻師の、能く種種の業を現するが如く

【無量の眞珠の華
じ下】この二偈は
莊嚴世界を頌す。

【或は佛刹地已下】
この四偈は清淨世
界海を頌す。

是の如く衆生の業にて、佛刹は不思議となる

彩畫の像を見て、是れ畫師の造なりと知るが如く

是の如く佛刹を見るに、心の畫師の成す所なり

衆生の心同じからざれば、随つて諸の妄想を起す

是の如く諸佛の刹も、一切皆化の如し

猶し導師の、種種無量の色を見るが如く

衆生の心行に随つて、佛刹を見るも亦然なり

無量の眞珠の華は、悉く諸の佛刹を覆ひ

色の現すること各同じからず、離垢莊嚴せられて現す

彼蓮華網の中に、佛刹網依住し

種種に妙莊嚴して、衆生の所依の處となる

或は佛刹地有り、垢穢にして不正ならず

衆生の煩惱の故に、是の如きの佛刹を起す

清淨と、不清淨とありて、佛刹は不思議なり

衆生の希望より起り、菩薩の持する所なり

清淨、不清淨の、無量の諸の佛刹は
業海の内縁より起り、菩薩の化する所なり

【一佛国土の中已下】この四偈は壞方便世界海を頌す

【或は佛已下】壞の義にして、佛教世界圖説に依れば其壞生より破滅に至る間を成住壞空の四劫に分つて今劫は其中の成劫と壞劫とを指するなり

【或は佛已下】此二十偈は體世界海を頌す中に於いて初六偈は純染苦、次四偈は雜苦樂、後十偈は純淨樂の義を明す。

或は清淨の光を放ち、垢を離れたる衆の寶飾あり
種種に妙莊嚴して、諸佛は清淨ならしむ

一佛国土の中の、火災は議さべからず
不清淨なるを示現して、而も刹は常に堅固なり

或は風輪に依りて住し、或は復水輪に依り
無量の刹の成敗するは、衆生の行業の故なり

無量の佛刹を見るに、或は破り或は敗るる有るも
彼も亦成する有ること無く、亦復敗るる有ること無し

一一の念の中に於て、無量の佛刹起る
諸佛の持する所なるが故に、國は清淨にして垢を離る

或は利有りて起り、泥土にしき清淨ならす
明を照れて常に闇冥なり、罪ある衆生の住する所なり

或は泥土の利有り、煩惱にて大いに恐怖し
衆少く憂苦多し、薄福の處る所なり

或は鐵の世界有り、或は赤銅の國あり
諸の石山ありて穢惡なり、衆生の業の故に起る

或は泥土の利有り、衆生常に苦惱し

【閻羅王】 閻魔羅

闍 (Yamraja) の

略通俗に閻魔大

王と稱し、雙世、

遮止等と譯し、十

王の一にして地獄

の王とせらるゝ元

來は吠陀神話より

出で人類最初の死

者にして死神とな

りて冥界の支配者

となりし兄妹二人

ミミヤムと(ミミ)

ヤミトとの俱生神

より轉化せるもの

なり。其的確なる

經説なく區區とし

て纏らず一般には

地獄の主とせらる

【取相】 相に執着

を生ずることなり

【或利は光無量】

已下の偈は純譯樂

長へに冥くして光明を離るるも、光明の海は能く照す
 諸の畜生趣の中に、無量種の身を受け
 宿の行業に隨ふが故に、長へに無量の苦を受く
 閻羅王界の中には、饑渴の苦常に逼り
 大火の山に登上り、長く無量の苦を受く、
 或は七寶の刹有り、不正に住して莊嚴せられ
 清淨の業力より起り、微妙にして善く安隱なり
 彼佛刹土の中には、唯人天の趣のみ有り
 功德の果成就して、常に一喟の快樂を受く
 一の毛孔の中に、不思議億の刹あり
 無量の形もて莊嚴するは、種種の華の起す所なり
 其自の業に隨つて起る、衆生界は議り難し
 種種の相を取り已りて、或は樂を受け苦を受く
 或利は光無量にして、一切の寶を地と爲し
 金剛の華遍く覆ひ、垢を離れて淨く莊嚴するあり
 或利は光明を體として、光明輪に安住し
 金色にして梅檀香あり、光明雲は常に照せり

【或は無量の佛土】
此三例は住世界海
を須す

或初は日輪を體として、東青宣衣を布き
或は一蓮華の中に、菩薩悉く九蓮せり
或は無量の色の、藍垢寶の佛刹有りて
紺寶の光明網あり、光明網は電のごとく照す
或は佛刹十有り、金剛華を體と爲し
或は衆の寶華を布き、觀察するに甚だ清淨なり
普賢菩薩の願の、得し所の清淨國なる
三世の莊嚴刹は、悉く其中に現はる
諸の佛子、汝、佛の世界は自在なるを觀よ
未來の一切刹は、悉く現じて皆華の如し
十方一切の刹と、過去の佛國海とを
一世界に於て見るに、一切の刹は化の如し
三世の一切佛と、并びに一切の佛土とは
一世界に於て、三世の佛及び刹を見よ
微塵の上の刹を觀るに、一切の佛は自在にして
無量に妙莊嚴し、皆悉く電光の如し
或は無量の佛土あり、其形は猶し海の如し

【或は師子座の如く】已下の三偈は形世界海を頌す。【梵世】大梵天王の世界のこと。即ち大梵天は色界初禪天の主にして、三界の主たり。此王の住する色界大梵天を指す。

【或は壽命一劫】已下の二偈は劫世界海を頌す。

【或國土には佛無し】已下五偈は佛出世世界海を頌す。

須彌山の如き有りて、世界は思議し難し
國有り珠貫の如く、紺寶の網に依りて住し
或は樹の莊嚴に依り、一切の佛充滿したまへり
或は摩尼輪に依り、或は蓮華に依止し
八隅にして羅莊嚴し、垢を離れたる種種の色あり
或は師子座の如く、或は國有り金の如く
或は衆寶の形の如く、或は梵世の處の如し
或は天主、月の形、又復形日の如く
或は摩尼寶の如くして、梅檀香もて莊嚴せり
或は旋香鬘の如く、佛の世界安住し
或は光明輪の如く、種種の色もて莊嚴せり
或は壽命一劫、或は復壽命百劫
或は復壽命の、佛刹の微塵に等しき有り
或は一劫の中に於て、無量の刹起り
無量にして數ふべからざる、不思議の刹の壞するを見る
或國土には佛無し、或國土には佛有り
或國土は一佛にして、或は無量の佛有り

【器】法器の意。機を然して佛を見、法を聞くに堪へたる者、即ち佛道修行を能くする者を言ふ。

【或利は極めて濁悪】下の七偈は説法華を頌す。厭々たる義。不可愛の境、ち恐るべく厭々を好しからざるの意を言ふ。この愛は愛欲(あひま)の意にあらず

若し國土に佛無ければ、他方の異なる世界より諸の化佛來る有りて、自在の教を示現したまふ宛より壽を捨てて、神を降し處胎して生れ魔を降して正覺を成じ、無上の法輪を轉したまふ衆生の樂土所に随つて、種種の樂を示現し一切時に壞せず、清淨の法輪を轉じたまふ若し衆生器に非ざれば、佛の見ざらしむるに非ずして煩惱に障礙せられ、如來の意を見たてまつらざるなり或利は極めて濁惡にして、常に警惡の音剛強の聲を聞き、不愛にして大いに恐怖す彼地獄、畜生、餓鬼の趣は苦を受く是は濁惡の佛利にして、衆生の憂惱の海なり或利は甘露の音あり、常に柔軟の聲を聞き清淨の道音は、普く一切の利に開ゆ或は佛利有り、釋提桓因の聲梵天王の妙聲、諸の世界主の聲を聞く光明長の音聲には、佛の化身無盡なり

諸の菩薩の音聲は、常に佛の刹海に聞ゆ
或は不思議の刹に、法輪を轉ずる聲

盡すべからざる願の聲、修行する所の音聲を聞く

三世の諸佛の、具足せる尊き名號と

緣に隨つて佛刹を起す音聲の盡すべからざるとを聞く

「諸の佛子、乃往久遠に、世界海微塵數の劫を過ぎ、復是數を過ぐるに、爾時、世界海

有り、淨光普眼と名く。中に世界性有り、勝妙音と名け、摩尼の華網海に依止して住し、

清淨にして穢無く須彌山摩數の世界有り、以て香鬘と爲せり。無量の寶もて地を莊嚴し、

三百重の衆寶圍山有り、高廣嚴淨にして、周匝圍遶せり。其世界性の形は須彌山の天宮

の莊嚴せられたるが如く、念を以て食と爲せり、彼世界性の中に、香水海有り、清淨光

と名く。彼香海の中に、須彌山有り、大焰華莊嚴幢と名け、十種の寶の欄楯を以て圍遶せ

り。彼須彌山に、林鬘有り寶華枝と名け、無量の華の樓閣、無量の寶幢の樓閣、無量の紺

寶網、種種の色の華を以て、之を莊嚴し、無量の香雲其上に彌覆し、十億百千の城、周匝

圍遶せり。彼林の東に於て一つの大城有り、名けて焰光と曰ひ、純香の成する所、面は千

由旬にして、七寶を郭と爲して、周匝圍遶し、其城の樓閣は雜寶もて莊嚴し、覆ふに雜華

及び諸の寶網を以てし、微風吹き動かして、妙なる音聲を出せり。其城に門あり、一萬

二千、雜寶の幢を建てて之を莊嚴し、十億の園林、周匝圍遶せり。城の中の衆生は、皆悉

【由旬】 踰繕那(ヨウジュン)

にして、踰闍那、由

延とも書き、印度

に於て里數を示す

量なり。一由旬は

支那の三十里又は

四千里に當ると云

ひ、八俱盧舍を一

由旬と言ふ。

【郭】 外郭の意。城の外周の壘壁なり。

【神足】六神通の
一。神足通、身如
意通とも云ひ、時
に應じて大小自在
の身を現じ、意の
偏に飛行し得る通
力を言ふ。

【三惡】三惡趣の
略。地獄、餓鬼、畜
生の六界中の下
界なり。
【八難】佛を見ず
正法を聞く能はず
るを難と云ふ。是
に八種ありと言ひ
八難と稱す。即ち
三惡趣に在る者苦
劇しくして法を聞
く能はず。在長壽
天の難、在北俱盧

く業報の神足を成就し、行は諸天に同じく、一切の欲する所は念に應じて即ち至る。彼林の南に於て一つの大城有り、樹華莊嚴と名け、次に乾闥婆の城有り、名けて究竟と曰ひ、次に夜叉の城有り、金剛野、莊嚴博と名け、次に乾闥婆の城有り、彌堵音と名け、次に阿修羅の城有り、寶輪地と名け、次に蓮樓羅の城有り、寶華莊嚴と名け、次に寶金剛幢と名く、時に彼林の中に一つの道場有り、寶華莊嚴と名け、其道場の前に、大蓮華有り、華焰具足と名け、寶華百億由旬にして、十億の蓮華の眷屬圍遶せり。時に彼世界百處を過ぎりて、佛有り世に出でたまへり。是の如く次第して、十須彌山座敷の如來有り、世に出興したまひ、其最初の佛を、一切功德本勝須彌山雲と名けたてまつる。時に佛は彼大蓮華の上に處したまひて、眉間の白毫より、大光明を放ち、一切功德覺と名け、十佛世界座敷の光明有り、以て眷屬と爲せり。彼光は一切衆生の煩惱蓋障を滅除して、淨心を得、功德海を起して永く三惡八難の諸趣を離れ、菩提心を發さしめたまへり。

諸の佛子、時に彼焰光城の中に、王有り愛見善慧と名く、其王は百億の諸城を統領し、三萬七千の夫人采女、一萬五千の子有り。其第一の子を功德勝と名け、次を普莊嚴童子と名く、時に彼童子、佛の無量の自在の功德を見たてまつり、普根の因縁の故に、即ち十種の三昧を得たり。名けて諸佛の具足する功德の三昧、普門方便の三昧、淨方便雲の三昧、衆生を教化する三昧、一切の普薩充滿する三昧、無量の功德誠向の三昧、如實に諸法

洲の難、此二處は樂み多くして處を法を聞く能はず。盲聾瘖瘂の難、世智辯聰の難、世智に翫れて却て法を疎んず、生佛前佛後の難、入處を數ふ是維摩經說に依る。

【十種の三昧】

十種の中、具足功德三昧より一切音聲充滿三昧の五は他利を成ぜんが爲の定にして、已下五の三昧は自利行の三昧なり。

【猶し千日云云】

此頌は總じて八偈より成り、初四偈は、佛徳難値を歎じ、次三偈は、佛佛勝益を明し、最後は佛供養の勸進を説く。

を覺る三昧、廣地方便海の三昧、勝解脫の三昧、一切智光の三昧と曰ふ。』

其時、普莊嚴童子、偈を以て頌して曰はく、

猶し千日出でて、虚空照さざる塵きが如く、

垢を離れたるもの道場に坐したまふに、光明も亦是の如し

無量萬億劫にも、遇ひ難きの道師

世間に出興したまひ、一切のものは最勝を見たてまつる

佛の光明を觀察したてまつるに、雲の如く思議し難く

一切の處に悉く見たてまつりて、目前に對現するが如し

毛孔より光明を放ち、雲の如く盡すべからず

諸の衆生の音に従ひて、佛の無量の徳を讚めたてまつる

衆生は佛の光に遇へば、苦を離れて永く寂滅し

悉く安隱快樂にして、歡喜過く充滿す

諸の菩薩を觀察するに、十方界に充滿して

摩尼寶雲を放ち、諸の最勝を讚歎したてまつる

常に道場に於て、深妙の音聲海を聞きて

諸の衆生の苦を滅し、佛の自在力を祝たてまつる

一切のものは恭敬を興し、歡喜の心無量にして

【吉祥】梵語室利
(のじ)の譯。好善
嘉良の意にして、
幸福又は日出度き
ことの象徴たり。

法王の所に得詣し、瞻仰して禮し供養したてまつれ
時に彼童子の、偈を説く音聲を、彼世界に於て普く聞かざる無し。爾時、愛見菩薩王、
是偈を説くを聞きて、歡喜すること量り無く、偈を以て頌して曰はく、

宜く時に普く、諸王大同等に宣告して

吉祥の相を知らしめ、咸速かに最勝に詣でしむべし

一切の城を莊飾して、宜しく悉く清淨にし

諸の妙幢を建て、種種の寶もて莊嚴せしむべし

衆の妙寶の帳を設け、覆護して其上に舞べ

伎樂音の雲を興して、遍く虚空に充たしめ

諸の街巷を掃除し、降らすに雜寶の雨を以てし

衆の寶乘を莊嚴して、當に詣でて最勝を見たてまつるべし

各其帳の内に於て、種種の雲雨を雨らし

一切の莊嚴雲は、虚空の中に流行し

香蓮華の光雲、華蓋は思議し難く

瓔珞の半月雲は、衆の妙寶衣を雨らし

須彌山の香水、摩尼の寶もて莊嚴し

清淨の衆の雜寶、虚空の中に顯現す

摩尼寶の華鬘、垢を離れたる衆の寶鬘
摩尼寶の燈雲、凝照して虚空に停る
瞋想して菩提を念じ、無量の歡喜を生じ

妻子眷屬と俱に、當に詣でて最勝を見たてまつるべし
爾時、愛見菩薩王、七十七億那由他の眷屬と俱に、一切功德本勝須彌山雲佛の所に往詣

し、到り已りて、頭面に足を禮し、一面に坐す。無量の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等有り、佛の所に往詣し、頭面に足を禮し、一面に住せり。

爾時、如來、一切諸の衆生を教化したまはんが故に、彼大衆海の中に於て經を説きたまひ、現三世一切諸佛集會と名け、世界塵數の修多羅を以て眷屬と爲す。諸の衆生の應に解すべき所に隨ふが故に。

爾時、普莊嚴童子、是經を聞き已りて、宿世の功德因縁の故に、一切法具足するの三昧、一切法來り入りて菩提心に安住するの三昧、法界師子光の方便の三昧、法眼清淨の三昧を得たり。

爾時、童子、偈を以て頌して曰はく、

我、最勝の法を聞きて、清淨の慧眼開け

能く一切の佛の、過去の功德海を見たてまつる

我、一切の生に、本の色具足して

【修多羅】(Sūtra) 契經、法本、直說等と譯す、修妬路、素明覽、修多羅とも書き、佛敎經典を言ふ。

【我最勝の法】此

頌は十偈より成り初一は總說、次七は佛の本生を語り最後二偈は見佛して修行の因をなすことを明せり。

本の名と身業とに隨つて、一山の佛を供養したてまつりしが如く
過去の諸佛の所の、無量劫の行を見立てまつる
我、諸佛海と、清淨の佛刹海とを見るに
生死海の中に於て、自身を捨つること無量にして
菩薩の勝行を修し、佛刹海を嚴淨せり
無量の耳鼻、頭目及び手足
王の身、大臣の身を捨てて、具足して國を淨むることを爲す
一一の佛刹の中にて、思議し難き億劫の
菩薩の道を修行して、佛刹海を淨からしめたり
普賢菩薩の願は、諸の行海を修習して
一切刹海の中に、佛土を清淨ならしむるなり
日の光明淨くして、悉く色の具足を見るが如く
他智の光に照されどりて、我が木の修行をば見る
無量諸佛の、離垢の清淨刹を見たてまつるに
等正覺を成するの時は、悉く法界に充滿せり
彼の如く清淨具足する佛刹海を修し
一切の佛の神力もて、常に普賢の行を修すべし

是偈を説きし時、須彌山摩數の如き衆生は、悉く無上の道心を發せり。時に彼如來、此童子の爲に頌を説きて曰はく、

善い哉、普莊嚴、德藏の大名稱

能く衆生の爲の故に、勇猛に菩提を求めたり

能く智慧の光を發して、一切の法界に滿てり

無上道の徳云は、當に智慧海を得べし

一國の中に修行すること、一刹微塵の劫にして

當に是智慧に達らんこと、我の得し所の如くなるべし

佛意の者は、深き方便海を解ること能はず

精進の力成就せば、能く佛の世界を淨めん

一切の微塵數の、劫海に衆の行を修せば

彼淨きを得んことは是の如くして、我佛刹海の如くならん

一一の衆生の故に、無量劫に苦行して

生死の難を厭はざれば、能く大導師と爲らん

無量無邊の願は、一切の諸佛海に

能く無上道に度り、方便海を具足せん

我を恭敬し供養せば、普莊嚴大力

【善い哉普莊嚴】已下の頌は總じて九偈ありて、如來、童子を讚歎して記別（成佛の豫言）を授くることを頌す。

【德藏】徳は諸功徳の意、藏は收藏の義にして、功德藏の略なり。

【爾時云云】已下更に彼の佛を見て修善行を成ずしことを明かす。

【念佛三昧】佛の周好華嚴を觀念しその觀成熟して周遍法界の法身を見るに至る事理の定善觀を云ふを一般的とす。然れども淨土教に在りては心を彌陀一佛に専注し、餘念を交へず一心に稱名するを言ふ。

【法樂】二義あり一は佛法を樂み味ふこと、釋迦佛成道後の如き、二は佛神に對して誦經法施を行ふこと。即ち音樂を奏して法要を法行することより此語出づ。【如來名號品】本經第二會普光法堂

如來名號品第三

勝須彌山佛は、汝に無上道を成せしめん。普賢は常に勇猛にして、大名稱を具足し一切の法界に滿ちて、諸佛の功徳を淨めん。

爾時、一切功徳本勝須彌山雲如來は、壽五十億歲なりき。彼佛の滅度の後、佛有りて世に出で、一切度難癡清淨眼王如來と號けたてまつりき。普莊嚴童子は、是如來を見已りて、即ち念佛三昧、普門海藏三昧、無量智持轉法三昧、甚深法堂三昧を得たり。時に佛は經を説きたまひ、一切法界自性離垢莊嚴と名け、世界の微塵に等しき修多羅有り、以て眷屬と爲せり。普莊嚴童子は、是經を聞き已りて、即ち三昧を得たり、一切法普門歡喜藏昧、入一切法方便海三昧と名く。

如來名號品第三

佛、摩竭提國の寂滅道場に在して、初始めて佛となることを得て、普光法堂にて、蓮華藏の師子座の上に坐したまへり。善覺の智は、二念無く、法性に了達し、佛の所住に住し、諸の如來と等しく、無礙の趣に至り、不退の法を具へ、無壞の境界にして、不思議に住し、等しく三世に達したまひ、十佛國土の微塵數に等しき大菩薩と俱なり。盡く一生補處にして、悉く他方の世界より來り集れり。衆生の性を了りて、深く法界に入り、

説法の最初なり、
この法會に於て、
六品の説法ある中
初三品は佛の三業
に就きて無信の行
を説く、この品は
本會の序説として
三世間を普説し、大
て海會の普説念誦
を作し、三世の佛
法に就き三十四問
を答へ、その中十
問に佛力を承けて佛
の名號を説く。佛
の名號は佛身の總
相に就つて名くる
が故に名號の説法
は從つて佛身の業
用不可思議なるを
説く所以なり。

【普光法華】釋迦
牟尼の普光の東
南約三千里の處、尼
波利の國に於て、今
定かならず。今
【普賢の智】正覺
の智に同じ。正覺
の智を總括したる

常に能く世間と涅槃とを思量し、明かに業報と、衆生の心行とを了り、悉く能く諸法の
義味を解知し、世間と離世間との法を觀察し、究竟じて爲無爲の性を分別し、去來現在貫
達せざる處し。

時に諸の菩薩、咸是念を作さく、惟願くば世尊、我等を哀愍したまひ、志樂する所に
隨つて、佛刹を示現し、佛の所住を示し、佛國の莊嚴を示し、諸佛の法を示し、佛土の清
淨を示し、佛の説きたまふ所の法を示し、佛刹の體を示し、佛の功德の勢力を示し、隨つ
て佛刹の起りしことを示し、正覺を成じたることを示したまへ。十方一切の如來の分別す
べき所の、菩薩の十住、十行、十回向、十藏、十地、十願、十定、十自在、十頂、菩薩の
隨喜心、如來性を斷ずして、衆生を救ひ、煩惱を滅し、衆行を知り、諸法を離り、垢穢
を離れ、衆の業を抜き、疑網を決し、愛欲を竭さしむることを開示したまへ。佛の無土地、
佛の境界、佛の住壽、佛の行、佛の力、佛の無所畏、佛の定、佛の神足、佛の勝法、佛の
不動智、佛の六菩提根、佛の光、佛の智、佛の無上の功德の一切具足せる、是の如き等の事
を、悉く我が爲に現じたまへ。

爾時、世尊、普の菩薩の心の念する所を知りたまひ、即ち其像の如く神通力を現じた
まへり。神力を現じしりて、東方十佛刹微塵數の國を過ぎて、世界有り、金色と名け、佛
を不動智と號けたてまつる。菩薩有り、文殊師利と字け、十佛土の塵數の菩薩と與に佛の
所に來詣し、恭敬し供養して、頭面に足を禮し、即ち東方に於て、蓮華藏の師子の座を化

【普賢の智】正覺
の智に同じ。正覺
の智を總括したる

なり。

【佛の所住】佛は衆生救済の大慈悲行を生命とし給ふを以て、佛の所住は大慈悲なり、化他行なりと云はざるべからず。

【無礙の趣】礙は障礙にして煩惱なり。煩惱を歸じ一切に自在なるを解脱と言ふ。無礙の趣は即ち解脱の境界を言ふなり。

【不退の法】外道に對する法なり。佛法は外道の破壞に會ふも壞せず、却て外道は正法に伏せらるるを以て言ふ。

【無染の境界】内障の徳を言ふ。内外の諸塵巧に誘惑すと雖も心を惑はされず却て諸塵を降伏せしむるが解脱者の境界なり。

【不思議】佛法は法界の眞理にして最勝の法なり。故に世間凡俗の容易

作して、結跏趺坐せり。南方十佛刹微塵數の國を過ぎて、世界有り、寶色と名け、佛を大

智と號けたてまつる。菩薩有り、覺智と字け、十佛土の摩訶の菩薩と與に佛の所に來詣し、

恭敬し、供養して、頭面に足を禮し、即ち南方に於て、蓮華藏の師子の座を化作して、結

跏趺坐せり。西方十佛刹微塵數の國を過ぎて、世界有り、華色と名け、佛を習智と號けた

てまつる。菩薩を財智と字け、十佛土の摩訶の菩薩と與に佛の所に來詣し、恭敬し、供養

して、頭面に足を禮し、即ち西方に於て、蓮華藏の師子の座を化作して、結跏趺坐せり。

北方十佛刹微塵數の國を過ぎて、世界有り、青華色と名け、佛を行智と號けたてまつ

る。菩薩を寶智と字け、十佛土の摩訶の菩薩と與に佛の所に來詣し、恭敬し、供養して、

頭面に足を禮し、即ち北方に於て、蓮華藏の師子の座を化作して、結跏趺坐せり。東北方十

佛刹微塵數の國を過ぎて、世界有り、青蓮華色と名け、佛を明智と號けたてまつる。菩薩

を徳智と字け、十佛方の摩訶の菩薩と與に佛の所に來詣し、恭敬し、供養して、頭面に足

を禮し、即ち東北方に於て、蓮華藏の師子の座を化作して、結跏趺坐せり。東南方十佛刹

微塵數の國を過ぎて、世界有り、金色と名け、佛を究竟智と名けたてまつる。菩薩を日首

と字け、十佛土の摩訶の菩薩と與に佛の所に來詣し、恭敬し、供養して、頭面に足を禮し

即ち東南方に於て、蓮華藏の師子の座を化作して、結跏趺坐せり。西南方十佛刹微塵數の國

を過ぎて、世界有り、寶色と名け、佛を上智と號けたてまつる。菩薩を造智と字け、十佛

土の摩訶の菩薩と與に佛の所に來詣し、恭敬し、供養して、頭面に足を禮し、即ち西南方

に思量し能はざる所なるが故に不思議と云ふ

【生補處】一生を過ぐ未だ、虚偽して佛道を誦ふべき等覺位の菩薩を言ふ。實際に身を以て説相を異にす

【聖樂】（シロ）も書き、滅、調、速安を脱し、前理を體達し、無爲無作の法性を究め、不生不滅の法身の眞體に歸するを言ふ。今簡約して言

界又は解脫の境界或は超世間の意に解す。

【義味】義は諸法の義理、味は明得なり。明得なり。即ち諸法の義理を詮表する義法を味得する言なり。

【爲無爲】有爲法より生じたる諸法（現象）にして生滅

に於て、蓮華藏の師子の座を化作して、結跏趺坐せり。西北方十佛刹微塵數の國を過ぎて、世界有り、金剛色と名け、佛を自在智と號けたてまつる。菩薩を法首と字け、十佛士の座の菩薩と與に佛の所に來詣し、恭敬し、供養して、頭面に足を禮し、即ち西方に於て、蓮華藏の師子の座を化作して、結跏趺坐せり。下方十佛刹微塵數の國を過ぎて世界有り、玫瑰色と名け、佛を梵智と號けたてまつる。菩薩を智首と字け、十佛士の座の菩薩と與に佛の所に來詣し、恭敬し、供養して、頭面に足を禮し、即ち下方に於て、蓮華藏の師子の座を化作して、結跏趺坐せり。上方十佛刹微塵數の國を過ぎて、世界有り、如寶色と名け、佛を伏怨智と號けたてまつる。菩薩を賢首と字け、十佛士の座の菩薩と與に佛の所に來詣し、恭敬し、供養して、頭面に足を禮し、即ち上方に於て、蓮華藏の師子の座を化作して、結跏趺坐せり。

是時、交殊勝刹菩薩は、佛の神力を承け、大衆を觀察し、歎じて曰はく、快哉、今の菩薩の會は未曾有と爲す。諸の佛子、當に知るべし佛刹は不可思議なり。佛の住、佛の國、佛の法、佛刹の清淨、佛の說法、佛の出世、佛刹の起りしこと、諸の佛の阿耨多羅三藐三菩提は皆不可思議なり。何を以ての故に、十方の諸佛は法を説きたまふに、彼心行を知りたまひて、隨つて衆生を化し、虚空法界と等しければなり。何を以ての故に、此娑婆世界の中の、諸の四天下にて一切を教化したまふに、種種の身、種種の名、處所、形色、長短の壽命、諸得、諸入、諸根、生處、業報、是の如きの種種同じからず、衆生の

變化の法なり。無爲は有爲の反對にして、生滅變化するなき不變の理體（原推）を言ふ。【惟願】を言ふ。【法】問を擧げて請法す間に三問あり。【十問】は因明依の果即ち已に表佛せる佛の法、次の十問は果所起の因即ち當成の佛の法、最後の十四問は因所得の果なり。【初問】は本會に於て説き已下順次品を追うて説かる。【隨つて佛刹六云】佛に隨ひ、佛に應じて佛國土（佛刹）の起りしことの意味。【隨喜心】五悔の己の善の如く喜ぶ心。【樂行】衆生の根行。【不動轉】佛の無碍自在の妙用（はたらき）なり。

所見も亦異ればなり。何を以ての故に。諸の佛子、此四方にて佛號同じからず。或は悉達と稱へ、或は滿月と稱へ、或は師子吼と稱へ、或は轉輪聖王と稱へ、或は廣舍那と稱へ、或は瞿曇と稱へ、或は大沙門と稱へ、或は最勝と稱へ、或は龍慶と稱ふ。是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此東方に、四天下有り、名けて善護と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は金剛と號け、或は無勝と號け、或は大智と號け、或は不壞と號け、或は雲王と號け、或は無淨と號け、或は平等と號け、或は歡喜と號け、或は無比と號け、或は默然と號け。是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此南方に、四天下有り、名けて難養と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は甘露灌と名け、或は善名稱と名け、或は離垢と名け、或は實論師と名け、或は調御と名け、或は樂慧と名け、或は大智と名け、或は樂祐と名け、或は無量と名け、或は勝慧と名け。是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此西方に四天下有り、名けて佛慧と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は性慧と謂ひ、或は愛現と謂ひ、或は無上王と謂ひ、或は無恐怖と謂ひ、或は實慧と謂ひ、或は常化と謂ひ、或は知足と謂ひ、或は法慧と謂ひ、或は究竟と謂ひ、或は能忍と謂ふ。是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此北方に四天下有り、師子言と名く。彼にて如來を稱ふるに、或は大牟尼と稱へ、或は苦行と稱へ、或は婆伽婆と稱へ、或は福田と稱へ、或は一切智と稱へ、或は善意と稱へ、或は清淨と稱へ、或は伊那婆那と稱へ、或は勝意と稱へ、

【六臂】根、耳、鼻、舌、身、意の六根。

【像の如く云々】衆生の諸機（宗教的機能）に應じて、佛身を印現し、神通力を示す意。

【文殊師利】三十三の曼殊室利とも書き、文殊、智徳等と譯し、佛智を表示する菩薩。

【眞前に足を置し】眞前に對する最敬禮の手を伸し掌を以て對者の足を受け、己の眞前に接し置く。

【寶樹華色】(amala) 鮮波とも書き、黃華、黃色花等とも譯す。その花甚だ香氣ありて愛用せらる。

【阿耨多羅三藐三菩提】Anuttarasamyak-sambuddhi

阿耨三菩提、阿耨菩提とも略稱し、無上正等正覺、又は無上正遍知等と

或は願行滿と稱ふ。是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此東北方に、四天下有り、名けて安寧と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は法王と號け、或は等起と號け、或は寂靜と號け、或は妙天と號け、或は離欲と號け、或は勝慧と號け、或は等心と號け、或は無壞と號け、或は慧音と號け、或は遠來と號く。是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此東南方に四天下有り、名けて喜樂と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は蓮華と名け、或は慧火と名け、或は智人と名け、或は密教と名け、或は解脫と名け、或は自然安住と名け、或は妙行成就と名け、或は清淨眼王と名け、或は上勇と名け、或は精進力と名く。是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此西南方に四天下有り、名けて堅固と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は不動と稱へ、或は慧王と稱へ、或は滿慧と稱へ、或は無動慧と稱へ、或は常悲と稱へ、或は頂王と稱へ、或は勝首と稱へ、或は一切處と稱へ、或は持仙と稱へ、或は願須彌と稱ふ。是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此西北方に、四天下有り、須菩提と名く。彼にて如來を稱ふるに、或は普慧と號け、或は光明成就と號け、或は寶髻と號け、或は應敬念と號け、或は無上義と號け、或は悅樂と號け、或は本性清淨と號け、或は光明滿と號け、或は脩習と號け、或は本善住と號く。是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此下方に四天下有り、名けて始道と曰ふ。彼にて如來を謂ふに、或は長養善根と名け、或は師子色と名け、或は剎智と名け、或は眞

譯す、佛の正覺の智慧を言ふ。佛は迷安を覺し、覺智圓滿し、平等の眞理に於て更に知らざるなく、世に於て無上なれば斯く言ふなり。

【娑婆世界】「吾

索阿」とも書き、娑土又は單忍土等と譯す内外諸の菩薩を單一忍びざるからざる國上の義にして、此世界を指す。

【諸人】心義諸の自境を得るの義、即ち觀影の色境を得るに如し、亦修行證得の義にも解すべし。

【諸人】境轉の諸根（六根等）に入るの義。又は悟入の門異なるの義あり。

【生處】受生の處にして胎、即、濕化の四生、人天已下の六趣を言ふ。

【悉達】(Siddhant) 悉達多とも書

如來名號品第三

金焰と名け、或は普觀と名け、或は覺音と名け、或は德益と名け、或は究竟來と名け、或は眞天と名け、或は平等施と名く、是の如き等の佛を稱ふる名號、其數一萬なり。諸の佛子、次で此上方に四天下有り、名けて持地と曰ふ。彼にて如來を謂ふに、或は猛慧と稱へ、或は無量清淨と稱へ、或は覺慧と稱へ、或は勇首と稱へ、或は無量壽と稱へ、或は能發歡喜と稱へ、或は意成滿と稱へ、或は火光と稱へ、或は精進と稱へ、或は一乘と稱ふ。

諸の佛子、是の如き持地の四天下にて佛を稱ふる名號、其數一萬あり。此娑婆世界に是の如き等の百億の四天下有り、彼にて如來を稱ふるに亦各同じからずして、百億萬あり。諸の佛子、此娑婆世界の東に、次で國土有り、名けて密調と曰ふ。彼にて如來を謂ふに、或は平等と稱へ、或は最勇と稱へ、或は安慰と稱へ、或は調意と稱へ、或は聞慧と稱へ、或は一切捨と稱へ、或は自在と稱へ、或は堅固身と稱へ、或は大超越と稱へ、或は無

比智と稱ふ。諸の佛子、是の如く密調國土にて佛を稱ふる名號、百億萬有り。諸の佛子、此世界の南に、次で國土有り、名けて最勇と曰ふ。彼にて如來を謂ふに、或は自然清淨と稱へ、或は意至判と稱へ、或は能仁と稱へ、或は解脫王と稱へ、或は智慧王と稱へ、或は明行、足と稱へ、或は普營と稱へ、或は能寂滅と稱へ、或は大慈と稱へ、或は大悲と稱ふ。是の如き等の佛を稱ふる名號、百億萬有り。諸の佛子、此世界の西に、次で國土

有り名けて離垢と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は具足直心と稱へ、或は分別道と稱へ、或は善持と稱へ、或は解脫寧亂と稱へ、或は論師と稱へ、或は分別業寶と稱へ、或は無上

き、頓吉、一切義成等と譯す、釋迦佛の太子たりし時の名なり

【釋迦牟尼】(Yamuni)能仁寂默又は能備能滿等と譯す、釋迦種族出身の佛の意にて即ち釋尊の稱呼なり

【帶髮】(Chinamita) or Chinamita 梵音摩の訛略にして、地最勝の一にして、佛の尊稱の一にして、南方佛典には多く此稱を用ひらる

【沙門】(Sramana) 室摩拏の訛略にして、勤息、止息等と譯さる、諸善を勤修し、諸惡を防止する義にして出家して佛道を修行する者を言ひ、大沙門とは佛徒を言ふ

【牟尼】(Muni) 寂默、仙、智者等と譯す、寂靜に處して、道を修行する者を言ひ、大牟尼とは釋迦佛を指す

【牟尼】(Muni) 寂默、仙、智者等と譯す、寂靜に處して、道を修行する者を言ひ、大牟尼とは釋迦佛を指す

現と稱へ、或は來化と稱へ、或は一切苦行と稱へ、或は具足力と稱ふ。是の如き等の佛を稱ふる名號、百億萬有り。諸の佛子、此世界の北に次で國土有り寶境界と名く。彼にて如來を謂ふに、或は薔薇華色と稱へ、或は日藏と稱へ、或は依精進住と稱へ、或は等起住

詩と稱へ、或は超實と稱へ、或は慧日と稱へ、或は無障礙と稱へ、或は月出と稱へ、或は慧火勢と稱へ、或は清淨身と稱ふ。是の如き等の佛を稱ふる名號、百億萬有り。諸の佛子、此世界の東北に、次で國土有り名けて訶尼と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は離苦と號け、或は一切解脫と號け、或は因緣具足と號け、或は解脫智慧と號け、或は過去

藏と號け、或は寶光と號け、或は離世間と號け、或は至離身地と號け、或は轉輪藏と號け、或は離瞋恚心と號く。是の如き等の佛を稱ふる名號、百億萬有り。諸の佛子、此世界の東南に、次で國土有り名けて饒益と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は因緣と號け、或は

靈智と號け、或は美音と號け、或は根勝と號け、或は莊嚴蓋と號け、或は淨根と號け、或は殊特と號け、或は分別到彼岸と名け、或は勝定と號け、或は慈父と號け、或は智海と號く。是の如き等の佛を稱ふる名號、百億萬有り。諸の佛子、此世界の西南に次で國土

有り名けて鮮少と曰ふ。彼にて如來を稱ふるに、或は牟尼主と號け、或は樂寶と號け、或は不二觀と號け、或は知智と號け、或は謙意と號け、或は有緣見と號け、或は根主と號け、或は天人師と號け、或は建堂と號け、或は金剛華と號く。是の如き等の佛を稱ふる名號、

百億萬有り。諸の佛子、此世界の西北に次で國土有り、名けて知足と曰ふ。彼にて如來

【婆伽婆】(Bhagavān) 薄伽梵とも書き、有徳、尊貴、世尊等と譯し、如来の具徳を總括したる尊號なり。

【伊羅婆那】(Iraṇa) 玉林と譯す。釋迦佛の太子としてこの林中に生れしを以てこの名を立つ。

【須菩提】(Sudhātva) (一) 眞古、眞來、眞實等と譯し、佛十大弟子の一にして解空第一と稱せらる。

【真心】正しく眞如を念ずる心、又は正直心に、又は至心、至誠心に同じ。

【阿比】(Abhi) 捨善又は生滅と譯す。

【權方便】(権方便) 種種なる權方便(爲の手段)の諸門にして、此處に得意(心理作用)に就いて用ひらる。

を稱ふるに、或は華來と號け、或は梅檀蓋と號け、或は蓮華藏と號け、或は起妙諸法と號け、或は法顯と號け、或は次起と號け、或は善淨蓋と號け、或は總持善根と號け、或は善言と號け、或は專念法と號け、或は五法藏と號け、是の如き等の佛を稱ふる名號、百億萬有り。

諸の佛子、此世界の次に次で國土有り、羅刹食と名く、彼にて如来を稱ふるに、或は眞珠焰と號け、或は普化と號け、或は法命主と號け、或は無爲と號け、或は覺根と號け、或は羅摩と號け、或は風無礙と號け、或は欣施と號け、或は分別道と號け、或は種種と號け、是の如き等の佛を稱ふる名號、百億萬有り。

諸の佛子、此世界の上に次に次で國土有り、解脫音と名く、彼にて如来を稱ふるに、或は猛幢と號け、或は無量寶と號け、或は樂大施と號け、或は天光と號け、或は吉祥興と號け、或は離死地と號け、或は最勝と號け、或は不退輪と號け、或は離非法と號け、或は修一切智と號け、諸の佛子、此離脫音世界にて佛を稱ふる名號、百億萬有り。

婆娑國土及十世界の如く、是の如く東方の百千億の不可量、不可數、不可思議、不可稱、無等、無邊、無分齊、不可說の、虚空法界に等しき世界の中の衆生の佛を稱ふる名號、各各同じからず。

南西北方四維上下も、亦復是の如し。

是皆如来の菩薩爲りし時、因縁を有する者は此を度せんが爲の故に、種種の方便、口業の音聲、行業の果報、法門の權道、諸根の樂ふ所もて、諸の衆生をして如来の法を知らしめたまへるなり。

四諦品第四之一

【四諦品】 苦集滅
道の四諦の名稱を
擧げて、佛の語業
の妙用を示し、以て
衆生の種種なる樂
欲に隨つて教法の
名字自ら異なること
を説く。

【苦諦】 迷界の果
報一として樂なる
はなく、皆悉く苦
報なり。而て此理
は眞實不虛なるを
以て苦諦と言ふ。

【集諦】 三苦の一
己の愛執する者の
變異破滅する苦惱
【苦】 八苦の一な
る五陰盛苦にして
生老病死等の苦の
衆れる苦惱なり。

【依根】 惡に依り
て種種の惡を生ず
るが故に言ふ。

【險惡なる瘡
を言ふ。】

【章第六行】 無知闇
愚の者の所行にし
て、苦を脱せんた
め苦を重ぬるが如
し。

【苦集諦】 苦は果
なり、その苦を招

く

爾時、文殊師利、衆の菩薩に告げて言はく、「佛子、説く所の苦諦は、此娑婆世界に於て、或は害と言ひ、或は逼迫と言ひ、或は變異と言ひ、或は境界と言ひ、或は聚と言ひ、或は刺と言ひ、或は依根と言ひ、或は不實と言ひ、或は癰と言ひ、或は章象行と言ふ。説く所の苦集諦は、或は火と言ひ、或は能壞と言ひ、或は受義と言ひ、或は覺と言ひ、或は方便と言ひ、或は決定と言ひ、或は網と言ひ、或は念と言ひ、或は順衆生と言ひ、或は顛倒根と言ふ、説く所の苦滅諦は、或は無障礙と言ひ、或は離垢淨と言ひ、或は寂靜と言ひ、或は無相と言ひ、或は不死と言ひ、或は無所有と言ひ、或は因緣斷と言ひ、或は滅」と言ひ、或は眞實と言ひ、或は自然住と言ふ。説く所の苦滅道諦は、或は一乘と言ひ、或は趣寂靜と言ひ、或は引導と言ひ、或は究竟希望と言ひ、或は常不離と言ひ、或は能捨擔と言ひ、或は至非趣と言ひ、或は聖人隨行と言ひ、或は仙人行と言ひ、或は十藏と言ふ。諸の佛子、此娑婆世界の中に是の如き等の四諦の名字、四十億百千那由他有り。諸の衆生の應に調伏すべき所に隨ひて是の如きの説を作す。諸の佛子、娑婆世界にて稱する所の苦諦の如きは、密訓世界に於て、或は求根と名け、或は不可出と名け、或は不縛根と名け、或は作不應作と名け、或は一切不實と名け、或は

く因となる煩悩惡業を第一と首を。慳嗔果を指くが故に苦集諦を六つ、この關係を世界の因果と云ふ。

【苦果】 苦果を滅却したる解脱の境界にして、寂滅涅槃の因果を言ふ。

【苦滅諦】 滅諦（因果の因果）に到る因（修行菩提）にして、無量の聖道の法なり、この滅道二諦は世界の因果と云ふ。

【四諦】 四、す。數目にして、百由多を以て、一由多とす。支那に於て萬億と云ひ、又千億と云ひ、或は數千萬と云ふ。

【苦集世界】 東方世界の異名なり。【無上日】 最勝無上の智慧を勝れたる智慧の意なり。

【根方】 道諦の別

四諦品第四之一

分別臘と名け、或は處所成就と名け、或は第一審と名け、或は動と名け、或は身事と名く、名くる所の苦集諦は、或は受と名け、或は枝と名け、或は燒と名け、或は堅固と名け、或は壞根と名け、或は相續と名け、或は害行と名け、或は喜忘と名け、或は生元と名け、或は分と名く、名くる所の苦滅諦は、或は正義と名け、或は堅固と名け、或は讚歎と名け、或は安隱と名け、或は善趣と名け、或は調伏と名け、或は一道と名け、或は離煩惱と名け、或は不亂と名け、或は究竟と名く、名くる所の苦滅道諦は、或は猛將と名け、或は不夜と名け、或は超出と名け、或は勤方便と名け、或は普眼と名け、或は離邊と名け、或は覺悟と名け、或は得妙と名け、或は無上目と名け、或は觀方と名く。諸の佛子、彼審諸世界に是の如き等の四諦の名字、四十億百千那由他有り、諸の衆生の應に調伏すべき所に隨ひて是の如きの説を作す。

諸の佛子、娑婆世界にて名くる所の苦諦の如きは、最勇世界に於て、或は恐怖と名け、或は輻斷と名け、或は斷滅責と名け、或は常給と名け、或は蠶蠶と名け、或は常怨と名け、或は勝勝と名け、或は奪利と名け、或は羅共事と名け、或は虛妄と名け、或は勢力と名く。名くる所の苦集諦は、或は因緣と名け、或は癡元と名け、或は怨林と名け、或は忍枝と名け、或は滅味と名け、或は仇對と名け、或は味著と名け、或は導引と名け、或は增鬧と名け、或は害利と名く。名くる所の苦滅諦は、或は大義と名け、或は優分と名け、或は義中義と名け、或は無量と名け、或は見と名け、或は虛妄斷と名け、或は最勝と名け、或は

得なり。方は諦なり、四諦を觀するは即ち道諦なり。更に方に四方ありて悟り、二に一切の法を聞きて受持し、三に一切の波羅行を成就して衆生を濟す、此の四方を觀するは菩薩たり即ち八聖道たるを以て道諦を觀方と言ふ。

【最勇世界】南方世界の事。

【導引】一般には善處に導くを言ふも、今は其反對にして糞塗濁惡の世界は常に惡に導引するを以て斯く言ふなり。

【義中義】義は正なり、善なり、而も滅道の眞理は最も顯れたる義なるを以て義中の義と言ふ。

常と名け、或は住と名け、或は無爲と名く。名くる所の苦滅道諦は、或は滅火と名け、或は勝枝と名け、或は定分別と名け、或は不退と名け、或は深方便と名け、或は出家と名け、或は最上と名け、或は至非趣と名け、或は解説と名け、或は能令解脱と名く。諸の佛子、彼最勇世界に、是の如き等の四諦の名、四十億百千那由他有り。諸の衆生の應に調伏すべき所に隨ひて是の如きの説を作す。

諸の佛子、娑婆世界に説く所の苦諦の如きは、離苦世に於て、或は悔恨と名け、或は資得と名け、或は分別と名け、或は輪廻と名け、或は前行と名け、或は一味と名け、或は非法と名け、或は現前地と名け、或は最邪と名け、或は邪見と名け、或は不可忍と名く。名くる所の苦集諦は、或は虚器と名け、或は分と名け、或は甘忍と名け、或は生地と名け、或は取と名け、或は棄と名け、或は増と名け、或は捨と名け、或は能生と名け、或は堅縛と名く。名くる所の苦滅諦は、或は空と名け、或は無垢と名け、或は勝根と名け、或は勝等と名け、或は無作と名け、或は滅使と名け、或は最上と名け、或は畢竟と名け、或は破印と名く。名くる所の苦滅道諦は、或は眞堅固と名け、或は方便分別と名け、或は義根と名け、或は眞性と名け、或は離愛と名け、或は清淨と名け、或は有邊と名け、或は寄空と名け、或は究竟と名け、或は常虚妄と名く。諸の佛子、離垢世界に是の如き等の四諦の名、四十億百千那由他有り。諸の衆生の應に調伏すべき所に隨ひて是の如きの説を作す。

り、各一分なるが故に有海分と言ふ【愛欲】色欲(物質欲)性欲を含むの如き本能欲にして惑業の因をなすものを言ふ。

【有數】有爲(生滅變化する存在)の諸法を言ふ。【分】種種に分類差別する意なり。今集諸を分と云ふは、理に順ずる心を善と名け、其に乖理するを惡と名け。理は萬善に通貫して一なる原理なるも、諸惡は背理なれば萬善なり故に集諸を分と名くるなり。

【阿比世界】東北方の世界を指す。【無淨】淨は他と譯ふなり。即ち眞煩惱に由つて起る今煩惱却するが故に他と淨論することなし故に寂靜なり。

【有數】唐經に如虛空とあり。

名く。名くる所の苦滅諦は、或は不轉と名け、或は解脫と名け、或は無作と名け、或は離愛と名け、或は堅固と名け、或は眞實と名け、或は離癡と名け、或は寂滅と名け、或は賢聖と名け、或は離怨敵と名く。名くる所の苦滅道諦は、或は正語と名け、或は無諍と名け、或は教導と名け、或は廻向心と名け、或は廣妙と名け、或は分別方便と名け、或は有數と名け、或は趣寂靜と名け、或は勝智と名け、或は善解義と名く。諸の佛子、訶尼世界に是の如き等の四諦の名、四十億百千那由他有り、諸の衆生の應に調代すべき所に隨ひて是の如きの説を作す。

【阿比】の佛子、娑婆世界にて言ふ所の苦諦の如きは、饒益世界に於て、或は重擔と名け、或は危脆と名け、或は賊等と名け、或は生死と名け、或は非歡喜と名け、或は流轉と名け、或は疲勞と名け、或は瞞貌と名け、或は能生と名け、或は利刃と名く。言ふ所の苦集諦は、或は流散と名け、或は擾亂と名け、或は煩惱と名け、或は羸劣と名け、或は湮淪と名け、或は乖違と名け、或は非解脫と名け、或は所作と名け、或は取と名け、或は虛妄と名く。言ふ所の苦滅諦は、或は離獄と名け、或は眞實と名け、或は離諸難と名け、或は覆護と名け、或は善因と名け、或は隨至と名け、或は根と名け、或は離枝と名け、或は無次第と名く。言ふ所の苦滅道諦は、或は達無所有と名け、或は一切因と名け、或は善本と名け、或は明至と名け、或は不轉法と名け、或は有盡と名け、或は大道と名け、或は能調伏と名け、或は安隱と名け、或は非流轉と名く。」

大方廣佛華嚴經 卷第五

東晋天竺三藏佛跋跋陀羅譯

四諦品第四之二

【饒益世界】東南方の世界のこと。

【鮮少世界】西南方の世界のこと。

【廣地】苦集は苦の因にして果たり即ち大苦の樹を生ずる大地なり。故に廣地と言ふ。

諸の佛子、饒益世界に是の如き等の四諦の名、四十億百千那由他有り、諸の衆生の應に調伏すべき所に隨ひて、是の如きの説を作す。

諸の佛子、饒益世界にて言ふ所の苦諦の如きは、鮮少世界に於て、或は惡逆心と名け、或は不長慧と名け、或は邪念と名け、或は流轉と名け、或は無慚愧と名け、或は貪根と名け、或は熾然と名け、或は刺棘と名け、或は火山と名け、或は憂惱と名く。言ふ所の苦集諦は、或は廣地と名け、或は來起と名け、或は遠智と名け、或は樂惱と名け、或は恐怖と名け、或は放逸と名け、或は大失と名け、或は著處と名け、或は無主と名け、或は相續と名く。言ふ所の苦滅諦は、或は具足滿と名け、或は甘露と名け、或は非我所と名け、或は無主と名け、或は虛妄斷と名け、或は安樂住と名け、或は無量と名け、或は斷流と名け、或は非趣と名け、或は不二と名く。名くる所の苦滅道諦は或は光明と名け、或は堅實と名け、或は知深義と名け、或は正業と名け、或は非生滅と名け、或は非相續と名け、或は

【知足世界】西北方
の世界を言ふ。

淨導と名け、或は正趣と名け、或は淨方便と名け、或は勝見と名く、諸の佛子、鮮少世界に是の如き等の四諦の名、四十億百千那由他有り。諸の衆生の應に調伏すべき所に隨ひて是の如きの説を作す。

諸の佛子、娑婆世界にて名くる所の苦諦の如きは、知足世界に於て、或は流轉と名け、或は失利と名け、或は染汚淨と名け、或は重擔と名け、或は惡形と名け、或は内惡と名け、或は非專到と名け、或は害處と名け、或は苦惱と名く。言ふ所の苦集諦は、或は能持と名け、或は方便と名け、或は過時と名け、或は非實法と名け、或は無慮と名け、或は攝受と名け、或は離戒と名け、或は煩惱法と名け、或は無量見と名け、或は惡業と名く。言ふ所の苦滅諦は、或は壞身と名け、或は不放棄と名け、或は眞實と名け、或は等等と名け、或は清淨と名け、或は離生と名け、或は離曲と名け、或は無相と名け、或は具足と名け、或は不生と名く。言ふ所の苦滅道諦は、或は境界言斷と名け、或は功徳聚と名け、或は順義と名け、或は廣方便と名け、或は虛妄盡と名け、或は住壽道と名け、或は可稱數と名け、或は正念と名け、或は常道と名け、或は解脫と名く。諸の佛子、知足世界に是の如き等の四諦の名、四十億百千那由他有り。諸の衆生の應に調伏すべき所に隨ひて是の如きの説を作す。

【所求世界】下方
の世界なり。

諸の佛子、娑婆世界にて名くる所の苦諦の如きは、所求世界に於て、或は害と名け、或は垢瓶と名け、或は我所と名け、或は身趣と名け、或は流轉と名け、或は眞主と名け、

【解脫音世界】上
方の世界を言ふ。

【無害】萬物を包
容して害ふことな
き法界の性なれば
滅諦は無害と言ふ

或は苦と名け、或は輕飄と名け、或は無味と名け、或は棄去と名く、名くる所の苦集諦は、
或は行と名け、或は憤毒と名け、或は惡行と名け、或は愛枝と名け、或は不起攻と名け、
或は雜毒と名け、或は虚稱と名け、或は離勝と名け、或は熾然と名け、或は難顯と名く、
名くる所の苦滅諦は、或は非聚と名け、或は非處と名け、或は禁業と名け、或は不可壞と
名け、或は不沒と名け、或は不可量と名け、或は大と名け、或は覺慧と名け、或は離染と
名け、或は障礙と名く、名くる所の苦滅道諦は、或は勝行と名け、或は離微と名け、或
は諦究竟と名け、或は入深義と名け、或は實究竟と名け、或は淨理と名け、或は持念と名
け、或は離障と名け、或は救濟と名け、或は勝枝と名く。諸の佛子、所求世界に是の如
き等の四諦の名、四十億百千那由他有り。諸の衆生の應に調伏すべき所に隨ひて是の如
きの説を作すし。

諸の佛子、娑婆世界に名くる所の苦諦の如きは、解脫音世界に於て或は匿藏と名け、
或は衆生と名け、或は依枝と名け、或は壞勝と名け、或は障礙と名け、或は駛流と名け、
或は遠と名け、或は藏と名け、或は受と名け、或は苦枝と名く。名くる所の苦集諦は、或
は過調伏と名け、或は心趣と名け、或は能縛と名け、或は常念と名け、或は彼遣と名け、
或は離修と名け、或は虚妄と名け、或は門と名け、或は輕飄と名け、或は隱覆と名く。言
ふ所の苦滅諦は、或は非處と名け、或は無上勝と名け、或は不還と名け、或は滅淨と名け、
或は小と名け、或は無害と名け、或は善住と名け、或は無盡と名け、或は廣と名け、或は

【如來光明覺品】

佛の意なる不可思議自在なる所以を二十五重の放光を以て叙し、教主身光を以て三千世界の事境を照し、文殊智光を放ちて理境を照し以て法界の法門の重重無盡圓融するを明す。

【相續】三十二相の一にして、足底の紋細輪(千輪輪)なり。

【圓浮提】(Taini) Bukhapa 南瞻部洲

といひ、南瞻部洲、須金山の南方に位し、人壽百歳にして果報は苦多く樂少しと雖も、佛の出現はこの國のみ。即ち我等の住する此世界を言ふ。

【非婆提】(Purva Vindhya) 東非婆提

又は非利婁提訶と云ひ、車摩身と譯す。須彌の東に位するが故に東勝身洲とも言ふ。人

無價等と名く。言ふ所の苦滅道諦は、或は自見令見と名け、或は摧敵と名け、或は分別印と名け、或は入相と名け、或は難得と名け、或は無量義と名け、或は能起明と名け、或は和合道と名け、或は向不動と名け、或は勝義と名く。諸の佛子、解脫首世界に是の如き等の四諦の名、四十億百千那由他有り。諸の累生の應に調伏すべき所に隨ひて是の如きの説を作す。

諸の佛子、此娑婆世界、及び十方の十佛刹に四諦の名を説くが如く、是の如く東方の百千億の、不可量、不可數、不可思議、不可稱、無等、無邊、無分齊、不可説の虛空法界に等しき、一切世界の中に四諦の名を説くこと、各四十億百千那由他有り。諸の衆生の應に調伏すべき所に隨ひて是の如きの説を作す。南西北方四維上下も亦復是の如し。

如來光明覺品第五

爾時、世尊、兩足の相輪より百億の光明を放ちたまひて、遍く三千大千世界の百億の閻浮提、百億の非婆提、百億の拘伽尼、百億の耨單越、百億の大海、百億の金剛圍山、百億の菩薩の生、百億の菩薩の出家、百億の佛の始成正覺、百億の如來の轉法輪、百億の如來の般泥洹、百億の須彌山王、百億の四天王天、百億の三十三天、百億の時天、百億の兜率陀天、百億の化樂天、百億の他化樂天、百億の梵天、百億の光音天、百億の遍淨天、百

壽二百五十歳なり
と云はる。

【拘他尼】(Avanti
拘他尼) 罽他尼
の訛、具に阿鉢囉
罽他尼と言ひ、西
半貨洲と云さる。

此國には牛の産出
多く、牛を以て貨
幣として交易する
に故に此名出づ。

須彌山の西方に位
し此國主の人壽は
五百歳なり。

【罽他尼】(Citrā
kūṭa) 罽他尼
に北俱盧洲といひ
勝牛、野鹿等と譯
す。南洲の北に位
し、南洲中故勝の
處にして、壽千歳
衣衣自然に具はり
前世に千善を修せ
し者此處に生る。

【乾提河】(Citrā
nivera) 乾提河
も書き、波度、阿底
等と譯す。今は佛
の人滅し給ひしこ
と。

壽二百五十歳なり
と云はる。

億の果實天、百億の色究竟天を照し、此世界の有する一切のもの悉く現す。此に佛、蓮
華藏の獅子座の上に坐したまひて、十佛世界無數の菩薩の眷屬有りて、圍繞せるを見るが
如く、百億の闍浮提も亦復是の如し。佛の神力を以ての故に、百億の闍浮提には、皆十方
に各一大菩薩有り、各十世界無數の菩薩の眷屬と俱に、佛の所に來詣せるを見る。謂
ゆる文殊師利菩薩、覺首菩薩、財首菩薩、寶首菩薩、德首菩薩、日首菩薩、精進首菩薩、
法首菩薩、智首菩薩、賢首菩薩なり。是諸の菩薩の從來せし所の國は、金色世界、紫色、
華色、葡萄華色、青蓮華色、金色、寶色、金剛色、玻璃色、如實色の世界なり。各本國
の佛の所、謂ゆる、不動智佛、智慧火佛、淨智佛、具威儀智佛、明星智佛、究竟智佛、
無上智佛、自在智佛、梵天智佛、伏怨智佛の所に於て梵行を淨修せり。

爾時、文殊師利、偈を以て頌して曰はく、
若し正覺し、解脱し、諸漏を離れ

一切世に著せざるを知ること有らんも、彼道眼を淨むるに非ず

若し如來は、所有無しと觀察することを知り

法の散滅の相を知ること有らば、彼人は速に作佛せん

能く此世界の、一切處に著すること無く

如來身も亦然なりと見ば、是人は疾に成佛せん

若し佛法の中に於て、其心平等に隨ひ

【破瑳色】(アハレヒ) 寒類砥迦の略にして、水玉と譯す。水精に似たる寶石。

【梵行】 清淨なる行。菩薩行のことなり。

【若し正覺云云】 この頌は總じて十

偈より成り、初一偈は法は情慮を超越したることを明し、次八偈は事を會して理に同じ、後一偈は事の無碍なることを詮表す

【散滅の相】 佛の功徳の法も縁より生ずるが故に自性なし従つて散滅することを知るべし

【一切の有】 一切諸法の意、諸法の相に執着することなきを空觀と言ふ

【色】 實有ること無し【有】 五蘊假相合にして實有にあらざり、皆空なるを以て數有ることなしと言ふ。

【我無く衆生無く】

不二の法門に入らば、彼人は思議し難からん

若し我及び佛は、平等の相に安住することを見らば

彼無所住に住して、一切の有を遠離せん

色受數有ること無く、想行識も亦然なり

能く是の如く知る者は、彼は是れ大牟尼なり

見者所有無く、所見の法も亦無にして

明かに一切の法を了らば、彼能く世間を照さん

一念に、諸佛、世間に出現したまふも

而も實には所起無しと見らば、彼人は大名稱なり

我無く衆生無く、亦敗壞有ること無し

若し是の如きの相を轉せば、彼は即ち無上の人なり

一の中に無量を解り、無量の中に一を解り

展轉して生ずるは實に非ず、智者は長るる所無し

此處に文理師利の偈を説けるが如く、一切處も亦復是の如し。

爾時、光明此世界を過ぎて、遙く東方の十佛國土を照せり。南西北方四維上下も、亦

復是の如し。彼一一の世界の中に、百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天、世界の有ゆる一切のもの悉く現す。此に佛、蓮華藏の師子座の上に坐したまひ、十佛世界摩數の菩薩の

【自覺】自ら正覺を成じたる無師獨覺の佛を言ふ。

【取】取求して愛著を起すこと。

【阿鼻】(Avyōhi)阿鼻言の略、無間、無救等と譯す。八熱地獄の最下(第八)閻浮提の下二百山河にある極苦の處にして、墮したる者は苦を受くること間なきが故に此名あり。

無上の道を得しめたまふ、自覺の法は是の如し無量の境を壊せずして、能く無數の刹に遊び一切の有を取せず、彼の自在なること例の如し無比の歡喜もて、諸佛は常に清淨にして

虛空に等しき如來たりと念ず、彼は是れ具足の願なり

一一の衆生の故に、阿鼻地獄の中にて

無量劫に燒煮せらるるも、心淨きこと最勝の如し

身と壽命とを惜まず、常に諸佛の法を護り

具足して忍辱を行ぜば、彼如來の法を得ん

爾時、光明十世界を過ぎ、遍く東方の百世界を照せり。乃至上方も亦復是の如し。彼

一一の世界の中に、百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天、世界の有ゆる一切のもの悉く

現す。此に佛、蓮華藏の師子座の上に坐したまひ、十佛世界摩數の菩薩の眷屬有りて圍繞

せるを見るが如く、彼一一の世界の中の、百億の閻浮提も、亦復是の如し。佛の神力の故

に、十方各一大菩薩有り、各十世界摩數の菩薩の眷屬と俱に、佛の所に來詣せるを

見る。謂ゆる文殊師利、乃至賢首等なり。是諸の菩薩の從來せし所の國は、金色の世界

乃至如寶色の世界なり。各本國の不動智佛、乃至伏怨智佛の所に於て、梵行を淨修せり。

爾時、一切處の文殊師利、偈を以て頌して曰はく、

【如來云云】此類は明じて十劫あり初一劫は總括の徳の充滿せることを頌し、後九劫は別して縁に従ひ化用を起すことを説く。

【最後身】小乗にては三界見思の二業を斷じ將に無餘涅槃に入らんとする利那身を言ひ、大乘にては佛果に至らんとする金剛無間道の最後身を言ふ。今大乘の意にして八相示現の應身を指す。

【修行】一定の地域を廻り歩むこと坐禪等を行じて睡眠を催すとき、之を防がんが爲などに行するなり。今は佛の開始の時七歩を行き給ひしと云ふを指す。

【明行】佛十號の一に明行是とあり明は諸法を證ることの明なるを言ひ、行とは三學止

如來は、諸法の、幻の如く虚空の如きを覺りたまひ心淨くして障礙無く、群生の類を調伏したまふ或は初め生れたまひし時に、妙色は金山の如く是最後身に住して、照明すること滿月の如きを見る或は修行の時に、無量の功徳を攝し念慧善く具足せる、明行の人師子なるを見る或は明淨の眼もて、觀察して十方を照すを見る或は時に戲笑したまふを見る、衆生の樂欲するが故に或は師子吼し、清淨の無比の身にて

末後の生を示現し、説きたまふ所實に非ざること無きを見る或は出家の時に、一切の縛を解脱して諸佛の行を修習し、常に樂ひて寂滅を觀するを見る或は道場に坐したまひて、善く一切法を覺り或は諸の功徳の岸に到り、癡闇煩惱の滅するを見る或は天人の尊として、大悲心を具足することを見或は法輪を轉じて、諸の群生を度脱せしむるを見る或は無畏の吼、儀容甚だ微妙にして

觀を修行するを言ふ。如來は明行を満足と稱せらる。明行足と稱せらる。

【師子吼】佛の菩薩を獅子の無畏音に喩ふ。其百獸を恐怖せしむること。恰も佛音の一切有情の迷妄を覺醒せしむるに似たり。唯我獨尊と説き給ひしことを指す。

【一切衆生】繫縛の意にして王位、妻子眷屬等の繫累關係を言ふ。

【世間の塵網】佛は世間の塵網を照し迷妄を顯悟導引し給ふが故に世間の塵網を以て今は佛人滅し給ひしを以て永に世間の塵網は滅したりと言ふ。

【善逝の法云云】此頌は十偈より成り、初、偈は法身を明し、次四偈は解脫を説き、後四偈は般若を頌す。

一切世を調伏し、神力障礙無きを見る。或は寂靜の心もて、世間の燈の永へに滅するを見。或は十方の尊として、自在の法を顯現したまふを見る。

爾時、光明百の世界を過ぎて、遍く東方の千の世界を照せり。乃至上方も亦復是の如し。彼一一の世界の中に、百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天、世界の有ゆる一切のもの悉く現す。此に佛、蓮華藏の師子座の上に坐したまひ、十佛世界摩數の菩薩の眷屬有りて圍繞せるを見るが如く、彼一一の世界の中の百億の閻浮提も亦復是の如し。佛の神力の故に、皆十方各一大菩薩有りて、各十世界摩數の菩薩の眷屬と俱に、佛の所に來詣せるを見る。謂ゆる文殊師利、乃至賢首等なり。是諸の菩薩の從來せし所の國は、金色の世界、乃至如寶色の世界なり。各本國の不動智佛、乃至伏怨智佛の所に於て、梵行を淨修せり。

爾時、一切處の文殊師利、偈を以て頌して曰はく、善逝の法は甚深にして、相も無く亦行も無し。業生顛倒するが故に、次第に一切に現じたまふ。我我所有ること無く、彼境界は空寂なり。

善逝の身は清淨にして、自ら覺りて諸塵を離れたまふ。等覺の明解脫は、無量にして數ふべからず。

爾時、一切處の文殊師利、偈を以て頌して曰はく、善逝の法は甚深にして、相も無く亦行も無し。業生顛倒するが故に、次第に一切に現じたまふ。我我所有ること無く、彼境界は空寂なり。

善逝の身は清淨にして、自ら覺りて諸塵を離れたまふ。等覺の明解脫は、無量にして數ふべからず。

善逝の身は清淨にして、自ら覺りて諸塵を離れたまふ。等覺の明解脫は、無量にして數ふべからず。

善逝の身は清淨にして、自ら覺りて諸塵を離れたまふ。等覺の明解脫は、無量にして數ふべからず。

善逝の身は清淨にして、自ら覺りて諸塵を離れたまふ。等覺の明解脫は、無量にして數ふべからず。

【我我病】己我の
 身神、自己主觀の
 中心たるものにし
 て常一主宰の因義
 を具へ自在を性
 すと信し佛敎にて
 ほ吾人の主宰する
 我の實行にあらざ
 るよし、諸法無我
 を説き、安堵より
 佛する煩惱にて
 其自性なしと云ひ
 故に其我の所有た
 る我前も亦有るこ
 となしと眞ふ。

【等覺】普賢諸位
 中の第五十一位に
 して、因位の最上
 位なり、始末ど佛
 果の正覺に等しき
 位に等覺と言ふ。

【善】佛十徳の
 一、善説(びんご)は
 佛徳に於て好去
 性用ともす。佛
 は智恵を以て諸惑
 を断じ、佛果に趣
 を出で、佛果に趣
 き、果轉せざるを
 以て善聖と言ふ。

【空界入】五陰(五
 蘊)十八界、十二入
 (處)の三科(物理

如來光明覺品第五

無邊の世界の中に、因縁和合して起る
 諸の陰界入無く、永へに生死の苦を離れ
 世間の數に在らず、故に人師子と號けたてまつる
 内外俱に解脱し、未來常に自ら空にして
 一切の虚妄を離る、諸佛の法は是の如し
 愛と煩惱の煩惱とを離れ、長流長く轉ぜず
 正覺して諸法を解り、無量の衆生を度したまふ
 一念不滅の相もて、樂ひて寂滅の法を觀じ
 其心に所著無く、佛の自在は無量なり
 善く因縁の法と、業報及び衆生を知る
 最勝無礙の智は、甚深にして思議し難し
 普く十方界を見て、諸佛の刹を嚴淨し
 如來は虚妄を離れて、無量の業を度脱したまふ
 佛智は鍍金の如く、一切の有は有に非ず
 其體に化すべき所に隨ひて爲に清淨の法を説きたまふ
 爾時、光明千の世界を過ぎて、遍く東方の萬世界を照せり。乃至上方も亦復是の如し、
 彼一一の世界の中に、百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天、世界の有ゆる一切のもの、悉

的、心理的制約に
よる分類)にして
一切萬有の分類す
べし制約なり。
【長流】生流、流轉
の三界の長流なり

【諸の人天云云】
此類は十偈より成
り、慈悲、善、信心
念、佛業、長時業、
無間業、神通業、
觀身實相業、觀心
實地業、神遊業、
分別佛上業、了知
多佛業等の十種の
淨業を修すべきこ
とを勸進す。
【清涼の慧】煩惱
の無苦を脫離せし
智恵の義。
【四威儀】菩薩善
戒經に依づる行、
住、坐、臥の四事に
して、常に戒律的
の所作為言ふ。

く現す。此に佛、蓮華藏の師子座の上に坐したまひて、十佛世界塵數の菩薩の眷屬有りて
圍遶せるを見るが如く、彼一一の世界の中の、百億の閻浮提も亦復是の如し。佛の神力の
故に。皆十方各一大菩薩有り。各十世界塵數の菩薩の眷屬と俱に、佛の所に來詣せる
を見る。謂ゆる交殊師利、乃至賢首等なり。是諸の菩薩の從來せし所の園は、金色の世
界、乃至如實色の世界なり。各本國の不動智佛、乃至伏怨智佛の所に於て、梵行を淨修
せり。

爾時、一切處の文殊師利、偈を以て頌して曰はく、

諸の人天の樂を離れて、常に大慈心を行じ

諸の群生を救護せよ、是れ彼淨妙の業なり

一向に如來を信じ、其心退轉せず

諸佛を念ずることを捨てざれ、是れ彼淨妙の業なり

永く生死の海を離れ、佛法の流を退かずして

善く清涼の慧に住せよ、是れ彼淨妙の業なり

身の四威儀の中に、佛の深き功德を觀じて

晝夜常に斷ぜざれ、是れ彼淨妙の業なり

三世の無量を知りて、懈怠の心を生ぜず

常に佛の功德を求めよ、是れ彼淨妙の業なり

【非色の相】佛國
 土中の法性土なり
 法性土は如來の法
 身の所依にして、
 非心非色にして、
 空の如く一切處に
 徧滿して而も把握
 すべからざるを以
 て物質にあらず
 (非色)。而も思慮
 を離れたるものな
 れば非心なり。

身の如實の相を觀じ、一切皆寂滅にして
 我非我の著を離れよ、是れ彼淨妙の業なり
 衆生の心を觀察して、虛妄の想を遠離し
 實の境界を成就せよ、是れ彼淨妙の業なり
 能く無量の土を稱り、悉く一切の海を飲み
 神通の智を成就せよ、是れ彼淨妙の業なり
 諸佛の國の、色相と非色の相とを計り數へて
 一切を盡して餘すこと無かれ、是れ彼淨妙の業なり
 無量の佛土の座、一座を一佛と爲し
 悉く能く其數を知れ、是れ彼淨妙の業なり

爾時、光明萬世界を過ぎて、過く東方の十萬世界を照せり、乃至上方も亦復是の如し。
 彼一一の世界の中に、百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天、世界の有ゆる一切のもの、悉
 く現す。此に佛、蓮華藏の師子座の上に坐したまひ、十佛世界座數の菩薩の眷屬有りて圍
 遶せるを見るが如く、彼一一の世界の中の百億の閻浮提も、亦復是の如し。佛の神力の故
 に。皆十方各一大菩薩有り、各十世界座數の菩薩の眷屬と共に、佛の所に來詣せるを
 見る、謂ゆる文殊師利、乃至賢首等なり。是諸の菩薩の、從來せし所の國は、金色の世
 界、乃至如實色の世界なり。各本國の不動智佛、乃至伏怨智佛の所に於て、梵行を淨修

せり。

爾時、一切處の文殊師利、偈を以て頌して曰はく、

若し色性と大神力を以て、而も調御士を望見せんと欲せば
是れ則ち瞋目顛倒の見なり、彼は最勝の法を識らずと爲す

如來身の色形相處は、一切の世間能く觀る莫し

億那由劫に思量せんと欲するも、妙色の威神は極むべからず

相好を以て如來と爲すに非ず、無相離相の寂滅の法なり

一切具足せる妙境界は、其所應に隨ひて悉く能く現じたまふ

諸佛の正法は量るべからず、能く分別して其相を説くこと無し

諸佛の正法は合散無く、其性本來常に寂滅なり

陰數を以て如來と爲さず、取相を遠離して眞實に觀すれば

自在の力もて決定して見ることを得、言語道斷にして行處滅す

身心に異相無きことを等觀し、一切の内外悉く解脫すれば

無量の億劫にも不二の念、善逝は深遠にして所著無し

普く妙光明を放ちて、遍く世の境界を照すは

淨眼の一切智にして、自在深廣の義なり

一能く無量と爲り、無量能く一と爲り

【若し色性云々】此頌は德じて十一
傷より成り、初六
傷は佛の體性は寂
滅にして情塵を離
れたることを頌し
後五傷は佛の妙用
自在を説く
【調御士】佛十號
の一、梵に Indra
の一名、釋尊の
富樓沙曇羅婆提
と云ひ、調御士夫
可化丈夫調御師、
丈夫調御者等と譯
す。如來は大丈夫
の力用を具して、
一切の煩惱惑塵を
調伏制御し給ふが
故に此名あり
【瞋目】眼病の一
種。瞋めかすむ病
にして、今は虛妄
に物を見て定見を
得ることを表す
【合散】合は利合
散は不和合なり
諸法は緣に應じて
現するを以て散な
く而も其緣如な
るを以て諸相を離
る。故に合もなく
散もなし

【除敷】色受想行識の百億の集合體たる吾人の肉體を云ふ。

【自在の力云云】佛は我執なく實相を觀するを以て、差別の形相に隨つて轉ずることなし

【行處】行は心識の作用即ち思量分別なり。處は領域なり、故に思量の境界を言ふ。

【最勝の自覺云云】此頌は總じて十偈より成り、初五偈は佛法の意思を歡じ、後五偈は悟入の方便を説く。

如來光明覺品第五

諸の衆生の性を知り、一切處に隨順す
身は從來する所無く、去るも亦至る所無し
虛妄は眞實に非ずして、種種の身有ることを現す

一切の世間は、皆妄想より生ず
是諸の妄想の法は、其性未だ曾て有らず
是の如きの眞實の相は、唯佛のみ能く究竟したまふ

若し能く是の如く知らば、是れ則ち導師を見たてまつるなり
爾時、光明十萬の世界を過ぎて、遙く東方の百萬世界を照せり。乃至上方も亦復是の如し。彼一一の世界の中に、百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天、世界の有ゆる一切のもの悉く現す。此に佛、蓮華藏の彌子座の上に坐したまひ、十佛世界塵數の菩薩の眷屬有りて圍遶せるを見るが如く、彼一一の世界の中の、百億の閻浮提も亦復是の如し。佛の神力の故に。皆十方各大菩薩有りて、各十世界塵數の菩薩の眷屬と俱に、佛の前に來詣せるを見る。謂ゆる文殊師利、乃至賢首等なり。是諸の菩薩の從來せし所の國は、金色の世界、乃至如實色の世界なり。各本國の不動智佛、乃至伏怨智佛の所に於て、梵行を淨修せり。

爾時、一切處の文殊師利、偈を以て頌して曰はく、
最勝の自覺は世間を超え、無依の殊特は能く勝る莫し

【大仙】 佛の別號

【吉祥】 相好具足して圓滿なるを言ふ。前註を見よ。

【諸染】 染は染汚なり、煩惱なり凡て淨心を汚す迷妄不善の法を言ふ。

【邊想】 佛法の中間道を離れて、一異有無、斷常等の邊極を執する思想を言ふ。

【方便】 眞如は情慮言説を離れたるものなれども尙假りに言説を以て宣説することあり。如斯は方便して轉ずべからざるを轉ずと言ふなり

大仙は一切の有を化度して、淨妙の諸の功德を具足したまふ

其心に染無く處所無く、常に無想到住して亦依も無く

永く吉祥に處して能く毀る無きは、威徳尊重の大導師なり

本より淨明にして衆冥を滅し、永く諸染を離れて塵穢無く

寂然不動にして邊想を離る、是を善く如來の智に入ると名く

善逝の深法の海に入らんと欲せば、身心の虚妄の想を遠離し

諸法の眞實性を解了して、永く疑惑の心に隨順せざれ

一切の世界は如來の境にして、悉く能く爲に正法輪を轉ずるも

法の自性に於ては轉ずる所無し、無上の導師は方便もて説きたまふ

諸法を曉了して疑惑無く、有無の妄想は永く已に離れ

差別の種種の念を生ぜざれば、正意もて佛の菩提を思惟するなり

諸法を諦了し分別する時は、自性有ること無く假名の説なり

諸佛の眞實の教に隨順すれば、法は一相に非ず亦多にもあらず

衆多の法、中に一相無く、一法の中に於ても亦多無し

若し能く是の如く諸法を了らば、是れ諸佛の無量の徳を知らん

諸法及び衆生と、國土世間とを悉く寂滅なりと觀察して

心に所依無く妄想せざれば、是を佛の菩提を正念すと名く

【大智は量有る云云】已下の類は二十偈より成り、佛の善巧方便力の十種を擧げて讃歎す【方便】三義あり一は佛果自在の徳を修成する加行の徳力、二は差別的智慧を無碍絶對の智慧に對して言ひ、三は言に即する權の意なり。

如來光明覺品第五

衆生と諸法と及び國土とは、分別了知して差別無し。善能く自性の如しと觀察せば、是れ則ち佛法の權を了知せるなり。爾時、光明百萬の世界を過ぎて、趣く東方の一億世界を照せり。乃至上方も亦復是の如し。彼一一の世界の中に、百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天、世界の有ゆる一切のもの悉く現す。此に佛、蓮華藏の師子座の上に坐したまひ、十佛世界摩數の菩薩の眷屬有りて圍遶せるを見るが如く、彼一一の世界の中の、百億の閻浮提も亦復是の如し。佛の神力の故に、皆十方各一大菩薩有りて、各世界摩數の菩薩の眷屬と俱に、佛の所に來詣せるを見る。謂ゆる文殊師利、乃至寶首等なり。是諸の菩薩の從來せし所の國は、金色の世界、乃至如寶色の世界なり。各本國の不動智佛、乃至伏怨智佛の所に於て梵行を淨修せり。

爾時、一切處の文殊師利、偈を以て頌して曰はく、大智は量有ること無く、妙法は倫匹無し。究竟して能く彼、生死の大海の岸に渡りて壽命に終極無く、永く已に熾然を證るれば彼は大功德を成ず、是れ則ち方便の力なり。諸佛の深法に於て、隨ひ覺ること自性の如く常に三世の法を觀じて、正足の相を生ぜず。

所緣の境に了達して、未だ曾て妄想を起さず
 彼は不思議を樂ふ、是れ則ち方便の力なり
 常に樂ひて衆生を觀するも、而も衆生の想無く
 身趣有ることを示現するも、永く諸趣の想を離れたり
 内には常に禪寂を樂ひて、而も心想に繋がるること無く
 彼の心に所著無し、是れ則ち方便の力なり
 方便もて善く觀察し、諦かに諸法の相を了り
 専ら念じ正しく思惟して、常に涅槃の性を行じ
 解脫の道を樂ひて、平等の慧を具足すれば
 彼は寂滅の法に住す、是れ則ち方便の力なり
 調御士、最勝の佛の菩提に隨順して
 一切智を攝取すれば、廣大なること法性の如く
 善く眞實の諦に入り、諸の群生を教化すれば
 彼は最勝の意を成す、是れ則ち方便の力なり
 佛は深き法義を説き、悉く能く隨應して知り
 深廣の智慧に入りて、諸の障礙を滅除したまふ
 一切至處の道は、是處に悉く能く到りて

【有色】無色界に對す。三界の中欲界色界の二を言ふ
【有想】無想天は非想なるを以て之に對して、三界中二界八地（無想天を除く）を言ふ。

是自覺の道を行ず、是れ則ち方便の力なり
心は猶し虚空界のごとく、亦變化の法の如く
一切所依の性にして、是相は則ち非相なり
涅槃の性を行ずるも、猶し虚空の相の若くにして
能く深妙の境に到る、是れ則ち方便の力なり
常に晝夜、晦明、日月の數
年歳の時劫の分を記念し、亦隨ひて觀察して知り
一切諸の世界の、始終、成敗の相を
悉く能く諦かに了知す、是れ則ち方便の力なり
一切群萌の類は、業に隨ひて生死を受け
有色及び無色に、有想亦非想に
彼彼の姓と名號と、所趣とを諦かに了知し
此不思議を得るは、是れ則ち方便の力なり
一切の過去世、未來現在の法を
佛の所説に隨順して、善く念じて諦かに觀察し
三世の平等なることを覺りて、其眞實の相の如くなるは
是れ諸の深妙の道にして、無比の方便の力なり

【難行の法を受持】
 已下の頌は二十偈を以て成り、二十偈を以て一義をなし佛の利他行(衆生濟度)を讚歎す。初二偈は化他の意を釋し、次十六偈は別して、次十六偈を説き、最後二偈は化用を頌して其體を表す。

【重網】 網も煩惱の異名なり。種種なる煩惱が交差すること網の如く、衆生其中に縛らるる時は魚鳥の如く自在を失ふ。【度】 六煩惱の一人に對して心を高ぶる精神作用なり。佛教心理學上の分類は之を不定地法の一となす。【世雄】 佛の妙號の一。佛は世間第一の猛雄者にして衆生を制服するが故に此名あり。【佛の境界】 佛の大慈悲の境界。

爾時、光嚴一億の世界を過ぎて、遍く東方の十億の世界を照せり。乃至上方も亦復是の如し。彼一一の世界の中に、百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天、世界の有ゆる一切は悉く現す。此に佛、蓮華藏の獅子座の上に坐したまひ、十佛世界摩訶の菩薩の眷屬有りて圍繞せるを見るが如く、彼一一の世界の中に百億の閻浮提も、亦復是の如し。佛の神力の故に。皆十方に各一大菩薩有りて、各十世界摩訶の菩薩の眷屬と俱に、佛の所に來詣せるを見る。謂ゆる文殊師利、乃至寶首等なり。是諸の菩薩の從來せし所の國は、金色の世界、乃至如寶色の世界なり。各本國の不動智佛、乃至伏怨智佛の所に於て、梵行を淨修せり。

爾時、一切處の文殊師利、偈を以て頌して曰はく、

難行の法を受持し、堅固にして退轉せず

日夜常に精進して、未だ曾て疲厭を起さず

已に度り難きの海を度り、大音に獅子吼したまはく

一切衆生の類を、我今當に悉く度すべしと

生死の流に漂浪し、愛欲の海に沈淪し

癡惑は重網を結び、昏冥にして大いに憍慢す

慢を離れたる堅固の土は、是を能く悉く除斷し

超勇して世雄と成る、是れ則ち佛の境界なり

【五欲】色、聲、香、味、觸の五境は欲情を引發するの因たるを以て、是を五欲と言ふ。

次に他の一説は財欲、色欲（淫欲）、名譽欲、飲食欲、睡眠欲の五を言ふ。

【有識者】有識者の指しにして轉法を指す。

【本流】三界に生死流轉す。根本的原因の義、即ち我見なり。

【吾我】我在りと我執見なり。

【獨意】獨獨の意を指す。

【邪徑】惡魔外道の邪まなる思想を指す。

【三有】有は十二因縁の一にして、生死流轉して業報を後生に受くるを言ひ、欲色無色の三界受生を三有と言ふ。

世間の諸の放逸は、長く迷つて、五欲に酔ひ

非實に妄想を興し、永く大苦の障と爲る

勤めて不放逸を修して、諸佛法を奉行し

大誓して能く彼を度したまふ、是れ則ち佛の境界なり

慧者は本際を滅し、無量の見聞きの功に

衆生は吾我に依りて、無窮に生死に轉ず

寂滅の法に入らしめんとて、最勝の教を奉行し

誓つて此妙法を宣べたまふ、是れ則ち佛の境界なり

彼苦の衆生は、孤惶にして救護するもの無く

永く諸の惡趣に淪み、三毒性に熾然にして

間無く盡ふ處も無く、晝夜常に火の焚ゆるを見て

誓つて斯等の苦を度したまふ、是れ則ち佛の境界なり

迷惑して正路を失ひ、諸の邪徑を言行し

彼群生の類の、長く大闇冥に處するを見て

爲に智慧の燈を現じ、諸佛の法を見しめんとて

誓つて能く照明と爲る、是れ則ち佛の境界なり

一切の三有の海は、深廣にして崖底無し

【本實の見】根本煩惱たる無明も、本來是れ無體にして空なり、自性あることなしと了知する證智を言ふ。

彼群生の類は、漂溺して能く救ふもの莫きを見、
彼が爲に勤めて方便して、正法の船を興造し、
普く應に度すべき所を拯ひたまふ、是れ即ち佛の境界なり

本實の見有ること無く、常に無明に依りて住し、
生死の淵に沈没して、愚癡の心迷亂す

慧者は斯苦を見て、之が爲に法橋を設け

大悲もて法を演説したまふ、是れ則ち佛の境界なり

彼生死の獄は、楚毒にして量るべきこと難く

長夜に老病死の、三苦籠ひて侵逼するを見

自ら深妙の法を覺り、専ら方便の慧を修して

誓つて斯等の苦を度したまふ、是れ則ち佛の境界なり

佛の甚深の法を聞き、信じて心に疑惑無く

十方の刹に周滿して、普く諸の法界に行き

空寂の法を觀察して、其心に恐怖すること無く

現じて一切身に同じたまふ、是れ則ち人天の師なり

爾時、光明十億の世界を過ぎて、遍く東方の百億の世界、千億の世界、百千億の世界、

億那由他の世界、百億那由他の世界、千億那由他の世界、百千億那由他の世界、不可量、不可數

億那由他の世界、百億那由他の世界、千億那由他の世界、百千億那由他の世界、不可量、不可數

不可思議、不可稱、無等無量、無分別、不可說の、虚空法界に等しき一切の世界を照せり。
乃至上方も亦復是の如し。彼一一の世界の中に、百億の閻浮提、乃至百億の色究竟天、世
界の有ゆる一切のものを悉く現す。此に情、蓮華藏の摩訶盧那の上に坐したまひ、十佛世界
摩訶の菩薩の眷屬有りて圍繞せるを見るが如く、彼一一の世界の中の百億の閻浮提も、亦
復是の如し。佛の神力の故に、皆十方の各大菩薩有りて、各十世界摩訶の菩薩の眷
屬と共に、佛の所に來詣せるを見る。謂ゆる文殊師利、乃至賢首等なり。是諸の菩薩の
從來せし所の國は、金色の世界、乃至如寶色の世界なり。各本國の不動智佛、乃至伏怨
智佛の所に於て、梵行を淨修せり。

爾時、一切處の文殊師利、偈を以て頌して曰はく、

無量無數劫を、一念に悉く觀察するに

來ること無く亦去ることも無く、現在も亦住せず

一切の生滅の法は、悉く眞實の相なるを知り

方便の岸を超越して、十種の力を具足す

無等の大名稱は、普く十方の刹に遍じて

永く生死の難を離れ、一切の法を究竟したまへり

皆悉く能く遍じて、一切諸の世界に至り

具足して能く、清淨の微妙の法を敷演したまふ

【無量無數劫】巴
下の頌は二十偈あ
り、通じて因果圓
滿の佛徳を頌す。
中に於て初六偈は
果徳を頌し、後十
四偈は圓の趣入を
明かせり。
【無等の大名稱】
佛を指す。

普く衆生の類の爲に、正心に諸佛を奉ず

是故に直心に、眞實の淨き依果を獲

隨順し分別して知り、如如の相に了達すれば

佛の自在力を得て、十方に現せざる處し

始めて佛を供養してより、樂つて忍辱の法を行じ

能く深き禪定に入り、眞實の義を觀察し

悉く一切の衆をして、歡喜して如來に向はしむ

菩薩是法を行ぜば、迷かに無上道に達らん

能く十方の佛に問ひたてまつり、其心常に湛然として

佛を信じて退轉せず、威儀悉く具足し

一切の有無の法は、有無に非ずと了達す

是の如く正しく觀察せば、能く眞實の佛を見たてまつらん

無量の淨業の心は、壇場十方に満ち

一切國土の中に、能く眞實の華を説き

衆の垢雜を滅除して、平等の法に安住せしむ

若し能く是の如く化すれば、斯人如來に等しからん

佛の妙なる音聲を聞きて、無上の法を達得し

【七覺】七覺支、七覺分とも言ひ、修道の際眞偽善惡を觀察覺了するを覺支と言ひ、善惡之を修して道に入るなり。七覺支とは、擇法、捨、持、喜、除、捨、持、念の七覺なり。

常に淨法輪を轉じ、甚深にして難し難し最勝の所説の法は、七覺の著を具足す是の如きの無上の觀は、常に諸の佛身を見たてまつる如來は空にして、寂滅なること眞に幻化のごとしと見ず見ると雖も眉見無く、盲の五色に對するが如し虛妄に相を取る者は、是人相を見たてまつらず一切所著無ければ、乃ち眞の如來を見たてまつる衆生の種種の業は、分別して知るべきこと難し十方内外の身、種種無量の色あり佛身も亦是の如く、一切十方に滿ちて知り難きを能く知る者は、彼は是れ大導師なり譬へば無量の利は、虛空に依止して住し十方より來らず、去るも亦至る所無く世界若し成敗するも、本來所依無きが如く佛身も亦是の如く、虛空界に充滿せり

菩薩明難品第六

【菩薩明難品】緣

起の甚深より佛の境界の甚深に至る十種の甚深の法を説き、以て能信の行の中、信位の大解を明かす。其甚深問答の形式を取り、長行を以て問ひ頌を以て答ふ。簡潔なる語を以てせるが故甚だ難解なる章なり。

【爾時、文殊六六】

第一に轉起甚深を明す章にして文殊菩薩の問より初む

【心件】如来藏心

即ち阿耨多羅三藐三菩提の心と、この語は真相より發せし本分なるが故に本末無碍の理より如来藏

【心】と云ふ

【善趣】人天天上

二界を言ひ、之に反して地獄、餓鬼、畜生の三界を三惡趣又は惡趣と云ふ

【業は心を知るが如く】業は心を知るが如く

【云云】已下難を明かす。業とは善惡

【業は心を知るが如く】業は心を知るが如く

爾時、文殊師利菩薩、覺首菩薩に問うて言はく、佛子、心性は是れ一なるに、云何が能く種種の果報を生ずるや。或は善趣に至り、或は惡趣に至り、或は諸根を具ふるあり、或は具へざる者あり、或は善處に生じ、或は惡處に生じ、端正、醜陋、苦樂の不同ありや。業は心を知らず、心は業を知らず、受は報を知らず、報は受を知らず。心は受を知らず、受は心を知らず。因は縁を知らず、縁は因を知らず。智は法を知らず、法は智を知らず。一爾時、覺首菩薩、偈を以て答へて曰はく、

衆生を化せんが爲の故に、乃ち能く斯義を問へり
 諸法の如實の性を、我説かん、仁、諦かに聽け
 諸法は自在ならず、實を求むるに得べからず
 是故に一切の法は二俱に相知らず
 譬へば駛水の流は、流れ流れて絶え已むこと無けれども
 二俱に相知らざるが如く、諸法も亦是の如し
 亦明燈の焰は、焰え焰えて暫くも停らざるも
 二俱に相知らざるが如く、諸法も亦是の如し

業にして、能依、心は所依の心性なり【受は第六云】受は能受の因たる種子識、根は所覺の果報たる果報識なり。

【心は愛云云】この受は能熏（能熏習）の七轉識にして心し、所熏の第八識を云ふ。【因は緣云云】種子を因と言ひ、所依の本識を緣と言ふ。

【智は法云云】智は能知にして諸識の見分（主觀）の作用にして、心中所變の相分たる對境を見照する作用を言ひ、法は所知即ち諸識の相分（對境作用）に於て、吾人の心識が所緣の影響を現出するその所緣となる對境（境）を言ふ。此問の大意は緣起根の本たる如來藏識の一なるに、種種の果報を異する即ち

亦長風の起り、鼓擣して動ゆを生ずるも、二俱に相知らざるが如く、諸法も亦是の如し、亦深廣の地の、展轉して相依住するも、二俱に相知らざるが如く、諸法も亦是の如し、眼耳鼻舌身、心意諸情の根は

此に因りて衆苦を轉ずるも、而も實に所轉無し法性に所轉無きも、示現の故に轉ずること有り、彼に於て示現無ければ、示現にも所有無し、眼耳鼻舌身、心意諸情の根は

其性悉く空寂なれば、虚妄にして眞實無し、觀察し正思惟せば、有の者にも所有無し、彼見は顛倒ならず、法眼清淨の故に、虚妄も虚妄に非ざるも、若は實若は不實なるも、世間も出世間も但假の言説有るのみ

爾時、文殊師利菩薩、財首菩薩に問うて言はく、「佛子、一切の衆生は衆生に非ざるに、如來は云何が衆生の時に隨ひ、命に隨ひ、身に隨ひ、行に隨ひ、欲樂に隨ひ、願に隨ひ、意に隨ひ、方便に隨ひ、思惟に隨ひ、籌量に隨ひ、衆生見に隨ひて、之を教化したまふ

緣起の諸法種種差別さるる理は如何。各自の業の量に依るとせば、心業、受報、心愛、因緣智法等の相關を如何にするか、重智關係成立せざれば緣起成立せざべし如何と云ふ緣起甚深の義を問ひしなり。

【諸法自在云云】已下五偈を以て如來義の四義を四喻を引いて答ふ。一は相續の因果は徳に依るの義、二は互に因果となりて縁を生じ、三は受重の義、四は相依持する義なり。

【前時文殊云云】第二に教化甚深を明かす。
【明智】無明を離れたる智慧即ち佛菩薩の智慧なり。
【旋火輪】火輪車のこと、炬火等を振り廻す時に見る火の輪を言ふ。

や、

爾時、財首菩薩、偈を以て答へて曰はく、

明智の心の境界は、常に寂滅の行を樂ぶ。

我今實の如く説かん、仁者、善く諦かに聽け

分別して内身を觀するに、我が身は何の所有ぞ

若し能く是の如く觀せば、彼は我の有無に達せん

身は一切分を觀するに、依止する所無くして住す

諦かに是身を了る者は、身に於て著する所無けん

能く身の如實を解り、明に一切の法に達せば

法は悉く虚妄なりと知りて、其心に所染無けん

身命相隨順し、展轉して、更相因るは

猶し旋火輪の如く、前後知るべからず

智者は能く、一切の行は無常

諸法は空にして無我なることを觀察して、則ち一切の相を離る

因縁の起す所の業は、無我にして猶し夢の如く

果報の性は寂滅して、前後異相無し

一切世間の法は、唯心を以て主と爲す

【世間の有ゆる云】世間は空なりと雖も、教の必要あり且つ世用の成立する所以を頌し、進難に答ふ。

【爾時文殊云云】第三に業界の甚深の義を説く。

【四大】地、水、火、風の四大種を言ふ。印度古代の物理学は、萬有をこの四元素に分類し、佛教は内變を此の四大の假和合なり教ふ。

【現報】現在の間に作業が現世の間に報ひ來るを現報と言ひ、一生を隔てて來世に來るを後報と言ふ。
【行ふ所の諸業云云】此の類は、空の難たる、我空のみならず、法空なり、何に因りてか業果ありと説くやとの間に答ふるなり。十偈より成り、初一偈は法

樂に隨ひて相を取する者は、皆悉く是れ顛倒なり

世間の有ゆる法は、一切悉く虚妄にして

諸法は、眞實に二有ること無しと解ること能はず

一切の生滅の法は、皆悉く縁より起り

念念に速かに滅に歸して、始終異相無し

爾時、文殊師利、寶首菩薩に問うて言はく、「佛子、一切の衆生は四大にして、悉く我

に非ず、我所に非ざるに、云何が衆生は、或は苦を受け樂を受け、或は惡を作し善を作し、

或は内端正なるあり、或は外端正なるあり、或は少しの報を受け、或は多くの報を受け、

或は現報有り、或は後報有りや。然も諸法の性には善も無く、惡も無し。」

爾時、寶首菩薩、偈を以て答へて曰はく、

行ふ所の諸業に隨ひて、果報を受くることも亦然なり

造者は所有無し、諸佛は是の如く説きたまふ

猶し明淨なる鏡の、其面に隨ひて像現するも

内外所有無きが如く、業性も亦是の如し

亦田の種子は、各各相知らずして

自然に能く因と作るが如く、業性も亦是の如し

亦大幻師の、彼四衢の道に在りて

說、後九偈は喻を以て答ふ。
【大幻師】巧妙なる幻術（現今の魔術の如きもの）師のこと。殊に印度に流行せしもの如し。

【轉輪王】(Catyavartīn) 轉輪聖王、轉輪聖帝とも云ふ。須彌四洲を統領する王にして、輪寶を轉じて一切を威服せしむるが故に轉輪王と言ふ。人壽八萬歳以上の人に出現し、三十二相を具へ、七寶四徳の果報を有つ聖王なり。

【爾時文殊云云】第四に佛の説法甚深を明かす。

種種の色を示現するが如く、業性も亦是の如し
匠の木人を造りて、能く種種の聲を出さしむるも
彼には我と非我と無きが如く、業性も亦是の如し
亦衆の鳥類の、聲を出して音同じからず
能く種種の聲を作すが如く、業性も亦是の如し
親の因縁會へば、生を受くるも來者無く
諸根各別異なるが如く、業性も亦是の如し
大地獄の中の、衆生苦惱を受くるも
苦惱來處無きが如く、業性も亦是の如し
亦轉輪王の、勝れたる七寶を成就するも
彼に從來する所無きが如く、業性も亦是の如し
亦諸の世界に、成る有り或は敗るる有るも
成敗に來去無きが如く、業性も亦是の如し
爾時、文殊師利、德首菩薩に問うて言はく、
一佛子、如來は唯一法をさとののみ。云何が乃ち無量の諸法を説き、音聲遍く無量の世界に満ちて、悉く能く無量の衆生を教化し、無量の身を出し、無量の身を現じ、無量の衆生の心意を了知し、無量の神足自在を示現し、無量無邊の世界を示現し、無量の殊勝

【而も法性云云】問難の大意は、一體にして多用なるは相背するにあらざるか、而も法性中に種種の差別を求むるも得べからず、何ぞ能く一體にして種種應現するやとの意なり。【佛子云云】この頌に十偈あり。初一偈は問者を歎じ、後九偈は喩を擧げて一能く多たるを得る無碍回融を明して難問に答ふ。

莊嚴を示現し、無量の種種の境界を示現したまふや。而も法性は分別するに實に不可得なり。

爾時、德首菩薩、偈を以て答へて曰はく、

佛子、乃ち能く、甚深微妙の義を問へり

智者若し此を知らば、常に樂ひて功德を求めん

猶し地性は一なれども、能く種種の物を持し

二異を分別せざるが如く、諸佛の法も是の如し

猶し火生は一なれども、能く世間の物を焼き

火性に分別無きが如く、諸佛の法も是の如し

猶し大海の水は、注ぐに百の川流を以てするも

其味に別異無きが如く、諸佛の法も是の如し

猶し風性は一なれども、一切の物を吹動し

風性に分別無きが如く、諸佛の法も是の如し

猶し龍の雷震して、普く一切の地に雨らすも

雨滴に分別無きが如く、諸佛の法も是の如し

猶し大地は一なれども、能く種種の芽を生じ

地性に別異無きが如く、諸佛の法も是の如し

【大千】 大千世界

【爾時文殊云云】

第五に華田甚深の

義を難問す。

【福田】 如來又は

比丘のこと。を云

ふ。或は佛亦是僧

に供養すれば福徳

を生ずること。田

地の種種なる收獲

あるが如きを以て

【色】 色相に好醜

の別あるを意味す

【性】 種性なり。印

度史の四性の別は

文化史上非常に有

猶し日に雲霞無ければ、普く能く十方を照して
 光明に異性無きがごとく、諸佛の法も是の如し
 猶し空中の月は、世間に見ざる暗きも
 一切處に至るに非ざるが如く、諸佛の法も是の如し
 猶大梵王は、普く大千に顯現するも
 其身に別異無きが如く、諸佛の法も是の如し
 爾時、文殊師利、目首菩薩に問うて言はく、「佛子、如來の福田は等一にして異なること無
 きに、云何が布施の果報同じからずして、種種の色、種種の性、種種の家、種種の根、種
 種の財、種種の奇特、種種の眷屬、種種の自在、種種の功德、種種の慧有りや。如來は平
 等にして怨親有ること無し。」
 爾時、目首菩薩、偈を以て答へて曰はく、
 譬へば大地は一なるも、能く種種の芽を生じ
 彼に於て怨親無きが如く、佛の福田も亦然なり
 譬へば水は一味なるも、器に因るが故に同じからざるが如く
 諸佛の福田は一なるも、衆生の故に異なる有り
 譬へば大幻師の、能く掌をして歡喜せしむるが如く
 諸佛の聖福田も、願に隨ひて欣悅せしむ

【辯才王】(Sarasvati) 大辯才天、辯才天、大辯才天、辯才天等と稱す。金光明經、護法の辯才を有して、無碍の辯才を有して、佛法を流布し、壽命を増益し、怨敵を退散し、財寶滿足を散給し、佛して衆生を喜ばしむと云ふ。因に我が國の七福神たる辨財天は混同されしものなり。

【毘嵐風】(Vata) (Vata) 迅猛風と譯され、風速甚だ急なる觸るる所壞散せられざるなしと云ふ大暴風なり。

【火劫】世界の壞劫(佛敎の世界構造説に因れば、成住壞空の四劫に於て生滅變化すと説かざる)時に世界(三層天以下)を燒滅せしむる大火。

【第六に正敎の甚深なる所以を説く】難問の大意は、教

譬へば辯才王の、能く衆をして歡喜せしむるが如く

諸佛の聖福田も、衆生をして快樂せしむ

譬へば明淨鏡の、對に隨ひて衆像を現するが如く

諸佛の聖福田も、衆生の故に異なる有り

譬へば大藥王の、一切の毒を消滅するが如く

諸佛の聖福田も、能く煩惱の患を滅す

譬へば日の出づる時は、能く一切の闇を除くが如く

諸佛の聖福田も、普く十方界を照す

譬へば淨滿月の、普く四天下を照すが如く

諸佛の聖福田も、平等にして遍黨無し

譬へば毘嵐風の、一切の地を震動するが如く

諸佛の聖福田も、能く三界の有を動す

譬へば火劫起れば、天地燒けざる塵きが如く

諸佛の聖福田も、能く一切の有を燒く

爾時、文殊師利、進首菩薩に問うて言はく、「佛子、衆生は如來の敎を見て、諸の煩惱を斷ずと爲すや、色受想行識、欲界、色界、無色界の癡愛を知りて、諸の煩惱を斷ずと爲すや、若し色受想行識、欲界、色界、無色界の癡愛を知りて、諸の煩惱を斷せば、如來の

法及び勤行の兩立せざるにあらざるを同難す。即ち教法に由り求道可能ならば、勤行の要なし、若し勤行に因らば、教法の要なしとの教力相違の難なり。

【佛子云云】 已下の頌は十偈より成り、初一偈は總説次に、偈は勤行精進は教法に順すべきことを辨じ、後八偈は喩を以て、懈怠は教法に違背する義を明して答ふるなり。

教法は何の増損する所ぞ。

爾時、進首菩薩、偈を以て答へて曰はく、

佛子、善く諦かに聽け、我如實の義を説かん

或は速かに出要する有り、或は解脱し難き有り

若し無量の諸の過惡を、除滅せんことを求めんと欲せば

應當に一切の時に、勇猛に大精進すべし

譬へば微少の火は、樵の濕ふときは則ち能く滅するが如く

佛の教法の中に於ても、懈怠の者は亦然なり

譬へば人の火を鑽るに、未だ出でざるに、數休息せば

火勢隨つて止滅するが如く、懈怠の者も亦然なり

譬へば淨き火珠も、縁を離れて而も火を求むれば

畢竟得べからざるが如く、懈怠の者も亦然なり

譬へば明淨の目に、目を閉ぢて色を見んと求むるが如く

佛の教法の中に於ける、懈怠の者も亦然なり

譬へば人の手足無くして、大地を射過さんと欲するも

永く彼の意に従はざるがごとく、懈怠の者も亦然なり

譬へば大海の水を、一毛滴もて盡さんことを求むるが如く

【爾時文殊云云】第七に正行甚深の義を問うす。

【佛子云云】已下の頌は十偈より成り、初一偈は總じて難問に答へ、後九偈は喩を以て多聞のみにて修行を缺けば其徳果の至らざる所以を答ふるなり。

佛の教法の中に於ける、懈怠の者も亦然なり

譬へば火劫起るに、少水を以て滅さんと欲するが如く

佛の教法の中に於ける、懈怠の者も亦然なり

譬へば人の虚空を見て、何れ我が身満てりと言はんがごとく

佛の教法の中に於ける、懈怠の者も亦然なり

爾時、文殊師利、法首菩薩に問うて言はく、「佛子、佛の説きたまふ所の如く、法を聞受

する者は能く煩惱を斷するに、云何が衆生は守しく正法を聞きて而も斷すること能はざる

聲怒癡に隨ひ、慢に隨ひ、愛に隨ひ、忿に隨ひ、慳嫉に隨ひ、恨に隨ひ、諂曲に隨ひや、

此諸の垢法は悉く心を離れず、心に所行無ければ能く結使を斷せん。」

爾時、法首菩薩、偈を以て答へて曰はく、

佛子、善く諦かに、問ひし所の如實の義を聽け

但多聞を積むのみにて、能く如來の法に入るのみに非ず

譬へば人の水に漂はされ、渴れんことを懼れて而も渴死するがごとく

説の如く行ずること能はざる、多聞も亦是の如し

譬へば人の大いに、種種の善徳を惠施せらるるも

食せざれば自ら餓死するがごとく、多聞も亦是の如し

譬へば良醫有りて、具さに諸の方藥を知るも

【當時交殊云云】第八に助道甚深の義を明す。

【檀波羅蜜已下】

檀、尸、摩提、毘梨耶、禪、般若の六波羅蜜と云ふ。檀は(一五二)にして布施と譯し尸は(五二)にして持戒と譯し、摩提は(六三)にして忍辱と譯し、毘梨耶は(七三)にして清淨と譯し、禪は(八三)にして靜慮(禪定)と譯し、般若は(九三)にして智慧と譯す。以上の六行を以て菩薩の六度の行と云ひ、佛果の到る因行なり。波羅蜜は(Pratimā)にして到彼岸と譯す。

【慈悲喜捨】是を四無量と云ひ、菩薩の利他心の廣大なることを表すなり。慈は一切衆生に樂を與ふる心、悲は苦を拔き安ん

自ら疾みて救はざらん如く、多聞も亦是の如し
譬へば貧窮の人、日夜に他の寶を數へ、
自ら半錢の分無きが如く、多聞も亦是の如し

譬へば帝王の子は、應に極み無き樂を受くべきも
業障の故に貧苦なるが如く、他聞も亦是の如し
譬へば尊嚴の人の、善く諸の音樂を奏して
彼を覺はしむるも自ら聞かざるが如く、多聞も亦是の如し

譬へば盲瞽の人、本習ひしが故に能く畫きて
彼に示すも自ら見ざるが如く、多聞も亦是の如し
譬へば海の導師の、能く無量の衆を度し
彼を拯ふも自ら濟はざるが如く、多聞も亦是の如し

譬へば人の大業に處して、善く勝妙の事を説けども
内に自ら實徳無きがごとく、多聞も亦是の如し
爾時、文殊師利、智首菩薩に問うて言はく、佛子、佛法の中に於ては、智慧を首と爲す

に、如來は何が故に、或は衆生の爲に、檀波羅蜜、尸波羅蜜、摩提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、
禪波羅蜜、般若波羅蜜、慈悲喜捨を讚歎したまへるや。此一の法は皆無上菩提を得ること
と能はざらん。」

ずる心、喜は衆生
心、捨は一切衆生
を平等に愛する心
なり。
【知り難き云云】
この頌に十偈あり
初偈は問者を對じ
聽を勸む。次の二
偈は證果には正行
の外助道の必要を
説き、後七偈第三
第四偈を別釋する
なり。

爾時、智首菩薩、偈を以て答へて曰く、
知り難きを而も能く知りて、衆生の心に隨順す
佛子、問ひし所の義を、諦かに聽け、我今説かん
過去未來の世、現在の諸の導師は
未だ曾て一法のみを以て、無上の道を成ずることを得たまはず
如來は衆生の、本性に修習する所を知りて
善く應に度すべき者に順じて、爲に淨妙の法を説きたまふ
譯者には布施を讀め、慧を毀るものには持戒を讀め
瞋恚には忍辱を讀め、懈怠のものには精進を讀め
亂意には禪定を讀め、愚癡には智慧を讀め
不仁には慈悲を讀め、怒害には大悲を讀めたまふ
憂感には爲に喜を讀め、憎愛には爲に捨を讀め
是の如くして修習せん者は、漸く一切の法を解らん
譬へば宮室を造るに、基を起して堅固ならしむるが如く
應戒も亦是の如し、菩薩の衆行の本なり
譬へば牢堅の城の、諸の敵難を防禦するが如く
忍進も亦是の如く、諸の菩薩を防護す

【四等】 四無量心の舊譯語なり

【爾時文殊云云】 第九に乗菩薩の義を問難す

【法住】 正、像、末の三住にして、教法の持續する長短を言ふ

【文殊云云】 已下の頌は十偈より成り、初二偈は實理に就きて因果俱に一なることを明し、後八偈は機に別ありて佛に異なるにあらざることを明して難問に答ふ

【常得】 法爾常然にして因果に別異なしとの義

譬へば大力の王の、威徳もて天下を定むるが如く、
諸の菩薩を安穩ならしむ
譬へば轉輪王の、具さに一切の樂を受くるが如く、
四等も亦是の如く、諸の菩薩を安樂にす

爾時、文殊師利、賢首菩薩に問うて言はく、「佛子、一切の諸佛は、唯一乘を以てのみ生死を出づるを得たまふに、云何が今一切の佛利を見るに、事事同じからざるや。謂ゆる世間、衆生、說法、教化、壽命、光明、神力、衆會、佛法、法住、是の如き等の事皆悉く同じからず。一切の佛法を具せずして、而も能く無上菩提を成就する有ること無けん。」

爾時、賢首菩薩、偈を以て答へて曰はく、

文殊、法は常而にして、法王は唯一法なり

一切無礙の人は、一道より生死を出でたまふ

一切諸佛の身は、唯是れ一の法身にして

一の心、一の智慧、力無畏も亦然なり

衆生の本行の、無上菩提を求むるに隨ひて

佛利及び衆會も、說法も悉く同じからず

一切諸佛の刹は、平等に普く嚴淨するも

衆生の業行異れば、見る所も各同じからず

【爾時諸の菩薩云】第十に佛の境界の甚深にして不可思議なることを問答す。【佛子云】已下諸菩薩文殊に向ひて請問す。其大意は初に自利の徳體、次に利他の徳用、次に所益の衆生、最後に佛境界の廣大にして甚深なることを請問す。

諸佛及び佛法は、衆生能く見る莫し
佛刹、法身、衆、說法も亦是の如し
本行廣く清淨にして、一切の願を具足せる

彼人は眞實を見る、明達知見の者なり

衆生の欲と、諸業及び果報とに隨順して

各眞實を見しむ、佛力自在なるが故に

佛刹に異相無く、如來に憎愛無し

彼衆生の行に隨ひて、自ら是の如く見ることを得

是れ一切の佛、安住せる導師の咎に非ず

無量の諸の世界に、示現するも見ることも同じからざればなり

一切の諸の世界の、應に化を受くべき所の者は

常に人中の雄を見たてまつる、諸佛の法も是の如し

爾時、諸の菩薩、文殊師利に謂ひて言はく、「佛子、我等の解る所は各各に説けり。

仁者は辯才深入なり、次に應に敷演すべし。何等か是れ佛の境界なる、何等か是れ佛の境

界の因なる、何等か是れ佛の境界の所入なる、何等か是れ佛の境界の所度なる、何等か是

れ佛の境界の隨順の知なる、何等か是れ佛の境界の隨順の法なる、何等か是れ佛の境界の

分別の知なる、何等か是れ佛の境界を識る、何等か是れ決定して佛の境界を知る、何等か

是れ佛の境界の照なる、何等か是れ佛の境界の廣なる。

爾時、文殊師利、偈を以て答へて曰はく、

如來の深き境界は、其量虚空に齊しく

一切の衆生入るも、眞實に所入無し

如來の境界の因は、唯佛のみ能く分別したまふ

自餘は無量劫に、演說するも盡すべからず

衆生に隨順するが故に、普く諸の世間に入るも

智慧常に寂然として、世の所見に同じからず

諸の群生を度脱するに、其心智に隨順して

宣暢して窮盡すること無し、唯是れ佛のみの境界なり

如來の一切智は、三世に障礙無く

諸佛の妙境界は、皆悉く虚空の如し

法界に異相無けれども、衆生に隨順して説く

若し其さに分別せんと欲せば、唯佛の境界なり

一切諸の世間の、無量の衆の音聲を

時に隨ひて悉く了知するも、其實は分別無し

諸の能く識る所に非ず、亦心の境界にも非ず

自性は眞に清淨にして、能く諸の群生に示す

業に非ず煩惱に非ず、寂滅にして所住無く

明もなく所行もなく、平等にして世間に行ず

一切衆生の心は、普く三世の中に在り

如來は一念に於て、一切悉く明達したまふ

爾時、此娑婆世界の衆生は、佛の神力の故に、此佛刹の一切衆生の、所行の法の如く、

所行の業の如く、世間の行の如く、身の行ずる所に隨ひ、根の行ずる所に隨ひ、其行報に

隨ひて所生の處、持戒、毀禁、說法、果報を見る。是の如く世界の中のこと、一切悉く

見る。是の如く東方の百千億の世界、不可量、不可數、不可思議、不可稱、無等無邊、無

分齊、不可說、虚空法界に等しき一切の世界、乃至說法、果報を、一切悉く見る。南西

北方四維上下も亦復是の如し。

大方廣佛華嚴經

卷第六

東晉天竺三藏佛跋陀羅譯

淨行品第七

【淨行】思 能信の
 行を明かす 能信の
 の明難品の大明に
 依りて本品は大本
 を成ずることを明
 かす。事に觸れ或
 は縁に應じ百四十
 の願を應じて、自
 分勝進の二行を成
 滿することを説く
 【云何が云云】已
 下の長行の中、初
 九句は三業の行因
 を明し、九種の三
 業ありて、初三は
 三毒を離れ、次三
 は三行を成じ、後
 三は三徳を顯表す

爾時、智首菩薩、文殊師利に問うて言はく、「佛子、云何が菩薩の不染の身口意の業、不
 害の身口意の業、不礙の身口意の業、不退轉の身口意の業、不動の身口意の業、應に讚歎
 すべきの身口意の業、清淨の身口意の業、煩惱を離るるの身口意の業、智慧に隨ふの身
 口意の業なる。云何が菩薩の生處成就、姓成就、家成就、色相成就、念成就、智慧成就、
 趣成就、無畏成就、覺悟成就なる。云何が菩薩の第一の智慧、最上の智慧、勝れたる智慧、
 最勝の智慧、不可量の智慧、不可數の智慧、不可思議の智慧、不可稱の智慧、不可説の智
 慧なる。云何が菩薩の因力具足、意力具足、方便力具足、境界力具足、根力具
 足、止觀力具足、定力具足なる。云何が菩薩は善く陰界入を知り、善く緣起の法を知り、
 善く慈、色、無色界を知り、善く過去、未來、現在を知るや。云何が菩薩は七覺意を修し、
 空無相無作を修するや。云何が菩薩は檀波羅蜜、尸波羅蜜、屬提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、
 禪波羅蜜、般若波羅蜜、慈悲喜捨を滿足するや。云何が菩薩は是處非處の智力、過去未來

力にして、維持して忘れざる精神作用を云ふ。【地持】地は意趣の義にして、志操堅固に行を成就することなり。【六何】菩薩の四力六六。【菩薩の九句を以て】業所成の智果を明したるが故に、已下は四力行の成就を明かす。【七覺支】七覺支に同じ、前出。【空、無相、無作】之を三解脱門又は三解脱と言ふ。解脱一煩惱の纏縛を脱し自由となる。【到る三種の修法】空にして、實有無にあらざる實相を護ずること、無相とは諸法に情慮差別の相なきこと、無作とは無願とも云ひ、空、無相の觀法に固り願望を起さざることなり。

現在の深根の智力、種種の諸根の智力、種種の性の智力、種種の欲の智力、一切五處道の智力、禪定解脫三昧垢淨の智力、宿命無量の智力、天眼無礙の智力、一切の煩惱習氣を斷ずる智力を得るや。云何が菩薩は常に諸の天王の爲に守護し恭敬し供養せられ、龍王、鬼神王、乾闥婆王、阿修羅王、迦樓羅王、緊那羅王、摩睺羅伽王、人王、梵天王等に守護し恭敬し供養せらるるや。云何が菩薩は衆生の舍と爲り、教と爲り、歸と爲り、處と爲り、炬と爲り、明と爲り、燈と爲り、導と爲り、無上導と爲るや。云何が菩薩は一切の衆生に於て、第一と爲り、大と爲り、勝と爲り、上と爲り、無上と爲り、無等と爲り、無等等と爲るや。爾時、文殊師利、智首菩薩に答へて曰はく、善い哉善い哉、佛子。總括する所多く、安隱にする所多く、世間を哀愍し、一切を惠利し、天人を安樂にせんとて、是の如きの義を問へり。佛子、菩薩は身口意の業を成就せば、能く一切の勝妙の功徳を得ん。佛の正法に於て心に礙無く、去來今の佛の轉じたまひし所の法輪を能く隨順して轉じ、衆生を捨てず、明かに實相に達して、一切の惡を斷じ、衆善を具足し、色像第一とたらん、悉く普賢大菩薩等の如くにして、如來の一切種智を成就し、一切の法に於て悉く自在を得て、而して衆生の第二の尊導と爲らん。佛子、何等の身口意の業か、能く一切の勝妙なる功徳を得ん。

菩薩家に在らば、當に願ふべし衆生家難を捨離して、空法の中に入らんと

【佛子菩薩云云】

勝進の果を問ふ一段なり。中に於て内徳あり、一にはべきこと、三に外に十王の救護あること、三に悲徳普く覆ふこと、四に智徳獨勝なることなり。

【習氣】

既に煩惱を斷じたる後に於ても、尙其重習の力に依り其氣分全く去らざるを習氣と言ふ。河は其移るを去るも其移り香の残れるが如く、習性となりたる習を止むるも尙反射的に行ふ如し。

【無等等】

比ぶるなきを無等と言ひ無等の諸佛は自ら相等しき事故に斯く云ふなり。

【饒益】

【安隱】

【色像】

利益なり 安樂なり 色身の相

父母に孝事せば、當に願ふべし衆生

一切を護養して、永く大安を得んと

妻子集會せば、當に願ふべし衆生

愛の獄を出でて、戀慕の心無からしめんと

若し五欲を得ば、當に願ふべし衆生

貪惑を捨離して、功德具足せんと

若し妓樂に在らば、當に願ふべし衆生

悉く法樂を得て、法の幻の如きを見んと

若し房室に在らば、當に願ふべし衆生

賢聖の地に入りて、永く欲穢を離れんと

寶の瓔珞を著せば、當に願ふべし衆生

重擔を捨離して、有無の岸に度れんと

若し樓閣に上らば、當に願ふべし衆生

佛の法堂に昇りて、微妙の法を得んと

所珍を布施せば、當に願ふべし衆生

悉く一切を捨てて、心に貪著無けん

若し聚會に在らば、當に願ふべし衆生

好具足するを云ふ
 【第二の尊勝】 兼
 餘の佛陀に強り、尊
 き導師の意なり。
 【菩薩家に六六六】
 已下の類は百四十
 の願を明かす。分
 ちて十段となり。
 初の十一の類は菩
 薩の在家時代に於
 ける願を明かす。
 次の十一は出家時
 の願、次の五は早
 戒を受くる時の願
 四には定慧を修行
 する六願、五に造
 止威儀の時の六願
 六に乞食に疾速少
 行の十二願、七に
 路に在りて諸事見
 聞の時の五十二願
 八に糞掃乞食の二
 十願、九に食乞り
 禮讚の時の十六願
 十に晝夜寢覺時の
 二願にて終結せり
 【空法】 一切諸法
 は因縁に由りて生
 ずるが故に自性な
 し。
 【法樂】 佛法を樂
 む意。

究竟解脫して、如來の處に到らんと
 若し危難に在らば、當に願ふべし衆生
 意に隨ひ自在にして、罣礙する所無けん
 信を以て家を捨てば、當に願ふべし衆生
 世業を棄捨して、心に所著無けん
 若し僧房に入らば、當に願ふべし衆生
 一切和合して、心に罣礙無けん
 大小の師に詣らば、當に願ふべし衆生
 方便の門を開きて、深く法要に入らんと
 出家の法を求めば、當に願ふべし衆生
 不退轉を得て、心に罣礙無けん
 俗服を脱ぎ去らば、當に願ふべし衆生
 道を解り徳を修めて、復懈怠無けん
 鬚髮を除棄せば、當に願ふべし衆生
 煩惱を斷除して、究竟して寂滅ならんと
 袈裟を受著せば、當に願ふべし衆生
 三毒を捨離して、心に歡喜を得んと

【有無の岸】 有無
兩邊を離れたる中
道の義にして、眞
の解脱の境界に到
るなり。

【布衣】 檀波羅衣
行なり。菩薩の六
度の一にして、法
相を施す善行なり。

【僧衣】 (一) 袈裟
衣、黃掃衣、染色
衣、不正色等と稱
す。出家の正衣に
して赤白等の正色
にあらざる人の着
着を生ぜざる色を
以て染む。

【歸】 歸依、歸命
の義にして、歸順
し頼托する意なり。

【體解】 身に悟り
し、實踐するに至
るを言ふ。

【無上の意】 菩提
心なり。

【淨戒】 三乘淨戒
のことなり。大乘
の菩薩戒、從つ
て一切の大乗の戒

【淨戒】 三乘淨戒
のことなり。大乘
の菩薩戒、從つ
て一切の大乗の戒

出家の法を受けば、當に願ふべし衆生
 佛の如くに家を出でて、一切を聞尊せんと
 自ら佛に歸せば、當に願ふべし衆生
 大道を體解して、無上の意を發さんと
 自ら法に歸せば、當に願ふべし衆生
 深く經藏に入り、智慧海の如くならんと
 自ら僧に歸せば、當に願ふべし衆生
 大衆を統理して、一切無礙ならんと
 淨戒を受持せば、當に願ふべし衆生
 具足修習して、一切の戒を學ばんと
 道禁を受行せば、當に願ふべし衆生
 道戒を具足して、如實の業を修せんと
 始めて和尙を請せば、當に願ふべし衆生
 無生智を得て、彼岸に到らんと
 具足戒を受けば、當に願ふべし衆生
 勝妙の法を得て、方便を成就せんと
 若し房舎に入らば、當に願ふべし衆生

を辨する清淨の戒
なるが故に名く
攝律儀戒(菩薩の
威儀を規定すべし攝
善法戒(所有る善
法即ち善法を實に
修行するなり)、攝
衆生成(衆生濟度
を根本とする菩薩
行を説く一の三を
言ふ)

【遺忘】 五戒又は
十重戒を指す
【和尙】 一(比丘尼
三)の戒法にして、
戒教訓と譯す。受
戒の時の際にして
和上と稱するも同
意なり

【具足戒】 具足は
圓滿の義にして此
戒を持てば無量の
威徳圓滿すと云
ふ。比丘の二百五
十戒、比丘尼の三
百四十八戒のこと
なり

淨行品第七

無上の堂に昇りて、不退の法を得んと
若し床座を敷かば、當に願ふべし衆生
善法の座を敷きて、眞實の相を見んと
正身端坐せば、當に願ふべし衆生
佛の道樹に坐して、心に備る所無けん
結跏趺坐せば、當に願ふべし衆生
善根堅固にして、不動地を得んと
三昧正受せば、當に願ふべし衆生
三昧門に向ひて、究竟の定を得んと
諸法を觀察せば、常に願ふべし衆生
法の眞實なるを見て、聖礙する所無けん
跏趺の坐を捨せば、當に願ふべし衆生
諸行の性を知りて、悉く散滅に歸せんと
床を下りて足を安んぜば、當に願ふべし衆生
聖迹を履踐して、解脱を動せざらんと
始めて足を擧ぐる時は、當に願ふべし衆生
生死を越度して、善法満足せんと

【僧伽梨】(Sanghika) 一、二種袈裟、大衣等と譯す。托鉢又は說法の際に用ふる法衣なり。

衣裳えさうを被ひ著やくせず、當まさに願ねがふべし衆生しゆじやう

諸もろの善根ぜんこんを服つし、毎つねに慚愧ぜんけいを知らんと

服つを整ととのへ帯おびを結むすばば、當まさに願ねがふべし衆生しゆじやう

自ら檢けんして道みちを修しゆし、善法ぜんぽうを壞なせざらんと

次に上衣じやうえを著やくせば、當まさに願ねがふべし衆生しゆじやう

上善根じやうぜんこんを得えて、勝法じやうぽうを究竟くわうきやうせんと

僧伽梨そうがりを著やくせば、當まさに願ねがふべし衆生しゆじやう

大慈だいじもて覆おほひ護ごられ、不動ふどうの法ぽうを得えんと

手に楊枝やうじを執とらば、當まさに願ねがふべし衆生しゆじやう

心に正法しやうぽうを得えて、自然じぜんに清淨しやうじやうならんと

晨あしたに楊枝やうじを嚼かまば、當まさに願ねがふべし衆生しゆじやう

調伏てうふくの牙がを得えて、諸もろの煩惱ぼんごうを噬かまん

左右さうぶの便利べんりをなせば、當まさに願ねがふべし衆生しゆじやう

汚穢おごを除のぞいて、嫉怒癡しんごち無なげんと

已まりて水みづに就つかば、當まさに願ねがふべし衆生しゆじやう

無上むじやうの道みちに向むかひて、出世しゆせの法ぽうを得えんと

水みづを以もつて穢おごを滌たがば、當まさに願ねがふべし衆生しゆじやう

【錫杖】(Kshakha
 bhrita)の譯、辟杖、
 智杖とも譯さる。比丘又は修驗者等の用ふる杖にして乞食の際行者の來り鳴らして告ぐるため、上部に數箇の鐮を懸く。【應器】應量器とも言ひ、佛俗の施食を受くる際に用ふる器なり。一人の食量に應じたる容積なればこの名あれど、普通鐵鉢と云ふ。

淨忍を具足して、畢竟無垢ならんと
 水を以て掌を盥はば、當に願ふべし衆生
 上妙の手を得て、佛法を受持せんと
 口齒を深漱せば、當に願ふべし衆生
 淨法の門に向ひて、究竟して解脱せんと
 手に錫杖を執らば、當に願ふべし衆生
 淨施會を設けて、道を見ること實の如くならんと
 應器を拏持せば、當に願ふべし衆生
 法器を成就して、天人の供を受けんと
 趾を發して道に向はば、當に願ふべし衆生
 佛の菩提に趣きて、究竟して解脱せんと
 若し已に道に在らば、當に願ふべし衆生
 佛道を成就して、餘に行ずる所無けん
 路を涉りて行かば、當に願ふべし衆生
 淨法界を履んで、心に障礙無けん
 高きに越く道を見ば、當に願ふべし衆生
 無上道に昇りて、三界を超出せんと

下に趣く道を見れば、當に願ふべし衆生
 謙下柔軟にして、佛の深法に入らんと
 若し險路を見れば、當に願ふべし衆生
 惡道を棄捐して、邪見を滅除せんと
 若し直き路を見れば、當に願ふべし衆生
 中正の意を得て、身口に曲無けん
 道の塵を揚ぐるを見れば、當に願ふべし衆生
 永く塵穢を離れて、畢竟して清淨ならんと
 道の塵無きを見れば、當に願ふべし衆生
 大悲に熏ぜられて、心意柔潤ならんと
 深き阮潤を見れば、當に願ふべし衆生
 正法界に向ひて、諸の難を滅除せんと
 聽訟の堂を見れば、當に願ふべし衆生
 甚深の法を説きて、一切和合せんと
 若し大樹を見れば、當に願ふべし衆生
 我淨の心を離れて、忿恨有ること無けん
 若し叢林を見れば、當に願ふべし衆生

一切敬禮して、天人を師とし仰がんと
若し高山を見れば、當に願ふべし衆生
無上の善を得て、能く頂を見ることが莫げんと
若し荆棘を見れば、當に願ふべし衆生
三毒の刺を抜きて、賊害の心無げんと
樹の茂れる葉を見れば、當に願ふべし衆生
道を以て自ら蔭し、禪三昧に入らんと
樹の好華を見れば、當に願ふべし衆生
閒淨華の如くにして、相好満具せんと
樹の豊かなる果を見れば、當に願ふべし衆生
道樹の行を起して、無上の果を成ぜんと
諸の流水を見れば、當に願ふべし衆生
正法の流を得て、佛智の海に入らんと
若し跋水を見れば、當に願ふべし衆生
悉く諸佛の、不壞の正法を得んと
若し浴池を見れば、當に願ふべし衆生
佛海智に入りて、問答窮まり無げんと

人の井に汲むを見れば、當に願ふべし衆生

如來の辯を得て、窮盡すべからざらんと

若し泉水を見れば、當に願ふべし衆生

善根盡くる無く、境界無上ならんと

山澗の水を見れば、當に願ふべし衆生

塵垢を洗濯して、意解清淨ならんと

若し橋梁を見れば、當に願ふべし衆生

法橋を興造して、人を度して休まざらんと

園圃を修むるを見れば、當に願ふべし衆生

穢惡を耘除して、欲根を生ぜざらんと

無憂林を見れば、當に願ふべし衆生

心に歡喜を得て、永へに憂惱を除かんと

好園池を見れば、當に願ふべし衆生

衆善を勤修して、菩提を具足せんと

嚴飾の人を見れば、當に願ふべし衆生

三十二相もて、而も自ら莊嚴せんと

素服の人を見れば、當に願ふべし衆生

【無憂林】(Aśoka)

阿輸迦の譯、樹の名なり。釋迦は藍尼尼園にてこの樹下に生誕し給ひ、過去佛たる毘婆尸亦此樹下にて成道せりと言ふを以て、歡喜の象徴とせられ尊重せらる

【素服】質素(粗木)なる着物。

【頭陀】(Thata) 持齋、陶汰等とも
看彌せしめ、煩
惱の垢を除き、佛
道に精進するを言
ふ。之に十二種の
行あれば十二頭陀
と言ふ。

【金剛の身】不壞
にして金剛の如く
常住不變の身を言
ふ。

究竟じて、頭陀の彼岸に到ることを得んと
志樂の人を見れば、當に願ふべし衆生
清淨の法樂もて、道を以て自ら親まんと
愁憂の人を見れば、當に願ふべし衆生
有爲の法に於て、心に厭離を生ぜんと
歡樂の人を見れば、當に願ふべし衆生
無上の樂を得て、憍怕にして患無けん
苦惱の人を見れば、當に願ふべし衆生
衆苦を滅除して、佛の智慧を得んと
強健の人を見れば、當に願ふべし衆生
金剛の身を得て、衰毫有ること無けん
疾病の人を見れば、當に願ふべし衆生
身の空寂を知りて、衆苦を解脫せんと
端正の人を見れば、當に願ふべし衆生
歡喜して、諸佛菩薩を恭敬せんと
醜陋の人を見れば、當に願ふべし衆生
鄙惡を遠離して、善を以て自ら嚴らんと

【波羅門】(Brahmān) 淨行、淨商等と譯す。印度四姓の最高位の種族にして、司祭者の階級なり、波羅門教の全權を握り、王者の上位に在り。

報恩の人を見れば、當に願ふべし衆生
 常に諸佛、菩薩の恩徳を念せんと
 昔恩の人を見れば、當に願ふべし衆生
 常に賢聖に見えて、衆惡を作さざらんと
 若し沙門を見れば、當に願ふべし衆生
 寂靜調伏し、究竟して餘り無けん
 波羅門を見れば、當に願ふべし衆生
 眞の清淨を得て、一切の惡を離れんと
 若し仙人を見れば、當に願ふべし衆生
 正眞の道に向ひて、解脫を究竟せんと
 苦行の人を見れば、當に願ふべし衆生
 堅固精勤して、佛道を退かさざらんと
 甲冑を著せるを見れば、當に願ふべし衆生
 誓つて法鏡を服して、無師の法を得んと
 鐵仗無きを見れば、當に願ふべし衆生
 衆惡を遠離して、善法に親近せんと
 論議の人を見れば、當に願ふべし衆生

【正命】八正道の
一。佛敎を信奉し
其生活の基調たる
しむる生活形式を
言ふ。

無上の辯を得て、外道を摧伏せんと
正命の人を見れば、當に願ふべし衆生
清淨の命を得て、威儀異らざらんと
若し帝王を見れば、當に願ふべし衆生
法王を逮得して、無礙の輪を轉せんと
帝王の子を見れば、當に願ふべし衆生
佛子の行を履んで、法の中より化生せんと
若し長者を見れば、當に願ふべし衆生
永く愛欲を離れて、深く佛法を解せんと
若し大臣を見れば、當に願ふべし衆生
常に正念を得て、衆善を修行せんと
若し城郭を見れば、當に願ふべし衆生
金剛身を得て、心沮むべからざらんと
若し王都を見れば、當に願ふべし衆生
明達して遠く照し、功德自在ならんと
若し妙色を見れば、當に願ふべし衆生
上妙の色を得て、天人に讚歎せられんと

里に入りて食を乞はば、當に願ふべし衆生

深法界に入りて、心に障礙無けん

人の門戸に到らば、當に願ふべし衆生

總持の門に入りて、諸佛の法を見んと

人の堂室に入らば、當に願ふべし衆生

一佛乘に入りて、明かに三世に達せんと

持ち難き戒に遇はば、當に願ふべし衆生

衆善を捨てずして、永く彼岸に度らんと

戒を捨つる人を見れば、當に願ふべし衆生

衆難を超出して、三惡道を度らんと

若し空鉢を見れば、當に願ふべし衆生

其心清淨にして、空にして煩惱無けん

若し滿鉢を見れば、當に願ふべし衆生

一切の善法を、具足成滿せんと

若し食を得たる時は、當に願ふべし衆生

法の爲に供養して、志佛道に在らんと

若し食を得ざれば、當に願ふべし衆生

【禪悅】 禪法を以て心を資養し、禪定の境地を得て諸善根を増長満足せしむ。

一切の諸の不善の行を遠離せんと
慚愧の人を見ば、當に願ふべし衆生
慚愧もて正行し、諸根を調伏せんと
慚愧無きを見ば、當に願ふべし衆生
無慚愧を離れて、普く大慈を行せんと
香美の食を得ば、當に願ふべし衆生
節を知り欲少くして、情に著する所無けん
不美の食を得ば、當に願ふべし衆生
無節の三昧を、具足成滿せんと
柔軟の食を得ば、當に願ふべし衆生
大悲に熏ぜられて、心意柔軟ならんと
麤糲の食を得ば、當に願ふべし衆生
永へに、世間の愛味を遠離するを得んと
若し食を嚙する時は、當に願ふべし衆生
禪悅を食と爲し、法喜充滿せんと
食ふ所雜味ならば、當に願ふべし衆生
伴の上味を得て、化して甘露と成さんと

【法喜】聞法の修行によりて、善根を増長し、慧命を資養する義。法喜食と言ふ之なり。

飯食已に訖らば、當に願ふべし衆生
 德行充盈して、十種の力を成ぜん
 若し法を説かん時は、當に願ふべし衆生
 無盡の辯を得て、深く佛法に達せんと
 坐を退いて堂を出づるには、當に願ふべし衆生
 深く佛智に入りて、永く三界を出でんと
 若し水に入る時には、當に願ふべし衆生
 深く佛道に入りて、等しく三世に達せんと
 身體を澡浴せば、當に願ふべし衆生
 身心無垢にして、光明無量たらんと
 盛暑炎熾ならば、當に願ふべし衆生
 煩惱の熱を離れて、清涼の定を得んと
 隆寒にして氷結せば、當に願ふべし衆生
 究竟して解脱し、無上清涼ならんと
 經典を誦誦せば、當に願ふべし衆生
 總持の門を得て、一切の法を攝せんと
 若し如來を見れば、當に願ふべし衆生

悉く佛眼を得て、諸の最勝を見たてまつらんと

諦かに如来を觀せば、當に願ふべし衆生

悉く十方を觀て、靖正佛の如くたらんと

佛の塔廟を見ば、當に願ふべし衆生

尊重せらるること塔の如くにして、天人の敬ひを受けんと

敬心もて塔を觀せば、當に願ふべし衆生

尊重せらるること佛の如くにして、天人に宗仰せられんと

佛塔を頂禮せば、當に願ふべし衆生

道を得ること佛の如く、能く頂を見ることが無げんと

右に塔廟を遠らば、當に願ふべし衆生

正路を履行して、道意を究暢せんと

塔を遠ること三匝せば、當に願ふべし衆生

一向の意を得て、勤めて佛道を求めんと

如来を讚詠せば、當に願ふべし衆生

功德の岸に度り、歡ずること窮盡無げんと

佛の相好を讀めば、當に願ふべし衆生

光明の神徳、佛の法身の如くならんと

【四神足】四如意足とも言ひ、四善根位の頂位に於て修する行なり。即ち、一に欲如意足（一切に諸善法を修せん）、二に念如意足（一心に專注すること）、三に精進如意足（間雑なく精進すること）、四に思惟如意足（慧如意足とも言ひ、他に心を散さず専ら理を思惟すること）の稱なり。

【賢首菩薩品】第八

二會に於ける最後の説法なり。善賢廣大の徳用成じ、諸位成就して廣く諸位を攝して、無方の大用、十種の三昧門を説く。更に譬喩を説きて、教法を闡明し、教法の深奥と信解の難易とを比較し、最後に顯實證成を明す。

若し足を洗ふ時は、當に願ふべし衆生

四神足を得て、究竟解脱せんと

昏夜に寢息せば、當に願ふべし衆生

諸行を休息し、心淨くして穢無けん

晨朝に覺寤せば、當に願ふべし衆生

一切知覺し、十方を捨せざらんと

佛子、是を菩薩の身口意の業と爲す。能く一切の勝妙の功徳を得ば、諸天、魔、梵、沙

門、波羅門、人、及び非人、聲聞、緣覺の動かすこと能はざる所なり。

賢首菩薩品第八之一

爾時、文殊師利、偈を以て深義に達せる淨徳の賢首菩薩に問うて曰はく、

佛子、我已に、菩薩の清淨なる行を説けり

一切諸の世尊は、咸く共に讚歎したまふ所なり

又、諸の大士衆は、甚深微妙の行と

功徳の廣大なる義とを、仁者應に演説すべし

賢首菩薩答ふらく、佛子、善く諦かに聽け

【賢首菩薩答】已下の頌は文殊の甚深の行と廣大の徳の請問に對する賢首の答なり。總じて三百六十三偈あり、初七偈は法の甚深難説の所以を明せり。

【是れ福因云云】已下六偈は行相を略説す。
【因】縁に對して主なる原因、内的原因を言ふ。今は親しく菩提を求む

菩薩の諸の功德は、無量にして遍有ること無し

我當に力に隨ひて、菩薩の少功德を説くべし

我が演暢する所は、海の一微瀾の如し

菩薩は生死に於て、最初發心の時

一向に菩提を求むること、堅固にして動かすべからず

彼一念の功德すら、深廣にして邊際無く

如來は分別して説きたまはんに、劫を窮むとも猶盡きざらん

何に況んや無量、無數無量の劫に於て

具足して諸度、諸地の功德行を修めたるをや

十方世界の中の、一切の諸の如來

彼功德を説きたまふとも、亦究竟すること能はざらん

今我菩薩の、功德の中の少分を説くは

鳥の虚空を履むが如く、地の一微塵の如し

是れ所因無きに非ず、又亦緣無きに非ず

菩薩の初發意は、直心の大功徳なり

佛及び法と僧とに於て、深く清淨の信を起し

三寶を信敬するが故に、能く菩提心を發す

る向上心を發さしむる心(肉的主因)にして、衆生本具の佛性、内重の力を指す。

【緣】因を助成する助因の意にして今の發菩提の場合に於ては、佛の教法、善友の教誨、環境の影響等の外重の力を指す。

【深心の淨信云々】已下の九偈は發心の勝れし菩薩の宗教的、修道的能力を略す。

五欲の樂、寶貨、諸の財利を求めず

亦自ら安んずるを求めず、世の名聞を希望せず

衆生の苦を滅除して、盡く餘り有ること無からしめ

誓つて斯等の類を度せんとして、菩薩は初めて發心したまふ

常に衆生をして、苦を離れ永く安樂ならしめんと欲して

一切利を嚴淨し、無量の佛を供養したまふ

樂ひて佛の正法を立て、無上の道を得んと欲し

一切智を淨修せんとて、菩薩は初めて發心す

深心の淨信は壞すべからず、一切の佛を恭敬し供養し

正法及び聖僧を尊重し、三寶を信敬せんが故に發心す

深く諸佛及び正法を信じ、亦菩薩の行する所の道を信じ

正心に佛の菩提に向ふことを信ず、菩薩は是に因りて初めて發心す

信もて道の元、功德の母と爲す、一切諸の善法を増長し

一切諸の疑惑を滅除して、無上道を示現し開發す

淨身は垢を離れて心堅固なり、憍慢を滅除するは恭敬の本なり

信は是れ寶藏第一の法、清淨の手と爲りて衆の行を受く

信は能く諸の染著を捨離し、信は微妙甚深の法を解り

【無師の寶】佛の
證智を言ふ。佛の
證は無師覺なる
が故なり。

【優曇華】(Udumbara) 具に優曇鉢羅
華と書き、瑞應華
靈瑞華等と譯す。
三千年に一度開
珍華にして、華開
せば世に靈瑞ある
前兆などに言ふ。
【若し一切の佛云
云】已下五十偈は
菩提心の能く行位
を攝することゝ頌
せり其中初九偈は
行、次四十一偈は
位を攝す。
【供】 供養の義。

信は能く轉た勝れたる樂善を成じ、究竟じて必ず如來の處に至らん
諸の善根を清淨にし明利にして、信の力は堅固にして壞すべからず
信は永く一切の惡を除滅し、信は能く無師の寶を逮得す

信は法門に於て障礙無く、八難を捨離して無難を得
信は能く衆魔の境を超出じて、無上の解脱の道を示現す

一切功徳の不壞の種にして、無上の菩提樹を出生し
最勝の智慧の門を長養す、信は能く一切の佛を示現す

是故に次第の行を演說せん、信樂は最勝にして甚だ得難し
譬へば靈瑞の優曇華の如く、亦隨意の妙寶珠の如し

若し一切の佛を信じ恭敬せば、則ち淨戒を持ちて正教に順はん
若し淨戒を持ちて正教に順はば、諸佛賢聖に讚歎せられん

或は是れ無上菩提の本なり、應當に具足して淨戒を保つべし
若し能く具足して淨戒を持たば、一切の如來に讚歎せられん

若し一切の佛を信じ恭敬せば、則ち能く奇特に最勝を供せん
若し能く奇特に最勝を供せば、彼信は佛心も思議し難からん

若し如來の正眞の法を信せば、則ち常に聞かんことを樂ひて厭き足ること無けん
若し法を樂聞して厭足なければ、不可思議の法を悟ることを欣ばん

【若し無上の菩提心を】已下の頌四十一偈は位を攝説住、初二偈は十住、次三偈は十行、次二偈は十廻向、次三偈は十地の位を頌す。

若し清淨の偈を信し恭敬せば、則ち信堅固にして壞すべからざらん
 若し信堅固にして壞すべからずば、彼人の信力は動かすべからざらん
 若し信堅固にして動かすべからずば、諸根明利にして悉く清淨ならん
 若し根明利にして悉く清淨ならば、即ち一切の悪知識を離れん
 若し能く悪知識を遠離せば、則ち能く善知識に親近せん
 若し能く善知識に親近せば、則ち無量の諸の功徳を修めん
 若し能く廣く諸の功徳を修めば、則ち能く善く諸の因果を解らん
 若し能く善く諸の因果を解らば、則ち殊勝の妙解脱を成ぜん
 若し殊勝の妙解脱を成せば、則ち一切の佛の護りたまふ所と爲らん
 若し一切の佛の護りたまふ所と爲らば、則ち無上の菩提心を生ぜん
 若し無上の菩提心を生ぜば、即ち能く佛の功徳を勤修せん
 若し能く佛の功徳を勤修せば、則ち能く諸佛の家に生るるを得ん
 若し能く諸佛の家に生るるを得ば、則ち諸法に於て所著無けん
 若し諸法に於て所著無ければ、則ち深心の妙清淨なるを得ん
 若し深心の妙清淨なるを得ば、則ち殊勝の無上の心を得ん
 若し無上の殊勝の心を得ば、則ち一切の波羅蜜を修せん
 若し一切の波羅蜜を修せば、則ち能く摩訶衍を具足せん

【摩訶衍】(Mahayana) 摩訶衍那と書き、大乘と譯す。小乘 (Hinayana) に對し、大人たる菩薩の大機が佛果の大業滅を得んと修習する法門なり。大小二乘の差別は北方佛教の唱説にして、本來並立するものにあらざり。要するに大苦を減し、大利を得て大衆を教導する佛教を大乘即ち摩訶衍と云ふなり。

若し能く摩訶衍を具足せば、則ち法のごとく一切の佛を供養せん
 若し法のごとく一切の佛を供養せば、則ち念佛の定境すべからざらん
 若し念佛の定境すべからずば、則ち常に十方の佛を視見せん
 若し常に十方の佛を視見せば、則ち如来の常に安住したまふことを知らん
 若し如来の常に安住したまふことを知らば、則ち其人に於て法永へに存せん
 若し其人に於て法永へに存せば、則ち辯才を得ること窮盡すこと無からん
 若し辯才を得ること窮盡無ければ、則ち能く無量の法を演說せん
 若し能く無量の法を演說せば、則ち能く一切の衆を度脱せしめん
 若し能く一切の衆を度脱せしめば、則ち大悲心堅固なるを得ん
 若し大悲心堅固なるを得ば、則ち常に甚深の法を喜び樂はん
 若し能く甚深の法を喜び樂はば、則ち能く有爲の過を捨離せん
 若し能く有爲の過を捨離せば、則ち我慢と諸の放逸とを離れん
 若し我慢と諸の放逸とを離れば、則ち能く一切の衆を兼れ利せん
 若し能く一切の衆を兼れ利せば、則ち生死に處して憂懼無けん
 若し生死に處して憂懼無くば、則ち能く精進して上有ること無けん
 若し能く精進して上有ること無くば、則ち一切諸の神通を得ん
 若し一切諸の神通を得ば、則ち一切衆生の行を解らん

【四攝法】菩薩の衆生濟度に於ける衆生攝招の四種の方法なり。一に布施。二に法。三に利。四に親愛。善法を以て衆を攝招す。三に利行。攝(身口意)の三業の善行を以て衆を利益攝招す。四に同善業。一大衆と共に同善業して攝攝す。是れなり。

【正行】身心を障礙して、善道を障礙するを四種の概略したるは即ち四攝。五攝(五攝)の總の攝にして、身(心)力(心)を攝す(心)を攝す。二に煩悩の第六天を善ぶ此入は衆生の修道

若し一切衆生の行を解らば、則ち能く諸の衆生を成就せん

若し能く諸の衆生を成就せば、則ち衆生を成就するの智を得ん

若し衆生を成就するの智を得ば、則ち能く四攝法を具足せん

若し能く四攝法を具足せば、則ち衆生に無量の利を與へん

若し衆生に無量の利を與へば、則ち能く方便の慧を具足せん

若し能く方便の慧を具足せば、則ち能く無上道に安住せん

若し能く無上道に安住せば、則ち一切の魔も壞ること能はざらん

若し一切の魔も壞ること能はずば、則ち能く四魔の道を超出せん

若し能く四魔の道を超出せば、則ち堅固不動地に至らん

若し堅固不動地に至らば、則ち無生の深法忍を得ん

若し無生の深法忍を得ば、則ち諸佛の長記したまふ所と爲らん

若し諸佛の長記したまふ所と爲らば、則ち常に普く諸佛の前に現せん

若し常に普く諸佛の前に現せば、則ち諸佛の微密の教を解らん

若し諸佛の微密の教を解らば、則ち諸佛に常に護念せられん

若し諸佛に常に護念せられば、佛の功徳を以て自ら莊嚴せん

若し佛の功徳もて自ら莊嚴せば、則ち無量の功徳の身を得ん

若し無量の功徳の身を得ば、具身顯耀すること金山の如くならん

を重むを以てなり、四に死鹿（死のため壽命即ち修道生活は擱け難し）是れなり。

【無量法苑】菩薩の修し位中の第七、第八、第九地は法指す、法忍とは法智修得の前に起る忍可決定の心にして無量法忍は不生不滅の善如法性を忍知し、決定して安住する位を言ふなり。

【授記】佛の豫言を授くること前に註せり、今は第八地に在れる菩薩は決定不滅なるを以て、佛は必然に證果を豫言し給ふなり。

【八十種好】三十二相（應身佛の身に具足する三十二の相好にして、大人相とも言ひ、完全なる肉體的諸機官）を細別したるものなり。即ち相に隨伴せる八十種

若し身顯耀すること金山の如くならば、衆相三十二を具足せん
若し衆相三十二を具足せば、八十種好もて自ら莊嚴せん
八十種好もて自ら莊嚴せば、其身の光明量有ること無けん
若し身の光明量有ること無くば、光明の莊嚴は思議し難からん
若し光の莊嚴思議し難くば、則ち無量の寶蓋華を出さん
若し無量の寶蓋華を出さば、一一の華座の無量の佛は
普く十方無量の刹に滅じて、一切衆を教化度脱したまはん
若し能く一切の衆を度脱したまはば、則ち無量の自在力を得ん
若し無量の自在力を得ば、則ち能く諸佛の刹を遊淨せん
甚深微妙の法を解脫せば、不可思議の衆は歡喜せん
若し微妙甚深の法を説き、不可思議の衆歡喜せば
則ち能く四辯力を具足して、自在に能く一切の衆を度せん
若し能く四辯力を具足して、自在に能く一切の衆を度せば
彼人の智慧は常に前に在りて、身口意の業は錯謬無けん
若し彼智慧常に前に在りて、身口意の業錯謬無ければ
彼人の願力は自在を得て、衆の宜しき所に隨ひて其身を現せん
若し彼願力自在を得て、衆の宜しき所に隨ひて其身を現せば

の好にして、指爪
 使長等より手足麤
 暗若等相妙好に
 なる八十種なり。
 【十種】、小聲、大
 聲、無聲、無聲の
 四種あり。【十種】、
 【生死は永く】、灰
 身滅智の無常、即
 に入身を言ふ。即
 ち一切の煩悩業を
 離滅せば生死を引
 くべき業なきを以
 て、三界に流轉す
 ることなし。
 【十種の自在力】
 諸佛の空遊遊みて
 十地に到れば、衆
 生生命に於て十種
 の自在力を得と、言
 ふ。【十種】、命、心、資
 具、行、受、生、解、
 離、神力、法辯、
 智辯の十種なり。
 【諸佛大慈】
 の法水を菩薩の頂
 に灌ぐを言ふ。今
 は第十地終心の菩
 薩が佛果位に於る
 時、諸佛の法水を
 灌ぎて佛果を證得
 せしむるなり。

諸の衆生の爲に説法するの時、音聲微妙にして思議し難からん
 若し衆生の爲に説法するの時、音聲微妙にして思議し難ければ
 彼一切衆生の類に於て、一念の中に悉く心を知らん
 若し彼一切衆生の類に、一念の中に悉く心を知らば
 其人の生死は永く餘り無く、一切の煩惱の患を寂滅せん
 若し人生死永く餘り無く、一切の煩惱の患を寂滅せば
 法身の功德智慧具はり、深く一切諸法の實を解らん
 若し身の功德智慧具はりて、深く一切諸法の實を解らば
 十地の十種の自在力、皆盡く究竟して勝解脱せん
 若し十種類の自在力、皆悉く究竟して解脱を得ば
 授記の莊嚴悉く具足し、無量の法門に自在を得ん
 若し記の莊嚴悉く具足して、無量の法門に自在を得ば
 盡く一切十方の佛の爲に、皆記を興へ授けられて餘り有ること無けん
 若し一切の十方の佛の爲に、皆記を興へ授けられて餘り有ること無くば
 甘露の法水もて其頂に灌ぎ、十方の諸佛の授記充らん
 若し甘露水もて其頂に灌ぎ、十方の諸佛の授記充らば
 法身充滿して虚空に通く、十方界に安住して不動ならん

【或は刹土云々】
 以下二百頌半は無
 中に於て方の大用
 門す。中に於て
 初五偏半は十の三
 昧門の中第一海印
 三昧門を頌す。
 【舍利】(Śāli)寶
 利、舍利羅、宝利
 羅、書き、身骨
 羅、骨分等と譯す
 佛の遺骨を言ふ。
 【舍利】(Śālika)
 念經の迦の譯なり
 佛の教誨の聲を聞
 きて悟る者の意に
 して、佛の言教、

若し身充滿して虚空に廻く、十方界に安住して不動ならば
 一切の諸天、及び世人は、無量の界を能く知ること莫けん
 本行せし所に於て果さざること無く、具見聞せし者は悉く空しからず
 此は是れ無上の大福田にして、供養し敬す者には大果報あり
 彼善男子の威神力もて、正法は常に住して永へに滅せざるべし
 十善の功徳、法華の妙行は、無量の法寶にして最も無上なり
 彼威神力は佛法の海にして、法寶の堅固なること金剛の如く
 智滿足して盡すべからず、是の如きは無量の功徳海なり
 或は刹土有りて佛有ること無ければ、彼に於て示現して正覺を成じ
 或は國土有りて法有ること無ければ、彼に於て示現して法藏を説く
 菩薩は希望を一切断ちて、一念の頃に於て十方に遊遊
 十方に示現すること満月の如く、無量の方便もて衆生を住す
 彼十方世界の中に於て、念念に示現して佛道を成じ
 正法輪を轉じて涅槃に入り、舍利を分ちて衆生の爲に現す
 或は轉聞、緣覺の道を現じ、成佛して普く莊嚴することを示現し
 無量劫に衆生を度し、三乘門を以て廣く開化することを現す
 或は男女の種種の形、天、人、龍神、阿修羅を現す

貴教により四諦の理を觀じ、三生六十劫の修行により阿羅漢果を證する小乘小果の行者。
 【佛意】(The Buddha's meaning) 佛の覺、緣覺等と云す。無師獨悟の聖者にして、飛花落葉等の有爲轉變により十二因緣の理を觀じて覺るなり。是に邪行緣覺、轉阿緣覺の二種あり。
 【三乘】 華嚴の三乘なり。
 【海印三昧】 本經を説き給ふに際し佛に入り給ひし禪定にして、佛はこの定中の印現を有りの説かれしを以て本經を海印定と云ふ。大海の波浪靜滅して天體萬象靜滅して天體萬が如く佛の定心中に三世諸法炳現せざるなきを以てこの三昧の名あり。

諸の衆生の若干の身に隨ひて、無量の行業も、諸の音聲も一切示現して餘り有ること無し、海印三昧の勢力の故に不可思議の莊嚴の利に、一切の例を恭敬し供養し光明の莊嚴思議し難く、衆生を教化して量有ること無し智慧自在にして議すべからず、説法教化に自在を得施戒忍辱精進禪、方便智慧の諸の功德あり一切自在にして思議し難し、華嚴三昧の勢力の故に微塵數の諸の三昧に入り、一の三昧は處に等しき定を生ず一塵の中に無量の利を現じ、而も彼微塵亦増さず一塵内の利に仰有ることを現じ、或は利有りて佛無きことを現じ或は利有りて淨不淨なるを現じ、或は大刹及び中下を現じ或は刹の伏住し、或は隨順し、或は野馬、或は四方の如きあり或は園土有り天の網の如く、世界の成敗現せざること無し一微塵の示現する所の如く、一切の微塵も亦是の如し是を三昧の自在力、亦無量稱の解脫力と名く若し一切の佛を供養せんと欲せば、無量の三昧門を出生せん能く一の手を以て三千を覆ひ、一切の如來を供養したてまつる

【不可思議莊嚴】
已下二偈半は第二
華嚴妙行三昧を頌
す

【華嚴三昧】華嚴
十定(三昧)の一に
して、普賢の入り
給ふ禪定なり。華
嚴とは圓行の華を
以て佛果を嚴る、
即ち萬行を修して
法界を嚴飾し、法
身の妙果を成ずる
定心是れ華嚴三昧
と言ふなり。

【諸の三昧】已下の四偈は
第三(華嚴)三昧
の中(華嚴)三昧
味を論ず。

【野馬】 鬪炎のこ
とを言ふ。

【天の網】 帝釋天
(因陀羅)の殿堂の
上に張れる結珠の
網なり。網孔互に
相應じて主伴をな
し同時に成就し相
圍繞すること、恰
も一多相入して重
重無盡なる本經の
法門に喩ふ。

【若し一切の佛を

十方の國土の勝妙の華と、無量の寶珠、殊異の香とは
皆悉く自然に手より出でて、道樹の諸の最勝を供養したてまつる
無價の寶衣、微妙の香、寶幢、幡蓋して莊嚴し
金華、寶帳もて妙に校飾したる、十方一切の上供具は
悉く手中より自然に出でて、道樹の諸の最勝を供養したてまつる
一切十方の諸の伎樂、無量の和雅の妙音響
及び種種樂の妙偈を以て、諸佛の寶の功徳を讚歎し
聲遍く十方界に滿つるも、悉く掌中より自然に出づ
無量清淨の諸の行業にて、得し所の右の手より光明を放ち
香水普く十方の國に灑ぎて、一切の世を照す燈を供養したてまつる
妙に莊嚴せる大光明を放ちて、無量の寶蓮華を出生し
蓮華の中に於ける無量の佛は、相好具足して自ら莊嚴したまへり
華もて莊嚴せる淨き光明を放ち、莊嚴せる妙華を以て帳と爲し
諸の蓮華を散じて十方に遍く、一切諸の如來を供養したてまつる
香もて莊嚴せる淨き光明を放ち、莊嚴せる妙香を以て帳と爲し
諸の蓮華を散じて十方に遍く、一切諸の如來を供養したてまつる
細末香の淨き光明を放ち、莊嚴せる末香を以て帳と爲し

【供養】已下十七偈は第四の三昧たる手中より應供を出す三昧を記す。
【三千】三千世界の略。
【上供具】上等なる供養の器具及び供物を言ふ。

【一切衆生の類】已下の八偈は第五の三昧たる諸法門を現する三昧を顯す。

諸の末香を散じて十方に遍く、一切諸の如來を供養したてまつる衣もて莊嚴せる淨き光明を放ち、莊嚴せる寶衣を以て帳と爲し諸の寶衣を散じて十方に遍く、一切諸の如來を供養したてまつる寶もて莊嚴せる淨き光明を放ち、莊嚴せる妙寶を以て帳と爲し諸の妙寶を散じて十方に遍く、一切諸の如來を供養したてまつる妙華華の淨き光明を放ち、衆の妙華華を以て帳と爲し諸の華華を散じて十方に遍く、一切諸の如來を供養したてまつる諸の璎珞の淨き光明を放ち、諸の妙璎珞を以て帳と爲し諸の璎珞を散じて十方に遍く、一切諸の如來を供養したてまつる莊嚴せる幢の淨き光明を放ち、其幢は青黃赤白の色にして無量種種に莊嚴し、幢を以て諸の佛刹を嚴飾し雜寶もて莊嚴せる蓋を執持し、衆寶の綯縷を垂帶と爲し寶鈴は最勝の音を演出し、此を以て諸の如來を供養したてまつる手より供具を出すことも思議し難く、是の如くして一導師を供養したてまつる一切の佛を供することも亦是の如し、大仙の三昧の自在力なり一切衆生の類を安んぜんと欲し、自在の勝三昧を出生して一切所行の諸の功德と、無量の方便もて衆生を度す

或は供養如來門を現じ、或は一切の布施門を現じ

或は具足持戒門を現じ、或は無事の忍辱門

無量の苦行精進門、禪定の諸三昧門

無量の大辯智慧門、一切所行の方便門を現じ

四無量、神通門、大慈大悲の四攝門

無量の功德智慧門、一切の縁起解脫門

清淨の根力道の法門を現じ、或は聲聞の小乘門を現じ

或は總量の中乘門を現じ、或は無上の大乘門を現じ

或は無常樂苦の門を現じ、或は無我衆生の門を現じ

或は不淨離欲の門、寂靜の滅定の三昧門

隨諸衆生起病門、一切對治の諸の法門を現す

彼衆生の煩惱性に隨ひて、應の如く法を説きて廣く開化す

是の如きは一切諸の法門は、其本位に隨ひて濟度し

一切の天人能く知る莫し、是れ自在なる勝三昧の力なり

隨樂の勝三昧を出生して、衆生の心を分別し了知し

諸の群生を隨順し教化し、憂惱を離れて歡喜を得しむ

劫中の費難、飢餓の時に、一切の資生、諸の樂具を

【隨樂の勝三昧】
已下十六偈一句は
第六の三昧たる四
攝法にて衆生を攝
化する三昧を頌す

其須むる所に隨ひて普く周給す、是を能く大施を作すの主と爲す
肴膳、香美、上味の食、寶衣莊嚴を樂ふ所に隨ひ

己が身、國土、珍愛のものを施す、施を好む衆生は悉く化に従ふ
諸の相好を以て身を莊嚴し、上妙の衣服及び衆の華
種種の末香を以て身に塗り、此嚴飾を現じて衆生を度す
一切世間の喜び樂ふ所の、種種の殊勝の淨妙の色を

其所應に隨ひて普く示現し、色を樂ふ者をして解脱を得しむ
柔軟の美聲は哀鸞、拘真羅等の如く微妙の音にして

八種の梵音聲を具足し、其樂ふ所に隨ひて爲に法を説き
八萬四千の諸の法門、諸佛は此を以て衆生を度し
諸法の無量の門を分別し、衆生の性に隨ひて之を化導す

衆生の苦と樂と利と無利と、一切世間の所行の法とに
悉く能く普く應じて其事を同じうし、此攝法を以て衆生を度す
無量無邊の大苦の海も、衆生の爲の故に悉く能く忍び

彼と事を同うして苦を念はず、衆生を饒益し安樂ならしむ
若し出家の法を離らずして、生死に樂著して解を求めざる自らば
是故に菩薩は國財を捨てて、常に出家を樂ひ寂靜を求む

【哀】(Kalayin) 迦陵頻伽の譯にして美音鳥、清華鳥等と譯し、清華鳥の音を出して鳴くと言はる。熱帶産の鳥にして印度に在りて古來より清淨なる鳥とせられ、極樂淨土の鳥として崇敬せらる。

【拘真羅】(Kokila) 俱利伽藍、俱翅羅等とも書き好聲鳥、鶴鳴、衆音和合等と譯され、形狀醜なれども好音を出す熱帯産の鳥なり

【八種の梵音】一に最好聲、二に易了聲、三に調和聲、四に柔婉聲、五に無誤聲、六に不女聲、七に尊慧聲、八に深遠聲是れなり。

【八萬四千の法門】衆生の煩惱を八萬四千と數ふるを以て之を對治する佛の法門をこれに等しき數ありとす八萬四千とは三百五十或無極の法門の各各に布施等の六度ありとなすが故に二千一百の法門となり、之を以て會廣廣等分の四種の衆生を度するを故に八千四百となり、その一が十門に分たるを以て八萬四千の數となる。

【世間に隨順】已下十七節一句は第七の三昧たる初ら世間に同ずる三昧を顯す。

五欲に縛せられて家を離れず、衆生をして解脫せしめんと欲するが故に愛欲に處することを樂はず、是故に出家して解脫を求むることを示現す。十種の行を具足せしめんと欲するに、是れ何來の本修したまひし所にして菩薩の所行も餘り有ること無く、是法を修習して衆生を度す。或は衆生に壽量無く、煩惱微細にして世間を樂むもの有り。斯一切衆生の類の爲に、生老病死の患を示現す。或は貪欲瞋恚癡の、煩惱の猛火常に熾然なる有り。爲に生老病死の苦を現す、一切の衆生を化度せんが故に如來の十力、無所畏と、及び佛の十八不共法とは最勝無量の諸の功德なり、此妙法を以て衆生を度す。說法、辯誡及び神足、住持自在の神通力。菩薩は辯功德を示現して、此を以て諸の群生を濟度す。是の如きの方は量有ること無し、世間に隨順して衆生を度し世間に著せざること蓮華の如く、能く衆生をして大いに歡喜せしむ博綜にして多識の辯才王は、文類談論世間に過ぎて世間の衆の技術を示現す、譬へば法師の衆像を現するが如し或は長者、邑中の主と爲り、或は賈客、商人の導と爲り。

或は國王及び大臣となり、或は良醫と爲りて衆の病を療す

或は曠野に於て大樹と作り、或は良藥の無盡藏と爲り

或は寶樹と爲りて求むる所に隨ひ、道に迷ふの衆生に正路を示す

若し世界始めて成立して、衆生未だ資生の法を知らざるを見ば

是時に菩薩は工匠と爲りて、之が爲に種種の業を示現せん

聖賢と生を害する具とを作らず、群生をして壽く安樂ならしめんと欲すればなり

呪術、藥草、衆論を學び、悉く諸佛の稱歎したまふ所と爲り

或は信人の羸勝の行を現じ、一切群生の愛樂する所には

苦行及び深法を示行して、其所應に隨ひて悉く能く現す

或は外道の出家人と作り、或は復事火の法を示現し

或は裸形の衣服無きを現じて、能く彼人の爲に師長と作る

邪命の種種の行有りて、非法を習行して以て勝れたりと爲すと見

一切禁戒の諸の苦行を、能く其中に於て住度す

五熱に身を炙り日に隨ひて轉じ、或は牛糞の畜生戒を受け

草衣を被服し、火を奉事す、是等を住せんが爲に尊師と作る

諸の天廟を遊行するを樂ふことを現じ、自ら江河に投じて解脫を求め

【事火】 事火外道の事。火を尊崇する宗教にして、火を神人の媒介者なりと信じ、宗教儀式を行ふ外道なり

【形】 尼毬子外道の事。露形外道、無慚外道とも云ひ、苦行を以て解脫の道と信じ、衣服を着けず裸形のまま生活す

【畜生戒】 牛狗外道にして、牛狗等の畜生の所爲を行じ其を以て生天の因となす。是を畜生戒と言ふ

【天網を飛行云々】
 外道の一類にして、
 梅河一河水一輪に
 射す。の水は衆生
 を洗ふと計し、河
 水に投じて解脱を
 求むる一網を一
 種の外道は天網を
 遊行することによ
 り解脱を行んとす
 る一類あり。
 【法無礙辯】
 の辯にして、諸法
 の法相を演述する
 智なり。
 【真無礙辯】
 の辯にして、諸法
 の義理を闡明する
 智なり。
 【一切の音】
 一切の音なるを
 自由なる智力。
 【樂説無礙辯】
 樂説無礙辯とも云ひ、衆
 生の欲する所に應
 じて説法するに自
 由なる辯智力なり。
 【八梵音】
 八梵音に同じ、前出。
 【衆生を安隱云々】
 已下八十九偈は第
 八の三昧たる毛光
 覺照の三昧を顯す

或は胡跪して一足を擡げ、或は剎時灰土の上に臥し
 或は磐石に臥して解脱を求むるを現するも、彼は解脱を得ずして教化せんが故に
 是の如き等の類の、【外道】の外道をなし、【具】に其の業を望んで解脱の如く化し
 菩薩の善行に與等無し、外道も其に由りて解脱を得
 若し世間に正見無く、常に一切の衆生に依りて存するを以て
 方便して爲に甚深の法を説き、【衆生】を多く説法を解るを得しめん
 或は鬼神、邊地の語を以て、斷學の類の爲に四諦を説き
 或は正語を以て四諦を説き、或は人天の語もて四諦を説き
 或は法辯を以て四諦を説き、或は法辯を以て四諦を説き
 或は辯辯を以て四諦を説き、或は無盡辯もて四諦を説き
 或は八部の音もて四諦を説き、或は一切の音もて四諦を説き
 彼解する所の語言の音に隨ひて、爲に四諦を説きて解脱せしむ
 一切の語を知りて不思議なり、是を説法の三昧力と名く
 衆生を安隱にするの勝三昧あり、一切の衆生を度せんが爲の故に
 大光明を放ちて思議し難し、此光明を以て群生を救ふ
 放つ所の光明を善現と名く、若し衆生有りて斷光に遇はば
 彼果報を獲ること量有ること無く、是に因りて無上道を究竟せん

佛の解脱の甘露雨を以て、衆生の諸の渴愛を滅除せん

池月神の泉流を恵み施して、以て無上の佛の菩提を求め

五欲を毀訾し諸障を讀め、此に因りて滅愛の光を成ずるを得たり

又光明を放つあり、歡喜と名く、彼光一切の事を覺悟せしめ

佛の菩提を歡喜し愛樂し、發心して無師の寶を願ひ求めしむ

如來の大藥像を建立し、相好具足して蓮華に坐し

最勝の諸の功徳を讚歎す、是に因りて喜の光明を成ずるを得たり

大方廣佛華嚴經

卷第七

東晋天竺三藏佛跋陀羅譯

賢首菩薩品第八之二

又光明を放つあり愛樂と名く、彼光一切の衆を覺悟せしめ
 心常に諸の如來と、無上の法寶と清淨の僧とを愛樂せしむ
 常に十方の諸佛の前に會して、無上の深法忍を速成し
 無量の群生の類を教化して、心常に佛の深妙の法を念じ
 衆生の菩提心を開發し、是に因りて愛樂の光を成ずるを得たり
 又光明を放つあり徳聚と名く、彼光一切の衆を覺悟せしめ
 普く種種の無量の施を行じ、此を以て無上道を願ひ求めしむ
 共求むる所に隨ひて皆満足せしめ、一切の施會は悉く清淨にして
 共求むる所に隨ひて惠み施すが故に、是に因りて徳聚の光を成ずるを得たり
 又光明を放つあり、深智と名く、彼の光一切の衆を覺悟せしめて
 一法門に於て一念の中に、悉く無量の諸の法門を解らしむ

諸法を分別して衆生を化し、及び諸法の相、如實の義にて

法を説き義を説きて具足せしが故に、是に因りて深智の光を成ずるを得たり

又光明を放つあり、慧燈と名く、彼の光一切の衆を覺悟せしめて

諸法は空寂にして生滅無く、有に非ず亦無に非ず

譬へば野馬、水月の形の如く、亦幻夢鏡中の像の如く

諸法は主無くして、悉く空寂なりと解達して是に因りて慧燈の光を成ずるを得たり

又光を放つあり、法自在と名く、彼の光一切の衆を覺悟せしめて

陀羅尼藏は盡すべからざるも、能く如來の一切の法を持せしむ

法を持つ者を恭敬し供養して、衆の賢聖を防衛し守護し

無量の法を以て衆生に施し、是に因りて自在の光を成ずるを得たり

又光明を放つあり、無慳と名く、彼の光覺悟せしめて眞惜を除き

財寶は常有に非ずと解知し、悉く能く捨離して所著無からしむ

制し難き慳心を能く調伏して、財は夢の如く浮雲の如しと解り

常に能く歡喜して布施を樂ひ、是に因りて無慳の光を成ずるを得たり

又光明を放つあり、清凉と名く、彼の光嚴禁の者を覺悟せしめて

衆生を淨戒の中に安立せしめ、啓導して無師の寶を達せしむ

十善の業迹は悉く清淨となり、衆生を勸化して淨戒を持たしめ

衆生を開發して佛道を求めしめ、是に因りて清涼の光を成ずるを得たり
又光を放つあり、忍莊嚴と名く、彼光瞋恚の者を覺悟せしめて
瞋恚と増上慢とを捨離し、常に柔和忍辱の法を樂はしむ
衆生の惡性にして忍ぶこと難き者を、悉く能く堪忍して佛道を求めしめ
常に能く忍辱の法を讚歎し、是に因りて莊嚴の光を成ずるを得たり
又光明を放つあり、轉勝と名く、彼光憍怠の者を覺悟せしめ
常に能く三種の業を勤修して、佛法僧を恭敬し供養せしむ
若し能く三種の業を勤修し、佛法僧を恭敬し供養せば
彼能く四魔の境を超出して、速かに無上の佛の菩提を成ぜん
衆生を勸化して精進せしめ、佛法僧を恭敬し供養して
佛法の滅せんと欲するときに能く護持し、是に因りて轉勝の光を成ずるを得たり
又光明を放つあり、寂靜と名く、彼光亂意の者を覺悟せしめ
貪欲瞋恚癡を捨離して、正しく甚深の諸の三昧に住せしむ
惡知識と不善行とを遠かり、又十種の非法の語を離れ
空閑の處に坐禪するを讚歎し、是に因りて寂靜の光を成ずるを得たり
又光を放つあり、慧莊嚴と名く、彼光愚癡の者を覺悟せしめて
善く緣起を知りて解脫を得、智慧照明にして諸根を了らしむ

【非人】六道(六趣)中の人趣以外を非人と書ひ、今は畜生を指す。

若し縁起を知りて解脫を得、智慧照明にして諸根を了らば、聖智慧と諸の三昧とを得て、尋正覺を達し世間を厭さん、國、財寶、愛する所の身を捨て、精勤して法を求めて佛道の爲にし、專心に說法して衆生の爲にし、是に因りて慧の光明を成ずるを得たり。又光明を放つあり、佛慧と名く、彼光一切の衆を覺悟せしめて、不思議の無量の佛、各各寶蓮華の上に坐したまふを見しむ。諸佛と佛の解脫とを讚歎し、佛の自在の量行ること無きを説き、廣く佛力と諸の神通とを説き、是に因りて佛慧の光を成ずるを得たり。又光明を放つあり、無畏と名く、彼光恐怖の者を安慰し、非人の持するところの諸の毒害と、無量の恐怖とを悉く除滅す。普く衆生に於て無畏を施し、心常に慈忍にして惱害を離れ、危難の救ふ者無きを拯濟し、是に因りて無畏の光を成ずるを得たり。又光明を放つあり、安隱と名く、彼光に觸るる所の疾病の者は一切諸の苦痛を滅除し、悉く正受三昧の樂を得。諸の良藥を施して衆の患を療し、摩するに寶珠を以てし香を身に塗り、或は酥油、乳、石蜜を施し、是に因りて安隱の光を成ずるを得たり。又光明を放つあり、見佛と名く、彼光命終の者を覺悟せしめ

念佛三昧にて必ず佛を見たてまつり命終の後は佛前に生ぜしむ
 彼の臨終を見て念佛を勧め、又尊像を示して瞻敬せしめ
 又復勧めて佛に歸依せしめ、是に因りて見佛の光を成ずるを得たり
 又光明を放つあり、樂法と名く、彼光一切の衆を覺悟せしめて
 法を聴き講説し及び書寫して、正法の中に於て常に愛樂せしむ
 佛法滅せんと欲するときに能く護持して、求法の者をして意充滿ならしめ
 轉動して佛の正法を修習し、是に因りて樂法の光を成ずるを得たり
 又光明を放つあり、妙音と名く、彼光諸の佛子を覺悟せしめ
 一切世間の有ゆる聲をして、聞く者に皆是れ如來の音とならしむ
 大音もて諸の如來を讚揚し、鼓樂鐘磬もて、佛を供養し
 又常に佛の音聲を讚歎し、是に因りて妙音の光を成ずるを得たり
 又光を放つあり、施甘露と名く、彼光一切の衆を覺悟せしめ
 一切の放逸の行を遠離して、皆悉く諸の功德を具足せしむ
 無量の大苦の海、有爲は危脆にして安隱に非ずと分別し
 寂滅の樂を宣揚し讚歎し、是に因りて甘露の光を成ずるを得たり
 又光明を放つあり、殊勝と名く、彼光一切の衆を覺悟せしめ
 如來の所に於て勝戒と勝妙の三昧と、勝智慧とを聞かしむ

常に諸佛の勝妙の戒と、勝妙の三昧と勝智慧とを歎じ

一心に修習して菩提を求め、是に因りて勝光明を成ずるを得たり

又光を放つあり、寶莊嚴と名く、彼光一切の衆を覺悟せしめ

勝寶藏を得しめて盡すべからず、此を以て諸の世尊を供養せしむ

寶を以て佛及び塔廟に獻じ、兼ねて一切の諸の貧乏に施し

衆の珍奇を以て最勝に供へ、是に因りて寶莊嚴の光を成じたり

又光明を放つあり、妙香と名く、彼光一切の衆を覺悟せしめ

其れ衆生有りて是香を聞がんに具足して佛の諸の功德を得ん

人天の香を以て其地に塗り、一切諸の如来を供養し

香を以て像及び塔廟を造り、是に因りて妙香の光を成ずるを得たり

又光を放つあり、雜莊嚴と名く、幢幡蓋を以て嚴飾し

和雅の伎樂、微妙の音あり、衆の寶華を散じて十方に満たしむ

本微妙の伎樂の音、和末塗香、衆の雜華

幢蓋幡帳を以て諸佛に供へ、是に因りて莊嚴の光を成ずるを得たり

又光明を放つあり、端嚴と名け、十方の地をして平なること掌の如くたらしむ

僧坊、大仙の塔を掃除し、是に因りて端嚴の光を成ずるを得たり

又光明を放つあり、大雲と名け、彼光能く妙香の水を雨らす

香水を塔及び僧坊に灑ぎ、是に因りて大雲の光を成ずるを得たり
 又光を放つあり、衣莊嚴と名け、裸形の者をして上服を得しむ
 莊嚴の服を以て衆生に施し、是に因りて衣莊嚴の光を成じたり
 又光明を放つあり、上味と名け、飢餓の者をして美饈を得しむ
 大いに種種の上味の食を施し、是に因りて上味の光を成ずるを得たり
 又光を放つあり、示現寶と名け、諸の貧乏をして寶藏を得しめ
 無盡の藏を以て三寶に施し、是に因りて示寶の光を成ずるを得たり
 又光を放つあり、眼清淨と名け、能く盲者をして衆色を見しめ
 燈を以て佛及び塔廟に供へ、是に因りて淨眼の光を成ずるを得たり
 又光を放つあり、耳清淨と名け、能く聾者をして衆音を聞かしめ
 伎樂もて佛及び塔廟に供へ、是に因りて淨耳の光を成ずるを得たり
 又光を放つあり、鼻根淨と名け、聞けるにも若くは聞がざるにも悉く聞がしむ
 衆香もて佛及び塔廟に供へ、是に因りて鼻淨の光を成ずるを得たり
 又光を放つあり、舌根淨と名け、柔軟の音を以て諸佛を讚め
 永く離離、不善の語を離れ、是に因りて淨舌の光を成ずるを得たり
 又光を放つあり、身根淨と名け、諸根の毀壞せるを具足せしむ
 諸佛及び塔寺を禮拜し、是に因りて身淨の光を成ずるを得たり

又光を放つあり、意俱淨と名け、失心の者をして正念を得しむ
三昧禪定力を修習し、是に因りて意淨の光を成ずるを得たり
又光を放つあり、色清淨と名け、不可思議の佛を親見したてまつらしめ
衆の妙色を以て塔を莊嚴し、是に因りて色淨の光を成ずるを得たり
又光を放つあり、聲清淨と名け、聲と非聲とを悉く空寂なりと解らしめ
衆を化して聲は響の如しと知らしめ、是に因りて聲淨の光を成ずるを得たり
又光を放つあり、香清淨と名け、諸の臭穢をして妙香を成ぜしめ
香水もて塔と菩提樹とを洗ひ、是に因りて淨香の光を成ずるを得たり
又光を放つあり、味清淨と名け、悉く一切味の毒を除く
佛僧及び父母を供養し、是に因りて味淨の光を成ずるを得たり
又光を放つあり、觸清淨と名く、堅強羸弱なるを皆柔軟となし
刀輪戟、諸の鋒刃を雨らし、皆悉く變じて寶華鬘を成ぜしむ
柔軟の妙衣を道巷に布き、最勝の行く時足上を踏ふたまひ
香華上服を用て布施し、是に因りて觸淨の光を成ずるを得たり
又光を放つあり、法清淨と名く、一一の毛孔の無量の佛は
各妙法を説きて思議し難く、悉く衆生をして歡喜を得しむ
因縁の所生は生性に非ず、如來の法身は是れ身に非ず

【業果】業とは嚴密なる意味にては、生命が自己創造を營む時の内的規定なれども普通には身口意の所作及び其れに習慣づけられたる性格的力なり。其結果が即ち業果なれども、今は一般的なる意味に於て業とは光明の往因、果とは現じたる光明を指す。

【修行せし所の業】云云【已下六偈半は光明の已下六偈半は開法の勝益廣大なることを明す。

湛然として常任すること虚空の如しと、此化導に因りて法の光を成せり是の如き等比の光明門は、無量無邊にして恆沙の數なり

悉く大仙の毛孔より出でて、一切の業果皆悉く現す

一毛孔の放つ所の光の、無量無邊にして恆沙の數なるが如く

一切の毛孔も亦是の如し、是れ大佛の定の自在力なり

其本行に隨ひて光明を得、宿世の同行有縁の者は

其所應の如く光明を放つ、是を大仙の智自在と名く

修行せし所の業の同行る者、及び隨喜功德分を行じ

菩薩の清淨行を聞見せしものは、彼入此光明を見ることを得ん

若し無量の諸の功德を修し、無數の佛を恭敬し供養して

心常に無上の道を樂ひ求めんものは、彼入是光明を覺悟せん

譬へば生盲の目を見ざるが如く、日の世間に出づる無しと爲すに非ず

諸の目有る者は悉く視見し、各務むる所に隨ひて其業を修む

大聖の光明も亦是の如く、或は衆生の見ると見ざると有り

邪見惡害の觀ざる所にして、勝智慧の者は乃ち能く見る

摩尼の寶殿、上の幢傘、衆の寶香味、莊嚴の具は

功德有る者には自然に備はるも、無徳の者の能く獲る所に非ず

【微妙の勝三昧】
已下六偈は第九の
三昧たる主伴嚴麗
三昧を頌す。

【十方の世界云云】
已下三十五頌は第
十の三昧たる寂用
無涯の三昧を明し
初一頌は十方に出
反して三昧に入
するを説き、次二
十五頌半は三世間
に就きて自在無礙
の用を明せり。

大聖の光明も亦是の如く、其行實に隨ひて見ざる見ざるあり
是諸の光明を分別するを聞きて、精勤恭敬して信向する者は
一切諸の疑惑を滅除して、速かに無上の功徳を成ぜん

微妙の勝三昧を出生するは、諸佛眷屬の大菩薩にして
神力此に於て自在を得、悉く能く顯現して衆生に示す
三千大千の妙莊嚴は、一蓮華を化して世界に滿ち

結跏趺坐して悉く充滿す、是を自在の三昧力と名く
十方世界の微塵の刹に、七寶の大蓮華を化作して

佛子の眷屬共に圍遶す、是を自在勝三昧と名く
宿世に善因縁を成就し、功徳を具足して佛道を求むる

彼等衆生は菩薩を遶り、一切合掌して觀て嘆くこと無し
彼大仙人の法は是の如く、甚深の正受三昧の力なり

菩薩は彼清淨の業に處して、月の星に在りて獨り明耀なるが如し
此一方に示現する所の、諸の佛子等を眷屬と爲すが如く
一切の十方も亦是の如し、示現三昧の自在力なり

十方の世界に緣有るが故に、往反出入して衆生を度し
或は菩薩の正受に入るを見、或は菩薩の定より起つを見る

或は東方にて正受に入るを見、或は西方にて三昧より起つを見
 或は西方にて正受に入るを見、或は東方にて三昧より起つを見る
 是の如く出入して十方に廻く、或は異方にて正受に入るを見
 或は異方にて三昧より起つを見る、是れ大仙の定自在力なり
 東方の世界は餘り有ること無く、佛刹の如來は思議し難し
 菩薩は常に彼佛の前に現す、是を寂靜の三昧力と名く
 東方の一切諸佛の前にて、常に安住して正受に入るを見
 西方の一切諸佛の前にて、常に菩薩の佛を供養するを見る
 西方の世界は餘り有ること無く、佛刹の如來は思議し難し
 彼一切諸佛の前に於て、常に菩薩の正受に入るを見る
 西方にて彼正受に入るを見、東方の佛刹は餘り有ること無し
 彼佛の前に於て三昧より起ち、一切の佛を恭敬し供養す
 是の如く十方諸佛の前にて、三昧に出入して餘り有ること無く
 或は菩薩の正受に入るを見、或は佛を恭敬し供養するを見る
 眼根の中に於て正受に入り、色法の中に於て三昧より起ち
 色法を示現して不思議なるも、一切の天人能く知る莫し
 色法の中に於て正受に入り、眼に於て定より起ちて念亂れず

眼は無生にして自性無きを觀じ、空寂滅にして所有無しと説く
耳根の中に於て正受に入り、觸法の中に於て三昧より起ち
一切諸の香樂を分別するも、諸天世人能く知る莫し
聲法の中に於て正受に入り、耳に於て定より起ちて念亂れず
耳は無生にして自性無しと觀じ、空寂滅にして所有無しと説く
鼻根の中に於て正受に入り、香法の中に於て三昧より起ち
一切諸の香法を分別するも、諸天世人能く知る莫し
香法の中に於て正受に入り、鼻に於て定より起ちて念亂れず
鼻は無生にして自性無しと觀じ、空寂滅にして所有無しと説く
舌根の中に於て正受に入り、味法の中に於て三昧より起ち
一切諸の味法を分別するも、諸天世人能く知る莫し
味法の中に於て正受に入り、舌に於て定より起ちて念亂れず
舌は無生にして自性無しと觀じ、空寂滅にして所有無しと説く
身根の中に於て正受に入り、觸法の中に於て三昧より起ち
一切諸の觸法を分別するも、諸天世人能く知る莫し
觸法の中に於て正受に入り、身に於て定より起ちて念亂れず
身は無生にして自性無しと觀じ、空寂滅にして所有無しと説く

意根の中に於て正受に入り、諸法の中に於て三昧より起ち一切諸の法相を分別するも、諸天世人能く知る莫し

諸法の中に於て正受に入り、意に於て定より起ちて念亂れず意は無生にして自性無しと觀じ、空寂滅にして所有無しと説く

童子の身にて正受に入り、壯年の身に於て三昧より起つことを現じ壯年の身にて正受に入り、老年の身に於て三昧より起つことを現じ

老年の身にて正受に入り、善女人に於て三昧より起つことを現じ善女人にて正受に入り、善男子に於て三昧より起つことを現じ

善男子にて正受に入り、比丘尼の身に於て三昧より起つことを現じ比丘尼の身にて正受に入り、比丘の身に於て三昧より起ち

比丘の身にて正受に入り、學無學に於て三昧より起つことを現じ學無學にて正受に入り、緣覺の身に於て三昧より起つことを現じ

緣覺の身にて正受に入り、如來の身に於て三昧より起つことを現じ如來の身にて正受に入り、諸天の身に於て三昧より起つことを現じ

諸天の身にて正受に入り、龍神の身に於て三昧より起つことを現じ龍神の身にて正受に入り、大鬼神に於て三昧より起つことを現じ

大鬼神にて正受に入り、一切の鬼神にて三昧より起つことを現じ

【比丘尼】(Bhikṣu) 三、苾芻尼の訛音にして、乞士女、勤事女等と譯す。女の出家、即ち尼僧を言ふ。
【比丘】(Bhikṣu) 苾芻の訛音にして、乞士、除餘、勤事男等と譯す。男の出家にして即ち僧侶なり。
【學無學】有學、無學の略。今は聲聞一般を指せり。

有學とは預流、一來、不還の四向三果にある修行者に慧及び擇滅の理を學習する聲聞なり無學は第四果の阿羅漢位にして、三界の煩惱を滅盡し更に學ぶべきなき位の修行者なり。

【一切の鬼神】已下七頌半は微細差別の自在を明かす

一切の鬼神にて正受に入り、一毛孔の中に三昧より起ち
 一毛孔の中に正受に入り、一切の毛孔にて三昧より起ち
 一切の毛孔にて正受に入り、一毛端頭にて三昧より起ち
 一毛端頭にて正受に入り、一切の毛端にて三昧より起ち
 一切の毛端にて正受に入り、一微塵の中に三昧より起ち
 一微塵の中に正受に入り、一切の微塵にて三昧より起ち
 一切の微塵にて正受に入り、金剛地に於て三昧より起ち
 金剛地にて正受に入り、摩尼寶樹にて三昧より起ち
 摩尼寶樹にて正受に入り、諸佛の光明にて三昧より起ち
 諸佛の光明にて正受に入り、大海の水にて三昧より起ち
 大海の水にて正受に入り、大盛火に於て三昧より起ち
 大盛火にて正受に入り、風に於て定より起ちて心亂れざることを現じ
 風大に於て正受に入り、地大の中に於て三昧より起つことを現じ
 地大の中に正受に入り、天の宮殿に於て三昧より起つことを現じ
 天の宮殿にて正受に入り、虚空の中に於て三昧より起つことを現す
 是を無量の功德ある者と名け、三昧は自在にして思議し難く
 十方一切の諸の如來、不思議の劫に説きたまふとも盡さざらん

【一切諸佛云云】
已下七十七頌は十八の大譬喩を以て、本會の宗旨を説く。

【今聲聞の云云】

已下は第一、聲聞現通の譬喩にして、菩薩の自在に衆生を饒益する力を説説せり。

【八解脫】 聲聞の

觀法にて、八種の解脫なり。この觀法によつて、聲聞は欲等の五欲を捨し、無明習を起し、三界の惑を斷じて無學果一阿羅漢果を證る。

内有色想觀外色解脫、内無色想觀外色解脫、淨解脫、身作證具是住、空無邊處解脫、無所有處解脫、非想非非想處解脫、滅受想定解脫、身證具是住是れなり。

【淨水の中の云云】
八輪の第二、水現四兵の喩なり。著

一切諸佛は皆共に説きたまはく、衆生の業報は思議し難く、諸龍の神變、佛の自在、禪定三昧も亦思ひ難しと

今聲聞の自在力を説かんと、之が爲に譬喩を作すべき無し
智慧明了の聰達の者は、乃ち能く是甚深の義を解せん
八解脫を得て心自在に、一身能く無量の身と作り

無量の身を以て一身と作り、虚空の中に於て火定に入る
身上よりは水を出し、身下よりは火を出し、身上よりは火を出し、身下よりは水を

虚空の中に行住臥し、一念の中に於て自在に變ず
彼大慈悲を具足せざれば、衆生の爲に佛道を求めざるも
尙能く難思議なるを示現す、況んや大饒益の自在力をや

現じて日月と作りて虚空に遊び、普く十方の諸の世界を照し
或は河池井泉水と作り、或は大海の衆の寶器と作り

是の如き等比は思議し難く、普く十方の諸の世界に現じ
深く三昧と諸の解脫とに達するは、唯諸佛のみ有りて能く證知したまふ

淨水の中の四兵の喩は、各各別異なるも皆明了に
刀劍輪戟、衆の兵器、是の如き等の仗皆悉く現するが如し

其器仗の木の形相に隨ひて、悉く彼淨水の中に現じ

其器仗の木の形相に隨ひて、悉く彼淨水の中に現じ

薩の海印三昧の徳に喩へしなり。【四兵】歩兵、象兵、馬兵、車兵の四兵種なり。【海中に天云云】已下海天妙智の喩にして、第三喩たり。菩薩の總持巧説の徳に喩ふ。【一女人有云云】已下第四喩にして、女授辯才の喩と云ふ。菩薩法を授けしむるに喩ふ。【實へは幻師云云】第五喩にして、幻師化術の譬喩なり。菩薩の不思議解脱の力を以て衆生を喜ばしむるに譬ふ。【天と阿修羅】已下第六喩にして、修羅入部の譬喩なり。菩薩の自在無礙の神通に喩ふ。【藕絲】藕とは連根なり。今蓮根の糸と其孔との極めて微細なることを表せり。

水影の四兵に憎愛無し、是を大仙の定の自在と名く海中に天有り、妙智と名け、其中の衆生若干種彼一切の音聲を解し、皆悉く大歡喜を得しむ彼に貪欲瞋恚癡有るも、猶能く一切の音を分別す況んや復總持の自在力ありて、而も衆生を喜ばしむる能はざらんや一女人有り、辯才と名く、父母天に求め此に由りて生れ諸の悪法を離れ眞實を樂み、能く衆生をして辯才を得しむ彼に貪欲瞋恚癡有るも、猶能く衆に勝れたる、辯才を與へ亦能く彼をして歡喜を得しむ、何に況んや菩薩の無量なる言をや譬へば幻師の術法を善くして、能く種種無量の色を現じ晝夜須臾の頃に示現し、或は須臾を百年と作ずを現するがごとし彼に貪欲瞋恚癡有るも、幻力自在にして世間を覆ぼしむ況んや禪解脱、神通の行ありて、云何が衆生をして喜はしめざらんや天と阿修羅と闘戰するの時、阿修羅の衆即ち退散して心大いに恐怖して奔走し、四兵悉く藕絲の孔に入る彼に貪欲瞋恚癡有るも、能く自在不思議を作す況んや自在の無畏の法に住して、云何が能く神變を現せざらんや

釋提桓因に六六
第七喻にして、象
王、寶樹の喻と言
ふ。菩薩の定自
在の徳に喩ふ。

【阿修羅の如き云】
云【已下は第八喻
にして、修羅大身
の喩と言ふ。菩薩
の法界に等しき身
を現する徳に喩へ
しなり。】
【天と阿修羅云云】
【已下は第九喻にし
て、帝釋、阿修羅の譬
喩なり。菩薩の衆
魔を降伏する徳に
喩ふ。】

釋提桓因に象王有り、彼帝釋の行かんと欲する時を知り

彼化して頭を三十二と作し、一一の口中に六牙有り

一一の牙の上に七浴池あり、清淨の香水湛然として満ち

一一の清淨の池水の中に、各七蓮華を莊嚴と爲す

彼諸の嚴飾せる蓮華の上に、各各七天玉女有り

諸人は並びに微妙の音を奏して、彼帝釋と與に相娛樂す

或時は彼龍象の身を捨てて、天女の極めて莊嚴なるを化作し

威儀の巧妙なること最も比無し、是を龍象の自在力と名く

彼に食欲瞋恚癡有るも、能く是の如き諸の神變を作す

何に況んや方便智を具足して、而も諸の定に於て自在ならざらんや

阿修羅の如きは身を化作して、金剛の地上に其足を安じ

海水の至深なるも僅かに身に半ばするのみ、其首の廣大なる須彌の如し

彼に食欲瞋恚癡有るも、乃ち能く是大神力を現す

況んや魔怨を伏したる照世の燈にして、而も能く大神變を現せざらんや

天と阿修羅と共に戰ふ時、帝釋の自在なること思議し難く

阿修羅の軍衆の數に隨ひ、身を現じて彼に等しくして交戰す

諸の阿修羅は是念を發すらく、釋提桓因來りて我に向ひ

【初利の諸天云云】第十、摩訶薩法の功用の心を以て現身說法するに驗ふ。【妙音聲】天鼓と音ふ。初利の善法堂の前に在る大鼓にして、自然に忽來忽去、愛欲生厭の四種の妙音を出すと言ふ。【摩竭】(Makha)

必ず我が身を取りて五種に縛せんと、阿修羅の衆大いに恐怖す。帝釋身に下眼有ることを現じて、手に金剛を執りて火焰を出し、甲を撞り杖を持ちて自ら莊嚴す、阿修羅は見て即ち退散す。彼微少の功德の力を以て、猶能く大なる怨敵を摧破す。何に況んや一切を救度する者の、無量の功德にして自在ならざらんや。初利の諸天を教化せんが故に、此果報たる妙音聲を得。諸天等の放逸の行あるを以て、空中に自然に此音を出す。一切の五欲は悉く無常なり、虚偽にして實無きこと水沫の如く、野馬、水中の月の如く、有爲は夢の如く浮雲の如し。一切放逸にして憂諍有るは、甘露の道に非ずして生死の徑なり。若し諸の放逸を行ぜん者有らば、生死の摩竭口に入らん。我が有する所の者は衆苦の本にして、一切の賢聖の厭ひ患ふ所。五欲は功德磨滅の法なれば、常に清淨にして眞實の行を樂へよと。三十三天此音を聞きて、一切の善法堂に來り集り。帝釋爲に微妙の法を説きて、離欲寂靜の行に隨順せしむ。彼音は形無くして見るべからざるも、猶能く諸の天衆を饒益す。何に況んや衆生に應化する身にして、大に一切の世を利する能はざらんや。

【天と阿修羅云云】第十一略にして、空聲安慰の喩と言ふ。菩薩の慈音能く衆生の煩惱苦を除く徳に喩ふ。

【帝釋普く云云】第十二略にして、天王普く衆生の喩と云ふ。菩薩普く機に喩じて、衆生を悦ばしむる徳に喩ふ。

【釋】帝釋天の略。

【他化自在六天の王云云】第十三略にして、魔王自在の喩と言ふ。菩薩の攝生同行の徳に喩ふ。

【他化自在天】六欲天の一にして、六欲天中の最高な

天と阿修羅と共に闘ふの時、諸の天の衆侶大いに恐怖す。諸の天の功徳の勢力の故に、空中に聲を出して懼るること勿れと言ふ。諸天此安慰の聲を聞きて、即ち恐畏を離れて大力を生ず。時に阿修羅心に震懼し、將ゐる所の其衆悉く退散す。何に況んや甘露の妙音聲をや、能く衆生の諸の恐怖を滅し大慈具足して衆魔を摧き、寂靜の妙音は煩惱を除く。帝釋普く諸の天女九十有二那由他に應ず。天女各各心に自ら謂へらく、天王獨り我と與に娛樂すと身を現じて善法堂に集在し、天の爲に法を説きて歡喜せしむ。帝釋能く一念の中に於て、悉く皆此大神變を現す。釋に貪欲瞋恚癡有るも、能く眷屬をして悉く歡喜せしむ。況んや無量劫に神力を修して、而も一切をして悦ばしむる能はざらんや。他化自在六天の王は、欲界の中に於て自在を得。業煩惱を以て羅網と爲し、一切の諸の凡夫を繫縛す。彼に貪欲瞋恚癡有るも、能く欲界の諸の群生を伏す。況んや十種の自在力を具して、而も衆をして其行に同ぜしめざらんや。三千世界の大梵王は、一切の諸の梵の所住の處に

るを以て第六天と
も言ひ、欲界の支
配者たる大魔王の
住處なり。

【三千世界云云】

第十四論にして、
梵身殊現の喩と言
ふ。菩薩の解脫力
を以て自在に説法
する徳に喩ふるな
り。

【四梵諸】 四梵諸

とも云ひ、増一阿
含に出づる梵天所
生の四種法なり。
即ち一に喜婆を立
て初摩天に生れ、
二に放身を修補し
て二摩天に生じ、
三に聖衆と和して
三摩天に生れ、四
に轉法輪を勧請し
て四摩天に生るる
なり。

【摩訶首羅云云】

第十五論にして、
摩訶首羅の喩と言
ふ。菩薩の一念普
知の徳に喩ふる。

【衆生ノ業報云云】

第十六論にして、
風論持故の喩と言
ふ。菩薩の大願成

悉く能く身を現じて彼に於て坐し、微妙の梵音聲を清暢す
彼は世間の四禁道、禪定、互通に於て如意を得

何に況んや一切世を超出したるもの、禪定解脫自在ならざらんや

摩訶首羅の智は自在にして、大海の龍王雨を降らすの時

悉く能く分別して其滴を數へ、一念の中に於て皆明かに了る

無量億劫に勤めて修學し、是無上の菩提智を得

云何が當に一念の中に於て、一切衆生の心を知らざるべけんや

衆生の業報は思議し難し、大風論に因りて世界を起し

巨瀾、諸山、天の宮殿、衆寶、光明、萬の物種

亦能く雲を興して大雨を降らし、亦能く諸の雲氣を散滅し

亦能く一切の穀を成熟し、亦大いに群生の類を饒益す

風は波羅蜜を學ぶこと能はず、亦佛の諸の功徳を學ばざるも

猶不可思議の事を成ず、何に況んや諸の關を具足する者をや

男子女人諸の異類、海龍、雷震の大音聲は

悉く能く皆響の如しと了知し、障礙無きの無盡の辯を達

一切衆の爲に妙法を説き、其聞くこと有る者は悉く歡喜す

海の奇特なること未だ曾て有らず、一切衆像の類を印現し

就し、攝化の功説
著く機に應ずる徳
に喩ふ。

【男子女人云云】

第十七喩にして、
大海包含の喩と普
ふ。菩薩の衆徳を
積聚し、爲に諸機
に印契する徳に喩
ふ。

【龍王自在云云】

第十八喩にして、
龍王降の喩と普
ふ。菩薩の法界を
窮め盡して、普く
法雨を雨らし、群
生を攝はしむる徳
に喩ふ。

大身の衆生妙寶の藏には、衆流悉く入りて増損無きが如し

是の如く衆生の平等印は、無盡の功德、禪、解脫

一切の智慧、諸の功徳にして、衆善を増長して厭足無し

龍王自在を示現する時は、金剛際より他化に至るまで

雲を興して四天下に充遍す、其雲には種種莊嚴の色あり

第六の他家自在天は、彼に於て雲の色は黄金の如く

化樂天の上の雲は赤色、兜率陀天は白寶色

夜摩天の上は琉璃色、三十三天は碼碯色

四王天の上は玻璃色、大海の上に於ては金剛色

緊那羅の中には妙香色、諸の龍の住處には蓮華色

微密光の中には白鷲色、阿修羅の中には狀山の如く

鬱單曰の中には金野馬、閻浮提の境の雲は青色

餘の二天下には算種色、衆の衆ふ所に隨ひ以て之に應ず

又復他化自在天は、雲の中の電耀は日光の如く

化樂天の上には月光の如く、兜率天の上には閻浮金

夜摩天の上には白寶色、禪處の金雲は野馬の如く

四王天の上には最妙色、大海の上に於ては赤寶色

緊那羅の中には青瑠璃、諸の龍の住處には寶藏色
微密天の中には玻璃色、阿修羅の中には瑪瑙色
鬱單越の境には火珠色、閻浮提の界には青寶色
餘の二天下には雜莊嚴し、衆の樂ふ所に隨ひ以て之に應ず
他家の雷震は梵音の如く、化樂天の上には妙音聲
兜率天の上には妙樂の音、夜摩天の上には天女の音
彼切利の諸天の上には、緊那羅女の妙音聲
四王天の上には乾闥の聲、緊那羅の中には簫笛の聲
彼一切の大海の中に於ては、猶し兩山の相擊つ聲の如く
諸の龍の住處には鬚鬣の聲、微密天の中には龍女の聲
阿修羅の中には天鼓の聲、人道の中に於ては海潮の聲
又復他化自在天には、妙香華を雨らして莊嚴と爲し
化樂天の上には蒼蘅華、曼陀羅華及び澤香
兜率天の上には摩尼珠、無上の種種の莊嚴の寶
明淨の鬘珠の月光の如き、上妙の細衣は鍍金の色
夜摩は幢蓋幡の莊嚴、華鬘、塗香の勝れたる莊嚴
赤眞珠の衣、金の紋絡、種種微妙の衆の妓樂

三十三天は如意珠、緊固の殊妙の梅檀香、種種の寶金
諸の天華、華清淨の華、香水を雨らし

四王天は上味の寶を雨らし、衆味具足して氣力を生ず
又不可思議の寶を雨らし、龍王は此種種の雨を降らす
又須弥大海の中に於て、一一の雨滴は車輪の如く、

無量の衆寶盡すべからず、又種種の莊嚴の寶を雨らす
緊要は華、青寶の衣を、摩利には妙華、細末香を雨らし
種種の妙華、悉く具足す、是の如き無量の妙華あり

諸の龍の住處には赤眞珠、微密天の中には女珠の寶
阿修羅の中に兵仗を雨らし、一切の怨敵を摧伏し、
憍單には無價の寶の瓔珞、弗婆俱那の二天下には

婆師迦利、菴伽華、清淨の妙寶華也の華
閻浮提には清淨の水を雨らし、柔軟悅澤にして常に時に應じ
衆の果香華の樹を長養し、隨時に成熟して衆生を益す

是の如く無量は思慮し難し、雲を興して雷震し種種に雨ふり
自ら宮殿に於て身動せずして、能く自在不思議を現す
彼流の中に於て船主と爲り、神變を示現して思慮し難し

況んや法の海に入りて源底を盡せるもの、云何が大神變をなし能はざる
 我が説く所の諸の譬喩の如きは、深智慧の菩薩の爲の故に
 無畏の居士は偷匹無く、自在の諸の解脱を速得せり
 微妙の無量勝智の者は、能く是の如きの解脱門
 諸の未曾有の奇特の法を説けるも、一切は其因に報ゆること能はず
 是甚深の勝解脱を聞きて、信解し受持して他の爲に説け
 世間の一切諸の凡夫にして、是法を信ぜんものは甚だ得難し
 無量の諸の善法を思惟したる、本有の因力の故に能く信ず
 一切世界の諸の群生にして、聲聞の道を欲し求めんとするもの有ること鮮く
 緣覺を求めん者は轉た復少く、大乘を求めん者は甚だ希有なり
 大乘を求めん者は猶易しと爲す、能く是法を信ぜんは是甚だ難し
 況んや能く受持し正しく憶念し、説の如く修行し眞實に解せんをや
 若し三千大千界を以て、頂戴すること一劫にして身動かざらんも
 彼の作す所は未だ難しと爲さず、是法を信ぜん者は甚だ難しと爲す
 大千の塵數の衆生類に、一劫に諸の樂具を供養せんも
 彼の功德は未だ勝れたりと爲さず、是法を信ぜん者は殊に勝れたりと爲す
 若し學を以て十佛刹を持ち、虚空の中に於て住すること一劫ならんも

彼の作す所は未だ難しと爲さず、是法を信せん者は甚だ難しと爲す
 十佛刹の摩の衆生の類に、一劫に諸の樂具を供養せんも
 彼の功德は未だ勝れたりと爲さず、是法を信せんものは殊に勝れたりと爲す
 十刹の摩數の諸の如來を、一劫に恭敬し供養せんも
 もし能く此品を受持せん者は、功德彼よりも最勝なりと爲す
 賢首此品を説き竟りし時、十方の世界六返に動き
 諸塵の宮闈は聚聖の如く、光十方を照して惡道滅びぬ
 一切十方の諸の如來は、悉く皆普く賢首の前に現じ
 各右の手を伸べて其頂を摩でたまふ、賢首菩薩の徳は無量なり
 其右の手を以て頂を摩で已りて、一切の如來讚歎して言はく
 善い哉善い哉、眞の佛子、快く是法を説けり我隨喜すと

佛昇須彌頂品第九

【佛昇須彌頂品】
 第三會、普提樹下
 上に於て出現し給
 ひての説法の初品
 なり。本會は昇須

爾時、如來、威神力の故に、十方一切の諸佛の世界の、諸の四天下の、一一の闍浮提に、
 皆如來有りて普提樹下に坐したまひ、顯現せざる無し。彼諸の菩薩は、各伴の勢力
 を承け、種種の法を説き、皆悉く自ら佛の所に在りと謂へり。

彌頂、菩薩雲集、
初發心菩薩功徳、
明法の六品より成
り、信に依りて正
位に入ることを叙
せり。而て本品は
本會中の序説に
て、果徳の圓滿せ
るを明す。如來感
應の序なり。

【迦葉】(Kassapa)
迦提波の略にし
て、飲光と譯す。
賢劫千佛の第三、
過去七佛の第六に
して釋迦の前佛と
せしむ。

【拘那牟尼】(Kamuni)
拘那含牟尼の略にして、金
仙と譯す。賢劫千
佛中の第二、過去
七佛の第五位にし
て入壽三萬歳の時
分淨域に生ると言
ふ。

爾時、世尊は、威神力の故に、此座を起ちたまはずして、須彌の頂に昇り、帝釋殿に向ひたまへり。

爾時、帝釋、遙かに佛の來りたまふを見て、即ち妙勝殿の上に於て、衆寶の師子の座を敷置し、萬種の雜寶を以て之を莊嚴し、萬種の寶帳を其上に彌覆し、萬の寶網を以て之を絞絡し、次上には、萬種の衆の妙寶蓋、天繒、雜寶を以て垂帶と爲し、萬種の瓔珞もて之を莊嚴し、萬種の寶衣を以て座の上に敷き、一萬の天子前に在りて立侍し、一萬の梵天これを圍遶し、一萬の光明を以て照耀を爲せり

爾時、帝釋は、佛の爲に師子の座を莊嚴し已りて、合掌し恭敬し、佛に白して言さく、『善くぞ來りたまひし、世尊。唯願くば哀みたまひて我が此宮殿に處したまへ。爾時、世尊、即ち其請を受けて、妙勝殿に昇りたまへり。一切の十方も亦復是の如し。爾時、帝釋の無量の樂音は、佛の神力の故に寂然として聲無し。即ち自ら過去佛の所に於て、諸の善根を種しことを憶念して、偈を以て對して曰はく、

迦葉如來は大慈を具へ、諸の吉祥の中に最も無上なり
彼佛會て來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり
拘那牟尼の慧は無礙にして、諸の吉祥の中に最も無上なり
彼佛會て來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり
拘樓佛の身は金山の如く、諸の吉祥の中に最も無上なり

【拘樓】(Krukuch) 拘留孫の略にして、賢劫千佛の首位にして、過去七佛の第四位、安壽四萬歳の時、安和城に生ると言ふ。

【寶葉】(Vashti) 一切自在と云ひ、無一切自在と譯す。過去千佛の最後位にして、過去七佛の第三位なり。

【尸棄】(Sikhin) 式詰とも書き、火、持持等と譯す。過去七佛の第二にして、入壽七萬歳の時、光相城に生ると言ふ。

【波頭摩】(Bhatam) 波頭摩、摩羅と譯す。過去七佛の首位にして、入壽八萬歳の時、般若提提城に生ると言ふ。

【弗沙】(Pusa) 佛華嚴經に譯す。過去十佛の中の一にして、又廿八宿中の鬼星

彼佛會一來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり

摩訶如來は三垢を離れて、諸の吉祥の中に最も無上なり

彼佛會て來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり

尸棄如來は常に寂然として、諸の吉祥の中に最も無上なり

彼佛會て來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり

毘婆尸佛は滿月の如く、諸の吉祥の中に最も無上なり

彼佛會て來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり

弗沙は明かに第一義に達し、諸の吉祥の中に最も無上なり

彼佛會て來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり

提舍如來の辯は無礙にして、諸の吉祥の中に最も無上なり

彼佛會て來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり

波頭摩佛は淨くして垢無く、諸の吉祥の中に最も無上なり

彼佛會て來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり

鏡光如來は明かに普く照し、諸の吉祥の中に最も無上なり

彼佛會て來りて此處に入りたまへり、是故に此地は最も吉祥なり

此間、帝釋は佛の神方の故に、偈を以て十佛の功德を讚歎したるが如く、是の如く、十方の帝釋も、各自ら過去佛の所にて種し所の善根を憶念して、偈を以て讚歎すること

の名にも同様なるあり。

【昆命】(ヒツシ)説と譯す。説法するが故に此名あり。

【波頓摩】(Rahina)鉢特摩、鉢曇摩等とも云ひ、紅蓮華と譯す。鉢曇華華即ち蓮華の一種なり。今佛の名となれるは佛心の清淨なること、蓮華の泥中に在りて尚汚れざるに喩へて名づけられたしならん。

【鏡光】(Dharmadatta)の譯にして、定光とも言ひ、一般に標作と譯す。燃燈と言ふも是れなり。過去久遠の昔に出現せし如来にして、佛迦に授記せし師佛なり。

【菩薩聖果說偈品】本會の第二品にして、本會中の序説の第二とも言ひ、佛の因徳の圓滿せることを明かす、集衆放光の序なり。

も、亦復是の如し。爾時、世尊は、童子の座に昇り、結跏趺坐したまひぬ。坐し已りて、宮殿は忽然として廣博なること初利天の處の如くなれり。一切の十方も亦復是の如し。

菩薩雲集妙勝殿上說偈品第十之一

爾時、十方各百佛世界微塵數の刹を過ぎて、一方の方に各十世界あり、其世界を因陀羅と名け、次を蓮華と名け、次を衆寶と名け、次を優鉢羅と名け、次を妙行と名け、次を善行と名け、次を歡喜と名け、次を宿星と名け、次を無厭慈と名け、次を虛空と名く、其佛を不動月と號け、次を無盡月と號け、次を不動月と號け、次を香風月と號け、次を自在天月と號け、次を清淨月と號け、次を無上月と號け、次を星宿月と號け、次を不喪變月と號け、次を無量自在月と號けたてまつる。其菩薩を法慧と名け、次を一切慧と名け、次を勝慧と名け、次を功德慧と名け、次を精進慧と名け、次を善慧と名け、次を智慧と名け、次を眞實慧と名け、次を無上慧と名け、次を堅固慧と名く。此諸の菩薩は、各其國の佛の所に於て、梵行を淨修せり。

爾時、佛の神力の故に、彼一方の菩薩は、各一佛世界微塵數の菩薩の眷屬を將ゐて、俱に佛の所に來詣し、恭敬し禮拜せり。又佛の神力の故に、寶藏の童子の座を化作して、結跏趺坐し、十方に充滿せり。此世界の須彌山の頂に菩薩の雲集せるが如く、十方の世

【優鉢羅】(Utpala) 譯して青蓮華と云ふ。

【爾時法慧菩薩云】已下偈頌を以て、十段に頌ち、一菩薩ありて各段一菩薩宛の徳を讚歎せり。

界も亦復是の如し。爾時、世尊、兩足の指より、百千億の妙色の光明を放ちて、普く十方一切の世界、諸の四天下の、菩提樹下の、須彌山の頂の妙勝殿上を照したまひて、如來の大衆皆悉く顯現せり。

爾時、法慧菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

天人の師は悉く、一切權淨せる刹の

須彌山王の頂の、帝釋の妙勝殿に現じたまふ

天下の請を哀受したまふが故に、其宮殿に處したまひ

一一各十の、吉祥偈を以て佛を讚じたてまつる

諸佛の大眷屬たる、清淨の菩薩衆は

斯に十方より來り、踰躑して正しく安坐せり

各其名字を同うし、我が菩薩衆の如く

本刹を捨離して、諸佛の所に往詣せり

本國の諸の世尊は、名號皆悉く同じく

各其佛の所に於て、菩薩の行を淨修せり

諸の佛子、當に知るべし、如來の威神力にて

一切世界の中にて、各佛、前に在すと謂へり

今我等は佛の、釋の妙勝殿に坐したまふを見たてまつる

十方も亦是の如し、如來の自在力なり

一切世界の中の、發心して佛たらんことを求むる者は

先づ清淨の願を立て、菩薩の行を修習す

菩薩は淨く、無量無數の劫に修行して

法界に於て無礙なれば、能く測量する者無し

悉く普く十方を照して、愚癡の闇を滅除し

一切與等無し、是故に能く知ること莫し

爾時、一切慧菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

無量無數劫に、常に如來を見たてまつると雖も

此正法の中に於て、猶未だ眞實を觀す

妄想もて諸法を取り、癡惑の網を増長して

生死の中に輪廻し、盲冥にして佛を見たてまつらず

復諸法を觀すと雖も、猶未だ實相を見ず

一切の法は生滅し、但假りの名字に著す

一切の法は生無く、一切の法は滅無し

若し能く是の如く解らば、諸佛は常に現前せん

取も無く亦見も無く、空寂にして眞實無し

諸佛は本來空にして、思量することを得べからず
若し一切の法は、思量すべからずと解らん者は

彼諸の煩惱に於て、其心に所染無けん

虚妄に法相を取るは、是れ則ち癡冥と爲す

是故に佛を見たてまつらず、亦眞實を得ず

牟尼は三世を離れ、相好悉く具足し

住に於て所住無く、法界悉く清淨なり

因縁の故に法生じ、因縁の故に法滅す

是の如く如來を觀ずれば、究竟して眞感を離る

法慧先に已に、清淨の微妙の法を説きたり

我彼勝に従ひて、菩提の思議し難きことを聞けり

爾時、勝慧菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀、偈を以て頌して曰はく、

如來の智は甚だ深く、一切能く測る莫し

眞實の法を知らざれば、世間は悉く迷惑す

童蒙は是を思惟して、虚妄に諸法を取る

是故に佛の、具足せる清淨の相を見たてまつらず
愚蒙の心迷惑して、妄りに五陰の相を取りて

【謂曲】許り親む
 情神作用にして、
 甘隨煩惱の一に數
 へこれ、亦小煩惱
 地法の、一たる心所
 なり。釋尊痛くこ
 の心を惡み給ひ、
 識教經にも敢て説
 誠し給へり。佛敎
 【慧眼】五眼（般
 若に出づる佛敎教
 學の範疇たり）の
 一にして、諸法の
 空理を觀る智慧の
 眼を言ふ、二乘は
 これまで進位して
 萬有差別の執着よ
 り脱するなり。

眞實の性を了らず、是故に佛を見たてまつらず
 一切の法、皆悉く眞實無しと分別す
 是の如く諸法を解らば、則ち盧舍那を見たてまつらん
 前の五陰に因るが故に、後の陰相續して生じ
 次第して五陰を解らば、佛の思議し難きを見たてまつらん
 實の品處に在るが如し、明無きが故に見えず
 眞諦も説く者無ければ、慧と雖も能く觀ること莫し
 日明淨ならざれば、微妙の色を見ざるが如く
 是の如く不淨の心は、諸佛の法を見ず
 猶明淨の日も、日無き者は見ざるが如く
 若し人心詔曲ならば、終に諸佛は觀たてまつらざらん
 故に當に淨慧眼もて、諸法の相を觀察すべし
 法相を見ることの明了なるは、猶し鏡中の像の如し
 一切慧先に、清淨の微妙の法を説けり
 我彼勝に従ひて聞き、佛盧舍那を見たてまつれり
 爾時、功德慈善齒、佛の神力を承けて、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
 諸法は虚にして實無きに、妄りに堅固の相を取る

【八正道】 佛教の修造を概括し、中にして理に契ひ、涅槃（解脱）に至る正道たり。正見（四諦の正しき見解）、正思惟（四諦の正しき思惟觀察）、正語（眞實なる言語）、正業（正しき行爲）、正命（五種業命を離れたる佛教の倫理的な生活）、正精進（戒定慧の三學に精進なること）、正念（正法の思念）、正定（身心寂靜）これを一

【法眼】 五眼の一にして、菩薩の具する證智の眼なり、菩薩これを以て諸法の眞相を觀じて、衆生濟度に精進するなり。

是故に章家の者は、常に生死の輪を轉ず
 不善は勝法に非ざるに、妄りに勝法の相を作す
 是故に障礙を生じて、愚癡常に輪轉す
 八正道を知らず、如何が自身を知らん
 彼顛倒の相に囚りて、一切の惡を増長す
 諸法の空なるを見ずして、常に無量の苦を受く
 彼人は、清淨の法眼を成就せざるが故に
 一切の心を知らんと欲せば、先づ常に法眼を求むべし
 我が説く所の如くならん者は、能く眞實の佛を見たてまつらん
 若し佛を見たてまつる者有りて、其心に所著無ければ
 彼は則ち眞實を見ること、佛の識きたまふ所の法の如くならん
 若し大智慧の如來の妙法身を見たてまつらば
 能く如來を見たてまつるが故に、彼に清淨眼有り
 見無ければ乃ち能く、一切の眞實の法を見る
 法に於て所見有れば、彼は則ち所見無し
 妙なる哉、眞實の法、佛は以て衆生を導きたまふ
 一切諸有の中には、生も無く亦死も無し

【不二の見】二とは有無の二邊なり、有にあらざるにあらざる即ち不二は中道の眞見たり。

勝慧先に已に、清淨微妙の法を説けり
我は彼勝に従ひて聞き、深く諸佛の道を解れり

爾時、精進慧菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

諸の妄想の行を以て、慧眼清淨ならず

愚癡邪見増して、常に諸佛を見たてまつらず

若し能く邪偽、及以眞實の法を見て

諦かに實と不實とを了らば、則ち清淨の佛を見たてまつらん

見者は則ち是れ垢にして、彼は則ち所見無し

諸佛は所見を離る、是故に清淨を見る

世間の語言の法は、虚妄にして眞實無し

世は縁より起ると知れば、能く生死の患を離る

世間と非世間とは、觀察するに悉く平等にして

二俱に眞實なりと知る、是を眞見の者と名く

若し能く是の如く觀すれば、漏盡きて自在を得

有に非ず亦無に非ず、是を不二の見と名く

虚妄も非虚妄に非ざるも、是れ諸佛の法に非ず

眞實に二相無し、法性は清淨なるが故に

法性は自ら清淨にして、無相なること虚空の如く
一切能く説くこと無し、智者は是の如く觀す
一切の法は、寂滅にして所有無しと樂觀し
亦修すべからざることを知らば、能く牟尼尊を見たてまつらん
是の如くして佛を見たてまつらん者の、功德は量るべからず
一切の有ゆる行は、寂靜にして空無の相なり

大方廣佛華嚴經

卷第八

東晋天竺三藏佛跋跋陀羅譯

菩薩雲集妙勝殿上說偈品第十之二

爾時、善慧菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
 妙なる哉、佛世尊、無量の諸の如來は、
 害心を離れて解脫し、自ら度し能く彼を度したまふ、
 正しく世間の燈を見るに、如實にして顛倒ならず
 無量無數劫に、徳を積むが故に佛を見たてまつる
 諸行は空にして實無きに、凡夫は眞諦なりと謂ふ
 一切自性無く、皆悉く虚空に等し
 無盡智の説く所は、説く者に説く所無し
 有は悉く無なりと了知す、故に難思議なるを得
 無盡の説は無盡なり、衆生は空寂なるが故に
 彼眞實の性を知らば、則ち大名稱を見ん

見無きに是れ見なりと説き、我無きに衆生なりと説く
見及び衆生と説くも、是二は悉く有に非ず

見者に所見無ければ、是見は相を壞せず

是を眞實の法と名く、一切の佛の説きたまふ所なり

能く眞實の佛と、及び佛の説きたまふ所とを知らば

普く一切の世を見ること、佛、盧舍那の如くならん

如來の等正覺は、善く明淨の道を説きたまへばなり

精進慧菩薩は、無量の法を演説して

有無の諸法の相は、一相にして平等なりと修し

是の如くして能く佛を見たてまつり、眞實際に安住せり

爾時、智慧菩薩、佛の神力を受け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

我は最勝の教を聞きて、即ち淨慧の光を生じ

普く十方の世を照し、悉く一切の佛を見たてまつる

若し衆生有りと計せば、是を最難處と爲す

法には本眞の主無く、但假りの言説有のみ

愚惑は能く、自身の眞實性を知ること莫し

如來は取相に非ず、是故に佛を見たてまつらず

塵垢は慧眼を障へて、等正覺を見たてまつらず
無量無數劫に生死の海に流轉す

流轉は即ち生死にして、非轉は是れ涅槃なり

生死及び涅槃は、二皆得べからず

虚誑妄説の者は、生死と涅槃とを異にして

賢聖の法に迷惑し、無上の道を識らず

是の如く相を取る者は、佛の等覺有りと言ふも

顛倒にして正念無し、是故に佛を見たてまつらず

能く此實法は、寂滅眞如の相なりと知らば

則ち最正覺を見たてまつり、語言の道を超出せん

虚妄に諸法を説くも、法は實に所有無し

一切諸の世尊は、諦かに求むるに得べからず

明かに過去世、未來及び現在に

究竟じて永く寂滅なりと了る、故に説いて如來と爲す

爾時、眞慧菩薩、佛の神力を受け、普く十方を觀じ、佛を以て頌して曰はく、

寧ろ無量の苦をも受けん、佛の音聲を聞くことを得んには
一切の樂をも受けじ、佛の名を聞かざらんには

無量劫に、此衆の苦惱を受けて

生死の中に流轉せる所以は、佛の名を聞かざるが故に

實に無實の法なるを以て、正覺すれば眞偽等し

和合の相無きを以てなり、是を名けて菩提と爲す

現の佛は縁合に非ず、去來も亦復然り

一切の法は無相なり、是れ即ち佛の眞性なり

若し能く是の如く、諸法の甚深の義を觀ぜば

則ち無量の佛の、法身の眞實相を見たてまつらん

實に於ては眞實なりと知り、非實には非實なりと知りて

善く眞實際を解る、故に號けて正覺と爲す

覺者に所覺無ければ、是れ佛の眞妙の法にして

諸佛は是の如く修し、一に非ず亦二に非ず

一法を衆と爲すことを知り、衆法を一と爲すことを知り

法に所依の處無し、云何が而も縁合ならん

作者及び所作は、二俱に所有無し

若し能く是の如く解らば、之を求めんも得べからず

是處は不可得にして、諸佛の依止する所なり

【微妙なるに】本
有(先天的)の理を
指す。
【盡なる者】修行
(經驗的)の徳を指
す。

法に所依有ること無く、覺者に所著無ければなり
爾時、無上慧菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
無上の摩訶薩は、衆生の相を遠離し
上の相に所有無し、故に號けて無上と爲す
微妙なるに所有無し、羸なる者にも亦復無し
諸佛の得たまふ所は、望に非ず亦作に非ず
是法は數ふべからず、諸佛の境界も
亦無數を離る、是を佛の眞法と名く
慧日十方を照して、衆の闇冥を滅除するも
亦所照有るに非ず、亦復無照に非ず
常に寂靜の法を樂ひて、永く有所依を離れ
解脱に依處無くして、一切の法に染ます
善く大智の者を見るに、眞實の所依の住なり
若し二法有ること無ければ、當に知るべし一も亦無し
一も無く亦二も無く、一切皆寂滅にして
三種の世間は空なり、是れ則ち諸佛の見なり
諸佛は衆生を教へて、正法の中に安住せしめたまふ

【清淨眼】清淨法
眼のことにして初
果の聖者なり。二
乗のもの初て見道
に入り、無漏の法
眼を以て四諦の理
を觀するなり。

無所住に解達すれば、常に眞實の身を見たてまつるべし

非身は即ち是れ身なり、轉ぜざれば見るべからず

轉無ければ亦見も無し、是を無上身と名く

眞慧の演說せし所は、無量の諸佛の法なり

若し此法を聞かん者は、常に清淨眼を得

爾時、堅固慧菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

衆生は恩を知らず、如來は慈慧を發して

世間に出現し、普く照して衆の冥を除きたまふ

大慈悲の心を起して、普く諸の群生を觀じたまふに

具さに無量の苦を受け、永く縛せられて三有に在り

唯等正覺の、最勝の尊導師のみを除きては

一切天人の中に、歸依すべき者無し

世界に若し佛、及び衆の賢聖の人無くんば

彼諸の群生の類には、一切の樂有ること無けん

如來と衆の賢聖とは、世間に出現して

爲に淨慧眼を開き、永く安樂を得しめたまふ

若し如來を見たてまつらんものは、爲に最大の利を得

【十住品】 第三會
の正説の初品なり
この品に於ては廣
く位相を明かして
解を生ぜしむるな
り。初に入定と佛
の加被力とを明せ

佛の名を聞きて歡喜すれば、則ち是れ世間の塔なり
我等は善利を獲て、現前に如來を覩たてまつり
斯微妙の法を聞き、悉く當に佛道を成ずべし
三世の明解脫の、甚深の諸の境界にて
一切衆の菩薩は、清淨にして慧眼を開けり
我等は重ねて歡喜して佛、盧舍那の
無量無邊の智を見たてまつる、演説するも盡すべからず
無上慧、堅固、及び諸の佛子等は
無數億劫の中に、佛の徳を説くとも盡すこと無けん

菩薩十住品第十一

爾時、法慧菩薩、佛の神力を承け、菩薩の無量方便三昧の正受に入れり。三昧に入り已りて、十方の千佛世界摩數の佛土の外に、各千佛世界摩數の諸佛を見たてまつる。是諸の如來は、悉く法慧と號けたてまつる。時に彼諸の佛、法慧菩薩に告げて言はく、「善哉善哉、善男子、乃ち能く是菩薩の無量方便三昧の正受に入れり。善男子、十方の各千佛利摩數の諸佛は、汝に神力を加したまふが故に、能く是三昧正受に入れり。又盧

【持せしめん】受持して滅せざらしむる義なり。
 【無礙智】佛智の意。大衆に說法するに何者にも障へられず、無礙自在にして、尚も一切の事理を盡す大智を言ふ。
 【無住智】六六。無礙智を以て對攝せる佛智を、九種の方面より別種せる部分的智なり。
 【法】即ち是の如く。法爾として然りとの意。即ち自然の理として水の低きに向ふが如く自ら然るなり。
 【種性】種は因なり、性とは轉の義なり。即ち今に菩薩本具の佛性を指せり。
 【諸の佛子】六六。十住の中、第一發心住を明かす。

舍那佛の本願力の故に、威神力の故に、及び汝の善根力の故に。又汝をして廣く法を説かしめん。と欲するが故に、佛慧を長養せしめんが故に、法界を開解せしめんが故に、衆生界を分別せしめんが故に、障を除滅せしめんが故に、無礙の境界に入らしめんが故に、無等等の方便もて一切智の陀羅尼に入らしめんが故に、一切の法を覺らしめんが故に、善く諸根を知らしめんが故に法を説きて持せしめんが故に、謂ゆる菩薩の十住なり。善男子、當に佛の神力を承け微妙の法を説くべし。

爾時、一切の如來は、即ち法慧菩薩に、無礙智、無住智、無斷智、無礙智、無壞智、無惡智、無量智、無勝智、無懈怠智、無退智を與へたまへり。何を以ての故に。彼三昧の力法として是の如くなるが故に。爾時、諸佛は、各右の手を伸べ、法慧菩薩の頂を摩てたまへり。其頂を摩て已りて、即ち定より起ちて、衆の菩薩に告げて言はく、諸佛の佛子、菩薩の種性は甚深廣大にして、法界虚空と等しく、一切の菩薩は三世諸佛の種性の中より生じたり。諸の佛子、菩薩摩訶薩の十住の行は、去來現在の諸佛の説きたまふ所なり。何等をか十と爲す。一を初發心と名け、二を治地と名け、三を修行と名け、四を生貴と名け、五を方便具足と名け、六を正心と名け、七を不退と名け、八を童真と名け、九を法王子と名け、十を灌頂と名く。諸の佛子、是を菩薩の十住と名け、去來現在の諸佛の説きたまふ所なり。

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の初發心住なる。此菩薩は、佛の三十二相、八十種

【是處非處の智】

處は道理の義にして善因善果を得るは是れ道理なり。之を是處と言ひ、惡因惡果を得るは非處なり。而も道理なり。これを非處と言ひ、これを因果律を偏知する智慧を是處非處の智と言ふ。

【業報垢淨の智】

因果律を盡知する智慧の一分にして業善ならば淨報を受得し、惡業には穢報ありとの相を知る智を言ふ。已下其他の智も同様にして因果律偏知の是處非處の智の分智なり。

【一切至處道の智】

一切の道の至る處（修道の結果）の相を認知する智を言ふ。

【三世漏盡の智】

三世の一切の煩惱を斷盡し、習氣を縁も滅して涅槃を緣する智力を言ふ。

好、妙色具足し、尊卑にして遇ひ難きを見たまつり、或は神變を觀、或は說法を聞き、或は教誡を聽き、或は衆生の無量の苦を受くるを見、或は如來の廣く佛法を説きたまふを聞き、善提心を發し、一切智を求め、一向にして退かず。此菩薩は初發心に因りて、十分を得たり。何等をか十と爲す。謂ゆる、是處非處の智、業報垢淨の智、諸根の智、欲樂の智、性智、一切至處道の智、一切の禪定解脫三昧正受垢淨起の智、宿命無礙の智、天眼無礙の智、三世漏盡の智なり。是を十と爲す。諸の佛子、彼菩薩は應に十法を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、諸佛を恭敬し、供養し、諸菩薩を讚歎し、衆生の心を護り、賢明に親近し、不退の法を讚じ、佛の功德を修し、諸佛の前に生ずることを稱揚し、歎美し、方便もて寂靜の三昧を修習し、生死の輪廻を遠離することを讚歎し、苦の衆生の爲に歸依の處と作らんことを學ぶべし。何を以ての故に。菩提心をして轉た勝れて堅固ならしめ、無上道を成ぜしめんと欲すればなり。聞く所の法有らば即ち自ら開解して、他に由りて悟らず。

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の治地住なる。此菩薩は、一切の衆生に於て十種の心を發す。何等をか十と爲す。謂ゆる、大慈心、大悲心、樂心、安住心、歡喜心、衆生を度する心、衆生を守護する心、我所心、師心、如來心なり。是を十と爲す。諸の佛子、彼菩薩は應に十法を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、先づ當に勤學して、専ら多聞を求むべし、離欲の定を修め、善知識に近きて其教に違はず、善く時語を知り、無所畏を

【諸の佛子乃至治地住】第二住たる治地住を明せり。

【諸の佛子乃至修】諸の佛子乃至修

【諸の佛子乃至修】諸の佛子乃至修

【諸の佛子乃至修】諸の佛子乃至修

學び、明かに深義を解り、正法に了達し、堅き法行を知り、癡冥を捨離し、不動に安住すべし。何を以ての故に。一切の衆生に於て、大慈悲を増長せんと欲するが故に。聞く所の法有れば、即ち自ら開解して、他に由りて悟らす。

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の修行住なる。此菩薩は十種もて一切の法を觀す、何等をか十と爲す。謂ゆる、一切の法は、無常、苦、空、無我、不自在なり、一切の法は樂むべきにあらず、一切の法は集散無し、一切の法は堅固無し、一切の法は虚妄なり、一切の法は精勤和合堅固無しと觀す。是を十と爲す。諸の佛子、彼菩薩は應に十法を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、分別して一切の衆生界を知り、分別して一切の法界を知り、分別して一切の世界を知り、分別して地、水、火、風界を知り、分別して欲、色、無色界を知ること學ぶ。何を以ての故に。一切の法に於て明淨の智慧を増長せんと欲するが故に。聞く所の法有れば、即ち自ら開解して、他に由りて悟らす。

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の生貴住なる。此菩薩は、一切の樂法、正教の中より生れ、千種の法を修す。何等をか十と爲す。謂ゆる、佛を信すること、壞せず、法を究竟し、寂然たる定意、衆生を分別し、佛刹を分別し、世界を分別し、諸業を分別し、果報を分別し、生死を分別し、涅槃を分別す。是を十と爲す。諸の佛子、彼菩薩は應に十法を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、去來今の佛の法を分別し、去來今の佛の法を修行し、去來今の佛の法を具足し、平等に、一切の諸佛を觀察することを學ぶ。何を以ての

【諸の佛子乃至具足方便住】第五住の具足方便住を明かす。

【諸の佛子乃至正心住】已下第六住の正心住を明せり

故に、二世に明達して等しく觀ぜしめんと欲すればなり。聞く所の法有れば、即ち自ら開解して、他に由りて悟らず。

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の具足方便住なる。此菩薩は、十種の法を聞きて應當に修行すべし。何等をか十と爲す。所行の善根は悉く一切衆生を求護し、一切衆生を饒益し、一切衆生を安樂にし、一切衆生を哀愍し、一切衆生を成就し、一切衆生をして諸難を捨離せしめ、一切衆生を生死の苦惱より拔出し、一切衆生をして歡喜快樂ならしめ、一切衆生をして調伏せしめ、一切衆生をして悉く涅槃を得しめんが爲なり。是を具足方便住と爲す。諸の佛子、彼菩薩は、常に十法を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、衆生の邊有ること無きを知り、衆生の數ふべからざるを知り、衆生の不思議なるを知り、衆生の種種の色を知り、衆生の量るべからざるを知り、衆生の空なるを知り、衆生の自在ならざるを知り、衆生の眞實に非ざるを知り、衆生の所有無きを知らんことを學ぶ。何を以ての故に、其心をして染著する所無からしめんと欲すればなり。聞く所の法有れば、即ち自ら開解して、他に由りて悟らず。

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の正心住なる。此菩薩は十種の法を聞きて、決定の心を得。何等をか十と爲す。謂ゆる、佛を讚め佛を毀るを聞くも、佛法の中に於て心定まりて動ぜず。法を讚め法を毀るを聞くも、佛法の中に於て心定まりて動ぜず。菩薩を讚毀するを聞くも、佛法の中に於て心定まりて動ぜず。菩薩の所行の法を、讚毀するを聞くも

佛法の中に於て心定まりて動ぜず。衆生の有量無量なるを聞くも、佛法の中に於て心定まりて動ぜず。衆生の有垢無垢なるを聞くも、佛法の中に於て心定まりて動ぜず。衆生の有量無量なるを聞くも、佛法の中に於て心定まりて動ぜず。法界の若し成じ若し壞するを聞くも、佛法の中に於て心定まりて動ぜず。法界の若し有若し無なるを聞くも、佛法の中に於て心定まりて動ぜず。是を十と爲す。諸の佛子、彼菩薩は應に十法を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、一切の法は無相なり、一切の法は無性なり、一切の法は修すべからず、一切の法は所有無く、一切の法は眞實無く、一切の法は虚空の如く、一切の法は自性無く、一切の法は幻の如く、一切の法は夢の如く、一切の法は響の如くなるを學ぶ。何を以ての故に。不退轉の無生法忍を得しめんと欲するが故に。聞く所の法有れば、即ち自ら開解して、他に由りて悟らず。

【諸の佛子乃至不退轉】已下第七住の不退轉住に就いて明かす

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の不退轉住なる。此菩薩は十種の法を聞きて、其心堅固にして、而も動轉せず。何等をか十と爲す。謂ゆる、有佛と無佛とを聞くも、佛法の中に於て退轉せず。法有るも、法無きも、佛法の中に於て退轉せず。菩薩有るも、菩薩無きも、佛法の中に於て退轉せず。菩薩の行有るも、菩薩の行無きも、佛法の中に於て退轉せず。菩薩の行は生死を出づるも、生死を出でざるも、佛法の中に於て退轉せず。過去佛有るも、過去佛無きも、佛法の中に於て退轉せず。未來佛有るも、未來佛無きも、佛法の中

【諸の佛子乃至童眞住】已下第八住の童眞住を明かす

に於て退轉せず。現在佛有るも、現在佛無きも、佛法の中に於て退轉せず。佛智には盡く
ること有るも、盡くすること無きも、佛法の中に於て退轉せず。三世の法は一相なるも、一
相に非ざるも、佛法の中に於て退轉せず。是を十と爲す。諸の佛子、彼菩薩は應に十法
を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、一は即ち是れ多なり、多は即ち是れ一なりと知
り、味に隨ひて義を知り、義に隨ひて味を知り、非有は是れ有なりと知り、有は是れ非有
なりと知り、非相は是れ相なりと知り、相は是れ非相なりと知り、非性は是れ性なりと知
り、性は是れ非性なりと知る。何を以ての故に。一切の法に於て、方便を具足せんと欲す
るが故に。聞く所の法有れば、即ち自ら開解して、他に由りて悟らす。

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の童眞住なる。此菩薩は十種の法に於て、心安立す
ることを得。何等をか十と爲す。謂ゆる、身行清淨、口行清淨、意行清淨、意に隨
ひて生を受け、衆生の心を知り、衆生の種種の欲樂を知り、衆生の種種の性を知り、衆生
の種種の業を知り、世界の成壞を知り、神通自在にして、障礙有ること無し。是を十と爲
す。諸の佛子、彼菩薩は應に十法を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる一切の佛利を
知り、一切の佛利を震動し、一切の佛利を持し、一切の佛利を觀じ、一切の佛利に詣り、
遍く一切の世界に至り、善く無量の妙法を聞難し、神通もて無量の身を變化し、善く無量
の諸の音聲を解し、一念の中に於て無量の諸佛を恭敬し供養することを學ぶ。何を以て
の故に。一切の法の中に於て巧方便を出だし、具足し成就せんと欲すればなり。聞く所の

諸の佛子乃至法王子住已下第九住の法王子住を明かす。

諸の佛子乃至灌頂住已下第十住たる灌頂住を明かす。以て十住を盡せり。

法有れば、即ち自ら開解して、他に由りて悟らす。

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の法王子住なる。此菩薩は善く十種の法を解る。何等をか十と爲す。謂ゆる、善く衆生の趣を解り、善く諸の煩惱を解り、善く諸の習氣を解り、善く方便智を解り、善く無量の法を分別することを解り、善く諸の威儀を解り、善く諸の世界を分別するを解り、善く去來今を解り、善く世諦を説くを解り、善く第一義諦を説くを解る。是を十と爲す。諸の佛子、彼菩薩は應に十法を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、善く法王の所住の處を知り、善く法王の行する所の威儀を知り、善く法王の處に安立するを知り、善く巧に法王の處に入るを知り、善く法王の處を分別するを知り、善く法王の甘露の灌頂を知り、善く法王の法を受持するを知り、善く法王の無畏法を知り、善く法王の無著の法を知り、善く法王の法を讚歎するを知らんことを學ぶ。何を以ての故に。一切の法に於て無障礙の智を得んと欲すればなり、聞く所の法有れば、即ち自ら開解して、他に因りて悟らす。

諸の佛子、何等か是れ菩薩摩訶薩の灌頂住なる。此菩薩は、十種の智住を成就す。何等をか十と爲す。謂ゆる、悉く能く無量の世界を震動し、悉く能く無量の世界を照明にし、悉く能く無量の世界を任持し、悉く能く遍く無量の世界に遊び、悉く能く無量の世界を嚴淨し、悉く無量の衆生の心行を知り、悉く衆生の隨心の所行を知り、悉く無量の衆生の諸根を知り、悉く能く方便もて無量の衆生を度し、悉く能く無量

の衆生を調伏す。是を十と爲す。諸の佛子、彼菩薩の身は知るべからず、身業神足、神足自在にして、過去の智、未來の智、現在の智、諸佛の刹を淨むる智、心の境界、智の境界知るべからず、一切の衆生、乃至法王子の菩薩も、悉く知ること能はず。諸の佛子、彼菩薩は、應に十種の智を學ぶべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、三世の智、一切佛法の智、法界無障礙の智、法界無量無邊の智、一切の世界に充滿するの智、普く一切の世界を照すの智、能く一切の世界を持するの智、一切の衆生を分別するの智、一切種智、佛智の無量無邊の智を學ぶ。何を以ての故に。一切種智を具足せしめんと欲すればなり、聞く所の法有れば、即ち自ら開解して、他に由りて悟らず。」

爾時、佛の神力の故に、十方の各萬佛世界塵數の佛國は、六種十八相に震動して、天の寶華、天の末香、天の寶鬘、天の雜香、天の寶衣、天の寶雲、天の莊嚴具を雨らし、天の妙音樂は鼓せざるに自ら鳴り、又自ら無畏の音を演出せり。此四天下の須彌山の頂の、妙勝殿上に、威神變化して十住の法を説きしが如く、一切の十方世界も亦復是の如し。

爾時、佛の神力の故に、十方の各萬佛世界塵數の刹を過ぎて外に、十佛刹微塵數に等しき諸の大菩薩有りて、十方に充滿して、此土に來詣し、是の如きの言を説くらく、善い哉善い哉、佛子。善く此法を説けり。我等諸人も同じく法慧と名け、従つて來りし所の國を同じく法雲と名け、彼諸の如來は同じく妙法と號けたてまつる。我等が佛の所にも

【爾時法慧菩薩、
 下法慧菩薩の頌
 偈總じて一百一偈
 二偈半は十住を頌
 説し、後偈は結歎
 勸修を説けり。そ
 の中最初十住の偈
 を、次六偈は第二
 住、次五偈は第
 三、次六は第四、
 次四は第五、次五
 は第六、次四は第
 七、次五は第八、
 次三は第九、後八
 偈は第十灌頂住を
 明かせり。

亦十住を説き、大衆眷屬も、名味自身も等しくして異り有ること無し。是故に、佛子、我等は佛の神力を承け、此土に來詣し、汝が爲に證を作す。此四天下の、須彌山の頂の妙勝殿上に十住の法を説き、十佛世界の微塵數に等しき、諸の大菩薩此に來りて證を作せしが如く、一切の十方も亦復是の如し。

爾時、法慧菩薩、佛の神力を承け、普く十方及び諸の法界を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

大智の尊の微妙の身は、相好端嚴に悉く具足し

最勝は尊重にして甚だ遇ひ難きを、見たてまつりて勇猛の大王は初めて發心す

無等等の大神變を見て、妙法及び教誡を説きたまふを聞き

五道の無量の苦を觀察して、無畏の大王は初めて發心す

諸の如來普智の尊は、無量の功德悉く具足せりと聞き

佛の心相は虚空の如しと解る、菩薩は此に因りて初めて發心す

能く是處と及び非處と、若は我と非我と是の如き等を知り

平等の眞實の義を解らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

過去未來現在世の、一切善惡の諸の業報を

善く悉く平等なりと觀察せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

諸禪三昧及び解脫と、隨順の正受とに所著無く

善く垢淨の起るを分別せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

諸の衆生の根の利鈍に隨ひて、種種に勤めて精進力を修し

悉く了達し分別して知らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切衆生の種種の欲、心好んで諸の希望に樂著するを

悉く了達し分別して知らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切衆生の種種の性は無量無邊にして數ふべからず

悉く了達し分別して知らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切諸道の所至の處、八正の聖路は無爲に向ふ

悉く了達して其實を知らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切世界の衆生の類は、五道の生死の海に流轉す

天眼を得て悉く明達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

過去世の一切の事に於て、其體性有ゆる相の如く

悉く隨順して宿命に達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

世間の一切諸の煩惱と、有ゆる、結縛と、餘の習氣とを

悉く覺知し究竟じて盡さんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

世間の有ゆる世諦の法と、名字談論語言の道と

悉く世諦の義に明達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切諸法は言語斷え、自性有ること無く虚空の如し

悉く眞諦の義に明達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切の佛の世界を震動し、諸の大海を傾覆し鼓蕩して

悉く佛の神力に明達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一毛より無量の光を放演し、普く十方一切の刹を照す

一の光に於て一切を覺らしめんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

無量の佛刹の思議し難きを、皆悉く能く一掌の中に置き

一切は幻化の如しと解らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

無量の佛刹の諸の衆生を、皆悉く一毛端に安置し

悉く皆寂滅なりと了達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切十方の大海の水を、一毛を以て滴し盡して餘すこと無く

悉く分別して滴數を知らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

不可思議の諸の佛刹を、皆碎きて末と爲して微塵の如くし

悉く分別して其數を知らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

過去未來の無量劫の、一切世界の成敗の相

悉く究竟じて其際に達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

三世一切の等正覺と、諸の辟支佛及び聲聞と

悉く三乘の道を分別せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す
無量無邊の諸の世界を、能く一毛を以て悉く稱り擧げて

有無の眞實の相を知らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す
金剛圍山の數無量を、盡く能く一毛端に安置し

至大に小相有ることを知らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

十方一切の諸の世界に、能く一音を以て遍く充滿し

悉く淨妙の聲を解了せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切衆生の語言の法を、一言に演説し盡く餘す無く

悉く淨密の音を解了せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

如來の清淨微妙の音は、十方諸の世界に充滿す

舌根の相を具足するを得んと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切十方の諸の世界の、成壞有るものは皆悉く見て

悉く虛妄なりと解了することを得んと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

一切十方の諸の佛刹、其中の無量の諸の如來の

悉く佛の正法を了達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

普く能く無量の身に應現して、一切世界の微塵と等しきを

悉く幻化の如しと了達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

過去未來現在世の、無量無邊の諸の如來を

一念に於て悉く了知せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

具さに一句の法を演說せんと欲し、阿僧祇劫にも窮盡すること無し

辯才をして斷絶せざらしめんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

十方一切の諸の群生を、其遷變生滅の相に隨ひて

一念に於て悉く了達せんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

淨妙の身口と及び意行とは、十方に遊歩して障礙無く

三世は悉く空寂なりと了らんと欲し、菩薩は此に因りて初めて發心す

菩薩は是の如く發心し已りて、上方界の諸佛の所に於て

應に佛を敬ひ供養することを學び盡すべし、是の如きの説は不退の教なり

菩薩の種種の衆を捨離し、生死を厭はずして菩提を求め

此を以て勸進し歡喜し歡す、是の如きの説は不退の教なり

十方一切の諸の世界の、其中の有ゆる衆の賢聖を

菩薩は常に應に彼を讚歎すべし、是の如きの説は不退の教なり

最勝最上にして比有ること無く、甚深微妙の清淨法

菩薩は此を以て衆生を化す、是の如きの説は不退の教なり

無上清淨の妙善の法は、一切の衆魔も壞すること能はず

菩薩は尊重して常に稱歎す、是の如きの説は不退の教なり
一切の有ゆる妙功德を、天人の尊は悉く成就したまふ
此を以て、諸の菩薩を安立せしむ、是の如く説く者は人中の王なり
方便教化して諸佛を見たてまつること、無量無數にして思議し難し
若し能く此方便を以て化せんには、是の如きの説は不退の教なり
一切の甚深の諸の三昧を、悉く衆生に教へて餘り行ること無く
菩薩は分別して具さに開導す、是の如きの説は不退の教なり
悉く能く生死の輪を摧滅し、具さに聖道の妙法輪を轉じ
一切世間に所著無し、諸佛の記したまふ所は是れ菩薩なり
菩薩若し無量の衆の、生死に輪轉して諸の苦を受くるを見ば
爲に救護歸依の者と作る、諸佛の記したまふ所は是れ菩薩なり
是説は菩薩の發心住にして、一向に無上道を志求するなり
我が説く所の微妙の法の如く、一切諸佛も亦是の如し
第二治地の眞の佛子は、先づ應に發心して是念を作すべし
願くば一切群生の類をして、諸佛の教に隨順して修行せしめんと
衆生を饒益し安樂にする心、歡喜して衆生を捨てざる心
大悲、救護、我所の心、大師の心、如來の心を起さん

是の如き等の勝妙の心を發して、精勤に學問して多聞を求め寂然たる定意、正しき思惟、心常に善知識に親近し隨順奉行して其教を修し、柔軟の善語、放逸ならず

善能く一切の時を了知し、深法の義に達して畏るる所無く

明かに深義を解し正法を了れば、即ち一切の諸の癡冥を離る已に愚癡を離るれば心安住す、是れ則ち名けて眞の佛子と爲す亦治地の摩訶薩と名け、一向に堅固にして菩提を求む

是の如く善く諸佛の教を學ばば、是れ則ち名けて眞の佛子と爲す第三修行の眞の佛子は、應當に是の如く諸法を觀すべし

無常、苦、空にして堅固なる無く、我無く主無くして自在ならず一切の諸法は樂むべきにあらず、無作虚誑にして眞實ならず

積集有ること無く亦散ずることも無しと、是の如く觀する者は是れ菩薩なり衆生界を分別し觀察し、亦當に諸の法界を解了すべし

善能く分別し方便もて、無量無邊の諸の世界を觀ぜよ一切十方の國土の中の、地水火風の四大界と

欲界、色界、無色界とを、悉く能く觀察し分別して知れ

善能く明かに一切界に達すれば、眞實に究竟して餘り有ること無し

是の如きは眞諦正法の教にして、隨順して學ぶ者は是れ菩薩なり
第四生貴の眞の佛子は、諸の賢聖の正法より生れ
有無の諸法に所著無く、生死を捨離して三界を出づ

佛を信すること堅固にして壞すべからず、淨心を究竟して退轉せず
明了に甚深の法を觀察するに、一切の衆生は眞實無し

行業、世界、諸佛の刹と、生死、果報、及び涅槃とを

佛子若し能く是の如く觀せば、是を如來の法化より生ずと名く
過去未來現在世の、諸佛如來及び正法を

無量の方便もて求めて究竟すれば、一切の大聖の法を成就す

一切三世の諸の如來を、平等に觀察するに異相無く

分別するに差別は得べからず、是の如く觀する者は三世に達す

我が説く所を讚歎する者の如きは、是を四住の摩訶薩と名く

若し能く是の如く修學せん者は、速かに無上の佛の菩提を成せん

第五の菩薩眞の佛子は、微妙具足の方便に住し

深く清淨の巧方便に入りて、一切の功德の業を究竟す

修する所の無量の諸の功德は、悉く一切の爲に歸依と作り

饒益し安樂にし大慈悲もて、諸の群生を哀愍し度脱す

一切世の爲に衆難を除き、永く生死を抜きて歡喜せしめ

一切諸の群生を調伏し、功德を具足して涅槃に趣かしむ

普く一切の諸の群生の爲に、清淨の法を分別し演説す

是を第五の摩訶薩と名け、方便を成就して衆生を度す

一切の功德を具足する者、五住の淨妙の法を演説したまふ

第六正心の眞の佛子は、眞實の法を解りて愚癡を離れ

一切世の天人の中に於て、正念に思惟して虚妄を滅し

佛及び佛法と、一切の菩薩の所行の道とを震毀する

衆生の量有り若は量無きを聞き、佛法の中に於て心動せず

衆生に垢有るも若は垢無きも、或は度し易き有るも或は度し難きも

法界に量有るも若は量無きも、世界に成有るも或は敗行るも

或は法界の若は有無なりと聞くも、過去未來今現在

菩薩は此一切法に於て、寂然として觀察し心動せず

一切の法は性相無く、其義は眞實にして虚空の如く

痛し幻、化、夢の所見の若しと觀ず、是人は法に於て眞に解れりと爲す

第七不退の眞の佛子は、諸佛菩薩の法有りと聞くも
諸佛菩薩の法無しと聞くも、若は出づるも出でざるも退轉せず

過去未來及び現在の、一切諸佛の有と無と

若は法の起滅するも起滅せざるも、若は一相有るも若は異相たるも

若は一即多、多即一、義味寂滅して、悉く平等に

一異顛倒の相を遠離す、是を菩薩の不退住と名く

若は法相有ると及び無相なると、若は法相有ると及び無性なると

二俱に實無くして虚空に等し、是の如く知る者は必ず究竟せん

第八章眞の眞の佛子は、身口意の行悉く具足し

微妙清淨にして染汚無く、意の欲する所に隨ひて自在に生れ

悉く一切衆生の心を知り、善能く諸の欲性を觀望し

衆生と法と無差別なると、十方世界の成敗の相とを了り

速かに一切の妙神通に逮り、十方の諸佛の刹に往説し

隨意自在にして障礙無く、妙法を説くを聞きて、悉く受持す

六種に一切の國を震動し、皆悉く能く諸の世界を持し

見音遍く十方の刹に滿ち、無量の群生の類を度脱す

佛義を諮問すること數ふべからず、其身を變化すること量有ること無く

化を受くる者に隨ひて法言を演べ、佛の説きたまひし所の如く異り有ること無し

善く輕重の煩惱の行を知り、其所應に隨ひて方便もて度す

善く分別して諸法の相を知り、明かに世界の先後際に達し

善く俗諦と第一義とを解り、方便を具足して餘り有ること無し

善能く法王の處に了達し、法王の威儀の法に隨順し

善く法王の位に安入することを知り、善く法王界を分別することを知る

第十灌頂の眞の佛子は、方便もて善く一切の法を持し

如法に隨順して深淺に入り、悉く能く究竟じて分別して説く

悉く衆生を度して餘り有ること無く、而も衆生に於て相を取らず

寂然不動にして正念を學び、悉く十方の諸佛の前に在り

灌頂の菩薩、眞の佛子は、悉く能く諸の勝法を究竟し

十方の無量の諸の世界を、悉く能く震動して光普く照し

能く十方の諸の世界を持し、一切衆生の心を嚴淨し

悉く一切衆生の根を知り、梵音聲を演べて上方に滿ち

諸の群生を調伏し化度して、悉く菩提心を修習せしめ

普く十方の諸佛の國に入りて、法界を觀察して餘り有ること無し

滿頂の色身及び身業は、神足自在にして不思議なり

三世の佛國を觀察するの智は、乃至下子も測らざる所なり

三世の諸佛及び佛法を、分別し了知して障礙無く
法界は無量にして邊有ること無く、諸佛と聲聞悉く充滿し
一切諸の世界を盡して、皆悉く能く光を持して普く照し
一切群生の類を盡して、爲に究竟の正覺智を説く
是の如く十住の諸の菩薩は、悉く如來の法化より生じ
其方便及び境界に隨ひ、一切の天人も能く知る莫し
初め無上の菩提心を發し、十方に充滿して悉く餘す無く
三世の諸法の相に了達して、一切智を具足し成就す
無邊の佛刹及び世間、無量無數の衆生の類
煩惱、業報、菩提心、是の如きの一切に所著無し
初め佛道を求めて發す一心すら、世間の衆生及び二乘
斯等の一切も能く知る莫し、何に況んや菩薩の餘の功德をや
十方一切の諸の世界を、能く一毛を以て悉く稱り擧げて
彼は菩薩の具足せる行を知り、疾く如來の一切智を得ん
十方一切の大海の水を、能く一毛を以て滯み盡さしめ
一念の中に於て悉く數を知る、是の如く行ずる者は眞の佛子なり
一切の世界を末して塵と爲し、悉く能く分別して其數を知る

【梵行】前品に於て十住の位相を、從つて行を明かすの順序なり。本品は正しく十住清淨行に至る十種の清淨行を説けり。問答の形式を用ひて叙説せる中、最初に修梵行位成、得果の三義を問ふ。【正士云云】已下梵行に對し、初問修相を答説す。

菩薩の行する所は微塵に等し、是れ則ち名けて眞の佛子と爲す。過去未來現在の佛も、一切の縁覺及び聲聞も、分別し解説して、發心の菩薩の諸の功徳を盡すこと能はず。菩薩の初發の菩提心は、廣大無量にして邊有ること無く、大慈大悲もて一切を覆ふ、何に況んや菩薩の餘の功徳をや。

梵行品第十一

爾時、正念天子、法慧菩薩に白して言さく、「佛子、一切世界の中の諸の菩薩摩訶薩は、家の家に非ざることをして信じて、出家學道し、俗飾を捨離して、法衣を被服せり。彼諸の菩薩は、云何が方便もて梵行を修習し、菩薩の十住道地を具足して、速かに、無上平等の菩提を成ずるや。」爾時、法慧菩薩、正念天子に答へて言はく、「正士、此菩薩摩訶薩は、一向に、専ら無上菩提を求むるに、先づ當に十種の法を分別すべし。何等をか十と爲す。謂ゆる、身、身業、口、口業、意、意業、佛、法、僧、戒なり。應に是の如く觀すべし。身を是れ梵行と爲すや、乃至戒は是れ梵行となすや。若し身是れ梵行ならば、當に知るべし、梵行は則ち清淨にあらす。當に知るべし、梵行は則ち非法爲り。當に知るべし、梵行は則ち渾濁爲り。當に知るべし、梵行は則ち臭惡爲り。當に知るべし、梵行は則ち穢汚爲り。

【斯陀含】(Sakami)一來と譯し、聲聞四果の第二位にして、欲界修惑の中上六品を斷じたる聖者なり。餘の下三品の惑に依り天人に各一生を感生して後入涅槃するを以て、人天間一往來する聖者の意を以て一往來果即ち一來果と言ふ。

【阿那含】(Anāgami)不還又は本來と譯す。欲界修惑の九品を斷盡して、欲界に全く絶緣せらる聖者なるを以て不還と言ふ。

【阿羅漢】(Arhan)阿羅漢、阿黎呵、又は羅漢とも言ひ、應供、無生、離惡等と譯す。聲聞四果の最高位にして三界の見思の惑を斷盡し、盡智、無生智を得て無學位に住せる聖者なり。

【三明六通】三明とは三智にして、

爲すや。清淨と不清淨とを問ふを是れ戒と爲すや。戒師を是れ戒と爲すや。三羯磨和尚を是れ戒と爲すや。鬚髮、法服、乞食を是れ戒と爲すや。菩薩摩訶薩は、當に是の如く十種の法を觀察すべし。又過去に所至無く、未來に所有無く、現在に作者無く、知者無く、報を受くる者無く、此世彼世に至らず、彼世此世に至らずと知らば、何等の法をか是れ梵行と爲すや。梵行の法は何の處に在りと爲すや、誰か是梵行の法を有する。此梵行の法は是れ有と爲すや、是れ無と爲すや。是れ色法と爲すや。非色の法と爲すや。是れ受想行識の法と爲すや、非受想行識の法と爲すや。菩薩摩訶薩は正念して障礙無く、三世の諸法は平等にして猶し虚空の如く、二相有ること無しと觀察し分別す、是の如く觀するものは、智慧方便業礙する所無し。一切の法に於て、相を取らず、一切の諸法は自性無きが故に。一切の佛及び諸佛の法に於て、平等に觀察するに猶し虚空の如し。是を菩薩摩訶薩、方便もて、清淨の梵行を修習すと名く。又復増上の十方を修習す。何等をか十と爲す。謂ゆる、是處非處の智、去來現在の諸の業報の智、一切諸禪の三昧正受、解脫垢淨起の智、衆生の諸根の智、諸の欲樂に隨ふ智、種種の性の智、一切處に至る道の智、障礙無き宿命の智、障礙無き天眼の智、習氣を斷ずる智なり。是を十と爲す。是の如く、如來の十力の甚深無量なるを觀察すれば、大慈悲心を具足し長養して、悉く衆生を分別して、而も衆生を捨てず、亦寂滅をも捨てず、無上の業を行じて、果報を求めず。一切の法は幻の如く、夢の如く、電の如く、響の如く、化の如しと觀ず。菩薩摩訶薩是の如く觀すれば

宿住智、死生智、漏盡智の三明智なり。六通は六神通の略。

【時解脫】鈍根者時を待ちて入定解脫するを言ふ。非

時解脫は其反對にして、利根者の解脫なり。

【三羯磨和尙】受戒の時の戒、羯磨

(作法指導)、教授の三人の師を言ふ

【又復増上の十方云云】第二問に對する答にして、勝

行勤修を明す。

【善薩摩訶薩是の如く云云】第三問に答へし、得果を叙す。

少しの方便を以て、疾く一切諸佛の功德を得ん。常に樂ひて無二の法相を觀察すれば、斯れ是處有るなり。初發心の時に、便ち正覺を成ず、一切法の眞實の性を知り、慧身を具足し、他に由りて悟らず。』

大方廣佛華嚴經 卷第九

東晉天竺三藏佛跋跋陀羅譯

初發心菩薩功德品第十三

【初發心菩薩功德品】第三會の第五品にして、初住の發心の功徳の廣大氣違より、普賢の萬徳を攝し、因果具足して徳の法界に等しきことに至るまでを叙し、以て行位の勝徳を明かすなり。

【是處甚深云云】

【是處甚深云云】以下校量して功徳の勝ることを顯表し衆生を以て淨信を信ぜしむることとを叙す。以下種種に喻説する中、第一に衆生を利樂する喻を出せり。

【五戒】

【五戒】殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五種を戒禁せる在家人の持する戒法なり、佛敎に於ける最下の戒たり。

爾時、天帝釋、法慧菩薩に白して言さく、「佛子、初發心の菩薩は、幾くの功徳藏を成就したまふと爲すや。」法慧答へて言はく、「佛子、是處甚深にして、知り難く、信じ難く、解り難く、説き難く、通じ難く、分別し難し。然りと雖も、我は當に佛の神力を承けて、具足し演説すべし。佛子、假使人有りて、東方阿僧祇の世界の衆生に、一切の樂具を供養して、乃ち一劫に至り、然る後に敎へて、五戒を淨修せしめ、南西北方、四維上下も、亦復是の如くせん。佛子、意に於て云何。彼人の功徳は寧ろ多しと爲すや不や。」帝釋言はく、「佛子、諸の如來を除かば、其餘の一切は、彼人の功徳を稱量すること能はず。法慧菩薩、帝釋に語りて言はく、「佛子、初發心の菩薩の、功徳の藏を百分して、彼人の功徳は其一にも及ばず。千分、百千分、億分、百億分、千億分、百千億分、百那由他分、千那由他分、百千那由他分、億那由他分、百億那由他分、千億那由他分、百千億那由他分、乃至數ふべからず、譬喩すべからず、説くべからざる分にして、彼人の功徳は其一にも及ば

【十善】身三、口
 四、意三の十種に
 總括せる我の行
 爲の善性のものな
 り。即ち十惡の反
 對にして、不殺生、
 不偷盜、不邪淫、
 不妄語、不兩舌、
 不惡口、不綺語、不
 貪欲、不瞋恚、不
 邪見を言ふ。
 【四禪】色界の四
 天の所依たる定を
 云ふ。
 【四無色定】無色
 界の四天の所依た
 る定なり。

【辟支佛】(Pratyekabuddha) 獨覺と
 譯す。緣覺とも云
 ひて、飛花落葉に依
 りて、無師獨悟す
 然れども衆生攝化
 をなさざるを以て
 正覺と言はず。

す。佛子、復此輪を置かん。假使人有りて、十方の各十阿僧祇の世界の衆生に、一切の樂具を供養し、乃ち百劫に至り、然る後に教へて十善を淨修せしめん、十善を教へ已りて、又復一切の樂具を供養して、乃ち千劫に至り、然る後に教へて四禪を淨修せしめん、四禪を教へ已りて、又復一切の樂具を供養し、百千劫に至り、然る後に教へて四無量心を行せしめん。又復一切の樂具を供養し、乃ち億劫に至り、然る後に教へて、四無色定を行せしめん。又復一切の樂具を供養して、百億劫に至り、然る後に教へて、須陀洹果を得しめん。又復一切の樂具を供養して、千億劫に至り、然る後に教へて、斯陀含果を得しめん。又復一切の樂具を供養して、百千億劫に至り、然る後に教へて、阿那含果を得しめん。又復一切の樂具を供養して、億那由他劫に至り、然る後に教へて、阿羅漢果を得しめん。又復一切の樂具を供養して、千億那由他劫に至り、然る後に教へて、盡く緣覺を成ぜしめん。佛子、意に於て云何。彼人の功德は寧ろ多しと爲すや不や。『帝釋白して言さく、『佛子、彼の功德は、唯諸佛を除き、其餘の一切は悉く知ること能はず。』法慧の言はく、『佛子、初發心の菩薩の功德の藏の、百分千分、乃至數ふべからず、譬喩すべからず、説くべからざる分にして、彼人の功德は其の一にも及ばず。何を以ての故に。佛子、一切の諸佛は、初發心の時に、十方の各十阿僧祇の世界の衆生に一切の樂具を供養し、百劫、乃至千億那由他劫ならんが爲り故に、世に出興したまはず。亦爾所の衆生を教へて五破、十善、四禪、四無量心、四無色定、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛の道を淨修せし

【佛子復此喻云云】
 已下は速疾に無量の刹土を歩む喻を以て、初發心の功德の廣大なることを説く。

めんが爲の故に、世に出興したまはず。佛種を斷ぜざらしめんと欲するが故に、菩提心を發し。十方一切の世界に充滿せんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く一切の衆生を度脱せんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く一切世界の成壞を知らんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く一切世界の中の衆生の、垢淨の起るを知らんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く一切世界の自性清淨を知らんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く一切群生の虚妄、煩惱、習氣を知らんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く一切衆生の心に死し彼に生ずるを知らんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く一切衆生の諸根の方便を知らんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く一切衆生の心心の所念を知らんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く三世の一切衆生を分別せんと欲するが故に、菩提心を發し。悉く一切諸佛の平等の境界を知らんと欲するが故に、菩提心を發せり。

佛子、復此喻を置かん。假使人有りて、一念の頃に於て、能く東方の無量世界を過ぎんに、彼人此自在の神力を以て、此より東に行き、無量無數の阿僧祇劫を盡すも、猶世界の邊際を得ること能はず。又第二の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無數の阿僧祇劫に、行きし所の世界を過ぎんに、此第二の人、此より東に行き、無量無數の阿僧祇劫を盡すも、猶世界の邊際を得ること能はず。又第三の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無數の阿僧祇劫に行きし所の世界を過ぎん。又第四の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無數の阿僧祇劫に、行きし

所の世界を過ぎん。又第五の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無数の阿僧祇劫に、行きし所の世界を過ぎん。又第六の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無数の阿僧祇劫に、行きし所の世界を過ぎん。又第七の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無数の阿僧祇劫に、行きし所の世界を過ぎん。又第八の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無数の阿僧祇劫に、行きし所の世界を過ぎん。又第九の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無数の阿僧祇劫に、行きし所の世界を過ぎん。又第十の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無数の阿僧祇劫に、行きし所の世界を過ぎん。又第十一の人、神力自在にして、一念の頃に於て、能く前の人の、無量無数の阿僧祇劫に、行きし所の世界を過ぎん。猶故世界の邊際を得ず。十方の世界も亦復是の如し。是の如く展轉して、乃ち百人に至る、其人此最勝自在の神力を以て、無量無数の阿僧祇劫に於て、至る所の十方は、尙了知して其邊際を得べくとも、初發心の菩薩の功德の藏を知るを得べからず。何を以ての故に。初發心の菩薩は、齊限して爾所の世界の衆生の爲の故に、菩提心を發さず。悉く十方の一切世界の衆生の爲の故に、一切衆生を度せんと思ふが故に、分別して一切の世界を知らんと欲するが故に、菩提心を發し。微細の世界は即ち是れ大世界なりと知り、大世界は即ち是れ微細世界なりと知り、少世界は即ち是れ多世界なりと知り、多世界は即ち是れ少世界なりと知り、廣世界は即ち是れ狹世界なりと知り、狹世界は即ち是れ廣世界なりと知り、

一世界は即ち是れ無量無邊世界なりと知り、無量無邊世界は即ち是れ一世界なりと知り、無量無邊世界は一世界に入るを知り、一世界は無量無邊世界に入るを知り、穢世界は即ち是れ淨世界なりと知り、淨世界は即ち是れ穢世界なりと知り、一毛孔の中に於て悉く分別して一切世界を知り、一切世界の中に於て悉く分別して一毛孔の性を知り、一世界より一切世界を出生するを知り、一切世界は猶し虚空の如しと知らんと欲し、一念に於て一切世界を知り、悉く餘り有ること無からんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。

【佛子復此喻云云】
已下は劫(印度に於ける時を計する大なる單位)の算知の喻を以て、初發心の功德の無量なることを叙す。

佛子、復此喻を置かん。假使人有りて、東方無量無邊阿僧祇の世界に於て、一念の中に於て、悉く分別して成敗の數を知らんに、此人精勤し方便もて、念念に次第して無量無數阿僧祇劫に於て、盡く東方世界の成敗の數を算知せんと欲するも、猶知ること能はず。又第二の人、第一の人の無量無數阿僧祇劫に、算せし所の世界の成敗の數に於て、一念の中に於て、悉く能く了知せんに、此人精勤し方便もて、念念に次第して、無量無邊阿僧祇劫に於ても、猶盡く東方世界の成敗の數を知ること能はず。是の如く變轉して、乃至第十に至る。彼第十の人、第九の人の無量無邊阿僧祇劫に算せし所の世界の成敗の數に於て、一念の中に於て、悉く能く了知せんに、此人精勤し方便もて、念念に次第して、無量無邊阿僧祇劫に於ても、猶盡く東方世界の成敗の數を知ること能はず。乃至十方も亦復是の如し。十方の無量無邊の世界の成敗の數は、尙ほ了知すべくとも、阿發心の菩薩の

【大誓莊嚴】大誓願（前註）を建つること云々言ふ。
 【佛子復此喻】已下衆生の欲樂を知る喻なり。
 【種種の欲樂】以下別して明かす中、初め法に約して異相を明かせり

功徳の藏は、しることを得べからず。何を以ての故に。初發心の菩薩摩訶薩は、齊眼して爾所の世界の劫數成敗を知らんが爲の故に、菩提心を發さず。菩薩摩訶薩は、悉く一切世界の、劫數成敗を了知せんと欲するが故に、菩提心を發し、長劫は即ち是れ短劫なり、短劫は即ち是れ長劫なりと知り、一劫は即ち是れ數ふべからざる阿僧祇劫にして、數ふべからざる阿僧祇劫は即ち是れ一劫なりと知り、一切の有佛の劫を知り、一切の無佛の劫を知り、一佛の劫の中に無量の佛有ることを知り、無量の佛の劫の中に一佛有ることを知り、異劫の中に無異劫有ることを知り、無異劫の中に異劫有ることを知り、有盡劫は是れ無盡劫なりと知り、無盡劫は是れ有盡劫なりと知り、無量劫は即ち是れ一念なりと知り、一念は即ち是れ無量劫なりと知り、一切劫は無劫に入ることを知り、無劫は一切劫に入ること知らんと欲し、悉く過去未來際、及び現在の一切世界の劫數成敗を了知せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり、是を菩薩の初の大誓莊嚴と名く、謂ゆる、悉く一切の劫を知る智慧照明なり。

佛子、復此喻を置かん。假使人有りて、一念の中に於て、悉く無量無數の阿僧祇世界の、衆生の種種の欲樂を知らんに、此人精勤し方便もて、念念に次第して無量無數の阿僧祇劫に於ても、盡く東方の一切世界の、衆生の種種の欲樂を知ること能はず。是の如く展轉して、第十人に至る。此第十の人、第九の人の無量無數の阿僧祇劫に精勤方便もて知りし所の、衆生の種種の欲樂に於て、一念の中に於て、悉く能く了知せんに、此人是の如

【相似】 流類の同じきもの、即ち性傾の類似せるものなり。

【一切の欲】 三乗の欲樂の差別するを言ふ。即ち聲聞には聲聞への欲樂乃至菩薩には菩薩への欲樂の如く三乘各異れる欲樂を總稱す。之に反して一欲とは一佛乘の欲樂を言ふ。

【有上の欲】 三乗等の上果を求むるを言ふ。

【無餘の欲】 求むる處皆満足して更に求むる處なく、至極に到るを言ふ。

【等欲】 等は平等なり、平等の理を求むるを等欲と言ひ、差別の理を求むるを不等欲と言ふ。

【有邊】 欲樂の門位を言ひ、其果位を無邊と言ふ。

【悉く一切衆生云】 以下人に約して欲樂同相を説く

く精勤方便もて、念念に次第して、無量無数の阿僧祇劫にも、猶盡く東方一切世界の、衆生の種種の欲樂を知ること能はず、乃至十方も亦復是の如し。是の如くして、十方の無量無邊の阿僧祇劫の世界の、衆生の種種の欲樂は、尙了知すべくとも、初發心の菩薩の功德藏は、知ることを得べからず。何を以ての故に。佛子、初發心の菩薩摩訶薩は、齊眼して、爾所の世界の衆生の種種の欲樂を知らんと欲するが故に、菩提心を發さず。悉く十方の一切世界の、衆生の種種の欲樂を知らんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。種種の無量の欲樂は、即ち是れ一欲にして、而も一切の欲性を壞せざることを知らんと欲し。悉く一切衆生の欲樂海を知らんと欲し。一衆生の欲は、即ち是れ一切の衆生の欲なりと知らんと欲し。悉く一切衆生の去來と現在との種種の欲樂を知らんと欲し。悉く相似の欲と不相似の欲とを知らんと欲し。一切の欲は即ち是れ一欲にして、一欲は即ち是れ一切の欲なりと知らんと欲し。如來の種種の欲樂の力を具足することを得んと欲し。有上の欲と、無上の欲、有餘の欲と無餘の欲、等欲と不等欲と有所依の欲と無所依の欲、共欲と不共欲、有邊の欲と無邊の欲、善欲と不善欲、世間の欲と出世間の欲、大智の欲、淨の欲、勝の欲、無礙智の欲、無礙智佛の解脱の欲、清淨の欲、不淸淨の欲、廣狹の欲、細欲、麤欲とを知らんと欲するが故に。阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。悉く一切衆生の、一一の衆生に十種の欲有ることを知らんと欲す。謂ゆる、苦に因りて生ずるの欲、方便の欲、希望の欲、味に著するの欲、因に隨ひて生ずるの欲、縁に隨ひて生ずる

【因】宿因を指す。
【緣】外境のこと
【盡欲】一切の法を求むること、亦涅槃の滅盡を欲求する義。

の欲、盡欲、一切の欲なり。初發心の菩薩摩訶薩は、悉く此諸の欲網を分別了知せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。

佛子、復此喻を置かん。假使人有りて、一念の中に於て、悉く無量無邊阿僧祇世界の衆生の種種の諸根を知らんに、此智慧を以て、精勤し方便もて、念念に次第して、無量無數の阿僧祇劫に於ても、盡く東方一切世界の衆生の種種の諸根を知り、廣く説いて、乃至悉く一切衆生の、一一の衆生に十種の根有ることを知ること能はず。

佛子、復此喻を置かん。假使人有りて、一念の中に於て、悉く東方無量無邊阿僧祇世界の、衆生の種種の希望を知り、廣く説いて、乃至悉く一切衆生の一一に皆十種の希望有ることを知らん。

佛子、復此喻を置かん。假使人有りて、一念の中に於て、悉く無量無邊阿僧祇世界の、衆生の種種の方便を知り、廣く説いて、乃至悉く一切衆生の一一に皆十種の方便有ることを知らん。

佛子、復此喻を置かん。假使人有りて、一念の中に於て、悉く無量無邊阿僧祇世界の、衆生の念念の心意を知り、廣く説いて、乃至悉く一切衆生の、一一に皆十種の心有ること知らん。

佛子、復此喻を置かん。假使人有りて、一念の中に於て、悉く無量無邊阿僧祇世界の、衆生の種種の諸業を知り、廣く説いて、乃至悉く一切衆生の、一一に皆十種の業有ること

とを知らん。

佛子、復此喻を置かん。假使人行りて、一念の中に於て、悉く東方無量無邊阿僧祇世界の、衆生の種種の煩惱を知らんに、此人精勤し方便もて、念念に次第して、無量無數の阿僧祇劫に於ても、猶東方の一切衆生の種種の煩惱を知ること能はず、是の如く展轉して乃ち第十に至る。此第十の人、第九の人の無量無數の阿僧祇劫に、知りし所の衆生の種種の煩惱に於て、一念の中に於て、悉く分別して知らんに、此人精勤し方便もて、念念に次第して、無量無數の阿僧祇劫に於ても、猶盡く一切衆生の種種の煩惱を知ること能はず。乃至十方も亦復是の如し。爾所の世界の、一切衆生の種種の煩惱は、尙知ることを得べくとも、初發心の菩薩の功德の蔽は知ることを得べからず。何を以ての故に。佛子、初發心の菩薩は齊限して爾所の世界の、衆生の種種の煩惱を知らんと欲するが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さず。悉く一切衆生の種種の煩惱を、分別し、了知せんと欲するが故に、菩提心を發せり。謂ゆる、悉く輕煩惱、重煩惱、結使煩惱、纏煩惱、一一の衆生の無量の煩惱、一切衆生の種種の覺觀の煩惱、無明に依るの煩惱、愛相應の煩惱、貪欲不善根の煩惱、瞋恚不善根の煩惱、愚癡不善根の煩惱、等分の煩惱、一切の煩惱、根本の煩惱、我我所の煩惱、我慢の煩惱、狂憶念虛妄より生ずるの煩惱、身見に依りて生ずるの六十二見等の諸の煩惱、蓋煩惱、障礙の煩惱を知らんと欲し。悉く一切衆生の煩惱の惑網を了知し、大慈大悲と一切種智とを具足せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩

【使】五見（身、戒邊の邪見）と疑取の五惡見）と疑食、瞋、癡、慢と一の十を十使と言ひ、煩惱の性惡なるものを言ふ。一般に煩惱の異名に用ふ。【遍】之も煩惱の別名にして、無慚

無愧、睡、悔、慍、慍、嫉、掉、憍、憍、忿、覆の十種を數ふ。
 【寛觀】 煩惱の因を云ふ。
 【等分】 貪、瞋、癡の三不善根の等分なるを言ふ。
 【蓋】 精神作用を覆蓋して行者の修行を障碍する煩惱なり。即ち貪、瞋、睡、掉、疑の五を五蓋と言ふ。亦一般に煩惱の異名とせらる。
 【障】 煩惱、所知の二障を言ふ。淫、婬と菩提とを障礙するを以て障と言ひらる。

提の心を發せり。

佛子、復此喻を置かん。假使人有りて、一念の中に於て、悉く東方無量無邊の世界の現在の諸佛、及び彼一切衆生を見ん、此人悉く能く恭敬禮拜し、尊重讚歎し、一心に觀察して種種に無量の上味の肴膳、飲食、香華、瓔珞、綵絲、幢蓋、上妙の宮殿、帳幔を嚴飾し、寶網を羅覆し、衆寶もて莊嚴せる師子の座を供養せん。此人精勤し方便もて念念に次第して、是の如き等の、衆の妙供具を以て、無量無數の阿僧祇劫に諸佛を供養したてまつらん。又復勤めて彼諸の衆生をして、是の如き等の衆の妙供具を以て、無量無數の阿僧祇劫に於て、諸佛を供養せしめん。彼諸の如來、般涅槃し已らば、復一一の諸の如來の爲の故に、無量の寶を以て塔を起し供養せん。其塔の高廣なるは、一一に無量無邊の世界に周滿し、又上妙の衆寶を以て之を莊嚴せん。一一の塔の中に無量無數の如來の形像有り、彼諸の形像の光明は、普く無量無邊の諸佛の世界を照さん。又復彼一一の衆生を勤めて、諸の如來の爲に、衆寶の塔を起さしめ、嚴好なること前の如くせん。十方の世界も亦復是の如くならん。佛子、意に於て云何。彼人の功德は寧ろ多しと爲すや不や。

帝釋答へて言はく、一彼人の功德は、唯佛のみ乃ち知りたまふ、餘は能く及ぶこと無し。法慧答へて言はく、佛子、初發心の菩薩摩訶薩の功德の藏の百分、千分、乃至數ふべからず、譬喩すべからず、説くべからざるの分に、彼人の功德は其一にも及ばず。佛子、假使

人有りて、第一の人、及び勸めし所の衆生、精勤し方便もて、念念に次第して、無量無数の阿僧祇劫に、作しし所の功德と諸の供養具とに於て、一念の中に於て、皆悉く能く辨ぜん。此人是の如く精勤し方便もて、念念に次第して、無量無数の阿僧祇劫に於て供養せし功德は、廣く説かば前の如し。是の如く展轉して、乃至第十の人に至る。廣く説かば亦復前の如し。初發心の菩薩摩訶薩の功德の藏の百分、千分、乃至數ふべからず、譬喩すべからず、説くべからざる分に、彼人の功德は其一にも及ばず。何を以ての故に。佛子、彼菩薩は齊限して爾所の如來を供養せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さず。悉く十方の法界虚空界に等しき世界の中の、三世の諸佛を供養せんが故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。

【是心を發し云云】
以下發心の行者の攝徳の深く勝れしことを明かす。

【初發心の菩薩云云】
以下、因の等しきことを明し、中に二十句あり、初十句は悲徳、後九句は智徳を明かす。

是心を發し已りて、盡過去際の諸佛の無障礙智を知ることを得、盡未來際の諸佛の功德を信ずることを得、盡現在際の一切諸佛の説きたまふ所の智慧を知ることを得、彼三世一切の諸佛の功德を此菩薩摩訶薩は、悉く皆信向し、受持し、修習し、得證し、身證して、悉く諸佛の一切の功德に等し。何を以ての故に。初發心の菩薩摩訶薩は、一切諸の佛性を斷ぜざらんと欲するが故に、菩提心を發す。慈悲心もて一切世界の衆生に充滿して、悉く餘すこと無からしめんと欲するが故に。悉く一切の衆生を度脱せんと欲するが故に。悉く一切世界の成敗を知らんと欲するが故に。悉く一切世界の衆生をして、悉く清淨を得しめんと欲するが故に。三有の衆生をして、悉く清淨を得しめんと欲するが故に。悉く一切世界の衆生の垢淨し起る

に。悉く一切衆生の心念、煩惱の習を知らんと欲するが故に。悉く一切衆生の此に死し彼に生ずることを知らんと欲するが故に。悉く一切衆生の諸根の方便を知らんと欲するが故に。悉く一切衆生の心の行を知らんと欲するが故に。悉く一切三世の衆生を知らんと欲するが故に。悉く三世の諸佛の具足せる功德を知らんと欲するが故に。悉く三世の諸佛の無上菩提を知らんと欲するが故に。悉く三世の諸佛の具足せる淨法を知らんと欲するが故に。悉く三世の諸佛の法の平等相を知らんと欲するが故に。悉く三世の諸佛の無上智慧の因縁の清淨なることを知らんと欲するが故に。悉く三世の諸佛の智慧力を長養することを知らんと欲するが故に。悉く三世の諸佛の無畏法を具足せんと欲するが故に。悉く三世の諸佛の不共の法を具足し莊嚴せんと欲するが故に。悉く法界に等しき無量無邊の三世の諸佛の平等の智慧を得んと欲するが故に。阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。何を以ての故に。此初發心の菩薩は、即ち是れ佛なるが故に。悉く三世の諸の如來と等しく、亦三世の佛の境界と等しく、悉く三世の佛の正法と等しく、如來の一身と、無量の身と、三世の諸佛の平等の智慧とを得たり。所化の衆生も皆悉く同等なり。悉く能く一切世界を震動し、悉く能く普く一切世界を照し、悉く能く一切世界の諸の惡道の苦を休息し、悉く能く一切世界を嚴淨し、悉く一切世界に於て成佛を示現し、悉く一切の衆生をして皆歡喜を得しめ、悉く一切衆生をして深法界を解らしめ、悉く能く諸佛の種性を護持し、悉く諸佛の智慧光明を得たり。彼

【彼初發心六六】
以下果の等しきこ
とを明して、因の
分齊を結せり。

初發心の菩薩摩訶薩は、常に三世の諸佛、及び諸佛の法、一切の菩薩、緣覺、聲聞、及び所行の法、世間出世間の法、衆生及び衆生の法を遠離せず。専ら菩提を求めて智慧無礙なり。

爾時、佛の神力の故に、初發心の菩薩の功德藏を説く力の故に、十方の各萬の佛刹塵數の世界は、六刹に震動し、衆の天華、天香、天の末香、天の鬘、天の寶、天の莊嚴具を雨らし、自然に微妙の樂聲を演出せり。又復師子の音を震吼し、大光明を放ちて普く十方を照せり。爾時、十方の各十佛刹塵數の世界を過ぎ、萬の佛刹塵數の諸佛有り、悉く法慧と號けたてまつり、各其身を現じたまひて、法慧菩薩に示し、之に告げて曰はく、「善い哉善い哉、佛子、善く初發心の菩薩の功德の藏を説けり。我等萬の佛刹塵數の如來も、亦悉く發心の菩薩の功德藏を演説す。十方世界の一切の諸佛も、亦復是の如し。法慧菩薩是發心の菩薩の功德藏を説きし時に、萬の佛世界塵數の衆生、皆初發心の菩薩の功德の藏を得て、阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。我等今者悉く彼に記を授け、未來世に於て、各十方に於て、一時に成佛し、同じく淨心如來應供等正覺と號けん。我等は悉く當に此法を護持すべし。普く未來の諸の菩薩の爲の故に。此娑婆世界の、四天下の、閻浮提の菩提樹下の、須彌山の頂の、妙勝殿上に、此法を演説し、衆生を教化せるが如く、十方世界の、千億那由他の、量るべからず、數ふべからず、思議すべからず、邊際有ること無く、説くべからざる法界虚空界に等しき、諸の世界の中にも、亦是法を

説きて、衆生を教化し、彼法を説く者を悉く法慧と名く。佛の神力の故に。佛の本願力の故に。佛法を顯示する故に。智慧の光明普く照すが故に。第一義を解るが故に。法是の如くなるが故に。諸の菩薩歡喜するが故に。諸佛の功徳を讚歎するが故に。悉く諸佛の平等なるを知るが故に。法界に二有ること無きを解るが故に。

爾時、法慧菩薩、普く十方を觀じ、普く一切の大衆を觀じ、虚空界を觀じ、衆生界を成就し業報に違はずして、清淨なること虚空界の如きを觀じ、三有の垢穢の衆生を抜かんと欲し、衆生をして廣く解脱を得しめんと欲し、種種の諸根を知り、等しく三世を觀じて正しく涅槃に趣き、及び自身の甚深にして清淨なる諸の功徳を現せんと欲するが故に。佛の神力を承け、偈を以て頌して曰はく、

【大慈大悲の云云】

以下の頌は總じて二百四十一偈半より成り、分ちて四段となす。初百六十三偈半は前の攝徳を頌し、次の二十九偈は校量の偈を説き、次の九偈は甚深難知等の本品最初の七句を頌し、最後の十偈を以て結歎し、修せんことを勸進せり。

大慈大悲の心は、十方界に充滿して
諸佛刹と、佛法と及び三世とを分別し
佛の功徳と、菩薩の法藏海とを具へ
衆生を饒益せんと欲するが故に、初めて菩提心を發す
悉く分別して、虚空に等しき法界と
一切群生の類と、諸佛及び佛法とを知らんと欲し
一切の佛の、諸道至處の力を得て
不退轉を成就し、諸の群生を饒益せんと欲し

一切衆生の中に、常に大慈悲を起し

願志の念を遠離し、饒益の心を修習し

慈光もて十方を照して、衆の爲に歸依と作り

諸佛悉く護念したまひ、功德は思議し難し

悉く分別して、一切諸佛の利と

如來の妙法身の、甚深にして思議し難く

無量の功德藏の、智慧甚だ深廣なるを知らんと欲し

是に因りて初めて發心して、専ら佛の菩提を求む

悉く分別して、一切衆生の類を知り

十方世界の中に、智慧に障礙無く

盡細の語の世界と、或は狭廣の無量なると

一切の中に一を知り、一切の中に一切を知らんと欲して

菩薩は彼行に於て、精勤して放逸ならず

苦樂に厭著無し、衆生を度せんと欲するが故に

一切の佛、前に現じたまひ、樂觀して厭き足ること無く

悉く甚深の法、無量の功德海に入り

【五道】六道の中
天道(趣)を除け
る人、修羅、餓鬼
畜生、地獄を言ふ

衆の垢穢を除き、清淨の法を具足せしむ
諸佛種をして、究竟じて斷絶せざらしめんと欲し
一切の魔を降伏し、摧滅して餘り有ること無く
平等に如來と、三世の諸法の相とを觀じ
甚深微妙の法を、常に修して放逸ならず
菩薩は常に樂ひて、一切の佛の境界を觀ず
是故に諸の如來は、甘露の慧もて灌頂したまふ
信心は沮むべからず、堅固なること金剛の如く
諸の如來の所に於て、恩を知りて恩を報ゆ
最勝の境界は、無量の智慧の光にして
自ら悟りて他に由らず、菩薩は初めて發心す
悉く能く分別して、五道の衆生の欲と
種種の諸の業報と、一切の心の所行とを知り
諸根の利鈍と、無量無數の性と
一切の勝たる境界とを知らんとて、菩薩は初めて發心す
菩提心は無量にして、清淨の法界に等しく
著も無く所依も無く、無染なること虚空の如し

佛の智慧を成就して、其心に障礙無く
諦かに眞實の際を了り、寂滅にして虛妄を離る
衆生の心を了達して、而も衆生の想無く
方便もて法を分別し、究竟じて彼岸に到る
無量無數の劫に、悉く能く分別して知り
諸佛の利に往詣して、明かに甚深の法を解る
若し能く分別して、無量の諸佛の法と
清淨の法界藏とを知らば、諦かに了りて疑惑無けん
深く衆生の根を解りて、究竟じて彼岸に到り
平等に諸法を觀すれば、則ち如來と等し
清淨無量の心は、常に諸佛の前に在り
恭敬し尊重して、人師子を供養したてまつる
視しく一切の佛を觀たてまつり、樂觀して厭き足ること無ければ
彼諸の如來等は、此菩薩を護念したまふ
諸の深妙の法に於て、分別して障礙無く
著も無く所依も無く、心淨きこと虚空の如し
彼は人師子の、智慧海の深廣なることを知り

【三達】三世に明達することと言ふ又三達智とも言ふ

寂然として正受に入り、三世は無礙なりと觀じ堅固にして沮むべからず、一切能く壞る莫く専ら無上の道を念じて、未だ曾て斷絶せしこと有らず闇を離れて明正に趣き、諸の善法を志學し常に寂滅を樂觀して、眞實性を具足す寂黙たる語言の道は、平等にして異觀無く法に於て分別せず、是れ則ち如より生ずるなり悉く能く分別して、諸佛の深境界を知り寂然として正受に入れば、三達して障礙無し十方世界の中の、一切諸佛の利は菩薩の自在力にて、一念に悉く周遍す無量にして數ふべからざる、方便悉く具足して普く十方界に遊ぶ、是を眞の佛子と名く大悲心を具足し、清涼にして渴愛を除き大慈もて一切を念ひ、無礙なること虚空の如く彼衆生の類に於て、衆生の想を生ぜず悉く已に虚妄を離れ、清淨にして十方に遊ぶ

彼諸の群生に於て、常に施すに無畏を以てし
 此の如く眞實に行ずれば、是れ則ち如來に等し
 常に甚深の法を説き、清淨にして所著無し
 是故に十方の佛は、一切悉く護念したまふ
 過去未來世、無量無數の劫を

次第して悉く憶念し、具足し分別して知る

菩薩は現在の、一切の十法界に於て

悉く能く普く周遍して、諸の群萌を濟度す

深智もて正しく觀察し、明かに了りて障礙無く

悉く因縁の合へるものは、磨滅して堅固なること無しと知る

一切衆生の類にして、諸の疑難有るものを

菩薩は悉く除滅して、法性の中に安住せしむ

菩薩の無畏力は、一切の魔を降伏して

悉く能く衆生の爲に、愚癡の闇を滅除す

世界若は成敗あるも、悉く皆分別して知る

若し能く是の如く觀せば、佛の境に疑惑無けん

三世の法を觀察して、疑網永く已に除けば

【空無我】 諸法は
空にして、我に執
すべきなきを空無
我と言ふ。

一切如来の所にて、淨信壞すべからず

信力安隱に住し、智慧の力成就す

智慧清淨なるが故に、決定して眞實を解る

未來際を盡して、衆生を饑益せんが故に

一切の衆をして、究竟じて解脱を得しめんと欲し

際無き生死の中に、精勤して厭倦せず

一切の地獄の處にて、苦を受くるも衆生の爲なり

功德智慧の藏は、具足して皆成就し

悉く能善く、一切衆生の根を分別す

又能く分別して、衆生の種種の業を知り

彼の業に隨ひて對治せんとて、菩薩は爲に法を説く

大慈悲心を以て、世間の行に隨順し

悉く一切の法に於て、空無我に解脱し

一一の音聲の中に、無量の教を演説す

菩薩は大光を放ち、種種微妙の色もて

普く十方界を照し、一切の闇を除滅す

一一の光明の端に、清淨の寶華の座あり

菩薩悉く上に處して、衆の爲に法を演説す
 一毛孔の中に於て、普く十方の刹を見
 彼刹は妙に莊嚴せられ、諸佛菩薩會りたまふ
 一一の如來の所に、無量の衆圍遶し、
 清淨の妙智慧もて、明かに衆生の心を了る
 十方世界の中の、無量の諸佛の刹に
 菩薩は神通力もて、一念に悉く遍く至る
 佛を恭敬し供養したてまつり、衆生を饒益せんが故に
 一一の導師の所にて、甚深の義を講決す
 普く諸の世尊に於て、先づ慈父の想を起し
 衆生を饒益せんが故に、菩薩の行を分別す
 明淨の利智慧もて、深法藏に解脱し
 無量の智を出生して、佛法に所礙無し
 無量無數の劫に、分別して法界を説かんに
 劫數は究竟すべくとも、法界は窮盡無けん
 平等に諸法を觀じて、其心に所染無く
 生死の苦を厭はざれば、智慧に障礙無し

無上の佛の種性、三世の法王の家
一切如來の法、菩薩は此に由りて生る
清淨の妙法身は、種種の形に應現したまふ
猶し大玄師の如く、樂ふ所見ざることを無し
或處には衆生と爲りて、菩薩の行を究竟し
或は復初生し、出家して學道を行ずることを現じ
或は樹王の下に於て、自然に正覺を成じ
或處には衆生の爲に、泥洹に入ることを示現す
甚深にして妙なる、無量の自在の法に住するを現じて
聲聞、辟支佛は、一切能く測る莫し
菩薩の身口意は、寂滅にして生相無く
普く一切世に應じて、方便もて現せざる無し
是の如き佛の眞子は、境界甚だ深妙にして
衆生若し思議せば、迷亂して心に狂を發さん
一切悉く具足して、無礙の智に安住し
普く諸の如來の、無量自在力を現す
菩薩の功德の藏は、世間に與等無し

何に況んや最勝の尊の、無量にして思議し難きをや
菩薩は未だ、一切智を具足するを得ずと雖も
無量の諸の法門もて、究竟して彼岸に到らん
一切の勝妙の法は、皆悉く已に具足して
一向に菩提を求め、一乘の道を究竟す
彼諸の群生に於て、善く時と非時とを知り
利益せんと欲するが爲の故に、大神力を示現す
一身悉く、一切諸佛の刹に充滿し
淨光明を演出して、暉曜して倫比無し
遍く十方界を照して、一切の闇を除滅し
普く妙法の雨を降らすこと、海の大龍王の如し
一切の法は、虚妄にして猶し幻の如しと觀察す
煩惱業の力の故に、生死常に輪轉す
大悲の心を以て、普く諸の群生を覆ひ
清淨の妙方便もて、無量の業を度脱す
菩薩の功德力は、諸の如來と等し
無量の智慧海は、清淨なること虚空の如し

【無記】善惡の中
 問性は調和、調和
 二性は調和、調和
 愛不可愛の果亦記
 別すれど、非善非
 惡の性は記別し難
 ふ。故此は無記と性
 なくして果を招く力

初發心菩薩功德品第十三

無量無數の劫に、具さに菩薩の行を修し、
 精進し勤めて方便もて、一切の衆を度せんと欲す
 衆生の種種の行を、悉く能く分別して知り
 清淨の業を修して、無上の道を志求せしむ
 菩薩摩訶薩は、是勝妙の法を行じて
 決定して退轉せず、諦かに一切智を觀す
 一切の諸の世界は、無量にして思議し難し
 菩薩は能く彼に於て、一念に悉く周遍す
 虛妄の想を遠離して、其心虚空の如く
 清淨の法身は一にして、普く一切の世に應ず
 湛然として常に動せず、十方に現ぜざること無く
 一切の法を分別して、諸法の相を取らず
 一切の法に了達して、其心に所染無く
 一切の衆を濟度して、而も解脱の者無し
 一切群生の類の、種種の諸の希望と
 善惡無記の法とは、寂滅にして虚空の如し
 衆庶の類の、種種の欲樂の相に隨順して

二九一

無量の自在力もて、悉く能く之に應化す
猶し工みなる幻師の、能く種種の身を現するが如く
菩薩は自在力もて、十方界に充滿す
菩薩の淨法身は、無量にして虚空に等しく
衆の欲樂する所に隨ひて、一切現ぜざること無し
其心に所染無ければ、眞實にして虚妄無く
清淨と煩惱の法とは、皆悉く所有無し
解脫と非解脫と、其心に所染無ければ
普く苦と衆生に、無上の涅槃の樂を施す
悉く諸の世間に於て、智慧畏るる所無く
衆の相好を具足して、無上の道を究竟す
一念に悉く、一切諸法の相を分別し
未來現在世に、之を求むるも所有無し
菩薩は前際を觀じて、過去世に了達し
後際の相を分別して、究竟すること亦是の如し
一切の佛の世界を、分別して皆悉く知り
衆の煩惱を除滅して、諸の功德を具足す

【前際】 前世即ち
過去世を言ふ。

常に好んで寂靜を觀じ、究竟じて涅槃に趣き
無諍の三昧を樂ひて、其心に所依無し
菩薩は實際に等しく、一切は與等無く
堅固の行を究竟じ、決定して退轉せず
彼は衆の勝行を修し、寂滅にして所依無く
其心常に安住して、動ぜざること須彌の如し
菩薩の淨妙の行は、諸の法界に充滿し
諸佛及び菩薩は、皆悉く分別して知る
導師の慧を求め、最勝の道と
甚深の一切智とを究竟じて、無上の解脫王たらんと欲せば
勇猛に勤めて精進し、速かに菩提心を發せ
最勝の樂を求めんと欲せば、應に疾に諸漏を斷ずべし
菩薩摩訶薩は、初めて清淨の心を發せば
彼の心の功德の藏は、之を説くとも盡すべからず
衆生を饒益せんが故に、如來の行を讚歎し
一心に善く、諦かに最勝の行じたまひし所の道を聽け
無量の諸佛の刹を、悉く末して微塵と爲し

一障に一利を置き、悉く能く分別して知らんも
是諸の利土の中の、一切諸の如來は
初めの功德の藏を説くとも、猶故盡すべからず
善く衆生を分別して、而も衆生の想無く
善く一切の語を解して、而も言語の想無し
甚深無礙の智もて、諸の世界を分別し
善く劫の成敗を解り、而も成敗の相無し
清淨廣大の心は、猶し虚空の性の如く
明かに三世の法と、一切諸の世間とを解る
諸の煩惱を除滅して、永く盡して餘り有ること無く
無礙寂滅の觀は、是れ則ち佛の正法なり
十方世界の中の、一切の如來の所に
一念に、悉く遍く至りて、其心に所染無し
善く不生の法、如如の眞實際を解れば
一切種種の相は、皆悉く眞實無し
無量にして數ふべからざる、一切諸の如來の
清淨の眷屬は俱に、悉く往きて禮し供養し

常に樂たのしみひて如來にょらいに、甚深微妙しんじんみせうの法ほふと

一切いっさい諸しよの菩薩ぼさつの、誓願せいがんと清淨じやうじやうの行ぎやうとを問とひたてまつる

十方世界じふぱうせかいの中の、一切いっさい諸しよの導師だうしを

一念いっねんに、悉しつく觀見くわんけんしたてまつりて、而しかも心こころに所依しよゐ無し

一切いっさいの二有にいうの中の、最勝さいとうの妙功德めうこくどくは

此清淨こゝじやうじやうの行ぎやうを以もつて、諸佛しよぶつの刹せつを莊嚴じやうげんす

慧眼ゑいがんに障礙しやうがい無くして、善よく一切いっさいの生しやうを解とり

分別ぶんべつに所有しやういう無く、遠離たうりに染著せんじやく無し

善よく衆生しゆじやうの根こんと、煩惱ぼんごう及び習氣しゆきとを解とり

衆生しゆじやうの種種しゆしゆの欲よくに、了達りやうたつして不思議ふしぎなり

菩薩摩訶薩ぼさつまかさつは、先まづづ衆生しゆじやうの心こころを知しり

彼かの應おつずる所ところに隨したがひて度たし、慧者ゑしやには爲ために法ほふを説とく

善よく時ときと非時ひじと、衆生しゆじやうの淨穢じやうたいの行ぎやうとを知しりて

漸やうく彼かをして清淨じやうじやうに、究竟くわうじやうじて解脫げだつを得えしむ

無量那由他の、甚深しんじんの諸しよの三昧さんまいに

菩薩ぼさつの自在じざい力りきもて、一念いっねんに、悉しつく能よく入いる

三昧さんまいの起住きぢうの相さうを、悉しつく善よく分別ぶんべつして知しり

無量の諸の境界に、善く住起の縁を解る
 是の如き等の智慧を、皆悉く已に具足せば
 久しからずして菩提を得、一切障礙無からん
 常に衆生を利せんが爲に、正しく智慧の光に越き
 彼は能く衆生に、無上の丈夫の法を與ふ
 悉く能善く、一切劫の長短を分別し
 晝夜及び歲月、斯を亦善く觀察す
 正念にして放逸ならず、善く諸の世間を解り
 諸佛の利は、眞實にして差別無しと分別し
 能善く分別して、一切諸の世界を知り
 彼十方の國に於て、分別の想有ること無し
 是の如く正しく、十方の諸の世界を觀察して
 一切の國を嚴淨し、而も心に所著無し
 智慧の力を成就して、諸の如來と等しく
 是處非處の力もて、分別して衆生を知る
 悉く衆生の類の、善惡の諸の業報を知り
 過去未來の世に、明かに達して障礙無し

【永く相續の縁を斷ち】畢竟三界の生入るを言ふ。我の五蘊假和合の生存の續く限り三界に生ずる能はず、故に三界に生ずる相續(生命)を斷ちて灰身滅智の無餘涅槃に入るを言ふ。今は三界繫縛の縁を斷つを言ふなり

一切諸の世界の、衆生の種種の性を
 彼三有の中に於て、悉く能く分別して知る
 一切の群生の類の、諸根の上中下を
 菩薩摩訶薩は、悉く能く分別して知る
 一切衆生の類の、欲樂の上中下と
 清淨と不清淨とを、悉く能く分別して知る
 分別して衆生の、一切至處の道を知りて
 永く相續の縁を斷ちて、究竟じて三有を離る
 一切の諸の三昧、正受と禪と解脱と
 垢穢清淨の起とを、悉く能く分別して知る
 次第に宿命の、隨つて受くる所の苦樂を知る
 是の如く分別すれば、是れ則ち如來の力なり
 一切の善不善と、衆生の煩惱業と
 五道の生とを分別すれば、究竟じて泥洹を得
 諸漏若し未だ盡きずして、能く處處の生に趣き
 煩惱の習已に滅せば、無上の道を究竟せん
 方便もて衆生を度し、垢を滅して淨道を具し

慧者は能く分別す、是れ則ち人中の雄なり
十種の力を具足し、慧光もて衆の冥を除き
最勝の力に安住せば、疑惑は究竟して滅せん
一一の毛孔の中の、無量の諸佛の刹を
菩薩摩訶薩は、一切皆悉く見る
穢濁と或は清淨と、種種の妙莊嚴とを
彼諸の行業に隨ひて、皆悉く分別して知る
一一の微塵の中の、一切諸佛の刹と
諸佛及び菩薩とを、佛子は皆悉く見る
諸刹は積聚せず、亂れず迫近せず
一切は一刹に入りて、而も亦所入無し
十方の諸の國土は、虚空法界に等しきも
能く一毛孔に於て、具足分別して知る
普く十方界の、一切諸の最勝と
微妙に淨く莊嚴せる、一切諸佛の刹とを見たてまつる
一切諸の如來と、及び彼嚴淨の國とを
一毛孔の中に於て、慧者は皆悉く見たてまつる

三世の差別の相と、一切諸の法界の時節歳の相續するを、分別して解脱を得るは、是の如きの眞の佛子は、無所畏を具足す是を人中の雄、明達せる智慧の者と名く是の如きの深法門を、慧者は悉く分別し彼は如來の所に於て、恭敬して喜ぶこと量無し無量無數の劫に、功德の藏を長養し一切の佛を供養したてまつる、衆生を度脱せんが故に無量の自在力もて、種種に能く示現す彼智慧の境界は、諸の如來と等し無量の諸佛の所にて、所學皆成就し寂靜の深法藏を、悉く樂うて厭き足ること無し一切の導師の所にて、恭敬尊重の心もて彼は菩薩の行を修して、常に法の甘露を飲む悉く能善く分別して、智慧の法と菩提の無礙辯と、甚深の諸の三昧とを長養す信心の動かすべからざること、猶し須彌山の如くにして

諸の衆生の、一切の功德の藏を長養す

菩薩摩訶薩は、大慈悲無量にして

普く一切の衆を念ひ、其心に所著無し

一切種智の樂を、諸の衆生に惠み施して

悉く世間を救ひ、永く煩惱の苦を離れしめんと欲す

菩薩摩訶薩は、大悲心無量にして

佛と及び已と衆生とを、等しく觀じて異り有ること無し

樂ひて寂滅の相を觀するに、諸法は虚空の如し

慧者は是の如くして、一切の眞實性を觀す

菩薩の初發心の、甚深の功德の藏は

無量無數の劫に、之を説くとも盡すべからず

出の如來と、緣覺の閑靜の樂と

自在の聲聞樂と、一切の賢聖とを出生するが故に

十方世界の中の、無邊の諸佛の刹の

有ゆる衆生の類を、供養すること無量劫ならん

又教へて五戒と、十善及び四禪と
四等と無色定と、寂滅の諸の解脱とを修せしめん

【緣覺の閑靜の樂】
緣覺は無師自覺にして、蓮花菡萏等
の自然の變りを見
て覺るなり。故に
獨居して寂靜の處
に默然として樂む
を言ふなり。

【三摩提】(Samadhi) 三摩地とも書
き、定、等持等と
譯す。前註。

復無量劫に於て、諸の樂具を供施せん
又復教ふること轉た勝れて、漏盡きて羅漢を成ぜしめん
此の如きの諸の功德は、猶尙稱量すべくも
發心の功德の藏は、譬も無く、説くべからざるなり
又無量の衆を化して、悉く辟支佛の
寂靜の三摩提と、甚深の諸の功德とを成ぜしめん
彼人の功德の衆を、初發心の藏に比すれば
百分が一にも及ばず、乃至説くべからず
無量にして邊有ること無き、微塵に等しき佛刹を
假使神力の人ありて、一念に悉く能く過ぎん
是の如き神足の力もて、無量劫の中に行かんに
彼刹は猶數ふべきも、發心の藏は知り難し
去來現在の劫は、無量にして邊有ること無し
是の如き等の諸劫は、猶其數を知るべきも
菩薩の初發心の、無量の功德の藏は
猶し虚空界の如く、分際を知るべからず
去來現在の世の、一切諸劫の數を

菩薩は一念に於て、悉く能く分別するが故に
菩薩の發心の實は、去來今に達せんと欲すれば
一念に悉く明かに了る、衆生を利益せんが故に
十方世界の中の、無量刹の衆生の
有ゆる欲と希望とを、一念に悉く分別す
諸根の方便と、念念の心の所行とを知る
虚空は尙量るべきも、菩提の心は知り難し
計るべからざる所以は、大慈無量なるが故に
普く一切の樂を施して、十方界に充滿すればなり
悉く佛の、法藏と解脱の樂とを得しめんと欲し
初め寶藏の心を發す、功德の力無量なり
衆生の欲と希望と、方便願求の想とは
彼種種の根と、身口意の所行とに隨ひ
能く一念の中に於て、彼彼悉く覺知し
一切智を得んと欲して、發心して菩提を願ふ
一切衆生の類に、無量の煩惱業あり
斯結業に由るが故に、趣趣に諸有を受く

此の如き結業の報は、猶邊際を知るべきも
發心の功德の藏は、思議し得べからず

議るべからざる所以は、能く無上の願を發して

一切の佛を供養し、永く諸の煩惱を離れ

兼ねて群生の類の、一切の煩惱業を除き

三世の苦を濟拔して、大悲心を究竟すればなり

十方の諸の世界の、無量無數の佛を

一念に悉く供養し、兼て以て衆生に勸め

熏するに殊妙の香を以てし、寶幢、諸の幡蓋

天衣、珍妙の簾、上味の甘露漿

隨時の諸宮の觀、床臥、莊嚴の具

清淨の經行の地、身を安んじ道心に順ふもの

斯等の衆の供具は、無量の寶もて莊嚴せられ

摩尼は光耀を發す、皆是れ快樂の因なり

是の如く佛に供養したてまつり、兼ねて以て衆生に勸め

不可思議の劫に、常に此供養を行せんに
斯等の諸の功德は、尙究竟じて説くべきも

發心の功德の藏は、譬喩を爲すべき無し。
 一切諸の譬喩は、前に廣く分別せしが如く、
 初發心に比せんと欲すれば、無量の一にも及ばず。
 三世の人中の尊と、一切功德の業と、
 無上の菩提の果とは、皆初發心に由る。
 無數億劫の中に、無上の道を修行すれば、
 無量にして量有ること無く、一切の量を出過す。
 一切智を究竟すれば、其力量るべからず。
 彼菩提の岸に到り、群生の趣を越度す。
 初發の菩提心は、廣大なること虚空の如くにして、
 諸の功德を出生し、其相は法界に同じ。
 諸法の性を等觀するに、如實にして異相無く、
 永く一切の有を離れ、性は堅固の土に同じ。
 甚深なる眞の法性に、妙智もて隨順して入り、
 無邊の諸佛の土に、一念に悉く周遍す。
 一切智の知る所、遍く觀察せざること無し。
 無量の佛の境界に、了達して障礙無し。

常に妙功德を修すれば、一切與等無く
微妙の戒を具足すれば、清淨にして瑕穢無し
内外の一切の施を、等心に一切に施し
一切の時に常に施し、精勤して退轉せず
專念に正受と、諸禪の功德の藏とを修し
常に微妙の智を習へば、深廣にして淵底無し
此最勝の地に於て、佛の眞子を成就し
如實の智と、平等の甚深の行とを逮得す
去來現在世の、一切の諸の如來は
悉く威神を以て、初發の菩提心を護りたまふ
甚深の諸の三昧と、無量の陀羅尼と
諸佛の自在力とは、初發心を莊嚴す
一切諸の世間に、能く稱算する者莫く
無量にして邊有ること無きは、猶し虚空界の如し
初發の菩提心は、無量にして邊有ること無く
一切の人師子は、皆初發心に由る
如來の十種の力と、四辯、無所畏と

無量の諸の功德とは、皆初發心に由る
 一切の諸の導師の、十八不共の法
 斯等の殊勝の慧は、皆初發心に依る
 諸佛の妙色心も、種種の相莊嚴も
 究竟じて虚妄を離れたる、清淨の身法身も
 天人の應供する所の、甚深の無礙の智も
 是の如き等の功德は、皆初發心に由る
 一切の辟支佛、無量の聲聞衆
 斯等の諸の賢聖は、皆初發心に由る
 四禪と無色定と、甚深の諸の三昧と
 斯等の無量の樂は、皆初發心に出る
 去來今現在の、十方の天人の類の
 一切世界の中に、趣趣に生を受くる樂も
 方便もて勤めて精進し、諸根を悉く調伏する
 斯等の無量の樂も、皆初發心に由る
 然る所以の者は何ぞ、菩薩摩訶薩は
 初發心に因るが故に、六波羅蜜を具へ

諸の群生の類を化して、邪を棄て正道に入らん

故に能く三界をして、茲種種の樂を受けしむ

菩薩の深妙の智は、通達して障礙無く

諸の衆生を開導して、殊勝の業を淨修せしむ

衆の煩惱と、一切の不善の行とを滅除して

涅槃の道を修習せしめ、一切の衆を度脱す

無量の智慧の明なること、猶し淨日の光の如く

清白の行を具足すること、譬へば月の盛満なるが如し

無邊の功德の藏は、猶し十方海の如く

無垢にして所染無く、清淨なること虚空の如し

菩薩の初發心は、稱讚すとも盡すべからず

悉く諸の衆生をして、具さに一切の樂を受けしむ

無量無數の劫に、廣く諸の大願を修し

常に功德の業を習ふ、衆生を調伏するが故に

無量にして數有ること無き、淨願は思議し難し

皆悉く具足して滿ち、衆をして清淨を得しむ

普く一切の法を觀するに、悉く空にして相願無し

弘誓の願力の故に、心淨くして畏るる所無し
法の眞實性を解りて、清淨なること虚空の如く
定と亂と悉く平等にして、寂滅にして所有無し
甚深の諸の妙法は、無量にして思議し難し
常に大衆の爲に説けども、其心に染著無し
十方世界の中の、一切の諸の如來
彼佛は常に、菩薩の初發心を讚歎したまふ
無量の妙功德は、初發心を莊嚴し
彼の清淨の岸に至れば、性は諸の如來に同じ
一切衆生の類は、無量無數の劫に
初發心の、功德を稱讚すとも盡すべからず
諸佛の功德の藏、菩薩は是に由りて生れ
諸の三有の中に於て、最勝にして偷匿無し
一切の佛の明淨なる、智慧の燈を得んと欲せば
應に弘誓の願を建てて、速かに菩提心を發すべし
一切の功德の中にて、菩提心を最と爲す
能く無礙の智を得て、佛の法化より生ぜよ

一切衆生の心は、悉く分別して知るべく
一切刹の微塵は、尚ほ其數を算すべく
十方の虚空界は、一毛もて猶量るべきも
菩薩の初發心は、究竟じて測るべからず
初めの菩提心に因りて、三世の佛と一
一切諸の衆生の、種種の上妙の樂とを出生す
佛の讚めたまふ所の功德は、此に因りて悉く具足し
佛の境界の中に於て、其心に疑惑無し
若し能く永く、一切諸の疑惑を遠離せば
則ち能く衆生の、無量の諸の障礙を滅せん
初めの菩提心に因りて、諸佛の國を嚴淨し
普く一切の衆をして、微妙の智を具足せしむ
十方の刹の、三世の一切の佛を見たてまつらんと欲し
又無量の、甚深の功德の藏を得んと欲し
若し衆生の、無量の生死の苦を滅せんと欲せば
應に堅き誓願を建てて、速かに菩提心を發すべし

大方廣佛華嚴經 卷第十

東晋天竺三藏佛跋陀羅譯

明法品第十四

【明法品】 第三會の第六品にして、廣く行法の體と行所成の徳とを明し、功徳轉勝して後位に進昇することを説きて以て本會を完了せり。

【佛子云云】 第一段の請問にして、以下最初の行法の體に就いて問へるなり。

爾時、精進慧菩薩、法慧菩薩に問うて言はく、「佛子、初發心の菩薩は、是の如きの無量の功徳の藏を成就し、大悲嚴を以て自ら莊嚴し、一切智の乘に乗じて、菩薩の離生道に入り、世間を遠離して、正覺を志求し、諸佛の住したまふ所に、皆以て住することを得、決定して無上の菩提を成就す。彼菩薩摩訶薩は、云何が修習して功徳轉た勝れ、諸の如来をして皆悉く歡喜せしめ、菩薩の所住の功徳を具足し、清淨の行と、大願とを成滿し、菩薩の藏を得るや。其所應に隨ひて之を化度し、已に能く諸の波羅蜜を捨てずして、請ふ所の衆生に隨ひて皆悉く度脱し、三寶を興隆して、永く絶えざらしめ、一切爲す所の善根の境界と、諸行の方便とは、皆悉く虚しからざるや。善い哉、佛子。當に我等が爲に此法を演説すべし。願樂して聞かんと欲す。諸の菩薩の修する所の功徳の如きは、癩の闇を滅除し、衆魔を降伏し、諸の外道を制し、塵垢を離れ、一切の功徳を具足し成就し、究竟じて永く惡道の諸難を離れ、清淨の甚深の智慧を具足し、菩薩に一切諸地の功

【十八不共】佛の特有し給ふ十八種の法徳を言ふ、念無失、無異想、無不定心、無不知已捨、欲無減、精進無減、念無減、慧解脱知見無減、一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行、一切意業隨智慧行、智慧如過去世無礙、智慧如未來世無礙、智慧如現在世無礙を言ふ

【善い哉云云】

一頌より成り、前の請問を頌す。

前十

徳、諸の波羅蜜、三昧、總持、六通、三明の清淨の法あり、一切の諸佛の世界を莊嚴し、具足せる相好、微妙の音聲、清淨の心行、一切の如來の力無所畏、十八不共、薩婆若の智、佛刹を具足し、衆生を成熟するに隨ひ、時に隨ひ、根に隨ひ、無量の佛事、及び諸の菩薩の無量の功德、菩薩の正法、菩薩の所行、菩薩の道、菩薩の境界、皆悉く満足し、速かに如來を成じ、一切諸佛の無量の法藏を悉く能く守護し、分別して廣く説き、開示し顯現して、衆塵外道を壞する能はざる所、正法を攝持して窮盡する無く、一切の世界に於て、悉く能く演説するや。天王、龍王、夜叉王、乾闥婆王、阿修羅王、迦樓羅王、緊那羅王、摩睺羅伽王、人王、梵王、諸佛の法王は、皆悉く此菩薩摩訶薩を守護し、一切の世間は恭敬し供養し、尊重し讚歎し、常に諸佛の護念したまふ所と爲り、一切の菩薩も皆亦愛敬するや。善根の力を得て白法を増長し、能く諸佛の甚深の法藏を開き、大正の法を以て而も自ら莊嚴し、次第に菩薩の所行を演説するや。

爾時、精進慧菩薩、重ねて此義を宣べんと欲し、偈を以て頌して曰はく、

善い哉、願くば大乘の法、菩薩の成ずる所の諸の功德は
深く廣大の無量の行に入り、清淨の無師智を具足するを説きたまへ
若し菩薩有りて初發心に、功德智慧乘を成就せば
離生の道に入りて世間を出で、決定して疾かに佛の菩提を得ん
云何が佛の正法の中に於て、功德を修習して轉た増勝し

諸の如來をして悉く歡喜せしめ、佛の住したまふ所の地に住することを得
 行する所の清淨の大願滿ちて、菩薩の智慧藏を具足し
 悉く能く一切の衆を度脱して、而も群生に於て所著無く
 一切の波羅蜜を捨てず、諸の施爲する所悉く虚しからず
 請ふ所の衆生は皆能く度し、佛法を興隆して永く絶えざらしめ
 淨眼の境界に障礙無く、功德を具足して佛道を求むるや
 人雄の行する所の清淨の道を、悉く爲に具足し分別して説きたまへ
 一切の愚癡の闇を滅除し、衆魔を降伏し外道を制し
 離垢の功德皆成就し、人中の尊の妙智慧を得
 永く衆難と惡道の苦とを離れ、清淨の智慧皆具足し
 無量の甚深の大功德は、最勝の諸の道力を成就し
 人中の上妙の智慧を得、其所應に隨ひて之を度し
 不可思議の諸佛の刹に、自在無量に佛事を作す
 一切の殊勝の甚深の行は、人雄の功德藏を分別し
 常に能く最勝の法を護持し、世間の諸難能く壞すること莫きや
 云何が無畏は獅子の如く、功德の具足は満月の如く
 崩し蓮華の水に著せざるが如く、功德の清淨なること最勝の如くなるや

【附時法慧菩薩云】第二段の答なり。前の問に隨ひて順次に行法の體を明し、初に功德の轉勝を答ふ。

爾時、法慧菩薩、精進慧菩薩に告げて言はく、「善い哉善い哉、佛子。饒益する所多く、安樂にする所多く、惠利する所多く、世間の諸の天人を哀愍するが故に、能く是の如き菩薩の、甚深の清淨の行を問へり。佛子、汝は甚深眞實の智慧に住し、大精進の力もて、一心に修習し、不退轉を得て、世間を超出し、問ふ所自在なること、如來と等し。佛子、汝今諦かに聽き、善く之を思念せよ。我當に佛の神力を承け、汝が爲に少しく説かん。佛子、此菩薩摩訶薩は、已に發心の功德の藏を得れば、應に癡闇を離れ。精勤守護して、諸の放逸を滅すべし。佛子、菩薩摩訶薩に、十種の法有りて、不放逸なるを得。何等をか十と爲す。一には、持戒清淨。二には、愚癡を遠離して、菩提心を淨め。三には、詠曲を捨離して、衆生を哀愍。四には、善根を勤修して、不退轉を得。五には、常に寂靜を樂ひて、在家出家の一切の凡夫を遠離し。六には、心に世間の樂を願樂せず。七には、專精に諸の勝れたる善業を修習し。八には、二乗を捨離して菩薩の道を求め。九には、常に功德を得ひて心に染汚無く、十には、善能く分別して自ら己身を知る。佛子、是を菩薩十種の行を修して、不放逸に住すと爲す。佛子、菩薩摩訶薩は已に能く此不放逸の法に住して、又復十種の淨法を正行す。何等をか十と爲す。佛子、此菩薩摩訶薩は説の如く修行之、念智を成就し、調戲と諸の放逸の行とを捨離して甚深微妙の善法に住し、常に法を樂ひ求めて心に厭足無く、聞く所の法に隨ひて眞實觀を得、巧妙の智慧を具足し出生して、能く佛の自在に入り、心常に寂靜にして未だ曾て散亂せず、好きを聞くも

【佛子、乃至是の如く、精勤云云】以下第二の答にして、如来を歡喜せしむるの間に答ふ。

【十種の法を行じ云云】第三の答にして、菩薩所住の功徳に就いて答ふ。

惡しきを聞くも、心に憂喜無きこと、猶し大地の如く、等しく衆生の上中下の相を觀て、悉く佛の想の如くし、和尚諸師、及び善知識、菩薩、法師を恭敬し供養し、念念に次第して一切智の如くなり。佛子、是を菩薩の十種の淨法と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩は、是の如く精勤して念知を修習し、方便を捨てず、心に所倚無く、甚深の法を修して、無淨に入り、無量無邊の深妙佛法を皆悉く了知し、諸の如来をして皆悉く歡喜せしむ。佛子、菩薩摩訶薩は十種の法を行じて、能く一切の諸佛をして歡喜せしむ。何等をか十と爲す。一には所行精勤にして退轉せず。二には身命を惜まず。三には利養を求めず。四には一切の法を修すること猶し虚空の如く。五には巧方便の慧もて、諸法を觀察し法界に等同なり。六には諸法を分別して心に所倚無し。七には常に大願を發し。八には清淨の忍智の光明を成就す。九には善く一切の損益の諸法を知る。十には所行の法門皆悉く清淨なり。佛子、是を菩薩十種の法を行じて、能く一切の諸佛をして歡喜せんと爲す。佛子、菩薩は復十法に安住し能く一切の諸佛をして歡喜せしむ。何等をか十と爲す。不放逸に安住し、無生法忍に安住し、大慈に安住し、大悲に安住し、満足せる諸の波羅蜜に安住し、菩薩の清淨の行に安住し、満足せる無量の大願に安住し、巧方便に安住し、一切力に安住し、一切法の、猶し虚空の如く依止する所無きに安住す。佛子、是を菩薩、十法に安住して、能く一切の諸佛をして歡喜せんと爲す。

佛子、菩薩摩訶薩は、十種の法を行じて、能く速かに一切の諸地を成就す。何等をか十

【復十法を行じ云
六】第四の答にし
て、清淨行を明か
す。

と爲す。一には心常に諸の功德の事を行ぜんことを樂ひ。二には大莊嚴の諸の波羅蜜道を行じ。三には智慧明達にして他の語に隨はず。四には眞の善知識を遠離せず。五には常に精進を修して退轉せず。六には善く佛意を取りて諸法を受持し。七には諸の善根を行じて心に憂感無く。八には大乘の莊嚴を以て而も自ら莊嚴し、明利の慧光普く一切を照し。九には一切諸地の法門に安住し。十には三世の佛の善根正法に同ず。佛子、是を菩薩、十種の法を行して、能く速かに一切の諸地を成就すと爲す。佛子、彼菩薩摩訶薩は諸地に住し已りて、先づ應に巧妙の方便を修習すべし。其所得の諸地の法門に隨ひ、其所得の甚深の智慧に隨ひ、其行業に隨ひ、其依果に隨ひ、其境界に隨ひ、其自在に隨ひ、其示現に隨ひ、其分別諸勝の法門に隨ひ。諸の勝法門を得已りて、悉く善く分別して、一切の法に於て、而も所著無し。有ゆる、諸法は皆心に由つて造る。菩薩摩訶薩、若し能く是の如く明了に觀察せば、則ち能く一切の諸地を具足せん。彼菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「我は應に速かに一切の諸地を成すべし。何を以ての故に。我は諸地に於て説の如く行する時、無量の諸の功德の藏を速得せん。無量の功德の藏を得已りて、漸く佛地に到らん。佛地に到り已りて、能く佛事を作さん。」是故に菩薩摩訶薩は、常に勤めて修習し、方便を捨てず、心に憂感無く、大莊嚴を得て、菩薩の住に住するなり。

佛子、菩薩摩訶薩は、復十法を行じて、悉く能く菩薩の諸行を清淨にす。何等をか十と爲す。一には悉く一切を捨てて衆生の意を満たし。二には持戒清淨にして毀犯す

【復十種の清淨の願云々】以下第五の成滿を明かす。

る所無く。三には忍辱を具足して窮盡有ること無く。四には方便を勤修して退轉せず。五には業を離れて正念し常に定まりて亂れず。六には一切諸法を分別して明了し。七には一切の衆行を具足し成滿し。八には功德尊重の心は山王の如く。九には一切衆生を爲に清涼の池と作り。十には一切の衆生をして、諸佛の法に同ぜしむ。佛子、是を菩薩十種の法を行じて、悉く能く菩薩の諸行を清淨にすと爲す。佛子、菩薩摩訶薩は、是の如き清淨の行を修行すれば、復十種の轉た勝妙の法を得。何等をか十と爲す。一には他方の諸佛皆悉く護念したまひ。二には超勝の善根を修習し長養し。三には如來の巧密の方便に住し。四には常に樂に親近して、善知識に依り。五には精進に安住して不放逸を修し。六には諸法の總に非ず別に非ざることを分別し。七には無上の大悲に安住し具足し。八には法の如實を觀じて智慧を出生し。九には能善く巧妙の方便を修行し。十には一切の方便もて如來の力を觀ず。佛子、是を菩薩の十種の清淨にして轉た勝妙なる法と爲す。

佛子、菩薩摩訶薩に、復十種の清淨の願有り。何等をか十と爲す。衆生を成就して心に憂感無からんことを願ひ。善根を長養し、佛刹を嚴淨せんことを願ひ。一切の如來を恭敬し供養せんことを願ひ。身命を惜まずして、正法を守護せんことを願ひ。種種の諸の智慧門を以て、悉く衆生をして諸佛の刹に生ぜしめんことを願ひ。諸の菩薩の不二の法門に入り、佛の法門に入りて、諸法を分別せんことを願ひ。一切の佛を見たてまつらんと欲する所をして、悉く之を見ることを得しめんことを願ひ。未來際を盡す一切の諸劫

【一】には大莊嚴を
生じ云云以下十
種の修法を明かす
中宋元明の
三本は一者心無
厭の項を出し以
下順次に一を二
を三とす……九
を十とす。従つて
第十の大涅槃云
の項を缺けり。今
大正新修藏經に依

【諸願を満じ云云】
以下第六の答にし
て菩薩藏を得るこ
とを明かす。

【衆生を化するや
以下】第七の答に
して所應に隨ひ
て化度すること
を答ふ。

は、須臾の頃の如くならんことを願ひ。普賢菩薩の所願を具足せんことを願ひ。一切種智の門を淨めんことを願ふ。佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の清淨の願と爲す。佛子、菩薩摩訶薩は十法を修行して、悉く能く一切の諸願を満足す。何等をか十と爲す。一には大莊嚴を生じて心に憂感無く。二には勝願を轉向して諸の菩薩を念じ。三には聞きし所の十方の叢淨せる佛刹に、悉く往生せんことを願ひ。四には未來際を究竟し。五には一切の衆生を究竟成就して大願を満足し。六には一切劫に住して其久しきを覺えず。七には一切の苦に於て以て苦と爲さず。八には一切の樂に於て心に染著無く。九には悉く善く無等等の解脱を分別し。十には大涅槃を得て差別有ること無し。佛子、是を菩薩摩訶薩、悉く能く一切の諸願を満足すと爲す。

菩薩摩訶薩は、諸願を満じ已りて、十種の無盡の法藏を逮得す。何等をか十と爲す。諸佛の無盡の藏を見ることを得、陀羅尼の無盡の藏を得、法を分別するの無盡の藏を得、大悲心もて一切を覆護するの無盡の藏を得、諸の三昧の無盡の藏を得、衆生の意に功徳を満たすの無盡の藏を得、深智慧もて法の眞實を解る無盡の藏を得、諸通を出生し衆寶を分別するの無盡の藏を得、一切諸佛の威神もて守護するの無盡の藏を得、無量無邊の世界を分別するの智慧の無盡の藏を得。佛子、是を菩薩摩訶薩、十種の無盡の藏を得て、無量無邊の功徳の藏を成就し、淨慧を具足して其所應に隨ひて、之を化度すと爲す。

佛子、云何が菩薩摩訶薩は、其所應に隨ひて、衆生を化するや。此菩薩は、諸の衆生

生ぜざるが故に、戒に於て著すること無し、是を清淨の尸波羅蜜と名く。悉く能く一切の諸苦を堪忍し、好きを聞くも惡しきを聞くも、心に憂喜無く、未だ曾て傾動せざること、猶し大地の如し、是を清淨の圓提波羅蜜と名く。勇猛に精進して方便もて修習し、其心堅固にして、退轉せず、究竟じて佛の智慧門を成就す、是を清淨の毘梨耶波羅蜜と名く。一切の欲を捨て、喜樂を生ずることを離れ、清淨にして次第に正受に入りて、而も所染無く、煩惱を燒滅して、無量の定を生じ、大神通を具へ、次第に超越して、無量の諸の三昧門に入り、一の三昧門に於て、無量の三昧に入り、悉く一切の三昧の境界を知り、漸く諸佛の智慧の地を具ふ、是を清淨の禪波羅蜜と名く。諸佛の所に於て、法を聞きて受持し、諸の善知識を恭敬し親近して、心に疲倦無く、常に法を聞かんことを樂ひて厭足有ること無く、聞く所の諸法を、能く正しく觀察して、眞實の定に入り、一切の顛倒邪見を捨離し、妙善の方便もて、諸の法相海に自性有ること無きを分別し了知して如來の深き智慧門を修習し、一切の智慧の力を具足し、普門の慧に乗じて、能く一切の智慧の門に入る、是を清淨の般若波羅蜜と名く。一切世間の威儀を示現して、衆生を教化し、心に憂感無く、其所應に隨ひて、其身を示現し、一切所行心に染著すること無く、童蒙點慧の所行を示現し、生死及び解脫門を示現して、善能く諸の方便行を分別し、無量の諸の莊嚴の事を示現して、能く一切諸の生趣の中に入り、一切衆生の所行を解了す、是を清淨の方便波羅蜜と名く。究竟じて一切の衆生を成就し、究竟じて一切の世界を嚴

【佛子善哉云云】
第九の答にして、
諸所の衆生を皆
度脱することを得

【因果】因果の
理に暗き者亦は信
ぜざる者に對して
諸法の因縁より生
ずること觀ぜし
めて、邪見を破し
正見に住せしむる
觀法たり。

淨し、究竟じて一切の如來を供養し、究竟じて諸法の眞實を解達して障礙無く、究竟じて修行して、法界を具足し、究竟じて未來劫に住すること須臾の頃如く、究竟じて未來劫も猶し一念の如く、究竟じて一切の成壞を解達し、究竟じて一切の佛刹を示現し、究竟じて諸佛の智慧を逮得す、是を願波羅蜜を具足すと名く。自らの專正力もて衆の煩惱を離れ清淨を具足し、能く他を正すの力を具足し成就して能く壞る者無く、大悲の力満足し、大慈の力平等にして、悉く能く一切の衆生を覆護し、陀羅尼の力は能く一切諸の方便の義を持し、妙辯才の力は諸の衆生をして皆悉く歡喜せしめ、諸の波羅蜜の力は大乘を莊嚴し、弘誓の願力は未だ會て斷絶せず、諸の神通力は無量の具を出生し、佛の神力は一切を覆護す、是を清淨の力波羅蜜と名く。貪欲の増すを知り、瞋恚の増すを知り、愚癡の増すを知り、又等分を知り、學地を分別し、一念の中に於て悉く衆生の心の所行を知り、能く衆生の諸の希望する所を知り、能く一切諸法の眞實を知り、諸佛の深き智慧力を解達し、普く一切諸の法界門を知る、是を清淨の智波羅蜜と名く。佛子、菩薩摩訶薩は、是の如く諸の波羅蜜を清淨にし、諸の波羅蜜を満足し、諸の波羅蜜を捨てず、大莊嚴に乗じて、悉く能く請ふ所の衆生を度脱す。一切を教化して善行を修習せしめ、悉く一切をして、永く惡道を離れ、勤修精進して、衆難を超出せしむ。貪欲多き者には、離欲觀を教へ、瞋恚多き者には、平等觀を教へ、邪見多き者には、因縁觀を教へ、欲界の衆生には、欲恚惡不善の法を離るることを教へ、色界の衆生には、

【佛子菩薩云云】以下は第十の答にして、三寶を興隆することを明かす【六和敬】僧比丘の他人に同化し、敬愛する六種の行法にして、一は同戒にして、他と同じく戒法を持し、二は同見にして、共に實相の正見に住し、三は同行にして、共に正行を修し、四は身慈にして、他人の身を慈しみ、五は口慈にして、他人の語を以て談話し、六は意慈にして、三業に大慈を行ずること六行法を言ふなり。

増上觀を教へ、無色界の衆生には、細微の智慧を教へ、聲聞緣覺を樂ふものには、寂靜の行を教へ、大乘を樂ふ者には、十力を以て大乘を莊嚴することを教ふ。初發心の時の如きは、衆生の諸の惡道に墮する有るを見て、大師子吼すらく、「我は當に其心の病を知り諸の法門を以て、之を濟度すべし」と。菩薩は是の如き智慧を具足して、皆能く一切の衆生を度脱す。

佛子、菩薩摩訶薩の能く是の如く行する者は、則ち能く三寶を興隆して永く絶えざらしむ。所以は何ん。菩薩摩訶薩は、衆生を教化して、菩提心を發さしむ、是故に能く佛寶を斷ぜざらしむ。甚深諸の妙法藏を開示す、是故に能く法寶を斷ぜざらしむ。威儀と教法とを具足し受持す、是故に能く僧寶を斷ぜざらしむ。復次に悉く能く、一切の大願を讚歎す、是故に能く佛寶を斷ぜざらしむ。十二緣起を分別し解説す、是故に能く法寶を斷ぜざらしむ。六和敬を行す、是故に能く僧寶を斷ぜざらしむ。復次に、佛の種子を衆生の田に下し、正覺の芽を生ず、是故に能く佛寶を斷ぜざらしむ。身命を惜まずして正法を護持す、是故に能く法寶を斷ぜざらしむ。善く大衆を御して心に憂惱無し、是故に能く僧寶を斷ぜざらしむ。未來今佛の説きたまふ所の正法には、其教に違はず、是故に能く三寶をして斷ぜざらしむ。菩薩は是の如くして三寶を斷ぜず。一切の所行に、不善有ること無ければ、彼れ能く悉く一切の廻向を行じ、決定して無上の菩提を究竟す。菩薩は是の如き清淨の身口意業に安住し已りて、説く所の善根もて衆生を教化す。種種の方便もて、言ふ所

【煩惱の跡】 習氣と同意なり。煩惱斷滅の後と雖もその習性（反動運動の如き）は残るものなり。

【阿伽陀】 (A-ga-ta) 阿揭陀、阿揭陀とも書き、無病、無價と譯し又不死藥、丸薬とも言ふ。【佛子、菩薩摩訶薩は、若し云云】以下は行所成の徳を明かして答ふ。

虚しからず、能く衆生をして皆歡喜を得しむ。彼菩薩摩訶薩の、諸の發行する所は、乃至一念も錯謬有ること無し。是の如き一切諸の深妙の行は、皆智慧方便の攝持の爲に悉く能く無上の菩提に廻向す。是の如く菩薩は、礙を離れたる清白の法に安住し已りて、念念の中に於て、十種の莊嚴を具足し出生す。何等をか十と爲す。色身の莊嚴は、應に隨ひて示現し、語言の莊嚴は、衆の疑惑を除きて悉く歡喜せしめ、意行の莊嚴は、一念の中に於て諸の正受に入り、佛刹の莊嚴は、一切諸の煩惱の跡を滅除し、光明の莊嚴は、普く十方を照し、眷屬の莊嚴は、能く勝業を集めて悉く歡喜せしめ、神力の莊嚴は、其所應に隨ひて自在に示現し、佛教の莊嚴は、皆能く諸の點慧の者を攝取し、涅槃地の莊嚴は、一處に成道して、悉く能く充滿して十方に示現し、持法の莊嚴は、業に隨ひ、時に隨ひ、其器量に隨ひて、爲に法を説く、菩薩は是の如く、念念の中に於て、十種の莊嚴を具足し出生し已りて、身口意の行は悉く皆清淨となり、永く愚癡を離れ、智慧成就す。此の如きの菩薩に、若し親近し、恭敬し、隨逐し、出家し、法教を聽受し、隨喜し、憶念し、乃至見聞するものあらば、此等の衆生は、必定して無上の菩提を究竟せん。佛子、譬へば阿伽陀藥の如く、衆生の見る者は、衆病悉く除かる。菩薩は是の如き無量の法藏を成就し、衆生の見る者は、煩惱の諸病、皆悉く除念し、白淨の法に於て心自在なることを得ん。

佛子、菩薩摩訶薩は、若し是の如き方便を成就して、此法に安住するを得ば、愚癡を除

【六通】 六神通の略。

滅せん、智慧を具足するが故に。衆魔を降伏せん、大慈悲心の故に。諸の外道を制せん、智慧功德の力を具足するが故に。一切の心垢の煩惱を除滅せん。金剛定に入るが故に。善根を具足して心に憂感無からん、先佛の所に於て功德力を修するが故に。能く一切の惡道の諸難を離れん、清淨の智慧悉く満足するが故に。菩薩の清淨の諸地、諸の波羅蜜、一切の三昧、六通、三明、四無所畏を出生せん、次第の方便智慧力の故に。諸佛の利を淨めて、相好莊嚴し、身口意淨ならん、白淨法の力の故に。佛の十力、四無所畏、十八不共、平等の佛法を得ん、智慧もて分別し、速かに諸法を解り、一切種智もて平等に正覺すればなり。諸の大願力、如來の神力、大智慧の力は衆生に隨順して諸佛の利を現するなり。應に化を受くべきものに隨ひて、大法輪を轉じ、無量無邊の衆生を度脱するなり。佛子、菩薩摩訶薩は、是の如く無量の法藏を修行して、次第に具足して如來の處を得。無量の利に於て菩薩行を修して正法を護持し、大法師と爲りて、如來の法藏を守護し攝持し、四辯を成就して、大衆の中に於て深法を演暢し、身相端嚴にして、法を説くこと周備し、四辯才に於て無量の巧妙の方便を具足し、能く無盡の諸の智慧門を得、音聲殊に妙にして一法言を演べて、能く一切を悦ばし、隨宜に順導し開解を得て、智慧の門に入らしむ。菩薩は是の如き等の無量の方便を以て、普く衆生の爲に、法藏を開闡して、而も未だ曾て懈怠の心を生ぜず。大衆の中に於て而も畏るる所無く、一切世間に能く壞する者無きは、般若波羅蜜を具足し、増上すればなり。次第に一切の法相を分別して、而も斷絶する

こと無く、勝妙の四辯もて、一切の法を説き、種種の譬喩も窮盡すべからず。大悲を具足して、能く一切をして清凉悦樂ならしめ、大悲を修習して十方に充週し、師子の座に處して、廣く衆生の爲に微妙の法を説く。唯如來のみを除きて能く過ぐる者無く、能く頂を見らるもの無く、能く觀察する無く、能く屈する者無く、能く問難するもの無し。若し能く其言論の辯を窮めば、是處有ること無し。

佛子、菩薩摩訶薩は是の如き勝妙の法を成就し已りて、無邊の世界の中に満てる大衆、彼一一の身は猶し三千大千世界の如し。菩薩摩訶薩は、彼衆の中に處して其身殊特にして大會を映蔽し、皆悉く現ぜず。大慈心を以て、普く一切を覆ひ、甚深の智慧もて、彼心を分別し、無畏を成就し、辯才を具足して、廣く爲に法を説きて皆歡喜せしむ。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は無量の淨智慧を成就するが故に、無量の巧方便を成就するが故に、無量の正念行を成就するが故に、無盡の巧方便を成就するが故に、諸法を分別するの陀羅尼を成就するが故に、諸法を分別するの深智慧を成就するが故に、諸佛の威神力を成就するが故に、三世諸佛の實智慧を成就するが故に、三世の諸佛の清淨の巧方便を成就するが故に、廣く一切諸佛の甚深の法藏を説きて法を護持することを成就するが故に。三世の諸佛の勝妙の智慧、菩薩の大願の智慧力を成就するが故に。

爾時、法慧菩薩、是漸増功德の藏を説き已りて、重ねて此義を宣べんと欲し、佛の威神を承け、偈を以て頌して曰はく、

【爾時法慧菩薩云云】已下第三段の偈頌あり。初十三偈は前十一種の行法の後七偈は行所成の徳を頌説せり。

菩薩は初地に住して、功德の藏を長養し
不放逸を修習し、慧光もて十方を照す
菩薩は菩提心を、守護して常に妄せず
十方の諸の如來は、心皆大いに歡喜したまふ
勤めて精進を修行し、正念の力堅固にして
行ずる所退轉せず、世間に著せず
常に甚深の法を樂ひ、無諍の定を成就し
十方の諸の最勝は、一切皆歡喜したまふ
諸佛は歡喜し已りて、精進度を究竟して
功德の藏と、無量の深智慧とを成就し
一切の行は清淨なり。諸地を具足して
十方の佛の本願は、皆悉く具足して滿つ
是の如く智慧成じて、諸の深法藏を得
是法藏を得已りて、世間に隨順し
巧方便を成就して、衆生の心を分別し
應に教化すべき所に隨ひて、爲に法を演説す
已に能く廣く法を説きて、自行を捨てず

波羅蜜を具足して、大功德を成就す

に波羅蜜を具へて、本請ひし所の衆生を

無量の生死の海より、皆悉く究竟じて度す

是の如く常に修習して、日夜休懈無く、

佛法僧を興隆して、永く斷絶せざらしむ

修する所の無量の行は、清白にして悉く具足し

一切皆究竟じて、最勝の地を成就す

菩薩の修行する所は、眞實にして虚偽無く、

衆生の類を度脱して、諸の煩惱の苦を離れしむ

是の如きの法を成就せば、愚癡の闇を除滅し

一切の魔を降伏して、究竟じて菩提を得ん

佛子、是の如く行せば、如來の智を具足せん

悉く能く分別して、諸佛の甚深の藏を説け

若し能く是の如く説かば、法師中第一にして

等しく、諸の群生の爲に、普く甘露の法を雨らさん

極まり無き大悲は、十方界に充滿して

悉く能く分別して、一切衆生の心を知る

【夜摩天宮自在品】
 第四會は夜摩天宮に於ける十行會に於て、専ら行を明す。この品は本會四品の中の初の序品にして、能化の佛の機縁に應じて不思議の妙用を現じ、昇天し給ふを叙せる諸佛の序なり。爾時以下の一章は本會の總序なり。

佛昇夜摩天宮自在品第十五

已に衆生の心と、及び諸の餘の心行とを了りなば、彼が爲に深法を説くこと、無量にして數有ること無し。進止常に安諦なること、猶し大象王の如く威猛なること師子の如くにして、一切能く害するもの無し。動ぜざること須彌の如く、智慧は大海の如く、普く甘露の水を雨らして、煩惱の熱を除滅す。法華菩薩、是偈を説き已りて、如來隨喜したまひ、大衆奉行せり。

佛昇夜摩天宮自在品第十五

爾時、如來の威神力の故に、十方の一切諸佛の世界の、諸の四天下の、一一の闍浮提に、皆如來の、菩提樹下に坐したまふ有りて顯現せざる無し。彼諸の菩薩は、各佛の神力を承けて、種種の法を説き、皆悉く自ら佛の所に在りと謂へり。

爾時、世尊の威神力の故に、道樹及び帝釋宮を離れずして、夜摩天の寶莊嚴殿に向ひたまふ。時に彼天王、遙かに佛の來りたまふを見、即ち殿上に於て、蓮華藏の寶師子の座を敷き、十萬種の寶を以て、莊嚴と爲し、十萬の寶帳を其上に彌覆し、十萬の寶網を以て瑠珞と爲し。次で上に十萬の衆の妙寶蓋あり。又復十萬の天の諸の華蓋、天の網あり、

釋寶を以て垂帶と爲し、十萬の瓔珞もて之を莊嚴し、十萬の寶衣を以て其上に敷き、十萬の天子は前に在りて立侍し、十萬の梵天は之を圍繞し、十萬の菩薩は前に在りて讚歎し、十萬の光明を以て照耀を爲し、十萬の妓樂は、自然に十萬の正法、娛樂の音聲を演出し、十萬の善根の妙相顯現し、十萬の如來の威神もて護持したまひ、十萬の功德の藏もて之を長養し、十萬の三昧もて之を嚴淨し、十萬の願藏を以て清淨と爲し、十萬の奇特未曾有の法の勝相顯現し、十萬の妙法現じて前に在り、十萬の自在は處處に普く現じ、十萬の功德の妙相は等しく起り、十萬の音聲は諸法を演出す。時に彼天王、寶蓮華藏の師子の座を莊嚴し已りて、合掌し恭敬して、佛に白して言さく、「普くぞ來りたまひし、世尊。唯願くば、哀愍して此宮殿に處したまへ。」時に佛請を受け、即ち寶殿に昇りたまふ。一切十方の夜摩天宮も、亦復是の如し。

爾時、天王、無量の音樂寂然として聲無きに、即ち自ら過去佛の所にて、種るし所の善根を憶念し、偈を以て頌して曰はく、

名稱如來は十方に開え、諸の吉祥の中に最も無上なり

來りて摩尼の莊嚴殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり

寶王如來は世間の燈にして、諸の吉祥の中に最も無上なり

來りて甘露の上味殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり

喜王如來は甘露量にして、諸の吉祥の中に最も無上なり

【名稱如來云々】
以下の頌は總じて十頌より成り、各頌とも夜摩天王の過去佛の所に在りし時の善根を憶念してその佛を讚歎し頌說せしなり。

來りて雜寶の莊嚴殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
慧眼如來は世間の燈にして、諸の吉祥の中にて最も無上なり
來りて殊特の最勝殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
饒益如來は義無量にして、諸の吉祥の中にて最も無上なり
來りて清淨の寶山殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
無師如來は世間の尊にして、諸の吉祥の中にて最も無上なり
來りて微妙の寶香殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
天人中の尊は世間の燈にして、諸の吉祥の中にて最も無上なり
來りて輕微の妙香殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
無去如來は論師子にして、諸の吉祥の中にて最も無上なり
來りて明淨の普眼殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
分別如來は功德の持にして、諸の吉祥の中にて最も無上なり
來りて娛樂の莊嚴殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
苦行如來は世間を利し、諸の吉祥の中にて最も無上なり
來りて等色の普照殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
此間の夜摩天王、佛の神力の故に、過去の諸の等正覺を憶念して、偈を以て讚歎した
てまつりしが如く、是の如く十方の一切世界の夜摩天王も、各自ら過去佛の所にて種々

し所の善根を憶念して、偈を以て讚歎したてまつることも、亦復是の如し。爾時、世尊、
共寶殿の寶蓮華藏の師子座の上に昇り、結跏趺坐したまへり。爾時、寶殿は、忽然として
廣博なること、猶し夜摩天の處の如し。十方の世界も亦復是の如し。

夜摩天宮菩薩說偈品第十六

【說偈品】菩薩雲
集諸佛品とも言ひ
木舎の第二品にし
り。此品は所化の
菩薩雲の如く集り
佛は光明を放ちて
大會を顯現し、十
林の菩薩各偈を以
て如來の功德を讚
歎することを明か
せる讚佛の序なり
【爾時、十方各云云】
以下第一段にして
大眾の集まれるこ
とを叙す。

爾時、十方各十萬の佛刹摩數の世界を過ぎて、世界有り、無量慧と名く、次を幢慧と
名け、次を地慧と名け、次を勝慧と名け、次を燈慧と名け、次を金剛慧と名け、次を安樂
慧と名け、次を日慧と名け、次を清淨慧と名け、次を梵慧と名く。其佛を常住眼と號け、
次を無量眼と號け、次を眞實眼と號け、次を不動眼と號け、次を天眼と號け、次を清淨
眼と號け、次を安諦眼と號け、次を明相眼と號け、次を無上眼と號け、次を淨光澤眼と
號けたてまつる。其菩薩を功德林と名け、次を慧林と名け、次を勝林と名け、次を無畏林
と名け、次を慍懃林と名け、次を精進林と名け、次を力成就林と名け、次を堅固林と名け、
次を如來林と名け、次を智林と名く。此諸の菩薩は、各其國の佛の所に於て、梵行を
淨修せり。爾時、佛の神力の故に、彼諸の菩薩は、各一佛世界摩數の菩薩と共に、佛
の所に來詣し、恭敬し、禮拜し、佛の神力の故に、來りし所の方に隨ひて、寶藏の師子の
座を化作して、結跏趺坐し十方に充滿せり。此世界の夜摩天上に、菩薩の雲集せるが如く、

【爾時世尊云云】
以下第二段にして
佛の光を放ち給ふ
ことを叙す。

【普く淨き光明】
已下は第三段の偽
讃にして、十段よ
り成り、初一偈は
總序にして此偈の
理事を叙し、後の
九段は別して佛德
の義を頌說せり。

十方の世界も亦復是の如し。爾時、世尊、兩足の指より百千億の妙色の光明を放ちて、
普く十方一切世界の、諸の四天下の菩提樹下の、夜摩天宮の、蓮華藏の寶師子座を照し
たまひ、如來の神力及び諸の大會は、皆悉く顯現せり。

爾時、功德林菩薩は、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

普く淨き光明を放ちて、遍く十方界を照し

一切悉く佛を觀たてまつり、通達して障礙無し

佛は夜摩天宮の、蓮華寶座の上に處したまひ

一切諸の世間に、奇特なること未だ曾て有らざるなり

十如來を讚歎したてまつり、衆生皆悉く聞く

世尊の大衆會は、一切見ざる無し

普く十方界に於て、無上の法を演說したまひ

亦悉く名字を同じうすること、我が菩薩衆の如し

各十方界より、此處に來詣せる

彼諸の上人等は、清淨に梵行を修せり

彼諸の如來等も、亦各名號を同じうし

佛の清淨刹と、自在の神通力とを見る

一切のもの如來を、人中に或は道場に見たてまつる

【不可思議劫】以下の頌は十頌より成り、佛徳には甚だ遇ひ難き理由を説き、最後に見聞の勝益の功徳を叙し終せり。

又復世尊の、此夜摩宮に處したまふを見る

一切諸の世間は、能く佛を思議するもの莫し

彼衆生の願に隨ひて、一切皆悉く見たてまつる

衆生は如来の、無量の自在力を見たてまつるに

世を離れたる大仙人にして、功徳の藏無量なり

十方界に遊行して、一切障礙無く

一身は無量と爲り、無量の身は一と爲る

功徳甚だ深妙にして、一切能く測ること無し

著も無く所依も無く、清淨なること虚空の如し

爾時、慧林菩薩、佛の神力を受け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

不可思議劫にも、天人師には値ひ難く

離苦の諸の大人の、此會も亦遇ひ難し

悉く皆一切智なり、慧光照さざる磨く

深妙の法を演説して、衆生を饒益す

一切諸の世間は、常に癡冥の爲に蔽はれ

如来の世の燈明は、皆悉く能く除滅したまふ

施或忍精進、禪定、三昧藏と

深妙の智とを修習して、普く一切を照したまふ

如来は與等無し、何に況んや勝る者有らん

顛倒して諸法を取る、是故に佛を見たてまつらば

自在の神通力は、無量にして思議し難く

來ること無く亦去ることも無し、法を説きて衆生を度したまふ

若し清淨の天人の師を、聞見することを得る有らば

永く諸の惡道を出で、一切の苦を遠離せん

無量無數の劫に、修習して菩提を求め

等正覺を達成して、廣く諸の群生を度したまふ

不可思議劫に無量の佛を供養したてまつらんも

若し能く是義を解らば、功德は彼より勝らん

無量の刹の、中に滿つる諸の珍寶を施すと雖も

此義を解ること能はずんば、終に正覺を成ぜざらん

爾時、勝林菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、佛を以て頌して曰はく、

猶し春後の月の、虚空に雲暍無きが如く

日曜清淨の光は、一切照さざる無し

光明には限量無く、世間能く數ふる無し

【猶し春後の月】
以下の頌は十頌より成り、佛の深廣無涯の徳を讃歎し理を解りて知見すること頌説せり

眼有れども尙知らず、何に況んや盲冥の者をや
 如來も亦是の如く、功德の光無量にして
 無量無數の劫に、能く分別して知ること莫し
 光明に未處無く、去るも亦至る所無し
 生ぜず亦滅せず、空寂にして所有無し
 未來の一切の法は、悉く來者有ること無く
 生無く現在無く、是故に過去も無し
 一切の法は生無く、亦復滅有ること無し
 若能く是の如く解らば、斯人如來を覩たてまつらん
 諸法は生無きが故に、當に知るべし所有無しと
 是の如く分別して知らば、此人深義に達せん
 諸法に自性無ければ、一切能く知ること無し
 若し能く是の如く解らば、是れ即ち所解無けん
 言ふ所の生有りとは、當に知るべし所生に由る
 彼眞實の性を解れば、是れ則ち疑惑無きなり
 一切諸の所生は、正しく觀するに亦是の如し
 菩薩は是の如く觀じて、一切智を具足す

【此處邊際無く】
以下、頌は十頌より成り、十方三世の諸佛の法を聞き信行するものの勝益を頌す。

爾時、無畏林菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
此處邊際無く、廣大なること法界の如くにして
一切至らざる無く、湛然として遷り變らず
若し是の如き法を聞きて、恭敬し信樂せん者は
永く三惡道の、一切諸の難苦を離れん
諸の世界に往詣すること、無量にして數ふべからず
此甚深の法を聞きて、憶念して善く受持せり
大仙人の、清淨深妙の法を聞受して
一向に菩提を求むれば、無上道を究竟せん
深く過去佛と、及び彼諸佛の法とを信ぜば
一切世間の燈となりて、衆の癡闇を除滅せん
若し佛の無量の自在力を、聞くことを得る有りて
決定して信向せん者は、人中の雄を具足せん
若し能く一心に、現在の一切佛を信ぜば
彼は等正覺を成じて、無量の義を開示せん
無量無數の劫にも、此法には甚だ値ひ難し
若し聞くことを得る有らん者は、當に知るべし本願の力なり

【眞諦の法】以下
の經に十餘あり、或
り、佛の大智の勝
益を顯現せり。

是の如き佛の深法を、悉く能善く受持して

廣く衆生の爲に説かば、是人は思議し難からん

是故に勤めて精進し、大莊嚴を修行して

是正法を聞持せば、究竟して菩提を得ん

爾時、慍愧林菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て顯して曰はく、

眞諦の法の、殊特にして未曾有なるを聞くことを得て

歡喜し信樂せん者は、衆の疑惑を除滅せん

一切知見の人は、自ら深妙の法を説き

佛慧照さざる瞶し、是故に思議し難し

智慧より生ずるに非ず、亦無智より生ずるにも非ず

一切の法を了達せば、世間の闇を除滅せん

色法と非色法と、此二は一と爲さず

愚と智も亦是の如く、其性各別異なり

生死と及び涅槃とは、此二悉く虛妄なり

愚と智も亦是の如く、二俱に眞實無し

世界始めて成立するべき、毘盧の相有ること無し

愚と智も亦是の如く、二俱に相違す

愚と智も亦是の如く、二俱に相違す

菩薩の初發心と、及び最後心のごとく
愚と智も亦是の如く、二俱に相應せず

譬へば六情の識は、迷に用ひて互に同じからざるが如く

愚と智も亦是の如く、究竟じて和合せず

譬へば伽陀藥の、一切の毒を消滅するが如く

智慧も亦是の如く、諸の癡闇を除滅す

法王無上の尊、是勝に能く過ぐるもの莫く

説きたまふ所は皆眞實なり、故を以て值遇し難し

爾時、精進林菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

【諸法に差別無し】
以下の頌は十頌より成り、佛の無差別平等の、大智を讚歎せり。

諸法に差別無し、唯佛のみ分別して知りたまふ

一切達せざること無く、智慧もて彼岸に到りたまふ

金と及び金色と、其性差別無きが如く

是の如く法と非法とは、其性異り有ること無し

衆生と非衆生と、二俱に眞實無し

是の如く法と非法とは、其性に所有無し

譬へば未來世に、過去の相有ること無きが如く

一切の法も是の如く、眞實の相有ること無し

【法華の二種】有餘涅槃と無餘涅槃となり。有餘涅槃とは所依の肉身を破棄せずして得たる涅槃の意にして阿羅漢の煩惱障を斷盡し得涅槃せし時、猶異熟果たる依身殘餘するあるを言ふ。無餘涅槃は之に反して、灰身滅智して殘存するなき涅槃なり

【一切衆生の類】

以下の頌は十頌より成り、染淨の空を會することを明かし、離相の眞佛（法身）の功德を讚歎す。

譬へば過去の法に、生起の相有ること無きが如く
諸法も亦是の如く、皆悉く相有ること無し
涅槃は取るべからざるも、説く時には一種有り
諸法も亦是の如く、差別の相有ること無し
譬へば種種の数は、皆悉く是れ數法なるが如し
諸法も亦是の如く、其性に別異無し
譬へば數法の十は、一を増して無量に至るも
皆悉く是れ本數にして、智慧の故に差別するが如し
譬へば諸の世界は、劫燒に終敗有るも
虚空に損滅無きが如く、無師の智も亦然なり
十方の空には異り無きも、衆生は分別を起す
是の如く如來を取せば、虚妄にして佛を見たてまつらざらん
爾時、力成就林菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
一切衆生の類は、悉く皆三世に攝す
三世の諸の衆生は、皆五陰の攝爲り
五陰は業より起り、諸の業は心に因りて起る
心法は猶し、如くの如く、衆生も亦是の如し

世間は自ら作るに非ず、亦復他の作るに非ず
眞實の性を知らざれば、生死の輪は常に轉ず
謂ゆる世間の轉ずるは、皆悉く是れ苦の轉ずるなり
衆生は知らざるが故に、生死の輪は常に轉ず
世間と非世間と、二俱に眞實にあらず
衆生は愚癡の故に、妄りに諸法の相を取る
三世の五陰の法を、説いて名けて世間と爲す
斯れ虚妄に由りて有り、無ければ則ち世間を出づ
何等か是れ五陰なる、五陰に何の相か有る
五陰の壞することを見ずして、妄りに取りて常住と謂へり
五陰は虚妄の法にして、眞實に所有無く
空寂にして遷變せず、究竟して衆相を離る
世間は既に虚寂なり、佛及び法も亦然り
斯等の三種の法は、其性に所有無し
諸の顛倒を除滅して、明了に眞實を見れば
一切知見の人、常に現じて其前に在り
爾時、堅固林菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

【廣へば地種の性】
以下の經は十類に
り成り、佛の自性
なく、法身の體が
空寂なることを歎
ず。

廣へば地種の性は、自性に所有なきが如く

一切の佛の自在も、其性亦是の如し

一切の諸の世間は、咸共に佛を稱讚したてまつるも

彼稱讚の法を求むるに、十方に來處無し

衆生は虚妄に取りて、之を謂ひて眞實と爲せり

分別するに衆生を離れては、業性は得べからず

業性に所有無ければ、衆生の身も眞に非ず

種種氣量の色も、亦復來處無し

一切の諸の形色と、業性とは思議し難し

見ると雖も所有無く、識性も亦是の如し

諸佛の身も是の如く、思議することを得べからず

無量の妙色の身は、普く一切の刹に現す

無量の身は佛に非ず、佛は無量の身に非ず

清淨の妙法身は、究竟じて彼岸に度る

若し能く、清淨の妙法身を見ることを得る有らば

是人は佛法に於て、其心に癡惑無けん

過去の一切の法を、觀察して涅槃に等しければ

【畫師】以下の頌は
十頌より成り、心
十眞如の發起を明か

彼人は如來の、究竟じて常に安住したまふを見たとまつる

正憶念を修習して、明了に正覺を見ば

無相にして所有無し、是を法王子と名く

爾時、如來林菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

譬へば工みなる畫師の、諸の彩色を分佈するが如し

虛妄に異色を取るも、四大に差別無し

四大は彩色に非ず、彩色は四大に非ず

四大の體を離れて、而も別に彩色有るにあらず

心は彩畫の色に非ず、彩畫の色は心に非ず

心を離れて畫色無く、畫色を離れて心無し

彼心は常住せず、無量にして思議し難く

一切の色を顯現して、各各相知らず

猶し工みなる畫師も、畫心を知ること能はざるが如く

當に知るべし、一切の法の、其性も亦是の如し

心に工みなる畫師の如く、種種の五陰を書き

一切世界の中に、法として造らざる無し

心の如く佛も亦爾り、佛の如く衆生も然り

【所取も取るべからず】以下の頌は十頌より成り、佛の體用は廣大無量にして、色聲を絶することを頌説す

心と佛と及び衆生とは、是三差別無し

諸佛は悉く、一切は心より轉ずと了知したまふ

若し能く是の如く解らば、彼人は眞の佛を見たてまつらん

心も亦是身に非ず、身も亦是心に非ずして

一切の佛事を作し、自在なること未だ曾て有らず

若し人求めて、三世一切の佛を知らんと欲せば

應當に是の如く觀すべし、心は諸の如來を造ると

爾時、智林菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

所取も取るべからず、所見も見見るべからず

所聞も聞くべからず、所思も思ふべからず

有量と無量とに於て、應に限量を作すべからず

有量と及び無量と、二俱に所取無し

應に説くべからずして而も説くは、是を自ら欺誑すと爲す

已が事成就せざれば、衆生を憐ばすこと能はざらん

若し能く、無量の如來を讚歎したてまつるもの有らば

不可思議劫にも、功德は盡すべからず

猶し隨意の珠の、能く無量の色を現するも

此色は眞の色に非ざるが如く、諸佛も亦是の如し
虚空は清淨にして、色に非ず見るべからずして
能く一切の色を現するも、其性見るべからざるが如く
是の如く大智の人は、無量の色を示現するも
識の識る所に非ず、一切能く観る莫し
如來の聲を聞くと雖も、音聲は如來に非ず
聲を離れて復、如來の等正覺を知らず
是處甚だ深妙なり、若し能く分別して知らば
無上の道を莊嚴し、諸の虚妄を遠離せん
一切諸の如來は、佛法を説くこと有ること無くして
其所應に隨ひて化し、而も爲に法を演説したまふ

大方廣佛華嚴經 卷第十一

東晉天竺三藏佛跋跋陀羅譯

功德華嚴菩薩十行品第十七之一

【十行品】本第四會の第三品にして、當會の正説なり。正しく當位の行法を示して諸三昧に入定して諸行を修することを明かす。

【菩薩功德華嚴菩薩】以下の一章は入定と佛の加持力とを叙し、菩薩入定の三昧に就いて詳説す。
【善伏三昧】善く惑障の諸煩惱を制伏して、永く思らざらしむる義なり。

爾時、功德華嚴菩薩摩訶薩、佛の神力を承け、菩薩の善伏三昧に入る。三昧に入り已きて十方各萬佛世界の塵數の刹を過ぎて外に、各萬佛世界塵數の諸佛を見たり。是諸の如來は、皆功德林と號けたてまつる。時に彼諸佛、功德林菩薩に告げて言はく、善い哉善い哉、佛子。乃ち能く是善伏三昧に入れり。十方各萬佛刹塵數の諸佛、汝に神力を加したまへるが故に、能く是善伏三昧に入れるなり。盧舍那佛の本願力の故に、或神力の故に、諸の菩薩の善根力の故に、汝をして廣く甚深の法を説かしめん」と欲するが故に、一切智を長養せしめんが故に、一切衆生の性を分別せしめんが故に、一切の障礙を離れて無障礙の境界に入らしめんが故に、一切の方便を成就せしめんが故に、一切の種智を成就せしめんが故に、一切の法を覺悟せしめんが故に、善く諸根を知らしめんが故に、一切の法を聞持せしめんが故に、習ゆる菩薩の十行なり。佛子、當に佛の神力を承け廣く妙法を説くべし。時に彼諸の菩薩は、即ち功德華嚴菩薩に無障礙の法を與へ、安住の法を與へ、無

【菩薩の行業は思議すへからず云云】以下の一章は正しく當品の正説にして十行の種目を列擧せり。

【此菩薩は大施主】以下は第一の歡喜行を叙し、初めに財施を明かせり。

師の法を與へ、無癡の法を與へ、不雜亂の法を與へ、清淨の法を與へ、無量の法を與へ、最勝の法を與へ、無垢の法を與へ、不退の法を與へたまへり。何を以ての故に。彼三昧力の故に。

爾時、諸佛は各右の手を申べて、功德林菩薩の頂を摩でたまへり。其頂を摩でたまふこと已りて、即ち定より起ちて衆の菩薩に告げて言はく、諸の佛子、菩薩の行業は思議すべからず、廣大なること法界の如く、究竟すること虚空の如し、何を以ての故に。菩薩摩訶薩は、三世諸佛の所行の法を學ぶが故に。佛子、何等をか菩薩摩訶薩の行と爲す。菩薩に十行有り、三世諸佛の宣説したまふ所なり。何等をか十と爲す。一には歡喜行、二には饒益行、三には無悲懼行、四には無盡行、五には離癡亂行、六には善現行、七には無著行、八には尊重行、九には善法行、十には眞實行なり。是を十行と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の歡喜行と爲す。此菩薩は大施主と爲りて、悉く能く一切の所有を捨離し、等心に一切の衆生に恵み施す。施し已りて悔ゆることなく、果報を望まず、名譽を求めず、勝處に生れんことを求めず、利養を求めず。但一切の衆生を救護せんと欲し、一切の衆生を攝取せんと欲し、一切の衆生を饒益せんと欲し、一切諸佛の本行を學ばんと欲し、正しく諸佛の本行を憶念せんと欲し、清淨なる諸佛の本行を得んと欲し、諸佛の本行を受持することを得んと欲し、諸佛の本行を顯現せんと欲し、廣く諸佛の本行を説かんと欲し、一切をして善を離れ樂を得しめんと欲するなり。是を菩薩摩訶薩の歡喜行

【種種の想】 願、處、界等の諸法の
 思想を言ふ。
 【無備置】 (Pu) 未だ
 て、有情、數取趣
 等と譯し、生死に

と名く、菩薩、歡喜行を修する時、一切の衆生は歡喜し愛敬す。諸の方土に隨ひ、貧窮の處に在りては、菩薩は願もて、彼に往生し、豪貴大富にして、財寶盡くること無く、念念の中に於て、無量無邊の無數の衆生有りて、菩薩の所に詣り白して言さく、「仁者、我等は貧寒にして、資贍する所乏し、願くば慈救を垂れたまひて、生命を濟ふことを得しめたまへ」と、菩薩は念念に其須むる所に應じて、悉く満足して、歡喜せしめざる靡し。菩薩は求索を以て煩重なりとして憂惱を生ぜず。但無上の大慈悲心を發して、施すに厭き足ること無く、常に來らしめ、來り已れば、稱慶して倍復歡喜せしめんと欲し、是の如きの念を作さく、「我善利を得たり。此等の衆生は、是れ我が福田なり。是れ我が善友なり。請はず求めざるに、自ら來りて教誨し、我が心を發起して佛道を修行せしむ。我今應當に是の如く修學して、普く衆生をして悉く歡喜を得しむべし。我三世に於て修せし所の功德は、願くば速かに清淨の法身を成就し、神力自在にして、悉く衆生をして其須むる所に隨ひ、皆歡喜を得しめん。此功德を以て、諸の衆生をして、悉く正覺を成し、無量の衆生を度脱して、悉く無餘涅槃を究竟せしめん。我當に先づ一切衆生をして諸願を満足せしむべし。然る後に我當に等正覺を成すべし。我の想、衆生の想、我所の想、壽命の想、種種の想、福伽羅の想、作者の想を離れ、法界と衆生界とは空にして差別無く、欲の法、眞實に非ざるの法、所有無きの法、堅固に非ざるの法、恃怙に非ざるの法、所作に非ざるの法を離れん」と。菩薩は是の如く觀する時に、施す者を見ず、受くる者を見ず、財物を見ず、

輪廻して六趣にある有情(生存者)の主體を言ふ。
【施す者を見ず】

以下施者、被施者、施物の三に於て皆悉く空なりと觀じて、執著を離るるを三輪體空の即施と言ふ。是れ即ち眞實の檀波羅蜜行なり。

【菩薩三世を觀察】以下の一章は財施に次て法施を説けり。

【堅固】常住不壞の法身を指す。

【第二饒益行】以下は十行の第二行たる饒益行を明したる、初めに行體、次に行用を説く。

【菩薩是の如く云】以下行用を明かす中、初は律儀戒を説けり。

【妖】様姿の體満華美にして、あてやかなるを言ふ。

福田を見ず、業を見ず、報を見ず、果を見ず、大果を見ず、小果を見ざるなり。菩薩は三世を觀察して、是の如きの念を發すらく、「哀れなる哉、衆生は愚癡の爲に覆はれ、煩惱に纏はれて、常に生死に流れ、苦海に輪廻し、不堅固の法に於て堅固を得ず、我當に盡く諸佛の所學を學びて、衆生を饒益し、等正覺を成じ、一切を開悟して、皆清淨にして寂滅に隨順し、三世の法を觀せしむ」と。是を菩薩摩訶薩の初歡喜行と名く。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第二饒益行と爲す。此菩薩は持戒清淨にして、色聲香味觸の法に於て、心に染著無く、廣く衆生の爲に無染の法を説き、人天の勝處、尊貴の家に生れんことを求めず、利養を求めず、端正を求めず、帝王を求めず。但堅く淨戒を持ちて是の如きの念を作さく、「我淨戒を持ちて一切の纏、煩惱の熾火と、憂悲苦惱とを離れ、衆生に負かず、諸佛歡喜し、究竟して無上菩提を成就せん」と。菩薩は是の如くして淨戒を持つの時、一日の中に於て、若し無量無數阿僧祇の、諸の大魔王有り、一一の魔王は、各無量無數阿僧祇の諸の天女衆を將ひ、皆悉く端正にして、顏貌は殊妙、姿容は妖麗にして、人心を傾惑す、又復一切の樂具を齎持し、來りて、菩薩の道意を惑亂せんと欲す。爾時、菩薩は是の如きの念を作さく、「此五欲は、是れ障道の法なり、乃ち能く無上の菩提を障礙す」と。是故に菩薩は乃至一念の欲心をも生ぜず、心淨きこと佛の如し。其方便もて衆生を教化し、内に菩薩の一切種智を離れざるを除きて堅固正念にして、五欲の因縁の爲の故に、一の惡念を起して、衆生を惱亂せず。寧ろ身命を捨つるも、惡を人に加へず。若

【事に従はんや】
 想に止らず實行に
 思むこと。今は欲
 想だに起さず、況
 んや事實上五欲に
 耽ることあらんや
 との意

【爾時善喜は是の
 如き云云】以下は
 播業生戒の相を説
 く。

【顛倒の内に衆生
 無く云云】衆生と
 顛倒との二者の不
 即不離の關係を明
 かす。即ち衆生は
 顛倒を起す能起者
 にして、顛倒は所
 起の妄執なればな
 り。

し惡を人に加へんには、是處有ること無し。菩薩は自ら佛を見たてまつりしより已來、未だ會て心に一の欲想だも起すこと有らず。何に況んや事に従はんや。若し或は事に従はんには、是處有ること無し。爾時、菩薩は是の如きの念を作さく、衆生は長夜に生死の中に在りて、五欲を憶念し、五欲に貪著し、五欲を愛樂して、心常に五欲の境界に流轉し、永く五欲に没して、之を能く出づる莫し。我今應當に是の如きの學を作し、諸の魔王、天女の眷屬、及び一切の衆生をして、無上の戒を立てしめん、淨戒を立て已りて、又教へて不退轉の地、一切種智、成等正覺、乃至無餘涅槃を究竟することを得しむべし。何を以ての故に。此は是れ我が業にして、一切諸佛は、皆是の如く學すればなり。諸の非行、計我の無知を離れ、一切の佛の平等なる深法を觀じて、一切智を得、衆生の爲に法を説きて、顛倒を斷除せしめん。衆生を離れて顛倒有らず、顛倒を離れて衆生有らず、顛倒の内に衆生無く、衆生の内に顛倒無く、顛倒は衆生に非ず、衆生は顛倒に非ず、顛倒は内法に非ず、顛倒は外法に非ず、衆生は内法に非ず、衆生は外法に非ず、一切の諸法は、但是れ虚妄にして、眞實有ること無く、須臾も住せざれば、堅固有ること無し。猶し幻化の如く愚夫を欺誑す。一切法は夢の如く電の如しと悟る。是の如く解る者は、能く生死に達して、菩提を究竟し、未だ度せざる者は度し、未だ脱せざるものは脱せしめ、未だ調伏せざる者は調伏することを得しめ、未だ寂靜ならざる者は寂靜なることを得しめ、未だ安隱ならざるものは安隱なることを得しめ、未だ垢を離れざるものは垢を離るることを得しめ、未

【我當に世間の衆事云云】以下は攝善法戒を明かし、菩薩の三聚淨戒を説き終る。

【佛子、何等をか云云】第三行として無患恨行を明かす。初めに行を標して意を顯はせり。

【擧】十煩惱地の心所たる憍慢より起る染汚の所行なり。名利の爲に慢じ高ぶること。

【大法忍】忍に三あり、一に耐怨害忍、二に安受苦忍、三に諦察法忍(法思勝解忍)是れを以て三毒等の邪惡を對治するが故に大法忍と言ふ。【菩薩は是の如き云云】以下所縁に對して忍行の相を説く。

だ清淨ならざるものは清淨なることを得しめ、未だ快樂ならざるものは快樂を得しめん。我當に世間の衆事を捨離して、諸の如來をして皆悉く歡喜せしめ、一切の佛法を具足し成就し、無上最勝の法の中に安住し、平等に一切の衆生を正觀し、一切の諸法を分別し了知し、諸の惡を遠離して、永く虛妄を捨て、一切の煩惱習氣を除滅して、出要の勝妙なる方便を成就し、悉く無量無邊の船才を得て、甚深にして空寂なる智慧を成就すべし」と。是を菩薩摩訶薩の第二の饒益行と名く。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第三の無患恨行と爲す。此菩薩は常に能く忍辱の法を修習し、謙卑にして恭敬し、和顏にして愛語し、自ら害せず、他を害せず、亦俱に害せず。自ら擧げず、他を擧げず、亦兩ながら擧げず。自ら是とせず、他を是とせず、亦兩ながら是とせず、自ら讚歎せず。但是念を作さく、「我當に常に衆生の爲に法を説きて、一切の惡を離れ、貪患癡、憍慢、亂心、慳嫉、諍鬪を離じ、大法忍を以て之を安立せしむべし」と。

菩薩は是の如きの清淨なる忍法を成就すれば、復し無量無数の衆生有りて、一一の衆生に各無量無數の眷屬有り、一一の衆生に各無量無數の化頭有り、頭に無量阿僧祇の舌有り、舌は無量無數の惡聲を出し、聲は無量無數の惡罵を出し、音辭剛硬にして、菩薩を毀辱し、又此衆生に各無量阿僧祇の手有り、手に無量無數の刀杖を執りて、捶擊し、摧辱して、菩薩を毀害し、乃至無量阿僧祇劫にも未だ曾て休息せざるも、菩薩は此慧毒に遭ふの時、是の如き念を作さく、「我是苦に因りて、若し悲心を生ぜば、則ち自ら調伏せず、

自ら守護せず、自ら明了ならず、自ら寂靜ならず、自ら定を修せず、自ら眞實ならず、自ら其身を愛するなり。何ぞ能く彼をして歡喜の心を生じて、度脱することを得しむべき一と。菩薩は思惟を作さく、身心に囚るが故に、無量劫に於て諸の苦惱を受く。是故に重ねて自ら勸勵し、心をして歡喜せしめ、善く自ら調攝せん。何を以ての故に。我當に無上の法に安住すべきが故に一と。衆生をして亦此法を得しめんと欲して、復更に思惟すらく、「此身は空寂にして、我我所無く、眞實の性無く、空にして二有ること無し。若は苦、若は樂、皆所有無し。諸法は空なるが故に。我當に解了して、廣く人の爲に説くべし。是故に我今苦毒に遭ふと雖も、應當に忍受すべし。衆生を懲傷せんが爲の故に、衆生を饒益せんが故に、衆生を安隱にせんが故に、衆生を攝取せんが故に、衆生を捨てざるが故に、衆生をして不退轉を得、究竟して無上菩提を成就せしめんと欲して、佛の所行の法を、我當に修行すべし」と。是を菩薩摩訶薩の第三の無患恨行と名く。

【佛子云云】第四の無患行を明かし、初めに行を標して意を顯說せり

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第四の無盡行と爲す。此菩薩は精進、勝精進、最勝の精進、第一の精進、大精進、微妙の精進、上精進、無上の精進、無等の精進、無等の精進を勤修す。彼菩薩は貪欲の爲に亂されず、瞋恚、愚癡、憍慢、憍害、慳嫉、憍恨、誹曲、無慚、無愧の惱亂せらるる所と爲らず。菩薩は復是念を作さく、「諸の衆生を憍すを欲せず、乃至一衆生をも憍すを欲せざるが故に、精進を勤修す。但諸の煩惱を捨離せんと欲するが故に、精進を修行し。一切の結を害せんと欲するが故に、精進を修行し。一切の習

【菩薩は是の如き
云云】以下所縁に
對して、行相を辨
ず。

氣を離れんと欲するが故に、精進を修行し。悉く一切の衆生を分別せんと欲するが故に、
精進を修行し。一切衆生の此に死し彼に生るることを知らんと欲するが故に、精進を修行
し。一切衆生の煩惱習を知らんと欲するが故に、精進を修行し。一切衆生の種種の希望を
知らんと欲するが故に、精進を修行し。一切衆生の諸の境界を知らんと欲するが故に、
精進を修行し。一切衆生の諸根を知らんと欲するが故に、精進を修行し。一切衆生の心心
の所行を知らんと欲するが故に、精進を修行し。一切法の境界を知らんと欲するが故に、
精進を修行し。諸佛の實法を知らんと欲するが故に、精進を修行し。諸佛の平等法を知ら
んと欲するが故に、精進を修行し。善方便を以て、三世の平等なることを知らんと欲する
が故に、精進を修行し。清淨なる平等の法を知らんと欲するが故に、精進を修行し。一
切諸佛の法を得んと欲するが故に、精進を修行し。一切の方便門を以て、一切の佛法を知ら
んと欲するが故に、精進を修行し。諸佛は無量無邊にして、不可思議なることを知らんと
欲するが故に、精進を修行し。諸佛の大智慧と、善方便とを知らんと欲するが故に、精進
を修行し。一切の佛法を、廣く衆生の爲に句句分別せんことを知らんと欲するが故に、精
進を修行す」と。菩薩は是の如き精進を成就すれば、若し人有りて言はく、「無量無數の阿僧
祇世界の衆生に、汝能く此一の衆生の爲の故に、無量無數の阿僧祇劫に於て、具さに無
擇の大地獄の苦を受け、彼衆生をして涅槃を究竟せしむるや。復無量無數阿僧祇の佛有り
て、世に興したまひ、無量無數阿僧祇の衆生をして、種種の樂を受けしめんも、汝猶具

さに大地獄の苦を受けて、然る後に汝當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべきや」と。菩薩答へて言はく、「我悉く能く爾所の世界の一一の衆生の爲に、地獄の苦を受けん。諸佛出世したまひて、衆生は樂を受けんも、我亦苦を受けて、然る後に我當に無上道を成ずべし」と。復人有りて言はく、「汝若し能く一毛滴を以て、無量無邊の阿僧祇の諸の大海水をして皆悉く盡さしめ、無量無邊の阿僧祇の世界を末して微塵と爲し、悉く其數を知り、是の如くして念念に次第して、常に菩提の心を廢忘せざるや」菩薩若し是語を聞かん、退かず、悔いず、歡喜踊躍して精進を勤修し、是の如きの念を作さく、「我善利を得たり、我に因るが故に、無量無邊の阿僧祇世界の衆生をして、永く衆苦を離れしめん」と。菩薩は復是念を作さく、「我當に一切衆生に代りて、一切の苦を受け普く衆生をして一切の苦を離れ、悉く皆無餘涅槃を究竟せしむべし、然る後に、我當に無上道を成ぜん」と。是を菩薩摩訶薩の第四の無盡行と名く。

【第五の離癡亂行】
以下第五の離癡亂行を明かし、初めに現法樂受禪を明かせり。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第五の離癡亂行と爲す。此菩薩は第一の正念を成就して、未だ嘗て散亂せず。堅固不壞にして、第一最勝、清淨無量にして、癡妄を捨離し、分別し、正念して、善能く世間出世間の經論、色法非色法の經論、受想行識の經論を受持して、癡亂有ること無く。此に死し彼に生れて、癡亂有ること無く。處胎し出胎して、癡亂有ること無く。菩提心に住して、癡亂有ること無く。善知識に親近して、癡亂有ること無く。諸佛の法を學びて、癡亂有ること無く。諸の魔事を悟りて、癡亂有ること無く。魔事

【不可愛】 忌み憎むべき不快なる對境を言ふ。

を遠離して、癡亂有ること無く、無量劫に於て菩薩の行を修す。菩薩は是の如き等の無量無數の堅固の正念を成就すれば、無量無數の阿僧祇劫に於て、諸佛、菩薩善知識の所に從ひて正法を聞受す。謂ゆる、甚深の法、微妙の法、莊嚴の法、種種莊嚴の法、種種名味句身の法、菩薩を莊嚴する法、諸佛を莊嚴する無上の法、正希望清淨の法、一切世間に染まざるの法、一切世間を分別するの法、廣法、無量の法、癡暗を捨離して世間を分別するの法、共法、不共の法、菩薩智の境界の法、一切智自在の法なり。菩薩此法を聞き已りて、無量無邊の阿僧祇劫に於て、未だ曾て退忘せず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は本無量劫に道行を修せし時、未だ曾て衆生の正念三昧を憫亂せず、正法を斷ぜず、善根を斷ぜず、智慧を斷ぜざるが故に。此菩薩は無量種の聲も憫亂すること能はず。謂ゆる、高次の聲、惱亂の聲、人を恐怖せしむるの聲、微妙の聲、不可愛の聲、六根を散亂せしむるの聲なり。菩薩は是の如き等の無量無數の好惡の諸の聲を聞くも、正念に於て亂れず。三昧も亂れず。境界も亂れず。微妙の法に入るも亂れず。菩薩の行も亂れず。菩提心を修習するも亂れず。念佛三昧も亂れず。眞實の法を觀察するも亂れず。衆生を教化するの智も亂れず。衆生を成就するも亂れず。衆生を清淨の智に安立するも亂れず。甚深の義を觀察するも亂れず。惡業を行ぜざるが故に惡業の障無く、煩惱を行ぜざるが故に煩惱障無く、不恭敬を行ぜざるが故に不恭敬の障無く、謗法を行ぜざるが故に謗法の障無し、是の如き等の無量種の聲、一一の音聲、十力無量無邊の阿僧祇の世界に充滿し、無量無邊の阿僧祇劫

【是菩薩寂靜云云】已下功德を引生する諸聲の功力を明す。

【菩薩は此能く云云】以下は衆生を利益する聲を明かす。

【佛子何等をか云云】已下第六の善現行を明かし、初めに其行相を説けり。

に於て、未だ曾て斷絶せず。悉く能く、衆生の諸根を壞亂し、其をして發狂せしむとも、而も此菩薩の甚深の三昧を亂すこと能はず。菩薩は三昧の中に於て、一切音聲の生住滅の相を思惟し分別し、善く分別して生住滅の性を知り、亦善く諸の聲を聞く者を觀察して、好惡の聲を聞くも心に憎愛無く、正念にして亂れず。彼諸の聲に於て善く其相を取りて、而も染着せず。一切の聲は皆所有無く、眞實の性に非ず、造者有ること無く、亦本際も無く、法性と等しく、差別有ること無しと知る。是菩薩、寂靜なる身口意の行を成就すれば、復退轉せず、諸禪の三昧正受に安住して、一切の法を悟り、智慧成就して、一切の音聲を離れたる三昧を得、阿僧祇の三昧門を以て眷屬と爲し、大悲を長養し、念念の中に於て、能く無量阿僧祇の三昧を得、一切種智を究竟して成就せん。菩薩は、此能く諸根を壞する大惡の音聲を聞き已りて、是の如きの念を作さく、「我當に一切の衆生をして、清淨の正念に安住し、一切智に於て、不退轉を得、無餘涅槃を究竟じて成就せしめん」と。

是を菩薩摩訶薩の第五の離礙亂行と名く。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第六善現行と爲す。此菩薩、寂滅の身口意業を成就して、所有無く示現する所無く、身口意の業に、縛も無く脱も無し。身口意の業に、縛無く脱無ければ、諸の示現する所は、所依無く所住無し。心に隨ひて住し、無量の心性は、一切の法性に等しく、等しく性相無し。無相の相を示現して、甚深にして底無く、如如の性は、聲報を離るるも、善方便もて出生離生ず。不生不滅にして、寂滅の涅槃に等しく、有に

非ざるも有と説き、語言の道斷え、一切の世間を離れ、依住する所無し。菩薩の起す所の善根を長養して、虚妄を離れて無縛無著の法門に入り、眞實の法門に入り、離世間の法門に入りて、一切世間の法を分別す。菩薩は是の如きの念を作さく、一切の衆生は、無性を性と爲し、一切の諸法は、無爲を性と爲し、一切の佛刹は、無相を相と爲し、三世を究竟するに皆悉く無性にして、語言の道斷え、一切の法に於て而も所依無し」と。菩薩は是の如き等の、諸の甚深の法を解り。一切世間は悉く皆寂滅なりと解り。一切諸佛の甚深の妙法を解り。佛法と世間法と等しくして、差別無きことを解り。世間の法は佛法に入り、佛法は世間の法に入り、佛法と世間の法とは而も雜亂せず。世間の法は佛法を壞せず、眞實の法界は破壞すべからず。三世の平等の正法に安住して、亦菩提心を捨てず、衆生を教化する心を捨てず、大慈大悲の心を増長し、悉く一切の衆生を救度せんと欲し、菩薩は是念を作さく、「我衆生を成就せずんば、誰か當に成就すべし。我衆生を調伏せずんば、誰か當に調伏すべし。我衆生を寂靜にせずんば、誰か當に寂靜にすべし。我衆生をして歡喜せしめずんば、誰か當に歡喜せしむべし。我衆生を清淨にせずんば、誰か當に清淨にすべし」と。菩薩は復是念を作さく、「我此甚深の法を解りせしを以て、諸の衆生を見るに大苦惱を受け、危險の徑に趣き、諸の煩惱の纏縛せらるる所と爲り。重病人の常に苦痛を被るが如く、恩愛に繫縛せられて生死の獄に在り、常に地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の處を離れず、永く無量の苦聚を滅すること能はず。三障を離れずして、常に愚癡の暗に處し、

【是菩薩此行云云】善現の益用を明かす。

【佛子何等をか云云】已下第七の初めに自行即ち無著行を修すること

眞實の明を見ずして、無窮に生死を受け、解脱の道を得ず。八難に輪廻し、愚癡に病まされ、諸垢に染せられて、無量の深き煩惱海に没在し、邪見に惑はされて正道を觀ず。と。菩薩は是の如きの觀察を作さく、「衆生若し未だ成熟せざるに、而も捨てて正覺を取らば、是れ應ぜざる所なり。我當に先づ衆生を教化して、無量劫に於て菩薩の行を修し、未だ成熟せざるものは教へて成熟せしめ。未だ調伏せざる者は教へて調伏せしめ。諸の未度の者は教へて得度せしむべし」と。是菩薩、此行に住するの時、諸天、世人、魔王、釋梵、沙門、波羅門、諸天、乾闥婆等、此菩薩を見て歡喜し敬仰す。若し衆生有りて、恭敬し供養し、尊重し禮拜し、乃至見聞せば、皆悉く虚しからず、畢定して阿耨多羅三藐三菩提を究竟せん。是を菩薩摩訶薩の第六善現行と名く。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第七の無著行と爲す。此菩薩は無著の心を以て、念念の中に於て、能く阿僧祇の世界を觀察し、阿僧祇の佛刹を嚴淨す。諸佛の刹に於て心に染著無く、阿僧祇の諸の如來の所に往詣して、禮拜し恭敬し、阿僧祇の華香、塗香、末香、衆寶の華鬘、天衣、雜寶の寶蓋、幢幡、諸の莊嚴具、各阿僧祇を以て、以用ひて供養したてまつり、心に所著無し。阿僧祇の諸の方便もて行じて、而も所行無し。阿僧祇の思は無思法に住し、念念の中に於て無量の諸佛を見たてまつり、諸佛の所に於て心に所著無し。佛の相好に於て、心に所著無し。佛の光明に於て、心に所著無し。諸佛の刹に於て、心に所著無し。佛の説法を聞くも、心に所著無し。十方の世界に於て、心に所著無し。如來

【菩薩摩訶薩は諸佛の國云云】已下は無著行中の勝進行を明かす。

の衆に於て、心に所著無し。菩薩の衆に於て、心に所著無し。法を聞きて歡喜し、心に所著無し。正心増廣し、意を攝して亂れず、菩薩の行を行じて佛法に著せず。此菩薩摩訶薩は、十方の刹の一一の佛の所に於て、無量無邊の阿僧祇劫に、恭敬し、禮拜し、供養して、心に厭足無し。佛を見、法を聞きて心に所著無し。諸の如來の菩薩の大衆を見るも、以て莊嚴と爲して、心に所著無し。不淨の刹を見るも、心に憎惡せず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は、寂滅平等にして諸法を觀するが故に、諸法には垢無く淨無く、暗無く明無く、分別無く不分別無く、虛妄無く眞實無く、安隱無く危險無く、正道無く邪道無ければなり。菩薩は是の如く眞實の法性を觀じて、衆生の性に入り、衆生を教化し、調伏し、成熟し、彼衆生に於て、心に所著無し。諸法を受持して、而も諸法に於て、心に所著無し。菩薩の心を捨てずして、而も佛の所住に住し心に所著無し。種種の語言の道に入りて、語言の道に於て心に所著無し。衆生の道に入りて、衆生の道に於て心に所著無し。諸の三昧正受を分別して、皆悉く能く入りて心に所著無し。無量無邊の不可説の諸佛の國土に往詣し、彼佛國を見て心に所著無し。若は佛國を去るも、心に餘戀無し。菩薩摩訶薩は、諸佛の國に於て貪著の心無きを以て、佛の實教を解り、無上道に於て障礙無く、佛の正教に於て已に安立することを得、菩薩の行を具足し、菩薩の心に安住し、菩薩の寂滅なる解脱を成就し、菩薩の所行を念せず著せず、菩薩の淨道に住して眞實の記を受く。記を受くることを得已りて、是の如きの念を作さく、凡夫は愚癡にして眞諦を知らず、眞諦を見ず、

【摩訶摩】(Mano
maha)摩訶摩末耶
にして、意生身と
謂し、諸佛菩薩等
の意に隨ひて化生
する身を言ふ。又
精血等の縁を假ら
ずして、唯意によ
つて生ずるが故に
此名あり。

暗鈍にして信無く、心眞實ならず、常に染着を行じて生死に流轉し、諸佛を見たてまつら
ず、善知識を離れ、正道を離れ、邪見に迷惑して、調御の師を求めず、十力の王を敬はず、
菩薩の恩を知らず、惡知識に親近し、諸法の空なるを聞きて心大いに恐怖し、正しく思惟
せずして正法を講誦し、正道を喜捨して好んで邪經に従ひ、魔の羅網に入りて諸佛を遠離
し、常に諸有に著して種種の苦を受く」と。爾時、菩薩は、彼衆生の諸の苦を受くるこ
とを見已りて、大悲を増長し、諸の善根を觀じて、心に所著無し。爾時、菩薩、是の如き
の念を作さく、「我當に十方の一一の衆生の爲の故に、無量無邊の阿僧祇劫に住して、衆生
を感熟して心に疲厭することなく、常に共に止住し、捨離して去らんことは毫端の如き
も欲せず。一毫の翳を以て、悉く遍く十方の世界を量度り、一衆生の爲の故に、一一の毫
端の處に於て、各無量無邊の阿僧祇劫に住せん。一衆生の爲の如く、一切の衆生の爲に
も亦復是の如くならん」と。此大悲心を以て念念に次第して、未だ嘗て斷絶せず、而も衆
生に於て心に所著無し。一一の毫端の處に於て、盡く過去未來際の諸の菩薩行を具足し
修習して、身に著せず、法に著せず、念に著せず、願に著せず、三昧に著せず、行に著せ
ず、寂靜に著せず、境界に著せず。衆生を教化し成熟することに著せず、深法界に入
ることに著せず。何を以ての故に、菩薩は是の如く一切の法界は、法の如く、諸佛の法は
電の如く、菩薩の行は夢の如く、聞く處の法は響の如く、一切の世界は化の如く、業報
の起す所は摩訶摩の化身の如くなることを觀察し、一切の衆生は猶し畫像の如く、種種の

【一念の中云云】
已下無著行を成満
することを明かす

【佛子何等をか云
云】已下第八の尊
重行を明かし、初
めに自分行即ち善
重行を修すること
を説く。

異形は皆心に由りて畫かれ、所説の諸法は、皆實際の如しと知ればなり。一念の中に於て
遍く十方に満ちて、菩薩の行を修し、廣大なること法界の如く、究竟なること虚空の如
く、一念の中に於て、悉く諸佛の決定方便を知り、心相の廻轉すること迅速なるを了知し、
而も此心に於て染著する所無し。菩薩は是の如く無我を觀察し、佛の一切の衆生を化度し
たまふを見て、佛法の中に於て無量の喜を得、大慈悲を起して一切を救護し、心に憂惱無
くして、歡喜を得、未だ成熟せざる者は、當に成熟せしむべく、未だ調伏せざるもの
は當に調伏せしむべく、世間を遠離して而も能く一切の世間に隨順せんと願ふ。若し諸方
の國土の衆生の音聲、衆生の詔業、衆生の施設、衆生の和合、衆生の流轉、衆生の諸行、
衆生の境界、衆生の諸地、衆生の興起を聞かば、我當に大願の力に乗じて、普く彼處に至
り、終に弘誓を捨てずして衆生を教化し、乃至一念の染著をも起さざるべし。所以は何ん
所著無きを以ての故に、自ら利し、彼を利して、清淨に満足す。是を菩薩摩訶薩の第七
の無著行と名く。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第八の尊重行と爲す。此菩薩は尊重的善根、不壞の善根、
最勝の善根、不思議の善根、無盡の善根、不退の善根、無比の善根、寂靜の善根、一切
佛法の善根を成就せり。此菩薩は行を修習する時、心常に諸佛の妙法を愛樂し、一向に專
ら無上の菩提を求めて、未だ曾て暫くも菩薩の大願を捨てず、無量劫に於て菩薩の道を行
じ、衆苦を計して憂惱を生ぜず。一切の衆魔も壞すること能はざる所、一切の諸佛は悉

【彼菩薩衆生を云云】已下第八尊重行の勝道の相を明かす。

く共に護念したまひ、常に菩薩の諸の清淨行を行じ、精勤して一切の菩薩の無量の苦行を修習し、未だ曾て懈倦せず、大乘の弘願を退轉せざることを得たり。此菩薩は尊重の菩薩行に安住し已りて、念念の中に於て、能く阿僧祇劫の生死の苦難を轉じて、菩薩の無量の大師を長養す。若し衆生有りて恭敬し供養し、乃至見聞せば、斯等は皆不退轉に住することを得、決定して無上菩提を究竟せん。彼菩薩、衆生を觀察して非有なるを了達し、而も一切を捨てず。譬へば河水の彼岸に至らず、此岸に來らず、中流を斷たずして、能く衆生を彼此の岸に度すは流通を以ての故なるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、生死に趣かず、涅槃に趣かず、亦復生死の中流に住せず、而も能く此岸の群生を濟度して、彼岸の安隱無畏にして、憂惱無き處に到らしむ。衆生數に於て心に所著無く、一衆生を離れて多くの衆生に著せず。多くの衆生を離れて、一衆生に著せず。衆生界を増さず、衆生界を損せず。衆生界を生ぜず、衆生界を滅せず。衆生界を盡さず、衆生界を長ぜず。衆生界を虚うせず、衆生界を二にせず。何を以ての故に。菩薩は深く、衆生界は法界の如く、衆生界と法界と二有ること無く、無二の法の中には、増無く損無く、生無く滅無く、法性は眞實にして來無く去無きを解りて、猶著する所無く、二相を作さざればなり。何を以ての故に。菩薩は一切の法界は二相無しと解るが故に。菩薩は是の如く善方便を以て、深法界を解りて、無相の住に住し、清淨の妙相もて其身を莊嚴し、善能く一切の諸相を分別し、決定究竟じて、彼岸に到り、悉く分別して衆生の數を知り、普く能く身を一切の佛刹に現

【受無く轉無く】
 正法の領受すべき
 無く、邪惡の轉滅
 すべきなしとの
 意。亦轉は轉法輪
 の意に解する解も
 あり。

するも、諸の佛刹に於て心に所著無く、深く佛法に入るも亦所染無く、義味を分別して廣く人の爲に説く。一切の法に於て諸の欲際を離れ、而も菩薩の道を離せず。菩薩の行を捨てず、無盡の功德を行じて清淨の法界に入る。譬へば火珠の火を出すこと、窮盡すべからざるが如く、是の如く菩薩の諸の功德の藏は、窮盡すべからず。衆生を教化することも亦盡すべからず。而も菩薩摩訶薩は、究竟に非ず究竟せざるに非ず。取を離るるに非ず、取を離れざるに非ず。依に非ず、依無きに非ず。世間の法に非ず、佛の法に非ず。凡夫に非ず、得果に非ざるなり。是の如く菩薩は尊重心を成就して、菩薩の行を修習し、聲聞、辟支佛の乘を教へず、佛の法を教へず、世間の法を教へず、衆生を教へず、衆生を壊せず、正道を教へず、正道を壊せず、垢を教へず、淨を教へず。何を以ての故に。菩薩は諸法の垢無く淨無きを解了し、一切法の受無く、轉無く、亦退有ること無きを知ればなり。是寂滅なる甚深の法を行する時に、亦我今此法を行じ、已に此法を行じ、當に此法を行すべしとの念を生ぜず。未だ曾て、陰界入、内世間、外世間、内外の世間、一切の大願、諸の波羅蜜有りとの念を生ぜず。何を以ての故に。一切法の中には聲聞、緣覺、菩薩、佛乘に向ふ無く、亦復諸の凡夫界に向ふ無く、亦復垢淨、生死及び涅槃界に向ふ無ければなり。何を以ての故に。諸法は二無く、不二無きが故なり。譬へば虚空の之を十方に求むるに、差別有ること無けれども、虚空無きに非ざるが如し。菩薩も是の如く、一切の法は、悉く差別無しと觀ずれども、究竟じて等正覺を成ぜざるに非ず。彼最も眞實にして、

【一健】 絲の一筋の事にして、今は利益の極少ななるに喩ふ。

【佛子何等をか云云】 已下第九の善法行を明かす。初めに自分行即ち善法行を修する相を明かせり。

正行に違はず、普く能く菩薩の所行を示現して、無量の大願を捨離せず、衆生を調伏し、大法輪を轉じ、因果を壞せず、寂滅平等の觀法に違はず。此菩薩は悉く三世の諸の如來と等しくして、佛性を斷せず、正法を壞せず、正法を興隆し、辯才盡くること無く、諸法の中に於て心に所著無く、法堂に安住し、深法を分別し、無所畏に住し、佛法を捨てず、世法に違はず、普く世間に現じ、世間に等しくして、心に所著無し。菩薩は是の如く尊重の智慧を成就して、菩薩の行を修し、一切衆生をして、永く世間惡道の諸難を離れ、教化し成就して、三世の諸佛の法の中に安置し、堅固にして動ぜざらしむ。是の如く教へ已りて、復此念を作さく、「一切の衆生は恩義を知らずして、更相殺害し、邪見増盛にして、正道に迷惑し、煩惱充滿して、癡冥に覆はる。設ひ善知識有りて、世間に充滿し、皆悉く明達にして、智慧具足する者あらんも、我此等の爲に菩薩の行を修せず。何を以ての故に。我善惡の人の所に於て、利養を求めず、名譽乃至一縷及び一愛の言にも徇はず、無量劫に於て、菩薩の道を行じて、一念をも生じて自ら已が安きを求めず。但一切の衆生を調伏し、一切の衆生を淨くし、一切の衆生を度せんと欲するのみ。何を以ての故に。一切諸佛の法は、是の如きが故に。利養を求めず、人の惡を計らず、常に應に等心にして菩薩の道を行じ、怨親等しく觀じて、差別無く、究竟じて彼岸に至り、具足して無上の菩提を成就せしめんと欲すればなり」と。是を菩薩摩訶薩の第八の尊重行と名く。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第九の善法行と爲す。此菩薩は諸の天人、沙門、婆羅門、

【此菩薩云云】善
法行に安住して、
此行勝進するの相
を明かす。

乾闥婆等の、一切の衆生の爲に、清涼の法地と作り、正法を守護して、佛種を絶たす。
清淨の陀羅尼を得るが故に、説法に障礙無く、義陀羅尼を得るが故に、辯辯盡すべからず。法陀羅尼を得るが故に、法辯盡すべからず。正語陀羅尼を得るが故に、辯辯盡すべからず。無障礙陀羅尼を得るが故に、義味を説くこと盡すべからず。佛の甘露灌頂の陀羅尼を得るが故に、衆生をして歡喜せしむるの辯盡すべからず。自ら覺悟する陀羅尼を得るが故に、同辯盡すべからず。同辯陀羅尼に入るが故に、種種の義名味句身を説きて盡すべからず。正語陀羅尼を得るが故に、無量の辯盡すべからず。無量讀數の陀羅尼を得るが故に、三千大千世界に於て身を變ずること佛の如く、妙音具足して一切の法に於て障礙する所無く、而も佛事を作して、應化する所に隨ひ、解する所の音に隨ひ、衆生の根に隨ひ、廣長舌の清淨の音聲を以て、時に隨ひて法を説き、大悲に違はず。其所應に隨ひて、一一の言に於て無量の音を出し、皆歡喜せしむ。設ひ衆生有りて、悉く無量にして語るべからざる阿僧祇の諸の語言の法を知り、無量の業を知り、無量の報を知り、是の如き等の無量無數阿僧祇の衆生、無量無邊の阿僧祇の世界に充滿して、菩薩の與に眷屬と爲らんも、菩薩は此會の中に處して、一法言を出し、悉く此等の衆生をして皆開解を得しむ。是の如き等の無量無邊の阿僧祇の諸の大衆有りて、菩薩の與に眷屬と爲らんも、亦復是の如くならん。爾時、菩薩、復是念を作さく、「設ひ一毛端の處に一念の中に於て、無量無邊の阿僧祇の大衆の來會する有り。是の如く念念に次第して、過去未來の一切の諸劫を盡す

とも、大衆の來會は猶甚盛さざらん」と。彼諸の大家の言聲、同じからず、聞ふ所各異ならんも、菩薩は是の如き等の一切の問難を聞きて、心に畏るる所無く、而も是念を作さく、「設ひ一切の衆生をして、悉く來り問難せしむとも、猶一言を以て其疑網を決し、皆歡喜せしめん」と。菩薩の說法は言虛妄ならず。一一の言に於て、無量無邊の智慧莊嚴有り、無邊の諸の功德の藏を成就して、慧光普く一切の諸法を照し、一切種智を具足し成就せり。此菩薩は善法行に安住しじりて、能く自ら清淨となり、亦能く一切の衆生を饒益す。此三千大千世界の如き乃至無量無邊の、稱り數ふべからざる諸の世界の中にも、自ら其身を化して、眞金色と爲り、妙音具足して、一切の法に於て、障礙する所無く、而も佛事を作し、無量無邊の清淨の法門を以て衆生を化度す。佛子、此菩薩摩訶薩に十種の身有り。無量無邊の法界に入る身、一切の世間を除滅するが故に。未來身、一切趣に生るるが故に。不生身、深く不生の平等法を樂ふが故に。不滅身、一切の諸法は言辭絶えたるが故に。不實身、如眞實の故に。癡妄を離れたる身、應に隨ひて化するが故に。來去無き身、眞に死し彼に生るることを離るるが故に。不壞の身、法界の性は壞すること無きが故に。一相の身、三世は語言の道斷えたるが故に。無相の身、善く諸の法相を分別するが故に。菩薩摩訶薩は、是の如き十種の身を成就すれば、能く一切衆生の爲に舍と作る、善根を長養するが故に。一切衆生の救護と爲る、大無畏を與ふるが故に。一切衆生の歸依と爲る、大安穩に住せしむるが故に。一切衆生の尊導と爲る、無上道の門を開示する

【趣趣】六道を趣と言ふを常とすれど、今は菩薩、聲聞、緣覺の三乘を加へて九趣を意味す。

が故に。一切衆生の師と爲る、方便もて眞實の法に入らしむるが故に。一切衆生の燈と爲る、業報を見しむるが故に。一切衆生の明と爲る、甚深の法を得しむるが故に。一切衆生の炬と爲る、愚癡を離れ眞法を解らしむるが故に。一切衆生の光と爲る、明地を得しむるが故に。一切衆生の趣趣の燈と爲る、如來の自在力を顯現するが故に。甚を菩薩摩訶薩の第九の善法行と名く。此菩薩摩訶薩は、善法行に安住し已りて、一切衆生の爲に、清涼の法池と作る。佛の甚深なる諸法の底を得るが故に。

【佛子何等をか云】第十の眞實行を明かし、初めに本誓の語言を擧ぐ

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第十の眞實行と爲す。此菩薩は、第一藏諦の語を成就して、説の如く能く行じ、行の如く能く説く。此菩薩は三世の諸佛の眞實行を學び、三世の諸佛の位に入り、三世の諸佛の善根と爲し。其菩薩は是の如き等の一切の善根を成就して、三世の諸佛の無二の語を學び、如來の一切の智慧に隨順す。此菩薩は衆生の是處非處の智、衆生の去來現在の一切の業報の智、衆生の諸根の具足不具足の智、衆生の種種の性の智、衆生の種種の欲の智、衆生一切至處道の智、一切の禪定解脱三昧正受、垢淨起、時非時轉の智、過去の一切世界の成壞の智、無障礙の天眼智、清淨智を成就して、而も一切の菩薩の所行を捨てず。何を以ての故に。一切の衆生をして、調伏し清淨ならしめんと欲するが故に。菩薩は復是念を作さく我衆生の、無量の苦を受くるを見て、若し未だ此等を度せざるに、先づ正覺を成ぜんは、是應せざる所なり。我當に大願を満足して、然る後に成佛し、一切の衆生をして、菩提を志求し、無餘涅槃を究竟せしむべし。何を以て

【此菩薩摩訶薩云云】已下は、本誓の言に依つて本行圓滿し、徳の立つことを明かせり。

の故に、衆生衆に請うて、菩提心を發し、菩薩の行を行ぜしむるに非ず。我自ら發心して、普く衆生の爲に、究竟して一切種智を得しめんと欲すればなり。是故に我は一切に於て、最も殊勝と爲す、衆生に普せざるが故に。我は一切に於て最上爲ることを得、衆生を調御するが故に。我は一切の闇を離る、無衆生際を解るが故に。我は應に得べき所を得たり、本願具足するが故に。我は善く變化す、菩薩の功徳もて莊嚴するが故に。我は善有らば攝取す、三世の諸佛に護念せらるるが故に。此菩薩摩訶薩は、本願を捨てざるが故に、無上の智慧莊嚴に入ることを得。一切衆生の所應に隨ひて、悉く普く化度し。具本願に隨ひて、悉く満足し已れり。一切法の自在の智慧を得、一切の衆生をして皆清淨なることを得しむ。念念の中に於て、悉く能く遍く十方の世界に遊び、念念の中に於て、悉く能く無量の佛國に往詣し、念念の中に於て、悉く無量無數の諸佛、及び莊嚴の國を見て、如來の自在神力を承現し、法界を究竟して虚空界に等しく、其身は無量にして應に隨ひて、悉く現じ、無量無礙にして、所依無し。自身の中に於て、普く初の一切の衆生と、一切の諸法とを現じ、三世の諸佛、皆悉く顯現す。此菩薩は衆生の種種の想、種種の欲、業報の清淨なることを知り、其所應に隨ひて、爲に其身を現じて之を調伏す。一切の法は女の如く、化の如く、電の如く。衆生は夢の如しと解る。此菩薩の義身、味身は窮盡すべからず、清淨の正念は決定して一切の諸法を了知し、諸の三昧と、無上の智慧とに入りて、寂靜に不二の地を觀察するに、一切の衆生は皆二法に依るなり。菩薩摩訶薩は大

悲心に住して、是の如きの諸の深妙の法を修習して寂靜究竟せり。佛の十力を得て、因陀羅網の法界の自在に入り、如來の無礙の解脫を成就すれば、人中の雄猛となりて、大師子吼し、無所畏を得て、法輪を轉ずる王と爲り、能く無礙清淨の法輪を轉じ、智慧解脫を成就して、一切世間の所行を了知し、生死を絶ち、流を廻して智慧の大海に入り、悉く能く一切の衆生を饒益し、三世の諸佛の正法を護持し、諸佛の方便の大海を窮盡す。是を菩薩摩訶薩の第十の眞實行と名く。此菩薩、眞實行に安住し已りて、能く一切の天人八部、無量の衆生をして清淨に歡喜せしむ。」

大方廣佛華嚴經 卷第十二

東晉天竺三藏佛眼跋陀羅譯

功德華聚菩薩十行品第十七之二

【爾時佛の神力云云】已下は菩薩の十行を説き已りて其利益の甚大なるを歎めるなり。

爾時、佛の神力の故に、十方の世界、六種に震動せり。如來の威神は法として應に是の如くなるべし、天の香雲を雨らし、天の末香雲を雨らし、天の霧雲を雨らし、天の衣雲を雨らし、天の寶雲を雨らし、天の莊嚴雲を雨らし、又雨らして自然に天の伎樂の音を出せり。天の妙明は、普く一切を照して、諸天の微妙の音を演出せり。此間天下の寶摩訶天宮に、十行の法を説きしが如く、佛の神力の故に、十方の世界も亦復たの如し。

爾時、十方各十萬の佛刹塵數の世界を過ぎて、十萬の佛刹塵數の菩薩有り、十方に充滿して此土に來説せり。到り已りて功德林菩薩に對けて言はく、善哉、佛子。乃ち能く諸の菩薩の行を演説せり。我等諸の來りし菩薩は、皆同一の字にして功德林と名く。我等の世界は、皆功德幢と名け、佛は同じく普功德と號けたてまつる。我等の佛の所にも、亦十行を説き、名味句身、次第義味、衆會眷屬も亦復たの如くして、不增不減なり。是故

【敬心に十力の尊
云云】已下の頌は
前説を重ねて頌説
せるなり。初五頌
は佛の功徳を歎じ
て頌求せしむるこ
とを頌し、次六頌
は行業の不可思議
なることを頌す。
以下初六偈を以て
就て初六偈を以て
歡喜行、次五偈に
饒益行、次四偈に
無意行、次二偈に
無盡行、次二偈に
偈に善現行、次四

に、佛子、我等は佛の神力を承け、此土に來詣し、汝が爲に證を作す。此四天下の夜摩天宮の寶莊嚴殿に十行の法を説き、我來りて證を爲すが如く、十方の世界も亦復是の如し。爾時、功德林菩薩、佛の神力を承け、普く十方一切の法界、及び諸の眷屬を觀じ、佛種をして永く斷絶せざらしめんと欲し、菩薩の種性を清淨ならしめんと欲し、菩薩の願種を奪せざらしめんと欲し、行種を斷ぜざらしめんと欲し、三世の佛種を擧取せしめんと欲し、分別して衆生の善根種を説かんと欲し、一切の衆生の時と根と、欲樂と垢淨の心の所行の種とを觀察せんと欲し、普く一切の諸佛菩薩の種を照さんと欲して、偈を以て頌して曰く、

敬心に十力の尊を頂禮したてまつる、清淨なる離垢の慧は無礙に境界は深遠にして等倫無く、其道は清淨なること虚空の如し人中の最勝は障礙無く、功徳は無量にして畏るる所無く智慧は無二にして無等等に、一切の所行は皆清淨なり十方現在の諸の導師は、眞實の義を解りて畏るる所無く無等の功徳は諸の惡を離る、彼速かに無上道を究竟す一切の如來は人中の雄なり、先に已に具さに大慈悲を發して心を清淨の法界の中に遊ばし、行する所は諸の群生を饒益す十方三世に與等無く、自然に正覺して癡冥を滅す

偈に無著行、次八
偈に尊重行、次三
偈に善法行、次四
十六偈に眞實行、
最後の四偈を以て
結歎し勝益を顯頌
す。

一切の佛法は、悉く平等なり、彼の功德は壞すべからず
十方一切の世界の中に、悉く諸の如來を親見したてまつることを得
諸の如來に於て虚妄無ければ、彼人の所行は退轉せず
若し清淨なる眞の法界の、甚深微妙の第一義を見ば
一切の癡妄も能く惑はずこと莫く、彼行は能く功德の藏を成ぜん
方便もて善く衆生の類を知り、眞實の妙法界に入り
自然に覺悟して他に由らざれば、彼人の所行は虚空の如し
無量無邊の諸の世界を、觀察するに究竟じて悉く寂滅なり
一切の諸法は障礙無く、彼人の所行は牟尼に勝る
具足し堅固にして轉すべからず、尊重なる最勝の法を成就せば
清淨の願滿ちて彼岸に到らん、諦かに菩薩の諸の所行を聽け
無量無邊の一切の地は、智慧明達にして障礙無く
甚深微妙を境界と爲す、是を無畏論師の行と名く
句句廣く分別して、深く妙智慧に入り
眞實に諸法を解れば、彼大牟尼を修するなり
一切の惡を遠離して、常に能く衆生を利すれば
彼人の功德の藏は、諸の調御師に等し

普く諸の群生に於て、常に施すに無畏を以てし
清淨にして染著無ければ、行ずる所倫比無し
意淨くして所著無く、寂靜にして口の過なく
妙功德を具足すれば、彼最勝の行を修するなり
究竟して深義に度り、功德定りて盡くること無ければ
彼不死の行を修し、諸佛常に護念したまふ
我と瞋恚の心とを離れ、妙音十方に滿ち
正法の教に安住すれば、所行喻ふべき無し
布施彼岸に到り、百福もて自ら莊嚴すれば
彼慧は最も第一にして、能く衆をして歡喜せしむ
善く深智の地に入り、安住して心動ぜざれば
彼行は金剛の如く、堅固にして沮むべからず
悉く諸の法界に入り、隨順して彼岸に到り
究竟して自在を得るは、法日の所行なり
無等等の牟尼は、不二の法を修習して
心常に寂靜を樂ひ、智慧障礙無し
細微の世界の中に、大なる世界を容受して

境界了ぜざる事無きは、智慧山王の行にして

普く諸の世間に於て、心淨くして所著無く

戒を持ちて彼岸に到るは、淨行の所行なり

智慧量るべからず、虚空法界に等しく、

深く具足の智に入るは、是れ勝れたる金剛の行なり

智慧悉く、三世の諸の法界に充滿して

心常に憍意無ければ、最勝の境に入らん

一切所至の道に、十力の法を分別して

身行に障礙無きは、勝智の所行なり

一切十方界の、無量の衆生の類を

菩薩の悉く救護するは、離癡の所行なり

諸佛の法を修習し、精勤にして懈怠無く

普く世間をして淨からしむるは、大龍の所行なり

悉く衆生の根を知り、種種の欲を究竟して

無量の性に了達するは、平等の所行なり

普く十方界に於て、久しく無量の苦を受け

其心に憂惱無きは、歡喜の所行なり

諸の光明網を放ちて、普く諸の世間を照し。

智慧の明を具足するは、善く慧を修するもの所行なり。

皆悉く能く、十方の無量界を震動して。

常に能く一切を利して、恐怖を生ぜしめず。

善く諸言の法を解り、分別して彼岸に到り。

離垢の智慧明かなるは、不動の所行なり。

善く俯仰の國を解り、分別して彼岸に到り。

無盡地を成就するは、最勝慧の所行なり。

無量の諸の功德を、常に行じて菩提を求め。

彼功德の岸に到るは、大稱の無盡の行なり。

無上の大論師、最勝の師子吼もて。

衆をして悉く清淨ならしむるは、離垢の所行なり。

佛の甘露の灌頂は、授くるに法王の記を以てし。

方便の法を究竟するは、大心の所行なり。

一切の衆を分別して、其心に染著無く。

決定して法藏を壽するは、法王の所行なり。

一一の語言の中に、能く無量の音を出し。

衆生各各解するは、無礙慧の所行なり

語言の法を究竟し、分別して悉く了知し

諸の虚妄を遠離するは、眞實見の所行なり

法海印に安住して、善く一切の法を印し

法に實相無きことを了るは、方便身の所行なり

能く一一の利に於て、無量無數の劫に

諸劫を窮盡して行じ、其心に憂厭無く

無數の諸の如來は、名號各同じからず

之を一毛孔に見るは、善修の所行なり

一毛端の處に、普く無量の佛を見るが如く

一切の諸の世界に、佛を見たてまつることも亦是の如し

無量無數の劫を、能く一念の頃と作し

長に非ず亦短に非ざるは、解脫人の所行なり

見る者悉く虚しからず、修する所皆眞實にして

業行を壞すべからざるは、最勝の所行なり

無量無數の劫に、佛を觀たてまつりて厭き足ること無く

能く衆をして歡喜せしむるは、無礙慧の所行なり

無量無數の劫に、衆生界を觀察して
衆生も衆生に非ざるは、堅固士の所行なり
智慧の藏を具足し、清涼の功德池となりて
一切の衆を饒益するは、第一人の所行なり
法界は邊際無く、無量なること虚空の如く
語言に所著無きは、無畏論師の行なり
一の三昧の中に於り、無量の三昧に入り
彼無上の堂に升るは、淨月論師の行なり
忍の彼岸を究竟して、寂滅の法を堪忍し
瞋恚の心を遠離するは、無量智の所行なり
一の世界を離れず、一の坐處を起たずして
普く十方の刹に現するは、無量身の所行なり
無量の諸佛の刹は、能く一世界に入りて
佛刹増減せざるは、不思議の所行なり
處と非處とを分別して、審諦に諸力に入り
無上の力成就するは、第一力の所行なり
去來現在世の、一切諸の業報に

智慧退轉せざるは、明智の所行なり

善く時と非時とを知りて、一切の衆を調伏し

教化時を失はざるは、善知時の所行なり

身行悉く皆善に、口意の行も亦然なり

一切に所著無きは、淨智意の所行なり

智慧善く分別して、法辯窮盡すること無く

境界如實に等しきは、如來の所行なり

無礙の功德の藏と、喜樂の總持門ともて

深く諸の法界に入るは、隨入の所行なり

悉く三世の佛と、等心にして異想無く

一相にして差別無きは、無量の境界の行なり

深く智慧の海に入り、喟の癡闇を塗滅して

能く清淨眼を與ふるは、淨眼の所行なり

一切の諸の導師は、常に不二の法を行じ

神通の力自在なるは、具足行の所行なり

十方の淨刹の中に、普く妙法の雨を降らし

衆をして實義を解らしむるは、法雲の所行なり

普く諸佛の所に於て、堅固の信を逮得して
一切の智解脱せば、所學悉く究竟す
彼一念の中に於て、悉く衆生の心を知り
究竟じて心性を解るは、無性性の所行なり
不思議の世界に、無量の身を變化して
無等に遍く遊行するは、諸行の中に比無し
無量の世界の中の、現在の諸の如來と
菩薩摩訶薩とは、常に彼佛の前に現す
菩薩は三昧に入りて、衆生は一身なるを見
菩薩は三昧を出で、衆は無量身なるを見る
所行甚た深妙にして、未だ曾て口の過有らず
悅樂の心無量にして、衆をして悉く歡喜せしむ
無著の智を逮得し、分別して諸根を知り
其心に所染無きは、無上の調伏の行なり
方便もて法を分別し、法に於て自在を得
一切の世界の中に、常に諸の佛事を作す
菩薩の微妙の行は、所行虛空の如く

何人か此を聞くことを得て、其心欣悅せざる
彼智は與等無く、慧眼一切を見
方便偷匹無きは、無等智の所行なり
無盡の妙功德は、能く一切の惡を滅して
彼清淨の岸に到るは、無比の所行なり
莊嚴の法を成就して、不退轉に安住し
無量の衆を度脱して、而も衆生の想無きは
所修無諍の行なり、一切の智微妙にして
正法もて衆生を化するは、淨眼の所行なり
一切の佛を恭敬したてまつりて、究竟の慧を具足し
無所畏を成就するは、方便智の所行なり
普く能く一切の、世界と及び諸法とに入り
亦群生の類に入りて、無量の衆を度脱し
過く十方界に於て、無上の法鼓を撃ち
常に無量の法を施すは、不死の所行なり
一身跏趺して坐して、無量の刹に充滿し
衆生迫達せざるは、清淨なる法身の力なり

一味一義の中に、無量の義を分別し

演説して窮盡すること無きは、無邊慧の所行なり

佛の解脫を修習して、智慧障礙無く

無所畏を成就するは、無量の方便の徳なり

諸の世界海と、一切の佛刹海と

法海智慧海とを了りて、衆生海を度脱す

或は菩薩の、入胎と及び出生とを見る有り

或は正覺を成ずることを見るは、無量の功徳行なり

處處の佛刹の中に、般涅槃を示現するも

眞實には涅槃無く、無畏の師は常住なり

金剛の身には異り無く、應に隨ひて衆生に現するも

眞實に差別無きは、一身行の所行なり

平等の法界は一にして、無量の義を具足し

常に三世の、一相無相の法を樂觀して

彼諸持の岸に到り、正法もて衆生を安んじ

諸佛の持を逮得するは、最勝の所行なり

無染の妙法身には、慧の眼、清淨の耳あり

是れ悉く障礙無きは、無礙の所行なり

諸の神通を究竟じて、深智慧を具足し

智慧最も殊勝なるは、方便智の所行なり

心定まりて未だ曾て亂れず、智慧量るべからず

境界照さざる無きは、一切見の所行なり

彼功德の岸に到りて、無量の衆を度脱し

其心に疲厭無きは、常修の所行なり

一切知見の人は、諸佛の家に在りて生れ

普く三世の佛の、法の中に於て化生す

語言の法成就して、諸の論師を摧伏し

無量の行を究竟し、佛の菩提に隨入す

能く一の光明を放ちて、普く無量の刹を照し

世間の大明曜は、一切の暗を除滅す

其應に見るべき所に隨ひ、爲に如來の身を現じて

群生の類を調伏し、一切の刹を嚴淨す

菩薩の行は無量にして、一切能く知ること莫し

一切の行を示現して、衆生を度せんと欲するが故に

無量にして數ふべからざる、衆生の法界に等しきありて
 無數の劫に讚歎すとも、菩薩の徳を盡すこと無し
 菩薩の徳は無量にして、一切の徳を究竟す
 諸佛は無量の劫に、此徳を教したまふも盡すこと無し
 何に況んや世間の人、聲聞及び緣覺にして
 無量劫に讚歎すとも、而も能く窮盡することを得ん

菩薩十無盡藏品第十八

【菩薩十無盡藏品】
 第四會の第四品に
 して、菩薩の十藏
 無盡の行相を明か
 し十種の行相は始
 末を該攝して、普
 賢法界の行徳を具
 足することを明か
 す。即ち是れ當十
 行位所成の勝進の
 功徳なり。
 【佛子菩薩摩訶薩
 云云】已下菩薩の
 十藏の名目を擧げ
 第一の信藏より逐
 次その行相を明か
 す。

爾時、功德林菩薩摩訶薩、復諸の菩薩に告げて言はく、佛子、菩薩摩訶薩は十種の藏
 有り、三世諸佛の演説したまふ所なり。何等をか十と爲す。信藏、戒藏、慍藏、愧藏、聞
 藏、施藏、慧藏、正念藏、持藏、辯藏、是を十と爲す。
 何等をか菩薩の信藏と爲す。此菩薩は、一切の法は空にして眞實無しと信じ、一切の法
 は無相なりと信じ、一切の法は無願なりと信じ、一切の法は作者無しと信じ、一切の法は
 不實なりと信じ、一切の法は堅固無しと信じ、一切の法は無量なりと信じ、一切の法は無
 上なりと信じ、一切の法は度るべからずと信じ、一切の法は不生なりと信ず。若し菩薩、
 是の如きの隨順せる淨信を成就せば、諸佛の法の不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず。

一切の佛の不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず、衆生の不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず、法界の不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず、虚空界の不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず、涅槃界の不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず、過去世の不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず、未來世の不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず、現在世の不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず。一切の劫に入ることの不可思議なるを聞くも、心に驚怖せず。何を以ての故に。菩薩は諸佛の所に於て、一向に信ずること堅くして、沮壞すべからざればなり。佛は是の如く佛の無盡無邊の智を知りたまへり。十方一切の世界の、一の世界の中の三世の無量無数の諸佛、世に出興したまひ、佛事を施行して、般涅槃したまふ。彼諸佛の智慧は増さず減らず、生ぜず滅せず、盡さず去らず、近からず遠からず、智ならず、亂ならざるなり。菩薩は是の如き等の無邊無盡の信藏を成就すれば、則ち能く如來の乘に乗ず。此菩薩は是の如き等の無量無邊の信、不退轉の信、不亂の信、不壞の信、不著の信、有根の信、聖人に隨順する信、如來家性の信を成就すれば、則ち能く一切の佛法を護持し、一切の菩薩の善根を長養し、一切の如來の善根に隨順し、一切の佛の善方便よし生ず。是を菩薩摩訶薩の無盡の信藏と名く。菩薩は此信藏に住すれば、悉く能く諸の如來の法を聞持し、廣く一切の衆生の爲に演說す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の戒藏と爲す。此菩薩は饒益戒、不受戒、無著戒、安住戒、不誑戒、不憍害戒、不輕蔑戒、離邪命戒、離惡戒、清淨戒を成就す。何等をか無益戒と爲

【五無間の罪】無
 間地獄に墮つべき
 業因たる五逆罪を
 言ふ。即ち父を殺
 し母を殺し、阿羅
 漢を殺し、和合僧
 (教團)を破り、
 佛身より血を出す
 の五罪を言ふ。

す。此菩薩は先づ當に衆生を饒益し安樂にすべし。何等をか不受戒と爲す。此菩薩は外道の戒を受けずして、三世の諸佛の平等なる淨戒を具足し奉持す。何等をか無著戒と爲す。此菩薩は、欲界の戒に著せず、色界の戒に著せず、無色界の戒に著せず。何を以ての故に。彼に廻向せざるが故に。何等をか安住戒と爲す。此菩薩は、清淨にして疑悔無き戒を成就す。何を以ての故に。菩薩は五無間の罪を作らず、永く故らに一切の戒を犯さざるが故に。何等をか不淨戒と爲す。此菩薩は先制を非とせず、更に造立せず、心常に隨順して涅槃戒に向ひ、皆具足して持ち、毀犯する所無く、此戒に由りて衆生を惱亂し共に相違淨せず。菩薩の戒を持つは、但衆生を饒益し、歡喜せしめんが故に。何等をか不惱害戒と爲す。此菩薩は持戒に因りて諸の呪術藥草を學び、衆生を惱害せず。何を以ての故に。菩薩は衆生を救護せんと欲するが故に、清淨の戒を持てばなり。何等をか不難戒と爲す。此菩薩は斷常の見を離れ、雜戒を持たず。但十二緣起を觀察して、清淨の戒を持つ。何等をか離邪命戒と爲す。此菩薩は淨戒を持つとの相を作して、他をして知らしめんと欲し、内に實德無くして實德の相を現せず。但淨戒を持ちて、一向に法を求め薩婆者を究竟せんのみ。何等をか不惡戒と爲す。此菩薩は自ら貢高して我戒を持つと言はず。戒を犯す人を見るも、輕賤し訶罵して、其をして堪憚せしめず。但其心を一にして清淨の戒を持つのみ。何等をか清淨戒と爲す。此菩薩は殺、盜、邪淫、妄語、惡口、鬻言、兩舌、雜語、貪恚、邪見を捨離して、具さに十善を持つ。此菩薩は是の如き等の清淨の戒を持

つ時、是念を作さく、「若し衆生有りて淨戒を犯さん者は、斯れ顛倒諸の煩惱に由るが故なり。一切の諸佛は悉く分別して、是一切の衆生は、諸の顛倒に因りて、淨戒を毀犯すと知りたまふ。是故に、我當に專ら佛道を求めて、無上菩提を究竟し、廣く衆生の爲に眞實の法を説き、顛倒を離れ、淨く禁戒を持たしめ、悉く無上の菩提を究竟せしむべし」と。是を菩薩摩訶薩の第二の無盡の戒藏と爲す。

【六親】在家出家
 兩様あり、在家に
 ては父母、妻子、
 兄弟を六親と呼ぶ
 も、出家は父母、
 兄弟、姉妹と數へ
 妻子を入れず。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の慚藏と爲す。此菩薩は自ら宿命を修ふに、無數世より以來、六親の所に於て無慚の行を行ぜり。或は憍慢して禮無く、或は婬亂にして節無く、忍害して親み無く、師を興して相代ち、迷惑顛倒して、惡として造らざること無し、斯れ三毒、邪疑、使纏、虛偽、詭曲、諸の不善に由るが故に。一切の衆生も亦復是の如く、皆悉く諸の無慚の行を積習せり。斯れ無智乃至詭曲に由るが故に。尊卑序を失ひて、相敬順せず、謙下して明哲を違奉すること能はず、常に毒念を懷き、怨結滋甚たく更に相屠害し、曾て恥ぢ懼ること無し。自ら我が身及び餘の衆生を惟ふに、去來現在に無慚の法を行ぜり、三世の諸佛知見したまはざること無し。我當に云何が猶無慚を行すべき、甚だ不可なりと爲す。是故に、我應に慚の法を修習して、菩提を究竟し、廣く衆生の爲に眞實の法を説き、其をして永く諸の無慚の法を離れ、菩提を成就せしむべし。是を菩薩摩訶薩の第三の無盡の慚藏と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の愧藏と爲す。此菩薩は自ら愧づらく、「昔より來、色聲香

味觸法、妻子眷屬、錢財寶物、僮僕車乘を食り求めて、心に厭き足ること無し。我は應に是諸の非法の事を行すべからず。是に因りて、貪患愚癡、乃至諸曲、諸の惡法を以ての故念を作さく、衆生の行する所の、無愧の法は、皆無智、乃至諸曲、諸の惡法を以ての故に、相承順し尊敬し供養せず、常に毒心を懷きて、迭に相殘害す。我及び衆生は、去來現在に、愛樂し貪求して、是法を習行せり。是法に因るが故に、生死に受胎して、無量の諸苦あり、三世の諸佛は、皆悉く知見したまふ。我猶は無愧の法を行ぜば、三世の諸佛は皆歡喜したまはざらん。我當に愧法を修習して、菩提を究竟し、廣く衆生の爲に、是の如きの法を説きて、無愧を離れ、佛道を成就せしむべし」と。是を菩薩摩訶薩の第四の無盡の愧藏と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の多聞藏と爲す。此菩薩、多聞なりとは、謂ゆる、是事有るが故に是事有り。是事無きが故に是事無し。是事起るが故に是事起り。是事滅するが故に是事滅す。是れ世間の法、是れ出世間の法、是れ有爲の法、是れ無爲の法、是れ有記の法、是れ無記の法なりと知るなり。何等をか是事有るが故に是事有りと爲す、謂ゆる、無明有るが故に行有り。何等をか是事無きが故に是事無しと爲す、謂ゆる、識無きが故に名色無し。何等をか是事起るが故に是事起ると爲す、謂ゆる、愛起るが故に苦起る。何等をか是事滅するが故に是事滅すと爲す、謂ゆる、有滅するが故に生死滅す。何等をか世間の法と爲す、謂ゆる、色受想行識なり。何等をか出世間の法と爲す、謂ゆる、戒身、定身、慧身、

【數緣滅】數は慧の心所にして、慧は揮力なり。この慧の揮力を以て諸惑を斷滅したる處に顯はるる空寂の滅理を云ふ。【非無緣滅】非無緣滅とは非擇滅無爲のことにして、即ち慧の揮力を以て得たる眞理にあらざる無爲なり。緣闕けて再び生ぜざる處に顯はるる滅理及び、本來性とて清淨なる眞如を言ふ。【有記】三性の無記の記別又は異録の記にして、果を感招する力用ある善惡の法を言ひ、今以て善性の記たり。然し一是れ有爲、是れ無爲の法に對して善惡法を言ふなり。

解脫身、解脫智見身なり。何等をか有爲の法と爲す、謂ゆる、欲界、色界、無色界、衆生界なり。何等をか無爲の法と爲す、謂ゆる、虚空、涅槃數緣滅、非數緣滅、十二緣起、及び法界なり。何等をか有記の法と爲す、謂ゆる、四眞諦、四沙門果、四辯、四無所畏、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八聖道分なり。何等をか無記の法と爲す。謂ゆる、世間は有邊なり、世間は無邊なり、世間は有邊無邊なり、世間は有邊に非ず無邊に非ず、世間は有常なり、世間は無常なり、世間は有常無常なり、世間は有常に非ず無常に非ず。如來の滅後は、去るが如くなるも受けず。如來の滅後は去るが如くならざるも亦受けず。如來の滅後は去るが如く去るが如くならざるも亦受けず。如來の滅後は去るが如きに非ず去るが如きに非ざるも亦受けず。我有り衆生有り。我無く衆生無く、我有り我無く、衆生有り衆生無く、有我に非ず無我に非ず、衆生有るに非ず衆生無きに非ず。過去に幾くの如來滅度したまひ、幾くの聲聞、緣覺滅度したる有りや。未來に幾くの如來、幾くの聲聞緣覺、幾くの衆生の生るること有らんや。現在に幾くの佛、幾くの聲聞緣覺有るや。何等の如來か最初に出世したまひしや。何等の聲聞緣覺か最初に出世したるや。何等の衆生か最初に生れしや。何等の如來か最後に出世したまはん。何等の聲聞緣覺か最後に出世せん。何等の衆生か最後に生れん。何等の諸法か最初に在りしや。何等の諸法か最も後に在らん。世間は何の處よりか來り、去るに何の所にか至る。幾くの世界の成ずること有るや。幾くの世界の敗ること有るや。世界は何の所よりか來り、去るに何の所に

【四眞諦】 苦集滅
 道の四聖諦を言ふ
 【四無所畏】 四無
 畏のこと前註の如
 無記の法 無記
 法は非善非惡の中
 間性の法にして、
 因果の感招力なき
 に依り、今は之を
 喩として、虛妄の
 推度、非理の難問
 等に答ふるの要な
 きを指せり。

か至る。何等をか生死の最初の際と爲す。何等をか生死の最後の際と爲す。是を無記の法と名く。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、「衆生は長夜に生死に流轉して、童蒙の凡夫は道を修することを知らず。我當に晝夜に精勤に學問して、一切の諸佛の法藏を受持し、究竟じて無上菩提を成就し、廣く衆生の爲に、眞實の法を説きて、普く一切をして無上道に成ぜしむべし」と。是を菩薩摩訶薩の第五の無盡の多聞藏と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の施藏と爲す。此菩薩は十種の施を修行す。謂ゆる修習施法、最後難の施法、内施法、外施法、内外施法、一切施法、過去施法、未來施法、現在施法、究竟施法なり。何等をか菩薩の修習施法と爲す。此菩薩は本より以來、平等の施を習し、珍饈美味をも自ら食著せずして一切に恵み施す。其餘の諸の物も亦復是の如し。施しし所の餘は然る後に自ら食して、是念言を作さく、「我が身中の八萬戶の蟲の爲の故に、我が身安樂なれば彼も亦安樂なり。我が身飢に苦めば彼も亦飢に苦む」と。是故に菩薩の食を服する所行るは、皆諸蟲の爲に安樂ならしめんと欲して、其味を食らさず。菩薩は復是念を作さく、「我長夜に身の爲に飲食を食り求む。當に勤めて精進して、速かに此身を離るべし」と。是を菩薩の修習施法と爲す。何等をか菩薩の最後難施法と爲す。此菩薩、若し種種の上味の飲食、香華、衣服、資生の具を得んに、若し自己に受用せば、則ち快樂にして長壽ならんも、若し盡く以て人に施さば、則ち窮苦にして天命せん。時に乞人行りて一切を求索せんに、菩薩は自ら念へらく、「吾本際より以來、身を喪ふこと無數なるも、未だ曾

て已を損じて一衆生をも利せず。今大利を獲たるは希有の慶なり。當に身命を捐棄し、
 悉く一切を捨てて衆生を饒益し、大施を究竟すべし」と。是を菩薩の最後の難行施法と
 爲す。何等をか菩薩の内施法と爲す。此菩薩は少壯の時に於て形體端嚴にして顏容殊特に、
 澡浴清淨にして、上妙の衣、嚴飾の具を服し、灌頂轉輪王の位を受け、七寶具足して、
 四天下に王たり。時に乞人有り、來りて王の所に詣り、自ら陳て曰く、「大王當に知るべし。
 我今衰老して、身は重疾に嬰り、聲獨にして苦厄するも、人の贖救する無く、生路既に窮
 り、必ずや死地に之かん。若し王身を得ば、塵に用ふべき所に隨ひて、或は手足を須ひ、
 或は血肉を須ひ、或は頭目を須ひ、或は髓腦を須ひん。若し大王慈仁もて、窮老を矜哀し
 たまひ、食身を捨離して、以て我を救ひたまはば、必ずや天施を蒙りて性命を全うした
 まふことを得ん」と。菩薩は即ち是念を作さく、「今我が此身も、亦當に彼が如くなるべし。
 會應に死に歸せば、一の饒益することも無かるべし。宜しく時に、身を捨てて以て其
 命を濟はん」と。念じ已り、歡喜して彼衆生に施せり。是を菩薩の内施法と爲す。何等を
 か菩薩の外施法と爲す。此菩薩は少壯の時に於て、形體端嚴にして、顏容殊特に、澡浴清
 淨にして、上妙の衣、嚴飾の具を服し、灌頂轉輪王の位を受け、七寶具足して、四天下
 に王たり。時に乞人有り、來りて王の所に詣り、是の如きの言を作さく、「大王當に知るべ
 し、我今衰老して、身又疾に嬰り、餘命幾くも無く、此貧苦に終らんとす。而も王は一切
 の快樂を具足したまへり。善い哉、大王、願くば王位を捨てて、我に哀み施したまへ。我

當に天下を統領して、王の福樂を受くべし」と。菩薩即ち是念を作さく、「富貴は無常なり、必ず貧賤に歸せん。若し貧賤に在らば、饑飢する處無く、遂に衆生の願ふ所を滿すこと能はざらん。是故に我今宜しく時に、位を捨てて其意を稱悦せしめん」と。念じ已りて、歡喜して即ち之を捨て與へたり。是を菩薩の外施法と爲す。何等をか菩薩の内外施法と爲す。此菩薩は小壯の時に於て、形體端嚴にして、顔色殊特に、澡浴清淨にして、上妙の衣、嚴身の具を服し、灌頂轉輪王の位を受け、七寶具足して、四天下に王たり、時に乞人行り、來りて王の所に詣り、是の如きの言を作さく、「大王當に知るべし、今我老邁して身又疾に嬰れり。衰賤を以て、竊かに美號を希はず。善い哉、大王、願くば、王の身と、七寶の天下と、轉輪王の位とを以て、以て我に授け、我をして、具足して王の慶樂を受けしめたまへ」と。菩薩即ち是念を作さく、「我身と財寶とは、俱に堅固に非ずして、無常危脆なる、磨滅の法なり。我今盛壯にして、天下を富有にし、乞ふ者も現前して、三事具足せり。是故に此不堅固の法に於て、當に堅固なることを求むべし」と。是念を作し已りて、倍大いに歡喜し、即ち内外を捨てて、之を施與せり。是を菩薩の内外施法と爲す。何等をか菩薩の一切施法と爲す。此菩薩は少壯の時に於て、形體端嚴にして、顔容殊特に、香湯に沐浴し、上妙の衣、嚴身の具を服し、灌頂轉輪王の位を受け、七寶具足して四天下に王たり。時に乞人行り、來りて王の所に詣り、是の如きの言を作さく、「大王當に知るべし、大王の名稱は、普く十方に聞えたり。我乃ち彼國に在りて、王問を服承し、遠くより來

り、諸ふ所有らんと欲す。善い哉、大王、願くば欲する所に隨ひて、我が意を充滿せしめたまへ」と。爾時、乞ふ者、或は國城、妻子、眷屬、肢節血肉、頭目髓腦を求めたり。爾時、菩薩、是思惟を作さく、「一切の恩愛は、會はば當に別離すべし、饒益する所無くば、衆生の諸願を果し遂ぐるに能はざらん。我今應當に貪愛の行を離れ、一切速かに捨て、衆生を饒益すべし」と。是念を作し已りて、倍大いに歡喜し、悉く一切を捨てて、衆生に恵み施せり。是を菩薩の一切施法と爲す。何等をか菩薩の修習過去施法と爲す。此菩薩は過去の諸佛菩薩の所行と、具足せる功德とを聞き、聞き已りて著せず。非有なりと了達して妄想を起さず。不貪不味にして、諸法を觀察し、心に所著無く、諸法は夢の如く、堅固有ること無ければ、諸法の善根に於て、有想を起さず、心に所著無し。但衆生を化せんが爲の故に、其身を示現して、廣く道教を説き、衆生をして佛法を成就せしめんと欲す。又復過去の諸法を觀察し、十方推求すれども、都て得べからず。菩薩は是の如く觀じ已りて、復此念を作さく、「過去の諸法は皆悉く捨離せん」と。是を菩薩の修習過去施法と爲す。何等をか菩薩の修習未來施法と爲す。此菩薩は、未來世の諸佛菩薩の所行の善根は、功德を具足せることを聞き、聞き已りて相を取らず、心に所有無く、彼方の佛刹に往生せんことを求めず、諸求の想無く、行願を生ぜず、心を攝して散せず、味はず厭はず、善根を以て彼に廻向せず。彼に生ぜんが爲に、専ら善根を修せず亦廢捨せず。但彼境界に因りて、衆生を教化し、衆生をして佛法を具足せしめんと欲して、眞實を觀察す。此眞實

【微形】微は癆又不
 淨なることを言ふ
 なり。
 【胞段】胞は胞胎
 胞)胎の聚合なる
 が故に胞段と言ふ

の法は處所有るに非ず、處所無きに非ず。内に非ず外に非ず、遠きに非ず近きに非ず。復
 是念を作さく、「若し法有に非ざれば、捨てざるべからず」と。是を菩薩の修習未來施法と爲
 す。何等をか菩薩の修習現在施法と爲す。此菩薩は、四天王三十三天、夜摩天、兜率陀天、
 化樂天、他化自在天、梵天、梵身天、梵輔天、梵の眷屬天、大梵天、光天、少光天、無量
 光天、光音天、淨天、少淨天、無量淨天、遍淨天、密身天、少密身天、無量密身天、密
 果天、不煩天、不熱天、善現天、色究竟天、聲聞緣覺の功德を具足せることを聞き、聞き
 已りて心惑亂せず、正念不忘にして、懈けず没せず、亦憂感せず。其心寂滅にして、而
 も所取無し。菩薩は唯是念を作さく、「一切の諸行は皆悉く夢の如く、一切の所行は皆眞
 實に非ず。衆生は知らざるが故に、惡道に流轉す」と。菩薩は彼に於て廣く爲に法を説き、
 諸惡を遠離して、佛法を成就せしめ、菩薩の道を修して、心に惑亂無し。是を菩薩の修習
 現在施法と爲す。何等をか菩薩の究竟施法と爲す。此菩薩摩訶薩は無量の衆生の、形類同
 じからざる有りて、其所に往詣し、是の如きの言を作さく、「我須むる所有り、幸に周給
 を垂れたまへ。我が意既に足らば仁の願も亦滿ぜん」と。菩薩は語を聞き已りて、歡喜踊
 躍して、其求むる所に隨ひ、施して満足せしむ。菩薩摩訶薩は内に自ら初の入胎よりして
 不淨微形、胞段諸根、生老病死を觀察し、又具さに此身を觀するに眞實有ること無く、
 所有の相無く、無慍愧の物にして、賢聖の捨つる所、惡露臭の處にして、猶し死屍の如し。
 骨節相持して、血肉泥塗し、九竅の門は常に不淨を流す。菩薩は身の無量の過患を見て、

乃至一念をも起して是身を貪惜せず。復是念を作さく、「此身は危脆なり。我當に云何が、既に此身の無量の過患を見て、而も貪著を生ずべき。應當に喜捨して彼衆生に施し、其願を充滿せしむべし。我當に此不堅の法の中に於て堅固の法を求め、一切の衆生をして、其願ふ所に隨ひて、悉く滿足することを得しめ、開悟示導して、皆清淨の法身を遠得し、無所住に住し、身心の相を離れしむべし」と。是を菩薩摩訶薩の第六の無盡の施藏と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の無盡の慧藏と爲す。此菩薩は、色の苦を知ること實の如く、色の集を知ることに實の如く、色の滅を知ること實の如く、色の道を知らること實の如く、受想行識の苦を知ること實の如し、識の集を知ることに實の如く、識の滅を知ること實の如く、識の道を知ること實の如く、無明の苦を知り、無明の集を知り、無明の滅を知り、無明の道を知り、愛の苦を知り、愛の集を知り、愛の滅を知り、愛の道を知り、聲聞の法を知り、聲聞の集を知り、聲聞の涅槃を知り、緣覺の法を知り、緣覺の集を知り、緣覺の涅槃を知り、菩薩の法を知り、菩薩の集を知り、菩薩の涅槃を知り、業報と因縁とに従ひて造らるる諸行は、我に非ず、堅固に非ず、眞實無く、空にして所有無しと知り、諸法の堅固の相を取らず、諸法の所有の相を取らざるなり、一切の法は悉く所有無しと知りて、廣く衆生の爲に眞實の法を説く。云何が爲に説く。一切法は壞すべからずと説く。何等か不可壞なる。色も不可壞、受想行識も不可

境、無明も不可壞、聲聞の法、緣覺の法、菩薩の法も不可壞なり。何を以ての故に、一切の諸法は自作にあらず、他作にあらず、言語の道斷え、一切の處を離れ、生ぜず、起らず、施さず、受けず、心意有ること無ければなり。菩薩は是の如き等の無盡の慧藏を成就し、少しの方便を以て、則ち能く一切諸法の善妙の方便を逮得し、自然に明達して、他に由りて悟らず。此智慧藏に十種の不可盡有り。何等をか十と爲す。多聞善方便の不可盡。善知識に親近する不可盡。一句の法を演ぶる不可盡。深法界に入る不可盡。無量の智慧莊嚴に入る不可盡。諸の功德の藏を出し長養して、心に憂厭無き不可盡。一切の陀羅尼門に入る不可盡。一切衆生の語言音聲を分別し了知するの不可盡。普く衆生をして諸の疑惑を離れしむることを得るの不可盡。一切の佛の自在を得て衆生を教化する所行を示現して成就するの不可盡。是を十種の不可盡の法と爲す。是を菩薩摩訶薩の第七の無盡の慧藏と爲す。菩薩此無盡の慧藏に仕せば、疾に無上平等の正覺を得ん。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の無盡の念藏と爲す。此菩薩は癡冥を捨離して、過去の一生、十生、百生、千生、萬生、乃至阿僧祇の思議すべからざる、無分齊、不可説の億那由他の生、成劫、壞劫、成壞劫、一成劫に非ず、一壞劫に非ず。一成壞劫に非ず、百劫千劫、百千億那由他劫、乃至阿僧祇の思議すべからざる無分齊、不可説の億那由他劫を憶念す。一佛の名號、乃至不可説不可説の諸佛の名號を念知し。一佛の記を授くること、乃至不可説不可説の諸佛の記を授くることを念知し。一佛の出世を念知し、乃至不可説不可説の諸

【祇夜】(Ghaya) 應
頌重頌等と譯す。
前説の長行(散文)
を重ねて韻文とせ
るものなり。

【伽陀】(Gatha) 頌
類頌等と譯す。重
頌に異る單獨の韻
文にして孤起頌、
不重頌等とも稱す

【曼陀那】(Dhama)
自説、佛弟子の請
問を待たず佛意の
まま説き給ひしも
の。多く偈頌の形
式を以て説かれ、
韻に便ならしむ

【本事】 菩薩の宿
世に於ける生處、
事縁等を説ける經
【方廣】 廣豐滿な
る法理を説ける經

【未曾有】 希有な
る不思議の事を説
けるもの意。

【蒙被提舍】(Upan
ishya) 論議經、逐
分別説等と譯す。
佛自ら法相を分別
し、論議問答して
理を明かならしめ
しもの。

佛の出世を念知し。一佛の所より一修多羅を受け、乃至不可説不可説の佛の所より、不可説不可説の修多羅を受けしことを念知し。祇夜、授記、伽陀、因縁、曼陀那、本事、本生、方廣、未曾有、譬喩、蒙被提舍も亦復是の如し。一會衆の一時の説法、乃至不可説不可説の時會の説法を念知し。一根、乃至不可説不可説の諸根を念知し。一煩惱、乃至不可説不可説の諸の煩惱を念知し。一の三昧、乃至不可説不可説の諸の三昧を念知す。菩薩は是の如きの念を作さく、妙念、淨念、不濁念、遍淨念、離塵念、離種種塵念、離垢念、光曜念、樂念、無障礙念なり。一と。此菩薩は是念に住する時、一切の世間も撼亂すること能はず、諸根清淨にして復染著せず。一切世間の衆魔外道も壞すること能はざる所なり。一切諸佛の法藏を念持し、決定して明かに了り、未だ曾て錯亂せず。是を菩薩摩訶薩の第八の無盡の念藏と爲す。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の、無盡の聞持藏と爲す。此菩薩は諸佛の所に於て、一品の修多羅を聞持し、乃至不可説不可説の修多羅を聞持して、未だ曾て一字一句をも忘失せず。一生の中に於て忘失せず、乃至不可説不可説の生にも、未だ曾て一字一句をも忘失せず。一種の名號を聞持し、乃至不可説不可説の佛の名號を聞持し。一世界の名字を聞持し、乃至不可説不可説の世界の名字を聞持し。一劫の名字を聞持し、乃至不可説不可説の劫の名字を聞持し。一如來の記を聞持し、乃至不可説不可説の如來の記を聞持し。一修多羅を聞持し、乃至不可説不可説の修多羅を聞持し。一會の名字を聞持し、乃至不可説不可説の會

の名字を聞持し。一時の説法を聞持し、乃至不可説不可説の時の説法を聞持し。一根を聞持し、乃至不可説不可説の諸根を聞持し。一煩惱を聞持し、乃至不可説不可説の煩惱を聞持し。一の三昧を聞持し、乃至不可説不可説の三昧を聞持す。是を菩薩摩訶薩の第九の甚深なる無盡の聞持藏と爲す。此聞持藏は唯佛のみの境界にして、餘は餘く及ぶこと無し。

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の無盡の辯藏と爲す。此菩薩は甚深の智慧を成就して、廣く衆生の爲に諸法を演説して、一切諸佛の經典に違はず。一品の法を説き、乃至不可説不可説品の法を説き、一佛の名號を説き、乃至不可説不可説の諸佛の名號を説き、一世界の名字を説き、一佛の記を説き、一修多羅を説き、一會を説き、一時を説き、法を説き、一根を説き、一煩惱を説き、一の三昧を説き、乃至不可説不可説の諸の三昧を説く。或は一日に一句一味の法を説きて盡すこと無く、乃至不可説不可説の劫に、一句一味の法を説きて而も窮盡すること無く。一切の諸劫は尙窮盡すべくとも、一句一味を説くことは窮盡すべからず。何を以ての故に。此菩薩は十種の無盡藏を成就するが故に。此藏を成就するが故に、一切の法を撰する陀羅尼門を得て現在前し、百萬阿僧祇の陀羅尼を以て眷屬と爲せり。此菩薩、百萬阿僧祇の陀羅尼の眷屬を成就し已りて、法の光明辯才を以て廣く衆生の爲に、深法を演説し、廣く長舌を以て妙音聲を出し、一切十方の世界に充滿して、諸根に隨順して煩惱を除滅し皆歡喜せしむ。善く一切の音聲に入り、一切の文字に於て、不斷の辯を得、普照の法門に入りて、一切の衆生は如來の種子の斷すべからざることを説くが

故に、菩薩の一切の諸行を捨てず、心に憂懼無し。何を以ての故に。此菩薩は虚空法界に充滿する清淨の法身を成就するが故に。是を菩薩摩訶薩の第十の無盡辯藏と爲す。此藏は無量にして分齊無く、無間にして壞すべからず、無斷にして斷すべからず、退轉せず、甚深にして底無く、一切の法門を以て一切の佛法に入る。

佛子、是を菩薩摩訶薩の十種の無盡藏と爲し。一切の衆生をして、無上菩提を究竟し成就せしむるなり。此藏に十種の無盡の深法有り。何等をか十と爲す。一切の衆生を饒益するが故に。善く廻向するが故に。本願を斷ぜずして、一切の劫に行するが故に。心無量無邊にして、平等なること虚空の如しと觀察するが故に。有爲に廻向して無爲に著せざるが故に。一切の法は無盡にして、念念に境界を知るが故に。大願壞すべからず。諸力と陀羅尼行とを究竟するが故に。諸佛護念したまひ、一切の法の幻化の如きに入るが故に。是を十種の無盡法と爲し、能く一切世間をして無書藏を得しむ。

大方廣佛華嚴經

卷第十三

東晉天竺三藏佛眼跋陀羅譯

如來昇兜率天宮一切寶嚴品第十九

【如來昇兜率天宮一切寶嚴品】第五會の十回向會は三品より成り、前會の解行を回向して、眞如の大正覺に向ふ大願を明かす。本品は其序説の第一品にして請佛の序たり。【爾時云云】以下本會の序にして、初に本會の因縁を叙し、次に天王道場を莊嚴すること

爾時、佛の威神力の故に、十方一切の世界の、諸の四天下の、一の閻浮提に、皆如來の菩提樹に坐したまふ有りて、顯現せざる無し。彼諸の菩薩は、佛の神力を承け、種の法を説き、皆悉く自ら佛の所に在りと謂へり。爾時、如來、自在の神力を以て、菩提樹の座及び須彌頂の妙勝殿上の、夜摩天宮の寶莊嚴殿を離れずして、兜率天宮の一切寶莊嚴殿に越きたまふ。

時に彼天王遙かに如來の來たまふを見たりて、即ち殿上に於て、如意寶藏の師子の座を敷き、種種の天寶を以て之を莊嚴せり。過去に修習せし善根の得る所、一切如來の威神に護持せられ、數ふべからざる那由他の阿僧祇の善根の生ずる所、一切の諸法の淨法の起す所、一切衆生の共に莊嚴する所、無量の功德の成就する所、一切の惡を離れたる清淨の業報にして、一切樂觀して厭足有ること無く、世間を出離したる諸法の起る所、清淨にして汚無く、一切世間の因縁の起る所、一切の衆生見るとも盡すこと能はざるなり。

無量の莊嚴の具を以て之を莊嚴せり。謂ゆる、百萬億の璽栴あり、百萬億の寶網を具上に
 羅覆し、百萬億の華帳を以て其上に張り、百萬億の華鬘を以て四邊に垂れ、百萬億の香帳
 普く十方に懸じ、百萬億の寶帳を以て其上に帳り、百萬億の華蓋を諸天持し、百萬億の
 華鬘の蓋、百萬億の寶蓋を以て其上に蓋ひ、百萬億の寶衣を以て其上に敷き、百萬億の妙
 寶の樓閣あり、百萬億の如意寶王臺其上に羅覆し、百萬億の勝妙なる寶網、百萬億の衆寶
 の瓔珞、間錯して垂れ下り、百萬億の衆妙の雜寶、百萬億の網蓋を以て其上に覆ひ、百萬
 億の寶寶の網衣あり、百萬億の妙寶の蓮華は間錯し光曜し、百萬億の無厭の香網は普く十
 方に懸じ、百萬億の大寶の帳網を以て其上に覆ひ、百萬億の寶鈴を微動して和雅の音を出
 し、百萬億の璽栴の寶帳は普く十方に懸じ、百萬億の雜寶の妙華を以て其上に散じ、百萬
 億の雜色の寶衣を以て其上に懸ひ、百萬億の菩薩の大帳、百萬億の寶寶の蓋帳、百萬億の
 清淨の金の帳、百萬億の淨瑠璃の帳、百萬億の雜寶蓋の帳、百萬億の一切寶の帳を以て
 其上に覆ひ、百萬億の寶寶の妙華は周匝間錯し、百萬億の寶形像の帳、百萬億の衆の妙
 寶鬘あり、百萬億の香鬘は普く十方に懸じ、百萬億の天の曼陀羅、栴檀の色香具足して、
 普く十方に懸じ、百萬億の天の莊嚴具、百萬億の妙寶の華鬘、百萬億の勝妙なる寶藏、百
 萬億の寶寶の鬘、百萬億の清淨の寶鬘、百萬億の海寶藏の鬘、百萬億の因陀羅金鬘の
 妙寶あり、百萬億の妙寶の寶網を以て垂々と爲し、百萬億の無量自在の妙寶、百萬億の眞
 金の寶藏は清淨微妙にして、百萬億の毘樓那の寶を以て照耀と爲し、百萬億の因陀羅寶、

【因陀羅寶】(一三) 帝釋青寶と譯し、帝釋天の冠にちりばめたる無量の青玉なり

【首羅】(Siva) 波
璃亦是璧玉と譯す

【羅闍】(Raja) 王
と譯す。

雜寶核飾し、百萬億の首羅幢の寶は、光曜明淨に、百萬億の大珠寶は、大光明を出して普く十方を照し、百萬億の天の堅固寶を以て窻牖と爲し、百萬億の淨功德の寶は、無量の妙色あり、百萬億の雜寶の徧闍、清淨の妙藏あり。百萬億の大海月の寶、百萬億の離垢藏の寶あり、百萬億の心王の寶は無量にして歡喜し、百萬億の師子面の寶、百萬億の浮檀の寶、百萬億の一切世間の清淨藏の寶、百萬億の一切世間の因陀羅幢の寶、百萬億の羅闍藏の寶、百萬億の須彌山王の殊勝幢の寶、百萬億の解脫の妙寶あり、百萬億の琉璃の寶、周匝して垂れ下り、百萬億の赤色の寶臺、百萬億の樂摩尼の寶、百萬億の清淨の寶、百萬億の衆の雜寶藏、百萬億の赤色にして解脫樂見の妙寶、百萬億の無量の色の寶の臺、百萬億の無比の寶臺、百萬億の淨光明の寶は、普く照して殊勝に、百萬億の摩尼の寶像、百萬億の因陀羅の寶あり。百萬億の黑沈水香は普く十方に重じ、百萬億の不可思議なる衆雜の妙香は、普く十方の一切佛刹に重じ、百萬億の十方の妙香は、普く世界に重じ、百萬億の最殊勝の香は、普く十方に重じ、百萬億の香像は、香十方に徹し、百萬億の所業に隨ふ香は、普く十方に重じ、百萬億の淨き光明の香は、普く衆生に重じ、百萬億の種種の色香は、普く佛刹に重じ、不退轉の香、百萬億の塗香、百萬億の栴檀塗香、百萬億の香熏香、百萬億の蓮華藏の黑沈香の雲は十方に充滿し、百萬億の丸香の煙雲は十方に充滿し、百萬億の妙光明の香は常に熏じて絶えず、百萬億の妙音聲の香は、能く衆の心を轉じ、百萬億の明相香は普く衆味に熏じ、百萬億の能く開悟する香は瞋恚を遠離し、

【多羅】(Tara)貝多羅樹のことなり

【寶樹】(Vajra)一、寶樹悉成道と書ひ、古譯、有樂等と譯す、其形は満字の如くして、好古を表象する寶なり。

諸刹を寂靜にして十方に充滿し、百萬億の香王香は普く十方に重じ、百萬億の天の華雲雨、百萬億の天の香雲雨、百萬億の天の末香雲雨、百萬億の天の妙蓮華雲雨、百萬億の天の種種の寶華雲雨、百萬億の天の青蓮華不斷雲雨、百萬億の天の寶華雲雨、百萬億の天の分陀利華雲雨、百萬億の天の曼陀羅華雲雨、百萬億の天の一切雜華雲雨、百萬億の天の種種なる衣雲雨、百萬億の天の寶寶普照十方雲雨、百萬億の天の種種なる蓋雲雨、百萬億の天の無量色の幡雲雨、百萬億の天の冠雲雨、百萬億の天の種種に莊嚴せる天冠雲雨、百萬億の天の莊嚴具雲雨、百萬億の雜色の天鬘雲雨、百萬億の種種なる大莊嚴の天鬘雲雨、百萬億の待値なる色の天の梅檀雲雨、百萬億の天の泚水香雲雨を雨らす。百萬億の天の寶樹、百萬億の天の寶幡、百萬億の天帶垂れ下り、百萬億の天の和香は、普く十方に熏じ、百萬億の天の妙功徳の寶臺垂れ下り、百萬億の天の多寶寶は懸布光耀し、百萬億の天佛を執持して侍立し、百萬億の天の金鈴網は微風に吹動せられて妙音聲を出し、百萬億の天寶の網楯は周匝圍遶し、百萬億の天の多羅寶の楯は周匝して圍遶し、百萬億の天の寶寶樹は圍遶して覆蔭し、百萬億の天の寶寶の樓閣は其内を莊嚴し、百萬億の天の勝寶門あり、百萬億の天の眞金の鈴は微風に吹動せられて和雅の音を出し、百萬億の清淨なる天鬘は布列して垂れ下り、百萬億の天の蘇婆提寶執りて相解脫し、百萬億の天の金剛藏の紫妙の瓔珞、百萬億の天の寶寶蓋を諸天執持し、百萬億の天の寶寶網、百萬億の天の雜寶藏、普耀殊特にして、百萬億の天の淨き光明は、普く十方を照し、百萬億の大光普く耀き、百萬億

の日藏の光明は普く一切を照し、百萬億の雜色の月光、百萬億の離礙の淨香、百萬億の天の妙華藏は開敷鮮茂し、百萬億の寶網藏、百萬億の華網、百萬億の香網を以て其上に覆ひ、百萬億の天の雜寶衣を以て其上に敷き、百萬億の天の諸寶衣は處處に敷置せられ、百萬億の天の青色衣、百萬億の天の雜黃衣、百萬億の天の雜朱衣、百萬億の天の雜色衣、百萬億の天の雜寶衣、百萬億の種種の熏衣、百萬億の殊勝の寶衣は、能く衆生をして歡喜の心を發さしむ。是の如き等の衣を以て其上に敷き、百萬億の白淨の妙衣を以て其上に覆ひ、百萬億の天の幢寶鈴は微妙の音を出し、百萬億の白淨の寶幢は微風に吹動せられて、妙音聲を出し、百萬億の天の繪絲幢、百萬億の香幢は衆の香網を出し、百萬億の華幢は一切の華を雨らし、百萬億の天の妙衣の幢、百萬億の摩尼寶の幢、百萬億の天の一切莊嚴具の幢、百萬億の天の鬘幢は四面に行列せり。百萬億の天の蓋幢の一切の寶鈴は妙音聲を出す。

【奉陀羅】(Mandala) 摩留陀羅にして、鈴鼓と譯す。三面の鼓なり。

百萬億の天螺は妙音聲を出し、百萬億の天鼓は大音聲を出し、百萬億の天琴は微妙の音を出し、百萬億の天の奉陀羅は大音聲を出し、百萬億の天の娛樂具、百萬億の天樂の音聲は十方一切の佛刹に充滿し、百萬億の化音聲は聲十方に徹し、衆生の聞く者は悉く響の如しと解り、百萬億の天の妓樂の音は同時に俱に作り、百萬億の天の神力妓樂は相和の音を出し、百萬億の一切諸天の娛樂の具は妙音聲を出し、百萬億の妙音は如來を讚歎し、百萬億の勝妙の喜音は如來を讚歎し、百萬億の甚深の音聲は如來を讚歎し、百萬億の種種の

音聲は佛の果報を敬じ、百萬億の細微の音聲は三界を出づるの法を稱揚し讚歎し、百萬億の寂靜の音聲は如來の本修行せし所を讚歎し、百萬億の音は如來の百萬億の劫に永く曠志を離れたることを讚歎し、百萬億の供養もて過去の諸佛を供養したることを讚歎し、百萬億の法門は如來を讚歎し、百萬億の音は一切の菩薩の功德の窮盡すべからざることを讚歎し、百萬億の音は菩薩の一切諸地の功德具足したることを讚歎し、百萬億の音は、諸佛の樂足有ること無きを讚歎し、百萬億の音は見佛の行を稱揚し讚歎し、百萬億の音は深法を讚歎し、其音を聞く者は、深智慧を得て障礙有ること無く百萬億の妙音は十方一切の世界に充滿し、百萬億の妙音は諸の衆生を敬じ、其志願に隨ひて皆歡喜せしめ、百萬億の音は一切の世間を敬じ、其音を聞く者は一切法の眞實の性を解り、百萬億の音は如來を讚歎し、其音を聞く者は悉く能く一切の如來を恭敬し、百萬億の音は佛の境界の一切の功德を敬じ、百萬億の音は諸の總持の善妙なる方便を敬じ、善く一切の諸法を分別することを知り、一切諸の如來の法を開持し、百萬億の音は甚深具足の諸法を讚歎し、百萬億の音は熾心の菩薩の一切種智を修習し長養することを敬じ、百萬億の音は治地の菩薩の具心歡喜せることを敬じ、百萬億の音は修行地の菩薩の清淨の解脱を敬じ、百萬億の音は生貴の菩薩の心に安住を得たることを敬じ、百萬億の音は方便具足の菩薩の摩訶衍に於て究竟して決定せることを讚歎し、百萬億の音は善現の菩薩の一切の菩薩の所行を具足せることを敬じ、百萬億の音は不退の菩薩の所行は一切の諸地に皆悉く清淨なることを讚

【百萬億の神力云】以上は外事の莊嚴を叙し、以下内法を以て、即ち勝用を顯表す。

歎し、百萬億の音は童眞の菩薩の光明普く一切の十方を照すことを歎じ、百萬億の音は王子の菩薩の善く甚深不可思議の諸佛の境界に入ることゝ歎じ、百萬億の音は灌頂の菩薩の能く一切の如來力を現することを歎す。

百萬億の神力自在ありて、百萬億の清淨の解脱は百萬億の清淨解脱を出生し、百萬億の大歡喜の法を長養し、百萬億の不壞の信に住し、百萬億の勇猛の力を長養し、百萬億の名聞の法を長養し、百萬億の法義を分別して廣く定慧を説き、百萬億の正念は清淨にして亂れず、百萬億の定慧を出生し、百萬億の陀羅尼は悉く能く一切の佛法を受持し、百萬億の廣大の智慧を出生し、百萬億の深心を出生して佛を信じ、信根堅固にして、百萬億の清淨の檀波羅蜜を出生し、百萬億の尸波羅蜜を出生し、百萬億の摩提波羅蜜を出生して、悲心を生ぜず、諸佛の摩提波羅蜜を具足し、百萬億の毘梨耶波羅蜜を出生して、無量の諸禪は寂靜にして照明なり、百萬億の般若波羅蜜を出生して、一切の法を照し、百萬億の清淨の大願を出生し、百萬億の諸の深法門の智慧の燈明を出生し、十方の諸佛の百萬億の深妙の法門を出生し、百萬億の癡を離れて示現する善妙の方便を出生し、百萬億の諸法の行を出生し、普く百萬億の諸佛の利に入り、百萬億の清淨の法身十方一切の佛刹に往詣し、百萬億の如來の微妙なる首尊を出生し、百萬億の一切種智善妙の方便を出生し、百萬億の具足の法門を出生し、百萬億の正法知見を出生して、

悉く一切諸佛の實法を見ること猶し寶幢の如く、百萬億の智慧を出生して、如來の境界の障する所無きを示現す。

【百萬億の諸天云云】以下衆生即ち有情の有體的存在し、世界の莊嚴を叙す

百萬億の諸天神王は恭敬して禮拜し、百萬億の龍王は一心に諦觀して厭き足ること無く、百萬億の夜叉王は合掌して敬立し、百萬億の乾闥婆王は一心に恭敬して日宵くも捨てず、百萬億の阿修羅王は憍慢を斷除して敬心に侍立し、百萬億の寶金翅鳥王は口に經帶を銜み、百萬億の緊那羅王は歡喜して立侍し、百萬億の摩睺羅王は踊躍歡喜して一心に諦觀し、百萬億の婆羅門王は恭敬して禮拜し、百萬億の一切世間の諸王は恭敬し頂禮し、百萬億の諸の釋天王は恭敬し尊重して一心に觀察し、百萬億の夜摩天王は踊躍歡喜して高聲に讚歎し、百萬億の兜率陀天王は恭敬して禮拜し、百萬億の化樂天王は恭敬し讚歎し、百萬億の他化自在天王は合掌し恭敬して一心に侍立し、百萬億の梵天王は一心に觀察し、百萬億の摩訶首羅天王は恭敬し讚歎し、百萬億の菩薩は恭敬し讚歎し、百萬億の天女は恭敬し供養し、百萬億の彌天は散心に頂禮し、百萬億の宿命の淨知識に親近せる天は妙聲に讚歎し、百萬億の曼殊天は布身敬禮し、百萬億の曼殊天は恭敬し頂禮し、百萬億の梵の眷屬の天は閉遮して侍衛し、百萬億の大梵王は無量の功德を讚歎し稱揚し、百萬億の光天は五體を地に投じ、百萬億の少光天は佛世の值ひ難きを宣揚し讚歎し、百萬億の無量光天は讚歎し禮拜し、百萬億の光音天は如來の遭ひ難く日難きことを讚歎し、百萬億の淨天は恭敬し禮拜し、百萬億の少淨天は恭敬し禮拜し、百萬億の無量淨天は佛を見たてまつらんことを

【阿迦尼吒天】(Agni-tan) 阿迦尼吒とも書き、色究竟天と譯す。色界十八天の最上天なり。

樂ふが故に、虚空の中より自ら投じて來下し、百萬億の漏淨天は合掌して敬住し、百萬億の密身天は本の功德を憶ひて稱揚し讚歎し、百萬億の少密身天は如來の想を生じて一切を見んことを求め、百萬億の無量の密身天は清淨の善業もて恭敬し禮拜し、百萬億の密果天は布身敬禮し、百萬億の無煩天は堅固の信を得て恭敬し禮拜し、百萬億の無熱天は合掌し觀察して心に厭足無く、百萬億の善現天は恭敬し禮拜し、百萬億の善見天は無量の佛の所を憶念して恭敬し供養して心に厭足無く、百萬億の阿迦尼陀天は恭敬し禮拜し、百萬億の種種の天は皆大いに歡喜し恭敬し讚歎し、百萬億の諸天は種種の善慧を以て之を莊嚴せり。

百萬億の諸大菩薩は頂戴護持し、百萬億の華手菩薩は一切の華を雨らし、百萬億の香手菩薩は一切の香を雨らし、百萬億の鬘手菩薩は一切の鬘を雨らし、百萬億の抹香手菩薩は一切の抹香を雨らし、百萬億の依手菩薩は一切の幢を雨らし、百萬億の寶手菩薩は一切の寶を雨らし、百萬億の幡手菩薩は一切の幢を雨らし、百萬億の寶手菩薩は一切の寶を雨らし、百萬億の莊嚴手菩薩は普く一切の莊嚴具を雨らし、百萬億の諸天は天の種種に莊嚴せる宮殿を以て而も以て莊嚴し、歡喜天子は百萬億の諸天の莊嚴せる宮殿を以て之を莊嚴し、百萬億の生貴天子は法身普く覆ひ、百萬億の灌頂天子は舉身に座を持せり。百萬億の菩薩の清淨の大願を出生し、百萬億の菩薩の初的清淨心を出生し、菩薩の百萬億の柔軟利根を出生し、百萬億の禪藏皆悉く清淨なり。菩薩の百萬億の清淨

の華嚴は、菩薩の百萬億の諸の清淨業を嚴治し、菩薩の百萬億の安住の生貴地を出
 生し、菩薩の百萬億の法門を出生して、普く一切を照し、百萬億の菩薩の諸地を成就し
 て、百萬億の大衆を教化し調伏す。百萬億の諸の善根の起る所、百萬億の諸佛護持し、
 百萬億の功徳の成ずる所、百萬億の直心の莊嚴清淨に、百萬億の大願の莊嚴清淨にし
 て、百萬億の善行の起る所、百萬億の諸法充滿し、百萬億の自在神力の成就する所、百萬
 億の諸の功徳の起る所、百萬億の讚法を以て之を讚歎せり。此世界の四天下の兜率陀天
 宮の、一切寶莊嚴殿に、如來の爲に摩尼寶藏の獅子の座を敷くが如く、十方一切の諸佛の
 世界の四天下の兜率陀天宮の、一切寶莊嚴殿に、如來の爲の摩尼寶藏の獅子の座を
 敷くことも亦復是の如し。

【爾時兜率陀天云】以上は十方の天王及び主伴の座を莊嚴し已りたるを以て、以下は佛を迎へ奉りて供養することを叙す。

爾時、兜率陀天王、如來の爲に高座を敷き畢りて、計るべからざる阿僧祇の兜率陀天子
 と俱に、如來を迎へ奉り、阿僧祇の色の上妙の讚華を雨らして如來を供養したてまつり
 不可思議の香を雨らし、無量色の鬘を雨らし、上妙の梅檀を雨らし、無量種種の寶蓋を雨
 らし、細妙の天衣を雨らし、無量の雜寶を雨らして如來を供養したてまつり、歡喜の心を
 以て天の上妙の諸の莊嚴具を雨らし、種種の香を燒きて、香氣普く十方の世界に熏じ、
 栴檀末香、沈水末香、堅固末香を雨らして如來を供養したてまつり、無量の天子は各其
 身より無量無數の諸の天子の身を出し、阿僧祇の兜率陀天子、及び他方より來りし諸
 の天子衆は、皆大いに歡喜し、恭敬して禮を作し、阿僧祇の天女衆も歡喜すること無量に

【佛の神力の故云】以上は自分行の供を具ふることと叙す。

して、一心に寂然として如来を諦觀したてまつり、數ふべからず説くべからざる諸の大菩薩は、悉く他方の兜率天より來りて、虚空に住し、不可思議なる諸の供養の具を以て、如来を供養したてまつりて、一切諸天の供養に出過し、阿僧祇の勝妙なる音聲を以て如来を讚歎したてまつれり。

佛の神力の故に、過去の諸佛の所にて善根を修せしが故に、如来の不可思議なる自在の神力の故に、一切の兜率陀天子、及び諸の天女は、一心に恭敬し讃歎して佛を觀たてまつり、成是念を作さく、「如来の出世は甚だ値遇ひ難く、功德具足し、智慧無礙にして、平等に正覺したまへるを、我今見たてまつることを得たり」と。是念を作し已りて、皆大いに歡喜し、阿僧祇那由他の兜率陀天子、佛の所に來詣して、各身上の天衣を以て種種の寶を盛り、又身上の天衣を以て種種の香、一切の寶衣、諸の莊嚴具、栴檀の末香、沈水の末香、天の妙寶の末香、諸天の香華、天の曼陀羅華を盛りて、普く十方に散じて如来を供養したてまつる。億那由他の無數の天子は、種種上妙の供具を以て虚空を莊嚴し、衆の妙香を燒きて香氣雲を成し、十方一切の虚空に充滿せり。智境界の心の故に、天の華雲を雨らして虚空を莊嚴せり。如来の所に於て歡喜の心を起すが故に、一切天の蓋雲を雨らして虚空を莊嚴し、十方に充滿せり。佛を敬ふの心を得るが故に、一切の天の雲を雨らして虚空を莊嚴し十方に充滿せり。佛を供養するが故に、阿僧祇の白淨の寶網を以て、遍く虚空に満たし以て莊嚴を爲し、衆の金鈴を懸けて之を間錯し、自然に微動して妙音

聲を出し、三乘を悟る者には解脫を得しめ、無數の寶帳虚空を莊嚴し、十方に彌覆せり。如來の所に於て深信を得たるが故に、普く一切の妙寶雲を雨らして未だ曾て闕絶せず、阿僧祇の諸天の宮殿を以て虚空を莊嚴し、一切の天樂は微妙の音を出して十方に充滿せり。至心に踊悦して佛を尊敬するが故に、阿僧祇の種種の妙衣を以て、虚空を莊嚴せり。佛の出生には遇ひたてまつること難しとの心を得るが故に、阿僧祇の諸天の寶冠を雨らして虚空を莊嚴せり。如來の所に於て欣敬の心を得るが故に、阿僧祇の上妙の衆寶、及び天の寶鬘を雨らして虚空を莊嚴せり。無量億那由他の天子は、各身より阿僧祇の種種なる色の華を出して、如來を供養したてまつり窮盡有ること無し。如來の所に於て歡喜し恭敬するが故に、無數の種種なる所樂に隨ふ香を以て如來を供養したてまつる。如來の所に於て歡喜し恭敬するが故に、阿僧祇の栴檀の末香を以て如來を供養したてまつる。如來の所に於て比無き歡喜を得るが故に、種種の寶蓋を以て如來を供養したてまつる。念佛三昧を長養するが故に、無數の種種なる上妙の寶衣を以て、以て道路に布き如來を供養したてまつる。如來の所に於て歡喜恭敬を得るが故に、無量無數の雜色の寶幢を以て如來を供養したてまつる。如來の所に於て無量の歡喜心を得るが故に、阿僧祇の雜色の寶幢を以て如來を供養したてまつる。如來の所に於て歡喜恭敬を得るが故に、無數の天の樂を以て微妙の音を出して如來を供養したてまつり、其心常に分まり未だ曾て散亂せず。不可說億那由他の菩薩は、兜率陀天宮に於て、三界を離れたる一切の供具を以て、眞實の法より生じ、諸の煩

惱を離れ、大慈の心十方に充滿して障礙有ること無く、方便の諸の甚深の法を具足せり。唯諸佛のみ有りて、乃ち能く測量し、餘は能く及ぶこと無し。堅固なる淨信の長養する所不可思議なる善根の生ずる所、無數の變化因力の起る所、諸の如來の眞法より化生せる無行の法印なり。一切の寶蓋は普く法界を覆ひて、如來を供養したてまつり、諸天の一切の供ふる所に出過し、一切の波羅蜜の起る所なり。一切の華帳普く法界を覆ひ、諸天の供養する所の上なるに出過して、如來を供養したてまつる。清淨の解脫は一切諸佛の境界に充滿すればなり。一切の寶衣普く覆ひて、一切の法界を莊嚴し、諸天の供養する所の上なるに出過して如來を供養したてまつる、無生法忍の起る所なり。雜寶の鈴網普く覆ひて、一切の法界を莊嚴し、諸天の供養する所の上なるに出過して如來を供養したてまつる。無礙の智慧に入れればなり。一切の堅固の香を以て法界を莊嚴し、諸天の供養する所の上なるに出過して、如來を供養したてまつる、一切の法は猶し幻化の如しと解ればなり。一切妙寶の高座を敷置して法界を莊嚴し、諸天の供養する所の上なるに出過して、如來を供養したてまつる。其心の境界は如來と等しく、座處の境界も亦如來と同じければなり。一切の寶幢を建てて法界を莊嚴し、諸天の供養する所の上なるに出過して、如來を供養したてまつる、善く時に應じて如來を供養したてまつることを解ればなり。一切の寶殿を以て法界を莊嚴し、諸天の供養する所の上なるに出過して、如來を供養したてまつる、一切の法は夢の如しと解ればなり。種種の寶華を以て法界を莊嚴し、諸天の供養する所の上なるに

出過して、如來を供養したてまつる、無著の善根の生ずる所にして一切の法界に充滿すればなり。此等の無量の菩薩は持身より一切の堅固の香雲、一切の離色華雲、一切の離色衣雲、一切の梅檀香雲、一切の莊嚴寶蓋雲、一切の種種の香雲、一切の華鬘雲、一切の清淨莊嚴具雲を出し、諸天の供養する所の上なるに出過して、如來を供養したてまつる。無量の菩薩は如來の眞實の功德を稱歎し、永く顛倒を離れて、正法に安住し、一切の力を具へて能く衆生をして、諸の惡難を離れ、善道を開示せしむ。一音の中に於て無量の法を演べ、一切の陀羅尼より生ずる辯才の藏は窮盡すべからず、無畏を具足して、心常に歡喜せり。菩薩は是の如き等の無量の妙法を以て、如來を稱歎したてまつり、法身は虚空法界に充滿し、心は三世の諸の如來と等し。

爾時一切諸の天衆云云以下佛の勝德を觀ることを明す中、最初に法界身の無量無邊の德の勝用を見ることを叙す。

爾時、一切諸の天衆、及び他方より來れる諸の天子衆、並びに數ふべからざる諸佛の刹の一切の菩薩は、如來等正覺を見たてまつり、不可思議なる人中の雄は、其身無量にして、稱り數ふべからず、不可思議の神足を示現し、一切の衆生をして皆大いに歡喜せしめ、周遍して一切の虚空に充滿し、諸佛の功德は一切の法界を莊嚴して、一切の衆生をして一切の善根に安住せしむ。神力を成就して、一切諸の語言の道を出過し、一切の菩薩は恭敬し供養す。應に化すべき所に隨ひて身を現じて救度し、一切の清淨なる善根を具足す。如來の無上なる功德を顯現し、智慧の境界は窮盡すべからず、比無き三昧の出生する所、法身は、普く一切の衆生に至りて分際有ること無し。一切の衆生をして皆大いに

歡喜せしめ、一切種智を斷たず、佛の所住に住し、三世の諸佛の家に於て生れ、無盡の衆生をして皆清淨ならしめ、悉く能く一切の菩薩の清淨なる智慧を出生して、一切の菩薩の諸根を發起せしむ。一切の法雲は普く法界を覆ひ、如來の教化は究竟じて餘すこと無く、其願ふ所に隨ひて、悉く満足せしめ、清淨なる平等の正智に安立して、一切の衆生の上に出過し、一切智を得。正覺の眼を以て普く世間を觀じ、其先世に修せし所の善根に隨ひて、悉く能く示現して、普く大心を發さしめ、衆生を愛樂し、智慧安住して能く壞る者無く、善く衆生を知り、諸利を分別して、不退轉の善法の中に於て生れ、法性を壞せずして、法界を分別し、如來の身を現すること無量無數なり。癡妄を遠離して眞實に安住し、一切の衆生歎すとも能く盡すこと無し。一切を教化して念佛三昧を修せしめ、法界に充滿して衆生を度脱すること無量無邊なり。本の請ふ所、悉く能く化度し、其所應に隨ひて、法を以て惠み施し、種種の方便もて衆生を調伏して彼欲性に隨ひて、悉く清淨ならしむ。色身の不可思議なるを示現して等しく衆生を觀じ、心に所著無く、無礙の住に住して、所見障ふること無し。善く如來の一切の諸力を解りて、心常に寂定にして、未だ曾て散亂せず。一切智に住して、善能く匂身味身の眞實の義を演説して、悉く能く深く無量の智海に入り、無量の功德善藏を出生せしむ。如來の日出でて、普く法界を照し、衆生の願力は常住にして沒せず、佛の所住に住して堅固にして壞せず。我我所に於て心に所著無く、行ずる所の諸法は永く世間を離れ、一切の世に於て染汚する所無し。大衆

【書題】勅は馬の
わの綱なり。今大
衆の教を縛勅とし
て諸行を制御し、
菩提佛果に向はし
むる意を叙す。

會に在りて智慧の幢を建て、智慧は一切の世間を超出して染著する所無し。大悲心を以て衆苦を拯拔して、衆生を深妙の智に安立せしめ、衆生を饒益するの功德は盡ること無く、悉く善く菩薩の智慧を分別して、佛に向ふ道を信じて最正覺を成じ、大慈を出し大悲を顯現するなり。佛身は無量にして、諸法の莊嚴、種種の音聲は、無量の法を演べ、其所應に隨ひて其闢を充滿し、去來今に於て心常に清淨にして、悉く群生をして境界に著せざらしめ、能く一切諸の菩薩に記を與へ、三世の諸の如來の家に生れしめ、普く十方に於て智慧圓滿ふること無く、一切悉く至りて、而も所著無く、諸佛の世界に於て、眞實を了達し、善能く一切衆生の出世の功德を分別して、普く一切世間の障明と爲り、生死の垢惱も能く染著すること無し。佛の智慧の月は普く法界を照して、諸法の眞實の性に了達し、無量の深智もて、平等なることを觀察し、慧心明淨にして、普く十方を照し、諸法の夢の如く化の如きを解了して、一切世間の心と諸佛の心と及び諸の業報と、其所應に隨ひて眞實を顯現す。衆生の根に隨ひて爲に佛身を現じ、如來の境界は、悉く能く一切の衆生を容受して、普く衆生の行する所の諸法を知り、其相自性有ること無しと解了す。一切世間の一性と非性とを知り、衆生に隨順して有性を示現し、衆生をして三尊を超出し、一向に正しく無上菩提に趣かしめんと欲し、一切の衆生を救護し拯濟して、未だ曾て世間の相を妄取せずして、諸の煩惱を滅し、正しく世間を觀じ、大乘の縛勅にて行する所觀す、一切諸法の善利を成就して、悉く能く衆生の善根を分別し、業報清淨に智慧明

了にして、等しく三世に入り、永く世間の一切の虚妄を離る。光明網を放ちて普く十方を照し、一切の衆をして普く如来を見たてまつらしめ、一切十方の佛刹の相好具足せることを分別し樂觀するに厭くこと無からしむ。菩薩の行ずる所は功德の智慧の興起する所にして、善能く諸根の境界を分別し、行ずる所の佛事は其時を失はず。三世の諸佛の無量の方便を成就して、慈悲普く一切の衆生を覆ひ、周遍して普く陀羅尼の雨を降らし。皆諸佛の功德を成就し、無量の妙色もて佛身を莊嚴し、十方の衆生瞻視せざる靡く、一切世間の障礙を除滅し、諸法を分別して、眞實の義を解り、功德を成就せしむ。自在の法王は、功德日の王にして、普く能く一切世間を照曜し、最上の福田は一切智慧の縁に依因りて生じ、化身は一切の世間に充滿し、一一の化身は普く無量の智慧の光明を放つ。無礙の天綱を眞に冠むれる法王は、功德無量にして悉く能く世間を隨順して分別す。無上の導師は衆生を開化し、如来の智慧は一切世間の無畏の乘なり。一切世間の無上なる醫王は、衆生の病む所の輕重を了知し、永く痲栗を離れて、堅固不退ならしめ、淨慧の眼蔵もて善能く一切の世間を分別し、衆生の一切の業報を開示して、衆生の病苦を悉く能く除滅し、無量の方便もて之を度脱せしめ、其所應に隨ひて、常に時を失はず、等しく衆生を觀じて諸惡を遠離し、業報を示現すること猶し幻化の如く、其所應に隨ひて爲に佛身を現じ、普く衆生をして悉く導師を見たてまつらしめ、世間の一切の諸法を分別し、歡喜して佛を敬ひ、善根を長養して、不退轉を得しめ、彼所業に隨ひて皆分別して知る。一切の衆生は

長へに生死に眠る、如來世に出でたまひて能く之を覺悟し、世間を安慰にし、怖畏するこ
 と無からしめ、心に所著無く、能く壞する者無く、智慧に安住して方便具足せり。如來最
 勝は衆生を嚴淨し、智慧山王は淨法門を開き、或は佛身を現じ、或は菩薩を現じて、衆生
 を開導して衆惡を遠離し、善地に安置せしむ。無量の功德は佛身を莊嚴し、業行の成ずる
 所世間に示現し、一切の智慧彼岸に到ることを得、佛道を成ずる時、悉く清淨ならしむ。
 能く世間の一切の願ふ所を滿し、世間に堅固の善友を開示す。光明清淨にして遍く十
 方を照し、普く衆生の爲に其身を示現して、無量の衆生の慳垢を滅除し、悉く衆生をし
 て善根を清淨ならしめ、其願ふ所に隨ひて皆満足することを得しむ。等しく衆生を觀ず
 るに上中下無く、善根を攝取して清淨の業を起し、衆魔を降伏し、煩惱を除滅して、無
 量の無礙の力を出生す。一切世間の淨光明王は無礙の慧日にして、癡冥を照除し、常
 に法を以て一切の衆生に施す。無量無邊の如來の智藏は、光明清淨にして普く十方を
 照し、一切の衆生をして怨仇を遠離し、其願ふ所に隨ひて皆悉く充滿せしむ。最勝の福
 田には歸依せざる塵く、果報無量にして、具足清淨に、少しく善根を修して大功德を獲、
 衆生を無盡智の地に安置す。一切の善根は苦心に由りて起り、無量の歡喜清淨の功德は、
 能く衆生の惡道の諸難を除く。是の如く如來を正念し、是の如く正覺を觀察し、是の如く
 智慧の淵に入り、是の如く功德の海に入り、是の如く虚空の智慧に至り、是の如く衆生の
 福田を知り、是の如く正しく如來を知り、是の如く淨業の相好を觀察し、是の如く正しく

【爾時諸天云云】
以下佛の光明の妙
用を見ることを明
かす。

法身の普く十方を照すことを知り、是の如く佛の一切の不可思議なる自在の神力を示現し
たまふことを知る。

爾時、諸天、如來の身を見たてまつるに、一一の毛孔より阿僧祇億那由他の光明を出
し、一一の光明に阿僧祇の妙色有り、阿僧祇の清淨は、阿僧祇の佛力、阿僧祇の衆生
を照明し、阿僧祇の歡喜は、阿僧祇の佛の勇猛精進を長養し、阿僧祇の寂滅三昧を淨め、
阿僧祇の諸根は清淨柔軟にして、阿僧祇の如來を恭敬せり。爾時、諸天復佛身を見たて
まつるに、不可思議なる雜色の光明輪を出し、一一の光明輪に不可思議の色明り、不
可思議の照明、普く十方無量無邊の一切の法界を照し、如來の無量無數の自在の神力を示
現し、衆生は皆清淨の妙音を聞き、又自然に不可思議の偈を出して、出世間の法を宣揚
し演説し、世を離れたる善根を具足し成就して、阿僧祇億那由他の不可思議なる上妙の莊
嚴を顯現し、不可思議の劫に光明を讚歎するも窮盡すること能はず、如來の無盡なる自
在の中より生ずればなり。悉く普く不可思議の刹を照現し、諸佛出世したまひて衆生を
智慧門に安立し、眞實の義に入らしめ、不可思議なる如來の化身を顯現して、普く無量無
數の不可思議なる諸佛の世界、及び諸の法界、十方一切の世界、究竟の法界、虚空界を
照す。一切の世界を持するが故に起り、普く衆生をして清淨に平等ならしむ、如來の無
礙一切智なる佛の所住より生ずればなり。又例身の中より無量無數の不可思議なる妙寶の
光明を出す。本無量無數の不可思議なる諸の如來の所に於て、功德を修せしが故に、

【爾時如來云云】
以下佛身の妙用は
身雲を現する意を
叙す。

是光明を得たり。清淨なる大願善根の起す所、無量の佛の所にて淨清なる不放逸の
行を修習し、一切に専ら無上の菩提を求めたれば、是光明を得たり。無量無量の善根を
出生して、普く衆生をして如來の所に於て疑惑を除滅し、如來を見たてまつることを得
しむ。又自在の神力を觀て、無量の衆生を勝れたる善根門に安立し、衆生海を度し一切の
佛刹に於て諸の菩薩の爲に、諸佛の不思議の法を演説す。

爾時、如來、大慈悲を以て普く一切を覆ひ、一切の智慧の莊嚴を示現して、無量無邊の
不可思議なる諸佛の世界の、一切の衆生をして未だ信ぜざる者は信ぜしめ、已に信する者
は善根を増長せしめ、已に增長せる者は其をして清淨ならしめ、已に清淨なる者は其
をして成熟せしめ、已に成熟せる者は其をして解脫せしめんと欲して、甚深の法を得、
無量の智慧光明を具足す。菩薩を滿足して一切の智の心堅固にして轉ぜず、法性を壞せず、
眞實際を聞きて驚怖せず、如來の實法を具足し解達して、一切の諸の波羅蜜を滿足し、清
淨なる出世の善根を成就し、普賢の所行を具足し修習し、如來の無量なる自在を成就す。
魔界を遠離して佛の境界に入り、甚深の法を解りて不思議の智を得、大乘の弘願は堅固に
して轉ぜず、常に諸佛を見たてまつりて、無量の智と無量無邊の功德藏の力とを得、勝妙
の心を發して、疑網地を離れ、惡を滅して清淨となり、常に如來に依りて、眞實の法に
於て堅固にして轉ぜず、一切の諸の菩薩衆に入ることを得て、常に三世の諸の如來の家
に在り、如來は是の如き等の類の無量無数の清淨なる善根を顯現して、衆生を調伏し、

【爾時兜率天王云】已下は天王佛を敬請するに、佛を明かす。勝益を成ずること

悉く彼をして佛の功德を知らしめんと欲するなり。一切の無礙の慧藏を照明し、如來の不可思議なる大神通力は、一切趣に於て普く自在を現じ、本志願せし所は皆悉く満足して淨慧を具足し、諸佛の最勝善逝を究竟し、法王の一切の自在を成就して、一切の智門を具足し出生し、最勝の清淨なる法身を成就し、三世の諸佛の功德は平等にして、一切の世間に能く喩と爲すもの無く、相好にて身を嚴り、諸力を具足して見るに厭き足ること無し。一切劫に於て、如來の智慧の功德を稱説すとも、自在の示現は窮盡すべからず、一切の菩薩は究竟する能はず、普く衆生の爲に慧目を圓滿して、三世の闇を滅し、法王の神力の自在を逮得して、無量の清淨の功德を出生す。

爾時、兜率天王は、如來の爲に是の如き等の諸の供具を設け已りて、無量無數阿僧祇の兜率陀天子と俱に恭敬し合掌して、佛に白して言さく、「善くぞ來りたまひし世尊、善くぞ來りたまひし正覺、唯願くば哀愍して、此宮殿に處したまへ。」爾時、世尊、佛の莊嚴を以て自ら莊嚴し、衆生の見たてまつる者は敬樂せざる無く、一切の菩薩の願ひ求むる所、兜率の諸天をして皆大いに歡喜せしめ、普く衆生をして佛の境界を修し、佛の善根を種ゑ功德無盡にして、清淨不可壞の信を發起せしめ、常に佛を供養したてまつりて心に厭ひ倦むこと無く、正心清淨にして衆生を發起し、一切智を求めしめんが故に、兜率天王の請を受けて即ち一切寶莊嚴殿の、如意寶藏の師子の座に昇りたまへり。此四天下の兜率天宮の如來、請を受けて一切寶莊嚴殿の、如意寶藏の師子の座に昇りたまひしが如く、一切

十方の諸の四天下の兜率天宮の、一切寶莊嚴殿の如意寶藏の師子の座も亦復是の如し。
 爾時、一切寶莊嚴殿は、自然に殊特となり、妙寶もて莊嚴せること、諸天の莊嚴の上なるに出過し、一切の寶網其上に彌覆し、普く一切の妙寶の雲雨、一切の寶莊嚴の雲雨、一切の寶衣の雲雨、一切の梅檀の雲雨、一切の堅固香の雲雨、一切の雜寶莊嚴の雲雨、不可思議なる衆の華の雲雨を雨らし、自然に不可思議なる伎樂の音聲を演出して、如來の一切種智、微妙の法言を宣揚せり。是の如きの一切の諸の供養の具は、悉く諸天の供養する所の上なるに過ぎたり。

爾時、佛の威神力は、兜率天王の爲の故に、一切の音樂寂然として聲無く、復天王の正念を擾亂せず。善根を長養し、大心を増益し、勇猛精進して、甚だ大いに歡喜し、正心清淨にして、即ち無上菩提の心を發し、諸の法門に於て、總持して忘れず。

爾時、兜率天王、佛の神力を承け、即ち自ら過去佛の所にて種るし所の善根を憶念して、偈を以て頌して曰はく、

【無礙の如來云云】
 以下の頌は十偈より成り、兜率天王過去の諸佛の許に於ける種種の善根を憶念して、諸佛の勝徳を讚歎す。

無礙の如來は猶し滿月のごとく、諸の吉祥の中に於て最も第一なり
 來りて衆寶の莊嚴殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
 無邊の如來は智甚だ深く、諸の吉祥の中に於て最も第一なり
 來りて清淨の金色殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり
 普眼如來は甚だ明淨にして、諸の吉祥の中に於て最も第一なり

來りて寶藏の蓮華殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり

珊瑚如來は色鮮潔にして、諸の吉祥の中にて最も第一なり

來りて清淨の寶藏殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり

最勝如來は論師子にして、諸の吉祥の中にて最も第一なり

來りて因陀の寶山殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり

滿月如來は徳無量にして、諸の吉祥の中にて最も第一なり

來りて妙華の寶藏殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり

無量如來は光際無く、諸の吉祥の中にて最も第一なり

來りて寶樹の莊嚴殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり

寶幢如來は疑惑を離れ、諸の吉祥の中にて最も第一なり

來りて妙寶の莊嚴殿に入りたまへり、最故に此處は最も吉祥なり

無量慧佛は人師子にして、諸の吉祥の中にて最も第一なり

來りて香山の莊嚴殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり

功德如來は光普く照し、諸の吉祥の中にて最も第一なり

來りて勝寶の莊嚴殿に入りたまへり、是故に此處は最も吉祥なり

此間の兜率天王、佛の神力を承け、過去の諸の等正覺を憶念し、偈を以て讚歎せしが如く、是の如く十方一切の世界の兜率天王も、各自ら過去佛の所にて種るし所の善根を

憶念し、偈を以て讚歎したてまつることも亦復是の如し。

爾時、世尊、一切の寶莊嚴殿の如意寶藏の師子の座に昇りて、結跏趺坐したまへり。清淨の法身三世の諸佛の境界自在は皆悉く平等にして、一向に寂靜なり。一切諸佛の莊嚴を以て自ら莊嚴し、無量無數の不可思議なる清淨の大菩薩衆は、悉く他方の世界より來り集り、如來は時を知りて爲に法を説きたまふ。法身は不二にして染著する所無く、諸佛の起す所の如來の法身は、諸の所行を離れたり。爾時、一切の寶莊嚴殿は、自然に無量無數なる不可思議阿僧祇の諸の供養具ありて、殊特奇妙にして、諸天の供養する所の上なるに出過せり。謂ゆる、華鬘、塗香、末香、寶衣、幢蓋、繒幡、種種の衆寶、伎樂もて恭敬し供養して如來を讚歎したてまつる。是の如き等の不可思議なる一切の供養の諸の莊嚴具は、此世界の四天下の兜率天宮の一切寶莊嚴殿の如意寶藏の師子の座の如く、一切十方の諸佛の世界も亦復是の如し。

大方廣佛華嚴經 卷第十四

東晋天竺三藏佛跋致陀羅譯

兜率天宮菩薩雲集讚佛品第二十

【讚佛品】第五會の第二品にして、前品と共に本會の序説たり。本品は説偈品とも言ひ、頌偈を以て諸佛を讚歎せり。

爾時、佛の神力の故に、十方各萬の佛世界塵數の刹を過ぎて、外に世界有り、堅固寶と名け、次を堅固金剛と名け、次を堅固寶王と名け、次を堅固金と名け、次を堅固摩尼と名け、次を堅固金剛と名け、次を堅固蓮華と名け、次を堅固青蓮華と名け、次を堅固梅檀と名け、次を堅固香と名く。其佛を壽無盡幢と號け、次を風幢と號け、次を清白幢と號け、次を威儀幢と號け、次を明相幢と號け、次を常幢と號け、次を上幢と號け、次を自在幢と號け、次を梵幢と號け、次を寧泰幢と號けたてまつる。彼諸の菩薩の名字は悉く同じく、其名を金剛幢と曰ひ、次を堅固幢と名け、次を勇猛幢と名け、次を夜光幢と名け、次を智幢と名け、次を寶幢と名け、次を精進幢と名け、次を離垢幢と名け、次を眞寶幢と名け、次を法幢と名く。彼諸の菩薩は各其國の佛の所に於て梵行を淨修せり。一一の菩薩は各萬の佛世界塵數に等しき菩薩の眷屬を將ゐて、佛の所に來詣し、稽首し禮敬す。佛の神力の故に、來りし所の方に隨ひて如意寶藏の師子の座を化作し、十方に充滿し

て、結跏趺坐せり。白淨の寶網を以て其身を覆ひ、又阿僧祇千億那由他の光明、離垢の光明、無量の光明を放ちて、普く十方を照せり。正直心を以て、三寶を攝取して諸の惡を遠離す、菩薩の大願の興起する所なり。一切の衆生觀じて厭足無く、見る者は虚しからず、調伏せざること無く、一切の佛の自在の淨法を顯はして、一切の衆生の爲に歸依の處と作り、勸化して菩薩の大願を發さしむ。此の諸の菩薩は、皆悉く無量の法門を成就せり。謂ゆる、遍く十方一切の佛刹に遊びて、障礙する處無き神足の法門、淨法身を見て著すること無き法門、慧身を住持して能く無數の變化の身と爲り、無量の所に往詣するの法門、無量無邊の不可思議なる如來の自在に入るの法門、無量無邊の一切智の法門。無量の光明普く諸法を照す無畏方便の法門、未來劫を盡して諸の功德の藏を分別し演説すとも盡すこと無き辯才の法門、一切の陀羅尼の慧光普く照すの法門、清淨の慧眼を成就して遍く法界を觀するの法門、智慧の境界は無量無邊にして、縛無く著無く、究竟なること虚空の如き法門なり。此世界の兜率天宮に菩薩雲集せるが如く、一切世界の諸の四天下の兜率天宮に雲集せる菩薩の從つて來たりし所の國も、諸佛の名號も亦復是の如し。

爾時、世尊、兩膝より百千億那由他の光明を放ちて、遍く十方の虚空法界に等しき一切の世界を照し、諸の四天下の兜率天宮の、一切の如來の神力自在は皆悉く顯現せり。彼諸の菩薩、其如來の神力自在を見たてまつることを得る有る者は、皆是盧舍那如來應

【爾時金剛幢菩薩云云】以下は金剛幢を第一として堅固幢、勇猛幢等各菩薩が佛の神力の加被に依りて、十方を觀じ諸佛を讚歎するを頌説す。總じて十段各段十偈より成る。

供等正覺の、菩薩の道を行じ、無量の諸の法門を修習せし時の善知識なり。是諸の菩薩は常に諸佛の甚深の解脫と、自在の神力とを樂ひて、不壞の法界身を得、無礙の三昧を得、不可思議の佛を見たてまつりて、心に所著無く、無礙の心を以て法界に充滿し、離垢の寶心は、常に諸佛の爲に護念せられ、佛の無量の住持の神力を得て決定し究竟じて彼岸に到り、清淨の正念もて、速かに等覺を成じて、諸の如來心の原底を得、深智慧に入りて自在を得、甚深の智に於て彼岸を究竟し、清淨の法身は佛の所住に住す。一切智を得て如來と等しく、智寶より起りて皆如來の妙趣の中に於て生れ、清淨なる智慧の法門を開發して、金剛大智の彼岸を究竟し、金剛の方便三昧を成就し、永く一切の愚癡闇冥を離れ、無量無邊無數の衆生を教化し成熟す。諸佛の一切の決定自在は彼岸を究竟し、一切の數に著せずして善く一切の數を學び、一切の數の智を究竟し、善く眞實の法に住せり。是の如き等の無量無邊の、稱り數ふべからず、窮盡すべからず、言説すべからざる諸の功德の藏を成就せり。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
 如來出世せず、亦涅槃有ること無し
 本の大願力を以て、自在の法を顯現したまふ
 是法は思議し難く、心の境界に非ず
 彼岸を究竟する智は、乃ち諸佛の境を見る

【如來出世云云】
以下十偈あり、佛の第一段にして、佛の救用無礙の徳を歎ず。

色身は如來に非ず、音聲も亦是の如し

赤色聲を離れて、佛の自在力有らず

少智は、甚深なる佛の境界を知ること能はず

本業を成就する智は、乃ち諸佛の境に達す

諸所は來る處無く、去るも亦至る所無し

清淨の妙法身は、自在力を顯現したまふ

無量の世界の中に、如來の身を示現して

廣く微妙の法を説き、其心に所著無し

無量無邊の慧は、諸法に障礙無く

深法界に入りて、自在力を顯現す

衆生及び諸法に、了達して障礙無く

變化身無量にして、遍く一切の刹に現す

一切智を求め、自然に正覺を成ぜんと欲せば

先づ當に其心を淨くし、具さに菩薩の行を修すべし

是の如くして如來の、無量の自在力を見れば

疑を除きて常に、無上の善知識に親近せん

爾時、堅固幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

【最上無過の者云云】以下十偈あり、第二段の諸佛偈にして佛の諸物の所依となる徳を明かす。その中初七偈は佛の勝徳を讃し、次二偈は修入を勧め、最後の一偈は見聞の利益を明かしてこの段を結了す。

最上無過の者は、甚深にして説くべからず
一切の語言斷えて、清淨なること虚空の如し
人師子を諦観するに、無量の自在力あり
諸佛に虚妄無く、世間は妄想より生ず
導師の演説する所、其法は甚だ深妙なり
因縁に隨順して、如來の清淨身を起す
斯等の大乘智は、諸佛の境界なり
若し此智を求めんと欲せば、常に應に佛に親近すべし
清淨の心もて、一切諸の導師を供養したてまつり
心常に厭足無くんば、究竟じて佛道を成ぜん
無盡の功德の藏は、菩提心を増長し
諸の疑惑を遠離し、佛を觀じて厭き足ること無し
一切の法を究竟じて、法化より生れたる佛子は
彼悉く能く、諸佛の自在力を解了す
智慧王の説く所は、欲を諸法の本と爲す
應に清淨の欲を起して、無上の道を志求すべし
若し能く諸佛を敬ひ、如來の恩を報ゆることを知らば

【眼有り日光有り云云】以下の十偈は佛の見聞弘益の徳を顯はす。初七偈は佛を歎じて修行の勝縁となし、後三偈は佛の自在なる徳を顯表し頌説す。

彼人は未だ曾て、一切諸の導師を離れず

是の如く、諸佛及び佛法を見聞することを得ば

清淨の願を具足して、無上の道を究竟せん

爾時、勇猛幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て對して曰はく、

眼有り日光有りて、能く細微の色を見るがごとく

最勝の神力の故に、淨心のもの諸佛を見たてまつる

勇猛に方便を勤めて、能く海の原底を盡す

智慧の力も是の如く、諸の佛海を究竟す

譬へば好良の田に、種を植うれば、必ず滋え繁るが如く

是の如く淨心の地は、諸佛の法を出生す

貧の寶藏を得て、飢寒の苦を除滅するが如く

菩薩は佛の法を得て、垢を離れ心清淨なり

譬へば伽陀樂の、能く一切の毒を消すが如く

天尊も亦是の如く、煩惱の毒を滅除す

善知識に因縁りて、佛を信する心を生長し

善知識に因縁りて、諸佛の法を聞くことを得

無量無数の劫に、常に無上の施を行ぜんも

【十方の諸の世界の云云】勝下の十の體を離れずして而も周遍する徳を讃稱す。その初一偈は佛の妙用の廣大なること、次の七偈はその甚深なること、最後二偈はその深廣なることを頌す。

若し能く一人を化せば、功徳は彼に超えん
 如來の相莊嚴、功徳は思議し難く
 諸佛の功徳の藏は、一切能く知る莫し
 如來等正覺は、一座を起たずして
 悉く能く十方の、一切諸の世界に遍じたまふ
 響へば虚空の性は、生ぜず亦滅せざるが如く
 諸佛の法も是の如く、亦復生滅無し
 爾時、夜光幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
 十方の諸の世界の、一切の群生の類は
 普く天人尊の、清淨なる妙法身を見たてまつる
 譬へば一心の力、能く種種の心を生ずるが如く
 如來の一法身は、諸佛の身を出生す
 菩提に二法無く、亦自性有ること無く
 無二の淨法身は、莊嚴せられて現ぜざる無し
 究竟すること虚空の如く、猶し幻化の現するが如く
 功徳は盡すべからず、其は唯諸佛のみの境なり
 三世一切の佛は、法身悉く清淨にして

其應化する所に隨ひて、普く妙色身を現じたまふ
未だ曾て、我是の如きの像を爲すとの想念を生ぜず

諸の希望を遠離して、自然に衆生に應ず
諸法の性を壞せず、亦法界に著せず

種種の形に應現して、衆生を教化するが故に
法身は變化に非ず、亦變化に非ざるに非ず

諸法に變化無けれども、變化有ることを示現す
正覺は量るべからず、究竟じて法界に等しく

深廣にして涯底無く、言語の道悉く斷えたり
一切趣の道法にて、如來は實義を知りて

一切の利に遊行したまひ、未だ曾て障礙有らさ
爾時、智幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

深智慧に入れば、一切障礙無く
其心齊限無くして、菩薩の行を修習す

普く十方の利に於て、常に一切の佛を見たてまつり
彼佛に處所無く、法にも亦所著無し

一一の諸の如來は、自在力無量にして

【深智慧に入れば】以下の十偈は佛の應現出生の無盡無礙なる徳を讚歎す。その中初四偈は佛徳の無限、次四偈は佛の一異無礙一即多なる妙用を、最後の二偈は佛の生滅自在なる徳を歎す。

【如來の身は無量なるも云云】以下の十偈は佛の心身を自在にして出生無礙、無盡圓滿の徳を讃歎す。

不可思議の劫に、之を説くとも窮盡すること無し
三世の諸の衆生は、悉く其數を知るべきも

導師の功德の藏は、其數を盡すべからず

無二不思議にして、種種の身に應現し

十方見ざることも無く、未だ曾て別異有らず

譬へば淨滿月の、普く一切の水に現じ

影像は無量なりと雖も、本の月は未だ曾て二ならざるが如し

是の如く無礙の智は、等正覺を成就して

一切の刹に應現するも、佛身は初より無二なり

一に非ず亦二に非ず、亦復無量に非ず

其應化する所に隨ひて、無量の身を示現す

佛身は過去に非ず、亦復未來に非ず

一念に出生と、成佛と入涅槃とを現す

譬へば幻化の色は、生ぜず亦滅せざるが如く

佛身も亦是の如く、寂然として生滅無し

爾時、寶幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
如來の身は無量なるも、衆生は量有りと思見る

彼應化する所に隨ひて、導師は爲に身を現じたまふ
 法身は處所無くして、十方界に充滿し
 佛身は思議し難く、空の分際無きが如し
 彼に心意識無く、亦心想を起すことも無く
 諸佛の境界は、究竟じて生滅無し
 譬へば日無き人の、内外の色を觀ざるが如く
 如來出世したまはざれば、一切の法を見ず
 衆生を饒益せんが故に、如來は世間に出でたまひ
 衆生は出でたまふ有るを見るも、而も實には世に興ること無し
 佛刹は如來に非ず、晝夜も亦是の如く
 年月より一年に至るまで、悉く等正覺に非ず
 衆生は咸説いて言はく、佛日世間に出でたまふと
 導師は自ら覺悟し、如來は淨日に非ず
 虛妄にして所有無く、言語の道悉く斷ゆ
 三世の諸の如來の、出世も亦是の如し
 譬へば清淨の日は、晝夜と俱ならざるも
 而も日夜の相を説くが如く、諸佛も亦是の如し

【一切諸の導師は
六云】以下の十偈
は佛徳の同異無礙
にして、即ち一法
身(同)を以て衆の
諸徳の業の異に應
じて顯現し給ふ徳
を讚歎す。

三世一切の劫は、如來と俱ならざるも
而も三世の佛を説く、導師の法も是の如し
爾時、精進幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
一切諸の導師は、身同じく義も亦然り
普く十方界に於て、應に隨ひて各別異なり
牟尼尊を觀察するに、境界甚だ深妙にして
諸の法界に充滿し、一切悉く餘すこと無し
如來の淨法身は、是内心の數に非ず
如來の淨法身は、亦外身の數に非ず
彼衆生の行ずる、種種無量の業に隨ふ
是故に如來を見たてまつるに、各各悉く同じからず
如來の妙法身は、一切能く數ふること莫く
甚深にして思議し難し、唯是れ佛のみの境界なり
我は境界に非ず、思量の及ばざる所なるが如く
佛の法身も是の如く、一切能く測ること莫し
刹は思議し難くして、而も淨き莊嚴を見るが如く
佛身も亦是の如く、妙相現せざる無し

【諸佛の智慧の光云云】以下の十偈は佛の淨徳は法界を淨むることを讃歎す。その中初三偈は佛の身智淨、次二偈は三業淨、次三偈は融攝淨、最後の二偈は離妄淨を頌説す。

猶一切の法は、因縁和合して生ずるが如く
是の如く因縁會へば、諸の如來を見たてまつることを得
譬へば隨意珠の、悉く衆生の意を満すが如く
諸佛の法も是の如く、能く一切の願を満す
無量の世界の中に、導師世に興り
如來の本願力にて、普く十方界に應じたまふ

爾時、離垢轉善齒、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

諸佛の智慧の光は、圓滿にして世間を淨む
能く世間を淨め已りて、諸佛の法に入らしむ

設ひ人有りて、衆生の數に等しき佛を見たてまつらんと欲すとも
如來は一切に應じたまひて、而も實には來處無し
専ら佛の境界を念じて、無量の心を生起せば

見たてまつる所の諸の如來は、其數、心と等し
白淨の法を具足してて名聞十方に満ち

彼は一切智に於て、其心安んじて動ぜず
導師は衆生の爲に、應の如く法を演説し

所宜見の處に隨ひて、普く最勝の身を現じたまふ

『正覺は十方の云
 佛の無方（空間的
 制限なき意）の空
 用はその眞如（空
 寂）の體に同ずる
 もものなることを明
 かす。初二偈は無
 方の大用（はたら
 はその用）はたら
 き）を會通して體
 に同ずるを頌す。

佛身は我所に非ず、世界も亦是の如し
 心は我所に非ずと説きて、無我の菩提を覺る
 一切の人師子は、無量の自在力もて
 念に等しき身を示現して、種種の相もて莊嚴す
 世間は即ち是身、身は即ち是最勝なり
 身の眞實性を知るは、是佛の無礙智なり
 一切知見の人は、普く諸法を明照し
 佛法と及び菩提とを、求むるに悉く得べからず
 導師には來去無く、亦復所住も無く
 諸の顛倒を遠離したる、清淨の等正覺なり
 爾時、眞寶幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、
 正覺は十方の、一切諸の世界に遊びて
 一刹を離れずして、普く諸の國土に現じたまふ
 如來の自在力は、一切の身に應現して
 道を得、法輪を轉じ、般涅槃を究竟したまふ
 誰か佛を思議すと爲し、誰か思議せずと爲す
 誰か諸の如來を見たてまつる、誰か等正覺と爲す

一切の法は皆如なり、諸佛の境も亦然り
乃至一法として、如の中に生滅有ること無し
衆生は虚妄の故に、是佛なり是世界なりとなす
若し眞實を解る者には、佛も無く世界も無し
衆をして歡喜せしめんが故に、普く一切の前に現するも
如來の現じたまふ所の身は、畢竟不可得なり
一切の障を遠離して、無礙安隱に住し
諸の留難を除滅して、諸佛の法を具足す
一切の如來は、神通の力自在にして
悉く三世の中に於て、之を求むるも得べからず
是の如く心識を知り、明かに一切の法を解れる
一切知見の人は、速かに等正覺を成ぜん
如來の自在力は、但假りの言説有るのみ
諸佛及び自在は、一切の言語斷えたり
爾時、法幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て尋して曰はく、
寧ろ無量の劫に於て、具さに一切の苦を受けんも
終に如來を遠ざからず、自在力を觀ざらんや

【寧ろ無量の劫に於て云云】以下の十偈は最後の結願

にして、佛法を聞
見する勝益を頌
す。その中初二偈
は近佛の利益、次
三偈は佛所に於て
發心するの益、次
二偈は開法の益、次
最後の三偈は佛所
に於て甚深の解を
生ずる利益を明か
せり。

無量の生死の中に、未だ曾て道心を發さざるも
若し如來を聞見せば、佛の菩提を具足せん
聰達明慧の者、若し一たび道心を發さば
汝疑惑を生じて、自ら成佛せじと謂ふこと莫れ
無量無數の劫にも、菩提心は得難し
若し能く一心に求めば、無上の道を究竟せん
設ひ念念の中に於て、無量の佛を供養すとも
是方便を知らざれば、彼猶供養に非ず
若し是の如きの法を聞かば、諸佛は此より生れ
無量劫に苦を受くとも、決定して菩提を求めん
一たび摩訶衍は、諸佛所乘の乘なりと聞かば
一切の法界の中に、三世に導師と爲らん
未來劫に、一切諸佛の刹を盡すと雖も
方便を解らざる者は、終に菩提を成ぜざらん
過去無量の劫に、生死に流轉して
眞實の法と、如來の所起の處とを知らず
諸法は壞すべからず、亦法を壞する者無し

諸の世間を照明して、自在の法を示現す

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之一

【十廻向品】第五
兜率天十廻向會の
第三品に當り、本
會の正説なり。十
廻向を説き、廣く
十種の大行を衆生
と菩提に廻向
し、無涯の行海を
以て無涯の行海に
隨順し、以て善賢
法界の功德を成就
することを開か
す。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承け、菩薩の明智三昧の正受に入りたまふ。正受に入り
已りて、十方各百萬の佛刹微塵數に等しき世界の外を過ぎて、各百萬の佛刹微塵數の諸佛
を見たてまつる。是諸の如來は悉く金剛幢と號く。時に彼諸佛、金剛幢菩薩に告げて曰
はく、善い哉善い哉、佛子。乃ち能く是菩薩の明智三昧の正受に入る。善男子、十方各
百萬の佛刹微塵數に等しき世界の諸佛は、汝に神力を加したまふが故に、乃ち能く是三昧
正受に入る。又盧舍那佛の本願力の故に、威神力の故に、汝が智慧清淨なるが故に、
諸の菩薩の善根力の故に、菩薩をして清淨なる無所畏を得しめんと欲するが故に、無
礙不斷の辯を得しめんが故に、無礙智の地に入らしめんが故に、佛の一切智の廣大心に入
らしめんが故に、無盡の諸の善根を具せしめんが故に、無礙の白淨法を満足せしめ
んが故に、普門の法界に入らしめんが故に、一切の佛の神力變化を顯現せしめんが故に、
過夫際を淨念する智慧を離せざらしめんが故に、一切の佛を分別して諸の根を住持せし
めんが故に、無量の法門を以て廣く法を説かしめんが故に、無量の法を開持し了知せしめ
んが故に、十廻向を具足し演説せしめんが故に、一切菩薩の諸の善根を攝取せしめんが

【爾時云云】この
一節は本品の對古
衆たる金剛幢菩薩
の入定及佛の加
被力を叙す。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承け、菩薩の明智三昧の正受に入りたまふ。正受に入り
已りて、十方各百萬の佛刹微塵數に等しき世界の外を過ぎて、各百萬の佛刹微塵數の諸佛
を見たてまつる。是諸の如來は悉く金剛幢と號く。時に彼諸佛、金剛幢菩薩に告げて曰
はく、善い哉善い哉、佛子。乃ち能く是菩薩の明智三昧の正受に入る。善男子、十方各
百萬の佛刹微塵數に等しき世界の諸佛は、汝に神力を加したまふが故に、乃ち能く是三昧
正受に入る。又盧舍那佛の本願力の故に、威神力の故に、汝が智慧清淨なるが故に、
諸の菩薩の善根力の故に、菩薩をして清淨なる無所畏を得しめんと欲するが故に、無
礙不斷の辯を得しめんが故に、無礙智の地に入らしめんが故に、佛の一切智の廣大心に入
らしめんが故に、無盡の諸の善根を具せしめんが故に、無礙の白淨法を満足せしめ
んが故に、普門の法界に入らしめんが故に、一切の佛の神力變化を顯現せしめんが故に、
過夫際を淨念する智慧を離せざらしめんが故に、一切の佛を分別して諸の根を住持せし
めんが故に、無量の法門を以て廣く法を説かしめんが故に、無量の法を開持し了知せしめ
んが故に、十廻向を具足し演説せしめんが故に、一切菩薩の諸の善根を攝取せしめんが

故に、出世間の法に安住せしめんが故に、一切智を斷絶せざらしめんが故に、大願を開發せしめんが故に、眞實の義に入らしめんが故に、法界を知らしめんが故に、一切の菩薩をして悉く歡喜せしめんが故に、一切の佛と同じき善根を修せしめんが故に、一切如來の性を護持せしめんが故に。善男子、汝當に佛の神力を承け此法を演說すべし。佛の家に安住せんが故に、出世間の諸の功德を長養せんが故に、陀羅尼の光明に入らんが故に、諸佛の滅度せざる法に入らんが故に、普く法界を照さんが故に、自淨離惡の法を積集せんが故に、廣き智慧の境界住に住せんが故に、無障礙の法、光明住に住せんが故に。○
爾時、諸佛は即ち金剛幢菩薩に無量の智慧を與へ、善方便もて分身を分別し、無留礙の辯を與へ、無障礙の法明を與へ、一切如來の共にする所の身を與へ、無量の微妙の音聲を與へ、諸の菩薩の不可思議なる三昧方便を與へ、等心に善根を廻向する智慧を與へ、一切の法を觀察して出生する無量の方便を與へ、一切處に説法して斷ずること無き辯才を與へたまへり。何を以ての故に、彼三昧の善根力の故に。

【佛子は菩薩云云】
以下は正しく十廻向の本説にして、十廻向の種目を舉ぐ。

爾時、諸佛は、各右の手を申べて金剛幢菩薩の頂を摩でたまへり。其頂を摩でたまふこと已りし時に、彼菩薩は、即ち定より起ちて、衆の菩薩に告げて言はく、「佛子、是菩薩摩訶薩の不可思議の大願は、悉く普く一切の衆生を救護せんとす。菩薩摩訶薩は此願を立て已りて、三世の諸佛の廻向を修學す。佛子、何等をか菩薩摩訶薩の廻向と爲す。菩薩摩訶薩の廻向に十有り、去來今の佛は悉く共に演說したまふ。何等をか十と爲す。一

て廻向し、第四段には大志を孤標し、善く衆生のため、無念に廻向することを明かし、最後に離衆生相即ち實際廻向を明かし、第一の廻向行を終る。

【破戒生盲】破戒は佛戒を破する闇提(信を具せざる者)にして、生盲は佛の正法を疑ひ、誘る闇提なり。俱に佛法の正機にあらず。

【乾闥婆城】(Kāṭhavaṇa)印度の蜃氣樓なり。印度に於て、往時龍神の空中示現の城廓なりとの信仰ありしもの。

故に。一切衆生の爲に導と作らん、方便の法に入らしめんが故に。一切衆生の爲に主寶臣と作らん、無礙の淨智身を得しめんが故に。佛子、菩薩摩訶薩は、是の如き等の無量の善根を以て廻向して、一切衆生をして一切智を究竟せしむ。

佛子、此菩薩摩訶薩は、怨親の爲の故に、諸の善根を以て廻向し、等しくして差別無し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は平等觀に入りて怨親無きが故に、常に愛眼を以て諸の衆生を視ればなり。若し衆生惡を懷き、菩薩の所に於て怨逆の心を起さば、菩薩摩訶薩は、一切衆生の爲に、善知識と作りて、廣く爲に諸の深妙の法を分別す、譬へば大海の一切の衆毒も壞すること能はざる所なるが如し。菩薩も亦復是の如し。一切の童蒙愚癡にして智無く、恩を報ゆることを知らず、瞋恚貢高にして、破戒生盲なる、是の如き等の類の無量の過惡も、菩薩の道心を動亂すること能はず。譬へば日天子出でて、普く天下を照すとき、盲人の故を以て、隠れて現ぜざるにあらず、又復乾闥婆城、四城の塵障、阿修羅の障、閻浮樹の蔭、及び餘山の障、是の如き等の類の無量の障蔽を以ての故に、隠れて現ぜざるにあらずるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、常に正しく憶念して未だ曾て散亂せず、深廣安諦にして、心に愛感無し。正意に思惟して、悉く功德智慧を究竟せんと欲し、清淨の法光普く世間を照して、眞實の義を示し、一切諸法の智門を淨修し、諸の衆生の爲に常に善根を修す。一切衆生に無量の惡行をも、菩薩摩訶薩は惡衆生の故を以て、嫌恨退没して廻向を行ぜざるにあらず。調伏し難き衆生の故を以て、善根を退捨して廻向を

行ぜざるにあらす。衆生の邪見瞋濁なる有りと雖も、大莊嚴に於て其心轉ぜず、大願を捨てずして衆生を救護す。若し衆生の濁惡にして信無く、恩を報ゆることを知らざるを見るも、菩提を修習して未だ曾て悔廢せず。若し愚癡童蒙と事を共にするも、心に憂惱無し。何を以ての故に、我明淨圓滿の慧目を以て世間に出で、清淨に一切の衆生を調伏すればなり。菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に、發心して阿耨多羅三藐三菩提を求め、善根を廻向せず。一佛刹を嚴淨せんが爲の故ならず、一佛を信ぜんが爲の故ならず、一佛を見んが爲の故ならず、一佛の法を聞かんが爲の故ならず、一願を満足せんが爲の故ならず。菩薩摩訶薩は悉く一切の衆生を救護せんと欲するが故に、善根を以て廻向す。一切の佛刹を具足し嚴淨し、一切の佛を信じ、一切の佛を見、一切の諸佛を恭敬し供養し、一切の佛の説きたまふ所の正法を聞き、一切の大願を満足せんが故に、諸の善根を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。菩薩摩訶薩は復是念を作さく、「菩提心の寶を發すは、即ち是れ如來の境界の力なり、廣大、平等にして、憍怠有ること無く、一切の劫に於て修學するも得難く、諸佛と等し」と。菩薩摩訶薩は是の如く諸の善根を觀じて、信心清淨にして大悲を長養し、諸の善根を以て、普く衆生の爲に深心に廻向し、但口言のみに非ず。諸の衆生に於て歡喜の心、明淨の心、柔軟の心、慈の心、愛念の心、攝取の心、饒益の心、安樂の心、最勝の心を發して、諸の善根を以て廻向す。菩薩摩訶薩は諸の善根を以て廻向する時、是の如きの念を作さく、「若し我が有する所の廻向の功德もて、一切の衆生をして清

【七財】 出世間即ち悟界（三界又は迷界に對する）の七種の法なり。この七種は善く道果を得る資となるを以て財と云ふ。七種とは信、進（精進）、戒、慚愧、捨（布施）、定、慧（止觀）を言ふ。

淨の趣を得、清淨の生を得しめば、功德満足して一切世間に能く壞する者無く、窮盡すべからず、常に尊重なることを得て心錯謬せず、一切の諸趣を分別し了知し、諸佛の身口意業を具足し莊嚴したまふことを思量して、一切の功德を具足し莊嚴せん」と。復是念を作さく、「此善根廻向の功德を以て、一切の衆生をして常に諸佛を見たてまつらしめ、彼佛の所に於て不壞の信を得、諸佛の所に於て正法を聽受し、諸の疑惑を離れ、憶持して忘れず、説の如く修行して、如來の所に於て、柔軟の心を得、身口の業を淨め、心常に勝妙なる善根に安住し、永く貧の法を離れて、七財を満足せしめ、一切諸佛の所學を修學し、諸の善根を得て、平等なる淨妙の解脫と、一切種智とを成就し、一切の衆生に於て、慈愛の眼を得、其身清淨にして相好莊嚴し、言論辯慧の功德具足して、諸根を調伏し、十力を成就し、諸の善を發起し、心満足に住して染著する所無く、一切の衆生をして佛の快樂を具へ、無量住を得、佛の所住に住せしめん」と。

此菩薩摩訶薩は、復是念を作さく、「一切の衆生は無量の諸の不善業を造作す。是業に因るが故に無量の苦を受け、如來を見たてまつらず、正法を聞かず、淨僧を識らず。此の諸の衆生には具さに無量の大惡罪業有りて、應に無量無邊の楚毒を受くべし。我當に彼三惡道の中に於て、悉く代りて苦を受け、解脫を得しむべし。我當に代りて無量の苦惱を受くるも、苦の故を以て其心退轉し、恐怖し、懈怠して衆生を捨離せざるべし。何を以ての故に。我衆生の爲に重擔を荷負して平等の願を滿じ、一切の生老病死、愁憂苦惱、無

量の諸難ありて、生死に流轉し、一切の邪見もて諸の善法を失ひ、愚癡にして智無きものを度脱す。我當に悉く度して此業苦を免がれしむべし」と。衆生は常に愛網の爲に纏はれ、無明に覆蔽せられ、有愛に染著して之が爲に走使せられて、自在を得ず、苦獄に縛在し、諸魔の業に隨ひ、諸佛の所に於て心に疑惑を生じ、出世の道を得ず、安隱の處を見ず、常に無量の生死の曠野に馳せて無量の苦を受く。菩薩摩訶薩は彼衆生の生死の淵に没して、衆の禁毒を受くるを見て、大悲の心を起し、衆生を憐愍して善利を得、苦難を免度せしめんとて善根を廻向す。大廻向を以て廻向し、三世の菩薩の廻向の如くし、諸佛の説きたまふ所の大廻向經の廻向の如くし、一切の衆生をして悉く清淨を得、善根を具足し、一切智を究竟せしむ。復是念を作さく、「我當に悉く一切の衆生をして、無上の智王の安隱の住處を得しむべし。百度の爲にあらず、但彼をして生死の淵を出でて、一切智の心を得しめんと欲す。衆生を惡道、峻谷より拔ひ出し、無量の苦を救ひ、生死の流を度らしむべし」と。復是念を作さく、「我當に一切衆生の爲に、無量の苦を受け、諸の衆生をして、悉く生死の沃焦を免れ出づることを得しむべし。我當に一切衆生の爲に、一切の禍、一切の地獄の中に於て、一切の苦を受けて終に捨離せざるべし。我當に一一の惡道に於て、未來劫を盡して諸の衆生に代りて無量の苦を受くべし。何を以ての故に。我寧ろ獨り諸の苦を受けんも、衆生をして諸の禁毒を受けしめざらん。當に我が身を以て一切の惡道の衆生を平贖して、解脱を得しむべし」と。菩薩摩訶薩復是念を作さく、「我悉く當に一

切衆生の爲に、誠實に語る者と作り、惱害の心を離れて衆生を捨てざるべし。何を以ての故に。我衆生に因りて菩提心を發し、一切を度脱せんとし、尊貴を求めず、五欲を求めず、世間の種種の樂を求めざるが故に、菩薩の道を行す。何を以ての故に、五欲は是れ世間の法、諸魔の境界にして、愚人の行する所、諸佛は訶責したまふ。彼は能く一切の苦惱、地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の處に出生して、忿恚、鬪諍して、更に相訟説するは、皆五欲に由る。五欲を積習せば、諸佛を遠離し、能く生天を障ふ、況んや無上の道をや」と。菩薩は明らかに五欲には是の如き等の無量の過患有るを見る。是故に五欲を以て菩薩の行を修せず。但衆生を饒益し安隱にして菩提心を發し、無上の道を求めしめ、一切の衆生をして一切の利を得しめ、諸の大願を具へ、衆生の煩惱鉤餌を斷絶し、無量の苦を離れしめんと欲す。菩薩摩訶薩、復是念を作さく、「我當に諸の善根を以て廻向して、一切の衆生をして種種の樂、究竟の樂、饒益の樂、不共の樂、寂靜の樂、無染の樂、無動の樂、無量の樂、不死不轉の樂、不滅の樂、一切智の樂を得しむべし。我當に一切の衆生の爲に、調御士と作り、主藏臣と作り、大明炬と作りて、安隱の趣を示し、諸難を離れ、一切の法を解らしむべし。我當に諸の甚深の義を解らしむべし。我當に爲に一切智の船と作りて、生死の海を度らしむべし。我當に無量の善根の廻向を知らしむべし。我當に悉く爲に彼岸を示現すべし」と。菩薩摩訶薩は是無量の善根廻向を以て、一切を救護して、生死の海を度らしめ、諸の如來をして皆悉く歡喜せしめ、一切智を得て衆魔を捨離し、惡知識を

遠ざけて、菩薩の勝れたる善知識に親近し、淨業を成就して盡く衆惡を滅し、菩薩の無量の願行、一切の善根を具足す。

菩薩摩訶薩は諸の善根を以て正しく廻向し已りて、是の如きの念を作さく、「四天下の一一の衆生を以ての故に一一の日出でず、但一の日世に出でて、悉く能く普く一切の天下を照す。又諸の衆生は自身の光明を以て、晝夜有ることを知り、遊行し觀察して諸業を興造せず。皆日天子出でて普く天下を照すに由り、一切の衆生業として就らざる無し」と。菩薩摩訶薩も亦復是の如く諸の善根を修して廻向し、普く衆生の爲にし、是の如きの念を作さく、「彼諸の衆生は智慧の光無く、尙自ら照らさず、何に況んや他を照すをや。唯我一人の志のみ獨にして侶無く、諸の善根を修して廻向し、一切の衆生を度脱せんが爲に、普く一切の衆生を照し、一切の衆生を分別し、一切の衆生に了達し、一切の衆生をして甚深の法に入らしめ、一切の衆生を攝取し、一切の衆生を成就し、一切の衆生を悅樂し、一切の衆生を柔軟にし、一切の衆生の疑惑を滅除せしめんと欲す」と。菩薩摩訶薩復是念を作さく、「我當に修學して、日天子の普く一切を照すが如くなるべし。恩報を求めず、惡業生の爲の故に大莊嚴を捨てず、亦一惡業生を以ての故に、一切を捨離して度脱せざることをせず。但勤めて善根を修習して廻向し、衆生をして一切の樂を得、少善根を攝して廣大に廻向せしめんと欲す。若し諸の善根にして衆生を饒益する能はずんば我終に善根を以て廻向せざらん。諸の善根を以て、悉く衆生に與へて發心し、廻向し、一切の衆生を

して諸法に著せざらしめんが故に廻向し、衆生の性を以て廻向して而も所至無し」と。

菩薩は是の如く廻向して亦所著無し。所有の性を取して、諸の善根に安住せず、相を取せずして廻向し、業報は虚妄にして所有無く、亦所著無し。五陰の相を取せずして廻向し、報を求めず、虚妄の因縁を五陰の相を壊せずして廻向し、虚妄の業を取せずして廻向し、報を求めず、虚妄の因縁を起さず、生ぜず、起らず、住せず、堅固の相に住せず、虚妄の法に住せず、衆生の相を取らず、世界を分別せず、心の顛倒、想の顛倒、見の顛倒に住せず、語言の道に著せず。但衆生をして眞實の法を解らしめんと欲して廻向し、一切の衆生は平等なりと觀察して廻向し、法界印もて諸の善根を印して廻向し、欲等の法を離れ善根を觀察して廻向し、一切の法を解りて顛倒を離れ諸の善根を得、無二の法を以て法界を觀察して廻向し、彼廻向は諸法を生ぜず、諸法を滅せず、是の如き等の善根を以て廻向す。清淨なる諸の對治法を修行して廻向し、一切の善根を觀じて皆悉く出世間の法に廻向し、彼善根に於て、二相を作さず、薩婆若は即ち是れ業に非ず、亦業を離れずして廻向し、薩婆若を觀察するに、即ち是れ業にあらず、亦業を離れて薩婆若を得ず、願智の業は照明清淨なるが故に、報も亦照明清淨なり、報の照明清淨なるが故に、薩婆若も亦照明清淨なり。一切の動亂、覺觀、憍慢、放逸を捨離す。方便智に隨ひて諸の善根を以て廻向し、一切の衆生をして悉く眞實の究竟解脱を得しめ、法性に著せずして無量無邊の善根もて廻向すれば、諸法は業報無くして而も業報を出生す。菩薩摩訶薩は是の如き等の善根廻向を以

方便智に隨ひ云云以下の一節は善に依つて用を起すことを明して、第一廻向行を説き了る。

【不思議の劫に修行する所は】以下の重頌は二十八偈より成り、前長行を頌す。その中、初五偈は總説にして、佛の殊勝なる徳を歎じ、次三偈は廻向の行體を、十偈は衆生及び菩提に廻向すること、十偈は實際廻向の十偈は實際廻向を頌し、其中、初三は相を會して實に入らしめ、後七は實により用を起すことを頌せり。

て、即ち能く永く一切の諸惡を離れ、佛の讚歎したまふ所となる。佛子、是を菩薩摩訶薩の第一の救護一切衆生離衆生菩提廻向と名く。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方、及び一切の衆を觀じ、法界を觀察して深き句義味に入り、大悲普く一切の衆生を覆ひ、三世の佛種を護持して斷たず、一切の佛の諸の功德の藏に入りて、諸佛の清淨なる法身を出生し、善能く諸の衆生心の、過去に種えし所の一切の善根を分別し、時を知りて失はず、法身を具足して、善能く清淨の色身を示現し、偈を以て頌して曰はく、

不思議の劫に修行する所は、常に諸の群生を饒益せんが爲なり
精進堅強にして意礙ふること無く、常に諸佛の妙功德を求む

其心清淨にして瞋恚を離れ、調御師を恭敬し供養して
深く諸法を解りて衆生を救はば、彼は能善く、廻向藏に入らん
勇猛精進の力を具足し、智力照明にして甚だ清淨

忍心堅固にして傾動せずんば、常に能く諸の群生を救護せん
無等の所に於て心安仕し、踊悅歡喜して意清淨となり
菩薩の忍力は大地の如くにして、悉く能く諸の衆生を饒益せん

苦行を以て自ら業を求めず、大慈悲もて無量の行を起し
常に能く諸の群生を救護せば、彼人速かに無礙地に入らん

十方一切の諸の世界、其中の衆生を皆攝取して
常に衆生の爲に心安住ならしめ、無量の諸の廻向を修學す
歡喜の心を以て布施を行じ、清淨の戒を具足し護持し
勇猛精進の心堅固にして、清淨の智慧もて善く廻向す
其心廣大にして量るべからず、忍力堅強にして常に廻向し
一切諸の禪定を淨修し、智慧深妙にして思議し難し
十方一切の世界の中に、清淨の行を具足し修習して
智慧もて諸の功徳を廻向し、一切の樂を以て衆生を益す
彼人、諸の善業を積集すること、無量無邊にして數ふべからず
衆生をして具さに修習し、不思議なる深妙の智に住せしめんと欲す
普く一切の衆生の爲の故に、不思議の劫に地獄に住して
菩薩の心常に懈怠無く、決定して功徳を常に廻向す
色聲諸の香味を求めず、亦一切の觸を希望せず
常に無上の最勝智を求めて、一切諸の群生を度脱す
菩薩の智は淨きこと虚空の如く、普く無量の居士の行を行じ
最勝の行じたまふ所の淨き業道を、無量の名稱は常に修行す
菩薩は諸の世界に遊行して、常に能く群生の類を安隱にし

悉く一切をして皆歡喜せしめ、菩薩の行を修して厭き足ること無し
一切の心の垢穢を除滅して、無上の智を思惟し修習するも
自ら己が爲に安樂を求めず、常に諸の群生を利益せんと欲す
菩薩は廻向して彼岸に到り、無量の心の穢毒を除滅し
三世の佛の無量清淨なる、諸の功徳を具足し修習す
菩薩は未だ曾て色に染著せず、受想行識にも亦是の如し
一切諸の三界に住せずして、有ゆる功徳を悉く廻向す
諸佛の知りたまふ所の衆生の類は、皆悉く攝取して餘り有ること無く
究竟して諸の群衆を度脱す、是を菩薩の殊勝の行と名く
菩薩は一切の心安住し、開悟彌廣くして稱るべからず
衆を離れて正念に諸根を伏し、身口意の業は常に寂然たり
一切内外の有ゆる法は、皆悉く虚妄にして眞實無く
風の空を行くに礙ふる所無きが如く、菩薩の心行も亦是の如し
起す所の身業は常に清淨にして、能く諸佛をして悉く歡喜せしめ
最勝の所に於て言慮しからず、意は常に専ら諸の如來に向ふ
十方の無量の諸の世界の、有ゆる最勝に悉く往詣して
彼に於て大悲の尊を覩見したてまつり、悉く能く之を恭敬し俱養したてまつる

廻向を以て、彼衆生をして諸の善利を獲しめて不壞の信を得。白淨の善根に於て、不壞の信を得。何を以ての故に。一切諸の善根を修集するが故に。一切の菩薩の廻向に於て不壞の信を得、直心解脫して満足を得るが故に。一切の菩薩、諸の法師の所に於て、不壞の信を得、具足して如來の想を起すが故に。如來の自在神力に於て不壞の信を得、諦かに諸佛の難思議なるを信するが故に。一切の菩薩の方便に於て不壞の信を得、種種無量無數の行の境界を攝取するが故に。佛子、菩薩摩訶薩は是の如く壞すべからざる信に安住し、諸佛、菩薩、聲聞、緣覺、如來の正教、一切の衆生、是の如き等の無量の境界に於て、諸の善根を種る、諸の善根を分別して、菩提心を長養し、大慈を修習し生する所の善根あり。廣く大悲を修して平等に觀察し、佛の所學を學び、諸佛に隨順して、一切の清淨なる善根を攝取し、深く實義に入り、功德の藏を集め、大惠施を行ひて諸の功德を修し、等しく三世を觀す。菩薩摩訶薩は、是の如き等の善根功德を一切智に廻向して、常に諸佛を見たてまつり、善知識に親近し、常に無量の諸の菩薩と會し、薩婆若を念じて心に散亂無く、諸佛の教を受けて護法の心を興し、一切の衆生を教化し成熟して、心常に出世の廻向を離れず、一切の法師を供養し守護して、諸法を解了し、一切の大願を修習し満足す。菩薩摩訶薩は是の如く精勤して、無量の善根を修習し、善根を積集し長養して、正念に思惟し、境界の眞實等の義を觀察し、恭敬し、供養し、威儀具足して善根を廻向す。

菩薩摩訶薩、善根を廻向し已りて、是の如きの念を作さく、此善根の廻向の得る所の依
 果を以て、我をして菩薩の行を修行せしむる時、念念の中に於て、一切の佛を見たてまつ
 り、彼諸佛をして皆悉く歡喜せしめ、諸の如來應供等正覺に於て、佛の所應の如くに以
 て供養したてまつる。阿僧祇の寶、阿僧祇の華、阿僧祇の香、阿僧祇の塗香、阿僧祇の鬘、
 阿僧祇の衣、阿僧祇の蓋、阿僧祇の幢、阿僧祇の幡、阿僧祇の莊嚴、阿僧祇の莊嚴具、阿
 僧祇の供給、阿僧祇の末香、阿僧祇の信樂、阿僧祇の敬念、阿僧祇の淨信、阿僧祇の堅固
 の香を燒き、阿僧祇の上味の飯食、阿僧祇の恭敬、阿僧祇の禮拜、阿僧祇の一切の寶座、
 阿僧祇の一切の華座、阿僧祇の一切の香座、阿僧祇の一切の鬘座、阿僧祇の一切の清淨
 なる栴檀の座、阿僧祇の一切の衣座、阿僧祇の一切の金剛座、阿僧祇の一切の摩尼寶座、
 阿僧祇の一切の寶網座、阿僧祇の一切の寶色座、阿僧祇の一切の寶輪、阿僧祇の一切の華
 輪、阿僧祇の一切の香輪、阿僧祇の一切の鬘莊嚴輪、阿僧祇の一切の寶衣輪、阿僧祇の一
 切の寶莊嚴輪、阿僧祇の一切の寶網敷輪の建立、阿僧祇の一切の寶多羅高懸輪、阿僧祇の
 一切の寶欄栴輪、阿僧祇の一切の寶網輪を其上に羅覆したる、阿僧祇の一切の妙寶宮殿の
 嚴飾殊特にして諸天に出過せる、阿僧祇の一切の華宮殿、阿僧祇の一切の香宮殿、阿僧祇
 の一切の寶臺宮殿、阿僧祇の一切の栴檀宮殿、阿僧祇の一切の堅固香藏宮殿、阿僧祇の一
 切の金剛宮殿、阿僧祇の一切の摩尼寶宮殿、皆悉く殊妙にして諸天に出過せる、阿僧祇
 の諸の雜寶樹、阿僧祇の種種の香樹、阿僧祇の諸の寶衣樹、阿僧祇の妙音樂樹、阿僧

祇の妙音聲樹、阿僧祇の無厭寶樹、阿僧祇の垂寶網幡樹、阿僧祇の寶莊嚴樹、阿僧祇の一切の華、一切の鬘、一切の香、一切の塗香、一切の蓋、一切の幢、一切の幡樹、是の如き等の諸の妙寶樹、莊嚴殊特なるを以てて莊嚴したる無數の宮殿、阿僧祇の寶欄楯の莊嚴、阿僧祇の寶窓莊嚴、阿僧祇の寶欄閣莊嚴、阿僧祇の内帳莊嚴、阿僧祇の半月莊嚴、阿僧祇の樓閣莊嚴、阿僧祇の寶帳莊嚴、阿僧祇の白寶の網を其上に羅覆し、阿僧祇の堅固の香を燒き、阿僧祇の寶衣を以て其地に敷ける、是の如き等の諸の莊嚴具を以て、莊嚴せる無數の宮殿の、諸天に出過せる、是の如き等の上妙の供養を以て、無量無數の不可説不可説の劫に於て、諸根を調伏し、敬心に一切の如來を供養したてまつる。此諸の最勝の般涅槃の後は、舍利を供養したてまつり、一切の衆生をして皆悉く歡喜し、一切衆生の善根を攝取せしめ、一切衆生をして無量の苦を離れて、菩提心を發さしめ、一切衆生をして大莊嚴を以て自ら莊嚴し、無量の莊嚴は一切衆生の境界を超出せしめんと欲す。佛法の值遇すべきこと難きを示現し、阿僧祇の諸の如來力を滿足す。清淨の信心もて導師を供養し、一切の佛法を受持し守護す。是の如くして現在の諸佛を供養したてまつり、及び涅槃の後は、舍利を供養したてまつり、無量の阿僧祇劫に於て、供養の具を説くも窮盡すべからず。諸佛は無量の功德を成就して、一切の衆生を教化し度脱したまへば、我常に彼諸の如來を供養したてまつりて、心退轉せず、休息有ること無く、未だ曾て懈怠せず、憂惱を懷かず、亦所著無く、心想有ること無く、諸法の中に於て所染無く、依止する

【善根に味せず云】大正藏經に味とあり、其意通ぜざるにあらざれども、著に對するよが見れば味正しきが如し。故に今は味とせり。

所無く、善根に味せずして一切の著を離れ、實法の印を以て業法門を印し、一切の法を生じて佛の所住に住す。

無生の性と境界の法印とを觀じて彼發心に印し、如來の清淨を受持して廻向し、平等の法性を觀察して廻向し、無行の方便に入りて諸行を出生し、心に一切を捨して廻向し、無量の方便もて廻向し、一切の有を離れて廻向し、離相の方便に安住し、法門を修習せし善根を廻向し、菩薩は初發心より一切諸の妙善根を修習して皆悉く廻向す。此善根を以て、生死の中に於て而も壞すべからず。一切智を求めて心退轉せず。一切の有に處して寂定にして亂れず。一切衆生を度脱して生死に著せず。無礙の智門を得、菩薩の行を修して、而も彼善根は窮盡すべからず。世間の詬法は壞すること能はざる所、清淨なる諸の波羅蜜を具足して、一切智の力を究竟す。

菩薩摩訶薩は是の如く癡闇を捨離して菩提心を成じ、普く一切を照して白淨の法を長じ、善根を廻向して衆の行を具足し、清淨の直心もて平等に觀察して、深く諸法に入る。業は幻の如く、業報は電の如く、諸行は化の如く、因縁より生じたる法は響の如く、菩薩の行は影の如しと知り、無著法眼の出生する所、無作の所作は其性寂滅にし、有爲無爲に入り、一切の法に於て無二なりと了達して、如實の性を解る。菩薩の一切の行相を分別して、諸相に著せず、善く方便を知りて、同事業に入り、一切の白淨善法を捨てず、一切の障を離れて無礙無著となり、常に諸佛の爲に護念せられて愚癡を遠離す。

是の如く菩薩摩訶薩は善根を成就し、善法を出して、業報を壊せず、明かに眞實を見、善く廻向を解り、方便の力を以て業報を出し、法性を究竟じて彼岸に到ることを得、諸法に了達して大智に廻向し、諸業の善根にて、其心清淨にして行に所行無し。

菩薩摩訶薩は是の如く善根を廻向して、一切の衆生を度脱し、佛種を斷ぜず、諸の惡業と業報とを滅せんと欲す。一切の衆生に廻向して無量の智を得、一切智を成じて世の境界を離れ、諸の煩惱を滅し、究竟清淨にして智慧を成就し、深方便に入りて生死の苦を捨て、諸佛の無量の善根を成就して魔業を摧伏し、平等の法印を得て以て諸業を印し、薩婆若の無上菩提に隨順せしむ。菩薩摩訶薩は、是の如きの善根の廻向を行すれば、善根明淨にして、普く一切を照し、薩婆若乘を具足し成就す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第二の不壞廻向と名く。

【此廻向に安住す云云】以上に廻向の利益の相を叙するを以て、以下其二位果を明かして第二の不壞廻向の長行を終る。

菩薩摩訶薩は此廻向に安住すれば、無量阿僧祇の佛を見たてまつることを得、悉く無量の清淨なる妙法を得、普く衆生に於て平等の心を得、愚癡を捨離して一切の法に入り、諸の如來の自在神力を得て、業障を降伏し、諸魔の業を滅して、生貴の菩提心を具足し、無礙の智を得て、他に由りて悟らず、一切の法に於て眞實の義を見、一切の佛刹に於て悉く能く受持して其相を分別し、智慧具足して普く衆生を照す。菩薩摩訶薩は此不壞廻向の力を以て一切の善根を攝取して廻向す。

爾時、金剛轉菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、乃至徧を以て頌して曰はく、

無量無數の業を修習し、以下は第二不壞廻向の重領にして、二五の中初二偈は廻向の體を明かし、その九偈は衆生及び菩提に廻向する相を頌し、次七偈半は實際廻向、即ち觀理順縁の行、推緣入實の行、雙融無礙の行等を叙し、最後の六偈は本廻向の利益の相を頌説す。

無量無數の業を修習し、所乘堅固にして壞すべからず
 能く諸佛をして悉く歡喜せしむ、是を智者の廻向する所と名く
 供養する所の佛は思議し難く、布施持戒もて諸根を伏し
 彼一切の爲に廻向を修するは、無量の衆生を清淨にせんが故に
 一切の上妙なる諸の華香、無量無數の衆寶の衣
 種種の莊嚴及び寶蓋もて、一切諸の如來を供養したてまつる
 是の如きの無量の諸の供具もて、不可思議なる曠劫の中に
 調御師を恭敬し供養したてまつり、心常に歡喜して厭足無し
 專心に諸の最勝、一切世間の大明燈
 現在の十方一切の佛を觀察するに、皆悉く觀見したてまつりて目前の如し
 不可思議なる無量の劫に、布施を修行して厭き足ること無く
 不可思議なる無量の劫に、諸の善根を修するも亦厭くこと無し
 不可思議なる無量の劫に、諸の善根を修するも亦厭くこと無し
 善く分別して諸の心想を知り、如實に觀察して虛妄無く
 悉く諸根を知りて餘り有ること無く、常に能く一切の衆を饒益す
 心大いに歡喜して量有ること無く、信心清淨にして恭敬し
 不思議劫の世に忍住して、一切の衆を饒益し救度す
 一切の諸佛滅度し已り、舍利を供養して厭き足ること無く

悉く無量の妙雜の寶を以て、恆沙の諸の塔廟を建立す

無數の尊形像を造作して、寶藏淨金もて莊嚴し

巍巍として高大なること山王の如く、其數無量にして不思議なり

諸の功徳を修學し積集し、勝妙堅固にして壞すべからず

菩薩善く知りて廻向を行じ、分別するに有に非ず亦無に非ず

若し能く是の如く廻向を修せば、功徳無量にして盡すべからず

勝妙の智慧もて諸法を觀じ、皆能く所生無しと了達し

方便し修習して心を淨からしめば、悉く一切の如來と等し

盡すべからざる諸の方便を以て、無盡の如來藏に廻向し

無上の菩提心を發起して、一切世間に所依無し

普く十方の諸の世界に至り、一切の衆に於て心礙ふること無く

方便もて衆生の心を啓導し、悉く佛の菩提を出生せしむ

衆生心の平等なることを觀察し、眞實を推求するに不可得なり

一切の諸法悉く餘すこと無く、其性を了達するに所有無し

無著の清淨眼を廻向して、永く一切世間の苦を離れ

諸有をして悉く清淨ならしめんと欲し、心に諸法の相を妄取せず

所有に所有無しと分別すれば、能く心を淨くし大いに歡喜せしめ

一佛刹に於て所著無く、諸佛の土は堅固なること無しと了り
 一切の有爲の法を取らず、亦法の自性に染著せず
 方便もて薩婆若に廻向し、無上の智慧もて自ら莊嚴し
 善く諸佛をして悉く歡喜せしむ、是を菩薩の廻向業と爲す
 菩薩は一心に諸佛を念じ、無上の智慧、巧方便は
 諸の如來の如くにして所著無し、我をして悉く此功德を獲しめたまへ
 常に一切の衆を救護せんと欲して、無量の諸の惡業を遠離し
 常に衆生を饒益する心を行じ、饒益の心に於て虚妄無し
 住する所の地に隨ひて法を守護し、涅槃を示現するも實には滅せず
 一切の如來に二法無し、願くば我が廻向も亦是の如くならん
 一切世界の諸趣の中に、有爲の法に於て所著無く
 菩薩は語言の道に縁らず、亦無語言に染著せず
 十方一切の諸の如來は、悉く諸法を攝して餘り有ること無く
 一切の趣を離れて而も生を受け、所離の生に於て虚妄無し
 一莊嚴を以て一切を嚴り、亦此諸法を分別せず
 世間は悉く虚妄なりと了達して、一切の所行に所有無し

大方廣佛華嚴經

卷第十五

東晉天竺三藏佛跋跋陀羅譯

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之一

【佛子云云】以下
は第三の等諸佛廻
向にして、衆生及
び菩提廻向を明か
し、其初めに事に
因りて行ずる廻向
を明かせり。

【諸覺】此處に言
ふ覺は五根の感覺
なり。佛の境界に
於ては感覺の樂無
きを以て斯く云ふ

「佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第三の等諸佛廻向と爲す。此菩薩摩訶薩は、隨順して過去未來現在の諸佛の廻向を學ぶ。此菩薩は菩薩の行を修する時、好惡の色を見るも、其心清淨にして憎愛無く、歡喜悅樂して無壞の心を起し、諸の憂惱を離れて、正直心を得、身意柔軟にして、諸根清涼なり。此菩薩は是の如きの樂を得る時に諸佛に廻向して、是の如きの念を作さく、一切の諸佛には無上の淨妙の快樂有り」と雖も、復願くば諸佛は、不思議なる佛の所作の樂を具し、稱量すべからざる佛の三昧の樂を具足し攝取し、無量の大悲快樂を成就し、計議べからざる佛の解脫の樂を具足し成就し、諸佛の神足自在の快樂を具足し攝取し、無上無量の最妙の快樂は普く如來を覆ひ、常に諸佛の無量力の樂、永く一切の諸覺を離るる樂、無上寂靜にして變易せざる樂、無礙の法門を具足して心常に寂靜にして、散亂すること無き、佛の無二の行不可壞の樂を具足せしめん」と。菩薩摩訶薩は是の如き善根を以て諸佛に廻向し已りて、又復一切の菩薩に廻向すらく、「願くば未だ滿

【變易】前形を取るこ
じて異形を取ること
にして、少壯の
美は變じて老衰の
醜となるが如し。
今生の因業に因り
次生は畜生道に受
生するが如きは變
易生死の一般的な
るものなり。

【等しく行じ】大
願廻向の功德力を
以て、有ゆる善根
を攝し、勝行を成ぜ
しめ、諸行を等しく
行ずるが故に等行
と言ふ。

ぜざる者は、悉く満足せしめ、未だ直心を淨めざる者は直心を淨めしめ、未だ諸の波羅
蜜を滿せざる者は、悉く満足せしめ、金剛菩提の心に安住して、一切智に於て不退轉を得、
大莊嚴を捨てずして菩提の門、及び諸の善根を守護し、能く一切衆生をして、放逸を捨
離して菩提心を發し、所願を成滿せしめ、一切の菩薩の所住に安住し、諸の菩薩の明利
の諸根を得て善根を修習し、薩婆若を證せしめん」と。是の如く菩薩摩訶薩は、諸の善根
を以て菩薩に廻向し已りて、又復一切の衆生に廻向す。一切の衆生をして佛を見、法を聞
き、歡心に偕に近かしめんと廻向し、具足して専心に佛を念ぜしめんと廻向し、具足して
淨妙の法を念ぜしめんと廻向し、僧を念じ尊重し恭敬せしめんと廻向し、佛を見たてまつ
りて未だ曾て遠離せざらしめんと廻向し、諸の清淨心を成就せしめんと廻向し、諸
の如來の法を分別せしめんと廻向し、無量の功德を成就せしめんと廻向し、諸通善根を清
淨ならしめんと廻向し、一切の疑惑を除滅せしめんと廻向す。佛、廻向して、一切の衆生、
聲聞、緣覺、及び諸の菩薩を開化したまふが如く、菩薩の善根を一切の衆生に廻向する
も亦復是の如く、一切の衆生をして永く地獄、餓鬼、畜生、閻羅王の處、一切の惡趣、無
量の衆難を離れしむ。菩薩摩訶薩は彼一切衆生をして、悉く無上菩提の心を發し、無上菩
提の心を長養し、一心に専ら一切種智を求め、諸佛の正法を誹謗することを捨離し、常に
一切智地を具足せんことを樂はしめ、一切の衆生をして究竟清淨に一切智を得しむ。菩
薩摩訶薩の行ずる所の善根は、諸の大願を以て攝取して行じ、等しく行じ、積聚し、等

【積聚】願力に由り諸行の善根聚集するなり。

【長養】善根を積集する諸行は更に諸行を生ずるを以て長養と言ふ。亦一の行より一切の諸行を生ずるを以て等長養と云ふ。

【菩薩摩訶薩若し云々】以下は條に隨つて善根を攝して總向することを明かせり。

しく積聚し長養し、等しく長養し、皆悉く廣大にして具足し充滿せしむ。

菩薩摩訶薩、若し在家の時は、妻子と俱なるも、長だ曾て暫くも菩提の心を離れず、正念に菩薩若の境界を思惟して、自ら度し彼を度し、直心平等にして、方便もて妻子眷屬に示現し、菩薩は善く方便智もて、皆悉く究竟の解脫を成就せしめ、與に同止すと雖も心に所著無し、木の火熱を以ての故に、在家の屬に處するも、火熱を以ての故に、妻子に隨順するも、菩薩の淨道に於て障礙する所無し。菩薩摩訶薩、若し在家の時は、應に是の如き薩婆若の心を以て善根を廻向すべし。謂ゆる、衣裳を被著し、若し飲み若し食し、諸の湯藥を服し、行住坐臥するも、身口意の業、具足清淨にして、諸根調伏し、皆悉く安諦に、洗浴して身に塗り、寂靜に徐歩し、麤糲顧盼し、足を舉げ足を下すも、若し眼

り若し覺るも、威儀を失はず、善く諸根を攝して、未だ曾て散亂せず。菩薩摩訶薩は是の如き等の一切の諸行を以て、未だ曾て薩婆若の心を遠離せず、善根を廻向して、一切の衆生を饒益し安樂にして、無量の諸願皆悉く成就し、無量廣大の善根を攝取し、善根を修習して、一切を救護し、一切の放逸憍慢を除滅し、一心に一切種智を正念し、一切諸佛の菩提を覺らんと欲し、煩惱及び顛煩惱の法を捨離して、一切の菩薩の所學を修習し、一切

智の道に於て障礙する所無く、智地及び諸の善根を樂修し、常に樂うて愛語し、善根を増長し、一切の衆生をして永く苦惱を離れ、所行に著せずして一心に諸佛の教法を受持せしむ。是を菩薩摩訶薩在家の屬に處して、善根を攝取し、一心に無上の菩提に廻向すと爲

す。

【菩薩摩訶薩復是念を作さく、一乃至小犬及び餘の畜生をも、當に此等をして不放逸の行を具足し修習して、畜生の趣を離れ、饑益の樂を得て解脫を究竟し、永く苦海、苦受、苦陰、苦覺、増上の大苦、苦行、苦藏、苦根、苦舍、是の如き等の無量無邊の一切衆の苦を度らしむべし」と。菩薩摩訶薩は衆生をして悉く除滅することを得しめんと欲し、淨き善根を以て無上菩提に廻向し、一切の衆生を教へて、是の如きの境界に廻向せしめ、彼の善根を正念し思惟するを以て上首と爲す。謂ゆる、一切種智に廻向して、菩提心を發し、菩提心を攝し、生死を遠離して、善根を修習し、生死の淵を出でて、諸の如來の無礙の快樂を得。如來の慈を修して十方に充滿し、大慈もて一切の衆生を饑益し、普く一切をして清淨の樂を得て、一切諸の勝れたる善根を守護せしめ、一切の衆生をして佛法を究竟して、一切諸魔の境界を遠離せしめ、彼甚深の如來の境界に入つて、普く能く一切の世間を拔出し、一切如來の善根を具足して、三世の佛の平等法の中に住せしむ。是の如く菩薩摩訶薩は今集むる善根、已に集めたる善根、當に集むべき善根を皆悉く廻向す。

【復是念を作さく、一彼過去の菩薩の所行の如きは、一切の諸佛を恭敬し供養し、衆生を度脱し、一切を救護し、諸の善根を修めて、菩提に廻向し、而も所著無く、色に依らず、受に著せず、想を顛倒せず、行を作さず、識を取せず、六入を離れ、世法に住せずして出世の法を樂ひ、法の空の如きを知り、究竟して非趣の彼岸に至ることを得、諸法の不生不

【苦受】三愛の一にして、身に受くる苦痛の感覺。【苦陰】意趣に受生せる者の身心の苦を言ふ。【苦覺】怨憎會苦愛別離苦等の内心的苦惱を言ふ。【増上の大苦】概大なる苦惱。【苦根】苦惱の因即ち惡業を言ふ。【苦舍】苦を以て我の肉體的存在を言ふ。

【復是念を作さく】以下は本廻向行の實際廻向を明かす【六入】六處の舊

【復是念を作さく】以下は本廻向行の實際廻向を明かす【六入】六處の舊

滅にして、眞實の相無きことを照解して、染著する所無く、一切の諸法は虚妄有ること無く、歸趣する所無く、破壞する所無く、實際に安住し、自性有ること無く、諸の性を離る。故に一念の中に於て一切法を解り、無性を性と爲す。常に樂うて普門の善根を有行し、如來の圓滿なる功德を具足して、一切を顯現せり。彼過去の一切の如來の善根廻向の如く、我も亦是の如くして、是の如き法を樂べ、是の如き法を證し、是の如く發心して、諸法を修習し、法相に違はず、有ゆる起法は猶し幻化、電光、水月、鏡中の像の如く、因縁和合して假に諸法を持するも、悉く分別して業因より起ると知る。唯如來地のみ是れ究竟の處なり」と。菩薩摩訶薩は是の如く、過去の諸佛の所學を隨學して廻向す。未來現在も亦復是の如し。菩薩摩訶薩は三世の佛の所學を學ぶ、諸の善根を廻向し已りて、是の如きの念を作さく、彼諸佛の知りたまひし所の菩薩の廻向の如く、我も亦是の如く廻向せん。第一廻向、勝廻向、最勝廻向、上廻向、無上廻向、無等廻向、無等等廻向、無比廻向、無對廻向、尊廻向、妙廻向、平等廻向、正直廻向、大功德廻向、大願廻向、明淨廻向、善廻向、清淨廻向、離惡廻向、不隨惡廻向なり」と。

【是の如く菩薩摩訶薩云】以下は廻向の成益を明かす。次に位果を明かして本廻向行を結す。

是の如く菩薩摩訶薩は、諸の善根を以て正しく廻向し已りて、清淨なる妙身口意を成就し、作す所の行業は皆悉く清淨となり、菩薩の住に任して、諸の惡住を離れ、善根を修習して身口の惡業を離れ、心に選擇無く、薩婆耆を修して、無量の住に任し、一切の法は空にして自在無しと入りて、出世の法を修し、世間の法に於て心に染著無く、無量

の諸業を分別し了知して、巧方便を成就し、諸法に廻向して心に所倚無し。佛子、是を菩薩摩訶薩の第三の等諸佛廻向と爲す。

菩薩は此廻向に安住し已れば、深く一切諸の如來の業に入り、諸の如來の勝妙なる功徳に越き、深き清淨智慧の境界に入り、一切諸の菩薩の行を離れず、善能く巧妙の方便を分別して、深法界に入り巧妙の方便もて、次第に菩薩の善根を成就し、一切諸の如來の性に入り、巧方便を以て無量無邊の一切の諸法を分別し了知す。復世界の中に示現して生ると雖も、諸の世界に於て心に所著無し。佛子、是を菩薩摩訶薩の等諸佛廻向と爲す。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

彼諸の菩薩摩訶薩は、過去の佛の廻向の法を修し、亦未來現在世の、無量の導師の所行を學す

一切種種の微妙の樂は、諸佛如來の讚歎したまふ所
明淨なる勝法眼を成就して、一切諸の導師に廻向す

菩薩の身根の種種の樂、眼耳鼻舌の諸の情根
種種の上妙なる無量の樂を、一切諸の最勝に廻向す

一切世間の諸の善根、及び諸の如來の成就する所は
彼に於て悉く攝して餘り有ること無く、隨喜し廻向して衆生を益す

【彼諸の菩薩摩訶薩は二十四偈以下の頌あり、前行の重頌たり。其中、初一偈は釋名、次二偈は前佛への廻向を頌し、次十一偈は衆生に廻向して成佛せしむること、即ち隨喜及び樂を廻向し、佛と同じく衆生を利益し安樂ならしむることを頌す。次の四偈は

菩提の廻向、次の二偈は實際廻向、最後の四偈は三淨業學三世佛廻向等を頌し、廻向の成益を明かして重頌を結す。

菩薩の隨喜に量有ること無く、亦以て一切の衆に廻向し
 人中の師子の所有の樂を、願くは衆生をして悉く具足せしめん
 諸佛如來の知見したまふ所の、一切の衆生の清淨の樂
 衆生をして皆悉く、世界の燈明の受くる所の樂を得しめんと欲す
 菩薩の得る所の種種の樂を、諸佛に廻向して衆生の爲にし
 衆生をして常に安隱ならしめんと欲し、彼に於て廻向して所著無し
 菩薩此廻向を修する時、無量の大悲心を興發すらく
 佛の知りたまふ所の廻向の徳の如きを、我をして具足して悉く成滿せしめん
 諸の最勝の知見する所の如き、一切智乘の微妙の樂と
 我が在世の中の所行の如き、一切菩薩の無量の樂と
 一切趣の中の衆の快樂と、諸根を柔軟にし調伏する樂とを
 皆悉く廻向して衆生の爲にし、普く無上の智を成就せしめん
 身口意淨くして諸惡を離れ、巧妙の方便もて心平等となり
 此を以て群生の類に廻向し、悉く無上の智を成就せしめん
 菩薩の修する所の諸の行業は、無量の淨功徳を積集し
 如來に隨順して佛の家に生れ、寂然として亂れず正しく廻向す
 十方無量の世界の中の、一切の衆生の樂を攝取し

無量の善根を悉く廻向して、普く衆生をして安樂を得しめん
己が身の爲に自ら樂を求めず、一切をして悉く安樂ならしめんと欲し
一切の虚妄の心を遠離して、悉く諸法の空無我を解る
十方無量の諸の最勝の、見たまふ所の一切の眞の佛子は
諸の功徳を以て彼に廻向し、速かに無上の道を究竟せしめん
一切世間の衆生の類を、等心に攝取して餘り有ること無く
我を行ずる所の諸の淨業を以て、彼衆生をして速かに成得せしめん
無量無邊の清淨の願は、無等なる最勝の演説したまふ所
皆悉く清淨にして諸の垢を離るるを、普く佛子をして究竟じて淨せしめん
一切の功徳を盡く廻向して、悉く十方諸佛の刹を
修行淨妙に莊嚴せしめ、菩薩は是の如く廻向を學ぶ
心は諸の二法を稱量せず、了達して法の無二なることを覺悟し
諸法は二に非ず不二に非ず、虚妄を作さざるは是れ佛子たり
一切世間の有ゆる想は、究竟じて悉く度して餘り有ること無く
亦想及び非想を壊せずして、決定して衆生の想を了知す
修證の菩薩身を淨くし已れば、則ち意清淨にして瑕穢無く
口業已に淨くして散亂無ければ、當に知るべし意淨くして所著無し

【佛子何等をか云】以下は第四の至一切處廻向を明かせるなり。初に衆生及び菩提の廻向を説く中、第一に善根を廻向して三寶に供養することを明かす。

一心に過去佛を正念し、未來の諸の導師と
現在の十方の天人尊とを分別して、菩薩は遍く彼佛の教を學ぶ
三世の無量の諸の最勝は、慧心明達して障無く
行ずる所無量にして菩提を求め、廻向して諸の世間を饒益す
彼勝妙の慧、廣大の慧、四眞諦の慧、離倒の慧
平等實の慧、清淨の慧、無比の慧等を皆廻向す
佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第四の至一切處の廻向と爲す。此菩薩摩訶薩は、一切諸
の善根を修習する時、彼善根を以て、是の如く廻向すらく、「此善根功德の力をして一切處
に至らしめん。譬へば實際の、處として至らざる無く、一切の世間に至り、一切の有に至
り、一切の衆生に至り、一切の刹に至り、一切の法に至り、一切の虚空に至り、一切の三
世に至り、一切の有爲及び無爲の法に至り、一切の語言音聲に至るが如く、我が此善根も
亦復是の如く、遍く一切諸の如來の所に至り、三世の一切諸佛を供養せん。過去の諸佛
の所願を悉く滿せしめ、未來の諸佛に、佛の莊嚴を具へしめ、虚空法界に等しき世界の
中の、現在の諸佛、及び無量の大眾には、以て莊嚴を爲し、皆悉く供養せん。猶し諸天
の如く、一念の中に於て、悉く能く無量無邊の一切の世界に充滿せん。廣大の功德、智
慧無にして善根を廻向するが故に」と。菩薩摩訶薩は復是念を作さく、
「此善根を以て、虚空界に等しき一切の世界、世界の性、種種の業の起る所の、十方不可

説の世界、不可説の佛刹、種種の世界、諸佛の境界、分齊無き世界、轉翻覆世界、伏世界、轉世界、一切無餘の世界の中の、現在の諸佛は、無量の自在神力を顯現したまふ。彼に菩薩有り、虚空法界に等しき一切の諸法を解り、諸の衆生の爲に、一切の世界の中に於て、現じて如來と爲りて世に出興し、一切處に至るの智を示現し、無量無邊の自在もて、生を受け、法身遍く不壞の法界に至り、平等にして普く入り、佛身藏に同じく、不生不滅にして普く一切に應じ、善巧の方便もて世間に出現し、眞實の法性より起り、堅固にして轉ぜず、無礙に持せられ、諸佛の無礙の功德の所生なり」と。

菩薩摩訶薩は、諸の如來應供等正覺の所に於て諸の善根を種ゑ、衆の雜華、種種の香、鬘、蓋、幢幡、珍寶、燈明を以て、是の如き等の諸の妙供具を以て、尊像及び諸の塔廟を供養し、此一切の善根を以て廻向す。一心、不亂心、不動心、尊重心、離瞋心、無住心、無著心、無業生心、無詭害心、寂靜心を以て廻向す。復是念を作さく、「虚空法界に等しき一切劫の中の、去來今の佛は相好具足して、自ら莊嚴し、妙法界の莊嚴を以て自ら莊嚴し、彼佛の眷屬は虚空法界に等しき一切の世界に充滿し、隨時に世に出て、未だ會て時を失はず。我善根を以て廻向して、諸佛を供養せん。無量の香蓋、無量の香幢、無量の香幡、無量の香宮殿、無量の香網、無量の香像、無量の香光、無量の香焰、無量の香雲、無量の香座、無量の香輪、無量の香住處、無量の香佛世界、無量の香須彌山王、無量の香海、無量の香河、無量の香樹、無量の香衣、無量の香蓮華を以て、是の如き

等の無量無数の衆の香莊嚴を以て、以て供養を爲さん。無量の華蓋、廣く香かば上り如き、乃至無量無数の衆の華莊嚴を以て、以て供養を爲し、無数の鬘蓋、乃至無数の衆の鬘莊嚴を以て、以て供養を爲し、不可思議の塗香莊嚴、乃至不可思議の塗香莊嚴を以て、以て供養を爲し、不可稱の末香莊嚴、乃至不可稱の末香莊嚴を以て、以て供養を爲し、無分の妙衣蓋、乃至無分際の妙衣莊嚴を以て、以て供養を爲し、無邊の寶蓋、乃至無邊の衆の寶莊嚴を以て、以て供養を爲し、無量の燈蓋、乃至無量の衆の塗莊嚴を以て、以て供養を爲し、不可説の莊嚴具蓋、乃至不可説の衆の莊嚴具を以て、以て供養を爲し、不可説不可説の摩尼寶蓋、是の如きの摩尼寶の幢、摩尼寶の幡、摩尼寶の帳、摩尼寶の帳、摩尼寶の帳、摩尼寶の帳、摩尼寶の光、摩尼寶の焰、摩尼寶の雲、摩尼寶の座、摩尼寶の輪、摩尼寶の宮殿、摩尼寶の世界、摩尼寶の須彌山王、摩尼寶の海、摩尼寶の河、摩尼寶の樹、摩尼寶の衣、摩尼寶の蓮華、是の如き等の不可説不可説の摩尼寶の莊嚴を以て、以て供養を爲さん。

一一の境界の中に於て、各阿僧祇の彌勒、阿僧祇の莊嚴、阿僧祇の宮殿、阿僧祇の寶閣、阿僧祇の寶樓閣、阿僧祇の半月莊嚴、阿僧祇の内小轉帳、阿僧祇の窓闌、阿僧祇の清淨寶、阿僧祇の一切寶莊嚴有りて、一切の世界を清淨にして、悉く餘り有ること無けん。

是の如く莊嚴して、一切の衆生をして生死を超出して、如来の十種力の地を成就せしむ。諸法の中に於て、無量の法明を得て衆生を教化し、一切の善根を廻向して、衆生を調伏し、無量の心は、虚空法界に等しき一切の佛刹に充滿し、法に所至無くして、三世の無

量の善根を出せしめ、一切の衆生をして、悉く無量の諸佛を親見したてまつることを得しめ、一切の諸の善根の中に安住して、大乘を成就し、諸法に著せず、諸の善根を具足して、無量の行を究竟し、普く無量無邊の一切の法界に入り、善根を廻向して、一切の如來の自在神力に入らしめ、一切の衆生をして此善根に因りて薩婆若を得、無上道を成ぜしむ。

譬へば無我にして諸法を離れざるが如く、我が諸の善根も亦復是の如し。一切の佛を攝取す、恭敬し供養するが故に。一切の法を攝取す、障礙を離るるが故に。一切の菩薩を攝取す、一切の同善根を究竟するが故に。菩薩の一切の行を攝取す、諸願を満するが故に。菩薩の一切の法明を攝取す、決定して無礙なるが故に。一切の佛の自在神力を攝取す、無量の諸の善根を成就するが故に。一切の佛の力無所畏を攝取す、無量の心を發して、一切を満するが故に。一切の菩薩の三昧、辯才、陀羅尼門を攝取す、世間に二法無きことを解了するが故に。一切の佛の巧妙なる方便を攝取す、如來の大神力を示現するが故に。三世一切の諸佛出生して、道を得、淨法輪を轉じ、涅槃を示現したまふことを攝取す、供養を興發して衆生を化するが故に。一切の世界を攝取す、無上の佛刹を莊嚴するが故に。一切の劫を攝取す、一切の菩薩の行を斷ぜざるが故に。一切の趣を攝取す、受生を示現するが故に。一切の衆生を攝取す、普賢菩薩の行を具足するが故に。一切の衆生を攝取す、煩惱習を淨めしむるが故に。一切衆生の諸根を攝取す、化度無量なるが故に。一切衆生の

【散心】定心に對して散亂せる心にして平常時の心を云ふ。

諸欲を攝取す、略の煩惱を淨めしむるが故に。一切の衆生を調伏し成熟することを攝取す、其所應に隨ひて爲に身を現するが故に。一切の衆生を攝取す、衆生の變化の如くなることを解らしむるが故に。一切如来の性を攝取す、一切の佛法を守護し受持するが故に。菩薩摩訶薩は、是の如く善根を廻向して所有無しと入り、業の中に虚妄の報を取らず、報の中に虚妄の業を取らず。諸の虚妄を離れて、深法界に入り、心常に勝妙の善根に安住し、散心を遠離して善法を修習し、一切の諸法を信ぜず入らず、法の自性成就有ることを見ず。作者、壞者、皆得べからず、一切の法は悉く自在無しと知りて、法界に見者有ること無く、知者有ること無しと解了すればなり。

是の如く菩薩摩訶薩は圓滿具足して、諸法を解了すれば、一切法の衆の因縁地なることを得て、一切の法身の離欲の實際を見、諸法を等觀して世間を解了するに、猶し變化の如く、衆生を明達すれば、皆是れ一法にして分別するに二なきも、諸法の境界の方便を捨てず。有爲界に於て無爲界を出すも、而も亦有爲の性を壞せず、無爲界に於て有爲界を出すも、而も亦無爲の性を壞せざるなり。

是の如く菩薩摩訶薩は、諸法の寂滅の相を樂觀して、一切の清淨なる善根を出生し、皆悉く廻向して衆生を救護し、精勤し修習して愚癡の法を離れ、深く達して一切の法海を明了し、虚空に等しき一切の善根を以て廻向して、無上の堅固の功德を具足し、眞實を離れたる明淨の法眼を得、善く方便廻向の功德を知る。

菩薩摩訶薩は是の如く善根を廻向して、一切の衆生をして一切の刹を淨めしめ、佛の自在を得、衆生を教化して、諸佛の法を持し、一切世間の最上の福田となり、諸の衆生の爲に採賣の導師と作り、一切世間の爲に明淨の日を出し、一の善根は法界に充滿し、善根廻向して衆生を救護し、一切の衆生をして悉く皆清淨の功德を成就せしむ。菩薩摩訶薩は是の如く善根を廻向して、諸の如来の性を守護し受持す。諸の衆生の性を教化し成熱し、一切諸佛の刹の性を嚴淨し、業性を壊せず、法性を分別し、等しく不二の性を觀じ遍く十方の性に遊ぶ、廣く離欲の性を説き、解脱の性を具足し、普く諸根の性を照す。佛子、是を菩薩摩訶薩の第四の至一切處の廻向と名く。

菩薩摩訶薩は此廻向に安住すれば、能く一切の善根を以て廻向して、一切處に至る身業を得、善能く一切の世界に應現するが故に、一切處に至る口業を得、微妙の音聲は十方一切の世界に充滿するが故に、一切處に至る意業を得、悉く能く一切諸佛の説きたまふ所の法を受持するが故に、一切處に至る神足を得、善能く一切世間の行に隨順するが故に、一切處に至るの法を得、一切の法に隨順するが故に、一切處に至る隨順法陀羅尼の辯才を得、一切の衆生をして悉く歡喜せしむるが故に、一切處に至る順入法界を得、一毛道に於て悉く能く普く一切の世界に入るが故に、一切處に至るの身を得、一切の衆生の身をして一衆生身に入らしむるが故に、一切處に至る劫を得、一切の劫の中に於て常に諸佛を見たてまつるが故に、一切處に至る刹那を得、一刹那に於て一切の佛世に興りたまふこと

を現するが故に。佛子、菩薩摩訶薩は一切處に至る善根廻向を得て、能く一切の善根を以て廻向す。

爾時、金剛幢菩薩、佛の神力を承け、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

一切内外の諸の世間に、菩薩大士は所著無く

衆生を饒益する事を捨てず、是の如きの妙智のものは人中の勝なり

一切諸の世界に著せず、十方堅固の性を取らず

衆生壽命の相を取らず、亦諸の世間を妄取せず

一切十方の世界の中の、衆生を攝取して悉く餘すこと無く

有無を觀察して自在を得、一切處に至りて善く廻向す

有爲無爲の法を攝取して、心に諸の世間を妄取せず

世間の諸法には差別無し、世を照す燈明は是の如く覺る

一切行ずる所の諸の業行は、上中下品各同じからず

智者は諸業を、悉く一切十方の諸の如來に廻向す

菩薩は廻向して彼岸に到り、如來の學に隨ひて悉く成就し

甚深微妙の智を分別して、最勝の殊特なる法を具足す

清淨の善根を悉く廻向して、常に能く諸の群生を利益し

悉く十方の一切業をして、無上の照世の燈を成就せしむ

【一切内外の諸の世間六六】以下の頌は前經の重頌に成り初七偈は衆生及び菩提の廻向を頌し、次三偈は實際廻向、後一偈は所成の果徳を廻向することを叙頌す

【世を照す燈明】普通に世尊を指すものなれども、今はこの廻向を行ぜざる菩薩を言ふ

【佛子何等をか菩薩云云】以下は第五の無盡功德藏廻向を明かす。初めに體を説き、次に菩薩の廻向を説きて、苦提及び衆生を明かす。次に菩薩の廻向を説きて、受用嚴淨等を説きて、廻向の所成を結し、最後に實際廻向を説き、

未だ曾て虚妄に衆生を取らず、亦妄想もて諸法を念せず一切世に染せず著せず、亦復諸の衆生を捨てず

菩薩は常に寂滅の法を樂ひ、隨順して寂滅の境に至ることを得

亦衆生の道を捨離せずして、是の如き等の微妙の智を得

諸業の虚妄の想を起さず、諸の果報に於ても亦著せず

一切の世間は縁より起る、因縁を離れて諸法を見ず

是の如き境界に隨順して、一切虚妄の想を遠離するに至らば

一切衆生の調御師なり、具足明了にして善く廻向せん

【佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第五の無盡功德の藏の廻向と爲す。】

此菩薩摩訶薩は、悔過の善根を修して、一切の罣障を離る。去來今の佛の一切の善根、及び三世一切の衆生の善根に於て、皆悉く隨喜す。諸の如來に於て、尊重し、恭敬し、禮拜し、供養して生ずる所の善根、諸佛を勸請して生ずる所の善根、佛の所説の法を、

聞持し憶念し、説の如く修行して、不思議の境界に入るの善根、三世の諸佛の無盡の善根、

一切の菩薩の修する所の善根、三世の諸佛の善提を得る時の無上の善根なり。菩薩摩訶薩

は、此一切の善根に於て皆悉く隨喜す。隨喜し已りて彼善根に安住し、三世の諸佛は淨

法輪を轉じて、無量の衆生を度し、彼諸の衆生の得る所の善根を、菩薩摩訶薩は皆悉

く隨喜す。三世の諸佛の初發心より菩薩の行を修し、乃ち成佛して涅槃を現するに至る

まで、其中間に於て獲る所の善根を皆悉く隨喜す。彼諸の如來般涅槃已りて、諸佛の正法を受持し守護し、乃ち法の滅するに至るまで修する所の善根、佛の境界を念じて修する所の善根、自己の境界に修する所の善根、乃ち無上菩提の境界に至るの善根なり。

菩薩摩訶薩は此諸の善根を以て、皆悉く廻向す。菩薩摩訶薩は是の如きの念を作さく、此諸の善根を、若は修し、若は學し、若は積集し、若は開解し、若は隨喜し、若は具足し、若は成就し、若は所行有り、若は所得有り、若は正憶念し、若は受持し、若は堅固にして壞し難し。此の如きの善根は過去際の劫を盡して、一切の諸佛の莊嚴する世界に、無量の行業の興起す所、佛智の知る所、菩薩の識る所、衆生に應じて起り、欲に隨ひて清淨に、如來の持する所、如來の出世の淨業の成する所、普賢菩薩の淨業の起す所なり。彼諸の世界に、若し衆生有らば無上道を成じ、自在力を現せん。

未來の一切の如來應供等正覺の莊嚴する佛刹は法界と等しく、無量無邊の虚空法界に等し、一切世界の中に、未來際の劫を盡して、一切の諸佛、彼諸の如來は智慧を成就して、當に佛刹を淨むべし。雜寶もて莊嚴し、一切の嚴くこと無き上香もて莊嚴し、一切の華を雨らして莊嚴し、一切の衣裳もて莊嚴し、一切の功德の藏もて莊嚴し、一切如來の持智もて莊嚴し、一切の佛刹もて莊嚴し、不可說に莊嚴し、不可思議の功德を修習して莊嚴し、如來等正覺の淨き威神もて莊嚴す。未來の一切諸佛の莊嚴する佛刹は、一切世間の觀ること能はざる所、菩薩の淨眼の照見する所なり」と。菩薩摩訶薩は勝れたる善根を修して、

悉く一切諸の清淨法に入り、一切諸の清淨法を受持して、猶し變化の如くし、普く菩薩の清淨業を行じ、菩薩の不可思議なる自在の三昧に入り、佛慧の光明は普く世間を照す。

未來の諸佛の佛刹を嚴淨するが如く、現在の諸佛の世界を嚴淨することも、亦復是の如く、種種の莊嚴清淨にして、功德を具足して普く覆ひ、無量の妙色、不可思議の香、無量の雜寶、無量の寶樹、阿僧祇の莊嚴、阿僧祇の宮殿、阿僧祇の微妙の音聲あり。善知識に隨ひて、無量の一切の功德、殊勝の莊嚴を顯現して窮盡すべからず。一切の香莊嚴、一切の鬘莊嚴、一切の華莊嚴、一切の末香莊嚴、一切の寶莊嚴、一切の衣莊嚴、一切の幢莊嚴、一切の幡莊嚴、一切の繪綵莊嚴、一切の寶欄楯莊嚴、阿僧祇の白寶網普く覆うて莊嚴し、阿僧祇の河もて莊嚴し、阿僧祇の雲雨もて莊嚴し、阿僧祇の自然の妙音聞えざる所無し。

是の如き等の無量無邊の諸の莊嚴具を以て、無量無邊の不可思議なる諸佛の世界を莊嚴す。彼諸の世界の中に、若し佛刹莊嚴、佛刹清淨、佛刹平等、佛刹妙善、佛刹功德、佛刹殊勝、佛刹安樂、佛刹不壞、佛刹無盡、佛刹無量、功德不可盡、佛刹不退、佛刹無所畏、佛刹光明、佛刹快樂、佛刹無厭、佛刹普照、佛刹照明、佛刹方正、佛刹第一、佛刹勝、佛刹最勝、佛刹微妙、佛刹無比、佛刹無等、佛刹上、佛刹無上、佛刹無等等、是の如き等の三世の一切諸佛の佛刹莊嚴あり。菩薩摩訶薩は此善根を以て皆悉く廻向して、普

一切の佛刹をして清淨に莊嚴せしむ。

是の如く莊嚴して一世界の中に於て、三世一切の莊嚴せる佛刹は、具足清淨に、廣く清淨にして、積集し等起し、莊嚴具足し、莊嚴住持して、皆悉く具足せり。一世界の如く、無量無邊の虚空法界に等しき世界も、悉く三世諸佛の莊嚴せる佛刹を以て、之を莊嚴し、佛刹の功德、佛刹を觀るに厭足無き、佛刹の無量なる、佛刹の體廣なる、佛刹の無數なる、佛刹の不可思議なる、佛刹の無變なる、佛刹の稱るべからざる、佛刹の無邊なるは皆悉く具足せり。

菩薩摩訶薩は復是の如く廻向して、其修する所の一切の佛刹に、菩薩摩訶薩を皆悉く充滿せしむ。此菩薩は一切の清淨なる功德を具足し、智慧を成就し、皆悉く一切の世界、及び衆生界を分別し、深智に入り、愚癡を捨離して、空寂界に入り、佛を念じ、不思議の法を念じ、清淨の僧を念ずることを成就し、念捨を成就し、法日圓滿にして慧光普く照し、深智無礙にして、無所有の寂滅の法より生じ、無量の清淨の佛法を出生し、殊特勝妙の善根、清淨の善根、最勝の善根、増上の善根を成就し、無上菩提の心を建立して、善能く隨順して如來方に入り、心常に一切微言を志求し、諸塵の業を淨め、衆生の性を了り、法の空寂なることを知りて、顛倒を捨離し、愚癡を降滅し、諸の善根を修し、大願を滿足す。是の如き等の無量無邊の功德を成就せる菩薩は其刹に充滿し、悉く無量の法門の中より生れ、是の如き一切の功德に安住し、無等等の勝妙なる善根を成就して、

【重修】菩薩の徳
互に齊けて重成す
る意。
【宴寂】宴は心樂
しく、寂は心空寂に
して何の煩ひもな
きを以て斯く言ふ。

常に佛事を作し、善巧の方便もて菩提の光明を得、無礙法界の智慧を具足して、一身は一切の法界に充滿して自在力を現じ、大智、一切智の境界を成就して、善巧の方便もて智慧を出し、無量の法界を分別して、遍く諸刹に遊び、而も所著無く、心淨きこと空の如く、悉く能く一切の法界を分別す。諸の菩薩の不可思議なる三昧正受に於て、巧方便を以て、善能く入出し、薩婆若に趣き、諸佛の刹に住し、善能く諸佛の威神を了知し、善能く阿僧祇の諸の深妙の法を分別して而も畏るる所無し、三世の諸佛の善根に隨順して、善く一切如來の法界を照し、悉く能く一切諸佛の説きたまふ所の正法を受持し、善能く不可思議なる清淨の音聲を演出し、善能く阿僧祇の諸の語言の法を分別し、無上の道と、佛の自在地とを得。悉く能く一切の世界に周遍して而も障礙無く、悉く一切の無諍の法を講して、心に虛妄無く、染著する所無く、菩提の心を修習し増廣し、善解の智慧は隨時に應化して權變に方無く、眞實の義を了りて具足し演説す。是の如き等の無量の功德を成就せる諸の大菩薩は、世界を莊嚴し、世界に充滿し、種種に莊嚴し、願至し安住し、善修し重修し、淳淨にして雜無く、周遍清淨にして愍然として宴寂なり。一佛刹の少分の處所に於て、無量の菩薩、無數の菩薩、不思議の菩薩、不可稱の菩薩、不可量の菩薩、無等の菩薩、不可究竟の菩薩、無分齊の菩薩、不可説の菩薩、不可説不可説の菩薩有り。一佛刹の一一の少分の處に、是の如き等の大菩薩摩訶薩有るが如く、虚空法界に等しき一切の世界に、菩薩摩訶薩皆悉く充滿せることも亦復是の如し。

菩薩摩訶薩は諸の善根を以て方便して廻向す。一切の佛説、一切の菩薩摩訶薩、一切の如來、一切の無上菩提、一切の大願、一切の出要、一切の衆生淨く、一切の世界に常に如來を見たとすつり、如來の壽命無量に、不退轉の法輪を轉じて法界と等しからんと廻向す。

是の如く菩薩摩訶薩は善根を廻向して、一切の佛刹をして清淨ならしめ、一切の衆生法界をして清淨ならしめ、一切の菩薩をして清淨ならしめ、一切の諸佛をして法界に充滿せしめ、如來の清淨なる法身をして一切の佛刹に充滿せしむ。

菩薩摩訶薩は是の如き等の無等等の廻向を以て、薩婆若に趣き、心淨きこと虚空の如く、動せざること大地の如くして、不可思議の廻向に入り、一切の業報は皆悉く寂滅なりと樂觀して、無盡の功德を廻向して、平等に一切の法界に隨順す。

菩薩摩訶薩は是の如きの廻向を行じ已りて、虚妄に我及び我所を取らず、虚妄に佛及び諸佛の法を取らず、虚妄に佛刹及び刹清淨を取らず、虚妄に衆生及び諸佛衆生を取らず、虚妄に諸業を取り及び業法を取らず、意業及び業の果報に著せず、因果を壞せず、有法を取らず、有法を壞せず、生死も雜亂に非ず、涅槃も寂靜に非ず、如來の境界道は他の所作に非ず、法の同止する無し。菩薩摩訶薩は、是の如く諸の善根を起して、決定して廻向し、成熟し具足して、等しく取相を觀じ、善き境界を取りて、分別し稱量し、諸の虚妄を離れて而も所著無し。

【境界道】境界は佛境界、道は佛の所行道なり。

菩薩摩訶薩は是の如く善根を廻向し已りて、無盡の善根を得、常に三世一切の諸佛を念じて、一切の無盡の善根を得、無量の菩薩を度して無盡の善根を得、諸佛の刹を淨めて無盡の善根を得、衆生界を淨めて無盡の善根を得、深法界に入りて無盡の善根を得、無量心を修して淨きこと虚空の如くにして無盡の善根を得、一切諸佛の境界を解了して無盡の善根を得、一切の菩薩の淨業を修習して無盡の善根を得、三世に了達して無盡の善根を得たり。

是の如き等の善根を以て廻向して、悉く能く一切の衆生を度脱す。衆生界に入りて、衆生界を見ずして廻向し、一切の法は壽命有ること無しと解りて廻向し、一切の法は眞實に自在有ること無しと知りて廻向し、一切の諸法は福伽羅無くして廻向し、一切の諸法は諸の忿淨を離ると觀察して廻向し、一切の諸法は因縁より起りて堅固有ること無しと廻向し、一切の法は眞實に所著無しと知りて廻向し、一切の佛刹は染著する所無くして廻向し、菩薩の行に堅固の相を取らずして廻向し、一切の境界は空にして所有無しと分別し了知して廻向す。

菩薩摩訶薩は、是の如く廻向して、眼終に不淨の佛刹を見ず、亦復異相の衆生を見ず、法を行じて法を見ず、智に入りて所入無く、一切は猶し虚空の如しと解了し、如來の身に於て一切法を得、無量の諸の功德力を満足し成就し、至一切處の善根を具足して、衆生を安樂にす。此菩薩摩訶薩は念念の中に於て不可說不可說の十力地を得、一切種の清淨

なる菩薩を具足して、悉く能く一切の衆生を攝取す。彼菩薩摩訶薩は、意の如きの功徳の寶藏を成就して、所遊の方に隨ひて、悉く能く一切の佛刹を嚴淨し、不可説不可説の衆生をして、諸の功徳力に安住し攝取せしむ。

菩薩摩訶薩は是の如く廻向する時、此廻向の威力を以ての故に、一切の所行倫巴有るに無く、一切世間も欺すること能はざる所、衆魔を威攝して能く瞻對する莫く、不退の功徳を具足し成就し、無量の大神變皆悉く成就し、其心彌廣くして一切智に等しく、一念の中に於て悉く能く無量の佛刹に周廻し、無量の智力を得て、悉く諸佛の境界を了知し、常に樂ひて一切の佛法を受持し、無量無邊の大智に安住す、菩薩の初發の菩提心の力は、悉く虚空諸の法界と等し。佛子、是を菩薩摩訶薩の第五の無盡の功徳藏の廻向と名く。

菩薩摩訶薩は此無盡功徳藏の廻向に安住すれば、復十種の無盡の功徳の藏を得、何等をか上と爲す。一には常に諸佛を見たてまつる無盡功徳の藏、一一の毛孔の中に於て、無量阿僧祇の諸佛を見たてまつる。二には無盡の法に入る功徳の藏、如來の智慧を以て一切の法は即ち是一法なりと等觀す。三には受持し正念する無盡功徳の藏、一切の佛の言きたまふ所の正法を聞き、聞持して忘れず。四には無盡の慧を得る功徳の藏、一切の如來の説きたまふ所の經法に於て、善能く次第して其句義を解る。五には無盡の題法功徳の藏、善能く一切の法題を分別す。六には無盡の佛願功徳の藏、智慧は空の如くにして三世の一切諸

【菩薩は直心の力を成就云云】以下は本廻向の重なり成る。初五偈は行徳の中の隨喜の偈を頌し、次九偈は菩提及び衆生への廻向、次二偈は所成の徳、次五偈は實際廻向、最後の八偈は前生の善根を以てまた廻向せんことを頌す。中に於て初めに所得の十無盡の善根を説き、次にその善根を以て十種の廻向を成就せしめ、頌して完了す。

法に充滿す。七には無盡の功德徳の藏、一切諸の衆生の意に充滿して、猶盡すべからず。八には無盡の功徳の藏、一切衆生の愚癡障障を悉く能く除滅す。九には無盡の辯才功徳の藏、一切の衆生をして、悉く一切の佛法の平等無二なることを解らしむ。十には無盡の十力四無所畏の功徳の藏、菩薩の所行を具足し修習して、法王の職を受け、一切智を得。佛子、是を菩薩摩訶薩十無盡の功徳の藏を得と名く。此無盡の功徳の藏を以て、皆悉く一切の功徳に廻向す。

爾時、金剛幢菩薩、普く十方を觀じ、偈を以て頌して曰はく、

菩薩は直心の力を成就し、一切の法に於て自在を得

隨喜の獲る所の諸の功徳を、無礙の方便もて善く廻向す

三世一切の諸の最勝は、刹土及び世間を莊嚴し

一切の勝功徳を具足す、淨刹に廻向することも亦是の如し

三世一切の最勝の法を、菩薩は悉く能く諒かに分別し

淨心もて一切の法を攝取し、是の如く諸佛の刹を莊嚴す

三世の無量劫を窮盡して、一佛刹の諸の功徳を讀へんに

三世の諸劫は猶盡すべくとも、佛刹の功徳は窮極すること無し

是の如きの一切諸佛の刹を、一切の最勝は悉く嚴淨し

菩薩は一切の刹を嚴淨して、諸の導師と等しくして異ること無し

彼眞の佛子は心清淨にして、悉く如來の法化より生れ
 一切の功德もて莊嚴せる心は、一切諸佛の刹に充滿す
 彼諸の菩薩は悉く、無量の相好莊嚴身を具足す
 一切の諸刹を悉く成滿し、窮盡すべからざること大海の如し
 境界を觀察する心平等にして、一切の三昧門に安住し
 清淨なる無等の心を成就して、光明普く十方界を照す
 是の如くして餘すこと無き諸佛の刹に、此諸の菩薩は悉く充滿し
 未だ曾て聲聞乘を想念せず、亦復緣覺道を求めず
 菩薩は是の如く心清淨にして、善根を諸の刹生に廻向し
 普く衆生をして正覺を成じ、三世の諸佛の法を具足せしむ
 十方一切の諸の魔王を、菩薩の威徳は悉く調伏し
 勇猛に安住して能く壞ること莫く、決定して究竟の法を修行す
 菩薩は諸の願力を具足して、廻向の功德障礙無く
 深く無盡の功德刹に入り、三世の果報窮盡すること無し
 善能く一切の法を觀察して、其性は自在ならずと了達し
 已に能く空無我たるを分別せり、是故に妄りに業報を取らず
 色法及び無色有ること無く、亦有想も無く無想も無く

亦有法及び無法も無く、一切の諸法は所有無し
亦復有に非ず亦無に非ず、亦復因に非ず無因に非ず
彼一切諸縁の中に於て、其心了達して染惑無し
一切衆生の語言の法を、悉く能く了知して所著無く
悉く世間の施設の法を知り、諸法に我有ること無しと決定す
平等に衆生の類を観察し、諦かに諸法は二相無しと了り
普く三世の無差別なるを観ず、佛刹諸業も亦是の如し
菩薩は是の如く知りて廻向し、所行の業に隨つて功德を生じ
明かに諸佛の眞實性に達し、一切の佛の深妙の法を解る
菩薩は是の如く淨く廻向して、心能く分別し善く思量し
自性は悉く性に非ずと了知して、一切の法に於て所著無し
一切諸の境界を攝取して、一切群生の類に廻向し
一切の愚癡の闇を除滅して、眞實の性に於て如如を覺る
菩薩は一切の虚妄の見を、已に滅し已に棄てて永く餘すこと無く
世間の煩惱の熱を遠離して、究竟して清涼の趣に到ることを得
一切諸法の性を壞せず、眞實に所生無しと明達し
諸法は猶し響の如しと解了して、悉く一切に於て所著無し

三世の衆生の類は、悉く因縁の和合より起ると了知し
善く教誨諸の智眼を開き、諸法の眞實性を現せず
業の作は是れ業に非ずと了知し、亦復諸の在性を壊せず
又亦の果報を壊せずして、緣起の法を宣揚し教す
衆生の周生に生有ること無く、亦生死の中に流轉すること無く
衆生に著せずして衆生を重き、善能く諸の微細に隨順す

大方廣佛華嚴經 卷第十六

東晋天竺三藏佛跋陀羅譯

金剛幢菩薩十廻向品第二十一之三

【佛子云云】十種
 の大行の中、第六
 の菩薩一切堅固の
 善根を衆生と菩提
 と眞實際とに廻向
 することを明す。
 【四攝法】布施、
 愛語、利行、同事
 の四種の度脱の法
 前註

佛子、何等をか菩薩摩訶薩の第六の隨順一切堅固善根廻向と爲す。此菩薩摩訶薩は若し
 王たるん時は、勝れたる國土を得、安隱豐樂にして、怨敵を降伏し、治むるに正道を以てし、
 法の如く教化して、巧天下を蓋ひ、徳十方を覆ひ、萬國歸順して敢て命に違ふもの無く、
 兵杖を用ひずして、自然に泰平に、四攝の法を以て善く衆生を攝し、轉輪聖王の七寶成
 就す。此菩薩摩訶薩は堅固にして、自在の功徳に安住し、眷屬和睦して沮壞すべからず、
 端正なること第一にして、觀る者厭ふこと無く、一切の惡を離れ、功徳具足し、相好成滿
 して嚴容殊特に、身體肢節は、端嚴にして周備し、鮮潔明淨にして見る者歡喜す。體力
 堅固にして毀壞すべからず、天帝那羅延の身を攝取す。

諸の障を離れて清淨の業を得、一切の布施を具足し修行す。若は飲食、種種の美
 味、諸の華、衣服、衆の妙華鬘、雜香、塗香、床座、住處、房舍、燈明、湯藥、寶器
 莊嚴せる寶草、象馬寶王、衆の妙寶座、諸の蓋、幢幡、種種の雜寶、妙莊嚴具、清淨

の天冠、髻中の明珠を施し、若は獄囚の諸の瘡毒を受くるを見て大悲心を起し、諸の車馬、妻子眷屬を捨て、身を以て獄に處し、苦の衆生を救ふ。獄囚に送られ死地に趣くを見ては、自ら己が身を捨てて、以て彼命に代り、若は人の連膚、頂髮、髻中の明珠、眼耳鼻根、牙齒舌根、頭頂、手足、身を壞りて血を出し、髓肉、及び心、腸腎肝肺、肢節諸骨、厚皮薄皮、或は手足の指、連肉指爪を乞ふ有らんに、正法を求めんが爲には、身を火坑に投じ、法を求めんが爲の故に、身を擧げて具さに無量の衆苦を受け、法得難きが爲の故に、盡く大地、四海の園土、大小の諸城、村邑丘聚、園土の豐樂なる、人民の熾盛なる、園林浴池、華果の繁茂せる、無量の莊嚴、天下の太平にして、諸の怨敵無き、金銀の寶藏、妻子眷屬を捨て、自在の法王として、一切の屠殺惡業を斷除し、普く無畏を施す。若し人行りて畜類及以人根を毀壞し、身を殘闕せしむるを見れば、大慈悲を起して之を救度し、大音聲を以て普く一切に告げて佛の名を聞かしむ。或は大地を施して佛の殿堂を起し、僧の房舍を造り、菩薩聖衆の福田を安處し、或は尊廟を建てて一切に隨應し、或は僮使を施して、尊なる父母と知識と一切の福田とに供給し、身を以て布施して一切に給使し、復自身を以て普く諸佛を覆ひ、自身を以て一切の衆生に施し、常に己が身を以て諸佛に奉給し、園土及び日の京都、嚴飾せる大城を布施し、又寶女、侍人、眷屬、妻妾、男女を施し、或は屬すに家の種種の莊嚴、遊戯の園林を以てし、或は無數の大衆の施會を設けて、諸惡を遠離す。衆生を淨めんが故に。悉く一切の資生の具を捨てて、心に貪著せず、果報を求

【法食】 禪法を以て心神を資し、禪定の樂によりて諸根を増長せしめ、慧命を資益する禪悅食、聞法修行の因に依りて善根を増長し、慧命を資益する法喜食等の如き法味を以て慧命を資益すること身の物味に依るが如きを以て言ふ。

めず、悉く能く捨離す。若し諸の衆生の、人と非人と、貧賤と富貴と、或は善、或は惡、種種の福田、遠近の諸方より一切悉く來り、或は自ら來りて求め、或は來らずして求むるに、一切悉く施して慳吝する所無く、是の如きの念を作さく、「攝取して一切の堅固なる善根の廻向に隨順し、善色を攝取して、一切の堅固なる善根廻向に隨順し。善の受想行識を攝取して、一切の堅固なる善根廻向に隨順し、國土を攝取して、一切の堅固なる善根廻向に隨順し。勝れたる人を攝取して、一切の堅固なる善根廻向に隨順し。財利を攝取して、一切の堅固なる善根廻向に隨順し。一切の惠施を攝取して、一切の堅固なる善根廻向に隨順せん」と。

菩薩摩訶薩、是の如きの諸の善根を廻向し已りて、是の如きの念を作さく、「我行する所の施は無貪無著無染にして解脫し、其心眞直にして慳吝する所無し。此惠施の功德の力を以て、一切の衆生をして大智慧を得、心に障礙無く、食を知り食を見て、貪著する所無く、但法食を以て永く搏食を離れ、智慧充滿して善根を攝取し、法身智身、清淨に遊行して、衆生を化せんが爲に搏食を受くることを現せしめん」と。

菩薩摩訶薩、若し飲を施す時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て一切の衆生をして、法の甘露を飲みて、菩薩の道を成じ、渴愛を除滅して、常に大乘を樂ひ、五欲の愛を離れて淨法の愛を得しめ、法身柔軟となり、三昧もて心を調へ未だ曾て散亂せず、智慧海に入りて、大法雲を興し、法の甘露を雨らさん」と。是を菩薩摩訶薩の飲を布施する時の善根

【持食】 攝食亦は
 段食とも言ふ。五
 穀肉等の一般的
 食物のこと。四食
 の中の不淨依止食
 にして、欲界凡夫
 の食物なり。
 【湯愛】 愛慾の義
 にして不淨なる貪
 煩惱なり。

【乘】 乗りものの
 義なり。衆生を乗
 せて佛果に到らし
 むるを目的とする
 佛教を大乘と言ひ
 一般に教理又は教
 道の意にも解さる
 【一切補習】 三智
 の一にして一切の

廻向と爲す。菩薩摩訶薩、若し衆味を施さば、謂ゆる辛酸鹹淡甘苦、是の如きの無量の香
 膳香味は、之を食するに厭くこと無く、能く四大をして柔軟にして安樂ならしめ、身體を
 充滿し、氣力を康強ならしめ、歡喜の心を發して諸根を明淨にし、内身を嚴持し長育し
 柔軟にし、肌色光潤ありて、一切の毒害も壞する能はざる所、衆の疾を消滅して、無
 患の法を得しむ。菩薩摩訶薩は是の如き等の無量無數の諸の美味を施す時、是の如く廻
 向すらく、此善根を以て一切の衆生をして上味の相を得て甘露を充滿せしめ、一切の衆生
 をして心に法味の深智に安住することを得て、悉く一切衆味の業を知らしめ、一切の衆
 生をして、悉く無量の深慧の法味を得、法界智を了り、實地に安住し、法域に到ることを
 得しめ。一切の衆生をして法雲普く雨らして法界に充滿し、悉く諸く衆生を調伏し、威
 熱せしめ、一切の衆生をして勝れたる智味、無上の法愛を得て、身心を柔軟ならしめ、一
 切の衆生をして上味の相を得て、衆味に著せず、一切の佛法の諸門を修習せしめ。一切の
 衆生をして皆善く和合して一味の法を得て、諸佛の無二の法を出生せしめ。一切の衆生
 をして、無礙の味を得、一切智の乘に於て、不退轉を得しめ。一切の衆生をして一切の佛
 の無礙の法味を得て、善能く一切の諸根を分別せしめ。一切の衆生をして法味充滿して、
 無礙の佛法に具足し安住せしめん」と是を菩薩摩訶薩の衆味を施す時の善根廻向と爲す。
 一切の衆生をして無礙の智身を具足することを得しむ。菩薩摩訶薩、乘を布施する時、是
 の如く廻向すらく、此善根を以て、一切衆生をして一切智乘、具足大乘、不可壞乘、勝

道法(諸佛の)を解し、一切衆生の性を種に分識し、種種なる法を觀じ、無明を破して衆生を教導するの智を言ふ

【阿伽陀】(Aghata) 阿揭陀、阿竭陀とも書き、無病、無價等と譯す。不死藥、丸藥とも言ふ。印度に於ける最上の藥劑なり。

乘、上乘、速疾乘、大力乘、功德威、就乘、出世間乘、無量の諸の菩薩を出生する乘に乗じ、功德を満足せしめん」と。是を菩薩摩訶薩の乘を布施する時の善根廻向と爲す。菩薩摩訶薩、衣を布施する時、是の如く廻向すらく、此善根を以て、一切の衆生をして慍愧の法服を待て、以て其身を覆ひ、諸の陋形を離れて端嚴殊妙となり、顔容鮮澤に、膚體柔軟にして、身上の樂、諸佛の樂、無量の法身の普く一切に應ずる無上清淨なる一切種智を得しめん」と。是を菩薩摩訶薩の衣を布施する時の善根廻向と爲す。

菩薩摩訶薩、衆華、鮮妙の香華、種種色の華、無量樂の華、善現の華、樂無厭の華、一切時の華、天華、人華、世の樂ふ所の華、無上の香華、是の如き等の無量の衆華を布施せんに、菩薩摩訶薩は、悉く以て現在の十方一切の諸佛を供養し、及び滅度の後は塔廟、諸の法施の者、比丘の僧寶、一切の菩薩、諸の善知識、聲聞緣覺、父母親族、乃至自身の下、及び貧賤に供養す。菩薩摩訶薩は華を布施する時、是の如く廻向すらく、此善根を以て、一切の衆生をして悉く諸佛の三昧の華を得て、清淨に開敷し、妙法の衆華を其心より出さしめ。一切の衆生をして觀るに厭足無くして佛法の愛を得しめ。一切衆生をして、常に妙色を見て身相端嚴にして見る者厭くこと無からしめ。一切衆生をして未だ會て散亂せずして、一切の清淨なる行業を具足せしめ。一切衆生をして常に善知識を念じて、心に變異無からしめ。一切衆生をして阿伽陀藥の如く、悉く一切煩惱の衆毒を除かしめ。一切衆生をして大願を満足し、決定して、無上の智王に安任せしめ、一切衆生をし

【戒香】 香木を燒き、香を熏するは、不淨業を除去する爲なり。佛教に於ては、六波羅蜜を象徴するは香なり。戒の本義は香の作用に通ずるを以てなり。故に戒香と呼ぶ。

て智慧目を出し、一切の愚癡闇冥を除滅せしめ、一切の衆生をして淨滿月の如く、菩提の月を長じ、功德の華を聞かしめ、一切衆生をして大寶海に入りて、善知識を見、一切の善根を具足し成就せしめん」と。是を菩薩摩訶薩の華を布施する時の、善根廻向と爲す。一切の衆生をして、悉く無礙清淨の妙智を得しむ。菩薩摩訶薩、覺を布施する時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして人の樂見する所、見て欣ばふること無く、見て轉ち親善し、見て愛せざる無く、見て憂惱を離れて必ず諸佛を見たてまつり、一切の淨智を得しめん」と。是を菩薩摩訶薩の覺を布施する時の善根廻向と爲す。菩薩摩訶薩、香を布施する時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て一切の衆生をして戒香を具足して、不壞の戒、不雜の戒、離垢の戒、離疑の戒、離纏の戒、清涼の戒、不犯の戒、無量の戒、無上の戒、離世間の戒、菩薩の究竟じて彼岸に至るの戒を得しめ、一切の衆生をして諸佛の戒身を具足し成就せしめん」と。是を菩薩摩訶薩の香を布施する時の善根廻向と爲す。一切の衆生をして無礙の戒身を具足し成就せしむ。菩薩摩訶薩、塗香を施す時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て一切の衆生をして覺香普く熏じて、悉く所有を捨てしめ、一切の衆生をして戒香普く熏じて、佛の淨戒を得しめ、一切の衆生をして忍香普く熏じて、毒害の心を離れしめ、一切の衆生をして精進の香具足して普く熏じ、大乘を勤修し、弘誓をもて莊嚴せしめ、一切の衆生をして定香普く熏じて、諸佛現前の三昧を具足せしめ、一切の衆生をして慧香普く熏じて、一念の中に於て無上の智正を得しめ、一切の衆生をして

法香普く熏じて、無上なる無畏の法を成就せしめ、一切の衆生をして徳香普く熏じて、一切の功徳智慧を成就せしめ、一切の衆生をして無上菩提の妙香普く熏じて、佛の十力を得て彼岸を究竟せしめ、一切の衆生をして白淨の法香具足して普く熏じ、一切諸の不善の法を斷除せしめん」と。是を菩薩摩訶薩の塗香を施す時の善根廻向と爲す。

菩薩摩訶薩、床座を施す時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして天の寶座を得て慧床に安處せしめ、一切の衆生をして賢聖の座を得て、凡夫の意を捨て菩提の心を修めしめ、一切の衆生をして安樂の座を得て、生死の苦を離れしめ、一切の衆生をして最上の座を得て、諸の如來の自在神力を見たてまつらしめ、一切の衆生をして最勝の座を得て、無上の業を得、永く世間を離れしめ、一切の衆生をして安隱の座を得て、身に一切諸の深妙の法を證らしめ、一切の衆生をして清淨の座を得て、如來の淨智の境界を修習せしめ、一切衆生をして安住の座を得て、善知識常に隨ひて覆護することを得しめ、一切の衆生をして師子の座を得て、如來の無畏の座を具足せしめん」と。是を菩薩摩訶薩の床座を施す時の善根廻向と爲す、一切の衆生をして念慧を修習して諸根を調伏せしむ。菩薩摩訶薩、住處を施す時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして悉く如來の淨淨せる佛刹を得て、功徳を修習して、佛刹を莊嚴し、甚深なる三昧の境界に安住し、彼住處に於て而も所著無く、善能く一切の住處を分別して、世間の住を離れ、佛住に安住し、一

一切諸佛の所作を攝取して、大道を究竟し、安樂にして善住し、無量なる清淨の善根を修習し、未だ嘗て佛の無上の住を捨離せざらしめん」と。是を菩薩摩訶薩の住處を施す時の善根徇向と爲す。一切の衆生をして、安樂にし饒益し一切を救護せしむ。菩薩摩訶薩、房舎を施す時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生を饒益し安樂にして、正念し思惟せしめ、一切の衆生をして如來の住に依り、大智の住に依り、善知識の住に依り、尊重の住に依り、善行の住に依り、大慈の住に依り、大悲の住に依り、六波羅蜜の住に依り、無量なる菩提心の住に依り、一切の菩薩道の住に依らしめん」と。是を菩薩摩訶薩の房舎を施す時の善根徇向と爲す。一切の衆生をして清淨の智慧、諸道の功德を具足し成就せしむ。

菩薩摩訶薩、燈明を造らし、謂ゆる、酥燈、油燈、寶燈、摩尼燈、漆燈、火燈、沈水香の燈、旃檀香の燈、一切香王の燈、無量色の光焰の燈なり。是の如き等の無量の燈明を以て施す時に、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生を饒益し、一切の衆生を攝取し、一切の衆生をして無量の光を得て、普く一切諸の如來の法を照らさしめ。一切の衆生をして明淨の光を得て、普く一切諸の微細の色を照らさしめ。一切の衆生をして障礙の光を得て、善能く衆生界無きことを了知せしめ。一切の衆生をして無量の光を得て法身の淨光普く一切を照らさしめ。一切の衆生をして普光明を得て諸佛の法に於て不退轉を得しめ。一切の衆生をして佛の光明を得て、普く一切無量の轉利を照らさしめ。

一切の衆生をして無礙の光を得て、一光明を以て普く能く一切の法界を遍照せしめ。一切の衆生をして無量の光を得、普く佛刹を照らして光明遍照せらしめ。一切の衆生をして光明幢王、慧光幢の燈を得て普く世間を照らさしめ。一切の衆生をして無量色の光を得、自在の光を放ちて一切の刹を照らさしめん」と。是を菩薩摩訶薩の燈明を施す時の、善根廻向と爲し、悉く能く一切の衆生を饒益し、悉く能く一切の衆生を安樂にし善根に隨順す。衆生に隨順する善根は善く一切の衆生を攝し、等施の善根は等しく衆生に施し、慈愍の善根は衆生を愍念し、普覆の善根は普く衆生を蔭ひ、布施の善根は衆生を満足せしめ、普く一切の善根の境界に入り、平等の善根は衆生を平等にし、智慧の善根は一切の衆生を分別す。是を菩薩摩訶薩の燈明を施す時の善根廻向と爲す、一切の衆生をして無礙の廻向を得て、一切の明淨なる善根に安住せしむ。菩薩摩訶薩、湯藥を施す時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切衆生をして諸の障礙を離れしめ。一切衆生をして病身を捨離して、悉く如來の清淨の法身を得しめ。一切衆生をして菩提性を成じて、悉く能く一切衆生の不善の病を除滅せしめ。一切衆生をして阿伽陀藥を成じて、菩薩の不退轉地に安住せしめ。一切衆生をして如來の藥を成じて、一切の煩惱の毒刺を拔出せしめ。一切衆生をして賢聖に習近し、煩惱を除滅して清淨の行を得しめ。一切衆生をして不壞の藥樹を具足の意を得て、未だ曾て一切の善法を厭離せざらしめ。一切衆生をして不壞の藥樹を具足し成就して、一切諸の不善の病を對治せしめ。一切衆生をして諸の病刺を除きて、悉く

一切の智慧の光明を得しめ。一切衆生をして世間の諸の對治法を解了して、福生に隨應して衆病を對治せしめん」と。菩薩摩訶薩は施藥の善根を、是の如く等同し已りて、此善根に因りて、一切の衆生をして諸病を捨離し、安隱にして患無く、具足清淨にして、諸の如來の無病の法を得しむ。一切の衆生をして諸の病刺を出して、無盡の身を得、金剛圍山も壞すること能はざる所、堅固なる一切の諸力を具足して、諸佛の無上なる法樂を成滿し、佛の神力自在の法身を得しむ。是を菩薩摩訶薩の湯藥を施す時の善根同向と爲す。

菩薩摩訶薩、悉く能く一切の諸器を惠施す、謂ゆる眞金の器を以て雜寶を盛滿し、白銀の器を以て寶寶を盛滿し、琉璃の器を以て雜寶を盛滿し、玻璃の器を以て種種の寶莊嚴具を盛滿し、寶瓶の器を以て赤珠寶を盛り、瑪瑙の器を以て珊瑚夜光の衆寶を盛滿し、又石器を以て諸の美瑄を盛り、房檀の器を以て衆の青衣を盛り、金剛の器を以て衆香を盛滿し、是の如き等乃無量無數の諸の妙寶器は、是るに無量無數の妙寶を以て、或は諸佛に施す佛の福田の不思議なるを信するが故に。或は菩薩に施す菩提心を發せる諸の善知識には值遇すること難きが故に。或は衆僧に施す、佛法を長養するが故に。或は福伽羅聲聞、緣覺に施す、聖法を愛するが故に。或は父母に施す、尊重の爲の故に。或は師長に施す、教へて法の如く功德を修せしむるが故に。乃至下品の凡ちに布施す、大慈大悲の愛眼を以て等心に衆生を觀するが故に。三世一切の菩薩の滿足せる檀波羅蜜を捨てざるが故

【福伽羅】(Pūṣṭi) 補特伽羅とも書き、數取趣、又は有情、人等と譯す、一般有情の意に用ひられ、又打情の我を言ふことあり。

【下品】 下機と同
意なり。宗教的機
能の下劣なるを言
ふ。

に。一向に専ら無上の菩提を求むるが故に。悉く一切内外の所有を捨てて、一切衆生の類を捨てざるが故に。福田及び財物に著せざるが故に。菩薩摩訶薩は是の如き等の無量の寶器を以て、盛るに無量の雜寶を以てし、これを施す時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て一切の衆生をして廣大の藏器を成じて、虚空に等しき廣大の念根を成じ、世間出世間の一切の經書を、悉く能く受持して忘失せざらしめんが故に。一切の衆生をして清淨の器を成じ、普く能く佛の深法を受持せしめんが故に。一切の衆生をして無上の寶器を成じて、悉く能く去來今佛の一切の法を受持せしめんが故に。一切の衆生をして、普く如來の勝法の寶器を成じて、悉く能く三世の諸佛の無壞の法を受持せしめんが故に。一切の衆生をして莊嚴せる寶器を成じて、極まり無き菩提心を受持せしめんが故に。一切衆生をして悉く一切の功德の器を成じて、如來の無量なる淨智を志樂せしめんが故に。一切衆生をして一切智の内法の器を成じて、如來の無礙の解脫、一切智を究竟せしめんが故に。一切衆生をして未來際劫の一切の菩薩の所行の器を成じて、一切の衆生を堅固に一切智に安住せしめんが故に。一切衆生をして、三世の佛の勝妙なる法器を成じて、一切諸佛の梵音の説法を悉く受持せしめんが故に。一切の衆生をして、悉く内器を成じて、其身に一切世界の虚空界法界の諸佛の眷屬を容受し、諸佛を勸請して大法輪を轉じ、悉く能く受けしめんが故に」と。是を菩薩摩訶薩の器を布施する時の善根廻向と爲し、一切の衆生をして諸法の器を成じて、皆能く普賢菩薩の一切の願行を受持せしむ。

菩薩摩訶薩は、無量なる種種に莊嚴せる寶車を以て、諸佛菩薩、及び善知識、如來の大衆、聲聞緣覺、一切の福田に奉施す。種種の衆生は餘方より來り、或は菩薩の名聞を承るが故に來り、或は是菩薩の因縁の故に來り、或は菩薩の施願を發すを聞くが故に來り、或は是菩薩の心願に請ぜられて來る。菩薩摩訶薩は或は種種に莊嚴せる妙寶の金車を施す。金鈴の網にて覆ひ、微動すれば相扣ちて和雅の音を出し、寶瓔珞を垂れ、種種に莊嚴せり。或は清淨なる珊瑚の寶車を施す、無量の珍妙なるを以て嚴飾と爲せり。或は復衆の妙寶車を施與す、白銀にて莊嚴し、白網にて羅覆せり。或は復神馬の寶車を施與す、無量億の寶を以て莊嚴と爲し、一切の寶網は其上に絞絡せり。或は復梅檀の香車を施與す、種種の寶輪を以て莊嚴と爲し、寶師子の座を以て其上に敷き、百千の采女其内に列侍せるは、皆人相具足して、顔容殊妙なり、衆寶の華蓋は其上に彌覆し、十萬の壯士もて之を牽御せり。或は復玻璃の寶車を施與す。無量なる雜色の妙寶にて莊嚴し、載するに無數の端嚴なる采女を以てし、衆の雜寶の帳を以て其上に覆ひ、寶網幢幡は周匝して莊嚴せり。或は復瑪瑙の寶車を施與す。飾るに衆寶を以てし、重なるに雜香を以てし、摩するに塗香を以てし、散するに妙華を以てし、百千の采女は金の璽珞を持て平正にして安祥なるも、其疾きこと風の如し。或は復堅固の香車を施與す、敷くに種種の柔軟なる寶衣を以てし、衆の妙寶網を其上に羅覆し、清淨なる妙香を以て之に熏じ、其香の殊妙なる、能く人心を悅ばしめ、逆風に遠く

【二乘】聲聞乘、緣覺乘を云ひ、佛果の大菩提を求めざるを以て此二乗の果をば願求せざらしむ。

熏じて聞ぐ者厭くこと無く、諸の天子等は前に在りて牽御せり。或は復一切の寶車を施與す、種種の雜色を以て絞飾と爲し、衆の妙寶網を其上に羅覆し、諸の雜寶の帶は周匝して垂れ下り、敷くに寶衣を以てし、散ずるに末香を以てし、所愛の男女を悉く其上に載せたり。菩薩摩訶薩は是の如き等の衆の妙寶車を以て、諸佛に施す時、是の如く廻向すらく、此善根を以て、一切の衆生をして、悉く皆無上の福田を樂ひ求めて、深く佛に施し、無量の報有ることを信ぜしめ。一切の衆生をして、一心に佛に向ひて無量なる清淨の果報を速得せしめ。一切の衆生をして、諸佛の所に於て懺吝の心無く、大施を具足して愛惜する所無からしめ。一切の衆生をして、諸佛の所に於て上福田を修し、二乗の願を離れて、諸の如來の無礙の解脫、一切種智を得しめ。一切衆生をして、諸佛の所に於て無盡の善根を種ゑ、佛の無量なる功德智慧を得しめ。一切衆生をして深慧を攝取して、清淨なる無上の智王を具足せしめ。一切の衆生をして、所遊自在にして、諸の如來の一切處に至る無礙の神力を得しめ。一切の衆生をして、大乘を攝取して、無量の種智を得、安住して動ぜざらしめ。一切の衆生をして、第一の福田を具足し成就して、皆能く一切智地を出生せしめ。一切の衆生をして、一切の佛に於て嫌恨の心無く、諸の善根を種ゑて佛智を樂ひ求めしめ。一切の衆生をして、少しの方便を以て一切の莊嚴せる佛刹に往詣し、一念の中に於て深く法界に入りて疲倦無からしめ。一切の衆生をして、虚空に等しき菩薩の神通に入りて、悉く能く遍く一切の佛の所に至らしめ。一切の衆生をして、無比の身

を得て、盡く能く過く十方の世界に遊びて疲倦無からしめ。一切の衆生をして廣大の身を成じて隨意の行を得しめ。一切の衆生をして、一切の佛の神力莊嚴を得て、彼岸を究竟し、一念の中に於て如来の自在神力を顯現して、虚空界に遍からしめ。一切の衆生をして、安隱の行を修して一切諸の菩薩の行に隨順せしめ。一切の衆生をして、行疾無疑にして、十力智慧の彼岸を究竟せしめ。一切の衆生をして、一切の世界を轉する力波羅蜜を得て、普く一切不壞の法界に入らしめ。一切の衆生をして普賢の行を行じて彼岸に到り、一切種智を速轉せざることを得しめ。一切の衆生をして、無比の智乘に乗じて、一切の法界に隨順し修行して眞實の性を見しめん」と。是を菩薩摩訶薩の諸の寶乘を以て、現在の諸佛、及び滅度の後には舍利塔廟に奉施する善根の廻向と爲し、一切の衆生をして諸佛の無礙の大乗を究竟せしむ。

【滅度】滅は寂滅
人畢竟、度は度海
生死の苦海を度り
て、脱して、寂靜
安樂の涅槃に入る
を言ふ。

菩薩摩訶薩は諸の菩薩及び善知識に清淨の乘を施す時に、是の如く廻向すらく、
「此善根を以て、一切の衆生をして菩薩と諸の善知識とを捨てず、恩を報じ恩に報いしめん、一切衆生をして、善知識の義に同じて、同性の善根を攝取せしめんが故に。一切衆生をして、諸の善知識に親近し、尊重し、恭敬し、供養して、普く一切を捨てて善知識を攝せしめ。一切の衆生をして、正直心を得て、善知識に隨はばただ曾て遠離せざらしめ。一切の衆生をして、常に善知識に見えて具教に違はざらしめ。一切衆生をして正直心を得て、善知識を捨てず、一切の垢を離れて心を不可壞ならしめ。一切の衆生をして、善知識

【眞如】眞は其體、虚無ならざる義、眞實の義なり。如は性改異せざる義、物其自身の義なり。諸法の實體實性に於て絶體平等の理を言ふ。學派によりて其說相異す。

【摩訶衍】(Mahāyāna) 摩訶衍那の譯。菩薩の大機が佛果の大涅槃を得る法門を言ふ。今は佛果の大涅槃を得ることを意味す。

の爲に身命をも惜まず、悉く一切を捨てて、其教に違はざらしめ。一切の衆生をして、善知識の爲に攝取せられ、大慈を修習して、諸惡を遠離せしめ。一切の衆生をして善知識に願ひて佛の正法を聞き、悉く能く受持せしめ。一切衆生をして、善知識の善根業報に同じ、菩薩の行願を究竟じて、清淨に平等に満足せしめ。一切の衆生をして、正法を出生して善く一切の三昧の境界を知り、智慧具足して神通自在ならしめ。一切衆生をして諸趣を遠離し、一切の法を受持し、究竟じて彼岸に到らしめ。一切衆生をして大乘に乗じてより、乃し一切種智を究竟するに至るまで、其中間に於て懈怠有ること無からしめ。一切の衆生をして、智慧の乘に乗じて、安穩の處に至り、退轉有ること無からしめ。一切の衆生をして、眞如の行を知りて愚癡を遠離し、一切諸佛の正法を聞持せしめ。一切の衆生をして、皆一切の諸佛の爲に攝せられて無礙智を得、諸法を究竟せしめ。一切の衆生をして、不死の神足を得て妙速無礙ならしめ。一切の衆生をして、遊行自在にして、衆生を調伏し、摩訶衍を成せしめ。一切の衆生をして、所行虚しからず、皆悉く究竟じて智慧の乘を得しめ。一切の衆生をして無礙の乘を得て、無礙智を以て一切處に至らしめん」と。

是を菩薩摩訶薩の、善知識に種種の乘を施す時の、善根廻向と爲し、一切の衆生をして功德具足して、佛菩薩と等しくして差別無く、悉く能く一切の賢聖を愧かせしむ。

菩薩摩訶薩、如來に衆の種種なる寶乘を施す時、善く施の心、慧分別の心、功德を淨むる心、施に隨順する心、僧寶に遇ひ難きの心、深く僧寶を信する心、正教を攝取する心、

正直に安住する心を擧し、善能く大施の會を究竟じて、無量無邊の功德を出生し、佛の
 正教に於て信心清淨にして、沮壞すべからず。菩薩摩訶薩は、種種の業を以て僧寶に施
 す時、是の如く廻向すらく。此善根を以て、一切の衆生をして佛の正法に向ひ、正教を推
 進せしめ。一切の衆生をして、專心に内觀して邪心を除滅し、聖處を成就せしめ。一切の
 衆生をして賢聖の地を得て、如來の法を以て展轉して相教へしめ。一切の衆生をして世を
 擧げて尊重し、言必ず信用せられしめ。一切の衆生をして一切法に入りて、善能く無二の
 法界を分別せしめ。一切の衆生をして人寶に圍遶せられ、如來の智境界より出生せしめ。
 一切衆生をして離垢の法に住して、皆能く煩惱塵垢を除滅せしめ。一切の衆生をして、悉
 く無上の僧寶より出生して凡夫の法を離れ、聖僧の地を得しめ。一切衆生をして聖法を
 具足して無礙智を修めしめ。一切の衆生をして、大衆の主と爲り、智慧莊嚴して世間に榮
 まざらしめ。一切の衆生をして、善方便を以て慧の法輪を轉せしめ。一切の衆生をして、
 一念の神力を得て、悉く能く不可說不可說の世界に周遍せしめ。一切の衆生をして、虚空
 身に乘じて一切の世間に於て、智慧無礙ならしめ。一切の衆生をして、輕擧の身と微妙の智慧とを得て、悉
 く能く遍く諸佛の世界に遊ばしめ。一切の衆生をして、無礙の神足を得て、一切の刹に於
 て普く能く身を現せしめ。一切の衆生をして、大自在神足の彼岸を得て、一座を起たすし
 て、悉く普く一切の世界に應現せしめ。一切の衆生をして、淨法身を得て、諸の世界に於

【無淨】淨は煩惱の異名。無淨とは即ち煩惱を増長せしめざる義にして無漏法を指す。

て所著無く、神力を出生して、行くことの疾かなること電の如くならしめ。一切の衆生をして不思議の神足の境界を現じて、善能く隨順して一切の衆生を教化し調伏して、其宜しきを失はざらしめ。一切の衆生をして妙神足を得て、一念に遍く十方の世界に遊び、一念に一切の法界を超度して罣礙する所無からしめん」と。是を菩薩摩訶薩の、如來衆に種種の乘を施す時の善根廻向と爲す、一切の衆生をして普く清淨なる無上智の乘に乗じて、一切の世界に於て無礙の法輪智輪を轉せしむ。

復次に菩薩摩訶薩、聲聞緣覺に種種の乘を施す時に、恭敬の心、尊重の心、福田の心、功德界の心、功德智慧を出生する心、深く如來の功德を信ずる心、無量の億那由他の清淨なる善根を修習する心、不可説の劫に於て菩薩の清淨行を修習する心、一切の魔の繫縛を解脫する心、一切の魔軍の衆を摧滅する心を發し、稱量すべからざる、明淨の智慧もて、善能く一切の諸法を分別し、一切の衆生をして、皆信すべき第一の福田を成じて、無上の檀波羅蜜を具足せしめ。一切の衆生をして、無益の言を離れて、獨閑靜を樂ひ、心に二念無からしめ。一切の衆生をして、最勝清淨なる第一の福田を成じて、功德を修習し、衆生を攝取せしめ。一切の衆生をして、智慧地を成じて能く衆生に無量の善果を與へしめ。一切の衆生をして、無礙の趣に至りて最勝の福田を清淨圓滿ならしめ。一切衆生をして、其心無諍三昧に安住して、一切の法は無性を性と爲すことを解らしめ。一切の衆生をして、無量の功德を具足し長養して、常に最勝第一の福田に遇ひたてまつらしめ。一

【九十六種外道】

佛敎興起前後の印度に於ける佛敎以外の宗教及び學派を概括して六師外道と云ふ、此宗派及び學派に各代表的十五の弟子ありて其師を加へて九十六人となり、各自佛敎外の敎を説く、是を佛敎側にては九十六種の外道と呼べり。

【明行足】 Vidya-ambudhi

精多總攝那三般那の譯にして佛十號の一たり、明は法を證ることの昭かなるを言ひ、行は

一切の衆生をして、無量なる自在神力を示現して、清淨の福田に隨順攝取せしめ、一切の衆生をして、無盡の功徳の福田を成就して、能く一切の十力乘の果を與へしめ、一切の衆生をして、眞實の福田を成じて無盡の功徳の藏を具足し、一切智を究竟せしめ、一切の衆生をして、諸の惡法を滅し、佛の正法の匂身味身を聞きて、悉く能く受持せしめ、一切の衆生をして、普く佛法を聞きて、開解する所に隨ひて、具徳虚しからざらしめ、一切の衆生をして、佛の誦法を聞きて彼岸に到ることを得、聞く所の佛法を、能く衆生の爲に隨順して演說せしめ、一切の衆生をして、常に如來の正敎の法を樂み、一切の九十六種の外道の邪見を除滅せしめ、一切の衆生をして、常に賢聖に見えて、一切の最勝なる善根を長養せしめ、一切の衆生をして、明行足の者を常に瞻對することを樂み、與に共に同止して、永く安樂に處らしめ、一切の衆生をして、聞く所虚しからずして、聲の響の如きを解り、佛の出生を見しめ、一切の衆生をして、善く分別して諸佛の正敎を知り、悉く能く佛法を持する者を守護せしめ、一切の衆生をして、心常に樂向して佛法を聞持し、能く照して如來の法敎を顯現せしめ、一切の衆生をして、深心に如來の正敎を究竟せしむ。是を菩薩摩訶薩の、聲聞緣覺に種種の乘を施す時の善根廻向と爲す。一切の衆生をして無上智を得、諸の神通を淨め、精勤し、修習して、懈怠有ること無く、佛の智力と無所畏とを究竟せしむ。

三學止觀を修行する義、如來は此二ることなきを以て此名あり。

菩薩摩訶薩、若し諸方より來る一切の福田は、或は菩薩の名聞を承はるが故に來り、或は菩薩の因縁の與の故に來り、或は菩薩の本願を聞くが故に來り、或は復菩薩の心願に請ぜられて來る。菩薩は彼に於て悉く惠施せんことを業ひて厭倦無し。爾時、菩薩、來り求むる者に於て、悔過の心を發し、是の如きの言を作さく、「諸人、當に知るべし、我應に彼に詣りて禮拜し供養して種種に惠施すべし、而も今我が爲の故に遠くより來る」と。菩薩は即時に敬禮して過を悔い、愛言もて慰諭し、遠來を屈辱して疲倦無きを得、處を安隱ならしめ、須むる所を供給す。或は摩尼の寶車を施し、載するに閻浮提の内の第一の女寶を以てし。或は金車を施し、載するに己が國の最勝なる寶女を以てし。或は清淨なる瑠璃の寶車を施し、載するに內妓を以てし。或は樂車を施し、載するに童女の容貌は天の如きを以てし。或は無量無數の寶もて莊嚴せる車を施し、載するに寶女の種種に莊嚴せるを以てし。或は菩薩の乘る所の梅檀香の車を施し、或は玻黎の寶車を施し、載するに寶女を以てし、端正殊特にして、顏容備無く、威儀具足し、進止安詳にして、神珠名寶を具身に瓔珞して、善法を樂修す。或は瑪瑙の寶車を施し、載するに太子を以てし。或は堅固の香車を施し、載するに男女を以てし。或は種種の寶もて莊嚴せる車を施し、載するに壞し難き觀愛の眷屬を以てす。是の如き等の種種の寶車を以て、其求むる所に隨ひて皆之を給施して、彼願を満足せしめ、歡喜すること無量ならしむ。

菩薩摩訶薩は諸乘を施す時、是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして、

【四輪乘】四種不
於過輪とも言ひ、
八難(前註)を描破
して衆生をして佛
法を見聞すること
を得しむる教法

【住正國輪】勝土
輪とも言ひ、所住
の國上の善く治り
平和安樂ならしむ
るを言ふ。八難の
中五惡處(三惡道、
北洲(長壽天)の難
を破す。

【依正土輪】善人
輪とも言ひ、佛菩
薩等の善知識に遭
遇して其化益を受
くることを得、即
ち佛前佛後の惡時
の難を推す。

不退轉の摩訶衍乘に乗じて、不思議なる菩提樹の下に詣らしめ。一切の衆生をして、大智の乘に乗じて、盡未來劫に一切菩薩の諸行の法を皆能く修習せしめ。一切衆生をして、無所有の乘に乗じて、一切の法に於て心に所著無く、虛妄を捨離して、一切智の道を具足し修習せしめ。一切の衆生をして、悉く離垢寂靜の乘に乗じて、無礙の神力もて諸佛の刹に詣らしめ。一切の衆生をして、決定して一切智の乘に安住し、常に諸佛の法樂を以て自ら娛ましめ。一切の衆生をして、諸の菩薩の清淨行の乘に乗じて、菩薩の十種の道を出生し、菩薩の一切の三昧を業修せしめ。一切の衆生をして、四輪の乘なる住正國輪、依正土輪、本功德輪、平等願輪に乗じて、菩薩の淨行斯に由りて満足せしめ。一切の衆生をして、明法の乘に乗じて、過く十方に遊び、佛の智力を修せしめ。一切の衆生をして、佛法の乘に乗じて、一切の法に於て彼岸を究竟せしめ。一切の衆生をして、一切の功德善根の不可思議なる法乘に乗じて、十方の衆生の爲に、安隱の道を現せしめ。一切の衆生をして、一切施の乘に乗じて、壅垢を斷除せしめ。一切の衆生をして清淨なる尸波羅蜜の乘に乗じて、無量無邊の法界に等しき一切の淨戒を具足せしめ。一切の衆生をして、攝提波羅蜜の乘に乗じて、瞋恚の心を離れて、諸の衆生に於て惱害を起さざらしめ。一切の衆生をして、不退轉の毘梨耶波羅蜜の乘に乗じて、菩薩の行を具へ、道場に往詣せしめ。一切の衆生をして、鞞波羅蜜の乘に乗じて、速かに道場に赴かしめ。一切の衆生をして、般若波羅蜜の乘に乗じて、化身して一切の法界、及び佛の境界に充滿せしめ。一切の

【本功德輪】先福の善根に因りて勝報を受くることを得、即ち生盲等の惡果を受くるの難を排す。

【平等願輪】自正輪とも言ひ、自ら正願を發して佛道を修し正智正見を得て佛果を得んことを願ふ、即ち世智辨聰の惡因の難を避くるなり。

【安豫】安は安んずる、豫は樂み、悦ぶ義なり。即ち乘り心地好く安心して出發するを言ふ。

衆生をして、法王の乘に乗じて、無畏の施、一切智の微妙の法を成就せしめ。一切の衆生をして、所著無き智悲願の乘に乗じて、悉く能く遍く一切の諸方に入り、眞の法性に於ては而も所入無からしめ。一切の衆生をして、諸佛の法乘に乗じて、一切の利に於て受生を示現して、摩訶衍を毀壞せざらしめ。一切の衆生をして、一切智の乘に乗じて、菩薩の平等なる大願を満足して、懈倦無からしめん」と。是を菩薩摩訶薩の種種の乘を施して、普く衆生に無量の福田を施し、歡喜の心を以て善根を廻向すと爲す。一切の衆生をして無量の種智を皆悉く具足し、一切の成滿智の乘に乗ぜしむ。

菩薩摩訶薩は象寶を布施す、七支具足し、六瘤成滿し、六牙雪の如く、口の淨きこと華の如く、身體端正に、毛色は鮮白に、珍麗奇飾して、其身を莊嚴し、淨き妙寶の網を以て其上に覆ひ、種種の雜寶にて其首を莊嚴し、光色晃曜し、儀體安雅にして、瞬息の頃に萬里を超歩し、猛氣奔蹄して、疲倦すること無し。菩薩摩訶薩は、寶馬を布施す、形體殊妙にして、毛色光澤あり、馬相具足して、天の寶馬の如く、無量の珍飾もて其身を莊嚴し、明月のごとき神珠を以て光曜と爲し、金鈴の寶網を以て其上に覆ひ、行くに奔驟せずして、速かなること疾風に踰え、遠を致して疲れず、乘る者安豫として、四方に巡遊して、主の意を失はず。此寶乘を以て意に隨ひて施與す。或は福田に施し、或は尊重に獻じ、或は知識に貢ぎ、或は父母に奉じ、或は貧賤に給し、其須むる者は、皆悉く之を與へ、大心に恵み施して、吝惜する所無く、心常に歡喜して、悔恨有ること無し。大悲充滿

して、能く大施を行じ、一向に専ら菩薩の功德を求め最勝生地にして、直心清淨なり。是の如きの心を以て善根を廻向すらく、一切の衆生をして人寶を成就して、菩薩の功德を生じ、大乘を莊嚴せしめ。一切の衆生をして善法の乘に乗じて、隨順して能く一切の佛法に至らしめ。一切の衆生をして、常に大乘を樂ひ、佛の無礙の智慧力の乘を得て、光明普く照さしめ。一切の衆生をして勇猛の大乘に乗じて、精進して諸願を満足せしめ。一切の衆生をして平等なる波羅蜜の乘を具足して、一切の善根を成就し満足せしめ。一切の衆生をして寶乘を成就して、佛法の無上なる智寶を出せしめ。一切の衆生をして、菩薩の莊嚴の行を分別し、是妙乘を得て三界を出で、悉く菩薩の諸の三昧の華を開かしめ。一切の衆生をして、無量の阿僧祇劫に、清淨に菩薩の所行を修習して、無量の乘に乗じ、疾かに諸法を解らしめ。一切の衆生をして、大乘の寶乘を施し、善方便を以て、菩薩地を具へしめ。一切の衆生をして、最も高廣にして安隱なる大乘を成じて、悉く能く一切衆生を運載して無上の道に至らしめん」と。是を菩薩摩訶薩の無量阿僧祇劫那由他劫に、象馬の寶を施す善根廻向と爲す。一切の衆生をして、無礙智の乘に乗じて、如来の究竟の寶乘に下ることを得しむるなり。

菩薩摩訶薩は種種の座を施す。或は毘王師子の座を施す。瑠璃を足と爲し、金縷にて綴り成せる柔軟なる妙衣を以て其上に敷き、熏するに一切の堅固の香を以てし、種種の上妙の寶幢を建立し、無量億の寶を以て莊嚴と爲し、白淨の寶網を其上に彌覆し、金鈴の羅

【正法】 佛法を言ふ。

網動きて妙音を發し、百萬億那由他の淨妙なる寶像は周匝圍遶し、其座は高廣にして、清淨に嚴飾し、無量阿僧祇の衆生、樂觀して厭くこと無く、功天下を蓋ふ自在の大正の、所坐の處なり。彼座に處して、正法を以て國を治め、敢て違逆するもの無く、種種の妙寶もて其身を莊嚴し、青寶珠王、大青寶珠王、勝藏寶珠を以て莊嚴と爲し、明淨なること猶し日のごとく、清涼なること月の如く、衆星莊嚴して海の勝寶、海の堅固幢の如く、離垢明淨なる閻浮檀金の妙色の寶輪を以て其首に冠むり、一切の閻浮提の内の大力灌頂王の法を以て其頂に灌ぎ、功德力を具へ、大慈悲の主となりて、怨敵を降伏し、敢て命に違ふ無し。菩薩摩訶薩は、是の如き無量無數の轉輪王と爲りて法の自在を得、正く國を治むる時、是の如き等の種種の衆寶にて嚴飾せる座を以て、或は正覺の諸の善知識、及び賢聖の偕に施し、法を聞きて歡喜し、法師に奉施し、父母、諸の尊重する者、聲聞緣覺、一切の菩薩、乃至初めて大乘の心を發せる者、及以一切諸佛の塔廟に供養し、或は無量の貧窮下劣のものに施し、須臾欲する所有れば皆之を給與す。座を布施する時に是の如く廻向すらく、「此善根を以て、一切の衆生をして菩提の座を得て、自然に佛の正法を覺悟せしめ、一切の衆生をして、自在の座を得、法に於て自在を具足し成就して、諸の金剛山も、壞すること能はざる所にして、悉く能く一切の諸魔を降伏せしめ、一切の衆生をして、佛の自在なる師子の座を得て、一切の衆生を樂觀して厭くこと無からしめ、一切の衆生をして、不可說不可說の清淨に莊嚴せる殊妙の座を得て、法の自在を成じ、普く衆

【三種の世間云々】
過現未の三世、生
異滅の三相に依り
て變化せらるべきを
不壞常住の世界と
言ふ意。

生を化せしめ、一切衆生をして殊勝の座を得て三種の世間も壞すること能はざる所、廣大の善根、及び善根の具を、皆悉く清淨ならしめ。一切の衆生をして、高廣の座を得て、不可説不可説の世界に充滿せる諸佛如來を、阿僧祇劫に於て數するも盡すこと能はざらしめ。一切の衆生をして、大智人の座に處して、一身を一切の法界に充滿せしめ。一切の衆生をして、不可思議の寶もて莊嚴せる座を得て、其本願に隨ひ、請ふ所の衆生に廣く法施を開かしめ。一切の衆生をして、皆悉く淨妙の法座に坐することを得て、不可説の諸の世界の中に於て、如來の自在神力を顯現せしめ。一切の衆生をして、一切寶の座、一切香の座、一切華の座、一切衣の座、一切鬘の座、一切摩尼寶の座、不可思議の淨瑠璃の座、無量不可説の世界の座、一切衆生を淨むる莊嚴の座、離淨の座に坐し、此座上に處して、如來の一切種智を覺悟し、諸佛の功德の境界を示現せしめん」と。是を普賢摩訶薩の種種の座を施す時の善根願向と爲す、一切の衆生をして所著無き菩提の座を得、自然に一切の佛法を覺悟せしむ。

昭和三年十二月二十五日印刷
昭和四年一月十二日發行

昭和
新纂國譯大藏經
經典部
第九卷

編纂者

新纂國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地

株式會社 東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地

同興舍
代表者 井波康三郎

不許複製

發行所

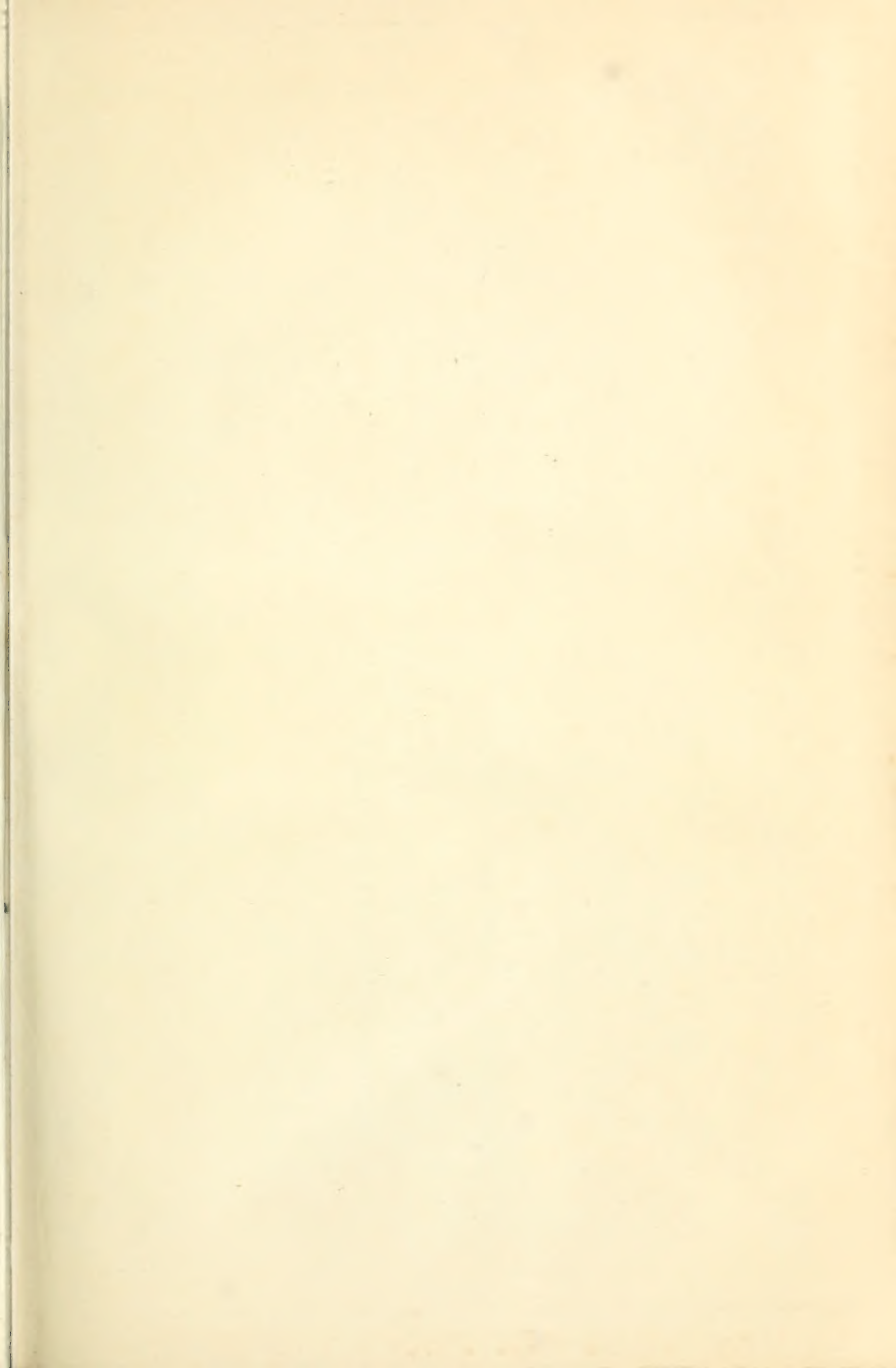
東京市下谷區
上野櫻木町五〇

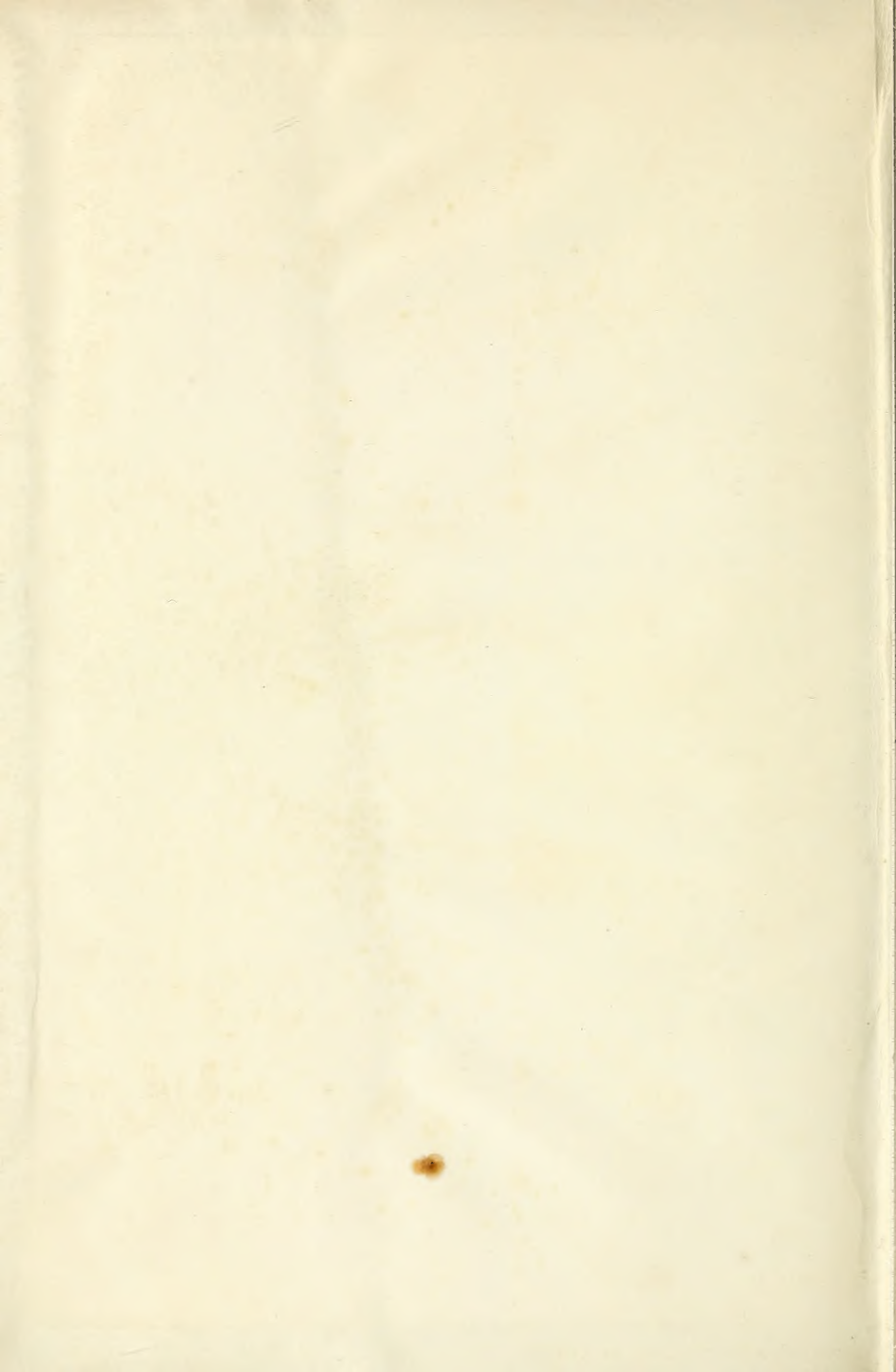
株式會社

東方書院

電話下谷四二五九
振替東京六八一







EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3803